

兵庫県文化財調査報告書 第62冊

青野ダム建設に伴う
発掘調査報告書(2)

——本文編——

1988年

兵庫県教育委員会

青野ダム建設に伴う
発掘調査報告書(2)

——本文編——

1988年

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は兵庫県三田市に所在する、県営青野ダム建設に伴う発掘調査報告書で、既刊の「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」の続刊であり、本書でもって調査報告書は完結する。
2. 発掘調査は兵庫県北摂整備局青野ダム建設部の委託をうけ、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本書に報告する泓遺跡・乾窯跡・貝谷窯跡・川端遺跡については、既に3冊に分けて調査概報を刊行しており、川端遺跡の石器については概報報文を掲載した。調査概報と異なる記載がある場合は、本書によって訂正したと諒解されたい。
4. 各遺跡の調査担当者および期間については、『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』を参照されたい。
5. 本書で示す標高は、青野ダム建設部が設置した基準点を起点とした値で、方位は磁北を示す。
6. 乾遺跡・溝ノ尾遺跡の座標基準点は、オリエントサーベイ株式会社に委託して作成したものを使用した。
7. 溝ノ尾遺跡の航空写真は、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託して撮影したものを使用した。
8. 使用した写真のうち、遺構については各担当調査員が撮影したが、遺物は森 昭氏の手を煩わせた。
9. 本書の遺物の図面番号は、図版番号と一致する。
10. 本文については、目次に氏名を記して、その責任の所在を明らかにした。
11. 本書の構成・編集は、檀本誠一立案のもと、『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』にならい、和田早芳子の協力を得て吉田・岸本が行った。

本文目次

第1章	はじめに	吉田昇・岡田章一	1
第2章	下青野地域の調査		
第1節	泓遺跡 (AS-102)	岡田・渡辺 昇	5
第3章	末西地域の調査		
第1節	岡ノ谷遺跡 (AW-50)	岡田	19
第2節	北台遺跡 (AW-62)	大平 茂・久保弘幸	59
第3節	乾遺跡 (AW-65)	久保・岸本一宏	71
第4節	乾窯跡 (AW-67)	岡田	101
第5節	溝ノ尾遺跡 (AW-71)	西口圭介・吉識雅仁・久保・岸本	105
第6節	南台遺跡 (AW-73)	渡辺	204
第4章	北浦地域の調査		
第1節	みどろ池窯跡 (AK-76)	山田清朝	255
第2節	溝向遺跡 (AK-78)	久保	257
第3節	井ノ方遺跡 (AK-80)	久保・中川 渉	285
第4節	井ノ方窯跡 (AK-80)	岸本	312
第5節	貝谷窯跡 (AK-86)	吉田	322
第6節	地福窯跡 (AK-119)	吉田	336
第7節	蛭田遺跡 (AK-128)	岡田	393
第5章	末野地域の調査		
第1節	川端遺跡 (AN-91)	吉田・佐藤良二	399
第2節	道東遺跡 (AN-106)	岡田・渡辺	403
第6章	まとめ		
第1節	青野ダム遺跡群出土の旧石器について	久保	407
第2節	青野ダム周辺における須恵器生産について	吉田	410

挿 図 目 次

第 1 図 所収遺跡位置図…………… 2	第 29 図 包含層出土土器(2)…………… 35
泓 遺跡 (AS-102)	第 30 図 包含層出土土器(3)…………… 37
第 2 図 位置図(1:2000) …… 5	第 31 図 遺構出土土器(5)…………… 38
第 3 図 土塁断面図…………… 6	第 32 図 包含層出土土器(4)…………… 40
第 4 図 地形測量図…………… 7	第 33 図 包含層出土土器(5)…………… 43
第 5 図 土塁縦断面図…………… 9	第 34 図 包含層出土土器(6)…………… 44
第 6 図 石垣11…………… 10	第 35 図 遺構出土土器(6)…………… 45
第 7 図 石垣12…………… 11	第 36 図 包含層出土土器(7)…………… 46
第 8 図 通路跡…………… 12	第 37 図 出土土器拓影…………… 49
第 9 図 通路跡西壁上部石垣…………… 13	北台遺跡 (AW-62)
第 10 図 雪隠…………… 13	第 38 図 位置図(1:2000) …… 59
第 11 図 出土遺物(1)…………… 15	第 39 図 土層断面模式図…………… 60
第 12 図 出土遺物(2)…………… 16	第 40 図 中・近世遺構全体図…………… 61
岡ノ谷遺跡 (AW-50)	第 41 図 縄文遺構全体図…………… 61
第 13 図 位置図(1:2000) …… 19	第 42 図 土壇 1 …… 62
第 14 図 遺構全体図…………… 20	第 43 図 土壇 2・3 …… 62
第 15 図 集石土壇(SH01) …… 21	第 44 図 包含層出土石器(1)…………… 63
第 16 図 配石土壇(SX01) …… 22	第 45 図 包含層出土石器(2)…………… 64
第 17 図 土壇(SX04・05)…………… 23	第 46 図 包含層出土石器(3)…………… 66
第 18 図 埋甕(SX02) …… 23	第 47 図 包含層出土石器(4)…………… 67
第 19 図 円形配石土壇(SX03) …… 24	第 48 図 包含層出土石器(5)…………… 69
第 20 図 掘立柱建物 2 …… 25	第 49 図 土壇 4 出土縄文土器…………… 70
第 21 図 掘立柱建物 4 …… 25	乾 遺跡 (AW-65)
第 22 図 掘立柱建物 3 …… 26	第 50 図 位置図(1:2000) …… 71
第 23 図 竪穴住居 1 …… 27	第 51 図 中央部土層断面図…………… 72
第 24 図 遺構出土土器(1)…………… 29	第 52 図 遺構全体図…………… 73
第 25 図 遺構出土土器(2)…………… 30	第 53 図 掘立柱建物 1～4 出土土器… 75
第 26 図 遺構出土土器(3)…………… 31	第 54 図 掘立柱建物 2 …… 76
第 27 図 遺構出土土器(4)…………… 32	第 55 図 掘立柱建物 3 …… 77
第 28 図 包含層出土土器(1)…………… 34	第 56 図 掘立柱建物 4 …… 79

第57図	掘立柱建物 5	80	第88図	竪穴住居 2 出土刀子	116
第58図	掘立柱建物 6	81	第89図	竪穴住居 3	118
第59図	掘立柱建物 7	82	第90図	竪穴住居 3 カマド	119
第60図	柱穴 1	83	第91図	竪穴住居 3 出土土器	119
第61図	柱穴出土土器	84	第92図	竪穴住居 4	120
第62図	土坑 1 ~ 4 出土土器	86	第93図	竪穴住居 4 出土土器	120
第63図	土坑 5	88	第94図	掘立柱建物 1	121
第64図	土坑 5 出土土器	89	第95図	掘立柱建物 2	122
第65図	溝 1	89	第96図	掘立柱建物 3	123
第66図	溝 1・2 出土土器	90	第97図	掘立柱建物 4	124
第67図	出土陶棺(1)	93	第98図	掘立柱建物 4 出土土器	125
第68図	出土陶棺(2)	94	第99図	掘立柱建物 5	126
第69図	出土土器	95	第100図	掘立柱建物 5・6 出土土器	126
第70図	包含層出土緑釉陶器	96	第101図	掘立柱建物 6	127
第71図	包含層出土石器	97	第102図	掘立柱建物 7	128
第72図	柱穴94出土石核	98	第103図	掘立柱建物 7・8 出土土器	129
乾窯跡 (AW-67)			第104図	掘立柱建物 8	129
第73図	位置図(1:2000)	101	第105図	掘立柱建物 9	130
第74図	地形測量図	102	第106図	掘立柱建物10	131
第75図	窯体実測図	103	第107図	掘立柱建物11	132
第76図	出土土器	104	第108図	掘立柱建物12	133
溝ノ尾遺跡 (AW-71)			第109図	掘立柱建物12出土土器	133
第77図	位置図(1:2000)	105	第110図	掘立柱建物13	134
第78図	東半部土層断面図	106	第111図	掘立柱建物14	135
第79図	遺構全体図	107	第112図	掘立柱建物15	136
第80図	西半部土層断面図	109	第113図	掘立柱建物16	137
第81図	竪穴住居 1	110	第114図	掘立柱建物17	138
第82図	竪穴住居 1 カマド	111	第115図	掘立柱建物17出土土器	138
第83図	竪穴住居 1 出土土器	112	第116図	掘立柱建物19~21出土土器	139
第84図	竪穴住居 2	113	第117図	掘立柱建物18	140
第85図	竪穴住居 2 カマド	114	第118図	掘立柱建物19	141
第86図	竪穴住居 2 出土土器	115	第119図	掘立柱建物20	141
第87図	竪穴住居 2 出土紡錘車	116	第120図	掘立柱建物21	142

第121図	掘立柱建物22	143	第154図	土壇15	171
第122図	掘立柱建物23	144	第155図	土壇15出土土器	172
第123図	掘立柱建物23・24出土土器	145	第156図	土壇16	173
第124図	掘立柱建物24	145	第157図	土壇16・17出土土器	173
第125図	掘立柱建物25	146	第158図	土壇18	174
第126図	掘立柱建物26~28出土土器	147	第159図	溝1・2出土土器	176
第127図	掘立柱建物26	148	第160図	溝3~10出土土器	177
第128図	掘立柱建物27	149	第161図	包含層出土土器	179
第129図	掘立柱建物28	150	第162図	表面採集土器・銅器	180
第130図	掘立柱建物29	151	第163図	出土石器	181
第131図	掘立柱建物30	152	第164図	東地区土層断面図	184
第132図	掘立柱建物30出土土器	153	第165図	東地区遺構全体図	185
第133図	掘立柱建物31	154	第166図	竪穴住居	187
第134図	掘立柱建物32	154	第167図	掘立柱建物1	188
第135図	ピット列	155	第168図	竪穴住居・建物1~3出土土器	188
第136図	ピット出土土器	156	第169図	掘立柱建物2	189
第137図	土壇1・4出土土器	156	第170図	掘立柱建物3	190
第138図	土壇2出土土器	157	第171図	掘立柱建物4	191
第139図	土壇2	158	第172図	掘立柱建物5	192
第140図	土壇3出土土器	159	第173図	土壇1・2出土土器	192
第141図	土壇5出土土器	160	第174図	土壇5	194
第142図	土壇6・7出土土器	161	第175図	土壇3~6出土土器	195
第143図	土壇8	161	第176図	土壇8	196
第144図	土壇8・9出土土器	162	第177図	土壇8・9出土土器	197
第145図	土壇10出土土器	163	第178図	出土石器	199
第146図	土壇11出土土器	163	南台遺跡 (AW-73)		
第147図	土壇11	163	第179図	位置図(1:2000)	204
第148図	土壇12出土土器	164	第180図	A地区遺構全体図	205
第149図	土壇13	165	第181図	掘立柱建物1	208
第150図	土壇13出土土器	166	第182図	土壇7出土土器	208
第151図	土壇14	167	第183図	銭甕埋納遺構	211
第152図	土壇14出土土器(1)	168	第184図	銭埋納遺構容器	212
第153図	土壇14出土土器(2)	169	第185図	出土古銭拓影(1)	216

第186図	出土古銭拓影(2)……………	217	第219図	溝1出土土器……………	248
第187図	出土古銭拓影(3)……………	218	第220図	土壌1出土土器……………	249
第188図	出土古銭拓影(4)……………	219	第221図	土壌2出土土器……………	249
第189図	出土古銭拓影(5)……………	220	第222図	土壌3出土土器……………	250
第190図	第3繙古銭拓影(1)……………	221	第223図	土壌5出土土器……………	250
第191図	第3繙古銭拓影(2)……………	222	第224図	土壌6出土土器……………	250
第192図	第3繙古銭拓影(3)……………	223	第225図	土壌7出土土器……………	251
第193図	第3繙古銭拓影(4)……………	224	第226図	D地区出土土器(1)……………	252
第194図	元豊通寶にみる范の違い……………	224	第227図	D地区出土土器(2)……………	253
第195図	開元通寶の背文の種類……………	225	第228図	D地区出土土器(3)……………	254
第196図	溝1出土土器(1)……………	226	みどろ池窯跡 (AK-76)		
第197図	溝1出土土器(2)……………	227	第229図	位置図(1:2000)……………	255
第198図	遺構出土土器……………	227	第230図	地形測量図……………	256
第199図	A地区出土土器(1)……………	228	第231図	出土土器……………	256
第200図	A地区出土土器(2)……………	230	溝向遺跡 (AK-78)		
第201図	B地区土層断面図……………	231	第232図	位置図(1:2000)……………	257
第202図	B地区土壌1……………	232	第233図	土層断面図……………	258
第203図	土壌1出土土器……………	232	第234図	遺構全体図……………	259
第204図	B地区出土土器(1)……………	233	第235図	掘立柱建物1……………	261
第205図	B地区出土土器(2)……………	234	第236図	掘立柱建物2……………	262
第206図	B地区出土土器(3)……………	235	第237図	掘立柱建物3……………	263
第207図	B地区出土土器(4)……………	236	第238図	遺構出土土器……………	263
第208図	B地区出土土器(5)……………	236	第239図	掘立柱建物4……………	264
第209図	C地区遺構全体図……………	239	第240図	掘立柱建物5……………	265
第210図	竈……………	240	第241図	掘立柱建物6……………	267
第211図	池状遺構土層断面図……………	240	第242図	掘立柱建物7……………	268
第212図	池状遺構……………	241	第243図	掘立柱建物8……………	269
第213図	水甕遺構……………	242	第244図	柵1・2……………	270
第214図	出土水甕……………	242	第245図	土壌1～6……………	271
第215図	C地区出土土器……………	242	第246図	土壌7・8……………	272
第216図	掘立柱建物1……………	244	第247図	溜池状遺構1……………	273
第217図	D地区遺構全体図……………	245	第248図	溜池状遺構2……………	274
第218図	掘立柱建物2……………	246	第249図	包含層出土土器(1)……………	275

第250図	包含層出土土器(2)……………	276	第282図	出土金属器……………	308
第251図	包含層出土土器(3)……………	277	井ノ方窯跡 (AK-80)		
第252図	包含層出土土器(4)……………	277	第283図	地形測量図……………	312
第253図	包含層出土土器(5)……………	278	第284図	窯体実測図……………	313
第254図	包含層出土土器(6)……………	279	第285図	土層断面図……………	314
第255図	包含層出土土器(7)……………	279	第286図	窯体出土土器(1)……………	316
第256図	包含層出土土器(8)……………	280	第287図	窯体出土土器(2)……………	317
第257図	中地区トレンチ土層断面図…	280	第288図	包含層出土土器(1)……………	319
第258図	中地区トレンチ出土土器…	281	第289図	包含層出土土器(2)……………	320
第259図	旧石器確認トレンチ土層断面図	281	第290図	採集土器……………	321
第260図	出土石器……………	282	貝谷窯跡 (AK-86)		
井ノ方遺跡 (AK-80)			第291図	位置図(1:2000) ……	322
第261図	位置図(1:2000) ……	285	第292図	地形測量図……………	323
第262図	土層断面図……………	286	第293図	窯体実測図……………	325
第263図	遺構全体図……………	287	第294図	出土土器(1)……………	327
第264図	掘立柱建物1 ……	288	第295図	出土土器(2)……………	328
第265図	掘立柱建物2 ……	289	第296図	出土土器(3)……………	329
第266図	掘立柱建物1・2出土土器…	289	第297図	出土土器(4)……………	330
第267図	掘立柱建物3 ……	290	第298図	出土土器(5)……………	332
第268図	掘立柱建物4 ……	291	第299図	出土土器(6)……………	333
第269図	P-193……………	292	第300図	文字刻印土器……………	335
第270図	掘立柱建物4出土土器…	292	地福窯跡 (AK-119)		
第271図	掘立柱建物5 ……	293	第301図	位置図(1:2000) ……	336
第272図	柱穴出土土器……………	294	第302図	窯跡全体図……………	337
第273図	柱穴出土砥石……………	295	第303図	1号窯実測図……………	341
第274図	配石土壌……………	296	第304図	窯体出土土器……………	344
第275図	配石土壌、土壌1・5・9・14・15、溝6出土土器	297	第305図	灰原出土土器(1)……………	346
第276図	土壌4 ……	298	第306図	灰原出土土器(2)……………	347
第277図	土壌4出土土器……………	299	第307図	灰原出土土器(3)……………	348
第278図	第II・III層出土土器……………	303	第308図	灰原出土土器(4)……………	349
第279図	第III・IV層出土土器……………	305	第309図	灰原出土土器(5)……………	350
第280図	表面採集土器……………	307	第310図	2号窯実測図……………	351
第281図	出土石器……………	307	第311図	灰原(湿地)出土土器(1)…	353

第312図	灰原(湿地)出土土器(2)……	354	川端遺跡(AN-91)	
第313図	窯体出土土器……	355	第341図	位置図(1:2000) ……
第314図	3号窯窯体実測図……	357	第342図	遺構全体図……
第315図	3号窯窯体出土土器(1)……	359	第343図	竪穴住居・竪穴状遺構……
第316図	窯体出土土器(2)……	360	第344図	出土石器……
第317図	灰原(湿地)出土土器(1)……	362	道東遺跡(AN-106)	
第318図	灰原(湿地)出土土器(2)……	363	第345図	位置図(1:2000) ……
第319図	灰原(湿地)出土土器(3)……	364	第346図	遠景……
第320図	4号窯窯体土層断面図……	366	第347図	溝状遺構……
第321図	4号窯窯体実測図……	367	第348図	全景……
第322図	出土土器……	369	第349図	出土土器……
第323図	5号窯窯体実測図……	370	第350図	ナイフ形石器背面の剥離方向
第324図	窯体出土土器……	372	第351図	青野ダム周辺窯跡分布図……
第325図	灰原(黒色灰)出土土器(1)……	373	第352図	郡塚1号窯出土土器……
第326図	灰原(黒色灰)出土土器(2)……	374	第353図	平方1・2号窯出土土器……
第327図	灰原(流土)出土土器……	376	第354図	東山窯出土土器……
第328図	6号窯窯体実測図……	379	第355図	西末2号窯出土土器……
第329図	窯体出土土器(1)……	381	第356図	木器1号窯出土土器……
第330図	窯体出土土器(2)……	382	第357図	木器2号窯出土土器……
第331図	灰原(流土)出土土器……	383	第358図	貝谷窯出土土器……
第332図	灰原(湿地)混入土器……	385	第359図	西相野窯出土土器……
第333図	各窯出土大型土器(1)……	387	第360図	萩ノ尾1号窯出土土器……
第334図	各窯出土大型土器(2)……	388	第361図	井ノ方窯出土土器……
第335図	各窯出土大型土器(3)……	389	第362図	見比窯出土土器……
姪田遺跡(AK-128)			第363図	井ノ方遺跡出土土器……
第336図	位置図(1:2000) ……	393	第364図	井ノ方遺跡土壌4出土土器…
第337図	地形測量図……	394	第365図	井ノ方遺跡土壌9出土土器…
第338図	近世墓……	395	第366図	対中遺跡出土土器……
第339図	近世墓出土土器……	396	第367図	姪田中世墓出土土器……
第340図	中世墓出土土器……	396		

図版目次

- 図版1 青野ダム建設地景観
- 図版2 泓遺跡
上 遠景(高根山城から)
下 遠景(北から)
- 図版3 泓遺跡
上 県道南側全景(西から)
下 県道南側台地上全景(東から)
- 図版4 泓遺跡
上 西側土塁縦断面
下 南側土塁石垣
- 図版5 泓遺跡
上 通路跡閉塞状況
下 通路跡全景
- 図版6 泓遺跡
上 石垣排水路
下 土塁横断面
- 図版7 泓遺跡
上 館跡北辺石垣
下 館跡北辺昇降路
- 図版8 泓遺跡・蛭田遺跡 出土土器
- 図版9 泓遺跡・道東遺跡 出土土器
- 図版10 岡ノ谷遺跡
上 調査区西側全景(北から)
下 池状遺構1(南から)
- 図版11 岡ノ谷遺跡
上 配石土壙(SX01)(南から)
下 配石土壙(SX03)(南から)
- 図版12 岡ノ谷遺跡
上 埋甕(SX02)(南から)
下 掘立柱建物2(北から)
- 図版13 岡ノ谷遺跡
上 掘立柱建物4(南から)
下 掘立柱建物3(西から)
- 図版14 岡ノ谷遺跡
上 竪穴住居1(東から)
下 竪穴住居1土器出土状況
(西から)
- 図版15 岡ノ谷遺跡 出土土器(1)
- 図版16 岡ノ谷遺跡 出土土器(2)
- 図版17 岡ノ谷遺跡 出土土器(3)
- 図版18 北台遺跡
上 52年度中世遺構全景(東から)
下 中世焼土壙(西から)
- 図版19 北台遺跡
上 縄文土壌群全景(南から)
下 53年度調査区ビット列
(北西から)
- 図版20 北台遺跡 包含層出土石器(1)
- 図版21 北台遺跡 包含層出土石器(2)
- 図版22 北台遺跡 包含層出土石器(3)
- 図版23 北台遺跡 包含層出土石器(4)
- 図版24 北台遺跡 包含層出土石器(5)
- 図版25 北台遺跡 包含層出土石器(6)
- 図版26 乾遺跡
上 調査前全景(南西から)
下 調査前全景(南から)

- 図版27 乾遺跡
上 中央部土層断面(北から)
下 調査後全景(西から)
- 図版28 乾遺跡
上 東半部遺構(西から)
下 掘立柱建物2(北から)
- 図版29 乾遺跡
上 掘立柱建物3(北から)
下 掘立柱建物4・7(東から)
- 図版30 乾遺跡
上 掘立柱建物5(南東から)
下 掘立柱建物6(東から)
- 図版31 乾遺跡
上 柱穴1陶棺出土状況(北から)
下 柱穴1甕出土状況(北から)
- 図版32 乾遺跡
上 土壇3・4(南から)
下 土壇5(南から)
- 図版33 乾遺跡
上 土壇3・4と溝1(南から)
下 溝1土器出土状況(南から)
- 図版34 乾遺跡 出土土器
掘立柱建物・柱穴
- 図版35 乾遺跡 土壇1~4出土土器
- 図版36 乾遺跡 出土土器
上 土壇5
下 溝1
- 図版37 乾遺跡 溝1・2出土土器
- 図版38 乾遺跡 柱穴1出土陶棺
- 図版39 乾遺跡 包含層出土陶棺
- 図版40 乾遺跡 包含層出土土器
- 図版41 乾遺跡 包含層出土石器
- 図版42 乾窯跡
上 調査区遠景(南から)
下 調査前窯体近景(南から)
- 図版43 乾窯跡
上 調査後窯体全景(南から)
下 調査後窯体近景(南から)
- 図版44 溝ノ尾遺跡
上 調査区全景(北から)
下 調査区全景(東から)
- 図版45 溝ノ尾遺跡
上 59年度調査区全景(南から)
下 59年度調査区全景(北から)
- 図版46 溝ノ尾遺跡
上 59年度調査区中央部(東から)
下 59年度調査区北半部(南東から)
- 図版47 溝ノ尾遺跡
上 竪穴住居1(南東から)
下 竪穴住居1竈
- 図版48 溝ノ尾遺跡
上 竪穴住居2(南東から)
下 竪穴住居2竈
- 図版49 溝ノ尾遺跡
上 竪穴住居3(南東から)
下 竪穴住居3竈
- 図版50 溝ノ尾遺跡
上 竪穴住居4(西から)
下 竪穴住居4土壇遺物出土状況
- 図版51 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物1・17(南から)
下 掘立柱建物1・17(東から)
- 図版52 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物2(東から)
下 掘立柱建物2(南から)

- 図版53 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物4 (東から)
下 掘立柱建物5 (東から)
- 図版54 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物6 (東から)
下 掘立柱建物7 (東から)
- 図版55 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物8 (南東から)
下 掘立柱建物9 (南東から)
- 図版56 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物10 (南東から)
下 掘立柱建物11 (南東から)
- 図版57 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物12 (南東から)
下 掘立柱建物15 (東から)
- 図版58 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物18 (北から)
下 掘立柱建物19・20 (東から)
- 図版59 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物21・22 (北から)
下 掘立柱建物21・22 (東から)
- 図版60 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物23 (南から)
下 掘立柱建物24 (東から)
- 図版61 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物25 (東から)
下 掘立柱建物26 (南から)
- 図版62 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物27 (南から)
下 掘立柱建物28 (南から)
- 図版63 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物29 (北から)
下 掘立柱建物30 (東から)
- 図版64 溝ノ尾遺跡
上 掘立柱建物32 (東から)
下 ビット列 (北から)
- 図版65 溝ノ尾遺跡
上 土壙1 (東から)
下 土壙2 (北から)
- 図版66 溝ノ尾遺跡
上 土壙3・5 (東から)
下 土壙13 (南から)
- 図版67 溝ノ尾遺跡
上 土壙18炭層検出状況(南から)
下 土壙18 (南から)
- 図版68 溝ノ尾遺跡
上 土壙14 (西から)
下 土壙15 (南東から)
- 図版69 溝ノ尾遺跡 出土土器
竪穴住居1・2
- 図版70 溝ノ尾遺跡 出土土器
竪穴住居2
- 図版71 溝ノ尾遺跡 出土土器・紡錘車
上 竪穴住居2
下 竪穴住居3・4
- 図版72 溝ノ尾遺跡 出土土器
上 竪穴住居3・4、東地区竪穴住居
下 掘立柱建物・ビット
- 図版73 溝ノ尾遺跡 出土土器
掘立柱建物・ビット
- 図版74 溝ノ尾遺跡 出土土器
掘立柱建物・ビット
- 図版75 溝ノ尾遺跡 出土土器
掘立柱建物・ビット
- 図版76 溝ノ尾遺跡 土壙1出土土器
- 図版77 溝ノ尾遺跡 土壙2・3出土土器

- 図版78 溝ノ尾遺跡 土壙4・5・8出土土器
- 図版79 溝ノ尾遺跡 出土土器
上 土壙1・3・5・10
下 土壙3・11・12
- 図版80 溝ノ尾遺跡 土壙9・13出土土器
- 図版81 溝ノ尾遺跡 土壙14出土土器
- 図版82 溝ノ尾遺跡 土壙14・15出土土器
- 図版83 溝ノ尾遺跡 出土土器
上 土壙15
下 土壙8・14・16・17
- 図版84 溝ノ尾遺跡 出土土器
上 溝9・13・16、近代溝
下 溝4・7・15・16
- 図版85 溝ノ尾遺跡 出土土器
上 溝1・3・9・10・13
下 包含層・表面採集
- 図版86 溝ノ尾遺跡 出土土器
包含層・表面採集
- 図版87 溝ノ尾遺跡 包含層出土土器
- 図版88 溝ノ尾遺跡 包含層出土土器
- 図版89 溝ノ尾遺跡 出土土器・銅器
包含層・表面採集
- 図版90 溝ノ尾遺跡 出土石器(1)
- 図版91 溝ノ尾遺跡 出土石器(2)
- 図版92 溝ノ尾遺跡 出土石器(3)
- 図版93 溝ノ尾遺跡 東地区
上 遺構全景(西から)
下 東壁土層断面図(西から)
- 図版94 溝ノ尾遺跡 東地区
上 竪穴住居(東から)
下 竪穴住居(南西から)
- 図版95 溝ノ尾遺跡 東地区
上 掘立柱建物1(北から)
下 掘立柱建物1(西から)
- 図版96 溝ノ尾遺跡 東地区
上 掘立柱建物2(西北から)
下 掘立柱建物3(西から)
- 図版97 溝ノ尾遺跡 東地区
上 掘立柱建物4(西から)
下 土壙1土器出土状況(南から)
- 図版98 溝ノ尾遺跡 東地区
上 土壙3土器出土状況(東から)
下 土壙4(西から)
- 図版99 溝ノ尾遺跡 東地区
上 土壙5(南から)
下 土壙6・7(北から)
- 図版100 溝ノ尾遺跡 東地区
上 土壙8(南から)
下 土壙9炭出土状況(西南から)
- 図版101 溝ノ尾遺跡 東地区出土土器
掘立柱建物2・3、柱穴1、土壙1・3・6
- 図版102 溝ノ尾遺跡 東地区出土土器
上 土壙5・7
下 土壙7～9・包含層
- 図版103 溝ノ尾遺跡 東地区出土土器
上 土壙9
下 包含層
- 図版104 南台遺跡
上 A地区全景
下 A地区全景
- 図版105 南台遺跡
上 A地区全景
下 A地区掘立柱建物1

- 図版106 南台遺跡
上 A地区溝1
下 A地区溝1
- 図版107 南台遺跡
上 A地区土壌7
下 A地区土壌2
- 図版108 南台遺跡
上 A地区銭埋納遺構
下 A地区銭埋納遺構(蓋を除去したところ)
- 図版109 南台遺跡
上 A地区銭埋納遺構(側面から)
下 A地区銭埋納遺構(銭埋納状態)
- 図版110 南台遺跡
上 B地区全景
下 B地区土壌1
- 図版111 南台遺跡
上 C地区西半全景
下 C地区土壌群
- 図版112 南台遺跡
上 C地区竈
下 C地区竈
- 図版113 南台遺跡
上 C地区池状遺構
下 C地区池状遺構
- 図版114 南台遺跡
上 D地区全景
下 D地区全景
- 図版115 南台遺跡
上 D地区全景
下 D地区土壌1
- 図版116 南台遺跡
上 D地区溝1
下 D地区溝1土器出土状態
- 図版117 南台遺跡 B地区出土土器
- 図版118 南台遺跡 B地区出土土器
- 図版119 南台遺跡 A地区出土土器
土壌7・溝1
- 図版120 南台遺跡 A地区出土土器
- 図版121 南台遺跡 A地区銭埋納遺構出土古銭
- 図版122 南台遺跡 A地区銭埋納遺構出土古銭
- 図版123 南台遺跡 A地区銭埋納遺構出土古銭
- 図版124 南台遺跡 出土土器
上 A地区銭埋納容器
下 D地区土壌1
- 図版125 南台遺跡 D地区出土土器
土壌2・5・6・7、溝
- 図版126 南台遺跡 D地区溝出土土器
- 図版127 南台遺跡 D地区出土土器
- 図版128 溝向遺跡
上 遠景(東南から)
下 調査区全景(北から)
- 図版129 溝向遺跡
上 北地区全景(南から)
下 南地区全景(北から)
- 図版130 溝向遺跡
上 掘立柱建物1・2(北西から)
下 掘立柱建物3(南から)
- 図版131 溝向遺跡
上 掘立柱建物4(南から)
下 掘立柱建物5(南から)
- 図版132 溝向遺跡
上 掘立柱建物6・7(南から)
下 中地区トレンチ断面(南から)
- 図版133 溝向遺跡 遺構・包含層出土土器
- 図版134 溝向遺跡 遺構・包含層出土土器
- 図版135 溝向遺跡 遺構・包含層出土土器

- 図版136 溝向遺跡 遺構・包含層出土土器
- 図版137 溝向遺跡 遺構・包含層出土土器
- 図版138 溝向遺跡 包含層出土土器
上 土鍋
下 陶棺
- 図版139 溝向遺跡 包含層出土土器
- 図版140 溝向遺跡 出土土器・石器
上 青磁・白磁
下 石器
- 図版141 井ノ方遺跡
上 調査前遠景(南から)
下 上・中段地区全景(西から)
- 図版142 井ノ方遺跡
上 掘立柱建物1(南から)
下 掘立柱建物2(東から)
- 図版143 井ノ方遺跡
上 掘立柱建物3(北から)
下 P-193 土器出土状況(南から)
- 図版144 井ノ方遺跡
上 掘立柱建物5(東から)
下 配石土壇(北から)
- 図版145 井ノ方遺跡
上 土壇4土器出土状況(西から)
上 土壇14炭検出状況(南から)
- 図版146 井ノ方遺跡 建物4出土土器
- 図版147 井ノ方遺跡 土壇4出土土器
- 図版148 井ノ方遺跡 出土土器
土壇4・9・14・15
- 図版149 井ノ方遺跡 出土土器
柱穴・包含層
- 図版150 井ノ方遺跡 出土石器
上 石鏃・石錐・石包丁
下 柱穴出土砥石
- 図版151 井ノ方遺跡 包含層出土遺物
上 磁器・サヌカイト剥片
下 土錘・金属器
- 図版152 井ノ方窯跡
上 窯体残存状況(南から)
下 窯体内土器残存状況(南から)
- 図版153 井ノ方窯跡
上 窯体全景(南から)
下 窯体縦断面(東から)
- 図版154 井ノ方窯跡
上 窯跡南部調査区全景(南から)
下 南部調査区土層断面(西から)
- 図版155 井ノ方窯跡 出土土器
窯体・包含層
- 図版156 貝谷窯跡
上 調査前全景
下 調査後全景
- 図版157 貝谷窯跡
上 遠景
下 近景
- 図版158 貝谷窯跡
上 窯体
下 土器残存状況
- 図版159 貝谷窯跡
上 灰原灰層堆積状況
下 焚口付近灰層堆積状況
- 図版160 貝谷窯跡 出土土器(1)
- 図版161 貝谷窯跡 出土土器(2)
- 図版162 貝谷窯跡 出土土器(3)
- 図版163 貝谷窯跡 出土土器(4)
- 図版164 貝谷窯跡 出土土器(5)
- 図版165 貝谷窯跡 出土土器(6)
- 図版166 貝谷窯跡 出土土器(7)

- 図版167 貝谷窯跡 出土土器(8)
- 図版168 貝谷窯跡 出土土器(9)
(下 文字刻印土器)
- 図版169 貝谷窯跡 出土土器(10)
- 図版170 貝谷窯跡 出土土器(11)
- 図版171 地福窯跡
上 調査前全景
下 1・4号窯全景
- 図版172 地福窯跡
上 1・2・3号窯全景
下 2号窯全景
- 図版173 地福窯跡 3号窯全景
- 図版174 地福窯跡 3号窯土器出土状況
- 図版175 地福窯跡
上 4・5・6号窯全景
下 6号窯全景
- 図版176 地福窯跡
上 5号窯全景
下 5号窯舟底ビット
- 図版177 地福窯跡
上 1号窯灰原土層断面
下 3号窯灰原(湿地)
土器出土状況
- 図版178 地福窯跡
上左 1号窯窯体たち割り状況
上右 1号窯焚口付近土層堆積状況
下左 3号窯窯体たち割り状況
下右 3号窯焚口付近土層堆積状況
- 図版179 地福窯跡
上 4号窯窯体たち割り状況
下 4号窯窯体内土層堆積状況
- 図版180 地福窯跡
上 5号窯窯体たち割り状況
下 6号窯窯体たち割り状況
- 図版181 地福窯跡 1号窯出土土器
上 窯体
下 灰原(流土)
- 図版182 地福窯跡 1号窯灰原出土土器(1)
- 図版183 地福窯跡 1号窯灰原出土土器(2)
- 図版184 地福窯跡 2号窯出土土器
窯体・灰原(湿地)
- 図版185 地福窯跡 2号窯出土土器
灰原(湿地)
- 図版186 地福窯跡 3号窯出土土器
上 窯体
下 灰原(流土)
- 図版187 地福窯跡 3号窯出土土器
灰原(湿地)(1)
- 図版188 地福窯跡 3号窯出土土器
灰原(湿地)(2)
- 図版189 地福窯跡 3号窯出土土器
灰原(湿地)(3)
- 図版190 地福窯跡 3号窯出土土器
灰原(湿地)(4)
- 図版191 地福窯跡 5号窯灰原出土土器(1)
- 図版192 地福窯跡 5号窯灰原出土土器(2)
- 図版193 地福窯跡 5号窯出土土器
灰原(流土)
- 図版194 地福窯跡 5・6号窯出土土器
上 5号窯窯体
下 6号窯灰原(流土)
- 図版195 地福窯跡 6号窯窯体出土土器(1)

図版196	地福窯跡	6号窯窯体出土土器(2)	図版204	蛭田遺跡	
図版197	地福窯跡	灰原(湿地)混入土器		上	近世墓(西から)
図版198	地福窯跡	各窯出土大型土器(1)		下	近世墓(北から)
図版199	地福窯跡	各窯出土大型土器(2)	図版205	蛭田遺跡	中世墓出土土器
図版200	地福窯跡		図版206	川端遺跡	
	上	出土四耳壺口縁		上	竪穴住居全景
	下	出土甕		下	竪穴住居竈
図版201	地福窯跡	出土鉢	図版207	川端遺跡	
図版202	地福窯跡			上	竪穴状遺構全景
	上	出土壺		下	弥生土器出土状況
	下	出土円面硯	図版208	川端遺跡	
図版203	蛭田遺跡			上	縄文土器出土状況
	上	調査区遠景(西から)		下	埋甕出土状況
	下	近世墓調査前全景(西から)			

表 目 次

第1表	岡ノ谷遺跡	遺構別出土遺物一覧表	55
第2表	岡ノ谷遺跡	遺跡の時期別変遷表	57
第3表	北台遺跡	石器一覧表	63
第4表	北台遺跡	石鏃計測表	65
第5表	北台遺跡	石器組成表	69
第6表	南台遺跡	出土古銭一覧表	213
第7表	南台遺跡	「一掃」ごとの銭銘一覧表	214
第8表	南台遺跡	「一掃」ごとの新旧銭名一覧表	220
第9表	窯・遺跡別土器変遷表		426

第1章 はじめに

青野ダムの調査が昭和52年に始まって、早いもので、10年の年月が経過している。

この間、北摂ニュータウン・近畿自動車道舞鶴線・国鉄福知山線複線電化事業など、三田市域に限ってもこれら大規模事業が実施され、それに伴い埋蔵文化財関係の発掘調査も実施されてきた。

県内においても、青野ダム建設に伴う発掘調査は、1つの大きな節目であり、古くは山陽新幹線建設から、中国縦貫自動車道・山陽自動車道・近畿自動車道舞鶴線建設まで、調査員の増加をもたらす大きな事業であった。

調査から整理・報告書作成に至るまで長い年月を費したが、断続的な継続調査でもあり、調査の区切りを設定し、報告書作成計画を立てるについては困難を要した。

当初、報告書は昭和58年度調査分までを第1分冊として刊行する計画で整理作業を進めたが、私を含めた昭和58年度分以前の調査担当者の怠惰から、本来第1分冊にて刊行すべき報文を今回の第2分冊に記載する結果となり、第1分冊編集者に多大なご迷惑をおかけした。ここにお詫び申し上げたい。

第2分冊には、先土器時代から中・近世に至る計16遺跡の報告がなされているが、中心を占めるのは、地福窯跡他5ヵ所に及ぶ窯業遺跡であり、奈良時代を中心に平安時代後半以降までのあり方が窺える。

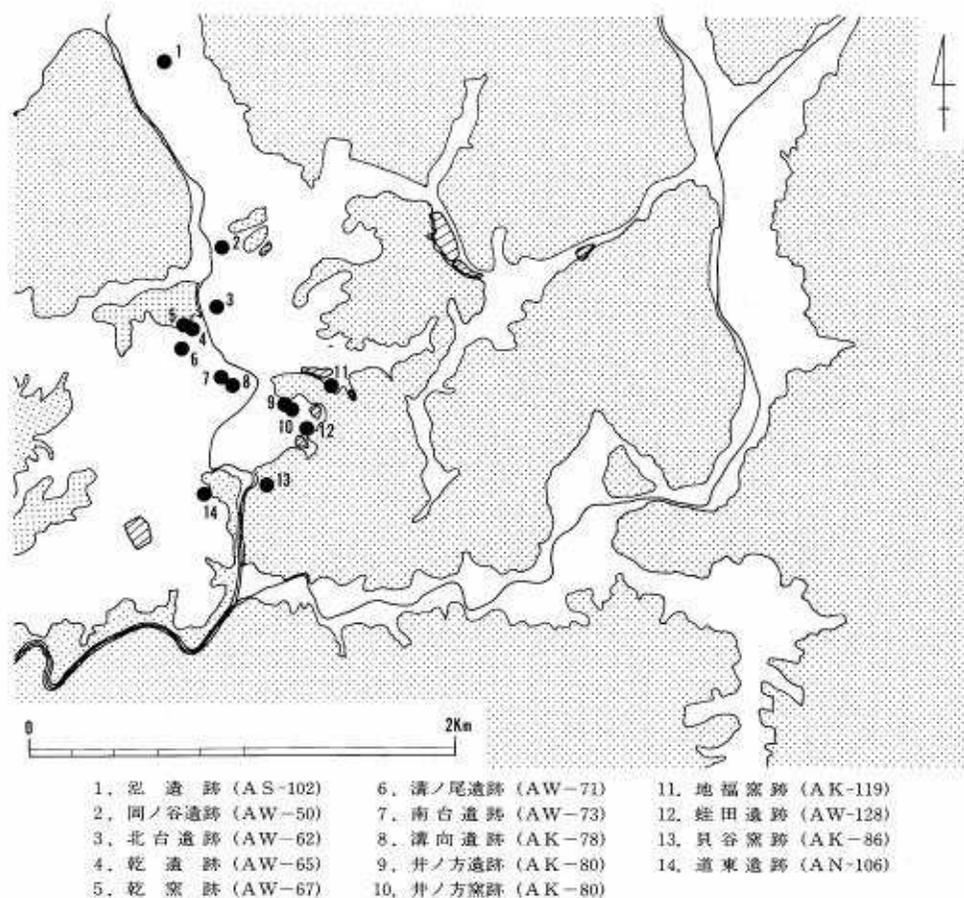
窯業の開始期については、第1分冊所収の郡塚1号窯を遡るものは見られず、現時点では三田市域のみならず、広い範囲を含めての最古級の窯跡と考えられる。第2分冊の報文から窺える事としては、窯業の終焉が当地では平安時代末期であり、継続しないまでも細々と窯業がなされていた事が知られる。

窯業以外では古墳時代を中心に、奈良～平安時代にかけての集落跡が多く見られ、窯業との関係は把握されないまでも、何らかの関係は否定できないと思われる。

次に、末西を中心に見られる石器は、三田市域の歴史を更に遡らせるものであり、先土器時代から縄文時代のもが多く見られ、異形局部磨製石器が複数で見られるなど、石器から窺い知ることも大きい。

縄文時代遺構・遺物の検出も見られるが、残存状態は悪く、辛うじて後期の深鉢などが見られる。

その反面、弥生時代の明確な遺跡は見られず、青野ダム建設予定地が農耕に適した沖積地ではなく、丘陵地帯により近い状況を呈していたことに起因しているのであろう。



第1図 所収遺跡位置図

更に、新しい時代に眼を向けると、中・近世の墳墓が見られ、丹波立杭地区に近い関係などから、丹波焼容器を利用した埋葬形態が知られている。

また、岡ノ谷遺跡のように近世の集落の一端を窺い知るものも見られ、青野ダム建設に伴う調査は先土器時代～近世までの、幅広い人々の生活の様子を知らしめている。

最後に、発掘調査の目的が達せられたのは、通算10年の長きに渡って、酷暑の夏、厳寒の冬期をも含め、長期間作業に従事していただいた作業員の方々の御援助の賜物であり、ここに記して厚く感謝申し上げます。(吉田)

調査作業員

北浦勉・北本一男・小西清・田中実・福井詳治・松浦松治・岸下節子・後藤たづ子・畑末千代子・畑末きみ江・大北よし江・大勢弥生・中島清子・前中ともゑ・大垣すみゑ・北本あや子・小谷幸子・古家みさを・今北裕子・塚本敏子・塚本志寿子・真造味千代・戸出よし子・桧田妙子・大上みちよ・植良操子・岡本政子・有田英子・山門多実子・山門千代子・裏田敏枝

調査体制

青野ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は昭和51年度より、磯崎正彦・河本健介両氏により開始され、その後、昭和52年度からは県教委によって調査が継続され、昭和61年度まで10年間にわたって調査が行われた。

その詳細は「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」に述べられている通りである。

ここでは、本書に所収した遺跡についてのみ、調査年度及び調査担当者名を記すにとどめたい。

(岡田)

泓遺跡 (昭和53・56年度調査)

調査担当者 櫃本誠一 渡辺昇

岡ノ谷遺跡 (昭和58年度調査)

調査担当者 吉田昇 岡田章一

北台遺跡 (昭和52・53年度調査)

調査担当者 吉田昇 大平茂 森内秀造

乾遺跡 (昭和60年度調査)

調査担当者 岸本一宏 久保弘幸

乾窯跡 (昭和52年度調査)

調査担当者 吉田昇 岡田章一

溝ノ尾遺跡 (昭和59・60・61年度調査)

調査担当者 吉識雅仁 岸本一宏 西口圭介 久保弘幸 山田清朝 中川渉

南台遺跡 (昭和56年度調査)

調査担当者 櫃本誠一 山本三郎 岡田章一 渡辺昇

溝向遺跡 (昭和60年度調査)

調査担当者 井守徳男 岸本一宏 久保弘幸 中川渉

井ノ方遺跡・井ノ方窯跡 (昭和60年度調査)

調査担当者 井守徳男 岸本一宏 久保弘幸 中川渉

貝谷窯跡 (昭和52年度調査)

調査担当者 吉田昇 岡田章一

地福窯跡 (昭和58年度調査)

調査担当者 吉田昇 岡田章一

経田遺跡 (昭和58年度調査)

調査担当者 吉田昇 岡田章一

道東遺跡 (昭和55年度調査)

調査担当者 櫃本誠一 渡辺昇

昭和62年度整理作業の経過

昭和62年度は昭和61年度に引き続き、乾遺跡、溝ノ尾遺跡の遺物を中心に整理作業を実施した。乾遺跡については4月下旬より、又溝ノ尾遺跡については6月上旬よりそれぞれ接合復原作業を開始し、7月下旬にはこれらの作業を終了した。また、両遺跡の遺物写真については9月下旬から10月上旬にかけて、これを実施した。これらの作業に併行して、遺物の実測、拓本、トレースについては、4月下旬より、和田早芳子を中心としてこれを実施した。実測については、乾遺跡、溝ノ尾遺跡のものが中心であったが、トレースについては、今回本報告書に所収した泓遺跡、岡ノ谷遺跡、北台遺跡、乾窯跡、南台遺跡、蛭田遺跡、井ノ方遺跡、貝谷窯跡、地福窯跡、道東遺跡などの全ての遺跡について実施した。遺跡数が多く、内容も多岐にわたっている為、作業工程については明確に記し難いが、ほぼ10月上旬よりレイアウト作業に着手し以後漸時原稿執筆を行い、昭和63年3月下旬にはほぼ全ての作業を終了した。

(岡田)

整理の組織

整理事務 社会教育・文化財課

課長 北村幸久

文化財担当参事 森崎理一

埋蔵文化財調査係長 大村敬通

整理担当

主 査 吉田 昇

主 任 吉識雅仁 大平 茂 岡田章一 森内秀造
渡辺 昇

技術職員 岸本一宏 西口圭介 久保弘幸 山田清朝
中川 涉

整理補助員 和田早芳子 前田陽子 井川佳子 住本広子
石野照代 平林育子 和田寿佐子 伊藤昌子
松本美佐緒 今村直子 栗山美奈 本岡雅子

第2章 下青野地域の調査

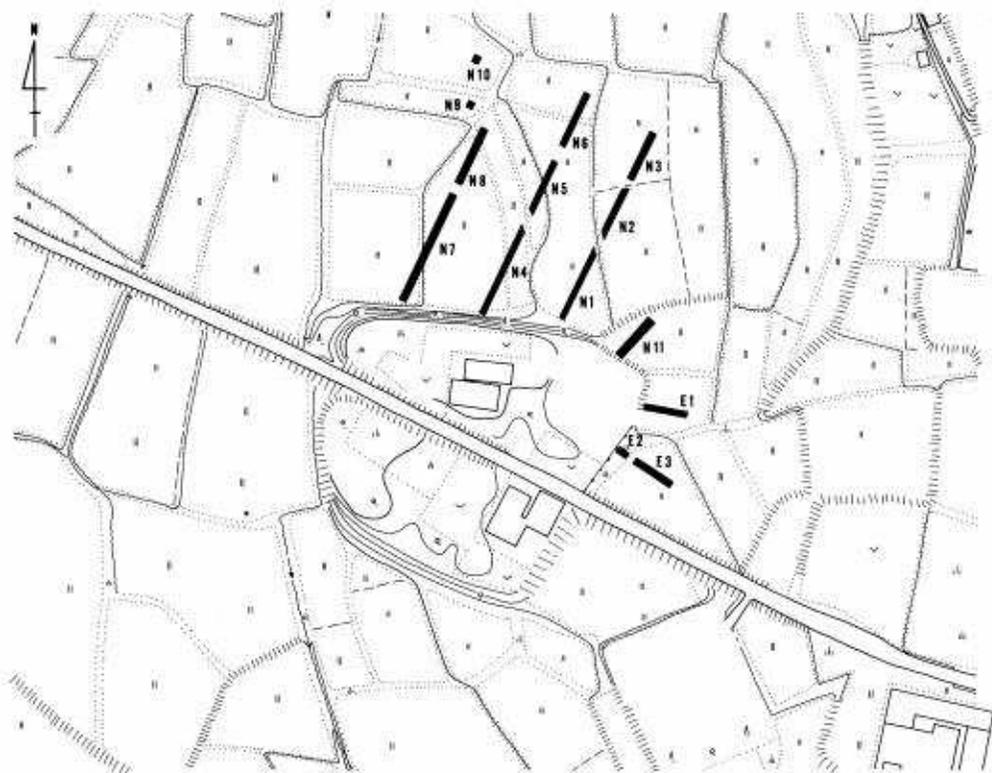
第1節 泓遺跡 (AS-102)

1. はじめに

青野ダム建設予定地の北端近くに位置する遺跡で、岩盤が隆起した台地上に立地している。三田市下青野字岩崎・泓道に跨がって所在している。青野川流域でも最も可耕地の広い部分であるが、低湿地となっている。広い水田域の中央に位置し、周辺から際立った状況にある。西に青野川が流れ、遺跡中央を東西方向に県道下青野本庄線が通り、遺跡を南北に分断している。東側山頂には、俗称城山と呼ばれており、青野川流域に勢力を持っていた青野氏が蟠踞していた居城である。その重臣である後藤氏の居館と言われているのが、下青野館跡 (泓遺跡) である。

2. 調査の経過

調査に入った段階まで、館跡上に後藤氏の子孫の人家があり、台地上の保存状態は悪かった。県道によって南北に分断され、さらに家屋も2軒あり撤去時期が異なったため、調



第2図 位置図 (1 : 2000)

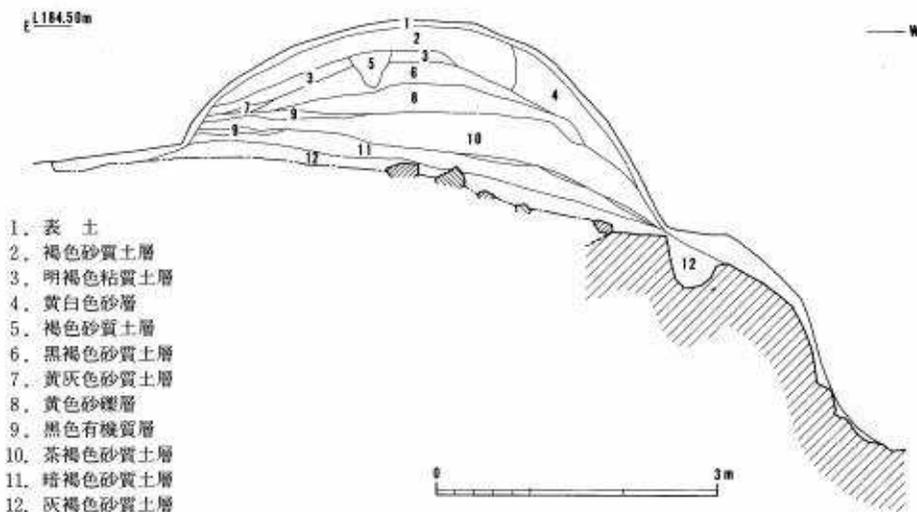
査年度も2年度となっている。県道の南側を昭和53年度に、北側を昭和56年度に調査を実施した。南北両方とも東半は開墾などで大きく削平されている。現代の屋敷の石垣などによっても手が加えられており、当初の遺構がどこまで残っているか疑問であった。調査を終了した段階でも時期決定は困難な遺構が大半であった。

また、確認調査トレンチ（5トレンチ）で弥生時代の石器が出土し、土塁断ち割りトレンチで包含層を検出したため、下層についても残存部については全面調査を実施した。下層の縄文・弥生時代の遺跡は、「泓遺跡」として「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」^{文献1}に報告しており、今回は「下青野館跡」についての報告である。

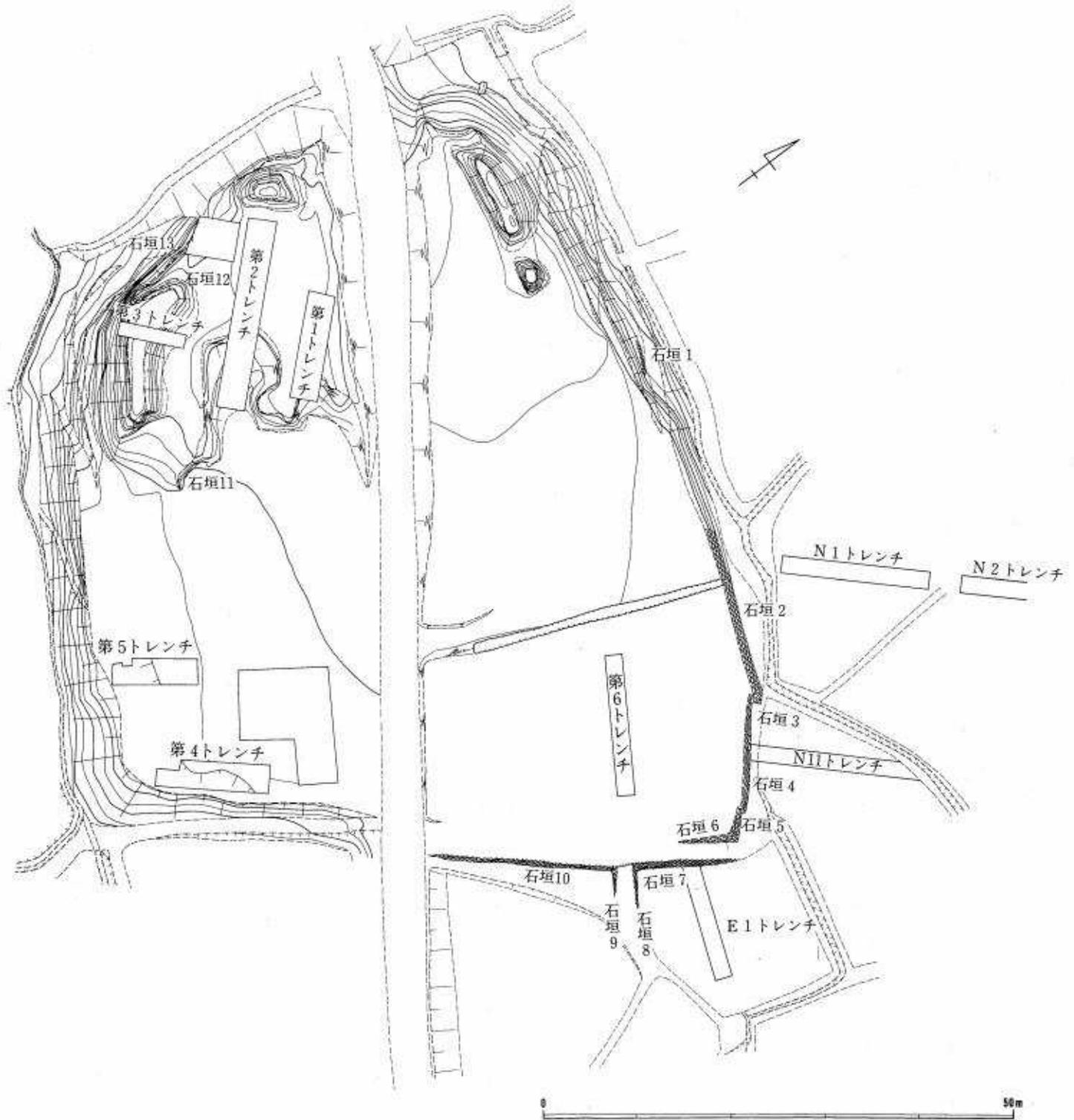
3. 調査結果

発掘調査に入る前の観察でも、土塁は歴然としていた。方形でなく、歪んだ不定形の方形になっている。東側は削平され全く残っていなかった。土塁は、台地の周縁部に築かれ土塁上面と外側の低い水田面との比高差は7m余りに及び、一目で館跡と判断された。調査は、2年次とも主に削平された部分の確認調査から行い、その結果を踏まえて全面調査範囲を確定し調査を実施した。

確認調査のトレンチを台地上に10本、水田に6本設定して確認した。台地上の削平を受けた部分は、遺構は残存していなかった。台地上の遺構が残存している可能性のある地域は、全面調査を実施したが、ピットなど性格不明の遺構が少数確認出来ただけで、建物跡など検出出来なかった。水田部分は非常に水はけの悪い田で、字名の「ふけ」の通りの状況で、明確な遺構を検出していないが、自然地形を最大限に利用したいわゆる「泥田堀」として機能するものと思われる。



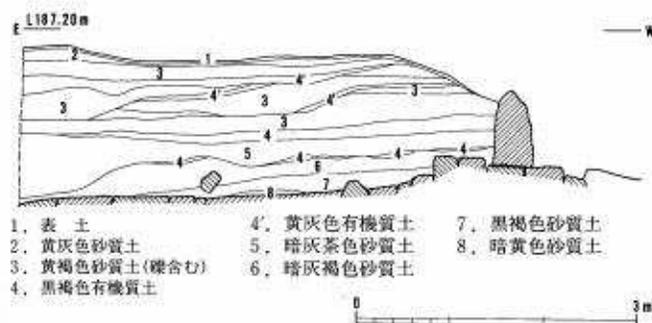
第3図 土塁断面図



第4図 地形測量図

泓遺跡

調査の結果、土塁以外の遺構は全て近世でも新しい時期か、近代に下る遺構と考えられる。検出した遺構は、土塁・石垣・裏門に伴う通路跡・排水路・土塼・ピットなどである。下層の弥生時代の遺構・縄文時代の遺



第5図 土塁縦断面図

物については、すでに報告してあるので、今回の報告では除外している。「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」の「泓遺跡」を参照されたい。

①土塁

南・西・北の三方に土塁は残っていた。ただ、県道で分断されたところや後世の遺構で切られている部分もある。東側は大きく削平され、全く残存しておらず、痕跡も窺われない。そのため、南北の規模は把握出来るが、東西の数値は不明である。南北は土塁の上部間の数値で48～50mを測る。ただ、地形に則して東側に土塁が延びているなら、60m前後になるものと思われる。東西も現在の地形に則して土塁が築かれていたとすれば、75mに近い値になろう。平面の形態は、北側を下辺とする台形になる。北辺は直線ではなく、緩やかな弧を描いている。北辺は84m、南辺は54m、東辺は60m、西辺は42m前後と推定される。土塁は全てある程度自然流失を受けており、土塁の断面形態も明らかでない。現状では、半円形で外側へ裾を広げている。平面規模は、頂上から内側に平均1.2m、外側に平均7.0mとなる外方に広がった形態である。土塁は、旧表土の上から構築を始めている。堆積土である黄灰色～茶褐色の砂質土と黒色有機質土を基本的には互層にしている。土塁断面の中ほどで、層が細かく分かれている部分があり、構築時の一つの画期と考えられる。土塁の規模は、岩盤である地山から2.1m、旧表土から1.2m、外方の最も低い地点から4.5mを測る。旧表土下層の暗褐色土が弥生期の包含層であり、また、岩盤の割れ目にも土器が含まれていた。

北側土塁は分断されていた。すでに表層の土層は残っておらず、堆積状態から性格を決定出来なかった。当初からのものであるとすれば、虎口になるものである。

②石垣

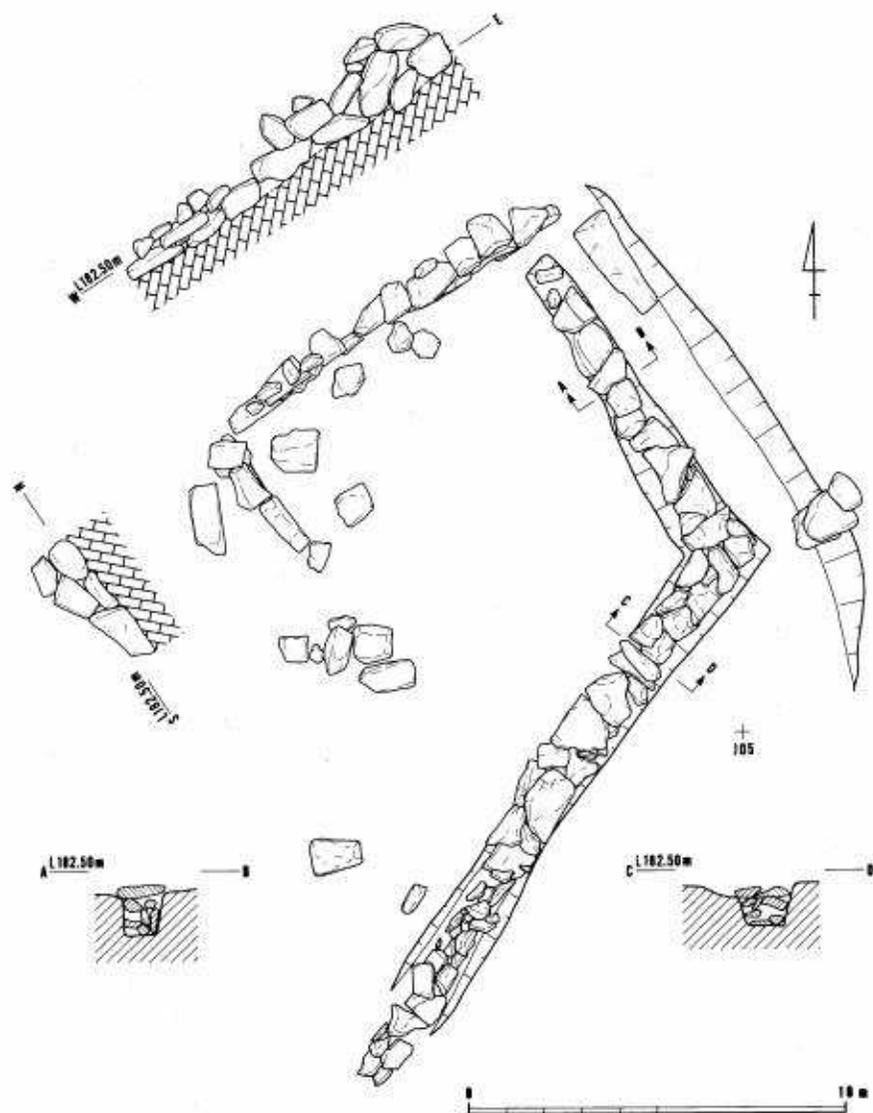
館跡の立地する台地の北辺と東辺に石垣が存在する。館跡当初の石垣かどうか不明である。また、南辺の土塁両端部に土塁を壊して石垣が築かれている。この石垣は、館築造時のものではなく、後世のものである。屋敷に関連する遺構と考えられる。さらに新しい石垣は、裏門に伴う通路の閉塞の石垣がある。石垣は、時期的に開きはあるが、13面確認し

ている。

台地北辺の石垣を石垣1～5、東辺の石垣を石垣6～10、南側土塁の東端の石垣を石垣11、同じく西端を石垣12、裏門に伴う通路の閉塞の石垣を石垣13とする。石垣6・8・9は通路(畦畔道)に伴うものである。(第4図参照)

石垣1

北辺西側に存在し館から水田部分の下方へ降りる昇降口の南側に見られる石垣である。河原石を使ったもので、全長27m、高さ3.8m残存している。北側斜面の一部にあり、土塁からは離れていることから、土塁基礎とは考えられない。北側の水田へ降りる道に面して



第6図 石垣11

おり、道に伴う石垣と思われる。道の築造時期は明らかでなく、幅を持って考えざるを得ない。築造当初か、水田への昇降を頻繁に行う時期かと考えられる。出土遺物はなく、現在まで機能していた道であることから、時期決定は困難である。

石垣 2

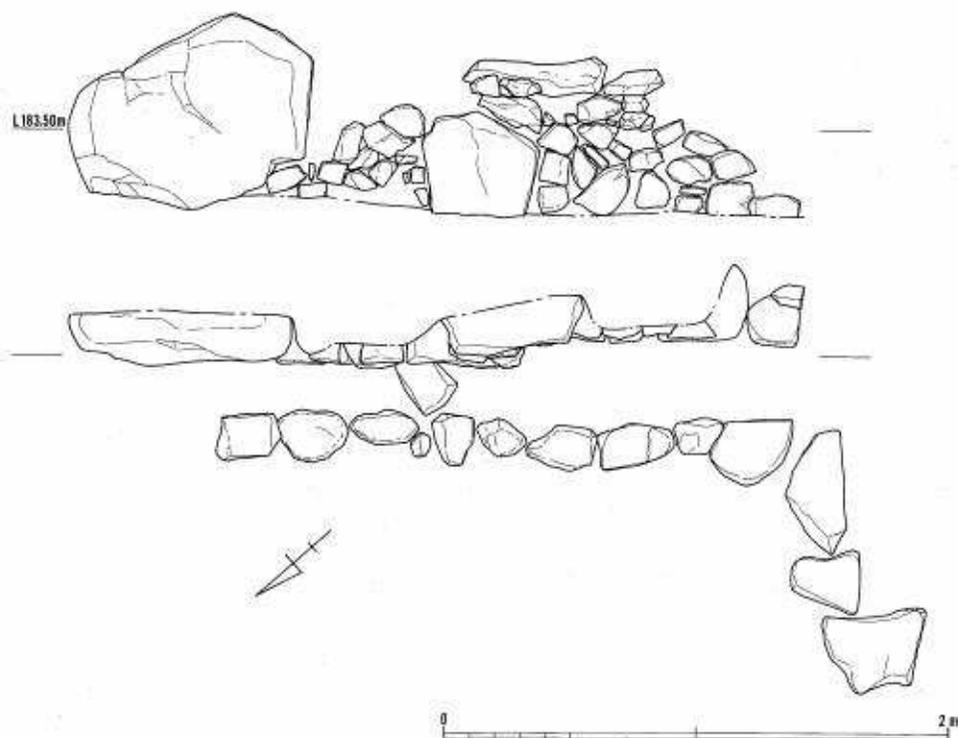
北辺東側に位置し、全長19m、高さ2.7m残存している。東側は石垣が屈曲しており明らかに端であるが、西側は台地斜面途中で終わっており続いているかもしれない。石垣1と違って水田面から台地上までの高さのある石垣である。

石垣 3

北辺東側にあり、石垣2と石垣4に挟まれている。石積みの状況から石垣2と同時期の石垣であろう。石垣2の東側側面の石垣で幅は狭い。上面で1.2m、下面の表土面で2.9mあり、残存高は3.2m測る。高さは、石垣2と同じでやや高い石垣である。

石垣 4・5・7・10

台地北東部の石垣で、現在の面の高さに準じた石垣である。築造時期は、確定出来ないが、石垣2・3よりは新しい段階の石垣であろう。調査に着手するまで石垣としての機能を有していた。石垣4・5は河原石を主体とした乱石積みであるが、石垣7・10は石の面を揃えた積み方で、さらに新しい可能性が高い。規模は、石垣4は長さ11.5m、残存高3.9



第7図 石垣12

mを、石垣5は長さ4.4m、残存高3.2mを、石垣7は長さ11.2m、残存高2.8mを、石垣10は長さ19.8m、残存高2.8mを測る。石垣10は南側を県道までとしており、道により切断された痕跡はない。道布設後の石垣と考えて良いものと思われる。

石垣6・8・9

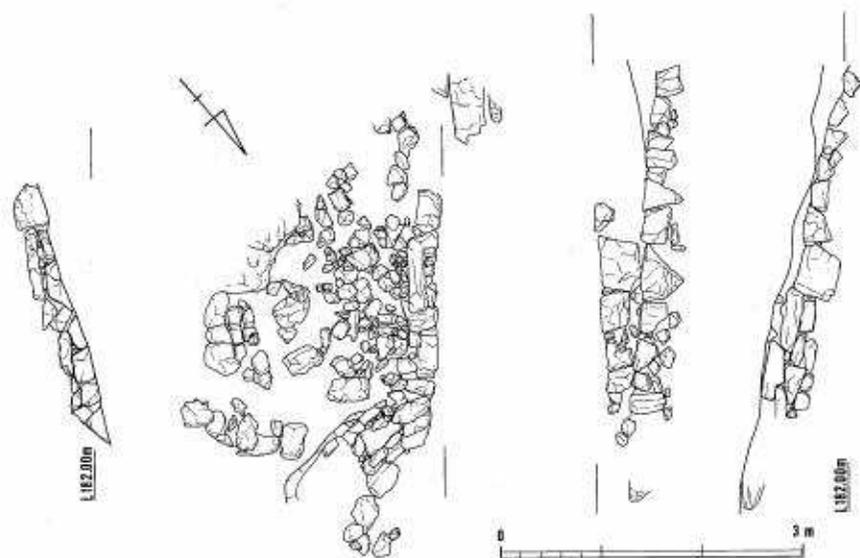
台地から水田へ降りる斜面に伴う石垣である。全て積み方が整然としており、石垣7・10と同じタイプで余り時期差のない石垣と考えられる。石垣6は長さ3.5m、残存高3.2mを、石垣8は長さ3.8m、残存高2.1mを、石垣9は長さ2.6m、残存高2.1mの規模を測る。

石垣11

南側土塁の東端にある石垣で、土塁を切つてその横断面に築かれている。調査前は埋もれており、現在の遺構ではない。後述する暗渠と削平面と関連する遺構である。上部は損壊を受けているが、平面的には完存している。L字形をしており、長辺2.1mで二段残っており残存高0.4mを測る。短辺も二段残っており残存高0.3mで長さ0.8mを測る。短辺は東側へ1・2石続いていたかもしれない。全て台地岩盤と同じ石材を使用しており、自然石で加工した石材は使っていない。

石垣12

土塁南西部の隅から北へ4.3m延びた切断面に築かれた石垣である。石垣に平行して築造されている石組の溝と関連した遺構である。裏門を設ける際に土塁を削ったもので、築造時の遺構ではない。他の石垣と異なって、1石だけではあるが大型の石材を使用している。1mに近い大型石材で地山と同じ石で自然石である。全長2.7mを測り、東側に巨石を配し、西側は小型の石材を積んでいる。残存高0.75mで、西側は小型の石材部分は5石積ん

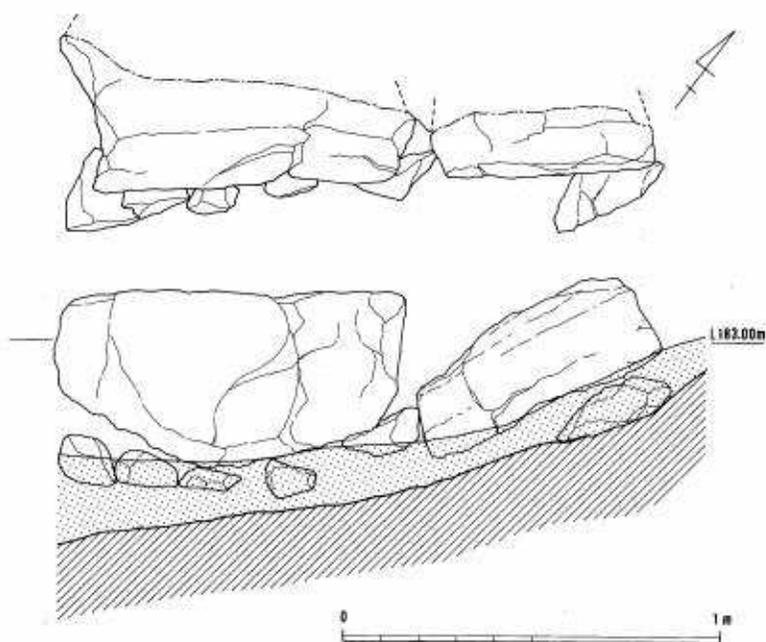


第8図 通路跡

でいる。

石垣13

台地西側の裏門設置に伴う土塁削平部分に相当し、裏門へ通じる通路を閉鎖するために築かれた石垣である。ほぼ土塁の基部に位置しており、弧を描いている。直線距離で2.2m、延長距離で3.45mを測り、高さは1.45mある。通路

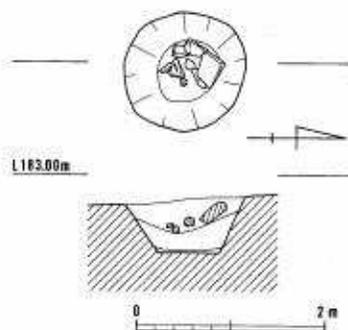


第9図 通路跡西壁上部石垣

を埋めた後に築造している。石垣は垂直ではなく、緩やかに傾斜している。下部は垂直に近く、上部は約55度の勾配を持つ。

③通路跡

台地西辺の南西コーナーに近い部分に位置しており、裏門に伴う通路跡である。両側壁には石垣が設けられている。斜面に即して石垣は築かれており、斜度は15度前後を測る。石垣は2段まで残っているが、ほとんどは1石だけである。最も良く残っている部分で、残存高1.45mを測る。北壁は9.4mを平面で測ることが出来る。石垣上部は台地上面の遺構面とほぼ同じ面まで築かれている。この部分で遺構は検出されなかったが、「木戸」のような簡単な施設が地山岩盤上に建てられていたものと思われる。



第10図 雪隠

通路廃絶後、埋め戻され石垣13を築いて閉鎖して機能を終えたようである。通路面も岩盤が露出しており、安定していたと思われる。階段は確認されなかった。

通路廃絶後、埋め戻され石垣13を築いて閉鎖して機能を終えたようである。通路面も岩盤が露出しており、安定していたと思われる。階段は確認されなかった。

④溝

2本の溝を確認している。暗渠と開渠の溝を1本ずつ調査した。

暗渠の溝は、南側土塁の東残存部端に位置しており、石垣11と有機的に強く結びついた遺構である。逆くの字形をしている。幅0.3mで、全長6.3m残っている。石垣11の北端に

ほとんど接して築かれ始め、約2mで屈曲し、4.3mで終息している。南側端部は溝がほとんど掘り下げられておらず、溝は余り延びないものと思われる。全て残存していることも考えられる。溝は、幅0.3m前後で0.2~0.3m掘り下げ、上部に自然石を置き並べて暗渠としている。性格は断定出来ないが、上に建物が存在したと想定するのが妥当かと思われる。

開渠の溝は、暗渠の溝が削平した土塁の逆の端面に位置している。石垣12を溝の南壁に共用しており、約0.2~0.3mの溝を設けて石組が見られる。溝の北壁で一段だけの浅い溝で、現状では0.1~0.15mの深さしか測れない。残存長2.2mを測る。

⑤土壌 他

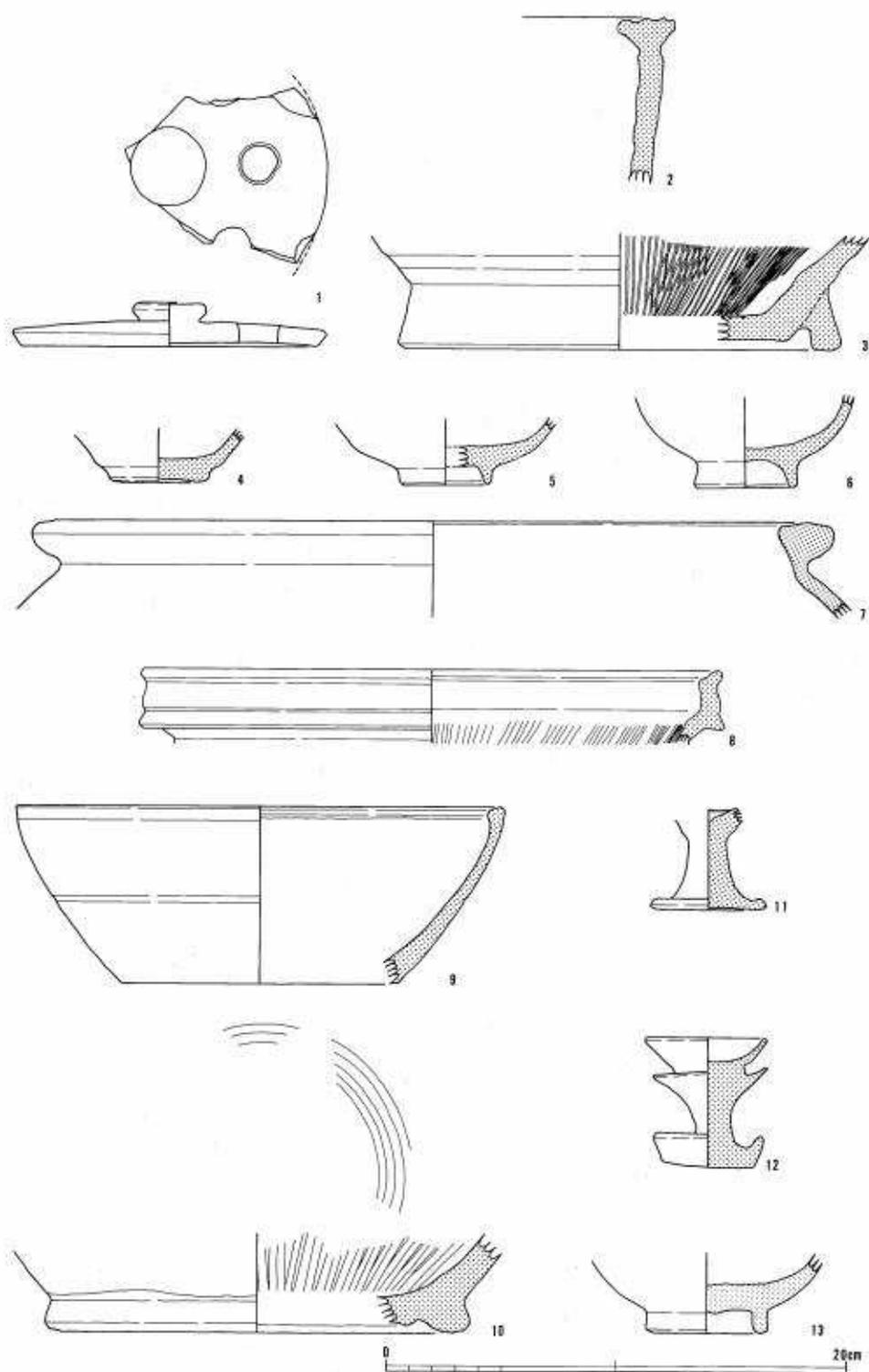
台地上部で、土壌・ピットを数基確認している。明らかに建物に伴うピットは検出されていない。2基のピットは岩盤を掘り込まれていることから、2基以上は存在しないものと思われる。岩盤が広がっていることから、柱は安定していたもので、柱穴の必要がなかったものと思われる。

また、円形土壌が1基検出され、破碎された丹波焼が出土している。底に有機質が堆積しており雪隠と考えられる。 (渡辺)

4. 出土遺物

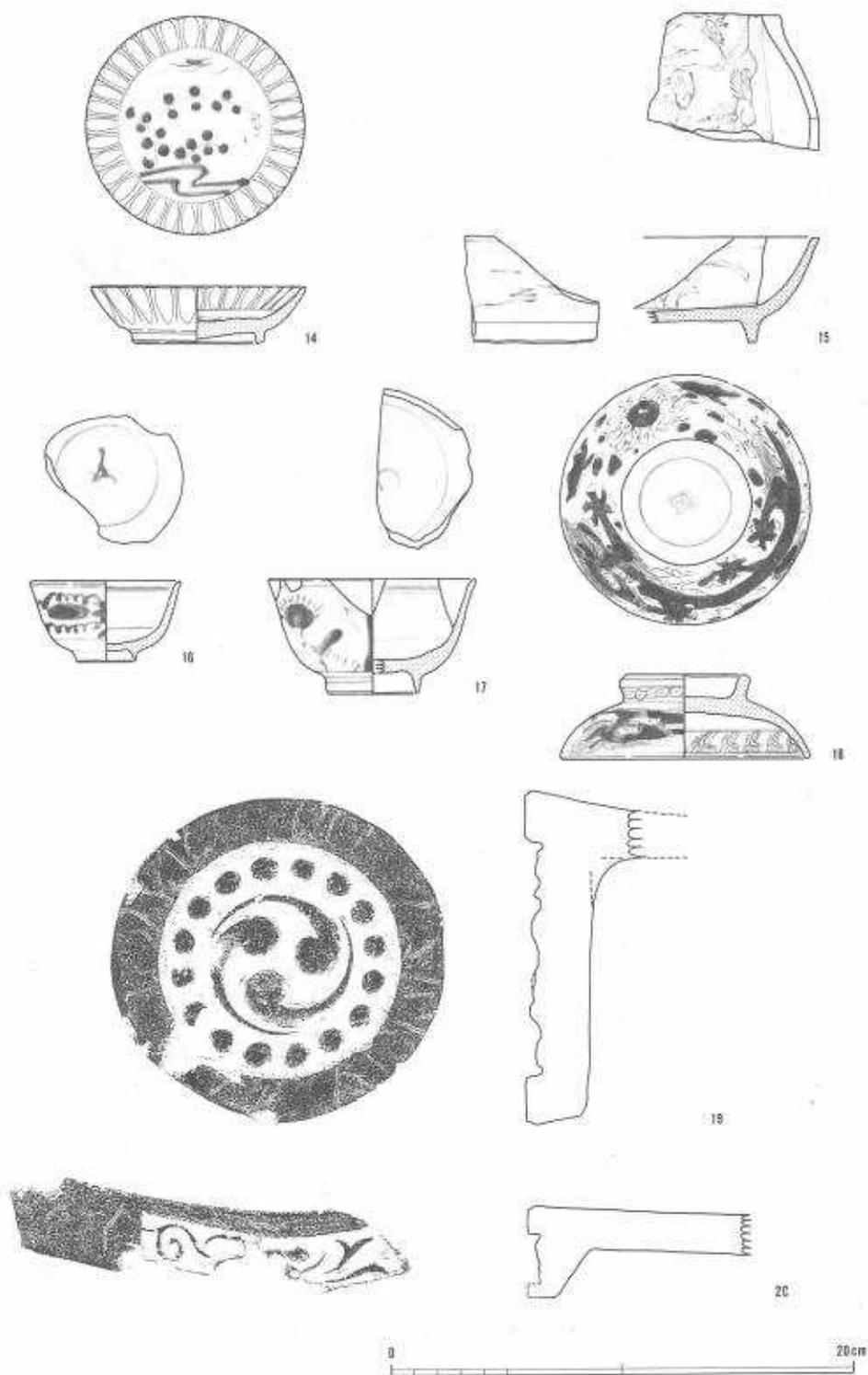
下青野館跡で出土した近世から近代にかけての遺物には土師器、無釉陶器、施釉陶器、青磁、染付磁器、瓦がある。1は土師器の蓋である。ほぼ厚さ1cm前後の扁平な体部に、扁平なつまみを貼付する。体部には円形の穿孔が認められる。調整技法は、ロクロナデ、ロクロケズリの後、つまみの貼付を行い、さらにロクロナデ調整を施す。形態からみて、近世後半から近代にかけてのバンドコ^{文献2}の蓋と考えられる。2は無釉陶器の甕である。体部は直立し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部上面には凹線が3条認められる。調整技法は、ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部上面に凹線を施す。外面には化粧土を施し、胎土中には砂粒を若干含む。形態、調整技法、胎土の特徴から近世後半から近代にかけての信楽系の製品と考えられる。3は無釉陶器の播鉢^{文献2}である。高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、内面にクシ描、底部内面には同心円状のクシ描施文が行われる。形態及び調整技法の特徴から、近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文献2}
4は施釉陶器の椀である。低い削り出し高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、内面に施釉し暗黒褐色に発色する。底部外面は露胎である。形態及び調整技法の特徴から中世後半から近世初頭にかけての瀬戸美濃系の製品と考えられる。^{文献3}
5は施釉陶器の椀である。ロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、施釉し、淡茶褐色に発色する。高台畳付の釉はかき取られ、畳付には砂が附着する。底部内面は蛇ノ目状に釉がかき取られる。形態及び調整技法の特徴から18世紀前半の唐津系の製品と考えられる。^{文献4,5}
6は施釉陶器の椀である。比較的細く高い高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロ

泓遺跡



第11圖 出土遺物(1)

泓遺跡



第12図 出土遺物(2)

クROKEズリ、ロクロナデの後、内外面共灰釉を施釉し、淡黄緑色に発色する。高台壘付の釉はカキ取られ、器面には細かい貫入が認められる。形態及び調整技法の特徴から近世後半の丹波系の製品と考えられる。^{文献2}7は施釉陶器の甕である。口縁部は肥厚し、端部は水平に成形する。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリの後、口縁部外面を強くヨコナデする。内外面共、鉄釉を施釉する。胎土中には砂粒を多く含む。形態及び調整技法の特徴から近代から現代の丹波系の製品と考えられる。^{文献2}8は施釉陶器の播鉢である。口縁部は若干内傾して上下に拡張し、端部は上方につまみ上げる。口縁部外面には凹線が2条認められる。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリの後、口縁部内外面を強くヨコナデし、口縁部外面に2条の凹線を、内面にクシ描きをそれぞれ施す。内外面共鉄釉を施釉する。形態及び調整技法の特徴から近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文献2}9は施釉陶器の鉢である。平底で、体部は内彎し、口縁部は内傾する。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリ、ロクロナデの後、内面に白濁釉を施釉する。外面は露胎で灰被りを受ける。内面には粗い貫入が入る。形態及び調整技法の特徴から近世後半の丹波系の製品と考えられる。^{文献2}10は施釉陶器の播鉢である。幅広で削り出しの浅い高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリ、ロクロナデの後、内面にクシ描きを施す。外面には鉄釉が施される。焼成はややあまく、胎土中に砂粒を多く含む。形態及び調整技法の特徴から丹波系の近代以降の製品と考えられる。^{文献2}11は施釉陶器の燭台である。平底で底部外面には糸切痕が認められる。体部内面は施釉され黄褐色に発色する。姫路城武家屋敷跡出土品に類例が認められ、18世紀後半から19世紀前半頃の製品と考えられる。^{文献2}12は施釉陶器の燭台である。燭台上に灯明皿を載せて焼成し、焼成時に二つが融着している。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリの後、灰釉を施釉し、淡暗黄緑色に発色する。底部外面は露胎で、糸切痕が認められる。形態及び調整技法の特徴から19世紀前半の西播系もしくは丹波系の製品と考えられる。^{文献6}13は青磁碗である。比較的厚手に成形され、幅広でやや高い高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクROKEズリ、ロクロナデの後、施釉し淡青色に発色する。高台壘付の釉はカキ取られ、底部外面(高台裏)は露胎である。おそらく船載の龍泉窯系の製品と考えられる。^{文献7}

14は染付磁器皿である。比較的幅広で低い高台をもち、体部は斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。体部内外面は菊花状に成形される。調整技法は、水挽き轆轤成形の後、型押しで、菊花状に整形される。口縁端部には鉄釉が施釉される。内面には呉須で界線、流水文、草花文が描かれる。高台壘付の釉はかきとられ、底部外面(高台裏)は兜巾状に成形される。形態、調整技法の特徴、呉須の発色から、少なくとも19世紀前半以降の製品と考えられる。18は染付磁器の蓋である。つまみ部はやや外傾し、体部は内彎する。外面には酸化コバルトで、上から順に界線、渦巻文、界線、雲龍文、界線が、内面には、界線、不明文、界線がそれぞれ描かれる。また口縁端部には鉄釉が施釉される。形

態、調整技法、施文方法の特徴から、近代から現代にかけての製品と考えられる。15は染付磁器の四方向付である。型造り成形で口縁部は外反する。内外面共施釉されるが色調はやや青味を帯びる。外面には発色のやや淡い呉須で、上から界線、草花文が、内面には界線、草花文、界線2条、鹿と草花文がそれぞれ描かれる。高台疊付の釉はかき取られ、器面には細かい貫入が入る。形態、調整技法、色調などの特徴から、19世紀前半の東山系の製品と考えられる。^{文獻2,7}16は染付磁器碗である。比較的径が小さく低い高台をもつ。体部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共施釉されるが、高台疊付の釉はかき取られる。色調はやや青味を帯びる。外面には呉須で、界線、花文、界線二条、内面には呉須で、界線、内面底部には「寿」字文がそれぞれ描かれる。形態、調整技法、文様等の特徴から19世紀前半以降の東山系の製品と考えられる。^{文獻2,7}17は染付磁器碗である。比較的細く高い高台をもち、体部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共施釉されるが、高台疊付の釉はかき取られる。色調はやや青味を帯びる。外面には呉須で界線、草花文、界線2条、内面には呉須で界線、底部内面には不明文が、それぞれ描かれる。形態、調整技法、文様等の特徴から、19世紀前半以降の東山系の製品と考えられる。^{文獻2,7}19は巴文軒丸瓦である。珠文及び巴の頭の部は指おさえの為扁平になっている。外面はヘラミガキによって平滑に調整され、光沢をもついわゆるいぶし瓦である。近代以降の製品と考えられる。20は唐草文軒平瓦である。19同様、いぶし瓦で、近代以降の製品と考えられる。^{文獻5}

上記の様に、下青野館跡で検出された遺物は、4の瀬戸美濃系の天目茶碗、18世紀前半に比定される10の唐津系統碗、舶載の龍泉窯系の青磁碗(13)を除くと、殆ど全てが、近世後半から近代以降即ち、19世紀前半から20世紀のものがある。従って、これらの遺物は、館跡に伴うものとは考え難く、むしろ、明治以降の民家に伴うものが廃棄されたものと考えの方が妥当であろう。(岡田)

引用・参考文献

1. 櫻本誠一・山本三郎・井守徳男他 1987 「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」(兵庫県文化財調査報告 第50冊) 兵庫県教育委員会
2. 岡田章一・長谷川真 1985 「特別史跡 姫路城跡-兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告」 兵庫県立歴史博物館
3. 檜崎彰一他 1976 「美濃の古陶」 京都光琳出版
4. 中里太郎右衛門・永竹威 1978 「古唐津-肥前陶器の歴史と美を探る-」 佐賀県立歴史博物館
5. 大橋康二 1984 「肥前陶器の変遷と出土分布-発掘資料を中心として-」 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
6. 渡辺昇・岡田章一・森岡みゆき 1986 「明石城II」(兵庫県文化財調査報告書 第32冊) 兵庫県教育委員会
7. 溝岡忠成 1975 「姫路藩窯東山焼」 東京 光美術工芸

第3章 末西地域の調査

第1節 岡ノ谷遺跡 (AW-50)

1. 立地

岡ノ谷遺跡は三田市末西地区に所在する。南北に延びる丘陵の南側先端にあって、北側から南側に向かって大きく傾斜している。先に行われた分布調査の結果、土師器、須恵器等の遺物が採集された為、県教委では、2m×2mのグリッド及び幅1mのトレンチを設定して遺構の有無を確認した。その結果、確認調査を実施した地区の北側部分で、柱穴状のピットが検出された為、確認調査対象地の北側部分約890㎡について全面調査を実施することになった。

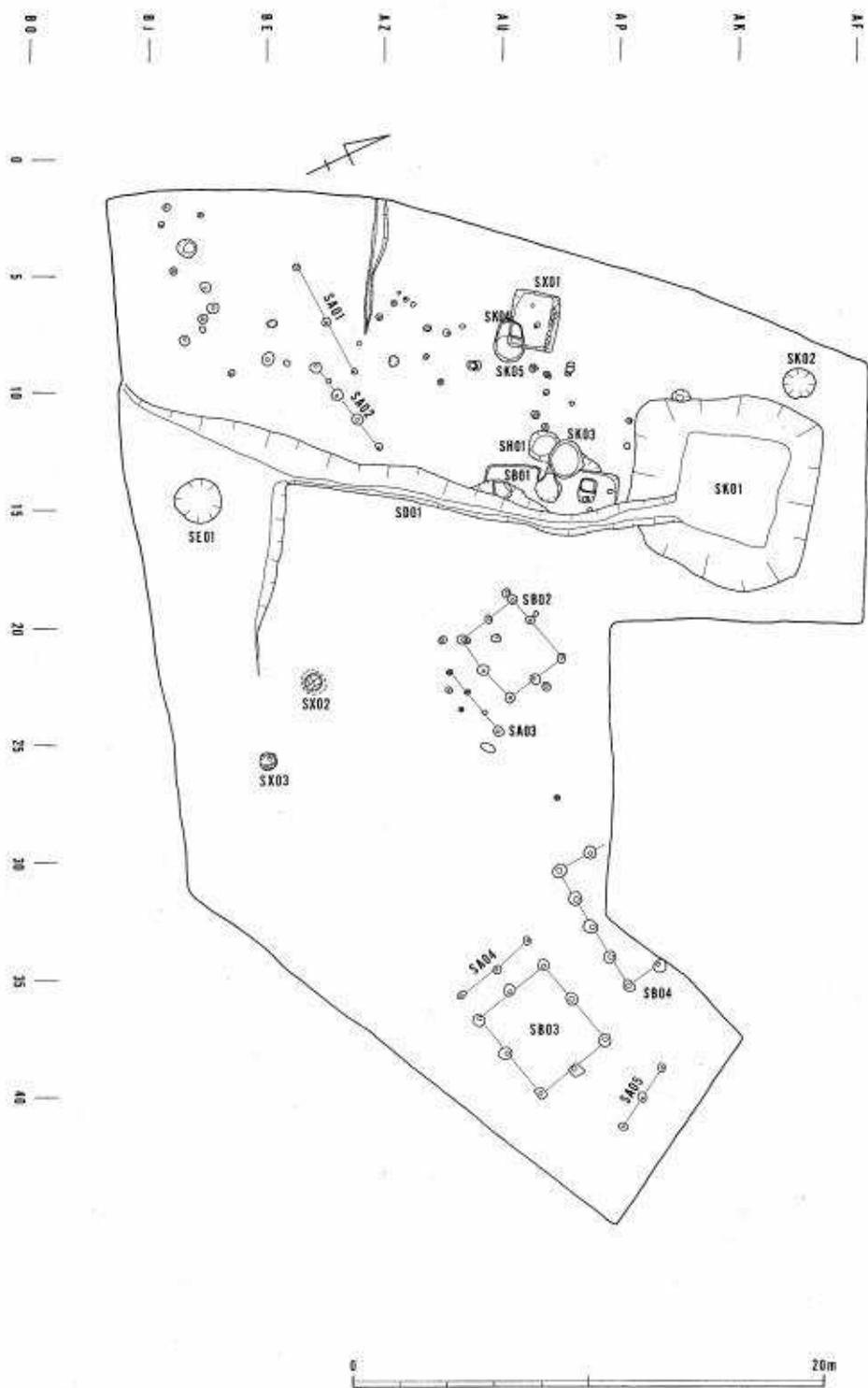
2. 調査の概要

全面調査の結果、本遺跡では、たいへん^{まば}疎らな形ではあるが、近世から弥生時代に至る各時代の遺構、遺物が検出された。但し、検出された遺構は、殆ど最終遺構面である黄褐色の地山上で検出されており、各遺構の所属する遺構面を面的に調査する事は出来なかった。これは、最初、確認調査を実施した際、検出された遺構が柱穴群のみで、遺構面が一面であると認定したこと、近世の時期の土地利用で、他の時期の遺構面が削平されていたこと、現況は水田として利用され、その際の削平を受け、同一の遺構面を調査区全体に確認しえなかった事などによる。次に検出された遺構について、出土遺物等を参考にして、



第13図 位置図 (1:2000)

岡ノ谷遺跡



第14図 遺構全体図

近世、中世、古墳時代の各時期に所属するものに分類し、それぞれの遺構について、その概略を述べる事にする。

a) 近世の遺構

本遺跡で検出された近世の遺構には、用水池SK01、SK01に付属しSK01の南西隅から南側に流れる溝SD01、円形土壌SK02、03、04、05、円形の集石土壌SH01、方形の配石土壌SX01、円形の配石土壌SX03、埋甕遺構SX02などがある。なお、調査区南側にある井戸SE01は、調査前より確認されており、畑に伴う野井戸と考えられる為、今回は調査の対象とはしていない。

用水池SK01

調査区の北東部で検出されたもので、上場の1辺が約700cm、下場の1辺が約450cm、確認面からの深さ約210cmを測る方形の土壌である。南西隅に溝SD01がとりついている事、下層の埋土が暗青灰色を呈し、水の溜っていた事をうかがわせる事から恐らく用水池状の施設であろうと考えられる。壙内からは施釉陶器及び、染付磁器等が出土している。

用水溝SD01

SK01に取り付き、SK01の南東隅から南側に流れる溝である。幅約110cm、確認面からの深さ約60cmを計り、断面はU字状を呈する。

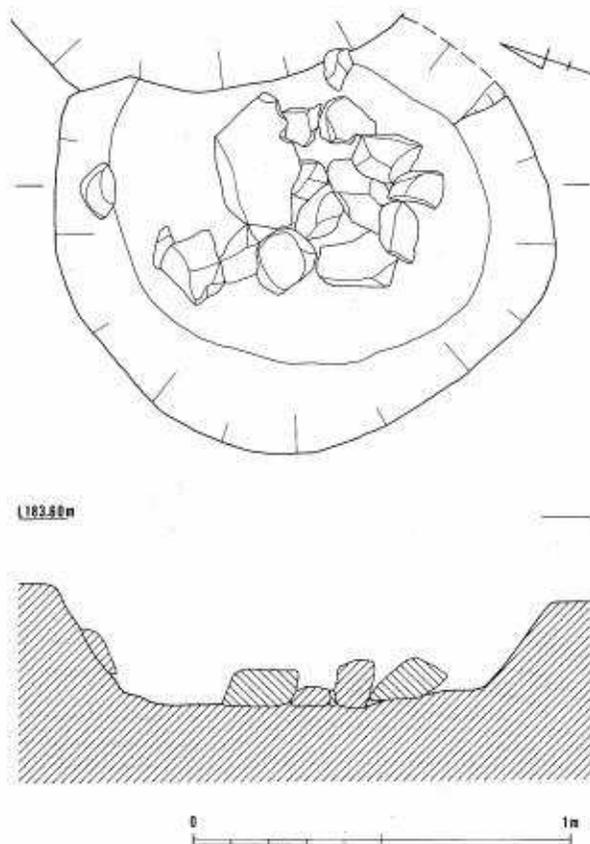
溝の南側は、水田造成時の削平により明らかではない。恐らくSK01から水を導入する用水溝と考えられる。溝内からは、施釉陶器、染付磁器等が出土している。

円形土壌SK02

SK01の西側で検出されたものである。径180cm、確認面からの深さ210cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する土壌である。

円形土壌SK03

SK01の南側に位置し、竪穴住居址SB01を切る形で検出されている。さらに南側の円形集石土壌SH01とも重複関係にある。径150



第15図 集石土壌 (SH01)

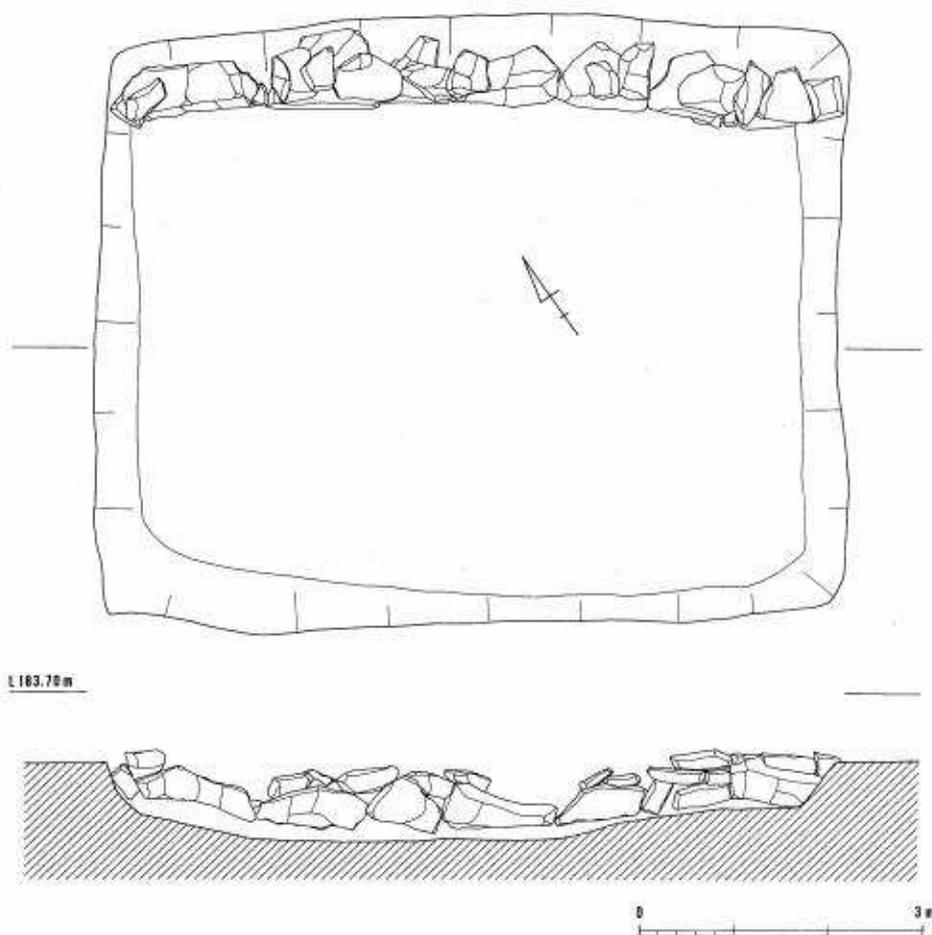
cm、確認面からの深さ65cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する土壌である。壙内からは、施釉陶器、染付磁器等の遺物が出土している。

円形集石土壌SH01（第15図）

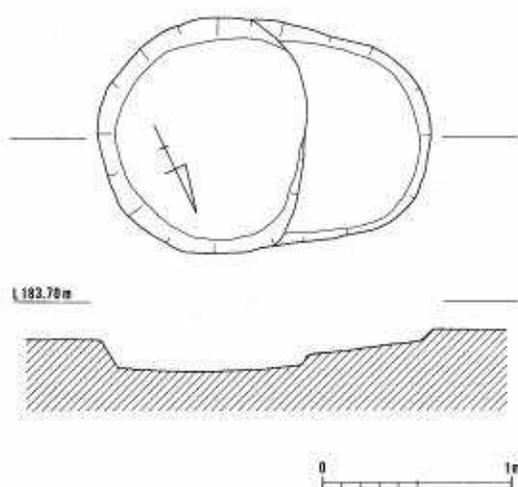
SK03の西側に隣接して、SK03に切られる形で検出されたものである。径130cm、確認面からの深さ約32cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する。壙内には、長辺20cm、短辺10cmの自然石を10数個、集石状に埋置している。壙内からは、施釉陶器、染付磁器等が検出されている。

方形配石土壌SX01（第16図）

調査区の中央部西端で検出された遺構である。長辺780cm、短辺610cm、確認面からの深さ約82cmを測る長方形の平面形状を呈する比較的浅い土壌である。土壌の北側辺には、長辺の内側に沿って、長辺110cm、短辺60cmの自然石を1段配石している。壙内からは、施釉陶器、染付磁器等の遺物が出土している。



第16図 配石土壌 (SX01)



第17図 土壌 (SK04・05)

SX01、SK05と重複する形で検出されているが、SX01を掘り終わった後、下層の面で検出されており、明らかにSX01よりは先行する遺構である。短軸120cm、長軸65cm以上、確認面からの深さ約15cmを測る。ほぼ楕円形の平面形状を呈すると考えられる土壌である。坑内からは施釉陶器、染付磁器等が検出されている。

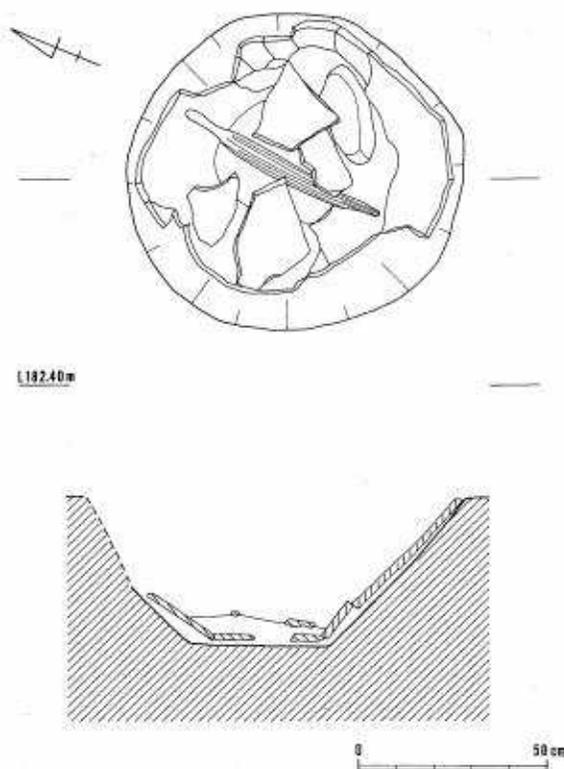
土壌SK05 (第17図)

SK04同様、SX01を掘り終わった

後、下層の面で検出されたもので、SX01よりは先行する遺構である。SK04との関係は、SK04を切る形で検出されており、SK04よりは後出のものである。長軸127cm、短軸110cm、確認面からの深さ約17cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する土壌で、坑内からは施釉陶器、染付磁器等の遺物が出土している。

埋甕遺構SX02 (第18図)

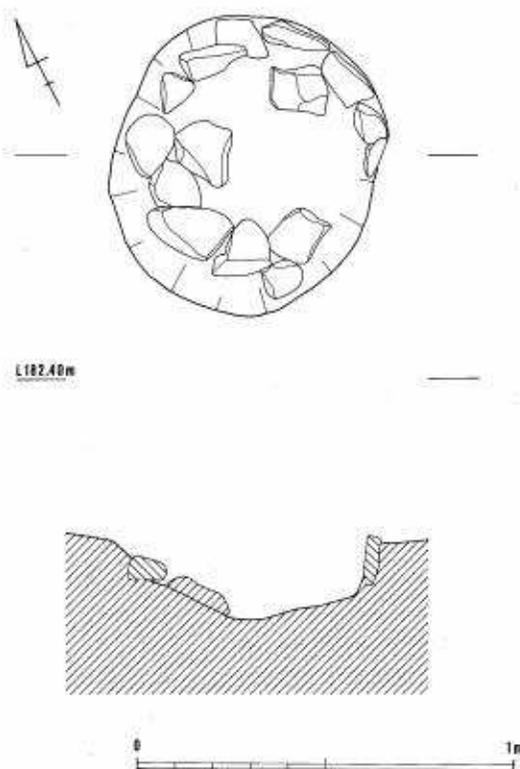
上面を削平されている為、掘り込み面は明らかではないが、調査時点での現状では、径90cm、確認面からの深さ約40cmを測る円形の土壌内に、丹波焼の甕を埋置した埋甕遺構である。甕は体部下半から底部にかけて残存しているのみで、口縁部は、甕の内側に落下した状態で検出されている。なお、甕内からは幅6cm、長さ56cmの木片が出土している。



第18図 埋甕 (SX02)

円形配石土壌SX03 (第19図)

SX02の南側で検出されたものである。長軸80cm、短軸70cm、確認面からの深さ約20cmのほぼ楕円形の平面形状を呈する土壌を掘り



第19図 円形配石土坑 (SX03)

方向に並び、東西どちら側にも、延長線上にピットは認められない。長さは約5.2m、柱間は2間である。付近には、SA01に対応する建物は検出されていない。

柵列状遺構 2 (SA02)

SA01の南側で検出されたもので、SA01同様ほぼ東西方向に延びるが、やや角度を北にふる。4つのピットによって構成され、長さは4.5m、柱間は3間である。ピットの規模、形状は、西側の3つが径約50cm、確認面からの深さ約30cmを測りやや大型であるのに対し、東端のそれは、径30cm、確認面からの深さ30cmとやや小型になっている。

付近にはSA02に対応する建物は検出されていない。

掘立柱建物 2 (SB02) (第20図)

調査区のほぼ中央、北寄りで検出されたもので、東西2間、南北2間、東西辺の長さ3.2m、南北辺の長さ2.8mを測る建物址である。柱間の間隔は南北辺は北から1.5m 1.3m、東西辺については、西から1.6m 1.6mを測る。柱穴の規模は径50cm、確認面からの深さ約10cmを測り、柱痕の径はほぼ15cm～10cmの間に収まる。建物SB02には、南に東西辺に平行してSA03があり、SB02に付随する柵列などの付属施設となる可能性が大きい。

柵列状遺構 3 (SA03) (第20図)

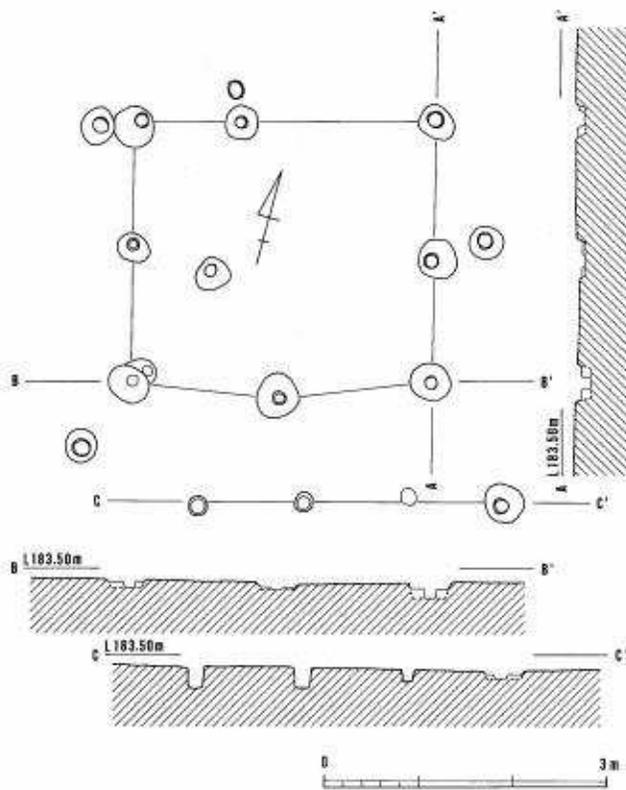
込み、坑内に長辺20cm、短辺8cmの自然石を土坑の内側に、ほぼ円周に沿う形で、配石している。坑内からは、施釉陶器及び染付磁器等の遺物が出土している。

b) 中世の遺構

本遺跡で検出された中世の遺構には掘立柱建物、及び柵列状施設がある。以下、中世の遺構についてその概要を述べる。

柵列状遺構 1 (SA01)

調査区の南西部で検出されたもので、3つのピットによって構成される。ピットの規模、形状は、径40cm、確認面からの深さ約30cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する。方向はほぼ東西



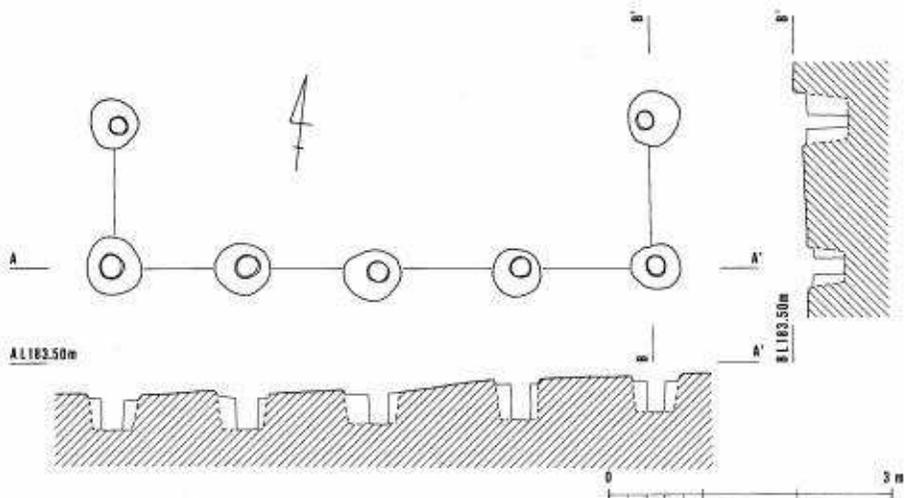
第20図 掘立柱建物 2 (SB02)

細は不明である。東西辺の間隔が他の建物 (SB02、03) と比べて非常に短く、仮に掘立柱建物と考えた場合、SB02、03とは、時期差あるいは性格が違う可能性が考えられる。調査結果のみでは建物址であるという積極的な要素を欠くが、ここでは一応掘立柱建物SB04と

SB02の南側でSB02の東西辺に平行する形で検出されたものである。4つのピットから構成され、長さは3.2m、ピット間の間隔は東から1m、1.1m、1.1mである。柱間は3間である。

掘立柱建物 4 (SB04)

東西方向4間、南北方向は現状では1間の「コ」の字形の平面形状を呈する遺構である。東西辺は、5つの柱穴によって構成され、長さは5.7m、柱穴間の間隔は東から1.4m、1.4m、1.5m、1.4m、柱間は4間である。北側の部分が調査区外にあたる為、遺構の規模、性格等については詳



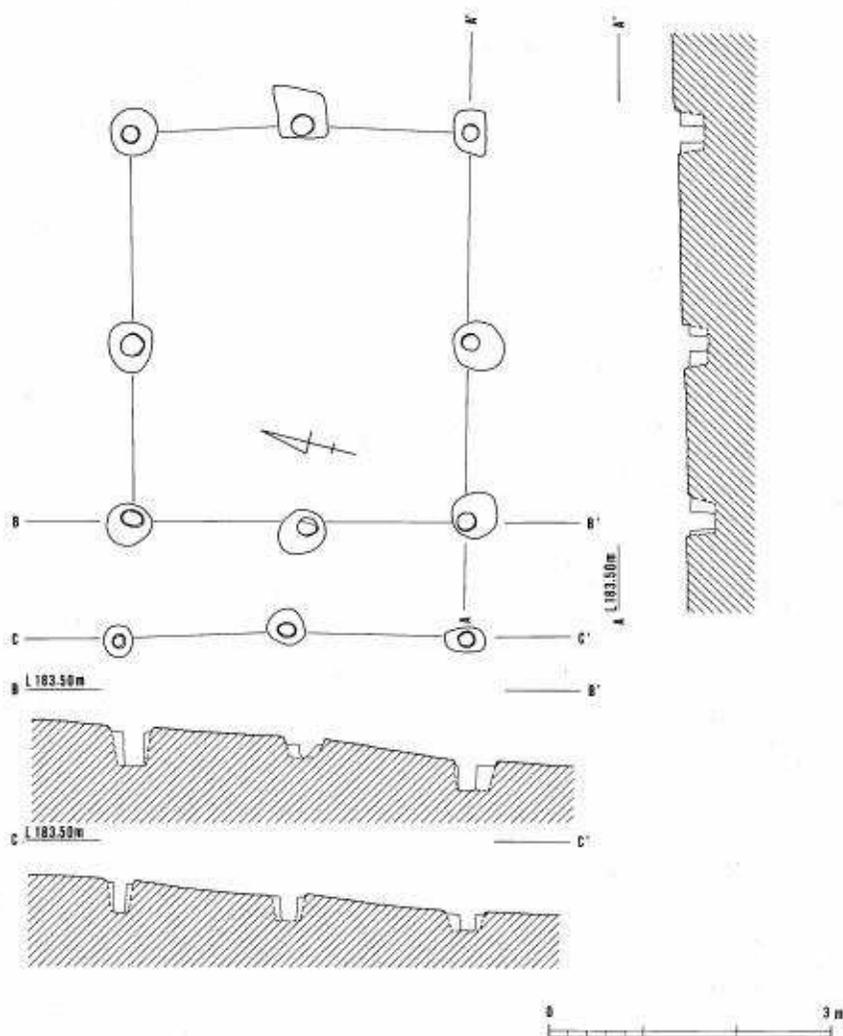
第21図 掘立柱建物 4 (SB04)

して報告する。

掘立柱建物 3 (SB03) (第22図)

SB04の南側で検出された遺構である。8つの柱穴群で構成される南北2間、東西2間の掘立柱建物址である。南北辺の長さは3.6m、柱穴間の間隔は北から1.8m、1.8m、東西辺の長さは4.2m、柱穴間の間隔は東から1.9m、2.3mを測る。柱穴の規模、形状は、6基迄が径45cm-50cm、確認面からの深さ約40cmを測るのに対し、東側の南北辺を構成する2基の柱穴が、長辺55cm、短辺30cm、確認面からの深さ約30cmを測る方形の平面形状を呈する掘方をもつ。SB03の西側には、SB03に付随する柵列状の付属施設と考えられるSA04が存在する。

柵列状遺構 4 (SA04) (第22図)



第22図 掘立柱建物 3 (SB03)

SB03の西側で、SB03の南北辺に平行する形で検出された遺構である。3つの柱穴群より構成され、長さは3.6m、ピット間の間隔は北から1.8m、1.8m、柱間は2間である。ピットの規模は径40cm、確認面からの深さ約45cmを測り、円形の平面形状を呈する。SB03の南北辺に平行して存在すること、柱間の間隔がSB03とほぼ同一である事などから、SB03に付随する柵列等の付属施設である可能性が高い。

柵列状遺構 5 (SA05)

調査区の最も東側で検出された遺構である。SB03の南北辺の方向よりはやや西に傾く、3つの柱穴群より構成され、長さは3m、柱穴間の間隔は北から1.5m、1.5mで、柱間は2間である。柱穴の規模は径35cm、確認面からの深さ30cmを測り、ほぼ円形の平面形状を呈する。

SA04と同様のあり方を示すが、付近にはSA05に付随すると考えられる建物址等の遺構の存在は認められない。

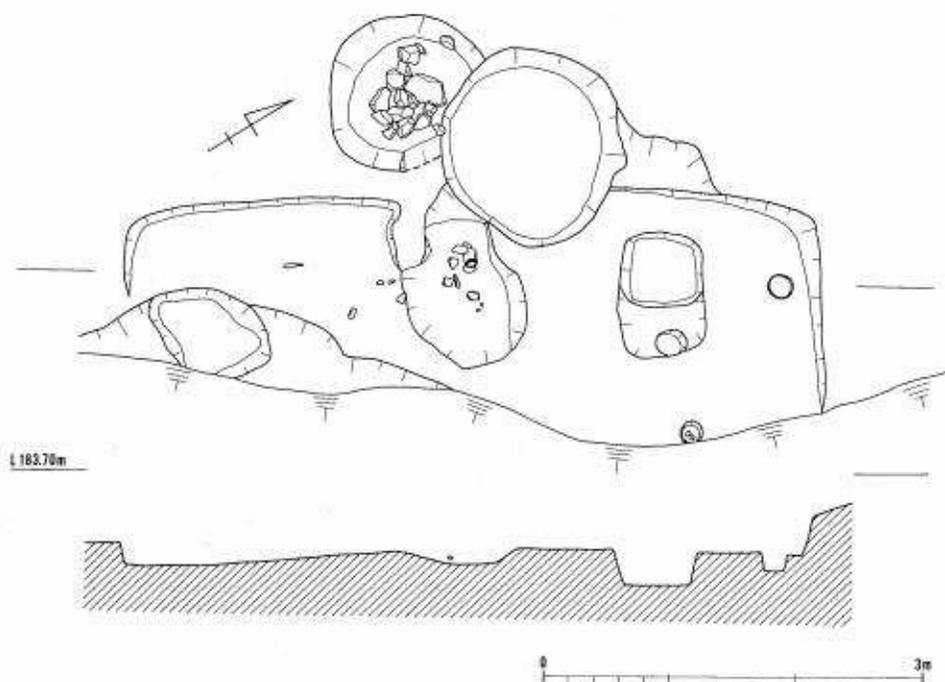
c) 古墳時代の遺構

本遺跡で検出された古墳時代の遺構には竪穴住居址SB01がある。

竪穴住居 1 (SB01) (第23図)

用水池SK01の南側でSK01に隣接する形で検出された遺構である。

住居址の東側部分はSD01及び後世の削平によって失われ、現状は西側の南北辺と、東西



第23図 竪穴住居 1 (SB01)

辺の1部を残すのみであるが、ほぼ1辺5.5m、確認面からの深さ40cmを測る方形の平面形状を呈する竪穴住居址と考えられる。

僅かに残された西側部分も、SK03、SH01によって切られ、又墳内も後世の擾乱を受ける等、遺存状況は非常に悪いが、南北辺に沿って中央部に炉跡と考えられる焼土塊の堆積が認められ、その周辺で土師器等の遺物が検出されている。

3. 遺物の概要

岡ノ谷遺跡では、近世に属する施釉陶器、染付磁器、中世に属する土師器、須恵器、無釉陶器、舶載磁器、古墳時代の土師器、須恵器、弥生土器等、弥生時代から近世に至る各時代の、各種類のものを雑多に含んでいる。

しかし、量的にはさほど多くはなく、又出土状況も、明確に遺構に伴う一括遺物として検出されたものは少なく、多くは、遺構検出面上に堆積する包含層中に含まれているものが殆どである。又遺構の概要の項でも述べた様に、遺構検出面に堆積する包含層の堆積状況も現況ではあまり明確であるとは言えず、包含層出土遺物の層位関係からの区別も明確ではない。

上記のような条件を考慮し、ここでは、出土遺物を便宜上、近世に属するもの、中世に属するもの、古墳時代に属するもの、弥生時代に属するものの4時期に大きく区分し、それぞれの時期のものについて、遺構に伴うもの及び遺構に伴わず遊離した形で出土したものに細分し、その概要を述べるにとどめたい。

A) 近世の遺物

岡ノ谷遺跡で出土した近世遺物には、土師器、無釉陶器、施釉陶器、染付磁器等がある。

a) 遺構内出土遺物 (第24・25・26図)

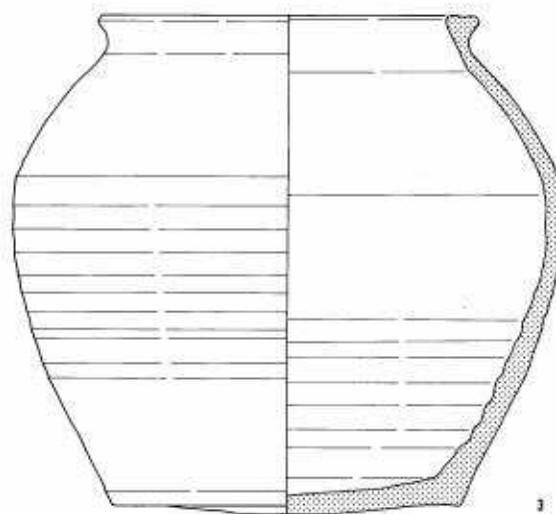
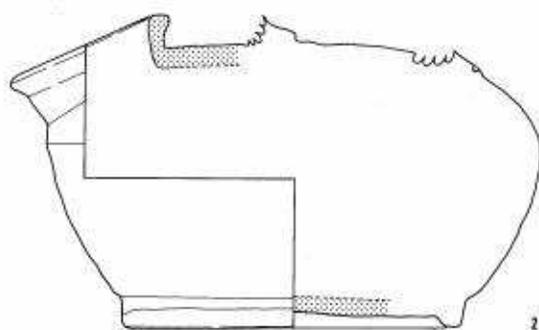
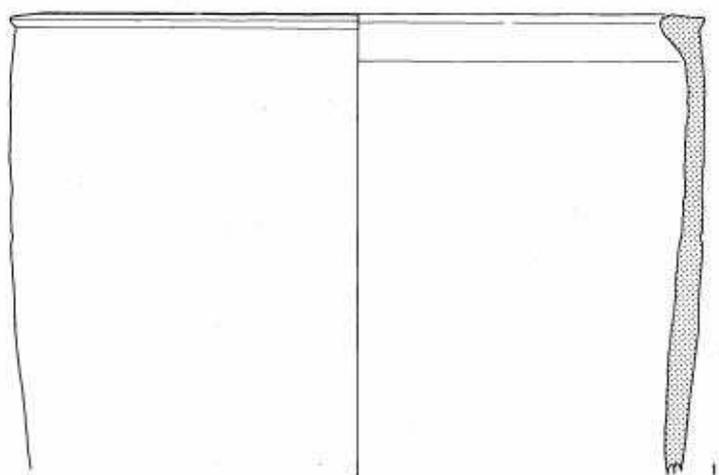
用水池SK01出土遺物

SK01からは、施釉陶器の甕、平瓶が出土している。

1は施釉陶器の甕である。体部は直立し、口縁部は水平に成形する。成形技法は、ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部を強くヨコナデする。外面には鉄釉が、内面には灰釉が施されている。近世後半の丹波系の製品と考えられる。2は、同じく施釉陶器の平瓶形陶器である。幅広で削り出しの浅い高台をもつ。体部は内彎気味に立ち上がり、体部中位で大きく屈曲する。注口部は貼付られており、体部上面には把手の痕跡が残る。また、体部上面中央には同心円状に沈線が6条施されている。内面及び底部外面以外は全面に灰釉が施されており、暗黄褐色に発色する。体部上面には胎土目跡が3箇所認められる。釉調及び胎土の特徴から、近世後半の瀬戸美濃系の製品と^{文献1}考えられる。

円形配石土壌SX03出土遺物

SX03からは染付磁器の水瓶が1点出土している(4)。削り出しの浅い高台をもち、体部

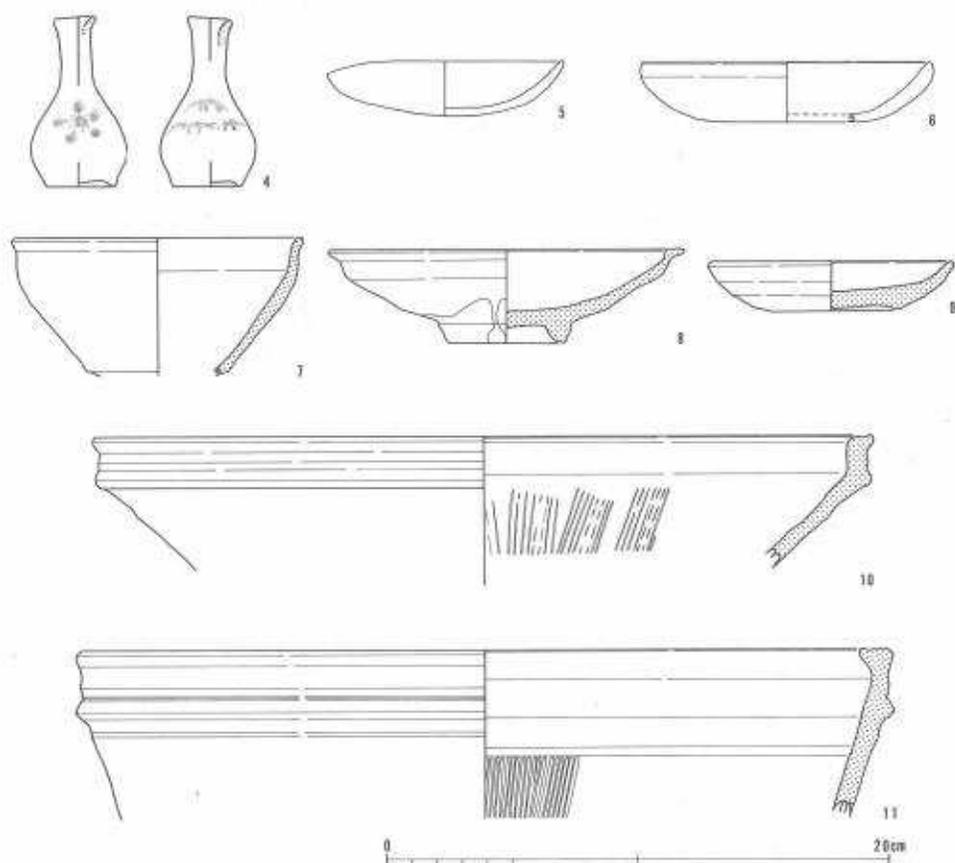


第24図 遺構出土土器(1)

は内彎して立ち上がる。頸部は直立し口縁部は外反する。高台登付を除く全面に施釉され、色調はやや青味を帯びる。外面には呉須で梅花文、笹葉文が描かれるが、呉須の発色は不良である。高台登付には砂が付着している。形態及び技法上の特徴から肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。^{文献2}

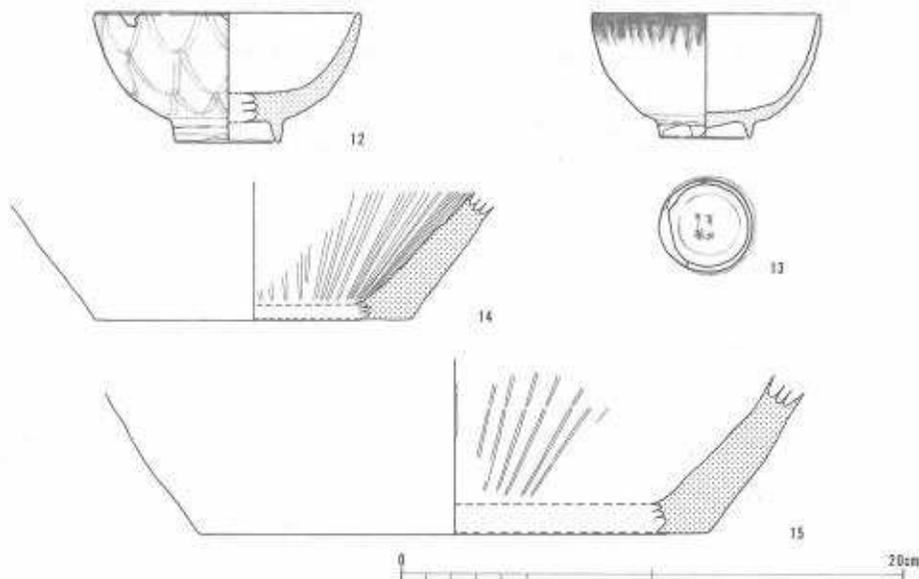
方形配石土壌 SX01出土遺物

SX01からは、土師器皿、無釉陶器壺、施釉陶器碗・皿・播鉢、染付磁器碗が出土している。5、6は土師器皿である。5は薄手に成形され、底部から体部にかけて内彎気味に立ち上がる。成形技法は手づくね成形で、内外面共ヨコナデ調整が施される。6も手づくね成形の皿である。平底で体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共ヨコナデ調整が施される。3は無釉陶器の壺である。平底で体部は大きく内彎する。口縁部上面は水平に成形され、端部は水平方向につまみ出す。調整技法は、ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面を強くヨコナデして再調整する。内外面共化粧土が塗布されている。形態及び調整技法の特徴から近世後半の丹波系の製品と考えられる。^{文献1} 7、8、



第25図 遺構出土土器(2)

9、10はいずれも施釉陶器である。7は天目茶碗である。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸味を帯びる。調整技法はロクロナデ、ロクローケズリの後、口縁部内外面を強くヨコナデして再調整する。化粧土（鬼板）が全面に塗布された後、鉄釉が施されるが、外面の体部下半以下は施釉されない。形態及び調整技法の特徴から近世初頭の瀬戸美濃系の製品と考えられる。9、8は皿である。9は底部は碁笥底で比較的厚手に成形されている。調整技法はロクロナデ、ロクローケズリの後、口縁部内外面にナデ調整を加え、底部外面にはロクローケズリを加える。内外面共灰釉が施釉され黄緑色に発色する。底部内面には釉溜りが、また器面には細かい貫入が認められる。形態及び調整技法の特徴から16世紀前半の瀬戸美濃系の灰釉皿と考えられる。8は幅広で比較的低い高台をもつ皿である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部を水平に折り曲げる。調整技法はロクロナデ、ロクローケズリの後、口縁部内外面にヨコナデ調整を加える。内外面共鉄釉が施されるが、外面の体部下半以下は露胎である。底部内面は蛇ノ目状に釉がカキ取られている。形態及び調整技法の特徴から近世後半の丹波系の製品と考えられる。10は播鉢である。口縁部はほぼ直立し、端部は外方につまみ出す。口縁部外面には凹線が2条、口縁端部上面には凹線が1条それぞれ施される。調整技法はロクロナデ、ロクローケズリ、口縁部内外面のロクロナデの後、口縁部外面の凹線、内面のクシ描きが施される。口縁部内外面、及び内面には鉄釉が施される。器壁は比較的薄く堅緻に焼成され胎土中には砂粒を多く含む。形態及び調整技法の特徴から幕末から明治以降の丹波系の製品と考えられる。13は染付磁器碗である。比較的細く高い高台をもち体部は内彎気味に立ち



第26図 遺構出土土器(3)

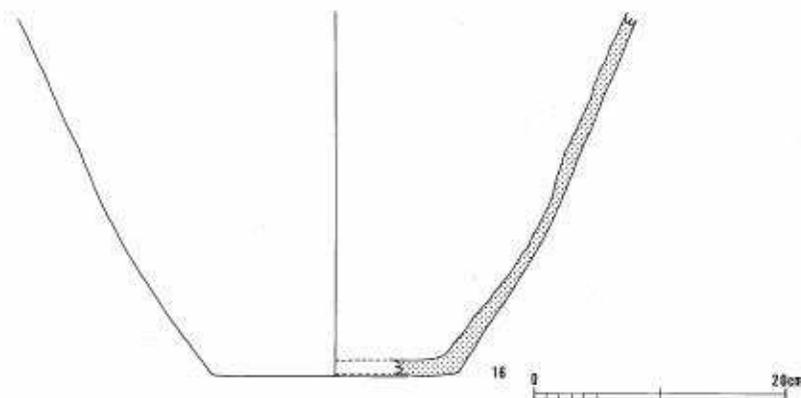
上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共施釉されるが高台畳付の釉はかき取られている。色調はやや青味を帯びる。外面にはやや淡い呉須で三角形の連続文及び界線が3条、底部外面には界線及び非常にくずれた字体で「大明年製」銘が施されている。形態及び調整技法の特徴から18世紀後半から19世紀前半代にかけての肥前系の製品と考えられる。
文献2

用水溝SD01出土遺物

SD01からは施釉陶器播鉢及び染付磁器碗が出土している。11は播鉢である。口縁部は水平に成形され、端部上面には沈線が2条施される。口縁部外面には断面三角形の突帯が貼付られている。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、外面の突帯の貼付、及び内面のクシ描きが施され、口縁部内外面及び、突帯部のヨコナデが施される。施釉は内面のみで鉄釉が施されている。形態及び調整技法の特徴から近代以降の丹波系の製品と考えられる。
文献1
12は染付磁器碗である。全体に厚手に成形され、幅広で比較的高い高台をもつ。体部は若干内嚮気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共施釉されるが、高台畳付の釉はかき取られている。色調はやや灰色を帯びる白色を呈する。外面には呉須で二重網目文、及び界線が3条割筆を用いて施されている。呉須の発色はやや黒ずむ。形態及び調整技法の特徴から18世紀代の、肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。
文献2

土壌SK04出土遺物

SK04からは無釉陶器の播鉢が2点出土している。15は平底で体部は直線的に斜め上方にのびる。内面にはへら描きの播目が施されている。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、へら描きで播目が施される。形態及び調整技法の特徴から、中世後半から近世初頭にかけての丹波系の製品と考えられる。
文献5
14も前者と同じく、平底で、内面にへら描きの播目を施す。調整技法も15とはほぼ同様であるが、播目の間隔がやや密になっていることから、15よ



第27図 遺構出土土器(4)

りやや時期的に下るものと考えられる。

埋甕遺構 S X 02 出土遺物

SX02からは甕が1点出土している(16)。16は平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。調整技法は、粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロナデ、ロクロケズリが加えられるが、底部外面は未調整である。内外面共鉄釉が施釉される。胎土、調整技法の特徴から、近代以降の信楽系の製品と考えられる。^{文献1}

b) 包含層中出土遺物

包含層中より出土した近世遺物には、無釉陶器、施釉陶器、青磁、染付磁器などがある。

無釉陶器

無釉陶器には播鉢がある。17、18、19、20はいずれも内面にクシ描きの播目を施す播鉢である。17は平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部上面及び外面には、それぞれ凹線が2条施される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内面にはクシ描きが施され、口縁部内外面が強くヨコナデされ、片口がつくられる。内面及び口縁外面には化粧土(鬼板)が塗布される。形態及び技法上の特徴から18世紀代の丹波系の製品と考えられる。^{文献1} 18は播鉢の底部である。平底で体部は直線的に外上方へ立ち上がる。調整技法は17と同様であるが、底部外面は未調整で、化粧土は塗布されていない。また底部内面にも同心円状の播目が施されている。18世紀後半代の丹波系の製品と考えられる。^{文献1} 20は口縁端部を上方につまみ上げる播鉢である。調整技法は17と同様である。18世紀代の丹波系の製品と考えられる。^{文献1} 19は平底で、体部はやや外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は若干肥厚する。調整技法は17とほぼ同一であるが、底部内面には同心円状に播目を施した後、横方向にさらに播目が加えられる。また底部外面にはケズリが加えられている。播目の単位は6条1単位である。播目の間隔が17に比べて疎である事から、丹波系の17よりはやや先行するタイプのものと考えられる。^{文献1}

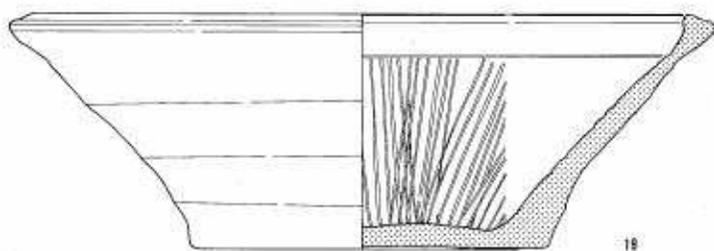
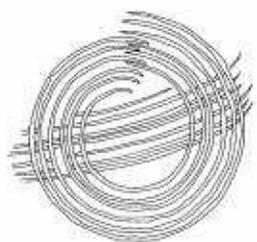
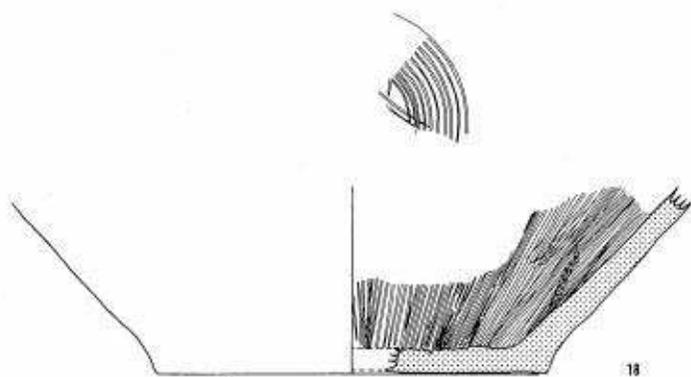
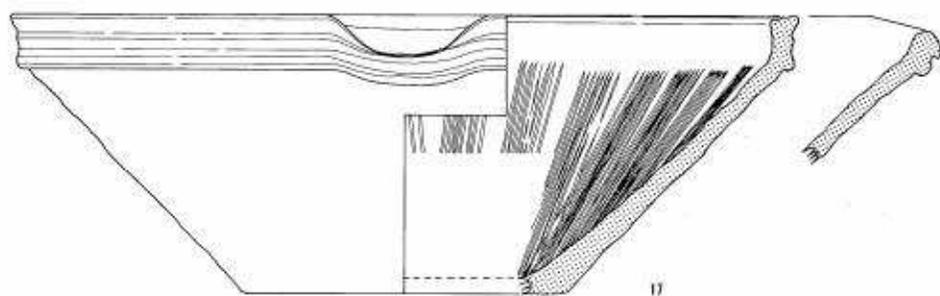
施釉陶器

施釉陶器には皿、碗、仏供碗、塀、蓋、播鉢、甕がある。

皿

皿には無高台のもの(21、22)と高台付のもの(23)がある。21は平底で体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯び、口縁部内面には円形の浮文が貼付される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面のナデ及び、浮文の貼付が行われる。内面には灰釉が施されるが、外面は露胎である。22も21と同様の形態、調整技法でつくられているが、内面にクシ描き施文がなされている。内面には白濁釉が施され、灰色を帯びた白濁色に発色する。外面の口縁部以下は露胎である。また、底部内面には胎土目跡が認められる。体部外面に煤が付着している事から恐らく灯明皿として使用されたものと

岡ノ谷遺跡

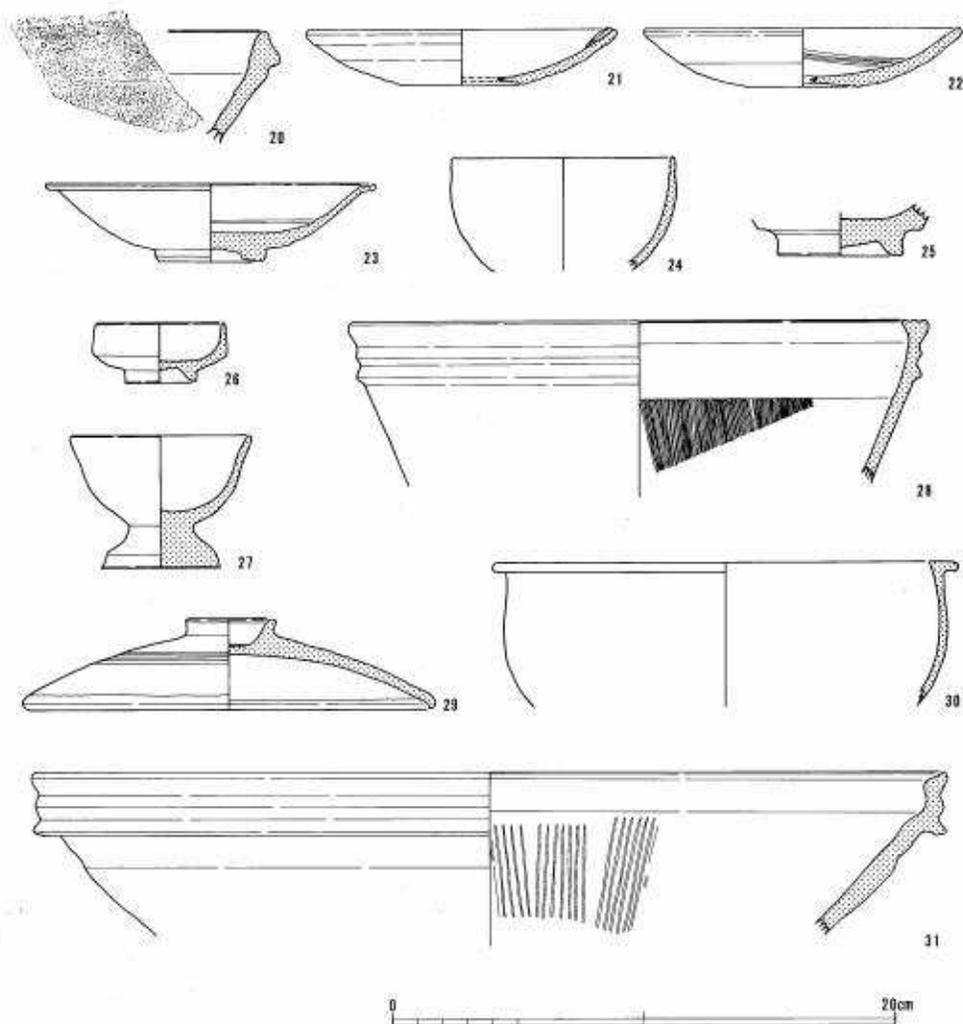


第28図 包含層出土土器(1)

考えられる。23は比較的幅広で削り出しの浅い高台をもち体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反し、口縁部内面は1条の沈線が認められる。また内面の体部と底部の界には低い段をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面のナデ、口縁部内面の沈線が施される。内外面共藁灰釉が施され、白濁色に発色するが、高台畳付以下は露胎で、高台裏は縮緬状を呈する。また、底部内面には砂目跡が認められる。形態及び調整技法の特徴から17世紀後半から18世紀前半の唐津系の製品と考えられる。^{文献1,2}

椀

椀は2点出土している。(24、25)。24は体部は内彎し、口縁部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面をナデ調整する。内外面共施釉され、色調は灰白色を呈する。25は天目茶椀の底部である。幅広で削り出しの浅い高台をもつ。調



第29図 包含層出土土器(2)

調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内面にナデ調整を加える。色調は暗茶褐色を呈する。形態及び調整技法の特徴から、近世の瀬戸美濃系の製品と考えられる。^{文獻6}

仏供椀

仏供椀は2点出土している(26、27)。26は体部が直立する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面共ロクロナデ調整が加えられる。内外面共灰釉が施釉されるが、底部外面は露胎である。色調は淡灰色を呈する。27は脚をもつタイプの仏具椀である。平底で体部は内彎気味に立ち上がり、体部中位で屈曲し、口縁部はやや外反する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面のロクロナデ調整を施すが、底部外面は未調整で糸切跡が残る。内外面共施釉されるが、外面の脚部以下は露胎である。色調は灰色を帯びる白濁色を呈する。

蓋

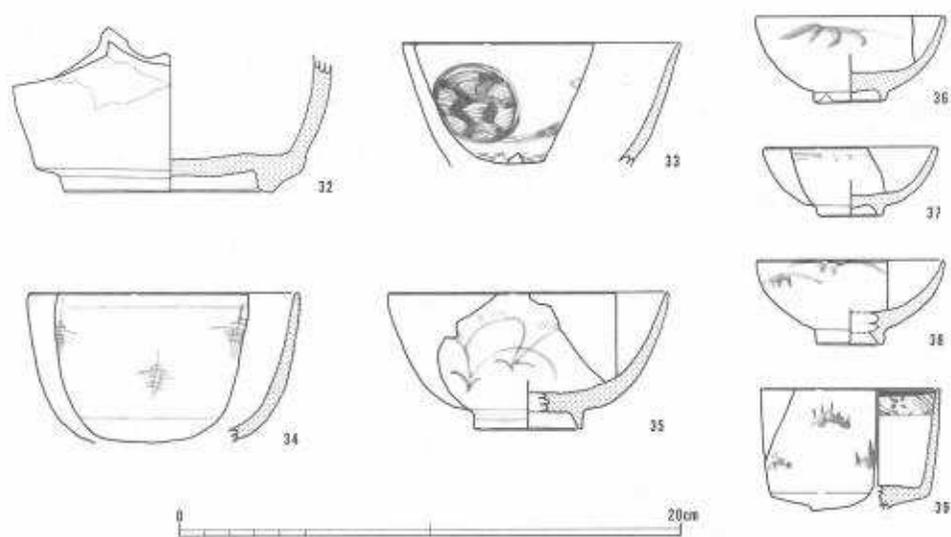
蓋は1点出土している(29)。口縁端部を下方につまみ出し、体部外面には凹線が4条施される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面ともロクロナデ調整を施し、凹線を施文する。内外面とも灰釉が施釉されるが、口縁部上端はかき取られている。色調は淡黄緑色を呈する。

塀

塀は1点出土している(30)。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は水平に折り曲げる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部を強くヨコナデ調整する。内外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は暗黄緑色を呈し、内外面共灰被りが認められる。形態及び調整技法の特徴から19世紀前半の西播系の製品と考えられる。^{文獻7}

播鉢

播鉢は2点出土している(28、31)。28は口縁上面に凹線が2条、外面に2条それぞれ施される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、内面に10条1単位の播目がクシ描きされる。さらに口縁部内外面に強いナデが施され凹部が形成される。内外面共鉄釉が施され、色調は暗茶褐色を呈する。形態及び調整技法の特徴から近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文獻1}31は口縁部が内傾して上下に拡張する。口縁部上端は上方につまみ上げ、下端は水平方向につまみ出す。口縁部外面には凹線が2条、内面には凹部が形成されている。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、口縁部外面の凹線、内面のクシ描きが施される。さらに口縁部内外面には強いナデ調整が加えられる。口縁部外面及び内面全体に鉄釉が施釉される。比較的器壁は薄く堅緻に焼成され、胎土中には砂粒を多く含む。形態及び調整技法の特徴から、19世紀前半以降の丹波系の製品と考えられる。^{文獻1}



第30図 包含層出土土器(3)

青磁

青磁は体部外面に浮彫りで施文する壺が1点出土している(32)。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後型押しによる施文が行われる。施釉は外面のみで、暗黄緑色に発色する。高台壘付の釉はかき取られている。形態及び調整技法の特徴から19世紀前半以降の三田系の製品と考えられる。

染付磁器

染付磁器には碗と猪口がある。

碗

碗は6点出土している(33、38、34、35、36、37)。35は比較的厚手に成形され、体部は直線的に外上方へひろく。内外面とも施釉され、色調は強い青味を帯びる。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギされる。外面には呉須で草花文及び界線が3条描かれる。形態及び調整技法の特徴から近世後半の肥前系の製品と考えられる。^{文様1}33は体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。外面にはやや発色の悪い呉須で丸に青海波文等が描かれる。34は体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。内外面とも施釉され色調はやや青味を帯びる。外面には呉須で、上から界線、「寿」字文、界線が描かれる。形態及び調整技法の特徴から、18世紀代の肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。^{文様2}36、37、38は小碗である。36は全体的にやや厚手に成形され、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内外面共施釉され、色調はやや青味を帯びる。底部内面には灰被りが認められる。外面にはやや発色の悪い呉須で笹葉文が描かれる。形態及び調整技法の特徴から18世紀代の肥前系染付磁器のくらわんか手に属する

岡ノ谷遺跡

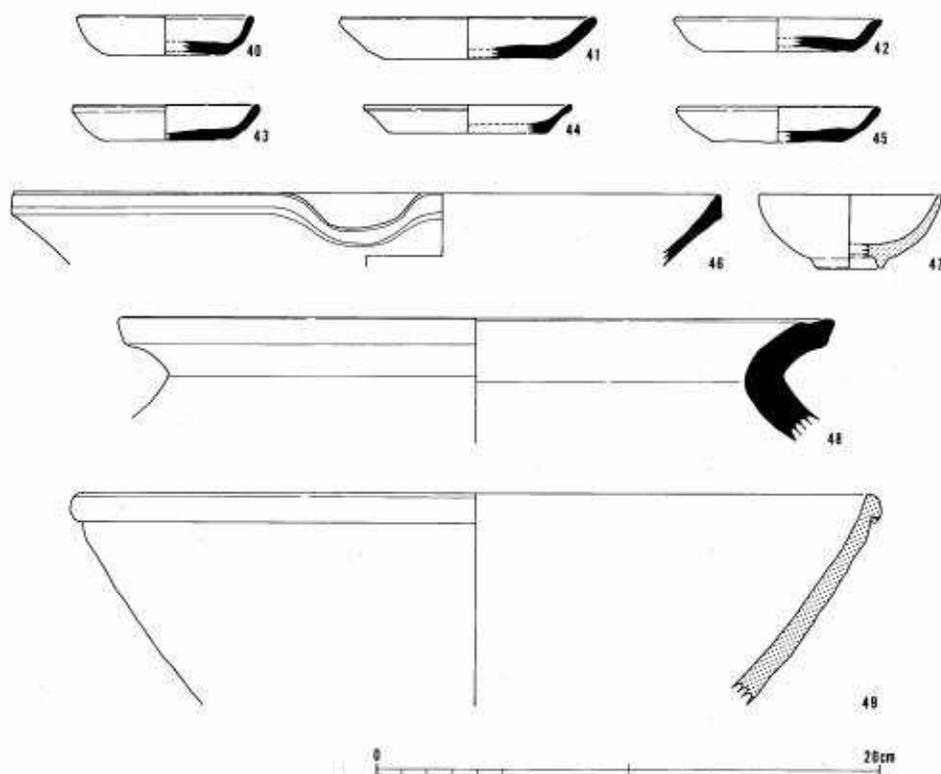
ものと考えられる。^{文献2}37は比較的厚手に成形される。内外面共施釉され色調はやや灰色を帯びる。高台疊付には砂が若干付着する。形態及び調整技法の特徴から18世紀代の肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。^{文献2}38は比較的厚手に成形され、高台部は幅広で比較的浅く削り出される。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。内外面共施釉され色調はやや青味を帯びる。底部内面には灰被りが認められ、また高台疊付には砂が若干付着する。外面にはやや淡い発色の呉須で草花文が描かれる。形態及び調整技法の特徴から、18世紀代の肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。^{文献2}

猪口

猪口は1点出土している(39)。比較的厚手に成形され、体部は直立し、口縁端部は丸味を帯びる。外面には呉須で不明文及び界線が1条、内面は斜格子文及び界線が描かれる。形態及び調整技法の特徴から19世紀前半代の肥前系の製品と考えられる。^{文献2}

B) 中世の遺物

岡ノ谷遺跡で出土した中世遺物には土師器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、白磁、青白磁、青磁がある。



第31図 遺構出土土器(5)

a) 遺構内出土遺物

掘立柱建物 2 (SB02) 出土遺物

SB02を構成する柱穴内からは須恵器皿が2点出土している(40、41)。40は平底で体部はやや内彎する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部、体部内外面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが加えられる。底部外面は未調整で糸切痕が残る。41は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部、体部内外面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが加えられる。底部外面にも若干ヨコナデ調整を施し糸切痕を消す。口縁端部は灰被りを見せ、重ね焼の痕跡をとどめる。

掘立柱建物 3 (SB03) 出土遺物

SB03を構成する柱穴内からは須恵器皿(42、44、43)・片口鉢(46)・甕(48)、及び無釉陶器の鉢(49)が出土している。42、44、43は須恵器皿である。43は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部・体部内外面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが施される。底部の切り離し技法は糸切りである。42は底部は若干あげ底風に成形し、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが施される。外面の体部から底部にかけては未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。44は平底で、口縁部はやや外反する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが施される。外面の体部下半から底部にかけては未調整で、底部の切り離し技法は糸切である。46は片口鉢である。口縁端部は上方につまみ上げ、また口縁の一部を外方にひねり片口を形成する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面を強くヨコナデする。口縁部外面は灰被りで黒く変色し、重ね焼の痕跡をとどめる。49は無釉陶器の鉢である。口縁端部を外方に折り曲げ、若干肥厚させる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁端部を外方に折り曲げ、口縁部内外面を強くヨコナデする。胎土中には砂粒を多く含む。形態及び調整技法の特徴から、丹波系の製品と考えられる。^{文献5}

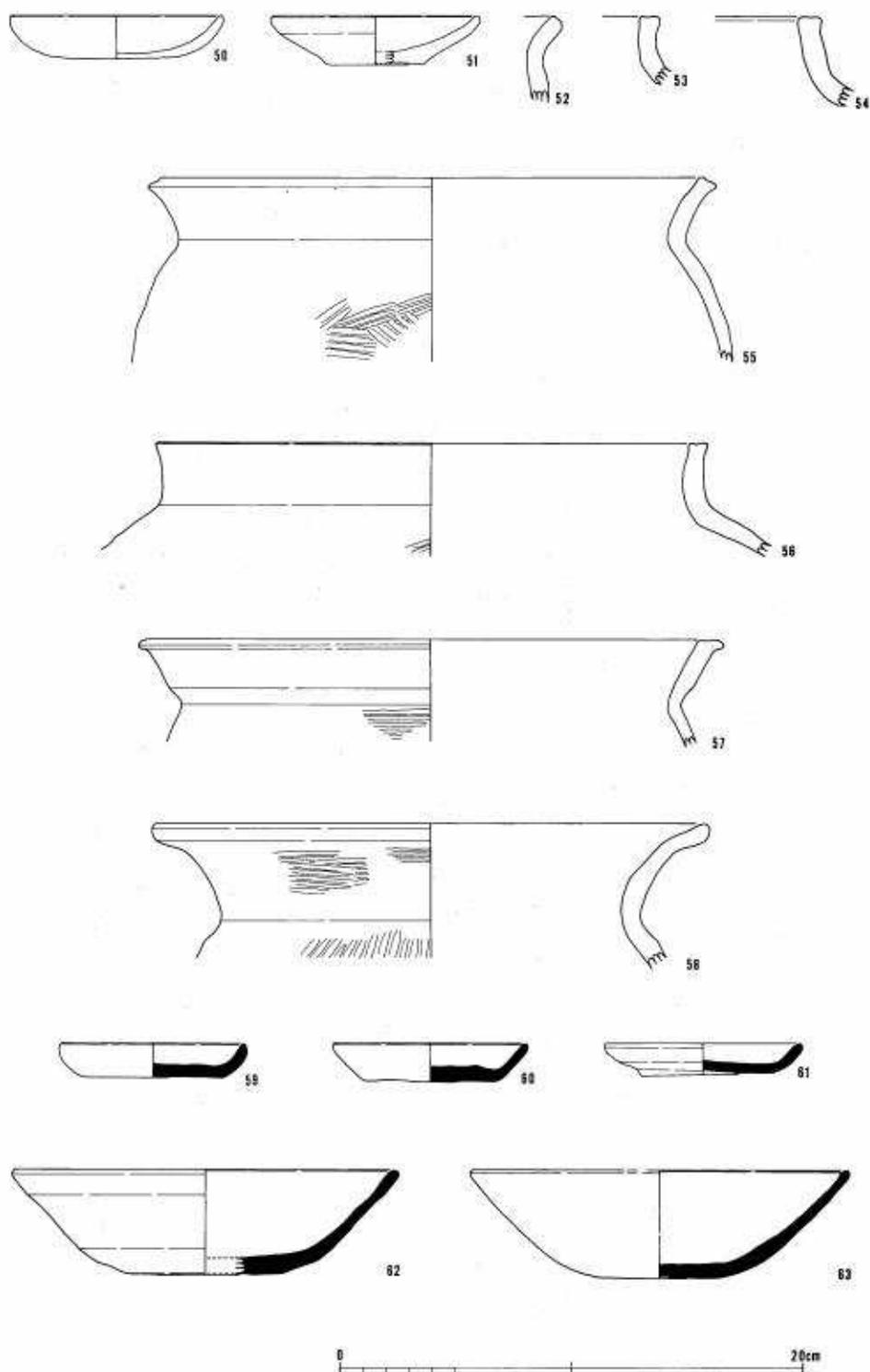
掘立柱建物 4 (SB04) 出土遺物

SB04からは須恵器皿(45)と白磁碗(47)が出土している。45は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部、体部内外面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが施される。底部外面は未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。口縁端部は灰被りを受けやや黒ずみ、重ね焼の痕跡をとどめる。

b) 包含層中出土遺物

包含層中より出土した遺物には、土師器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、白磁、青白磁、青磁等がある。

岡ノ谷遺跡



第32図 包含層出土土器(4)

土師器

土師器には、皿、埴、甕がある。

皿

皿は2点出土している(50、51)。50はやや厚手に成形され、口縁部は尖り気味に収まる。調整技法は手づくね成形で、内外面共ヨコナデ調整される。51は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、体部内面、口縁部内外面にナデ調整が加えられる。底部外面は未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。

埴

埴は6点出土している(52、53、54、55、56、57)。55は口縁部は外反し、口縁端部は斜め方向に切る。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面に不定方向のタタキ調整を加える。さらに体部内面、口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。体部外面は未調整で叩目が残る。52は口縁部は外反し、口縁端部は斜め方向に切る。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキ調整を加える。さらに外面にケズリを加えた後、内外面にヨコナデ調整を施す。口縁部外面には煤が付着する。56は頸部が直立し、口縁部上面は水平に成形される。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキ調整を加えさらに口縁部内外面のヨコナデ調整を加える。54、53共、形態、調整技法は56とほぼ同一である。57は口縁部が外反し、口縁端部上面を水平に成形し、かつ口縁端部を水平方向につまみ出す。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキ調整を加え、さらに口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。体部外面は未調整で、横方向の平行叩目が残る。口縁部外面には煤が付着する。姫路市本町遺跡出土の資料に類似のものが認められ、それとの比較から13世紀前半の時期が考えられる。

甕

甕形土器は1点出土している(58)。58は口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げる。頸部には横方向の叩目が、体部には縦方向の叩目が認められる。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面に叩き調整を加える。さらに内面の体部から口縁部にかけてはヨコナデ調整を加える。外面の体部から口縁部にかけては未調整で叩目が残る。

須恵器

須恵器には、皿、椀、鉢、甕がある。

皿

皿は3点出土している(59、60、61)。59は平底で体部は内彎気味に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが施される。外面の体部から底部にかけては未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。60は平底で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内面の底部と体部の界

に凹部をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、体部内外面のロクロナデ、底部外面のヨコナデが施される。底部外面は未調整で底部の切り離し技法は糸切りである。61は平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデが加えられる。外面の体部から底部にかけては未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。

碗

碗は2点出土している(63、62)。63は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデを加える。さらに外面の体部から底部にかけてヨコナデ調整を加える。62は平底で、体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部内面のロクロナデ、底部内面のヨコナデ調整が施される。外面の体部から底部にかけては未調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。口縁部内外面は灰被りで暗灰色に変色し、重ね焼の痕跡を留める。

鉢

鉢は2点出土している(64、65)。64は口縁端部を上方につまみ上げる。ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面に強いヨコナデを加える。口縁部外面は灰被りでやや黒ずみ、重ね焼の痕跡をとどめる。65は口縁端部を上方につまみ上げる。ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面を強くヨコナデする。

甕

甕は1点出土している(66)。66は口縁部は外反し、端部は玉縁状に肥厚する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面に強いナデ調整を加える。

無釉陶器

無釉陶器には壺と播鉢がある。

壺

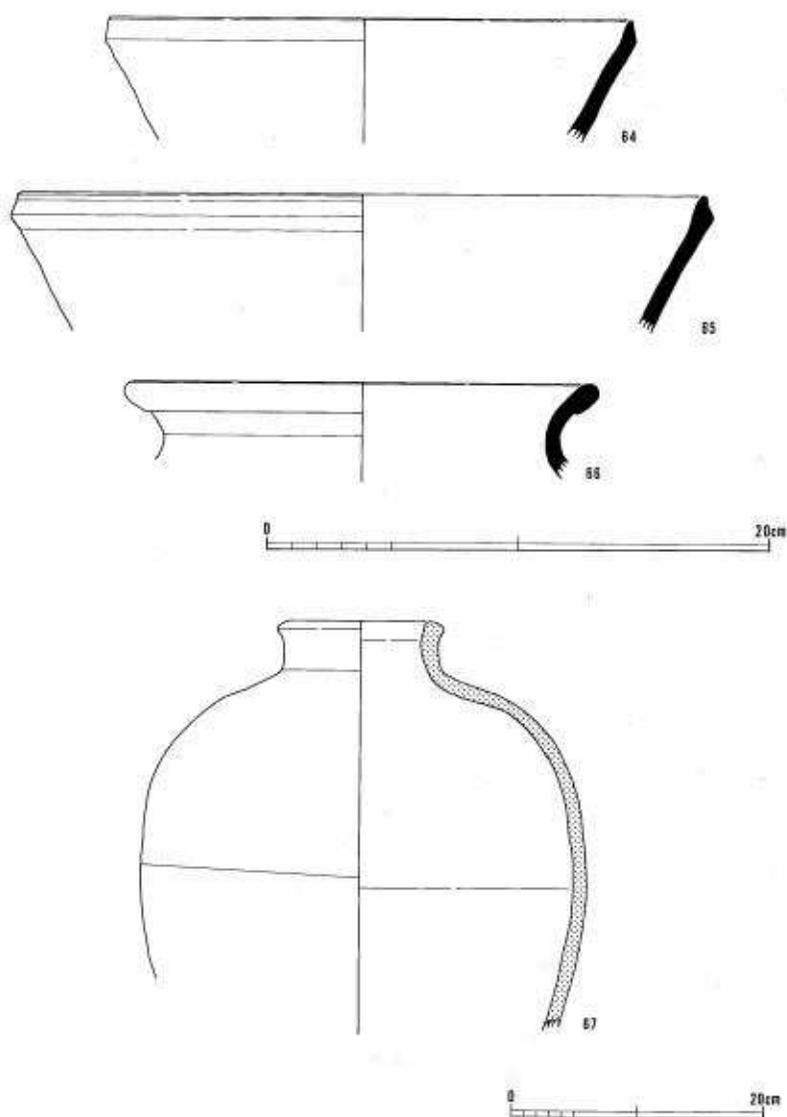
壺は1点出土している(67)。67は体部は内彎し、頸部は直立する。口縁部はやや外反し、端部は丸味をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面、体部外面のロクロナデ、体部内面のヨコナデが施される。外面には化粧土が塗布され、光沢をもつ。体部外面には自然釉が掛り、器面には長石等の吹き出しが見られる。形態及び調整技法の特徴から丹波系の製品と考えられる。^{文獻5}

播鉢

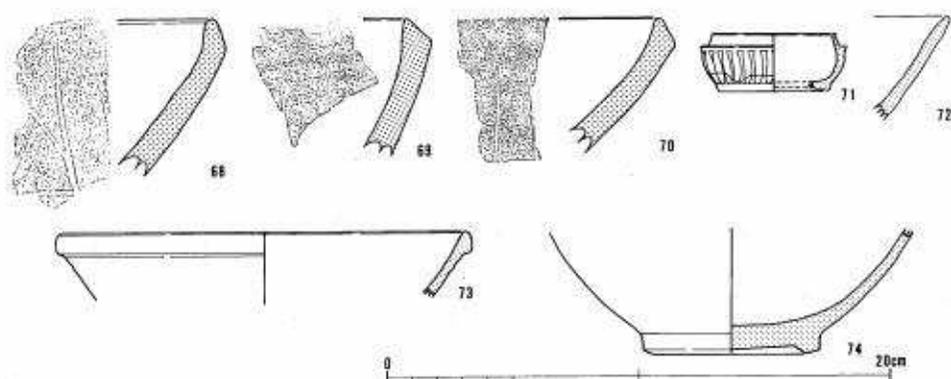
播鉢は3点出土している(68、69、70)。68は口縁部が内傾し、端部は上方につまみ上げる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内面にヘラ描きの播目を施し、口縁部内外面のヨコナデ調整を施す。体部内面にはヘラ描きの窯印(「×」印)がつけられる。形態

及び調整技法の特徴から、中世後半から近世初頭にかけての丹波系の製品と考えられる。^{文献1.5}
 69は口縁部を斜め方向に切って、さらに斜め上方につまみ出す。調整技法はロクロナデ、
 ロクロケズリの後、内面にヘラ描きの播目を施し、口縁部内外面のヨコナデ調整を行う。
 形態及び調整技法の特徴から、中世後半から近世初頭にかけての丹波系の製品と考えられ
^{文献1.5}
 る。70は口縁端部を上方につまみ上げる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内
 面にヘラ描きの播目を施し、口縁部内外面を強くヨコナデする。形態及び調整技法の特徴
 から中世後半から近世初頭の丹波系の製品と考えられる。^{文献1.5}

白磁



第33図 包含層出土土器(5)



第34図 包含層出土土器(6)

白磁は細片も含めると数点出土しているが図化しえたものは碗が2点のみである(74、73)。74は幅広で器肉が厚く、削り出しの浅い高台をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、内外面とも施釉する。色調は灰色を帯びる白色を呈する。外面の高台部以下は露胎である。形態及び調整技法の特徴から、横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられる^{文献9}。73は口縁部が玉縁状に肥厚する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、内外面共施釉する。色調は灰色を帯びる白色を呈する。体部外面には釉垂れ、気泡が認められる。形態及び調整技法の特徴から横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられる^{文献9}。

青白磁

青白磁には合子がある(71)。平底で、体部は内彎し口縁部は内傾する。口縁端部は尖り気味に収まる。体部外面には菊花文が片切彫される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後、体部外面に菊花文を片切彫する。内外面共施釉され、淡黄緑色に発色する。口縁部外面及び底部外面は露胎である。景德镇窯系の青白磁合子と考えられる。

青磁

青磁も細片を含めると数点出土しているが、図化しえたのは碗が1点である(72)。口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後施釉され、色調は暗黄緑色を呈する。器面には細かい貫入が認められる。口縁部のみの残存で、高台部の形態が不明である為断定は避けたいが、形態、調整技法、色調などの点から越州窯系の青磁である可能性が強い。

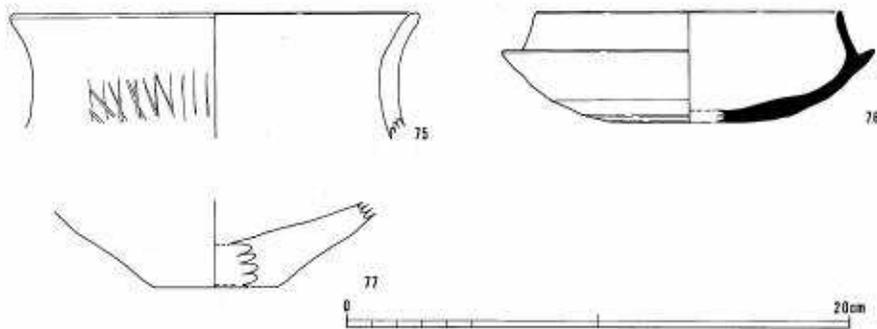
C) 古墳時代の遺物

本遺跡で出土した古墳時代の遺物には、SB01出土の土師器、須恵器及び包含層中出土の須恵器がある。

a) 遺構内出土遺物

竪穴住居址SB01出土遺物

SB01では、炉状施設と思われる焼土塊の堆積部分周辺から、土師器、須恵器片が出土している。75・77は土師器壺である。75は口縁部は外反する。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキ調整が施される。さらに内外面のヨコナデの後、口縁部内外面に粗いハケ調整が加えられる。77は調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキ調整を加える。さらに外面にケズリを施した後、内・外面にヨコナデ調整を加える。外面には煤が付着する。76は須恵器坏である。丸底で、受部はやや内傾する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面及び外面の体部上半にロクロナデ調整を施す。外面の体部下半以下は未調整でヘラ削り痕が認められる。



第35図 遺構出土土器(6)

b) 包含層中出土遺物

本遺跡で包含層中より出土した古墳時代の遺物には須恵器坏がある。(78、79、80)。78は受部はやや内傾する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面共ロクロナデ調整を施す。79は短く直立する受部をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面共ロクロナデ調整を施す。80は短くやや内傾する受部をもつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面共ロクロナデ調整を施す。

D) 弥生時代の遺物

本遺跡では直接遺構には伴っていないが、弥生土器も若干検出されている。今回の調査で出土した弥生土器には、高坏、器台、壺、甕がある。

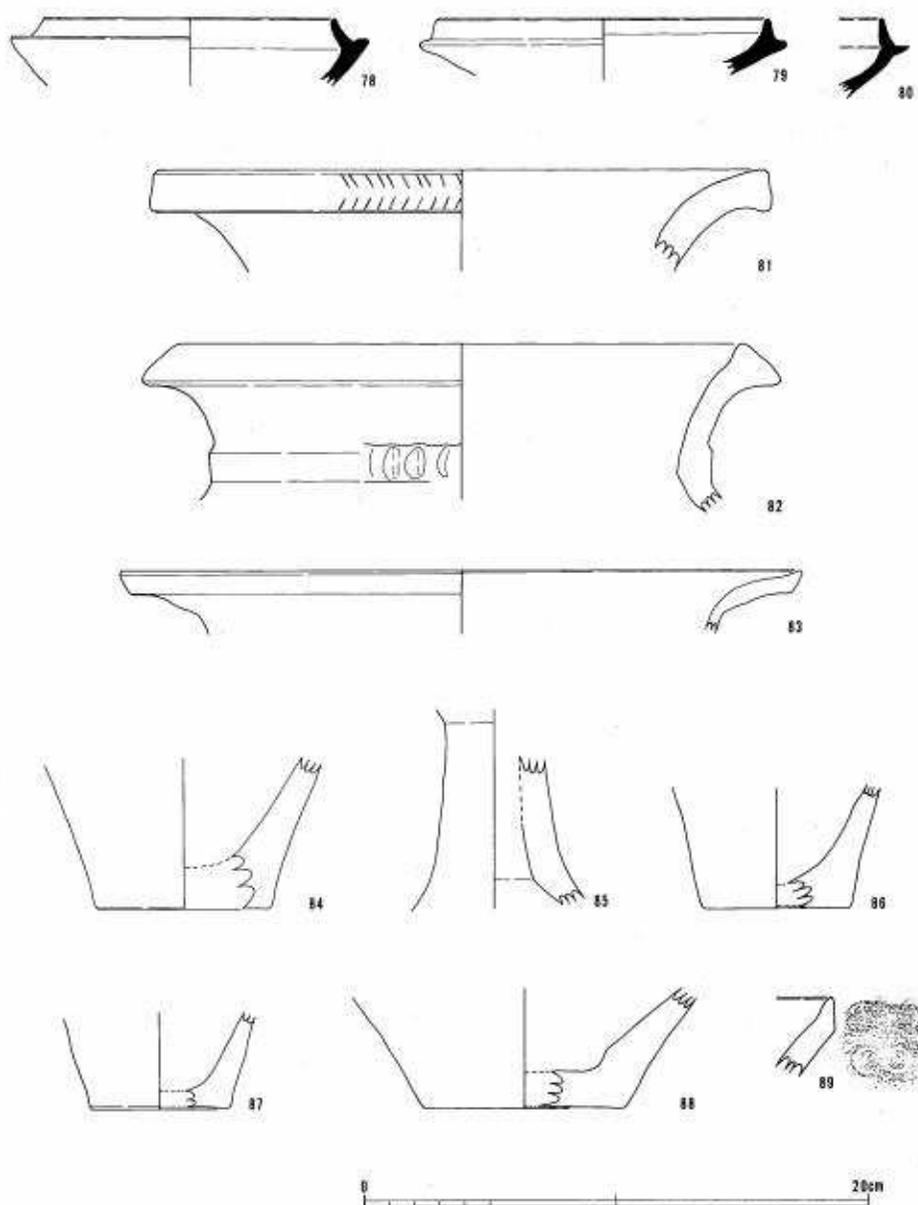
高坏

高坏は1点出土している(85)。85は高杯の脚柱部であるが、成形の後、内面にケズリを加え、内外面にヨコナデ調整を施す。

器台

器台は1点出土している(89)。89は口縁部外面に渦巻状文をスタンプする。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にヨコナデ調整を加えた後、口縁部外面に渦巻状文をスタンプする。三田市奈カリ与遺跡、文献10 尼崎市田能遺跡、文献11 神戸市篠原遺跡出土遺物等に類例が文献12

岡ノ谷遺跡



第36図 包含層出土土器(7)

認められる。

壺

壺は4点出土している(81、82、83、88)。81は口縁部は外反し、下方に若干肥厚させる。端部にはヘラ描きの綾杉文が施される。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面のヨコナデ調整が加えられた後、口縁部外面のヘラ描きが施される。82は口縁部は外反し、端部は斜め上下方につまみ出す。頸部外面にはヘラ状工具で刻み目を入れた貼付突帯をもつ。

調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、さらに内外面にヨコナデ調整を加え、突帯の貼付、貼付部のヨコナデを行い、最後に突帯部にヘラ描きを施す。弥生時代中期、3ないし4様式相当のものと考えられる。83は口縁部が外反し、口縁端部は上方につまみ上げる。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にヨコナデ調整を加える。外面には指頭圧痕が認められる。88は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。体部の開き具合から壺と思われる。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、外面にケズリを加え、内外面共ヨコナデ調整を施す。

甕

84、86、87は底部であるが、底部と体部の角度から甕と思われる。84は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。粘土紐巻き上げ成形の後、外面にはタテ方向のケズリが施される。86は平底で、体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、外面にケズリが加えられ、内外面にヨコナデ調整が施される。87は平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法は粘土巻き上げ成形の後、外面にケズリを施し、内外面共ヨコナデ調整を加える。

引用・参考文献

1. 岡田章一・長谷川真 1985 「特別史跡 姫路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告」 兵庫県立歴史博物館
2. 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
3. 橋崎彰一他 1976 「美濃の古陶」 京都光琳出版
4. 今井静夫・奥磯栄盛・桃井勝 1976 「美濃の古窯と出土品」 『世界陶磁全集』 5 小学館
5. 大槻伸 1977 「丹波」 『世界陶磁全集』 3 小学館
6. 佐々木達夫他 1978 「文京区動坂遺跡」 東京 動坂貝塚調査会
7. 渡辺昇・岡田章一・森岡みゆき 1986 「明石城II」 (兵庫県文化財調査報告書 第32冊) 兵庫県教育委員会
8. 山本博利・秋枝芳 1984 「本町遺跡調査報告書」 姫路市教育委員会
9. 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」 『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館
10. 井守徳男他 1983 「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II」 (兵庫県文化財調査報告書 第16冊) 兵庫県教育委員会
11. 岡田務・前田保夫・村川行弘他 1982 「田能遺跡発掘調査報告書」 尼崎市教育委員会
12. 小林行雄 1929 「摂津国神戸市篠原遺跡に就て」 『史前学雑誌』 第1巻4・5号

4. 小結

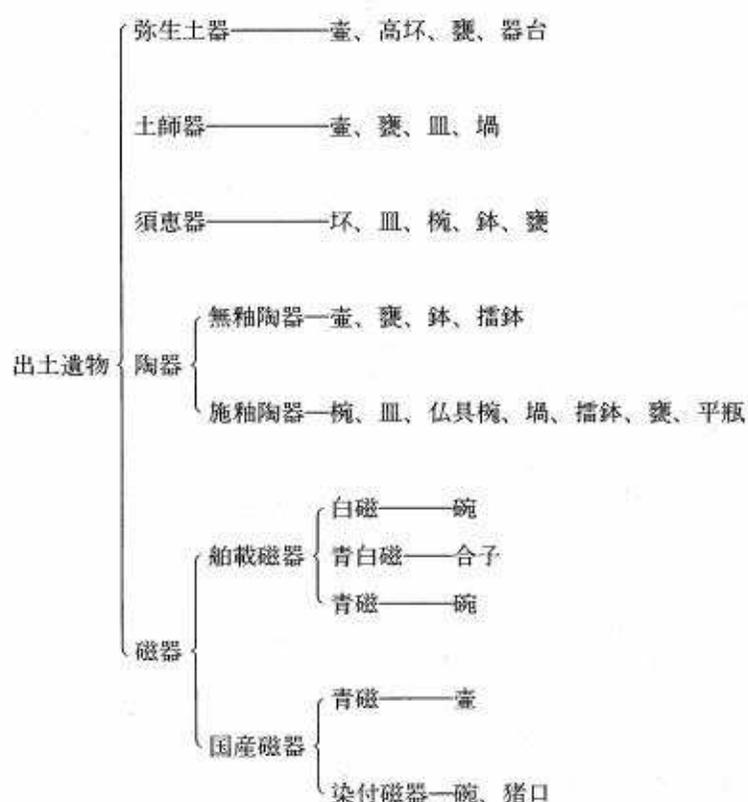
A) 遺構と遺物の検討

a) 遺物

岡ノ谷遺跡で検出された遺物は弥生時代から近世迄のものを含み、種類も弥生土器、土師器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、舶載磁器、国産磁器など多岐にわたっている。

ここでは、これらの遺物がある程度まとめて、その構成及び所属時期について考えて見たい。

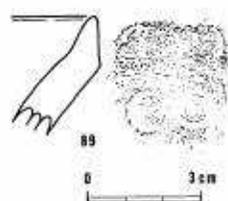
先づ今回出土した土器は、分類すると下表のようになる。



次に、各種別に分類した、それぞれの遺物について、その所属時期、産地について考えてみたい。

弥生土器

弥生土器は全てが包含層中からの出土であり遺構に伴うものはない。時期的に大まかに分類すると弥生時代中期に属するもの(82、81)と、弥生時代後期に属するもの(85、89、83)及び底部のみの残存で、明確な時期を設定しえないもの(84、87、86、88)とに分類



第37図 出土土器拓影

出来る。これらの中で89は器台の口縁部と考えられるが、外面に渦巻状文をスタンプしている。このタイプの土器は県下では類例が少なく、僅かに田能遺跡^{文献1}、奈カリ与遺跡^{文献2}等に報告例が認められるのみである。元来、このタイプの土器は中国山地から日本海側を中心に広く分布するもので、このタイプの土器の流通を考える上で貴重な資料と言えよう。

土師器

土師器には器種別に分類すると壺、甕、皿、塀がある。これらの土師器は形態、調整技法、胎土等から見て、少なくとも古墳時代に属するものと、中世以降の時期に属するものとに大別出来る。以下、この点を踏まえた上で器種別に、所属時期について、若干の検討を加えてみたい。

壺

壺は2点出土している。77は底部のみの残存である為、詳細な所属時期は決定出来ないが、形態、調整技法、焼成等の点から見て、弥生時代末から古墳時代前半にその所属時期を求める事が出来る。75は、外面に粗いハケ目調整を施す点から、古墳時代中期から後期頃のものと考えられる。

皿

皿は全部で4点出土している。成形技法の違いから手づくね成形のもの(5、50、6)とロクロ成形のもの(51)とに分類出来る。

手づくね成形の土師器皿の内、5、6はSK08から出土しており、後に検討する施釉陶器、染付磁器との同伴関係から下限が18世紀後半から19世紀前半に求められる近世遺物である。包含層出土の50、51については北摂地域の土師器皿の分類、編年がなされていない現状では、単独で絶対年代を与える事は現在の所不可能である。

塀・甕

塀及び甕形土器は全部で7点出土している。甕及び塀は、口縁部の形態及び調整技法の特徴から、口縁部が外反するもの(HN-A類)と口縁部が直立するもの(HN-B類)とに分類出来る。HN-A類は、口縁端部の調整技法の差異から端部を丸く収めるもの(HN-A-1類(58))、端部を斜め方向に切るもの(HN-A-2類(55))、端部を水平方向につまみ出すもの(HN-A-3類(57))とに細分出来る。

土師器の甕もしくは塀と考えられるものについては県内各地で出土し、その形態差も大きく、編年研究、集成といった形での発表は行われていないものの、報告書等で紹介される例が増加しつつある。

上記の点を考慮して、他遺跡での類例と比較すると、HN-A-2類は丹波河津館址に類例

が見られ12世紀中頃から後半の時期が想定されている。^{文献3}HN-A-1類及びHN-A-3類については、現在の所、報告書の刊行されているものについては類例が見出しえないが、少なくとも口縁部の調整技法から見て、HN-A-3類より若干後出する時期が考えられる。HN-B類については、現在の所、単独で時期設定を行うことは困難である。

須恵器

須恵器も形態及び調整技法から見て、古墳時代に属するものと、中世以降の時期に属するものとに大別される。器種別では、坏、皿、碗、鉢、壺、甕がある。

坏

坏は全部で4点出土している。形態及び調整技法の特徴から76は6世紀前半に、78、79は6世紀中葉から後半の時期に、80は6世紀後半から7世紀前半の時期にそれぞれ比定出来る。^{文献4}

皿

皿は全部で9点出土している(40、41、43、42、44、45、59、60、61)。いずれも平底で底部の切り離し技法は糸切りである。このタイプの須恵器皿は、県下の生産地では東播系のものに類例が認められ、12世紀後半～13世紀前半の時期が与えられている。但しこれらの遺物については焼成、胎土等の点で東播系のもと若干の相違を見せており、本遺跡周辺の産地で生産された可能性が考えられる。ここでは東播系須恵器の編年観に従って、12世紀後半から13世紀前半の時期を考^{文献5,6}えておく。

碗

碗は2点出土している(63、62)。いずれも平底無高台で底部の切り離し技法は糸切りである。碗も皿同様、在地の土器と考えられるが、ここでは東播系須恵器の編年観に従い12世紀後半から13世紀前半の時期を考^{文献5,6}えておく。

鉢

鉢は3点(46、64、65)出土しており、いずれも口縁端部を上方につまみ上げるタイプのものである。

東播系片口鉢の編年観から、12世紀後半から13世紀前半に所^{文献5,6}属時期が求められる。

壺

壺は口縁部が外反し、端部が玉縁状に肥厚するタイプのもので(66)、このタイプは東播系、西播系ともに類例が認められず所^{文献5,6}属時期は明確ではない。

甕

甕は口縁部が外反し、端部を上方につまみ上げるもの(48)で、東播系の製品と考えられ、12世紀後半から13世紀前半の時期が考^{文献5,6}えられる。

無釉陶器

無釉陶器には形態及び調整技法の特徴から中世に属するものと、近世に属するものとに大別される。器種には、壺、鉢、播鉢がある。

壺

壺は2点出土している(67、3)。67は頸部は直立し、口縁部はやや外反し端部は丸味をもつもので、形態、調整技法の特徴、胎土等の点から丹波系の製品と考えられ、丹波焼の編年観から15世紀後半から16世紀前半の時期が考えられる。^{文献7}3は口縁部上面を水平に成形し、端部を水平方向につまみ出すもので、形態、調整技法の特徴、胎土から丹波系の製品と考えられ、丹波焼の編年観から18世紀後半の時期が考えられる。^{前掲文献1}

鉢

鉢は1点出土している(49)。形態、調整技法の特徴、焼成等の点から丹波系の製品と考えられる。時期的には丹波三本峠北窯出土品に同様の片口鉢が認められるが、口縁部の形態が大きく相違しており、少なくとも稲荷山タイプの播鉢よりは口縁部の形態から見ると下るものと考えられる。現在発表されている資料には類例は見出しえず、一応上記の点を考慮して、稲荷山タイプ以降、則ち14世紀前半以降の時期を考慮しておく。

播鉢

播鉢は9点出土している(14、15、17、18、19、20、68、69、70)。形態、調整技法の特徴、胎土、焼成等の点からみて、いずれも丹波系の製品と考えられる。調整技法の点から、内面の播目をへら描するもの(TS-1類(15、14、69、68、70))と内面の播目をクシ描きするもの(TS-2類(7067、7069、7075、7050))とに分類出来る。TS-2類はさらに口縁部の形態の差異から、口縁端部を若干肥厚させるもの(TS-2-a類(19))、口縁端部を上方につまみあげるもの(TS-2-b類(20))、口縁部を上下に拡張し外面に凹線を施すもの(TS-2-c類(17))に細分される。丹波焼の年代観については大槻伸を中心に研究成果が発表されているが、^{文献7}県下の調査に基づいた考古学的編年観は未だ上梓されていない。従って共伴遺物を伴わない上記の遺物について絶対年代を与える事ははなはだ困難である。

ただ、^{前掲文献2}姫路城武家跡の報告書中に若干分類と年代観が示されており、今回はそれに基づいて、ある程度年代を与えておきたい。まず播目をへら描きするTS-1類については、口縁部を上方につまみ上げる点で共通しており、ほぼ16世紀後半代から17世紀前半迄の時期に収まるものと考えられる。TS-2-b類は17世紀中葉から後半、TS-2-a類については18世紀前半、TS-2-c類は18世紀後半から19世紀前半の時期がそれぞれ想定される。^{前掲文献1}

施釉陶器

施釉陶器は最も多量に出土しているが、その大部分は近世に属する国産陶器である。

器種には、皿、椀、仏具椀、蓋、塙、鉢、播鉢、甕がある。

皿

皿は大きく、高台付のもの(23、8)と平底のもの(9、22、21)とに分類される。高台付の皿は内外面共藁灰釉を施釉し、高台畳付以下は露胎とするもので、形態及び調整技法の特徴から17世紀後半から18世紀前半の唐津系の製品と考えられる^{文献9}(8)。平底の皿の内、9は底部を碁笥底風に成形し内外面灰釉を施釉するもので、形態及び調整技法の特徴から16世紀代の瀬戸美濃系の製品と考えられる^{文献10}。22、21は内面のみ白濁釉を施釉し、外面は露胎のもので、形態及び調整技法の特徴から18世紀後半から19世紀前半代の瀬戸美濃系もしくは丹波系の製品と考えられる^{文献11}。
前掲文献1

碗

碗は3点出土しており、天目茶碗(7、25)と丸碗がある。天目茶碗の内、口縁迄残存する7は、形態及び調整技法の特徴から、少なくとも16世紀代に収まる瀬戸美濃系の製品と考えられる。25は底部のみの残存で、胎土から瀬戸美濃系の製品と考えられるが、所属時期については明らかでない。24は内外面共施釉する丸碗であるが、産地、所属時期共明確にはしえない。

仏具碗

仏具碗(26、27)は、近世後半に属するものと考えられるが、産地、所属時期共、現在の所、明確にはしえない。

塀

塀(30)は口縁部を水平に折り曲げるもので、形態、調整技法、色調等の特徴から、19世紀前半の西播系の製品と考えられる^{文献12}。

蓋

蓋(29)は上面に凹線を施し、灰釉を施釉するものであるが、産地、所属時期共明確にはしえない。

播鉢

播鉢は4点出土している(10、11、28、31)。口縁部の形態の差異から、口縁部を水平に成形し、上面に沈線を施すもの(11、28)と、口縁部を外方につまみ出し、上面の沈線は認められないもの(10、31)とに分類される。形態、調整技法、施釉方法からみて、いずれも丹波系のものと考えられるが、時期的には前者は後者に比べてやや後出のもので、前者は近代以降、後者は近世末から近代にかけての時期にそれぞれ所属時期が求められる。

甕

甕は2点出土している(1、16)。1は体部が直立し、口縁部を水平に成形するもので、形態調整技法の特徴、色調等の点から近代以降の丹波系の製品と考えられる。又、16は口縁部を欠失しているが、胎土、焼成、色調等から近世以降の信楽系の製品と考えられる。
前掲文献1

白磁

白磁は碗が3点出土している(47、74、73)。

47については、他類例が乏しく所属時期は不明であるが、共伴する須恵器皿から、12世紀後半から13世紀前半に所属時期が求められる。74、73は形態及び調整技法の特徴から、横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられ、その年代観から11世紀中葉から13世紀前半の時期が与えられる。^{文献13}

青白磁

青白磁合子は体部外面に菊花文を片切彫るもので、形態及び調整技法の特徴から12世紀後半から13世紀前半の時期が与えられる(71)。^{文献14}

青磁

青磁は碗口縁部(72)と壺底部(32)がある。碗は口縁部のみの残存で詳細は不明であるが、色調、焼成、胎土等から越州窯系青磁と判断され、少なくとも10世紀代に遡る可能性がある。32は外面に型押しで文様を浮彫りする壺で、形態調整技法、色調から見て19世紀前半以降の三田系の製品と考えられる。^{前掲文献1}

染付磁器

染付磁器は全体で10点出土しているが、全て近世以降の国産のもので、舶載の青花は含まれていない。器種には、水瓶、碗、猪口がある。

水瓶

水瓶(4)は色調はやや青味を帯び、発色の悪い呉須で施文するもので、形態、調整技法の特徴、色調から18世紀代の肥前系の製品と考えられる。^{文献9}

碗

碗は8点出土しているが、肥前系のものと、肥前系以外の産地が考えられるもの(33)と大きく分類出来る。肥前系のもは、全体的に厚手に成形され、発色の悪い呉須で文様を描くいわゆるくらわんか手に属するもの(12、36、37、34、35)で、18世紀前半から後半の時期が考えられる。底部外面(高台裏)に「大明年製」の銘のある13は、やや薄手に成形されており、銘もくずれている所から、くらわんか手のものより若干、時期が遡る可能性がある。^{文献9}

肥前系以外の製品と考えられる(33)は、現在の所産地は特定出来ないが、肥前系以外の地方窯で磁器生産が開始される時期を考慮すると、少なくとも19世紀前半以降の時期が与えられる。

猪口

猪口(39)は高台部を欠失しているが、形態、調整技法の特徴、文様等から肥前系の製品と考えられ、肥前系磁器の編年観から19世紀前半の時期が与えられる。^{文献9}

遺物のまとめ

以上、各遺物の時期について若干検討してきた。これらを、まとめると、岡ノ谷遺跡出土の遺物は以下の9期にまとめられる。

- I期 弥生中期の土器群で構成される時期である。全て包含層からの出土で、この時期の遺物を伴う遺構は認められない。
- II期 弥生時代後期の土器群で構成される時期である。全て包含層中からの出土で、この遺物を伴う遺構は認められない。
- III期 古墳時代前期の土師器甕で構成される時期である。ただこの時代に属する遺物は極めて乏しい。この時期の遺物を伴う遺構には竪穴住居址SB01がある。
- IV期 土師器壺、須恵器坏で構成される時期で、須恵器坏の年代観から少なくとも6世紀代の時期が考えられる。この時期の遺物を伴う遺構には竪穴住居址SB01がある。
- V期 越州窯系青磁碗で構成される時期である。ただしこの時期に属する遺物はこの青磁碗1点のみである。青磁碗の編年観から、少なくとも9世紀後半から10世紀の時期が考えられる。この時期の遺物を伴う遺構は認められない。
- VI期 土師器鍋、甕、須恵器皿・碗・鉢・甕、白磁碗IV類などで構成される時期である。白磁碗の編年観から11世紀中葉から13世紀前半の幅で時期が設定出来る。この時期の遺物を伴う遺構には、掘立柱建物SB02、03、柵列状遺構SA04がある。
なお、この時期は、土師器甕、埴HN-A-2類、須恵器皿・碗・鉢などの時期差からさらに3小期に区分出来る。
- VI-1期 土師器甕で構成される時期で、少なくとも12世紀中葉以前の時期が想定される。
- VI-2期 土師器埴HN-A-2類で構成される時期である。12世紀中葉から後半の時期が想定される。
- VI-3期 須恵器皿、碗、鉢、甕で構成される時期で、12世紀後半から13世紀前半の時期が想定出来る。
- VII期 丹波系鉢・壺・播鉢、瀬戸美濃系の灰釉小皿、天目茶碗で構成される時期である。播鉢の播目はすべてへう描きである。時期としては、14世紀前半から17世紀前半の幅広い時期を想定せざるをえないが、最も出土量が多いのは、丹波系播鉢、瀬戸美濃系皿で構成される16世紀後半から17世紀前半の時期である。この時期の遺物を伴う遺構は認められない。
- VIII期 肥前系陶器皿・染付磁器碗・猪口、丹波系播鉢、甕、壺、鉢、三田系青磁壺、肥前系以外の染付磁器碗などで構成される時期である。肥前系陶磁器の編年観から

岡ノ谷遺跡

17世紀後半から19世紀前半迄の時期が想定される。この時期の丹波系播鉢は無釉ではあるが化粧土が施されており、内面の播目は全てクシ描きである。この時期の遺物を伴う遺構には、SK01、SX02、SK08、SD01がある。この時期は出土遺物から、3小期に区分される。

VIII-1期 唐津系皿で構成される時期である。肥前系陶器の編年観から17世紀後半から18世紀初頭の時期が想定される。

VIII-2期 肥前系染付磁器くらわんか手碗、丹波系播鉢で構成される時期である。肥前系染付磁器の編年観から18世紀前半から後半の時期が想定される。

VIII-3期 肥前系染付磁器猪口、肥前系以外の染付磁器碗、三田系青磁壺、丹波系播鉢で構成される時期である。肥前系染付磁器の編年観から19世紀前半以降の時期が想定される。

IX期 丹波系の施釉の播鉢・甕、瀬戸美濃系平瓶形陶器によって構成される時期である。丹波系播鉢の年代観から近世末から、近代以降の時期、則ち幕末から明治以降の時期が想定される。

以上、岡ノ谷遺跡で出土した遺物は、他地域での類例との比較、産地同定、産地での年代観の検討を通じて、少なくとも9期に分類される事が明らかとなった。次に、これら遺物の検討を踏まえて、遺構の所属時期及びその性格について若干触れてみたい。

第1表 遺構別出土遺物一覧表

遺構名	出 土 遺 物	所属時期	備 考
SK01	丹波系甕(1)、瀬戸美濃系平瓶形陶器(2)	IX期	用水池
SX03	肥前染付磁器くらわんか手水瓶(4)	VIII-2期	性格不明
SX01	土師器皿(5、6)、丹波系無釉陶器壺(3)、瀬戸美濃系天目茶碗(7)、瀬戸美濃系灰釉陶器皿(9)、丹波系鉄釉陶器皿(8) VII、丹波系鉄釉陶器播鉢(10) IX、肥前系染付磁器碗(13) VIII	VII・VIII期 IX期	性格不明
SD01	丹波系施釉陶器播鉢(11) IX期、肥前系染付磁器くらわんか手碗VIII期(12)	IX期	SK01から導水する用水溝
SK09	丹波系へら播播目播鉢(15、14)	VII期	
SB02	須恵器皿(40、41)	VI-3期	掘立柱建物
SB03	須恵器皿(42、44、43)、片口鉢(46)、甕(48)、丹波系鉢(49)	VI-3期 VII期	掘立柱建物
SB04	須恵器皿(45)、白磁碗(47)	VI-3期	掘立柱建物
SB01	土師器壺(75、77)、須恵器坏(76)	III・IV期	竪穴住居址

b) 遺構の検討

各遺構より出土した遺物及び、その所属時期をまとめると第1表ようになる。

前記の表を参考に、各遺構の性格、所属時期、当該地域の土地利用の変遷について考えてみる。先づ、立地の項で述べたように、当該地域は現況では水田としての利用がなされている。このような現況が何時頃出来上がったかについては、当該地区で検出された最も新しい時期に属する遺構について検討する必要がある。さて遺構の所属時期であるが、これについては、遺構内に堆積する堆積土中に含まれる最も新しいと考えられる遺物の年代を以って、その遺構の埋没時期の上限と考える事が妥当であろう。上記の事を前提として考えると、当該遺跡で、埋没時期が最も新しいと考えられるのは、IX期の遺物を含むSK01、SX01、SD01である。少なくともこの3つの遺構はIX期迄はその機能を継続していたと考えられる。次に各遺構の性格であるが、SK01及びSD01については、水田もしくは畑地の耕作に伴う用水池と用水溝であると考えられる。SX01については、それがどのような目的で使用されていたのか現在の所は断定出来ない。ただし、機能を停止した時期はSK01、SD01とほぼ同時期であることから、SK01、SD01同様、耕作に伴う施設であった可能性が強い。このことから、現在の土地利用則ち水田としての利用はIX期以降に始まり、IX期以前の状況も、水田を伴う耕作地として利用されていた可能性が強い事が分った。

次に、それ以前の状況はどうであろうか。第1表から見ると、SX03はVIII期の段階で廃絶している事が分る。SK09は少なくともVII期の段階で廃絶している。則ちVII期からVIII期、つまり17世紀前半から18世紀後半にかけての時期の土地利用についてはSX03しか遺構は見当らない。SX03については、円形の土坑内に集石したもので、性格については不明である。従ってVII期からVIII期については、VIII期以降の状況のように、水田耕作地として利用されていたのか、屋敷地としての利用が考えられるのか、調査結果からは判然としない。

次にVII期以前の状況はどうであろうか。

VII期を廃絶時期の上限とする遺構には、SK04、SB04があり、又VI期を廃絶時期の上限とする遺構にはSB02、SB03がある。

次に、各建物について、もう少し詳しく見てみたい。廃絶時期の上限がVI期に求められ、ほぼ同時期に存在したと考えられるSB02とSB03については、建物の方向もほぼ同一であり、柱間も2間×2間と同一の傾向を示す。またSB02には建物に付随する塀と考えられるSA03が南側に存在し、又SB03には同様に、SA04が西側に存在する。廃絶時期がVII期に遡るSA05は、付属施設を持たず、又柱間も東西辺が4間と規模を拡大している。但し、SB04がVII期の何時迄時期が下るかについては、丹波系鉢の時期が特定出来ない現状では何とも言えない。又SA05に対応する建物址は検出されていない。調査区西側でもピット群が検出されているが、建物址は復原されなかった。

岡ノ谷遺跡

以上をまとめると、VI期からVII期にかけては少なくとも3棟以上の建物群とそれに伴う柵列等で構成される集落が営まれた事は事実である。又建物址がVII期迄存続した事は明らかであるが、VII期のどの時点で集落の機能が停止するかは不明である。

VI期以前の状況については、出土遺物にV期相当の越州窯系青磁を含むのみで、遺構は検出されていない。当遺跡で検出された最も古い時期に属する遺構は、III及びIV期相当の遺物を出土した竪穴住居址SB01である。SB01は、後世の攪乱が著しく、現況は住居址の西側の一部が残存しているに過ぎない。又住居址内で検出された遺物も時期差がかなり認められるが、中央部の炉状遺構と思われる焼土塊中より出土した須恵器坏の年代を以って一応住居址廃絶の上限と考え、一応IV期則ち6世紀前半の住居址と考えておきたい。

少なくとも、このことから、IV期には、当該地区は竪穴式住居で構成される集落として利用されていたことがうかがえる。

第2表 遺跡の時期別変遷表

時期	遺物	遺構	土地利用のあり方	備考
I	弥生中期の土器群	無	不明	周辺に集落の存在
II	弥生後期の土器群	無	不明	周辺に集落の存在
III	古墳時代前期の甕	SB01	竪穴住居で構成される集落	
IV	土師器甕、須恵器坏	SB01	竪穴住居で構成される集落	周辺に岡ノ谷古墳が存在
V	越州窯系青磁碗	無	不明	
VI	土師器甕・鍋、須恵器皿・碗・鉢・甕、白磁碗IV類	SB02 SB03	掘立柱建物で構成される集落	
VII	丹波系鉢・播鉢、壺、瀬戸美濃系灰釉小皿、天目茶碗	SB04	掘立柱建物で構成される集落	V期のある時期に集落は消滅
VIII	肥前系陶器皿、肥前系染付磁器碗・猪口、丹波系播鉢・甕・壺・鉢、三田系青磁磁炉、肥前系以外の染付磁器碗	SX03	SX02だけでは耕地として利用されていたのか集落として利用されていたのか不明	遺物の出土量が多いが、遺構はSX03のみ
IX	丹波系施釉陶器播鉢・甕、瀬戸美濃系平瓶形陶器	SK01 SD01 SX01	耕地として利用	

B) まとめ

以上、遺物・遺構の検討を通じて、明らかになった事をまとめると、別表ようになる。

①岡ノ谷遺跡で出土した遺物は、弥生中期のものから近代以降のものまでを含み、少なくとも当該地及びその周辺地域は、弥生中期以来、現在に至る迄何らかの形で土地利用されていた事を物語っている。

②出土遺物の所属時期は遺物の検討を経た結果、I～IXの9期に分ける事が出来る。

③岡ノ谷遺跡で検出された遺構は竪穴住居址、掘立柱建物、柵状遺構、土壌、用水池、用水溝などがあるが、出土遺物から、IV期に廃絶の上限を求められる竪穴住居、VI期に廃絶の上限を求められる掘立柱建物2棟、VII期に廃絶の上限を求められる掘立柱建物1棟及び土壌、VIII期に廃絶の上限が求められる土壌、IX期に廃絶の上限が求められる、用水池、用水溝、配石土壌の4時期に所属する遺構群に分類出来る。

④以上から、当該地域は、6世紀代には竪穴住居によって構成される集落としての利用が、12世紀後半から17世紀前半の中世の時期には掘立柱建物によって構成される集落としての利用が、18世紀後半から近代に至る時期には、用水池、用水路を伴う、耕地としての利用が行われて来た事が分る。

引用・参考文献

1. 岡田務・前田保夫・村川行弘他 1982 『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会
2. 井守徳男他 1983 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』（兵庫県文化財調査報告書 第16冊） 兵庫県教育委員会
3. 幡老拓治・村上泰樹・村上賢治他 1987 『河津館址』 兵庫県教育委員会
4. 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』 平凡社
5. 大村敬通・水口富夫 1983年 『魚住古窯群』 兵庫県教育委員会
6. 森田勉 1986 『東播系中世須恵器生産の成立と展開』 『神戸市立博物館研究紀要第3号』 神戸市立博物館
7. 大槻伸 1977 『丹波』 『世界陶磁全集』 3 小学館
8. 大村敬通 1981 『三本峠北古窯調査報告書』 兵庫県教育委員会
9. 大橋康二 1984 『肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—』 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
10. 橋崎彰一他 1976 『美濃の古陶』 京都光琳出版
11. 佐々木達夫他 1978 『文京区動坂遺跡』 東京 動坂貝塚調査会
12. 渡辺昇・岡田章一・森岡みゆき 1986 『明石城II』（兵庫県文化財調査報告書 第32冊） 兵庫県教育委員会
13. 横田賢次郎・森田勉 1978 『大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—』 『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館
14. 長谷部楽爾・矢部良明他 1978 『日本出土の中国陶磁』 展示図録 東京国立博物館

第2節 ^{きただい}北台遺跡 (AW-62)

1. 位置と環境

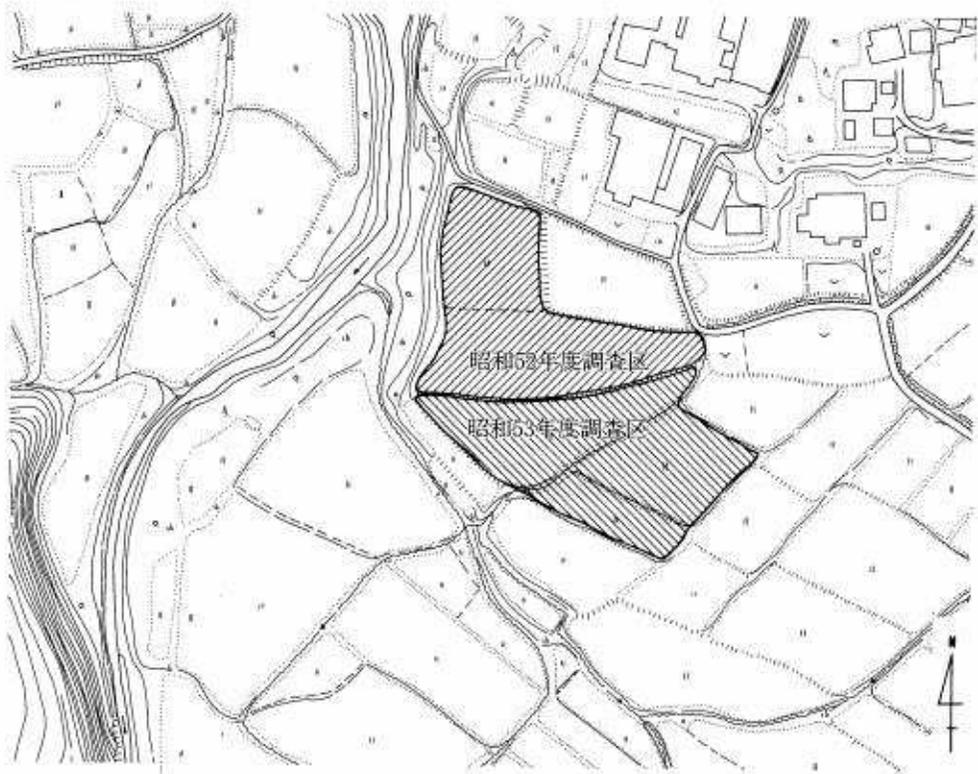
北台遺跡は、三田市末西字北台・野手西に所在する。遺跡のある末西は、JR宝塚線広野駅から県道曾地線を北行すること約2.5kmの地点に位置する。

遺跡は、武庫川の支流青野川の東岸に広がる洪積台地の西先端部（標高176～178m）に立地し、同台地東には古墳時代後期の集落址である平井遺跡（AW-54）が存在する。また、青野川をはさんで西には横穴式石室を埋葬主体部とする八木ノ谷古墳（AW-59・60）がある。

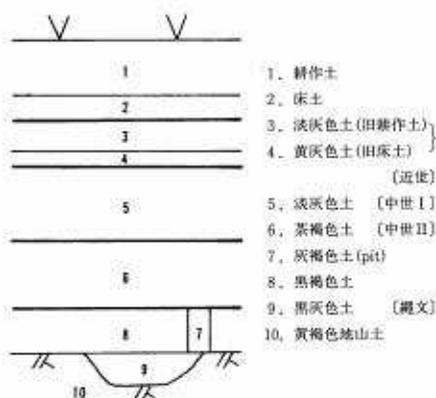
2. 調査に至る経過

昭和49年度の分布調査の成果にもとづき、同51年度に範囲確認調査が実施された。その結果、遺構として柱穴・溝等の検出があり、弥生時代から中世の集落址であろうと判断され、全面調査が必要となっていた。

なお、全面調査は昭和52年度（12月～3月）と昭和53年度（12月～2月）の2回に分けて実施している。調査面積は、第1次-2100㎡・第2次-2300㎡の計4400㎡であった。



第38図 位置図 (1:2000)



第39図 土層断面模式図

る。次いで第VI層—黄褐色地山土(10)となり、縄文時代と考えられる黒灰色土(9)の落ち込みが検出された。

遺構 近世・中世・弥生及び縄文の各時代の遺構がある。

近世遺構(第40図)は、調査区の北端で検出した土壌が3基である。形態は円形(径2.0m)、長方形(7.0m×11m+a)、隅丸長方形(4.3m×2.5m)を呈す。遺物は、丹波焼播鉢・陶磁器等である。時期は江戸後期と考える。

中世遺構(第40図)には、溝・pit群・土壌がある。pit群は一定の方向性をもって、一列ないし数列が並ぶ。第1 pit群は、掘り方径20cm前後のものがほぼ0.5m間隔で、北東から南西方向とこれに直交するかたちで存在する。第2 pit群は、掘り方径40cm前後のものが1m間隔で一列東西方向に延びる。第3 pit群は、2列が北西から南東方向に延びる。北列は、掘り方径40cm前後で、ほぼ1m間隔に並ぶ。南のものは、掘り方径25cm前後で、約1m間隔で並ぶ。第4 pit群は、3列が第3 pit群と同方向に延びる。各列とも掘り方径約40cmで、ほぼ1m間隔で並ぶ。溝は調査区の北に5本分を確認した。1号溝が一番残存状況が良く幅50cm・深さ10cmを測り、第2 pit群に沿うように東西に延びる。他の溝はほぼ同様の規模で第1 pit群を廻る形で存在する。土壌は、溝の北に位置する一辺約4mの隅丸方形の竪穴住居址状落ち込みと、溝1のすぐ南に確認した長楕円形(長軸約2m・短軸約1m)2基の焼土壌がある。遺物は、注目すべきものに第6層中の炉壁・鉄滓・不明鉄製品があり、焼土壌の検出とも併せ小鍛冶工房の存在が推定される。

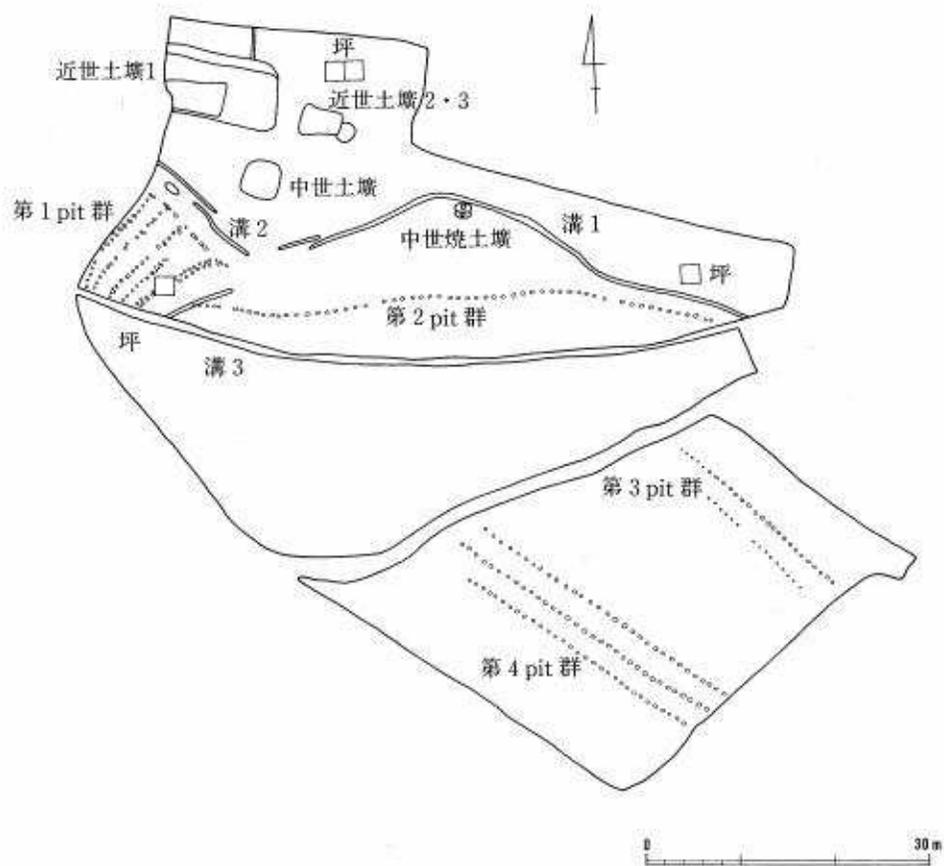
縄文遺構(第41図)は、土壌76基・溝2基がある。土壌は大きく円形・長楕円形・馬蹄形・小pit形の4類に分けられる。また、境内の状況から集石のあるものかないものの2者がある。土壌1(第42図)は、長楕円形で長軸2.4m、短軸1.1m、深さ約20cmである。土壌2・3(第43図)は、長楕円形と円形で各々長軸2.3m、短軸1.0m、深さ約40cm、径0.8

3. 調査の概要

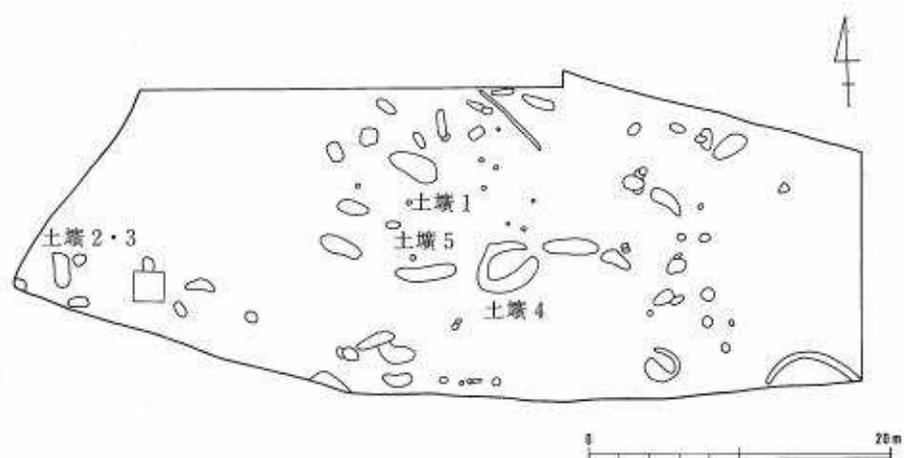
発掘調査によって明らかになった遺構の拡がりや層位、遺物の出土状況と漸次叙述していきたい。

層位 基本堆積土層は第39図の通りである。第I層—水田耕作土(1)・床土(2)。第II層—淡灰色土(3)・黄灰色土(4)近世遺物包含層である。第III層—淡灰色土(5)、中世遺物包含層。第IV層—茶褐色土(6)中世(鎌倉時代前半)遺物包含層である。第V層—黒褐色土(8)、この層の上面にpit(7)等中世遺構が確認される。

北台遺跡

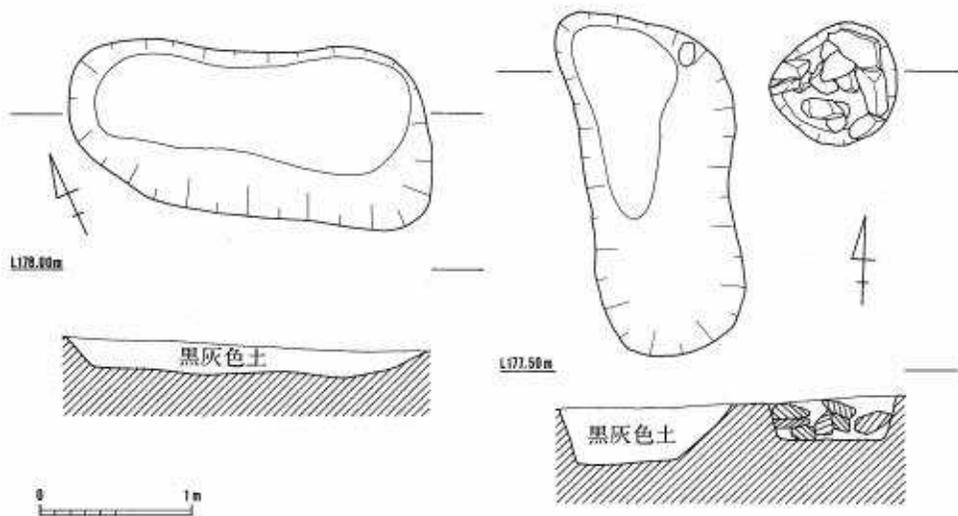


第40図 中・近世遺構全体図



第41図 縄文遺構全体図

北台遺跡



第42図 土壌 1

第43図 土壌 2・3

m、深さ約30cmを測り、3は坑内に25cm×10cm大の石13個をもつ。遺物は、土壌4に数点のサヌカイト剥片と図化可能な土器片2点、土壌5にカシ類の実が目される程度で、他の土壌では縄文土器の細片かチャート・サヌカイトの剥片が1・2点あるかないかである。時期は明確にしがたいが土器から判断すれば、後期の所産と考えられる。

遺物の出土状況で注意すべきは、中世の遺構・包含層中にチャート・サヌカイトの有舌尖頭器・石鏃及び剥片が多く混入していることである。これは古代以前の土層（黄褐色地山土まで）が中世以降大きく削平されたことに因ると思われる、調査区の中央部に中世遺構が存在しないことから肯定されよう。

最後に中世pit群の機能・性格について考えてみよう。

昭和53年度の概要で柵状遺構として報告している通り、単なる建物柱でないことは明らかである。調査区中央部では検出していないが、上述の通り中世以降大きく削平されたことを考えると、本来台地先端部を囲んでいた可能性が高い。溝についても、pit群の北を取り巻くように存在し、これに関連する施設と思われる。

類例として青野ダム内に平井南（AW-54南）・溝ノ尾（AW-71）遺跡等があり、これを調査者は畑作遺構とらえている。当遺跡では調査区中央部に建物址等がないが、周辺に竪穴住居址状落ち込みと小鍛冶址が存在することから、住居及び畑地を取り囲む柵列と考えるのが最適と判断する。文献にみえる垣内にあたるものであろうか。検討を要す。

4. 出土遺物

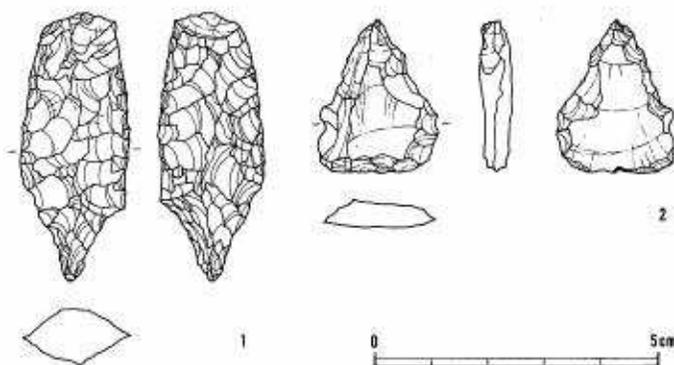
遺構内埋土中及び包含層中に、石器・土器（縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器）・

第3表 石器一覧表

器種	石材	サヌカイト	チャート	鉄石英	その他・不明	合計
有舌尖頭器			1			1
尖頭器		1				1
彫器		1				1
石鏃		86	2			88
石鏃		10				10
削器		10				10
鋸齒縁石器		1				1
抉入石器		1				1
模形石器		41		2		43
模形石器のスポール		10				10
二次加工のある剥片		24		1		25
不明石器		1				1
石核		12	1		頁岩?1・不明1	15
剥片		96	2	6	不明2	106
砕片		914	3	7		924
合計		1,208	9	16	4	1,237

有舌尖頭器 (第44図1)

1は赤色チャート製の有舌尖頭器である。先端部を古く欠損している。両面ともに入念な押圧剥離が施されており、断面形は厚い凸レンズ形を呈する。両側縁はわずかに膨らみをもつ。返し部分の張り出しは弱く、内彎しつつ、やや長い逆三角形の舌部に至る。転磨



第44図 包含層出土石器(1)

両面から二次加工を施した後、先端に数回の槌状剥離を加えて、刃部を作出している。素材の変形度が大きいため、剥片の形状は明らかではない。本例は、既に昭和54年度に報告されている(兵庫県教育委員会)。長さ26.8mm、幅21.0mm、厚さ5.0mm、重量3.2g。

石鏃 (第45図3～第46図36・38～40)

石鏃は87点が出土しており、製品中では最も多数を占めている。凹基無茎式石鏃が最も多く77点(88.6%)を占め、以下平基無茎式石鏃6点(6.9%)、凸基無茎式石鏃1点(1.2

金属器(鉄製品、青銅製品)等がある。

ここでは、石器・縄文土器についてのみ報告しておく。(大平)

(1)石器(第44図～第48図)

本遺跡では、1237点の石器が出土しているが、そのいずれも現位置を遊離して後世の遺物包含層等から出土している。その内訳は第3表に示す通りである。

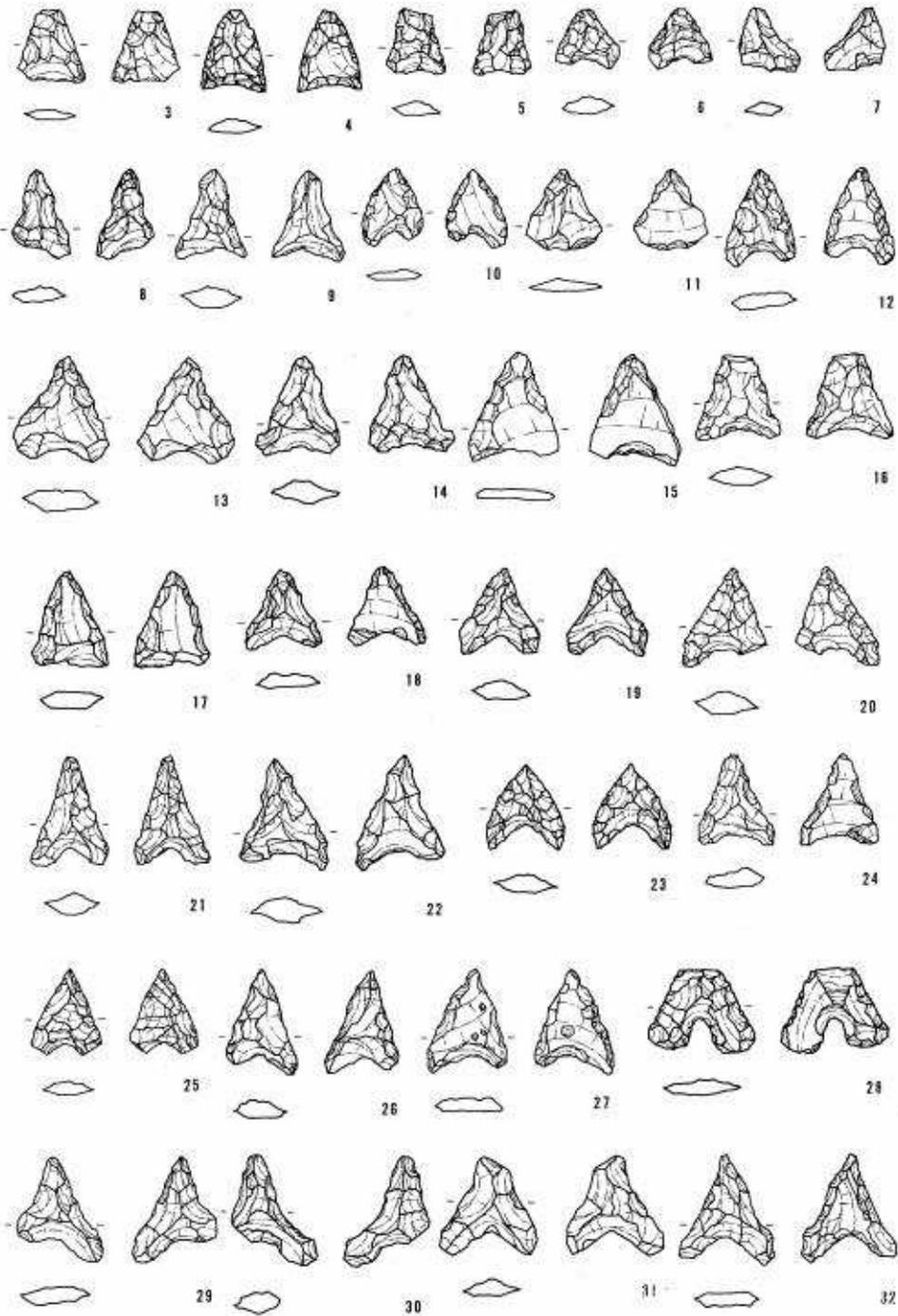
等は全く受けておらず、鋭利な縁辺をとどめている。長さ48.0mm、幅18.9mm、厚さ9.8mm、重量8.2g。

彫器 (第44図2)

2は、サヌカイト製の彫器であろう。

剥片の全周に背・腹

北台遺跡



第45圖 包含層出土石器(2)

第4表 石鏃計測表

No	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)	石材	No	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)	石材
3	(12.9)	(12.2)	2.0	0.3	サヌカイト	22	19.5	16.5	4.8	0.8	サヌカイト
4	(14.9)	11.7	2.8	0.5	サヌカイト	23	15.7	14.4	3.2	0.5	サヌカイト
5	(11.9)	(10.6)	2.4	0.3	サヌカイト	24	19.3	13.5	3.5	0.6	サヌカイト
6	17.4	12.6	2.9	0.6	サヌカイト	25	(15.9)	(12.7)	2.5	0.4	サヌカイト
7	11.5	(10.7)	2.5	0.3	サヌカイト	26	16.5	14.1	3.2	0.6	サヌカイト
8	(17.0)	(10.7)	2.8	0.4	サヌカイト	27	18.5	14.6	2.7	0.7	サヌカイト
9	16.5	(13.1)	3.7	0.6	サヌカイト	28	(15.5)	19.8	2.9	0.8	サヌカイト
10	(25.1)	(18.5)	5.1	2.0	サヌカイト	29	19.7	16.5	3.2	0.6	サヌカイト
11	14.9	13.8	2.2	0.4	サヌカイト	30	17.6	13.9	3.3	0.7	サヌカイト
12	(10.5)	(11.5)	3.1	0.3	サヌカイト	31	(18.2)	17.9	3.0	0.7	サヌカイト
13	19.2	17.9	4.4	1.3	サヌカイト	32	19.6	17.5	3.0	0.7	サヌカイト
14	17.9	15.6	3.8	0.8	サヌカイト	33	(22.5)	(14.1)	3.2	0.9	サヌカイト
15	20.3	16.5	2.2	0.7	サヌカイト	34	24.7	14.7	3.4	(1.2)	サヌカイト
16	15.5	(15.7)	3.0	0.7	サヌカイト	35	22.5	(11.0)	4.0		チャート
17	(20.0)	(15.2)	3.8	0.6	サヌカイト	36	16.5	16.4	3.0	0.9	チャート
18	14.4	14.1	2.3	0.4	サヌカイト	37	(20.1)	(17.6)	4.9	1.4	サヌカイト
19	28.6	17.0	6.8	2.8	サヌカイト	38	(13.5)	11.4	1.9	0.3	サヌカイト
20	18.8	(15.9)	4.1	0.8	サヌカイト	39	15.8	14.6	4.0	0.6	サヌカイト
21	20.1	14.5	3.8	0.7	サヌカイト	40	(38.5)	(16.2)	6.4	3.8	サヌカイト

%)である。有茎式石鏃は全く見られない。石鏃の計測値は表2に示す。

凹基無茎式石鏃には、基部の抉りが深く、従って脚が長いものと、抉りが浅いか、わずかに内彎する程度のもものが認められる。全般に、前者が後者に比べやや大型の傾向がある。平基式石鏃も小型のもので占められ、抉りの浅い凹基式石鏃に近い傾向を示す。

29は、片脚を短く作るものであり、本遺跡では唯一の例である。

33・34は凹基式石鏃であるが、器身が長く基部が広がる形態を有する特異なもので、特に34はいわゆる魚形石鏃に近い形態を示す。

39・40は、やや大型、厚手の石鏃と思われる。40は基部を折損している。いずれも二次加工が粗く、左右非対称形を呈することから、あるいは未製品の可能性もあろう。

石鏃は、38～40に示すような未製品と思われるものの他にも、加工度が低く、素材剥片上の面をとどめる例が多く認められる。

尖頭器 (第46図37)

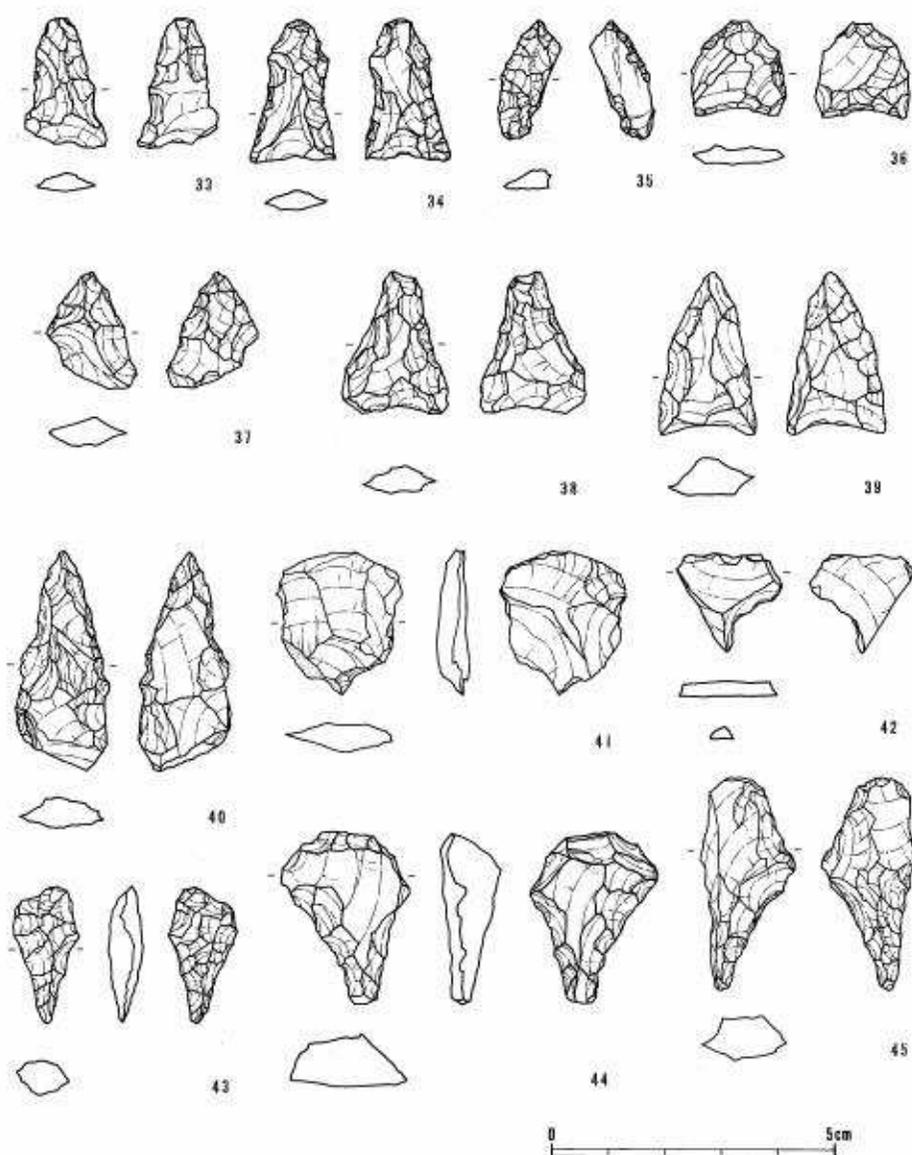
37は両面加工の尖頭器であろう。大部分を折損しているが、復原しうる原形が石鏃に比べて幅広で厚いことから、尖頭器と考えられる。

石鏃 (第46図41～45)

いずれもサヌカイト製で10点が出土している。剥片の一端にノッチ状の二次加工を施して、短い鏃部を作出したもの(41・42)と、剥片の背・腹両面に二次加工を施して、長い鏃部を作出したもの(43～45)がある。

楔形石器 (第47図46～51)

スポールも含め51点が出土しており、石鏃に次ぐ比率を占める。いずれも相対する二辺



第46図 包含層出土石器(3)

から剥離が進められており、三辺ないし四辺に二次加工が施されるものは認められない。

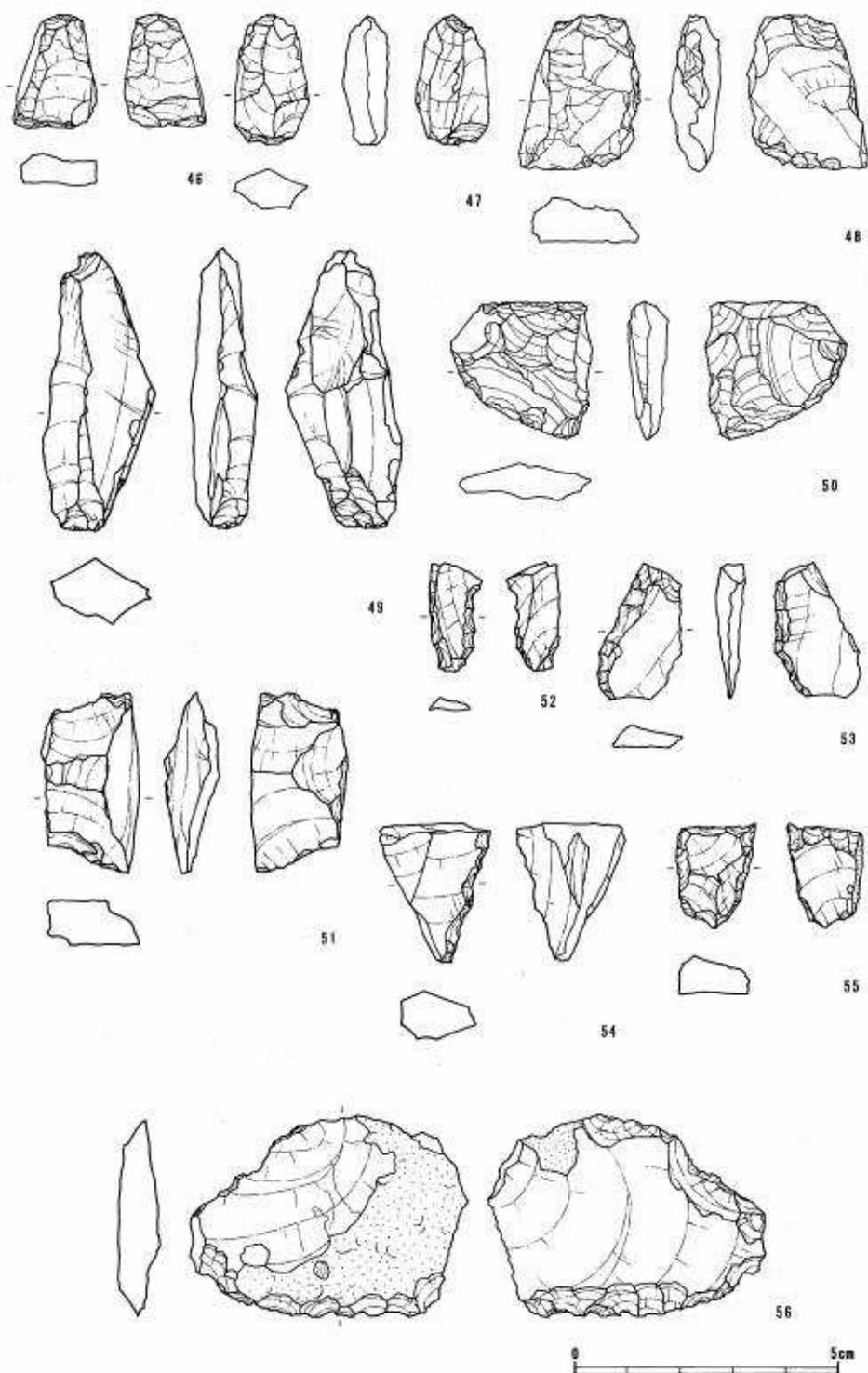
多くは四辺形を呈するが、剥離が進行した例では、49のような紡錘形となる。

いずれも比較的小型で、一辺が3～4 cm前後のものが大部分である。

石材としては、サヌカイトが主体となっているが、48は鉄石英が用いられている。

削器 (第47図52～56)

いずれもサヌカイト製で、10点が出土している。剥片の一側縁、あるいは二側縁・全周に二次加工を施したものがあり、また、片面からのみ二次加工を施すもの、両面から施す



第47圖 包含層出土石器(4)

もの等、加工部位、方法等にかなりの変異が認められる。素材となった剥片も、52のように小型でごく薄いものから、54・56に見られる、大型・厚手のものがあり、その形態も一定したものではない。

刃部の形状も、52・55のようにほぼ直線的なものと、54・56のようにやや鋸歯縁状を呈するものが認められ、上述の加工部位・方法の差異と相まって、その機能の差が想定されよう。

石核 (第48図57・58)

石核と考えられる資料は15点出土しているが、その多くは剥離が進行した結果破砕されたと思われるものであり、原形を良好にとどめたものはごく少数である。

57は頁岩?製石核である。礫を分割したものを素材とし、その主剥離面を対面として、剥片剥離が進められたものと思われる。最終剥離は、石核側面を打撃して、打面部から寸詰まりの剥片を剥離している(図中央)。

58はサヌカイトの剥片を素材とした石核である。剥離が進行しているため、素材剥片の形態は明らかではないが、板状の剥片ではなかったかと思われる。平坦な打面を加撃して、表裏両面から剥片を剥離している。

小結

本遺跡出土の石器は、原位置を遊離したものであり、複数の時期の遺物を混在するものと考えられる。

石器組成中の多数を占める石鏃は、形態も多様であり、発達した様相を示している。出土土器中に、縄文時代後期のものが見られることから、この時期の石鏃も含むと考えられる。しかし、楕形鏃のように縄文時代早期に認められる形態を含むことから、これを前後する時期のものを含むと想定しても大過なかならう。削器の中に、縄文時代前期以降発達する石匕が見られず、多様な形態を呈する点も上記の想定と矛盾しない。

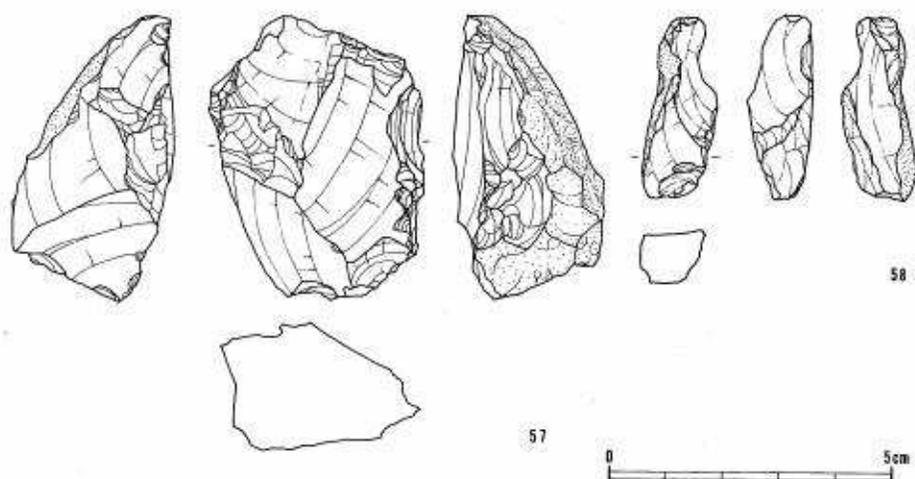
また、石錐41・42に見られるような、ノッチ状の二次加工を施す、錐部の短い例はより古い時期に多く類例が知られるものである。

有舌尖頭器については、これを他と分離してより古く位置づけることも考えられる。しかし、近年有舌尖頭器が縄文時代早期前半の土器に供伴する例が知られるようになっていくことから(福井県岩の鼻遺跡など)¹⁸、従来考えられていたよりも本器種の下限年代を新しく考えうる可能性がある。

現在のところ、有舌尖頭器が縄文時代早期後半にまで残存していた例は知られていない。従ってここでは本石器群について、縄文時代早期初頭のものと後期のものを混在していると捉えておきたい。

縄文時代早期初頭の石器群については、近畿地方では大阪府神宮寺遺跡、同神並遺跡、

北台遺跡



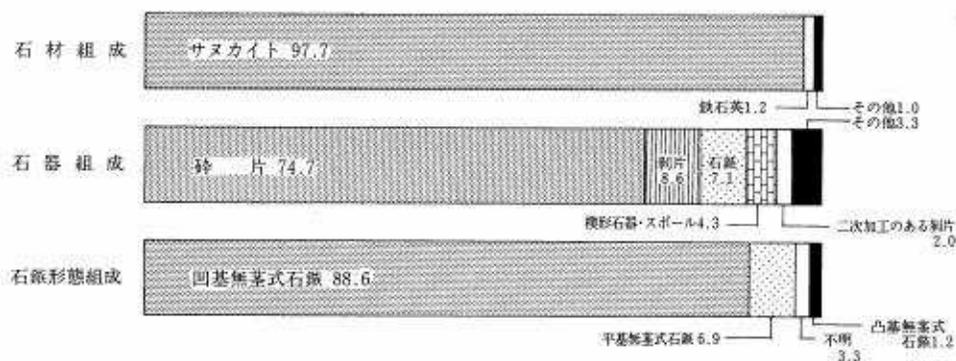
第48図 包含層出土石器(5)

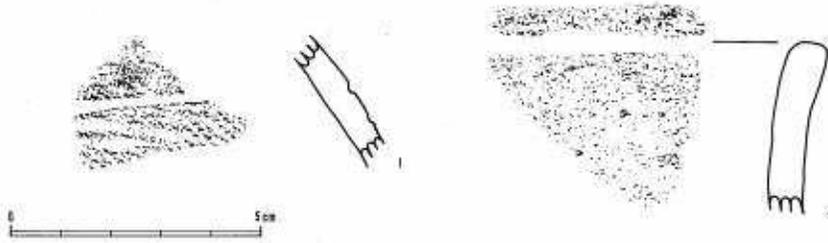
奈良県大川遺跡、福井県岩の鼻遺跡等が知られているにすぎず、その実体は必ずしも明瞭ではない。今後、こうした遺跡出土の石器群との対比、分析を進めてゆく必要がある。

(久保)

注 福井県立若狭歴史民俗資料館 1987 『岩の鼻遺跡II』

第5表 石器組成表





第49図 土坑4出土縄文土器

(2)縄文土器 (第49図)

土坑4から出土した小破片である。1は磨消縄文をもつ鉢形土器の胴部である。縄文RLを施した後、細い沈線(約2mm)で区画する。赤褐色を呈し、胎土に1mm前後の砂粒を多く含む。2は磨滅が著しいが、条痕文系の深鉢口縁部である。どちらも後期中葉の北白川上層に相当するものであろう。(太平)

第3節 ^{いぬい} 乾遺跡 (AW-65)

1. 立地

遺跡は三田市末西字乾に所在し、青野川左岸の開折された段丘上であり、山塊から東南方向にのびた支尾根の突端付近に位置している(第50図)。標高は約178.4~180.0mであり、すぐ東側を南流する青野川流域の標高が172m前後で、比高差は約6.4~8mである。

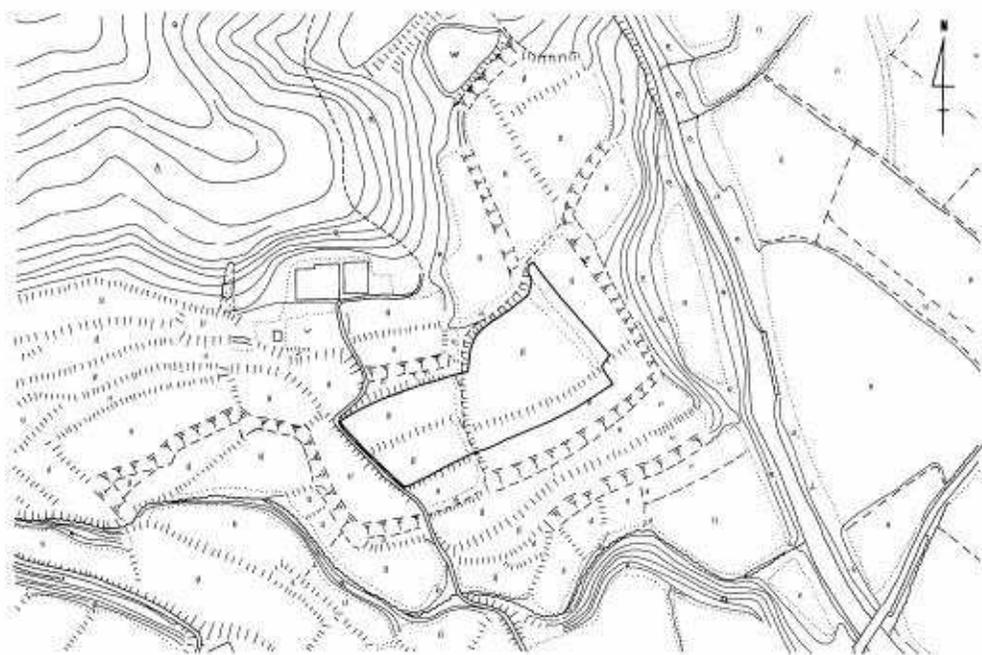
遺跡の北方は山塊により遮られているが、南側には青野川の小支流により開折された小支谷が東に向かって開け、小支谷の南側には溝ノ尾遺跡が立地する、東方に向かってのびる小尾根があり、本遺跡の南方では標高は179m前後で、やや低くなっている。一方、本遺跡西側は小支谷が徐々に狭くなり、しだいに標高を増してゆく。したがって、本遺跡からは東北方から西南方までが眺望できる位置にある。

本遺跡のすぐ西側の斜面には奈良時代後半の乾窯跡があり、南側の小支谷を隔てた丘陵上には溝ノ尾遺跡があり、古墳時代後期の堅穴住居跡5棟をはじめ、古墳時代後期~鎌倉時代の掘立柱建物跡を多数検出しており、当遺跡と一部重複する時期の遺跡である。

2. 調査の経過

昭和57年度に兵庫県教育委員会が行った確認調査では、試掘坑29カ所のうち3箇所において柱穴を検出し、あわせて平安時代の土器を含む包含層も認められた。

全面調査は、確認調査の結果遺構が存在する部分について、昭和61年2月12日から3月



第50図 位置図 (1:2000)

乾 遺 跡

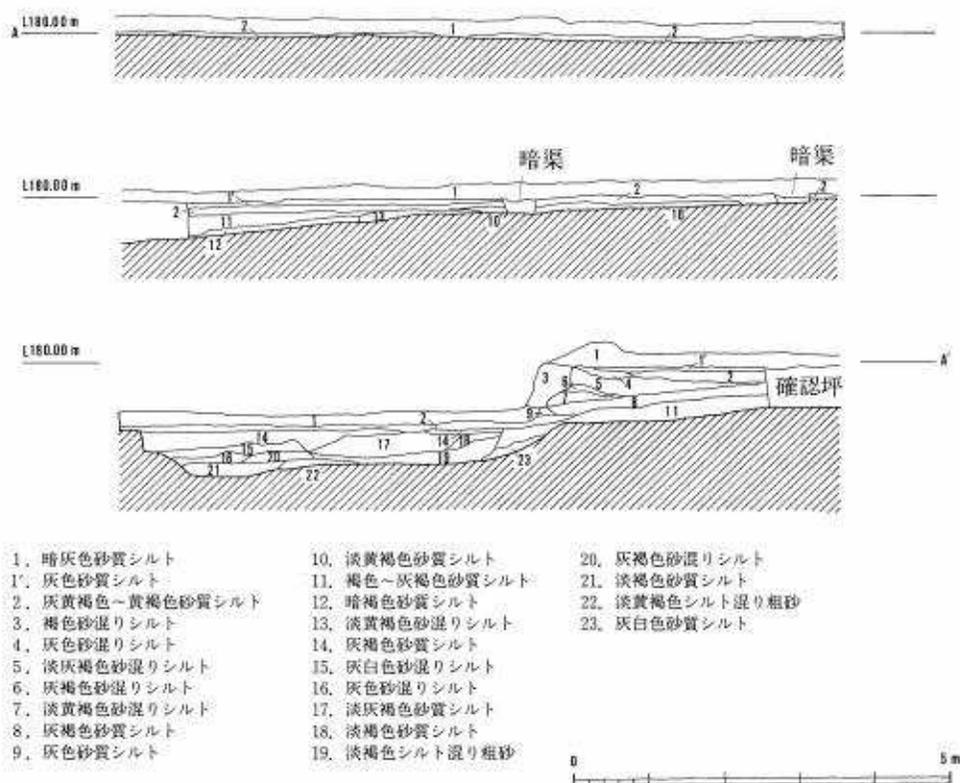
29日までの約1箇月半にわたって行った。調査区は水田4筆分、総面積1,550㎡である。

調査の方法は、表土(耕土)および水田構築の際の盛土層をパワーショベルにより除去し、遺物包含層以下を人力により掘削した。その結果、調査区のほぼ全域で遺構を検出したが、東端・東南端および東北部では遺構の密度が薄くなっていた。

3. 土層

全面調査の際、調査区のほぼ中央部に南北方向の畦を残し、土層の観察を行った(第51図)。基本土層は上層から耕土(暗灰色砂質シルト・灰色砂質シルト)・床土(灰黄褐色～黄褐色砂質シルト)があり、上段水田の北方では床土の下が黄灰色の粘質土であり、遺構検出面の土層となっている。上段水田の南方では床土下と遺構ベース土との間に灰褐色砂質シルトが堆積しており(第51図5・8層)、水田構築の際の盛土であると思われる。その下層には灰褐色系のシルトおよび暗褐色砂質シルトがあり(11～13層)、これが遺物包含層となっている。下段水田では、床土より下層には遺物包含層として淡褐色～灰褐色の砂質シルトが堆積しており(14・17～19層)、さらに下層には南端部分で灰色系・褐色系の砂混りシルトが認められ(15・16・20～22層)、その下が遺構検出面となっている。

包含層中の遺物には古墳時代～鎌倉時代の土器が認められたが、各時期の土器の混入が



第51図 中央部土層断面図

乾遺跡



第52図 遺構全体図

多く、土層を時期別に把握することはできなかった。

4. 遺構の状況

全面調査は水田4筆分について行ったが、遺構面まで掘削した結果、旧地形は北から南にゆるやかに傾斜する斜面であり、南側の水田2筆の北端部分にあたる所は水田構築の際に地山をカットされて段状を呈していることが判明した。調査区北部についても水田構築の際に地山を削平しているものと思われ、遺構の遺存状況は悪く、特に北端では岩盤が露出し、遺構は全く存在していなかった。

遺構は掘立柱建物跡7棟と柱穴多数、土壇22基、溝9条を検出した。これらの遺構は各時期にわたっているが、すべて同一面で検出した。掘立柱建物は2棟を除き、主軸をほぼ東西・南北方向に置いている。近世以降の遺構も検出し、墓跡のほかにも各所で攪乱墳が認められ、池状遺構も存在した。

また、出土遺物のなかには須恵質の陶棺片があり、特筆できるものである。

掘立柱建物1 (SB-1)

調査区西方の下段面に4個の柱穴が方形に並んで存在しており、建物跡であるかどうかは明確ではないが、ここでは建物跡1として扱っておく。

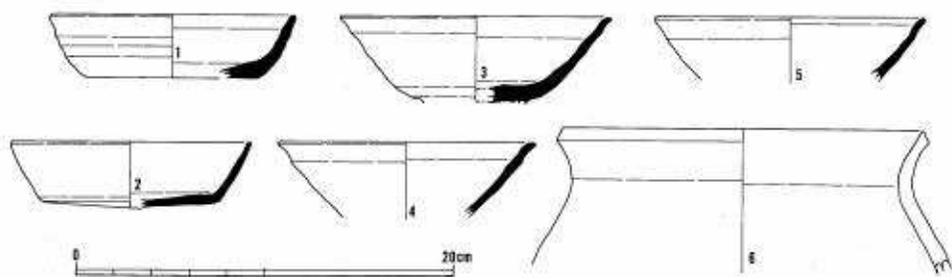
柱間は3.46～3.68mを測り、方位とは方向を異にしている。柱穴掘り形は径47cmの円形で、柱痕は径26cmである。検出面からの柱痕の深さは20～43cmであった。

遺物

柱穴柱痕内より出土した遺物は第50図1に示した須恵器坏である。器壁が厚く、口縁部は外上方にまっすぐにのびている。口径12.8cm、器高3.4cmを測る。内外面にはロクロ目が認められ、底部はヘラ切り未調整である。平安時代前期にあたるものと思われる。

掘立柱建物2 (SB-2)

掘立柱建物跡2は調査区東端付近の上段面のやや南寄りにあり、掘立柱建物跡3と方向を異にして重複している。柱穴も建物跡5のものと同様であり、建物跡5の柱穴の方が新しいことが判明している。



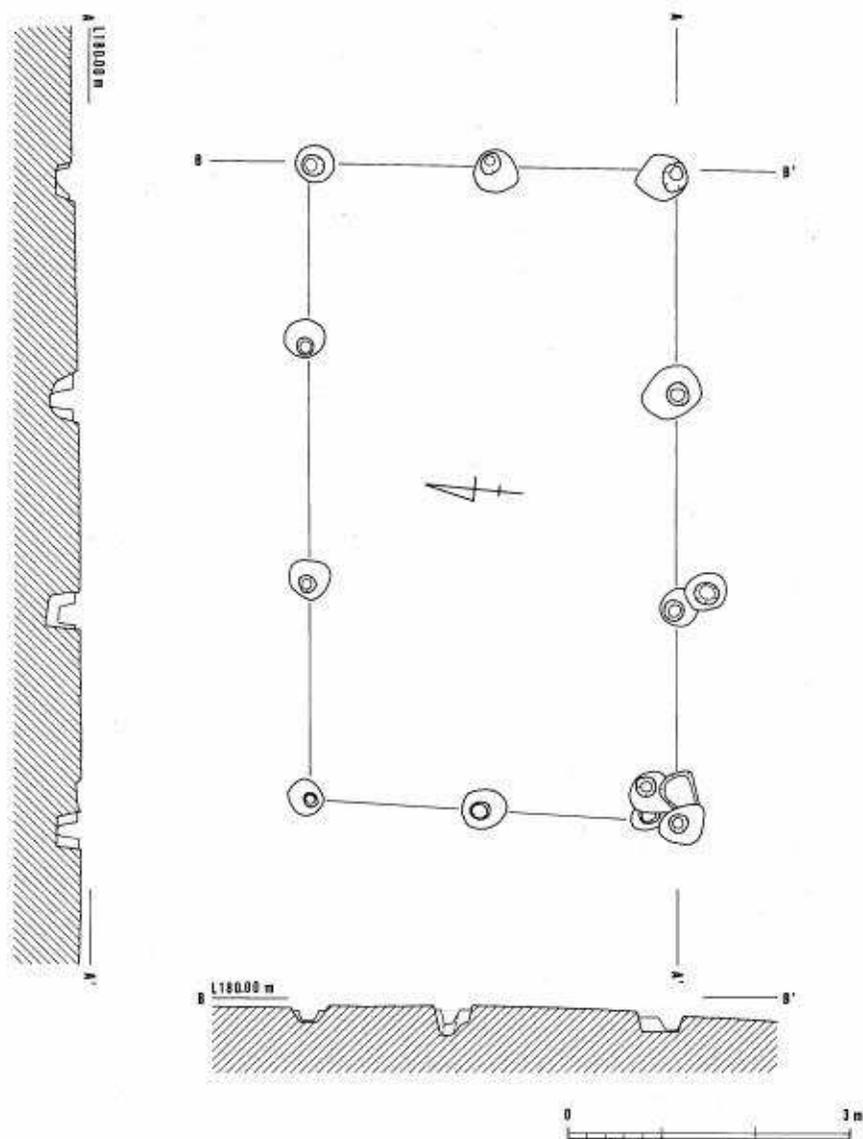
第53図 掘立柱建物1～4出土土器

乾 遺 跡

掘立柱建物跡2の桁行は4間(6.94m)で、柱間は1.95~2.5m、梁行は2間(3.9m)で、柱間は1.8~2.08mであり、桁・梁方向をほぼ東西・南北方向にとっている。柱の掘り形はすべて円形で、検出面からの柱痕の深さは15~37cmである。西南隅の柱のみ4個が重複しており、この柱部分について建て替えがあったものと思われる。

遺物

柱穴内より出土した遺物のうち図示できたものは第50図2に示した須恵器杯1点である。薄手のつくりで、口縁部は外上方に直線的にのびている。底部には高台を伴わず、へら切



第54図 掘立柱建物2

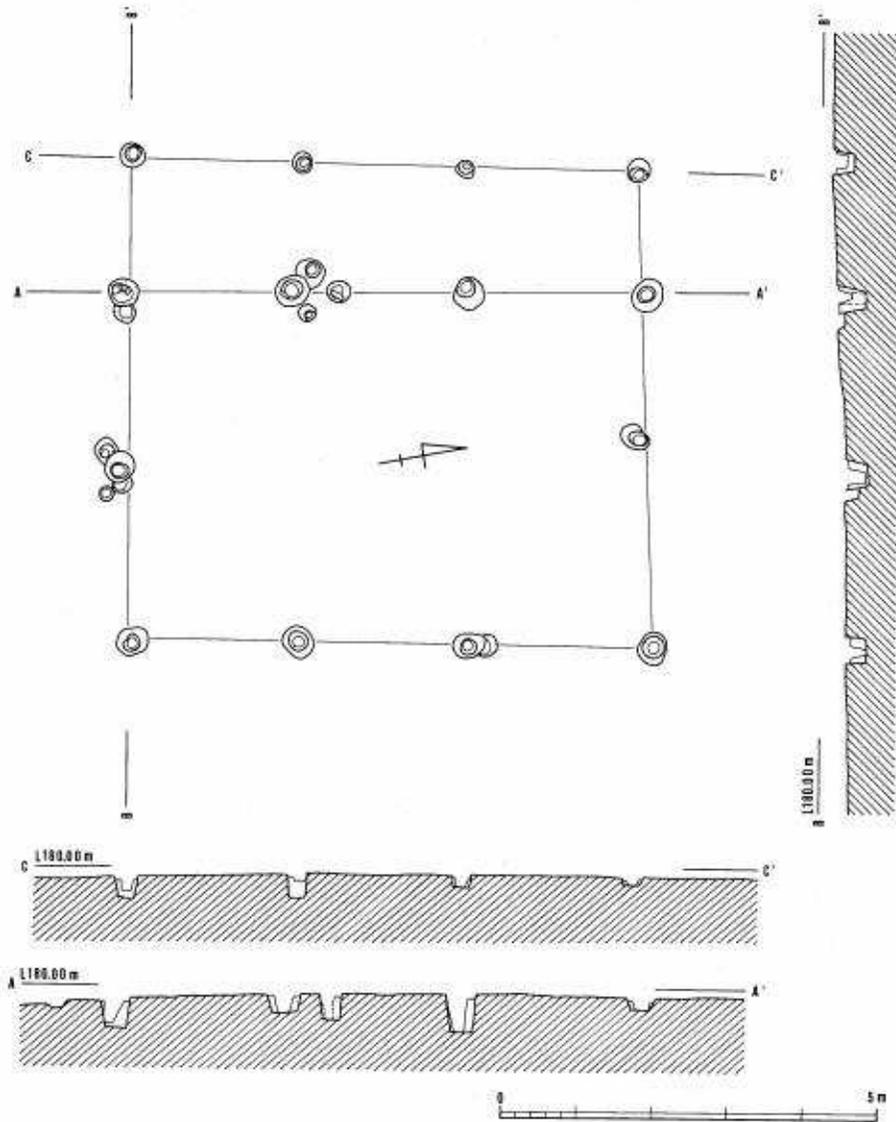
乾遺跡

りのみで終わっている。平安時代前期に属すると思われる、口径は12.5cm、器高3.4cmである。

掘立柱建物 3 (SB-3)

調査区東端の上段面に存在し、先述の掘立柱建物跡 2 と重複関係にある建物跡で、本建物跡の柱穴が掘立柱建物跡 2 の柱穴を切り込んで掘られていることから、本建物跡の方が後で建てられたことがわかる。

建物跡の規模は桁行 3 間 (6.96m) で、柱間は 2.2~2.46m、梁行 2 間 (4.7m) で、柱



第55図 掘立柱建物 3

乾 遺 跡

間は2.3~2.42mである。桁の方向はN10°Eに振れている。西側に一面のみの庇を設けており、建物本体との柱間は1.6mである。建物跡は一部柱穴の重複が認められ、建て替えを行ったものと思われる。柱穴掘り形はすべて円形で、径32~42cm、柱痕は径18~26cm、庇の方は掘り形の径24~31cm、柱痕16~18cmで、庇の方が柱、掘り形ともに小さい。また、検出面からの柱痕の深さは建物本体で16~48cm、庇では10~32cmとなっており、これも庇の方が浅くなっている。

遺物

掘立柱建物跡3の柱穴より出土した遺物のうち図示できたものは須恵器2点(第53図3・4図)である。いずれも柱穴掘り形埋土中より出土している。3は壺形の器形を呈し、底部に輪高台の剥離痕が残っている。体部から口縁部へは徐々に器壁が薄くなりながら外上方に直線的にのび、口縁部端で外反している。4も壺で、体部から口縁部にかけてやや外側へ彎曲しながら外上方にのびており、口縁部は稜をもち、そこから外反している。底部の形状は不明である。3・4の口径はそれぞれ14.1cm、13.3cmである。ともに平安時代前半頃の所産と思われる。

掘立柱建物4 (SB-4)

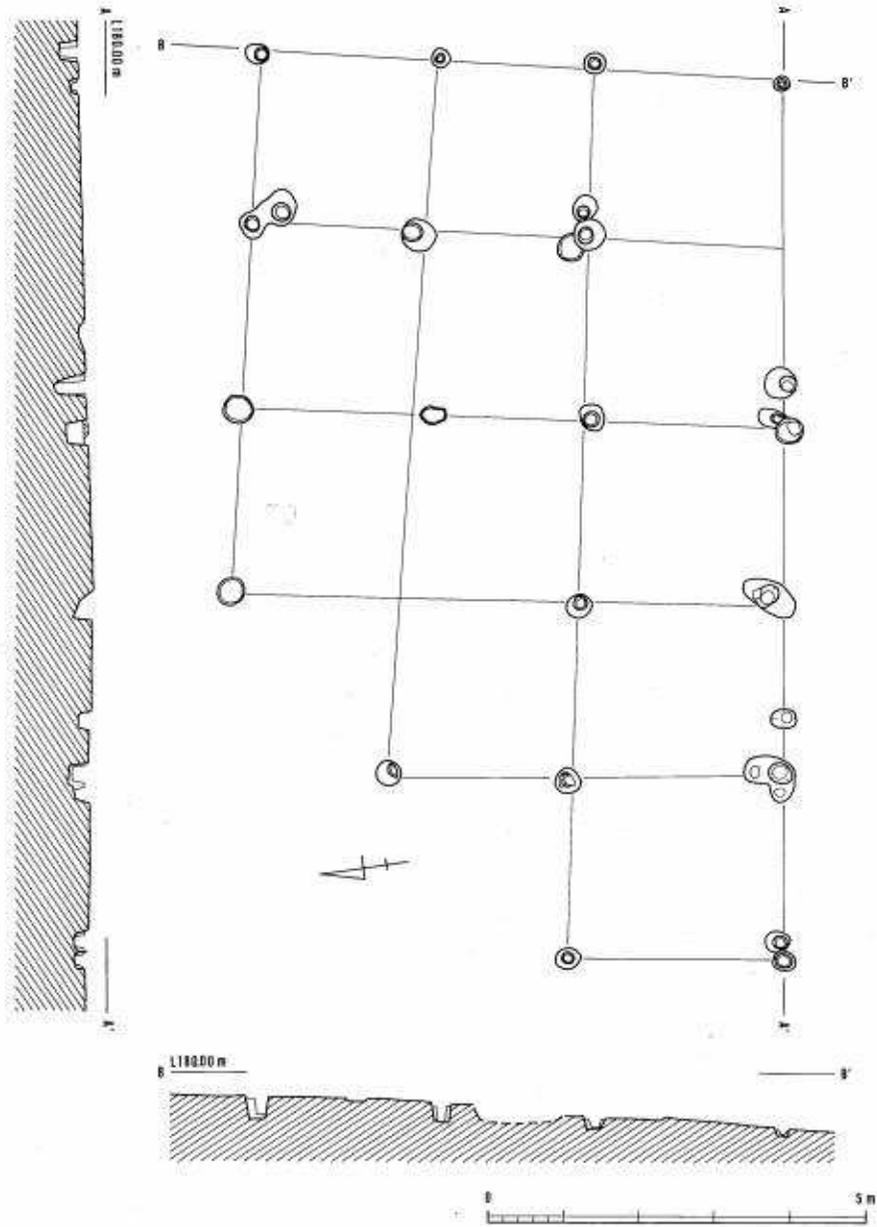
掘立柱建物跡4は調査区西端にある総柱の建物跡で、掘立柱建物跡7と重複している。桁行は5間(11.7m)で、柱間は2.22~2.48mである。梁行は3間(2.06~2.50m)で、6.9mを測り、南北方向に合わせている。この建物跡が長方形のものであるとするならば、西北部の柱穴3個が検出されておらず、検出面が岩盤であることから、柱を直接地面に立てたか、あるいは後世に柱穴が削平されたとも考えられる。一方、この建物跡を西北部が欠けた建物と考えることもできる。調査時点では遺構面の削平がそれほど顕著でなく、柱穴が建物建立時からあったとするならば遺存しているはずであり、現状では認められないことから、この建物は西北部の欠けた形態のものであったと考えられる。柱穴には一部重複しているものがあり、建て替えが行われたことが推察できる。柱穴の掘り形は径22~42cmの円形を呈し、柱痕は径12~21cmである。柱痕の深さは一定でなく、底のレベルも揃っていない。

遺物

出土遺物としては、柱穴から出土した須恵器・土師器がある。

第53図5は須恵器壺の口縁部で、口縁下で若干屈曲し、外面に小さな稜をつくりだすとともに口縁端部を外反させている。掘立柱建物跡3出土の壺と口縁部の形状が似ていることから、底部にはおそらく輪高台が付くものと思われる。口径14cmで、平安時代前半のものである。6は土師器の甕であるが、体部中位以下は欠失している。口縁部と体部の境は明瞭でなく、口縁端部は面を持っている。表面の遺存状況が悪く、調整痕は不明である。

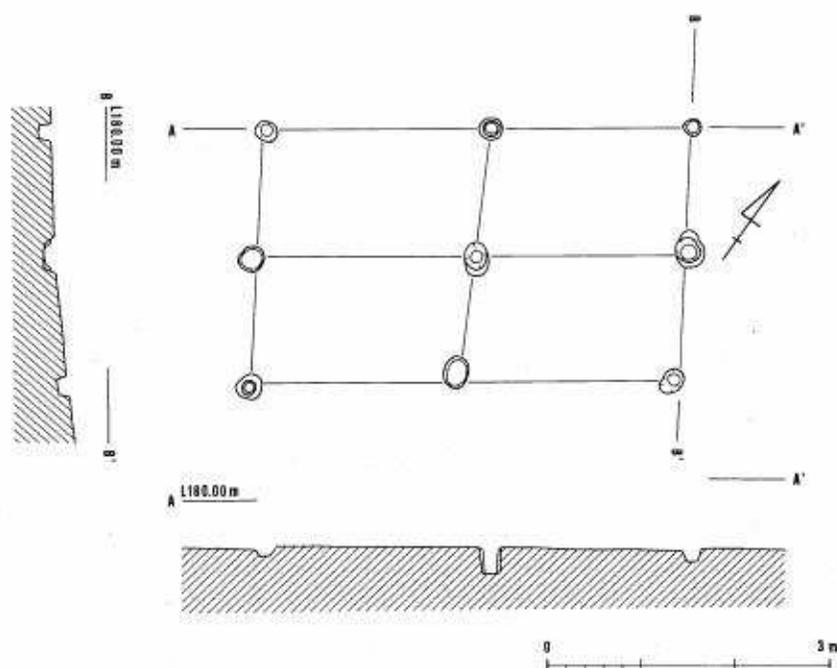
乾遺跡



第56図 掘立柱建物 4

掘立柱建物 5 (SB-5)

調査区東端の上段南端で検出した2間四方の総柱建物跡で、桁行4.54m、柱間2.13~2.40m、梁行2.70m、柱間1.34~1.38mを測り、中央部の梁方向が歪んでいる。桁方向がN55°Eに振れ、掘立柱建物跡1と似た方向である。柱痕の深さは大半が12cm前後で遺存状況は悪



第57図 掘立柱建物5

い。柱穴掘り形は円形で、径18~30cmと小さく、柱痕も径14~16cmと細いものである。

柱穴から若干の須恵器・土師器片が出土したが、図示できなかった。須恵器片のなかには坏もしくは埴と考えられる口縁部が存在しており、平安時代前半のものと思われる。

掘立柱建物6 (SB-6)

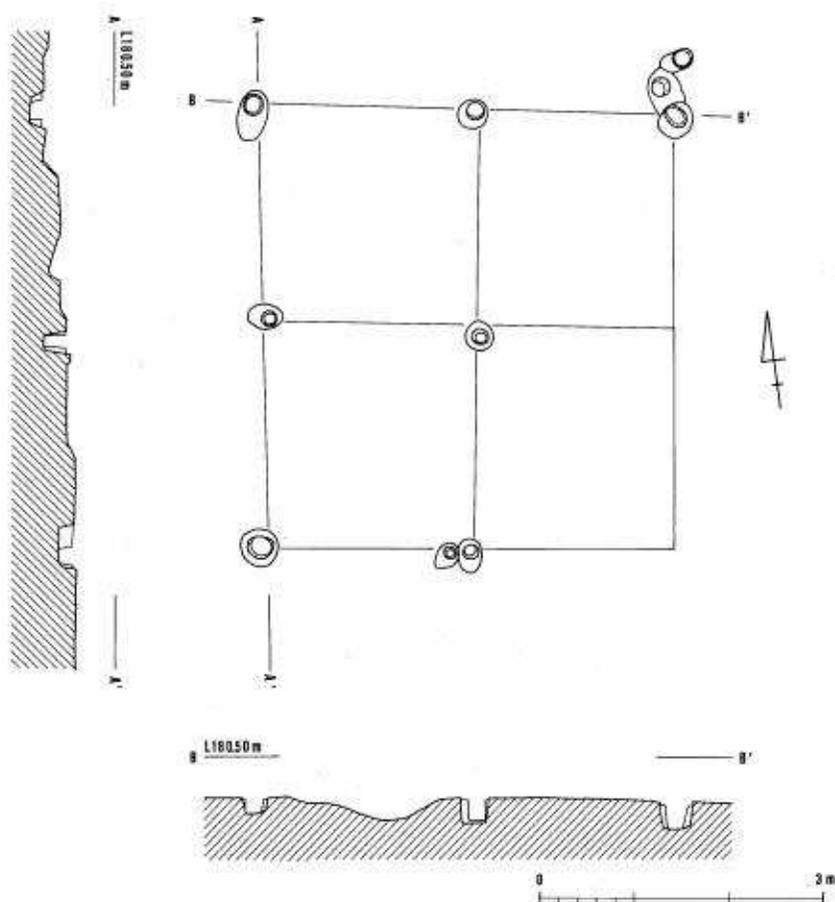
掘立柱建物跡6は調査区西端上段面にあり、東南部の柱穴は後世の削平により失われているが、2間四方の総柱建物跡であることが窺える。方向は掘立柱建物跡4と同一方向で、柱列のラインもほぼ揃っている。南北は4.75m、柱間は2.43・2.32m、東西の規模は4.46mで、柱間は2.36・2.10mを測る。柱穴掘り方はすべて円形で、24~40cmで、柱痕の深さは検出面より17~27cmである。柱穴には重複しているものがあり、一部建て替えを行ったものと思われる。

遺物は柱穴内より小片の須恵器・土師器が出土しているが、時期は不明である。しかし、この建物跡が掘立柱建物跡4と同一方向をとる点や、北端がほぼ揃っていることから同時に建っていた可能性が非常に高いことが推察できる。

掘立柱建物7 (SB-7)

掘立柱建物跡4と重複関係にあり、調査区西端の上段面に位置している。桁行4間、梁行3間の側柱のみの建物跡で、桁方向がN5°Eである。桁の長さは7.36mで、柱間は1.5~2.2mで、梁は長さ5.5m、柱間1.76~2.08mとなっている。検出面からの柱痕の深さ

乾遺跡



第58図 掘立柱建物 6

は13～22cm、掘り方の径平均38cm、柱痕は径18cmである。北側の梁行は桁方向とは直角になっておらず、建物跡の平面形は少し歪んだ形態を呈している。

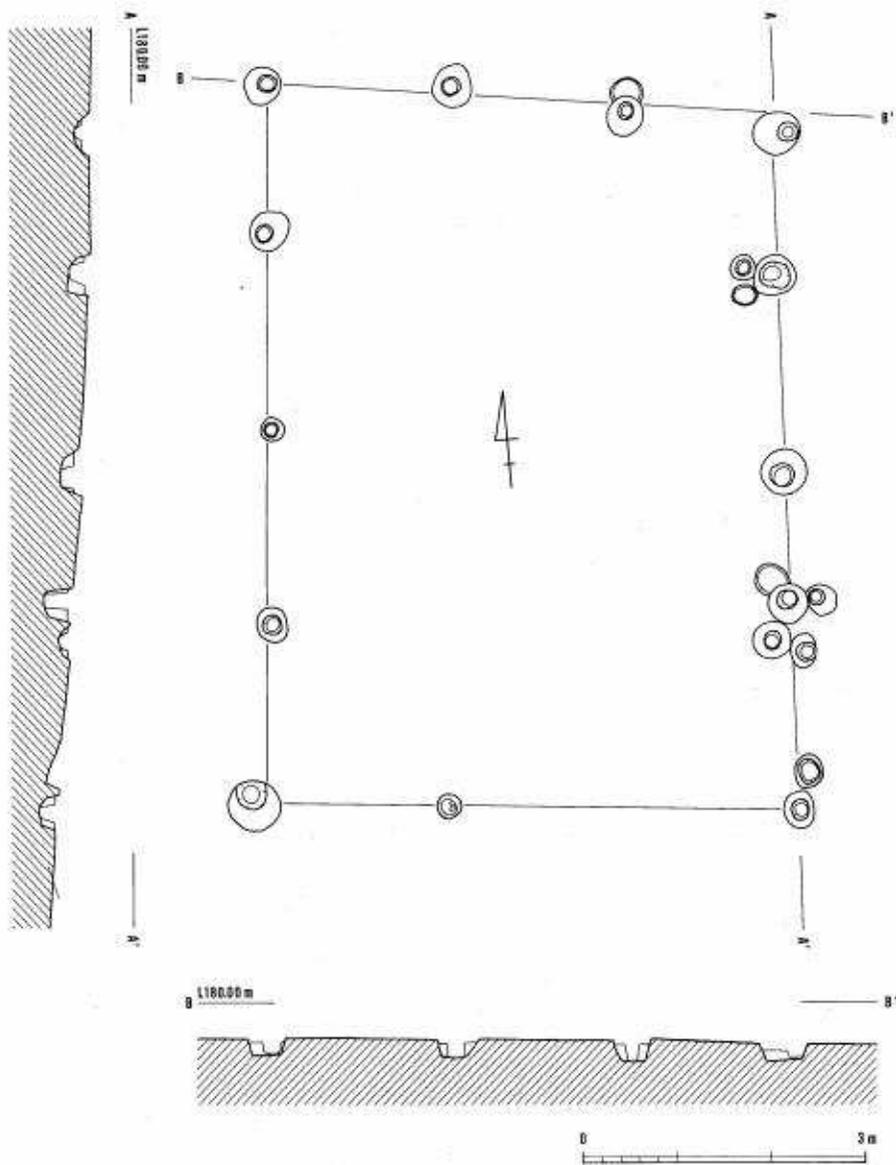
柱穴内より少量の須恵器・土師器が出土しており、図示できなかったが、底部へラ切り未調整の須恵器坏片および埴片があり、平安時代前半のものと思われる。

その他の柱穴

本遺跡では先述の掘立柱建物跡のほかにも多数の柱穴を検出したが、建物跡として組みあうものは認められなかった。柱穴が存在することから建物跡・柵等が当然存在していたはずであるが、現段階では明確にすることはできない。

特筆できる柱穴として、調査区中央部南端に存在する柱穴1 (P-1) がある。柱痕は検出できなかったものの、多くの遺物が出土している(第60図)。柱穴の下部には須恵器甕(第61図22)片が詰まっており、上部には須恵質の陶棺片(第67図66)が存在していた。柱穴の径は上部で26cm、下部で19cmで、深さ19cmを測る。甕と陶棺片の出土関係から、甕の蓋

乾 遺 跡



第59図 掘立柱建物 7

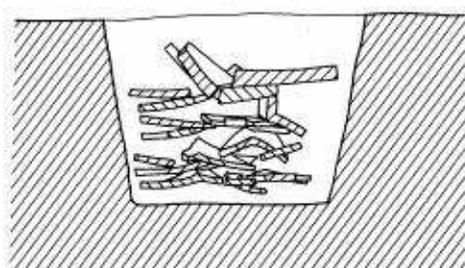
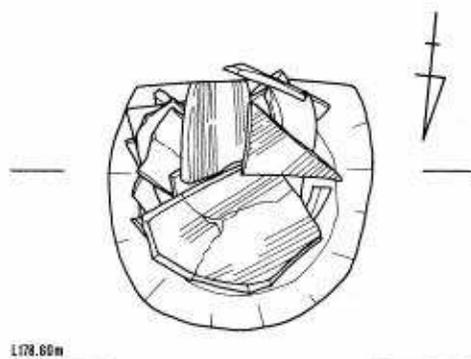
として陶棺片が利用された墓と考えられないこともないが、その出土状態をみると、甕が小片に分かれてほぼ水平に推積しており、墓とするには躊躇せざるを得ない。

遺物

建物跡以外の柱穴からも遺物が出土しているが、大半は細片が多く、図示し得たものは少ない(第61図)。

7は口縁部が屈曲し、つまみを有する須恵器坏蓋である。口縁部は天井部から内彎しながら下方へのび、一度外反してそこから屈曲している。屈曲部の幅は狭い。器高3.2cm、口

径15.9cmである。8の坏蓋は天井部中央を欠失している。口縁部は天井部から内彎しながらのび、屈曲して口縁部としている。屈曲部の幅は7より少し広い。口径16.1cm。9は坏で、全体的にやや薄いつくりとなっている。底部にはふんばりの強い輪高台を貼り付けている。口縁端部は外反する。口径13.5cm、器高4.1cmを測る。11は底部に輪高台を貼り付けた坏であるが、口縁部を欠失している。10は坏もしくは埴と思われ、底部のやや内側に輪高台を貼り付けている。12は薄く高い高台を付した埴で、体部上半から口縁部を欠失している。13は高台を有しない坏で、口径13.6cm、器高3.2cmである。底部か



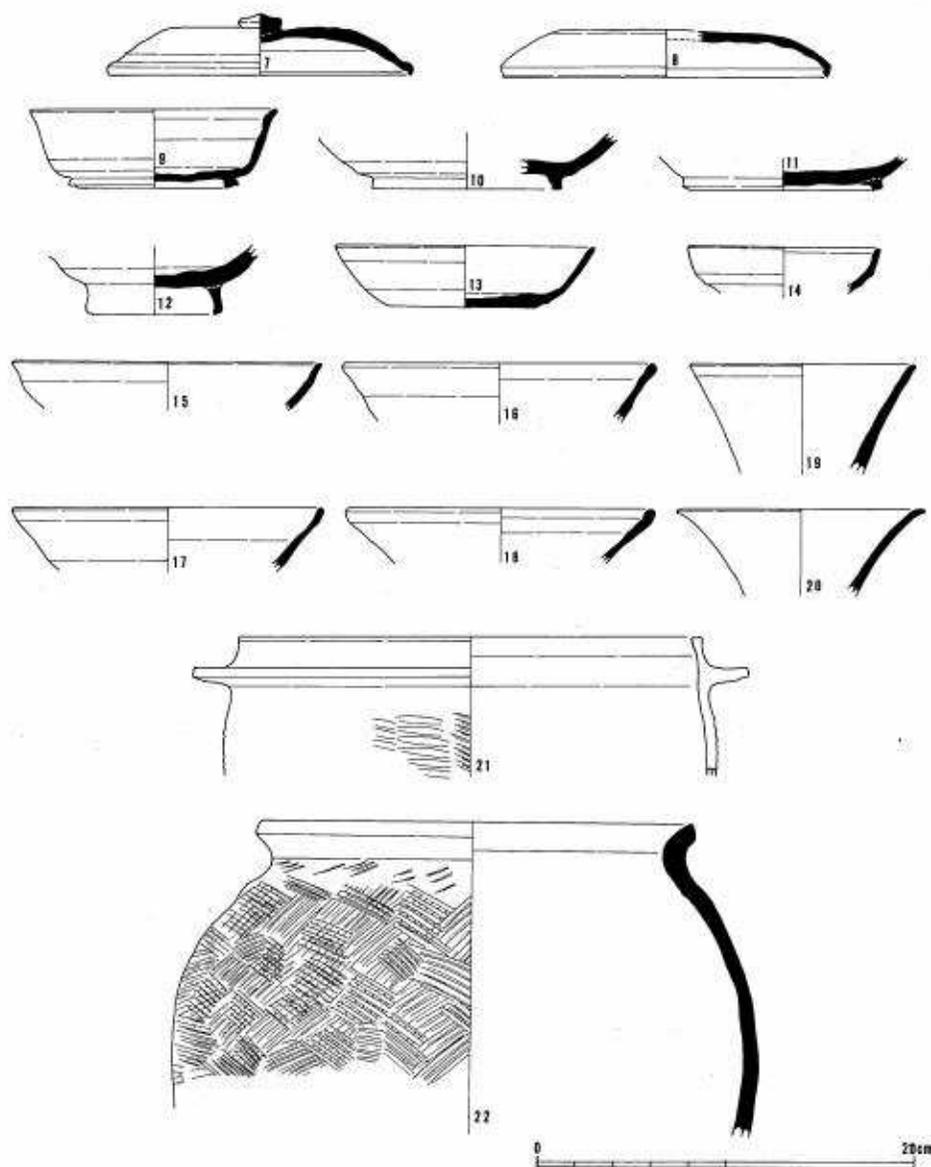
第60図 柱穴1

ら体部へはゆるやかに屈曲し、口縁部は外上方にのび、薄手のつくりである。底部外面はへら切り未調整となっている。14も坏であるが、高台が付くかどうかは不明であり、体部は内彎しながら口縁部へと続いている。15~18は埴の口縁部で、体部から屈曲してにぶい稜をもち、外反する口縁部になるもの(15)や、外反する口縁部をもち、端部を肥厚させるもの(16)、体部上半が外反し、ゆるやかに屈曲して内彎ぎみの口縁部をもつもの(17)、また、その口縁部が肥厚するもの(18)がある。15~18の口径は16.3・16.1・16.0・16.0cmである。19・20は壺の口縁部と思われ、19の口縁部が若干外反しながら外上方にのびるのに対し、20は大きく外反し、口縁端部はほぼ水平にひきのばしている。口径はそれぞれ11.7・12.5cmを測る。21は土師器の羽釜で、口縁部は若干内傾し、ヨコナデ仕上げである。口縁端部はほぼ水平の面をもっている。体部外面には平行叩き痕が認められる。口径は24.5cmを測る。22は先述の柱穴1から出土しており、須恵器の甕である。体部外面には平行タタキを重ねて施している。内面はナデ仕上げである。口縁部は体部から外反し、端部はほぼ垂直でやや丸みをもち、端部上端は尖っている。外面全体に自然釉が付着している。口径は22.6cm、体部最大径は31.6cmである。

柱穴1から出土した須恵質の陶棺は第67図66に示したものである。破片は陶棺の側面部分で、下端が欠失している。上端は凹面を呈し、蓋をはめ込みやすいように受口状になっ

乾 遺 跡

ている。上端受口部の幅は2.1cmで、長さは17cm残存している。外面は平坦で、ハケを横方向のち縦方向に施している。内面はゆるやかな凹面を呈し、上端および下端が厚くなっており、上端で3cm、下端で3.6cm、中央部の薄い所で1.8cmである。下端では内面のカーブが徐々にきつくなり、底面に近いことを示していると思われる。現状での陶棺の高さは内面で21.8cm、外面では23.3cmである。内面の調整は横方向のハケを疎に施している。色調は外面が明青灰色、内面は灰色を呈し、胎土には石英・長石・黒色粒を含んでいる。また、12の須恵器が出土した柱穴より67に示した陶棺片も出土している。67は陶棺の蓋の部



第61図 柱穴出土土器

分と思われ、外面は平坦で削り調整を施しており、青灰色である。内面は凹面を呈し、青海波文を一部残している。端部は上面が剥落しており、原形は不明であるが、棺身の上端受け口に合うように凸面をなしている。蓋の形状は不明であるが、家形四注式になる可能性は大きいと思われる。

7-9は奈良時代、10-16は奈良-平安時代のもと思われる、15-18は平安時代後半期の壙と思われる。21の羽釜は平安時代後半のものと考えられる。22の甕については時期の決め手を欠くが、平安時代末-鎌倉時代前期のものと考えておきたい。陶棺については時期は全く不明であるが、家形四注式のものと考えれば、古墳時代後期-終末期と考えてよいと思われる。

土壌 1 (SK-1)

調査区の西方、掘立柱建物跡 4・6 と重なって存在する浅い溜り状の不整形な土壌である。深さは、最も深い所でも16cmと浅く、規模も東西6.64m、南北2.42mで不整形であることから、遺構面の凹地に包含層が溜ったと考える方がよいかもしれない。

遺物

土壌 1 より出土した遺物は小片が多く、図示できたものは須恵器 3 点のみである。第62図23は坏身で、たちあがり部は低い、器壁は厚い。受部はほぼ水平に突出している。24は貼付輪高台を有する坏で、25も同様であると思われる。24は器壁がやや厚く、底部から体部へは大きく屈曲してたちあがり、外面に稜をもつ。口縁部は外上方にまっすぐにのびており、口径13.3cmである。高台は断面三角形に近いもので、器高は3.9cmを測る。25は薄いつくりで、底部から体部へは24同様屈曲してたちあがり、外面に稜をもっている。口縁部はやや内彎しながら外上方にのび、端部をややつまみだしている。

23は古墳時代後期の土器であり、24・25は平安時代前半のものと思われる。

土壌 2 (SK-2)

土壌 2 は土壌 1 の南にとりついた形で存在しており、土層のうえからでは前後関係は明らかにすることはできなかった。したがって、土壌 1 と同様に遺構面の凹地に包含層が溜ったものとして、一連のものとして扱えるべきであろう。土壌 2 の規模は南北1.94m、東西1.2mで、深さは16cmである。

遺物

土壌 2 から少量の須恵器・土師器片が出土しており、第62図26-30に掲げた。

26は口縁部が屈曲する坏蓋で、天井部が欠失している。27は高台を有しない坏で、底部はへら切り未調整となっている。底部から体部へは屈曲してたちあがり、口縁部端はやや尖っている。口径は15.2cm、器高は3.2cmである。28は輪高台を貼り付けた坏であるが、口縁部および底部を欠失する。厚手で、大型のものになると思われる。29は須恵器壺の口縁

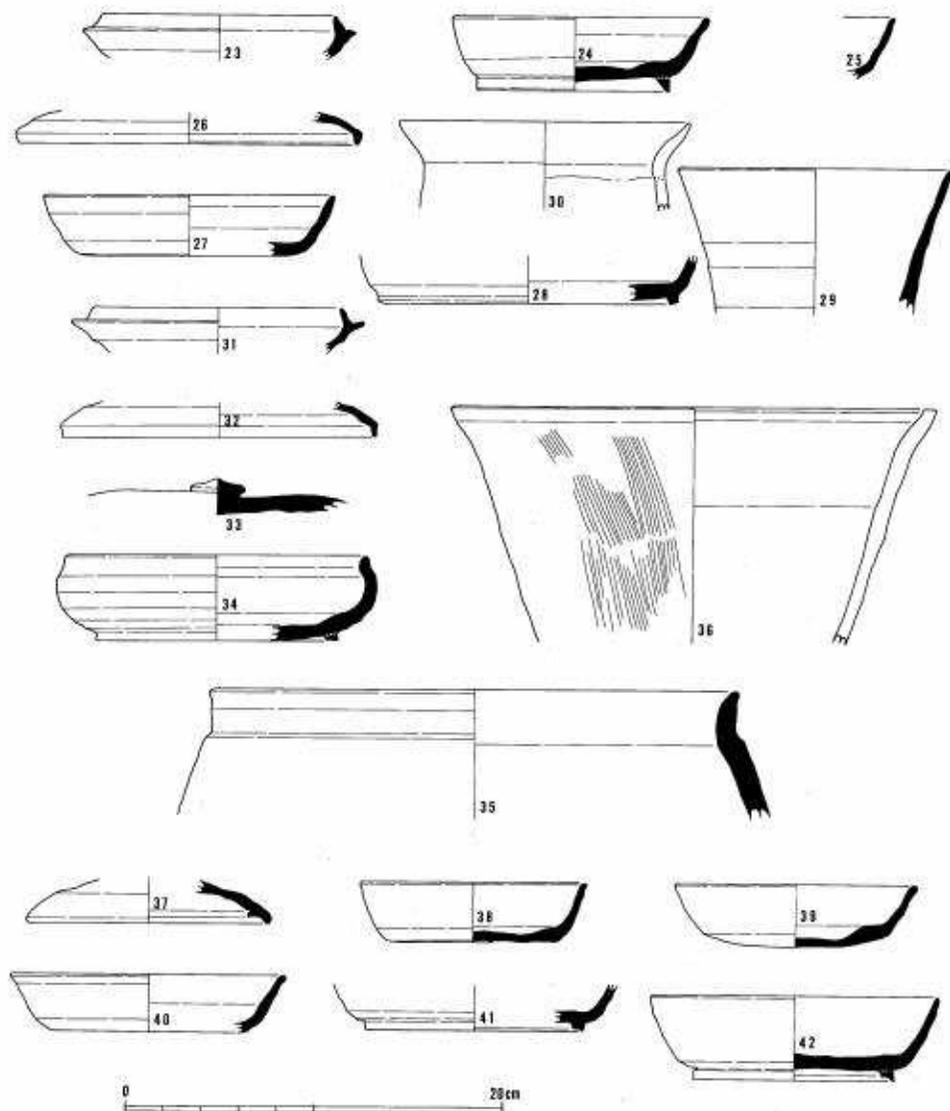
乾 遺 跡

部で、若干外反しながら外上方にのびている。器壁は徐々に薄くなっており、口径は14.3cmである。30は土師器の甕である。表面は遺存状況が悪く、調整痕は残っていない。体部から口縁部への変化はゆるやかで、口縁部は外反したのちやや上方につまみあげている。口縁部径は15.2cmである。

土壌2の出土土器は奈良時代～平安時代前期のものと思われる。

土壌3 (SK-3)

調査区のほぼ中央に存在する土壌で、後述の土壌4と重なっており、土層の観察より、土壌3の方が新しいことが判明している。東西に長い楕円形に近い形状を示し、長径2.28



第62図 土壌1～4出土土器

m、短径1.98m、深さ38cmである。土壌の埋土は、最底部には灰黄褐色砂質土および灰色シルトが堆積し、その上に暗灰褐色砂質シルトおよび灰黄褐色シルト混り砂がU字形に溜り、最後に暗褐色砂質シルトがレンズ状に堆積している。土壌底はやや凹んでいる。

遺物

土壌3から出土した遺物には第62図31～36に示した須恵器・土師器がある。31は須恵器坏身で、たちあがり部は内傾し、やや高い。受部はやや外上方にのびている。32は口縁部が屈曲する坏蓋で、天井部を欠失している。33は蓋の天井部分で、中央が尖ったつまみを有し、天井部は厚手である。34は須恵器の合子形土器で、底部周囲には貼付の輪高台を有している。底部から体部への移行はゆるやかで、体部は大きく内彎している。口縁部は体部上端から大きく屈曲して稜をもち、上方にのびているが、短い。外面の調整は体部が回転ナデで、底部はへら切りの後回転へら削りを行っている。内面は回転ナデの後底部に仕上げナデを施している。口径は15.7cm、器高は4.5cmを測る。35は須恵器の壺と思われ、体部上半は内傾し、口縁部は厚さを減じて上方に屈曲させている。口縁部先端は薄くなっており、口径27.6cmを測る。体部の調整は外面が平行タタキののちナデで、内面は青海波文ののちヨコナデである。36は土師器の甗であるが、破片が小さいため傾きが不正確で、もう少し体部が太くなるものと思われる。口縁部は体部上端を少し外反させて、若干内彎するようにナデを施している。口縁端部はほぼ水平の平坦面をなす。体部外面には縦方向のハケ調整が認められる。

31は古墳時代後期の土器で、他の土器については奈良時代～平安時代前期の範疇に含まれるものと思われる。

土壌4 (SK-4)

土壌3に接して北側にあり、南側を土壌3に切られている。平面形は東西に長い楕円形に近い不整形な形をしている。東西3.78m、南北約2.2mで、最も深い所で検出面より38cmである。土壌中には最下に灰黄褐色砂質土が堆積しており、その上に薄く灰色砂混りシルト、さらにその上に灰褐色砂質シルトがたまり、最上層は淡灰褐色シルト混り砂である。

遺物

土壌4から出土した遺物は第62図37～42に示した須恵器坏蓋と身である。37は内面にかえりをもつ坏蓋で、天井部中央を欠失しているが、宝珠形のつまみがつくものと思われる。天井部から口縁部へは内彎しながらなだらかに続くが、口縁端部はやや屈曲している。口縁部径は12.6cmである。38～40は底部に高台を有しない坏で、底部はすべてへら切り未調整となっている。38は底部は平らであるが、39は膨らんでいる。38は口径11.8cm、器高3.2cm、39は口径12.6cm、器高3.3cmを測る。41・42は輪高台を有する坏で、高台は底部のやや内側に貼り付けている。底部から体部へは大きく屈曲し、底部外面はへら切りののちへら

乾 遺 跡

削りを施している。土壌 4 出土土器は奈良時代～平安時代前期のものと思われる。

土 壌 5 (SK-5)

調査区西北端に存在するもので、内部に陶器の甕の上半部を埋納したものである。土壌の外形は西方が尖った東西に長い不整楕円形を呈し、東西90cm、南北65cmである。土壌は2段に掘り込まれており、内側のものは径36cmのほぼ円形を呈している。1段目の深さは最も深い所で17cm、2段目は深さ14cmを測り、やや凹んでいる。検出面から2段目の底までの深さは27cmである。

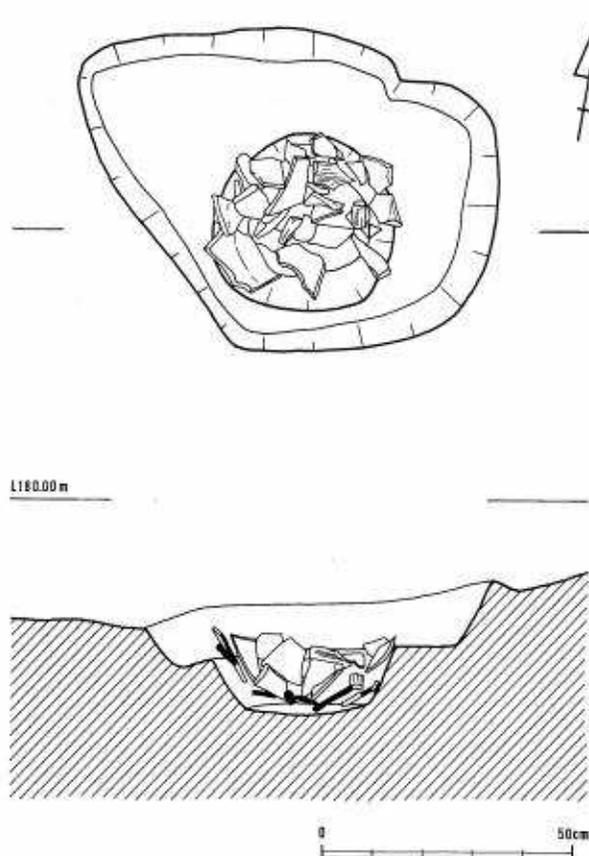
甕は2段目の内部に収められており、小片となって検出された。しかし、破片は土器の上部を上にして土壌壁面についた状態で検出され、口縁部は上から内部に落ち込んだ状態であった。出土した土器は大甕の胴部以上の破片であったが、この遺構が墓である可能性は高いと思われる。他に遺物は出土していない。

遺 物

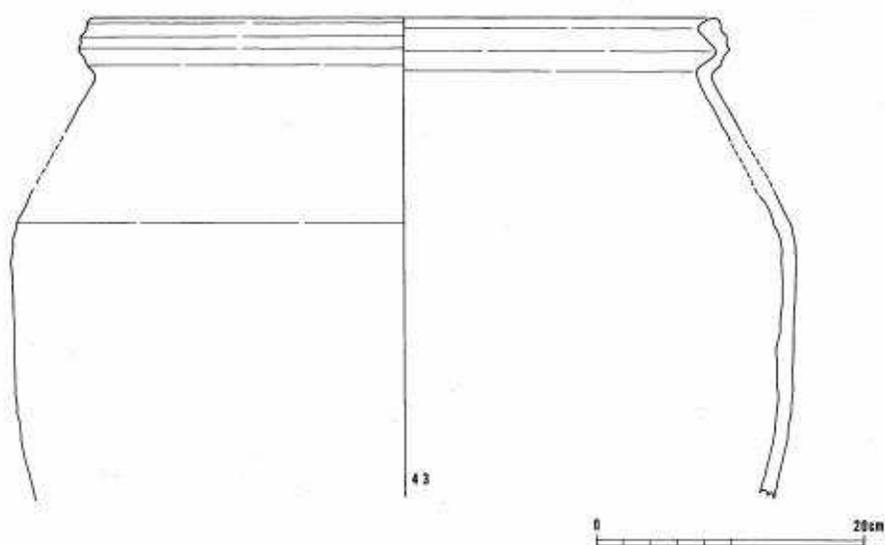
第64図43に示したものが出土した甕である。口縁部は頸部から外反した後、屈曲して内傾する。口縁部外面には3条の凹線文を施している。体部と肩部の境にはにぶい稜線をもち、それ以下は若干内彎しながらすぼまる。口径46.4cm、腹径59.8cmで、外面は灰色から灰白色を呈し、内面は褐灰色から灰黄褐色を示している。

口縁部の手法は備前焼に似るが、形態的には異なっており、産地は不明である。時期は江戸時代でも後期頃のものかも知れない。

溝 1 (SD-1)

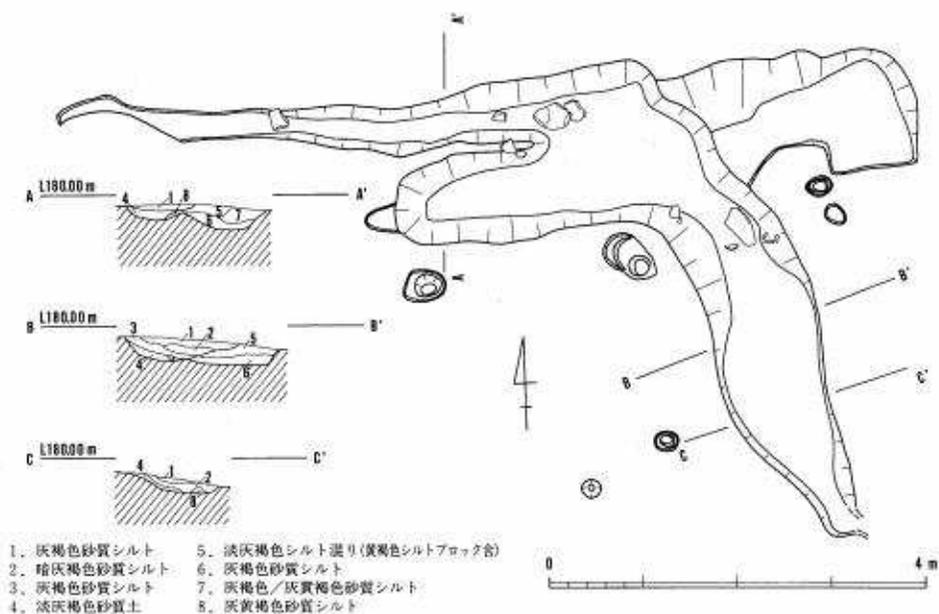


第63図 土 壌 5



第64図 土壌 5 出土土器

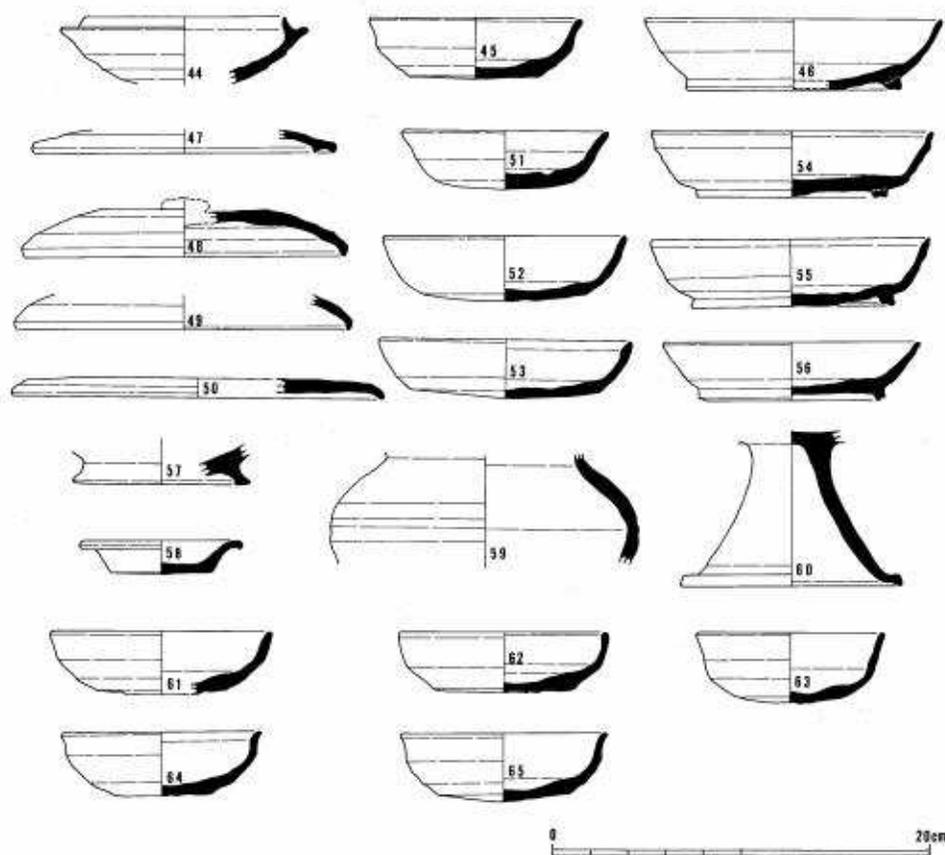
調査区中央部にあり、土壌 4 と西端を接している。溝 2 条が同一方向で複合した状態であり、北側は東西方向の直線のもので、南側のものはL字状に曲がっている。埋土の状況を見ると、北側の方が新しいようであるが、主流は南側と思われ、北側のものより幅が広い。北側の東端では深さ30.6cmあり、西端との底のレベル差は27.4cmあり、西側が高く東が低くなっている。南側のもののコーナー付近と南端との底の比高差は27cmで、南側が低くなっている。南側のコーナー部より南側で須恵器がまとまって出土している。



第65図 溝 1

遺物

第66図44～60に示したものが出土しており、44～46が北側の東西方向のものより出土した須恵器である。44は坏身で底部を欠失している。たちあがり部は外反して内上方へのび、受部は外上方へのびている。口径10.5cm。45も坏身で、底部外面はヘラ切り後回転ヘラ削りを施している。底部から体部への移行はゆるやかで、口縁部は体部上半を外反させてつくりだしている。口縁端部はやや厚くなっている。口径は11cm、器高は3.2cmである。46は高台付の坏で、高台は外側にふんばっている。底部から体部へは内彎しながら外上方へのびてゆき、そのまま口縁部へと続く。薄手のつくりである。口径15.6cm、器高3.7cmである。47はかえりの付く坏蓋で、口縁部のみ遺存している。かえりは内下方に少し突出しただけの小さなもので、口縁端部との間は凹面となっている。口縁端部は先端のみを少し垂下させている。48～50は口縁端部が下方に屈曲した蓋で、48にはつまみが付くと思われる。器高が高く、天井部から体部へは一度上方に反りあがったのち、外彎しながら下方へのびて口縁部へと続いている。口径は16.9cmである。49も48とほぼ同様のものと思われるが、



第66図 溝1・2出土土器

乾遺跡

やや薄手である。50は非常に扁平な蓋で、体部は7.5mmと厚手で、口縁端部にゆくにしたがって徐々に薄くなっている。口径は19.4cmと大きい。51~53は高台の付かない、やや丸みをもった平底の坏で、底部外面はヘラ切り未調整である。51は小形厚手の坏で、口径10.7cm、器高3.1cmである。52・53の口径は12.7・13.2cm、器高は3.4・3.1cmである。口縁部は外傾し、底部はやや厚手である。54~56は底部に輪高台を貼り付けた坏であり、54・55はやや内側に、56は底部の最も外側に貼り付けている。いずれも底部から体部へは大きく屈曲して稜をもってたちあがっているが、56はややゆるやかである。54~56の口径・器高はそれぞれ14.8・3.4、14.7・3.6、13.4・3.1cmである。57は高台部分の破片であるが、塊になるものと思われる。高台径は小さく高く、外側に強く張り出している。58は皿もしくは臺の蓋になると思われる、口縁部が大きく外反している。底部(天井部)は平らで、外面はヘラ切りとなっている。口径および器高は8.6、1.8cmである。59は短頸壺の体部と思われる、口頸部と体部下半を欠失している。体部の最も張った部分に2条の凹線を巡らせている。60は高坏の脚部である。脚端部は水平にのびたのち、下方にひきのばす。

溝1出土土器には古墳時代後期のもの(44・59・60)と奈良時代~平安時代前期のものが認められる。58は類例が認められず、時期は不明であるが、奈良時代~平安時代前期のものとしておきたい。

溝2 (SD-2)

調査区中央東よりの上段面南端で検出した東西方向に近いもので、長さ9m、幅0.56~1.42mの規模であるが、深さは17cmと浅く、先述の土壌1・2同様包含層の溜りであるかもしれない。埋土は灰褐色砂質土一層のみで、内部より須恵器が若干出土している。

遺物

図示した遺物はすべて須恵器の坏身で(第66図61~65)、高台が付かず、底部外面の調整はすべてヘラ切りである。体部から口縁部へは内彎しながらたちあがり、外上方にのびるもの(61・62)やほぼまっすぐ上方にのびるもの(63)、また、口縁部が外反するもの(64・65)がある。61~65の口径は、11.5・10.3・9.7・10.3・10.7cmで、器高は3.4・3.1・3.7・3.4・3.6cmで、63が口径に対し器高が高い。

溝2出土土器はその特徴から飛鳥・藤原期のものと思われる。

包含層および攪乱層出土土器

先述のように遺構面(黄灰色粘質土)の上には灰色系・褐色系の砂質シルトが堆積しており、その層中に多くの須恵器・土師器等を含み、それらの中には鉄釘・陶棺片も含まれていた。調査区ほぼ中央下段面には長さ6.94m、幅4.9m、深さ1.33mの不整形な楕円形の落ち込みが認められたが、ここからは近世の遺物が若干混じっており、また、埋土中には腐植した草木類が入っていたことから時期は近世以降のもので、形状・深さから溜め池状

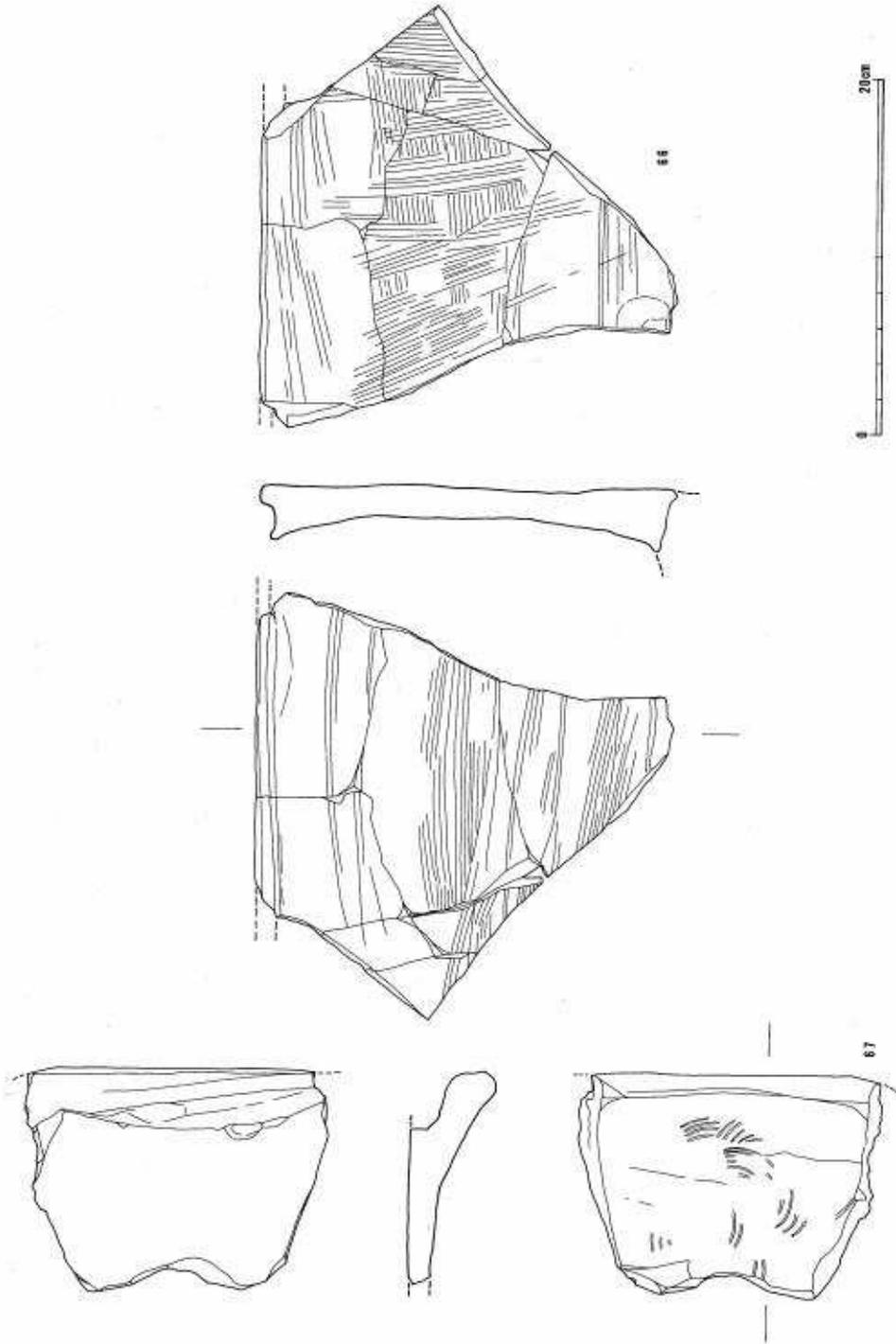
のものと思われる。以下包含層出土遺物と池状遺構出土遺物とをあわせて記述する。

陶棺

第68図68～72に示したもので、68は若干彎曲しており、調整がヘラ削りであり、先述した陶棺の特徴からすると蓋の部分にあたると思われる。厚さは1.9cmである。69は側面部分上端であるが、内面の一部が残存しているにすぎない。上端面は凹面を呈しており、内面は指オサエのちナデである。70も陶棺身部上端部の破片で、外面は板ナデ、内面はヨコナデ調整である。厚さは2.3cmである。71・72は陶棺身部分の破片で、外面はハケ調整、内面は板ナデもしくはナデ調整である。厚さは71が1.6cm、72は1.6～2.1cmを測る。

須恵器

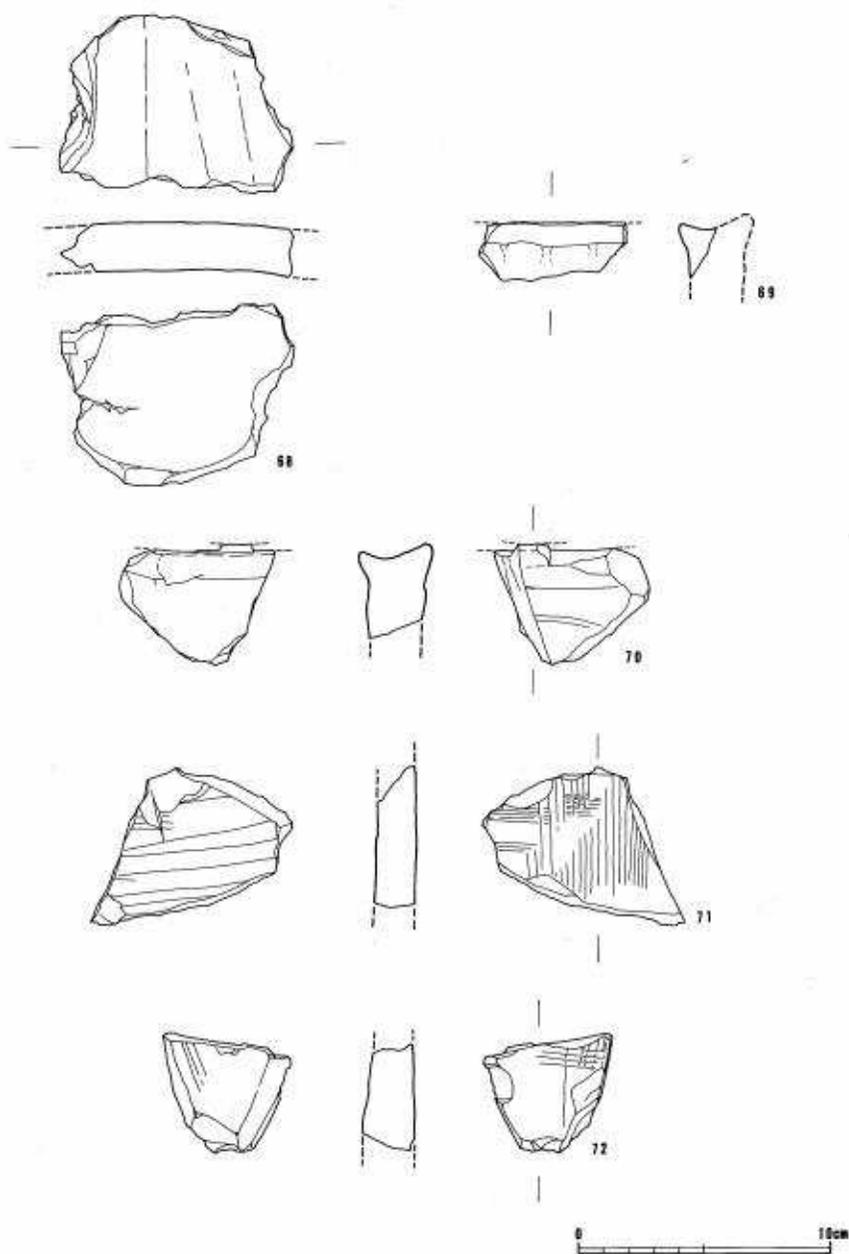
第69図73～96は包含層出土の須恵器である。73・74は口縁端部を下方に屈曲させた坏蓋で、73の口縁部は体部から内彎気味に下がってきたのち、横方向に屈曲させている。内外面とも回転ナデ調整である。74は口縁部のみの破片であるが、体部から内彎しながら口縁部へと続いている。口縁端の屈曲部はやや内方にひきのぼした感じのつくりとなっている。75は内面にかえりをもつ坏蓋で、口縁端部は内彎する。76の坏身はたちあがり部が内上方にやや高くのびている。受部は外上方にのび、体部の傾きとほぼ同一となっている。77～83は底部外面に輪高台を貼り付けた坏身で、底部から体部へは大きく屈曲して外上方にのびているようである。77の高台は底部の最も外側に貼り付けており、外方に強くふんばっている。底部は外側に丸味をもって張り出しており、高台よりも下方に出ている。78～83は高台がやや内側にあり、81～83は外側にふんばっているが、78～80はほぼまっすぐ下方にのびている。底部は平らで、78のみ丸くなるようである。77の口径は15.2cm、器高4.5cmである。84～89は底部を欠失しているものもあるが、底部に高台のつかない坏身と思われる。84は底部から口縁部への屈曲はゆるやかで、口縁部は外上方に直線的にのびる。87も同様に直線的にのびるが、底部～体部への屈曲度が大きく、口縁端部は外反する。85は底部から内彎しながら体部へと続き、一度外反したのち口縁端部は内彎している。86は稜塊になると思われるが、底部は欠失している。輪高台が付くかもしれない。屈曲部の器壁は1cmと厚く、口縁端部にゆくにしながら徐々に細くなっている。口縁部は外上方にほぼ直線的にのびる。87は口径が大きく、16cmを測るが、88・89はともに底部から屈曲して外上方にのびる体部～口縁部をもつ。90は塊形を呈しており、実測図では大形であるが、破片が小さいため不正確である。底部はヘラ切りで、底部から体部へは内彎しながらたちあがる。91・92は塊の口縁部で、若干外反しながら外上方へのびる91と内彎気味に外上方へのびる92とがある。93のような底部になると思われる。93の底部は平らで、回転糸切り調整である。94は直口甕口縁部で、口縁下に断面円形の把手を貼り付けている。口縁部上端は平坦で、外方に少しまみだしている。口縁下に一条のゆるい凹線を施している。95はやや軟



第67図 出土陶棺(1)

乾 遺 跡

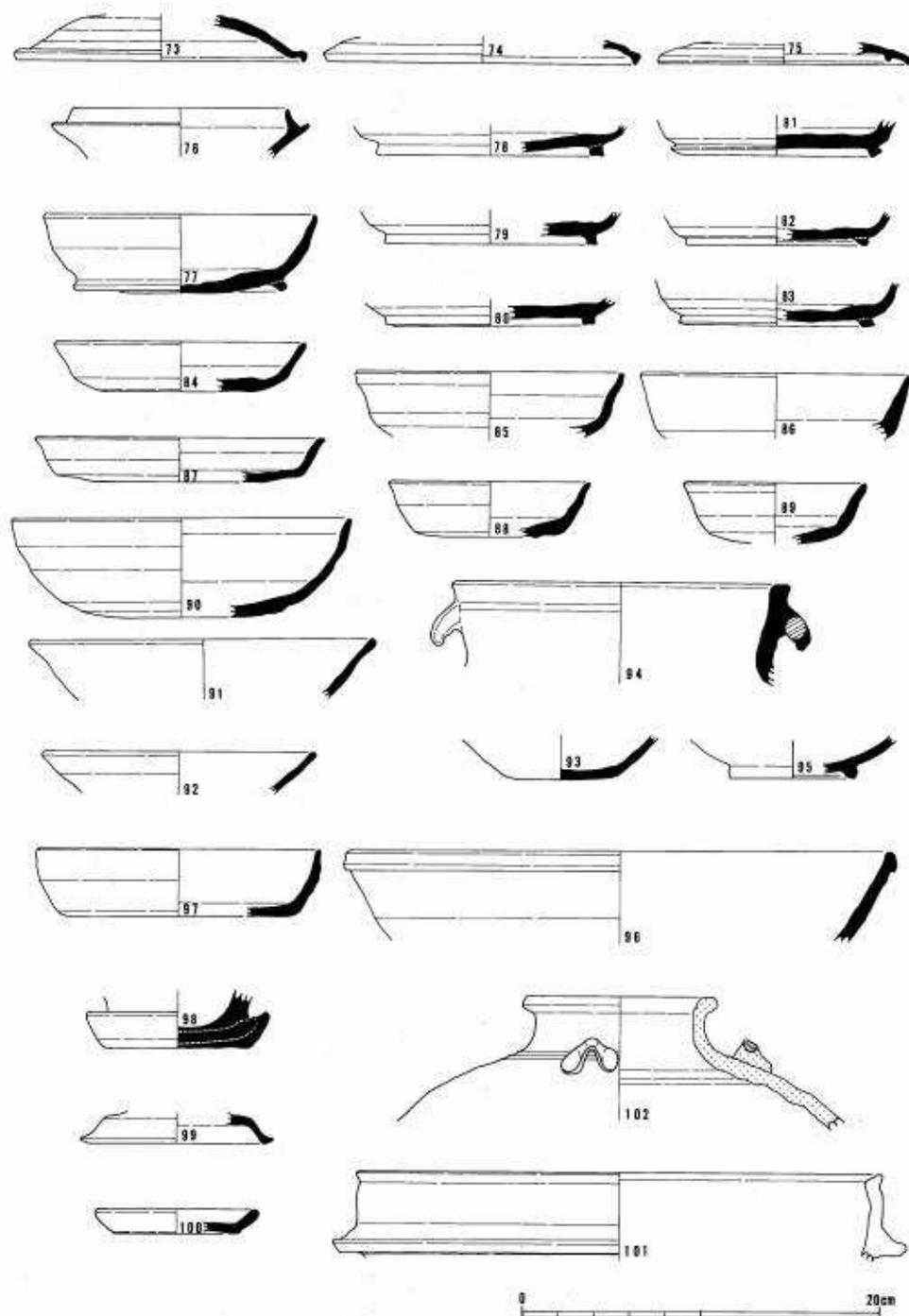
質の緑釉陶器で、底部の高台は貼り付けたのち削って整形しており、内外の表面全体に淡緑色の釉を塗布している。生地は灰色を呈している。96は灰色を呈する鉢で、片口が付くものと思われる。体部は少し内彎し、口縁部端は上下に拡張し、外面はやや内傾する。焼成は良好であり、堅緻である。口径30.4cmである。97~100は近世の攪乱層より出土したもので、97は高台の付かない坏で、底部外面はへら削りののち回転ナデ調整。底部から体部



第68図 出土陶棺(2)

乾 遺 跡

へは大きく屈曲してたちあがっている。口縁部端は薄くなり、先端はやや尖る。98は鉢の下半部で、底部は厚い円板であり、円板の端部は上方にひきのぼしている。底部側面は回



第69図 出土土器

転へラ削りののち回転ナデ調整、底面は静止のへラ削りである。99は高杯の脚裾部と思われ、一度水平にのびたのち、屈曲して下外方に垂下し、端部を外方に若干つまみだしている。やや薄いつくりである。100は須恵器小皿で、底部は上げ底風になっており、回転糸切り痕が残る。口径は8.8cm、器高1.4cmである。



第70図 包含層出土緑釉陶器

包含層および近世攪乱層出土の須恵器は、76・98のように古墳時代後期から、91～93や100などのように平安時代後期末～鎌倉時代初頭のものまで認められる。

土師器

101の土師器羽釜は近世攪乱層より出土しており、鏝の幅が狭いもので、口縁部上部を一度内方に少し屈曲させ、端部を外上方につまみ出している。口縁部上端面は内傾している。平安時代の所産と思われる。

陶器

102は先述の池状遺構から出土したもので、横耳をつけた四耳壺であると思われる。肩部上端に2条の沈線をめぐらし、耳を貼り付けている。口縁部は上方にのびたのち、短く外反し、上端は平坦に仕上げている。口縁部～体部外面には褐色の灰釉を施している。内面はにぶい黄色を呈し、胎土には1～2mmの砂粒を多く含み、特に表面には石英が吹き出しており、信楽系の焼物と考えられる。

時期は17世紀と思われるが、その時期の信楽焼とは口縁部の形態が若干異なっている。

(岸本)

石器 (第71・72図)

本遺跡からは10点の石器が出土している。いずれも原位置を遊離し、後世の遺構あるいは包含層中より出土している。9点を図示したが、他にサヌカイト製楔形石器1点がある。

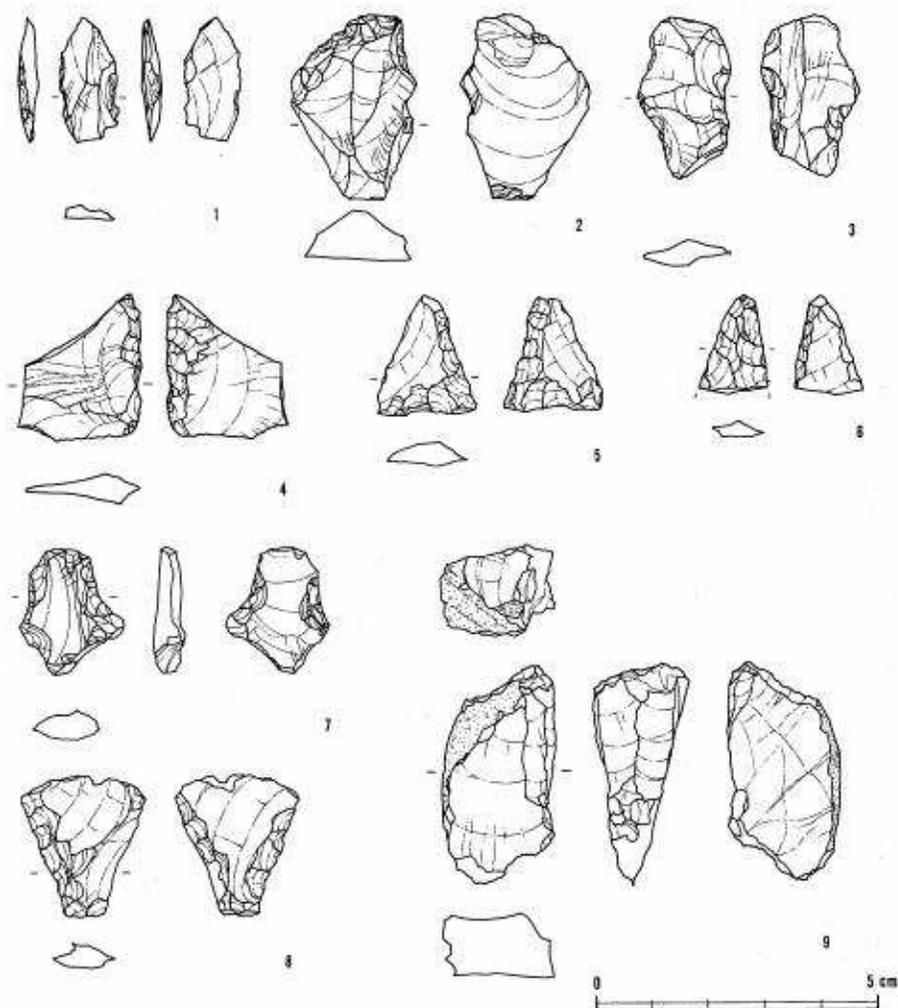
1・2はナイフ形石器である。1は、極めて小型のサヌカイトの横長剥片を素材とし、その二側縁に腹面側から二次加工を施したものである。背面側には斜交する2枚の剥離痕と、1枚のポジティブな剥離面（いわゆる底面）が認められ、剥片素材石核から剥離されたことが理解される。しかし、背面側の剥離面の構成と、その剥離方向から、瀬戸内技法とは異なる剥離工程をふくんだものと考えられる。包含層中より出土した。長さ22.0mm、幅10.0mm、厚さ3.2mm、重量0.7g。2は、サヌカイトの縦長剥片を素材とし、その打面側から二次加工を施したものである。素材となった剥片はやや幅広の縦長剥片であり、背面側にも腹面側と同一方向からの剥離痕が認められることから、組織的な剥離技術が存在し

乾 遺 跡

たものと思われる。溝1の埋土中より出土した。長さ33.1mm、幅23.3mm、厚さ8.5mm、重量6.6g。

3・4はサヌカイト製削器である。3は、小型の剥片の二側縁に、背・腹両面よりやや不規則な二次加工を施したものである。長さ29.0mm、幅17.9mm、厚さ4.0mm、重量2.0g。4は、横長剥片の打面部側縁辺に、背・腹内面から二次加工を施したものである。3に比べて規則的な二次加工で、直線的で鋭利な刃部が作出されている。長さ25.2mm、幅21.8mm、厚さ3.2mm、重量1.9g。3・4はいずれも包含層中より出土した。

7は、鉄石英製の削器である。小型の剥片の二側縁に、背・腹両面から二次加工が施されている。刃部は、両側縁ともやや内彎している。包含層より出土した。長さ22.2mm、幅18.4mm、厚さ5.0mm、重量2.1g。



第71図 包含層出土石器

5・6はサヌカイト製石鏃である。5は、平基式であり、6は基部が欠損しているが、凹基または平基式の無茎石鏃であったろう。5は両面に、6は片面に素材剥片上の面をとどめており、素材変形度は低いといえよう。



第72図 柱穴出土石核

いずれも包含層よりの出

土である。5は長さ21.3mm、幅17.2mm、厚さ3.9mm、重量1.1g。6は長さ17.6mm、幅12.2mm、厚さ3.0mm、重量0.6g。

8は、サヌカイト製石鏃の基部である。鏃部は古く折損しているが、扇形の基部の形状から、比較的長い鏃部を有するものと思われる。溝1の埋土中より出土した。長さ24.9mm、幅22.0mm、厚さ4.0mm、重量1.8g。

9は、サヌカイト製石核である。剥片を素材とし、その一端に1回の剥離を加えて、後方に傾斜する打面を作出している。剥離作業は、石核の小口面からおこなわれている。剥離作業面には、5枚の剥離痕のほか、石核側方からの1～2回の剥離痕が認められる。剥離の進行した最終段階の残核と思われ、打面縁は潰れている。柱穴より出土した。長さ39.5mm、幅16.9mm、厚さ20.0mm、重量12.3g。

乾遺跡出土の石器は、数時期にわたる遺物が混在している。1・2のナイフ形石器は、旧石器時代後期に、他は縄文～弥生時代という広い時期幅をもつ可能性が存在する。9については、旧石器時代末の細石刃核かとも考えられるが、他に当該期の遺物を見ないことから、断定は避けねばならないだろう。 (久保)

6. 小 結

検出した遺構は掘立柱建物跡7棟と、遺物が出土した土壌・溝が5基・2条であった。

各遺構から出土した遺物は土壌5を除いて古墳時代終末～平安時代中期に属するものであるが、細かくみれば、掘立柱建物跡1から出土した環(1)は奈良時代中頃のものとして推定され、掘立柱建物跡2出土の須恵器(2)は奈良時代後期～平安時代初頭の環と考えられる⁽¹⁾。掘立柱建物跡3・4の埴(3～5)は口縁の端部付近が屈曲して外反する特徴をもっており、この特徴を示す類例が加古川市札馬45号窯跡から出土している。札馬45号窯跡⁽²⁾は報告書によれば10世紀中頃と考えられている。

土壌1出土の環(24)は、高台部は断面三角形を呈しているが、口縁部の傾斜や形状を

みると平城宮跡SD1900出土の⁽³⁾坏BIIIに類似しており、この溝は平城宮Iに比定され、8世紀初頭と考えられている。34は土壙3から出土したいわゆる東海地方の合子であり、平城宮の壺Dにあたり、平城宮SD485(平城宮II)⁽⁴⁾出土のものより退化した型式のものと思われる。土壙4から出土した蓋(37)は口縁部内面にかえりもち、天井部が丸味を帯びて飛鳥⁽⁵⁾Vに相当する。42の高台付の坏は高台部のつくりが当地域に存在する川端窯跡(AN-91)出土土器に非常によく似ており、全体のプロポーションも類似している。川端窯跡出土土器は平城宮IIと考えられており、また、同じく土壙4から出土した高台の付かない坏(38・39)も同様の時期と考えてよいであろう。

一方、溝1から出土した土器のうち、47は口縁部内面に短いかえりがつくもので、飛鳥IVないしVの時期と思われる。蓋48・49は川端窯跡出土土器に類似するが、同時期かあるいはそれよりも若干古いと考えられる。溝1出土の高台のない坏のうち45・51は口縁部が外反するもので、飛鳥V、平城宮Iに相当すると思われる。52・53は川端窯跡出土土器に類似するが、若干古い様相を呈している。高台付の坏(46・54-56)のうち46・56は当地域の郡塚2号窯跡(AN-88)⁽⁷⁾・川端窯跡・落合1・2号窯跡(AE-124)⁽⁸⁾に例があるが、口縁端部の形態は郡塚2号窯跡・落合1号窯跡に近く、54・55の口縁端部のつくりは川端窯跡出土土器に似ている。小皿(58)は郡塚2号窯跡・川端窯跡でも似た例が焼成されているが、58の方が全体的にシャープで口縁端部の外反度も大きい。溝2出土須恵器坏(61-65)は陶邑古窯址群の田辺編年⁽⁹⁾TK-48型式、中村編年⁽¹⁰⁾のIII型式1ないし2段階に相当すると思われる、7世紀中葉～後半の時期である。

以上述べた出土土器の時代観から遺構を時期別にみると、溝2が最も古く、7世紀後半にあたり、次いで土壙1が奈良時代の初めに属する。奈良時代前期の遺構には土壙4と溝1があり、奈良時代中期には掘立柱建物跡1と土壙3が存在している。次いで奈良時代末～平安時代初頭の遺構には掘立柱建物跡2がある。やや降って平安時代中期には掘立柱建物跡3・4が存在している。

次に遺物で特筆できる陶棺片についてであるが、柱穴および包含層から出土した陶棺片はすべて須恵質のもので、蓋の下端部と身の側面部分があり、蓋の外表面が直線的であることから四注式になるものと思われる。これらは付近に存在した古墳もしくは窯跡から運ばれたものと思われ、特に、柱穴1より出土した陶棺片は鎌倉時代の須恵器甕と伴出しており、その時期にはすでに持ち出されていたものと思われる。また、陶棺片は本書所収の溝向遺跡(AK-78)からも出土しており、脚を欠損した底部の破片である。

現存する陶棺身部(66)の内面の高さは21.8cmであり、昭和26年に本遺跡から約1km西南の東山より出土した⁽¹¹⁾陶棺の深さにはほぼ等しい。また、蓋は東山および他の例からみると中央に向かって45程度の傾きであると思われる。棺身と蓋の合わせ部は、身では上端部の

内側に粘土帯を貼り付けて幅の広い凹状の端部をつくりだして、蓋では同じく下端部の内側に粘土帯を貼り付け、凹状につくっており、棺と蓋と身を合わせた際に棺蓋の底状のものが外側にくるように合わせるものと思われ、北平尾タイプ⁽¹⁾⁽²⁾に属し、東山出土陶棺も同じタイプで、東山陶棺の伴出遺物により同タイプは7世紀前半～中葉にあたと考えられている。本遺跡出土陶棺もその時期の所産と考えてよいと思われる。

現在、この地域では7世紀初頭～前半の窯跡が末西（西末2号窯）と宮脇（東山窯）で各1基確認されているにすぎず⁽¹⁾⁽³⁾、窯跡からは陶棺は採集されていない。しかし、当地域が窯業地帯であり、東山陶棺や青龍寺裏山1号墳⁽¹⁾⁽⁴⁾の埴をあわせて考えると、付近でこれらが焼成された可能性が大きいと推察できる。

乾遺跡は7世紀後半から生活の痕跡が認められ、奈良時代中頃から平安時代中期にかけて建物が建っていたと考えられる。当該時期に属する建物跡は本遺跡の70m南に属する溝ノ尾遺跡で多数認められており、これらとの関係がいかなるものであったかが興味ある問題として残っている。

(岸本)

註

- (1) 宇野隆夫「後半期の須恵器—平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成—」『史林』第67巻第6号 1984年
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」VII 奈良国立文化財研究所学報第26冊 1976年
- (2) 中村 浩「考察」『札幌古窯跡群発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告7 加古川市教育委員会 1982年
- (3) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」IX 奈良国立文化財研究所学報第40冊 1981年
- (4) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」VI 奈良国立文化財研究所学報第23冊 1974年
- (5) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」II 1978年
- (6) 森内秀造「川端窯(AN-91)」『青野グム建設に伴う発掘調査報告書』(1) 兵庫県教育委員会 1987年
- (7) 井守徳男「都塚窯(AN-88)」『青野グム建設に伴う発掘調査報告書』(1) 兵庫県教育委員会 1987年
- (8) 山本雅和・山田清朝「落合窯(AE-124)」『青野グム建設に伴う発掘調査報告書』(1) 兵庫県教育委員会 1987年
- (9) 田辺昭三「須恵器生産の展開」『須恵器大成』角川書店 1981年
- (10) 中村 浩「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III 大阪府教育委員会 1978年
- (11) 武藤 誠「摂津国有馬郡東山出土の陶棺」『関西学院史学』IV 関西学院大学史学会 1957年
- (12) 長岡京跡発掘調査研究所「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 1979年
- (13) 三田市教育委員会 高島信之氏の御教示による。
- (14) 太田陸郎「摂北特殊構造古墳2例」『考古学雑誌』第22巻第8号 1932年
高島信之・畠中 剛「三田市青龍寺裏山1号墳出土の埴」『兵庫考古』第19号 1984年

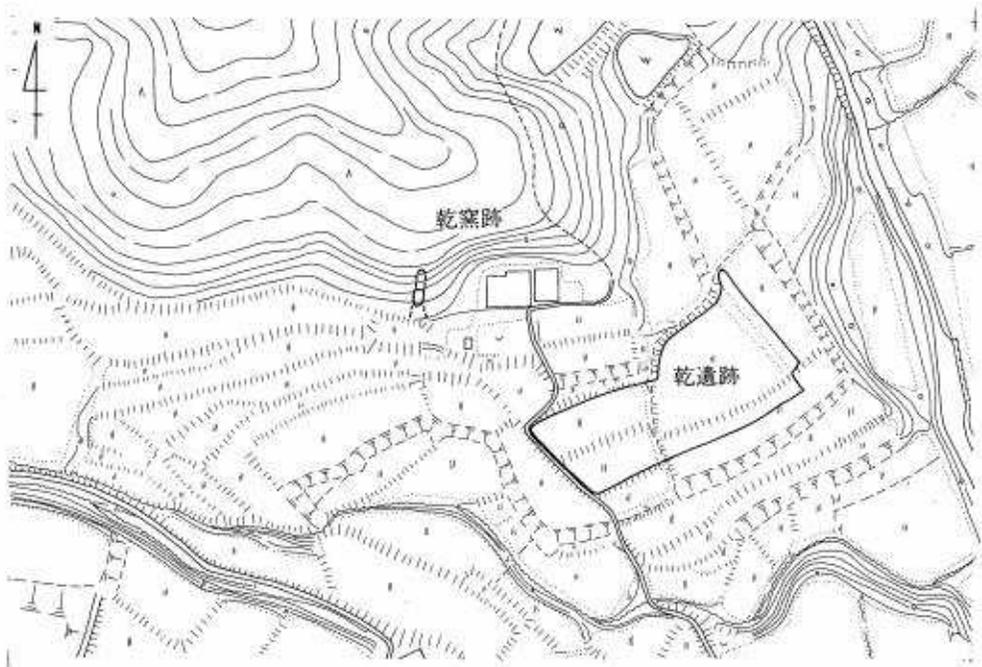
第4節 ^{いぬい} 乾窯跡 (AW-67)

1. 立地

末西地区のほぼ中央部通称井桶山と呼ばれる独立丘陵の南側斜面に位置する。昭和52年度調査の対象となった八木ノ谷古墳・平井遺跡はその北側に、また貝谷窯跡は青野川をはさんで南東方向に位置する。またこの井桶山にはムツガマ、カマノマエなどの字名が残っており、付近には窯跡が存在する可能性が高い。本窯は焚口・燃焼部付近を水田の開墾によって、また煙道下半部、焼成部付近を農道によって削平されており、僅かに煙道部の上端が残存しているに過ぎない。

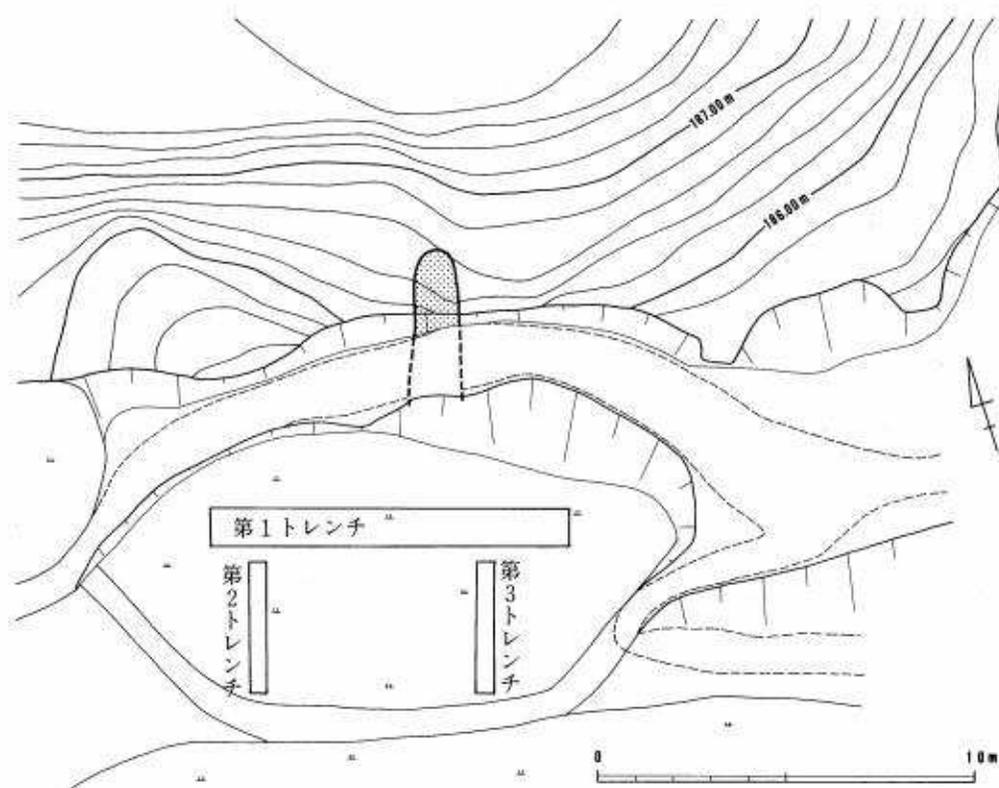
2. 窯体の構造

農道による削平によって煙道の下半部以下を破壊されており、残存長は1.7m、残存部の最大幅1.2m、主軸方向はN16°Eである。残存部から観察すると側壁は最も残存している部分で約30cmを測る。窯体内には表土層下に黄褐色の流土が堆積し、その下部は窯壁の混じった黄褐色土・赤黄褐色土・赤褐色土の順に堆積している。床面はほぼ良好な状態で検出されたが、床面直上で検出された遺物は僅かに須恵器片3点のみである。また残存部西側の一部は東西方向に延びる後世の攪乱墳によって切られているが、この攪乱墳中には炭層・焼土の堆積が見られた。



第73図 位置図 (1:2000)

乾窯跡



第74図 地形測量図

灰原

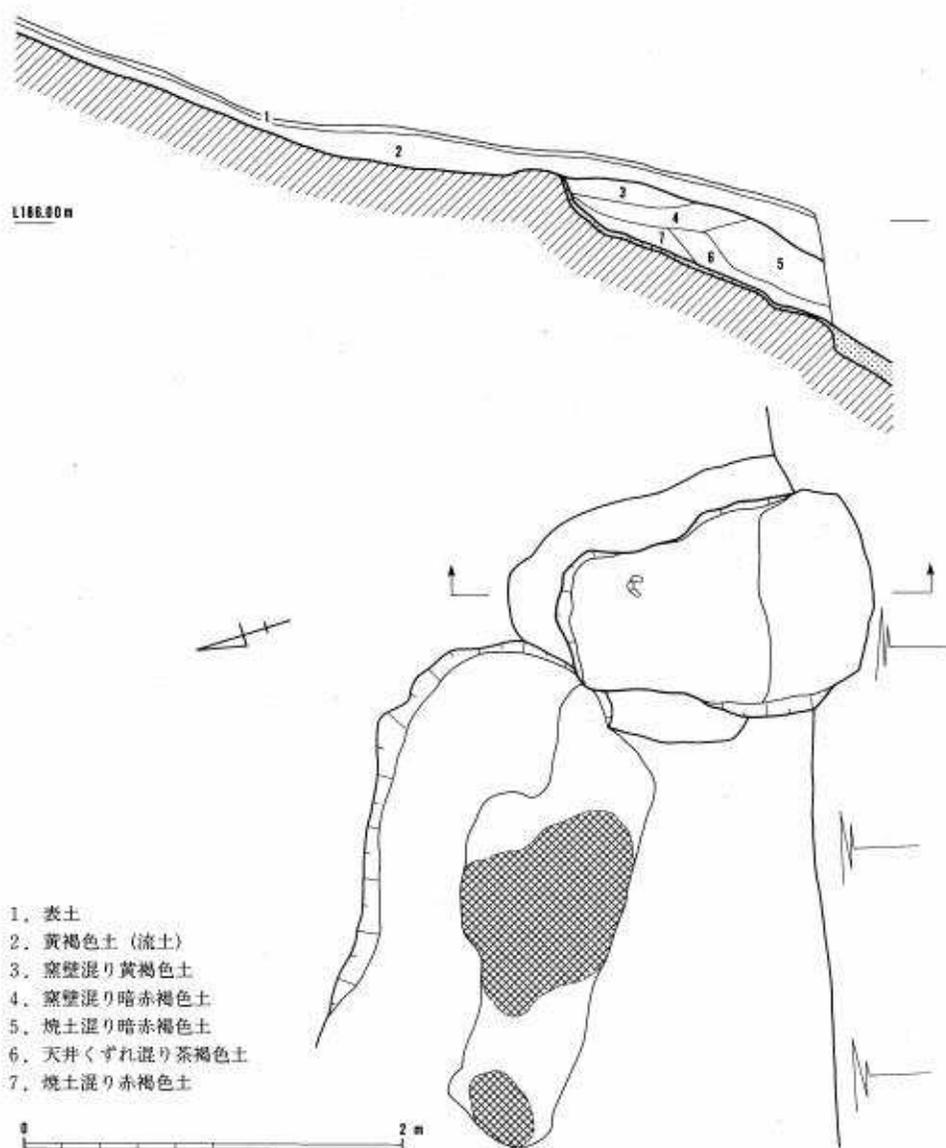
灰原の位置を確認する為、窯体南側の水田中央部に東西9.4m、幅1mのトレンチ(第1トレンチ)、南北3.5m、幅0.5mのトレンチ(第2・3トレンチ)を設定して調査を行ったが、耕土直下はいわゆる地山面となっており、灰層の堆積は認められなかった。恐らく水田開墾の際に削平されたものと考えられる。

3. 出土遺物

以上述べたように、乾窯跡では、窯体、灰原共大きく破壊され遺存状態が極めて不良であった為、遺物の出土量も非常に少ない。出土遺物としては円面硯脚部片、坏身、坏蓋、椀、甕片などが見られるが、その殆どが黄褐色流土中から検出されたものであり、型式にかなりの時期差が認められる。図化した遺物のうち1～3は床面上で検出されたものであり、ほぼこの窯の操業時期を示すものと考えて良いだろう。又4は黄褐色流土中よりの出土であるが、1～3の遺物と比較して、そう時期差は認められず、この窯の製品と考えて良い。

次にこれらの遺物について若干触れてみたい。1、2は坏蓋である。1は焼歪みの為天井部が歪む。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面を再調整する。3

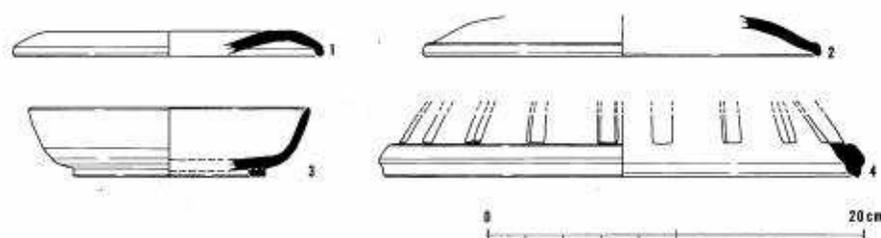
乾 窯 跡



第75図 窯体実測図

は坏である。やや幅の広い低い輪高台をもち体部は直線的に外上方へのびる。口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、さらに口縁部内外面、高台部を再調整する。4は円面碗脚部である。長方形の透しを数箇所もつ。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、透しを入れ、さらに内外面にナデ調整を加える。1～4共細片の為、詳細は不明であるが、形態、調整技法の特徴から、少なくとも8世紀代の範疇に収まる時期の遺物と考えてよい。

乾 窯 跡



第76図 出土土器

4. 小結

上記の様に乾窯跡は灰原、窯体共後世の削平を受け、破壊が著しい為、出土遺物の量も極く少量であった。又出土遺物も大部分は黄褐色の流土中より出土しており、床面直上で検出された遺物は図化した1～3の僅か3点に過ぎない。これらの遺物はいずれも8世紀代に収まるものと考えられ、このことから、一応この窯の操業時期は8世紀代と考えておきたい。8世紀代に属する窯は、青野ダム建設に伴う調査でも落合窯、地福窯などがあり8世紀後半から9世紀初頭にかけて、末西、末、末東地区を中心に窯業生産の1つのピークがあった事をうかがわせる。なお、窯体付近の黄褐色流土中からは須恵器に混じって、染付碗・瓦質火舎・播鉢など近世後半の時期の陶磁器類が出土しており、窯体、灰原の削平時期は近世後半である可能性が強い。

第5節 ^{みぞ}溝ノ尾遺跡 (AW-71)

1. 立地

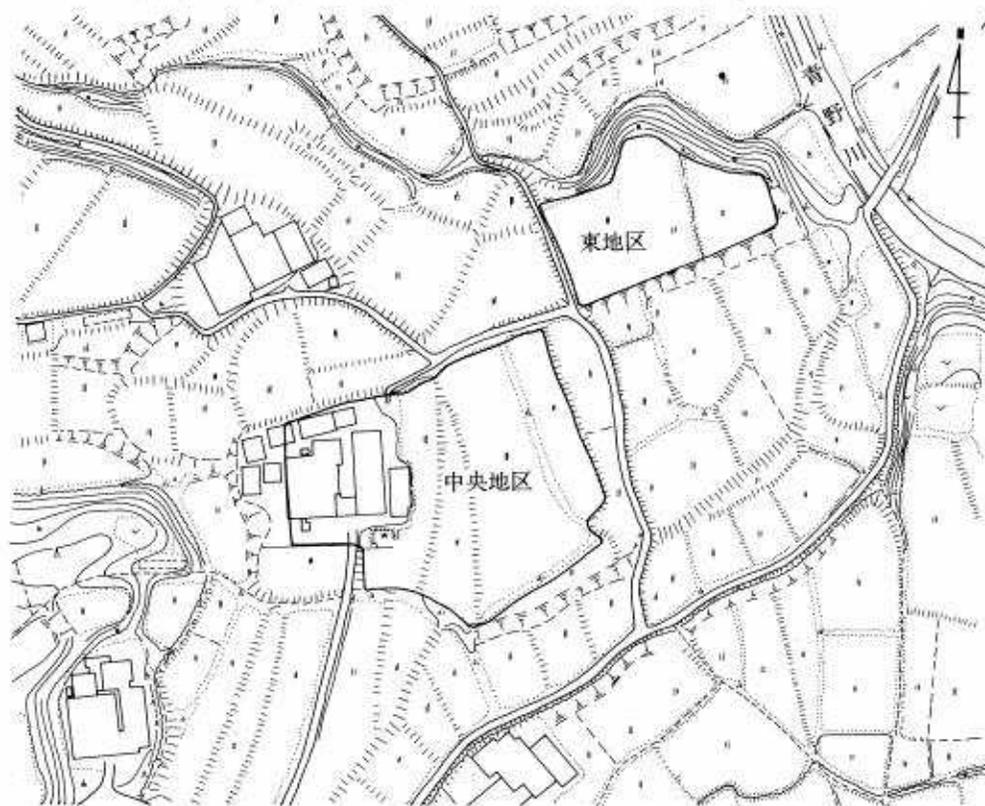
溝ノ尾遺跡は三田市末西字溝ノ尾に所在し、当初AW-71地点と呼ばれていた遺跡である。青野川に向かって西方から張り出した台地の末端付近に位置しており、標高178~181mを測る。台地の上には井桶山遺跡、谷を挟んだ南東の台地上には南台遺跡がある。61年度調査の一部(家屋跡)を除いて、調査実施直前まで水田として使用されていた。

2. 調査の経緯と経過

溝ノ尾遺跡は昭和49年3月の分布調査時に須恵器、サヌカイト等の遺物が採集され、従来AW-71地点と呼称されてきた。

昭和57年・58年にかけて確認調査を実施、この時点で後述する住居址3を確認している。58年には第2次確認調査を行い、柱穴及び住居址4を検出している。

以上の結果をふまえ、昭和59年12月より全面調査(2300㎡)を実施した(中央地区東半部)。同時に調査区周辺に更に確認調査を行い、全面調査が必要な範囲をしぼり込んだ。これによって東地区の全面調査を60年度に行い、59年度調査区に続く西側台地上は61年度に



第77図 位置図 (1 : 2000)

溝ノ尾遺跡

全面調査を行った(中央地区西半部)。

昭和61年度の調査区は、59年度調査区の西で一段(約40cm)高い位置にある。

また、調査区の西に隣接した民家の敷地についても、北摂整備局の依頼により確認調査(坪掘り)を実施した。その結果、敷地東半部(約1270㎡)にも遺構が検出されたため、あわせて全面調査を行った。

遺構面の調査終了後、59年度調査区もあわせて、空中写真の撮影を行った。

溝ノ尾遺跡は昭和61年8月に全調査を終了した。全調査面積は約6250㎡である。

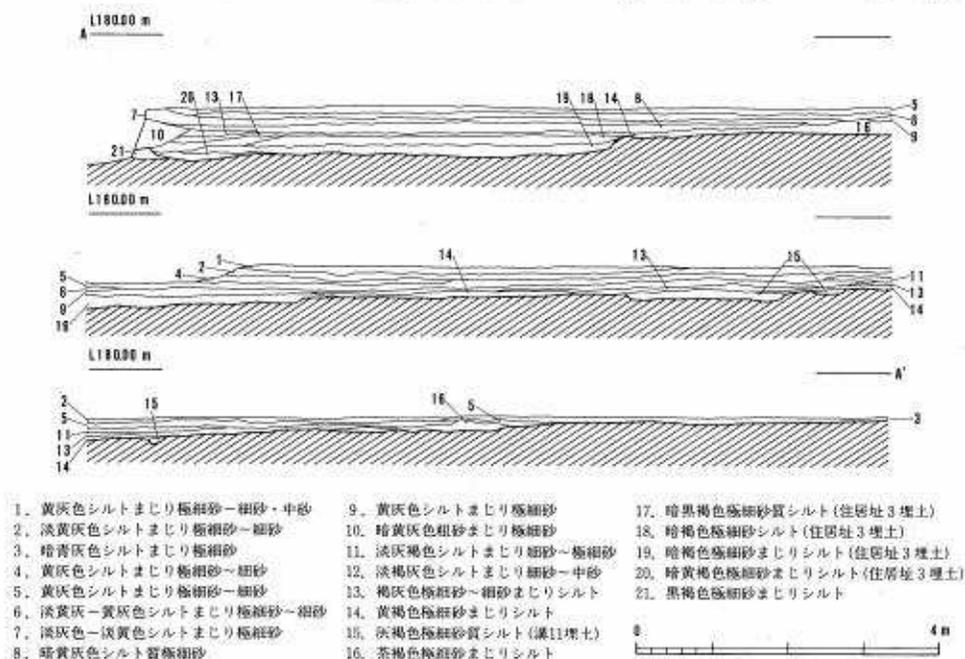
調査の結果、古墳時代後期～奈良時代、鎌倉時代～江戸時代までの幅広い遺構・遺物を検出し、また旧石器の出土を見た。

3. 中央地区

(1)土層

59年度調査対象地は標高178～179mの三枚の水田(以下上段・中段・下段水田と呼ぶ)であった。このうち、下段水田については、調査当初に確認トレンチを入れた所、耕土直下に地山面が出現した。遺構面が極端に削平されていることが判明したため、全面調査区より除外した。以下、土層堆積状況のうち、59年度調査区の土層堆積状況については、上・中段両水田に限って述べる。ここに示した土層断面図は、現耕土を除去した後を示している。

基本的な土層の堆積はI…水田耕作に使用されていた層。(1)～(12)層。II…ビット列掘り



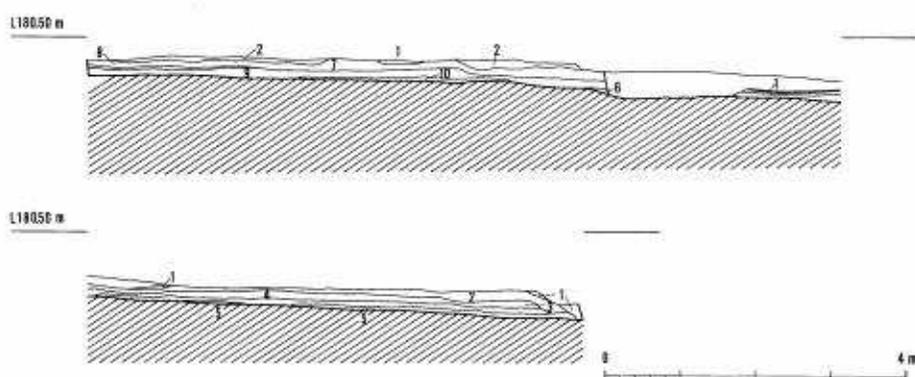
第78図 東半部土層断面図

溝ノ尾遺跡



第79図 遺構全体図

溝ノ尾遺跡



- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 表土 暗灰色砂質シルト | 6. 黄褐色 砂質シルト |
| 2. 床土 黄褐色シルト混り砂 | 7. 灰黄褐色 シルト質砂 |
| 3. 灰黄褐色 シルト質砂 | 8. 灰黄褐色 砂質シルト |
| 4. 淡灰褐色 砂質シルト | 9. 淡灰褐色 砂質シルト |
| 5. 灰褐色 砂質シルト | 10. 灰褐色 砂質シルト |

第80図 西半部土層断面図

込み面構成土(13)層。III…鎌倉時代遺構面構成土(14)層。IV…奈良～古墳時代後期の遺物包含層(16)層。V…奈良～古墳時代後期遺構面(地山面)の5層に大別できる。

I層のうち、(1)から(3)層は上段水田の現耕土に伴う床土及び鉄分溶脱・集積層である。(4)から(6)層は中段水田に伴うもので、(4)層は上段水田面造作以前の中段水田耕土であろう。(5)層は中段水田の床土と考えられ、上段水田直下でも安定した状態で出現している。

(7)(8)(9)層は後述する(16)層を削り出して造った畦畔をはきんで位置する水田の耕土・床土と考えられる。(10)層は下段水田の造作に伴うもの。(11)層は(9)層と同一層の可能性がある。以上の層では中世から近世の遺物が混在している。(12)層は、ピット列直上層。室町時代の遺物を含んでいる。II層(13)層は鎌倉時代の包含層である。水田の造作によって著しい削平を受けており、切れ切れに出現する。ピット列はこの層の上面より掘り込まれている。III層(14)層は、上面より鎌倉時代の柱穴が掘り込まれる。IV層(16)層は、古墳時代後期より奈良時代の遺物を包含している。上部は水田として造作されている。(15)層は溝埋土である。III・IV層間に位置する。V層は地山面である。古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構を検出した。

61年度調査区は、その東半が水田、西半が民家の敷地であった。民家部分については、旧地形の改変が著しく堆積物もほとんどなかったため、土層断面図の作成には至らなかった。東半は2段の水田面であり、30～40cmの堆積が認められた(第80図)。

耕土・床土下位には、包含層と呼んだ灰色系の砂質シルト層が見られる。この層は数枚に分層されるが、包含される遺物はいずれも変化がなく、中世以前のものである。この下

位には、ごく一部に暗褐色を呈する砂質シルト層が、薄く残存しており、中世以前の遺物包含層かと思われたが、特に識別しうる遺物の出土を見なかった。

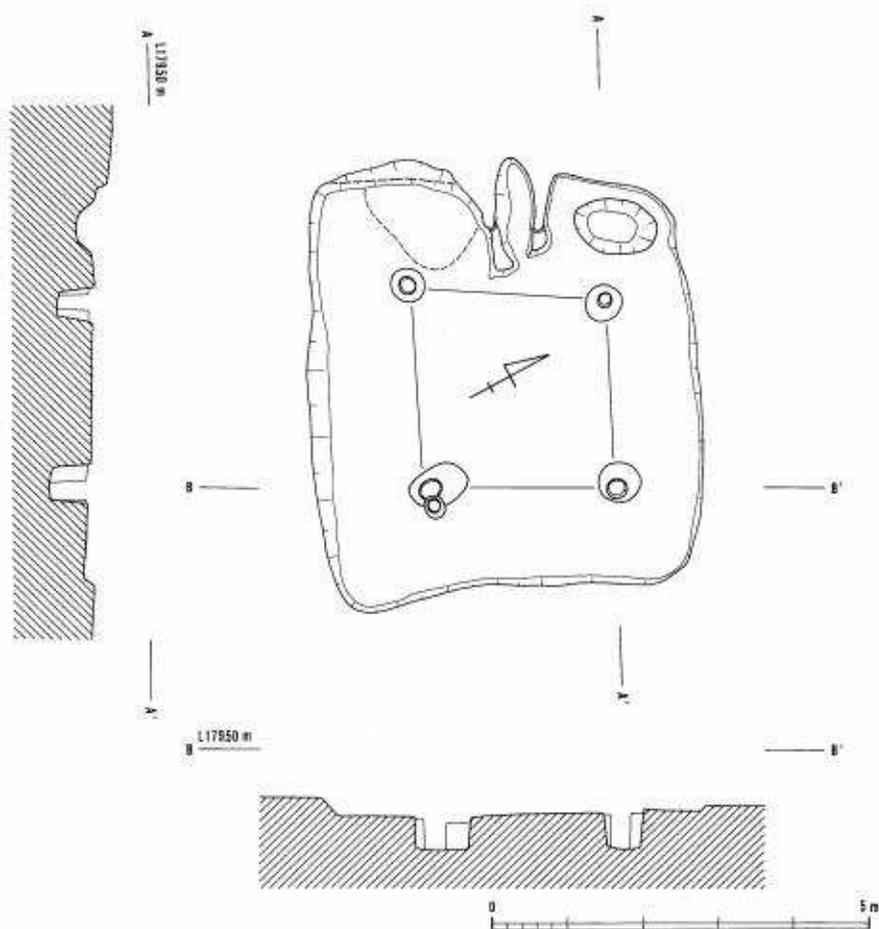
(2)遺構の状況

水田として数度の改作を受けながらも、遺構の残りは概して良好であった。特に奈良時代以前の遺構については包含層が残る部分も少なくなかった。但し、耕作の影響を受けている部分もあり、住居址2の南半部周辺は地山面までも削り込まれ、遺構の残りが悪くなっている。

59年度調査区の遺構は大まかにわけて古墳時代後期～奈良時代、鎌倉時代、室町時代以降の3時期にわかれる。

鎌倉及び室町時代もしくはそれ以降の遺構は調査区北東半部にかたまる。

奈良時代の遺構は調査区全域に展開するが調査区中央部に東西に走る2条の溝を中心に空白帯を残している。概して調査区北半にかたまるものは小規模、南へ展開するものは大



第81図 竪穴住居1

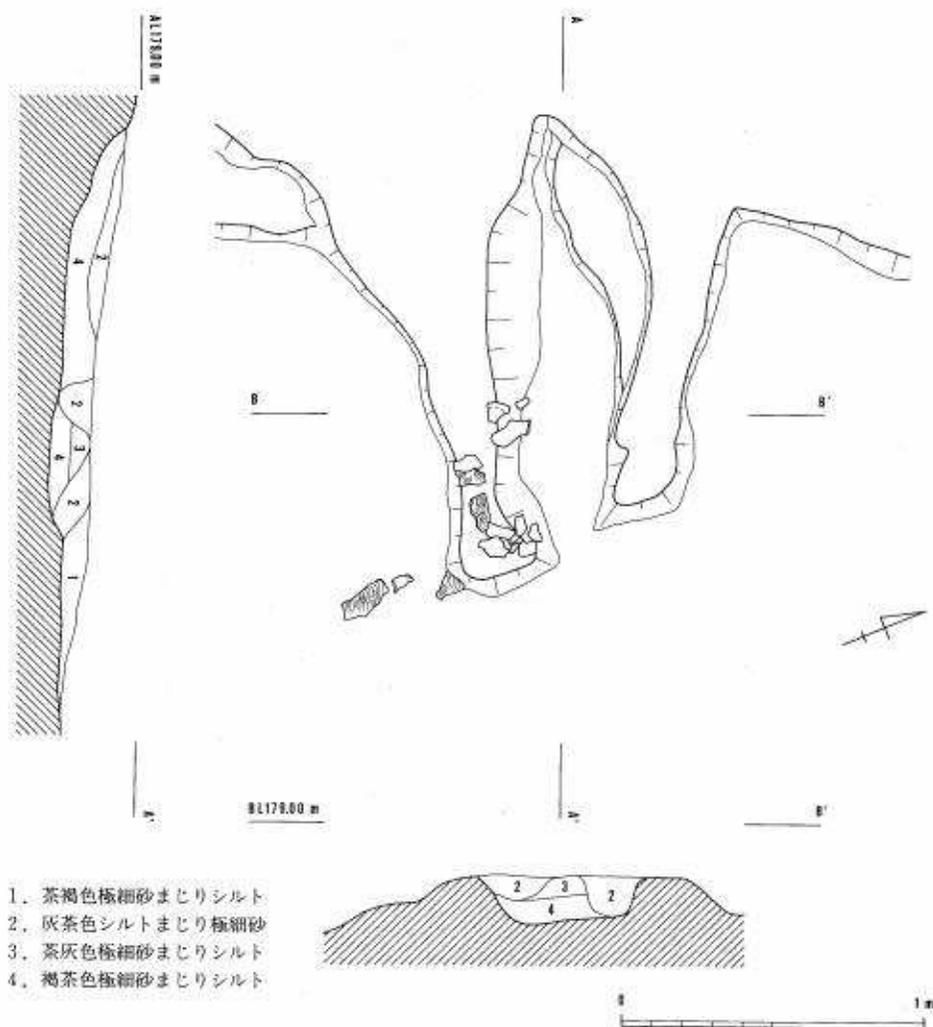
規模な建物址といえる。溝の時期は決め手に乏しく検出した建物址群の配置に関連するものであるか否かは即断できないが、層位的には奈良時代前後におさまる。

古墳時代後期の住居址もまた調査区の全域に円弧状に検出されている。これは先述の建物址群と似かよった位置関係を示している。

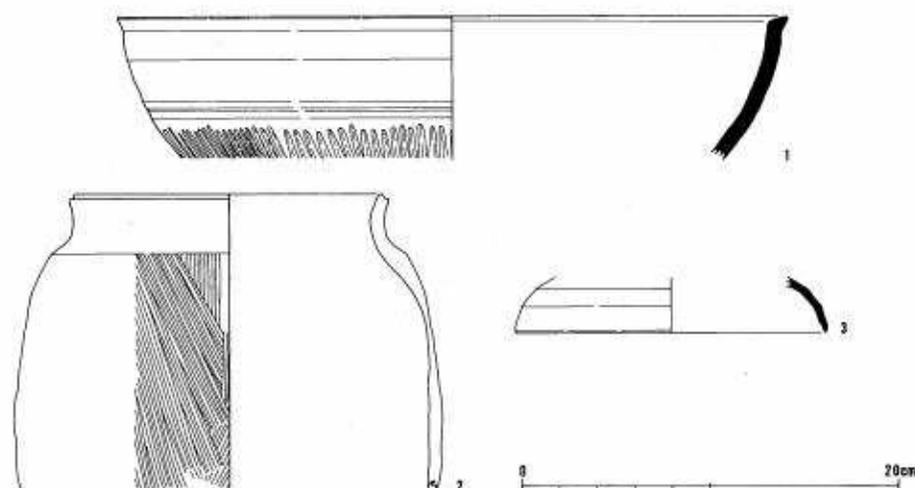
住居址の時期は6世紀末より7世紀前半と短期間に限られる。竪穴住居から掘立柱建物へとスムーズに移行していったと考えられる。

61年度調査区からは、ほぼ全面にわたって掘立柱建物17棟、土塼15基、溝19条の他、多数の柱穴が検出された。調査区西半部は民家の敷地であったため、削平が著しく、遺構は東半分に集中して分布している。

遺構の時期は、古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代の3時期に大別される。



第82図 竪穴住居1カマド



第83図 竪穴住居1出土土器

竪穴住居1

59年度調査区中央北寄りにあり、建物址9と切り合っている。長辺5.5m、短辺5.2m、検出面からの深さ0.15~0.2m、床面積はおよそ29㎡。形状は正方形に近い。

住居址内の遺構として、4ヶ所の柱穴、カマド、貯蔵穴を検出した。周壁溝は検出されなかった。

4ヶ所の主柱穴は、概して径50cm前後の円形で、深さもまた床面から50cm程度掘り下げられている。柱痕の径は20~30cm。柱間寸法は約2.5mであるが、西側の柱穴だけが若干西へはずれている。

カマドは住居址短辺（北西壁）の中央に検出され、地山を削り出してつくっており、長さ約1.6m、幅約50cmを測る。カマドの燃焼部には、焼土塊が多量に入っており、カマドの天井、壁が一時にカマド内へ崩落したことがうかがえる。また、須恵器甕片と共に、2次焼成をうけた土師器甕片が、カマド燃焼部と焚き口付近に多量に散らばっていた。このうち、土師器甕片は貯蔵穴内でも出土している。カマドにむかって右側には貯蔵穴があり、左側には厚く炭・灰の溜まりが遺存していた。

貯蔵穴はカマドにむかって右側に位置している。長径1.1m、短径0.7m、深さ0.4m。楕円すり鉢形をなしている。カマド部の土師器甕片と接合する破片が底面より出土した。

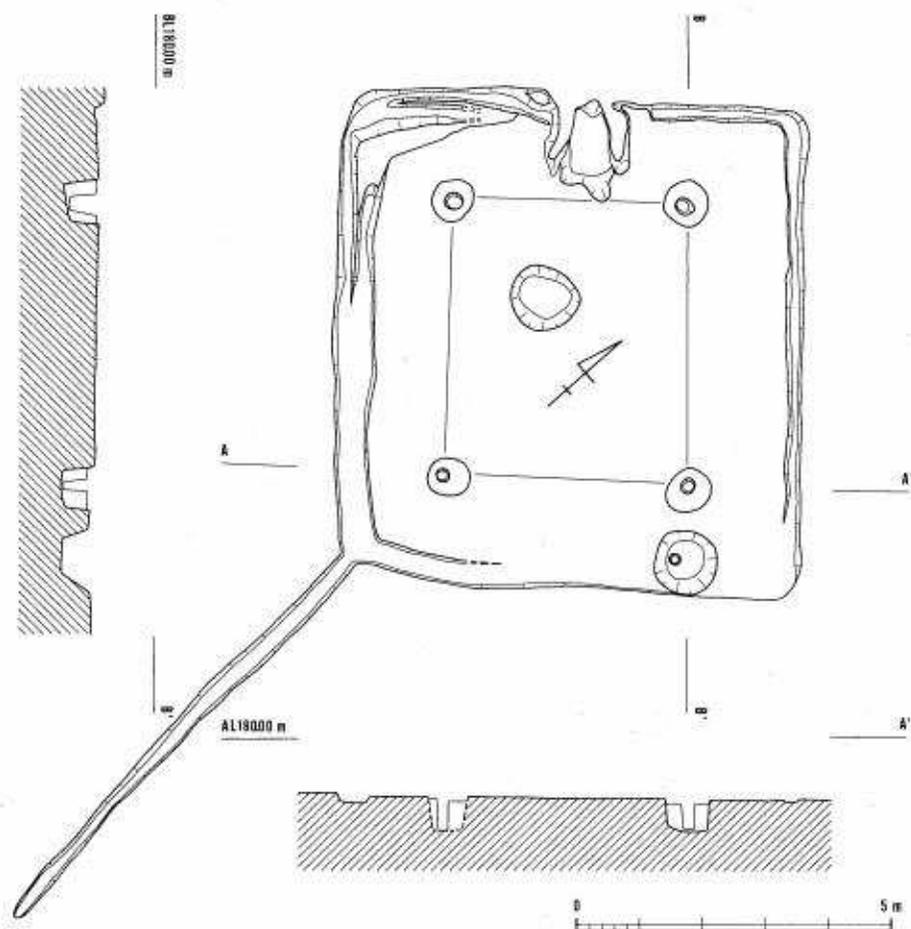
遺物はカマド周辺で須恵器器台片、同甕片、土師器甕片の他、須恵器坏蓋片が出土している。土師器甕片は、破片数は多いが図示できるものはなかった。3は須恵器坏蓋。復原口径約16.5cm、全体に丸味を帯びた器体である。天井部の大半を欠いているが、天井部と体部をわける稜線はかすかで、体部より口縁部にかけてなだらかに移行してゆく。口縁端部はシャープに仕上げられ、内面にかすかな稜をもっている。薄い器壁であるわりにつく

りが雑で、ロクロナデ整形時に粘土紐の凹凸を如実に残したままとなっている。田辺編年TK209型式併行と考えられ、時期は7世紀初頭前後であろう。

1は須恵器器台片である。口縁部から体部にかけて約1/6残存している。復原口径35cm、体部から口縁部にかけては、丸みをもって立ちあがる。口縁端部は面を持ち、外方へつまみ出されている。体部外面には2条の太い沈線と、櫛描波状文が施されている。

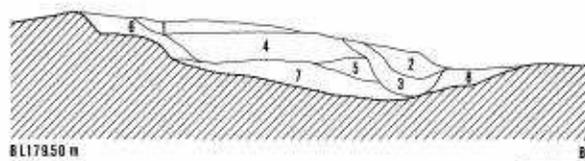
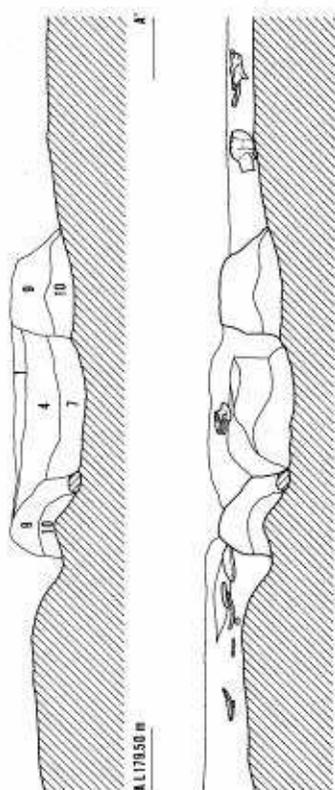
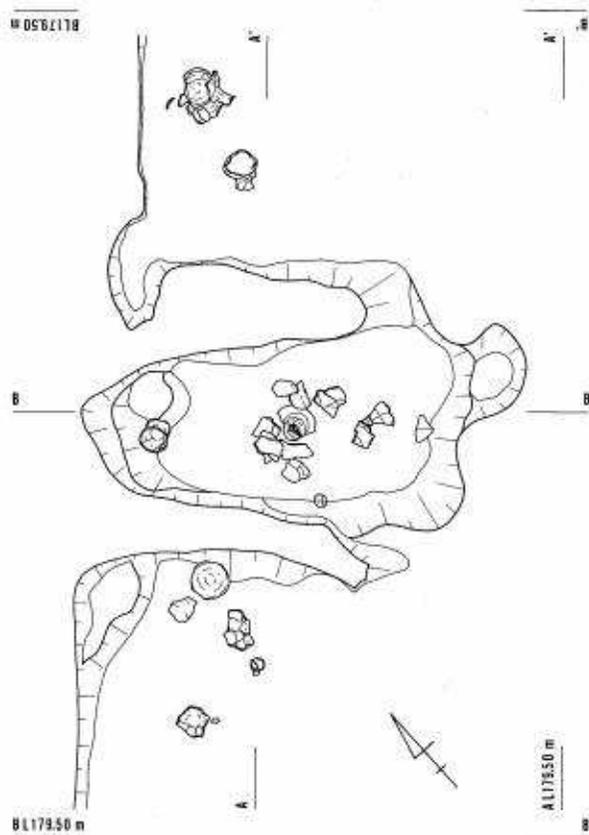
2は土師器甕である。口縁部から体部にかけて約1/5残存している。やや長胴形の体部に短く直立する口縁部をもっている。口縁部のつくりは雑で、多数の指頭痕を外面に残している。口縁端部は上面に面を持ち、更に強くなることによって合せ口状の段をもっている。体部は粗い刷毛を下から上へと施す。

器面は内外面の全体にススが付着、2次焼成を受けており、剝離が著しい。おそらく、カマドで日常使用されていたもので、住居址を廃棄する際、故意に破砕されたものと思われる。(西口)



第64図 竪穴住居 2

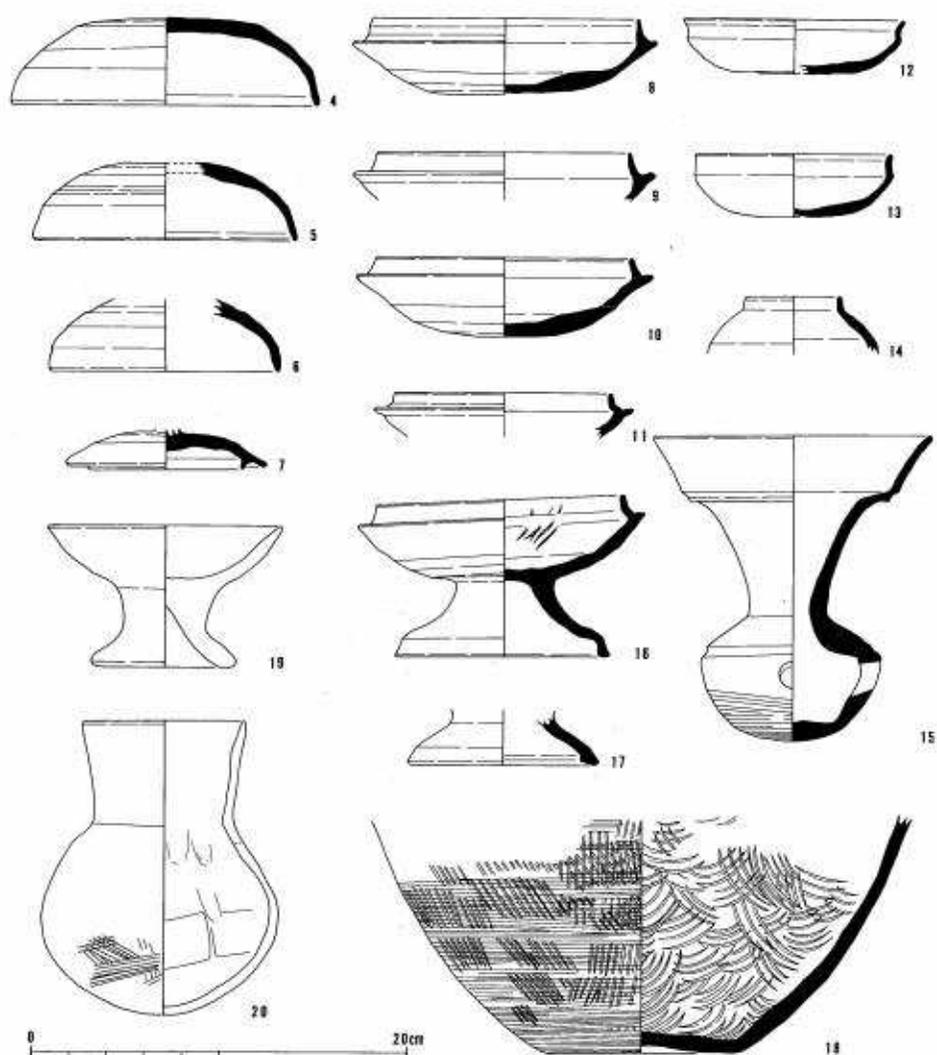
溝ノ尾遺跡



1. 黄色土
2. 濁褐色極細砂まじりシルト I
3. 濁褐色極細砂まじりシルト II
4. 茶灰色極細砂まじりシルト
5. 灰白色極細砂まじりシルト
6. 黄褐色極細砂まじりシルト
7. 灰茶色極細砂まじりシルト
8. 焦茶褐色土
9. 褐茶色シルトまじり極細砂
10. 褐茶色極細砂まじりシルト



第85図 竪穴住居 2 カマド



第86図 竪穴住居 2 出土土器

竪穴住居 2

調査区中央やや南寄りで検出された住居址で、斜面下方側の一边をほとんど流失していたが、長辺約7.60m・短辺約7.40mを測る、正方形に近い方形の住居址である。今回の調査で検出された中では最も大規模の住居址であるが残存壁高は斜面上方側で、最大約10cmを測るだけであった。ただ建物址1・2・16・17との切り合いは、住居址検出面では確認できなかった。

床面は斜面上方側から下方側の東隅にかけてやや傾斜しているが、これは後世の削平による可能性が高い。床面の周囲、壁下には幅約25cm～60cm、深さ約7cmの壁溝が廻らされ、西側壁溝内部から刀子が出土している。この住居址の南隅から台地下部の谷に向けて幅約

35cm・深さ約10cmの溝が伸び、おそらく屋内から屋外に向けての排水溝と考えられる。

床面上からは柱穴が4ヶ所検出され、柱穴の大きさは径約60cm、深さ約60cmを測る、比較的大規模な掘り方を持つものである。柱穴内には約25cmの柱痕が確認された。

また床面のほぼ中央には径約105cm・深さ約10cmの円形の土壌が検出されている。内部から須恵器の甕底部破片18が出土している。そ

の性格については不明であり、この住居址に伴うものかどうか不明である。

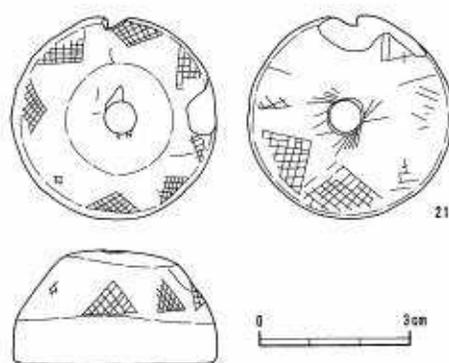
斜面下方側の壁際には、中央からやや東に寄った位置に、径約100cm、深さ約40cmの円形の土壌が検出された。内部には炭化物等を多量に含む土層が見られたことから、一応住居址に伴う貯蔵穴と考えられる。内部からは須恵器の高坏16が出土している。

貯蔵穴とは反対側の、斜面上方側の壁際中央付近には黄褐色粘土を積み上げたカマドが作り付けられ、カマドの壁は約25cmの高さまで確認できた。カマドの規模は焚口で奥行き約170cm、幅約55cmを測る。焚口は浅く掘り窪められているが、これは灰等の掻き出しに拠る可能性が高い。カマド内の焚口中央付近からは須恵器の甕が逆転した状態で出土し、その周囲からは長胴の甕あるいは甕と思われる土師器片が出土している。こうしたことから甕を支脚としていたと考えられるが、カマドの床面から約10cm浮いており、疑問も残る。またカマド内からは焚口の最も奥にあたる部分で、土師器の高坏19・須恵器の坏12も出土しているが、これは後の流れ込みに拠る可能性がある。

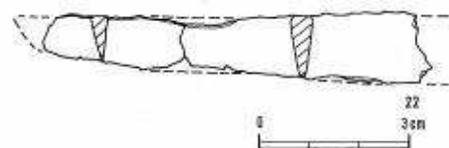
カマドの周囲から多くの遺物が出土し、カマドに向って右側床面上からは須恵器坏の10・土師器の20と、実測出来なかったが土師器の甕片が出土している。左側の床面上からは須恵器坏8等が出土しているほか、紡錘車も出土している。

出土した遺物には、須恵器・土師器の他、鉄製の刀子、石製の紡錘車がある。

須恵器の蓋(4-7)の内、7は内面にカエリを持つもので、この住居址に直接伴うものではない。おそらく住居址と切り合ったピットから出土したものと思われる。他の蓋の内、4は口径が大きく、天井部と口縁部の境に退化した稜を持つ。口縁部の内面にも極めて退化した凹線状の段を持つが、天井部のヘラ削りは約1/2に止まる。5は比較的口径が小さく、天井部の高いものである。天井部と口縁部の境には4と同じく退化した稜を有し、口縁部の内面には退化した段を有する。



第87図 竪穴住居2出土紡錘車



第88図 竪穴住居2出土刀子

8～13は須恵器の坏身で、8～11のように受部から立ち上がる口縁部を有するものと、12・13のように立ち上がりを持たないものがある。8～11は受部から一旦内傾した後、ほぼ直立して立ち上がる口縁部をもち、体部外面のヘラ削りは体部の2/3以下である。12・13は体部上端が強く屈曲してほぼ直立し、そこから外反して口縁部となる。底部はヘラ切り未調整である。

14は須恵器の短頸壺片で口縁部から体部の外面には自然釉を被る。

15は須恵器の甕で体部から大きく外反して開く頸部が立ち上がり、段をなして口縁部となる。口縁部と頸部の境には1条の凸帯を有する。体部の肩部には1条の凹線が施され、体部のほぼ中央には孔が上方から下方に向けて穿たれている。体部下半はカキ目調整されている。

16・17は須恵器の高坏で、16は有蓋の高坏である。16の坏部はほぼ坏身と同様の形態をしており、調整も大差ない。脚部は脚裾部が強く屈曲して脚端部となり、脚柱部の内面は丁寧にヘラ削りしている。

18は須恵器甕の底部から体部下半の破片であるが、体部外面は叩き成形後、粗く、雑なカキ目調整を施している。

19は土師器の高坏で、磨滅のため調整等のはっきりしない。

20は土師器の直口壺で外面は剥離・磨滅しており、調整等のはっきりしないが、部分的にハケ調整が残っている。内面は体部の上半がナデ調整、下半ははっきりしない。

21はカマド西側から出土した滑石製の紡錘車で、径約4.2cm・高さ約2.3cmを測り、中央には直径約6mmの孔が穿たれている。側面と裏面には細線によって鋸歯文が描かれている。

22は鉄製の刀子で、残存長約7.8cm、最大幅1.4cm、胴部分の厚さ4mmを測る。西壁下の壁溝から出土したものである。

(吉識)

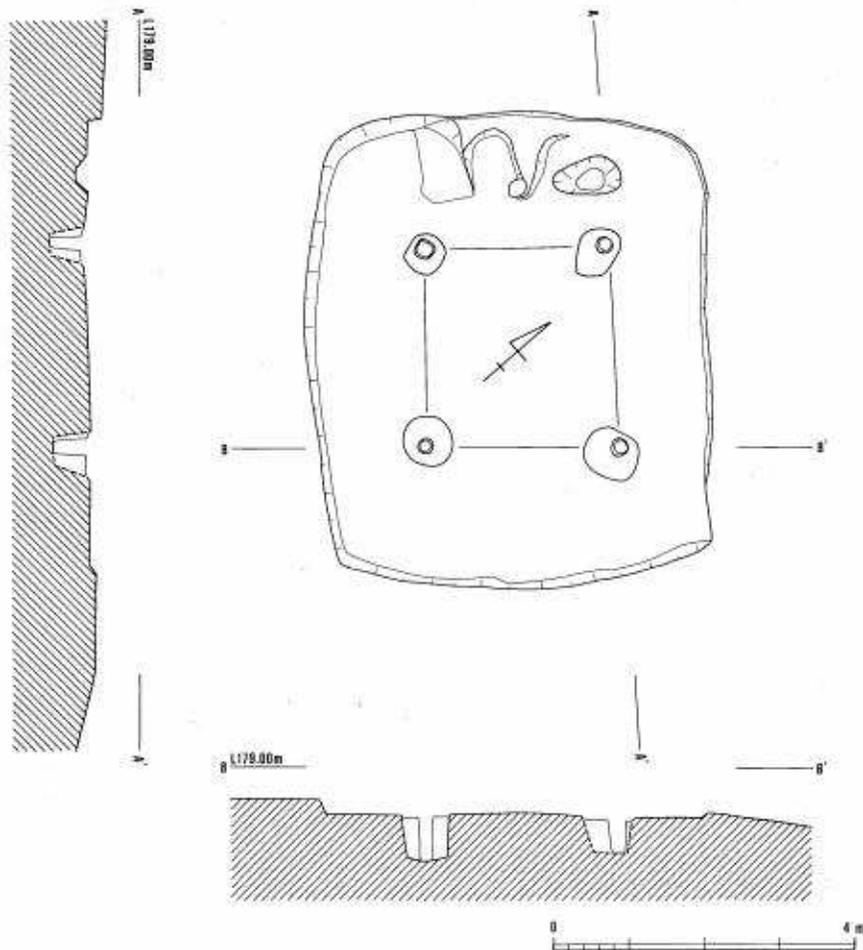
竪穴住居 3

調査区中央東端にある。長辺6m、短辺5m、深さ20cm、床面積約30㎡。長方形の形状をした住居址である。住居址内の遺構としては、4ヶ所の柱穴、カマド、貯蔵穴を検出した。壁溝は検出されなかった。

4ヶ所の柱穴は、径60cm前後の不整円形。床面から約70cm掘り込まれている。柱痕の径は約20cm。柱間寸法は2.5～2.7m。

カマドは住居址短辺（北西壁）の中央に地山を削り出してつくられている。長さ1.4m、幅65cm。焚き口から煙り出しにかけて底面はほとんど水平な状態である。カマドにむかって右側には住居址1と同様貯蔵穴があり、左側から焚き口付近にかけては若干の灰の散布がみられた。カマド内の堆積は比較的安定した水平堆積をみせており、住居址廃絶時に特に破壊したという状況ではない。

溝ノ尾遺跡



第89図 貯蔵穴住居 3

貯蔵穴は長径0.9m、短径0.5m、深さ0.2mの涙滴すり鉢形をなしている。

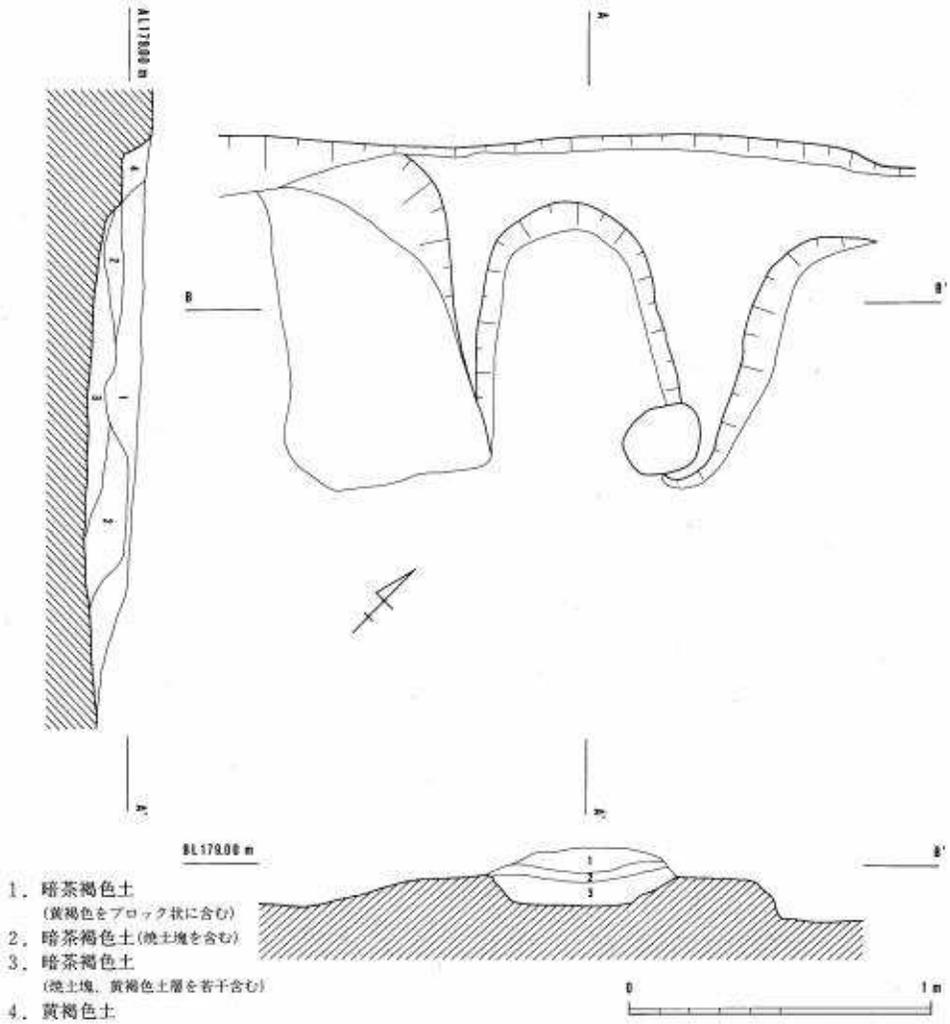
遺物は、須恵器坏蓋片・坏身片・高坏片・甕片・土師器片が出土しているが細片が多く図示できたのは須恵器7点のみであった。土師器片は2次焼成を激しくうけた甕片と考えられ、貯蔵穴内より出土した。23・24・25は須恵器坏蓋である。復原口径13.5~15cm。天井部にヘラ削りをほどこし、扁平な形状である。このうち23は天井部と体部の境が稜によって明瞭にわけられている。体部は若干の丸みをもちながら、やや外方へふんばっている。口縁端部はまるくおさめるが、口縁端部内面に稜をもっている。

26・27は須恵器坏身、復原径11.4cmと13.2cm。26は27に比して器高・口縁のたちあがり共に高い。対にはならないが、26は23に対応し、24・25とも27が型式的にはあうものであろう。

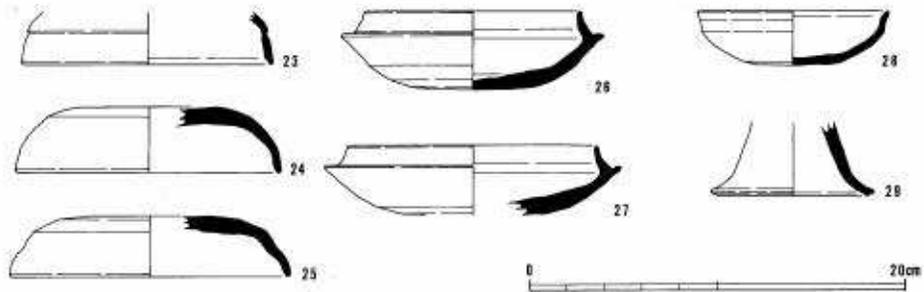
28もまた須恵器坏身である。復原口径10.0cm。外反する口縁をもつ小振りなものである。

溝ノ尾遺跡

29は須恵器高坏脚である。カマド内より出土した。復原径7.8cm。脚部下半はあまり外側へ水平に張り出さず、ゆるやかに外反するにとどまっている。端部は面をもち、強いロク



第90図 竪穴住居3 カマド



第91図 竪穴住居3 出土土器

ロナデによって稜をつくっている。

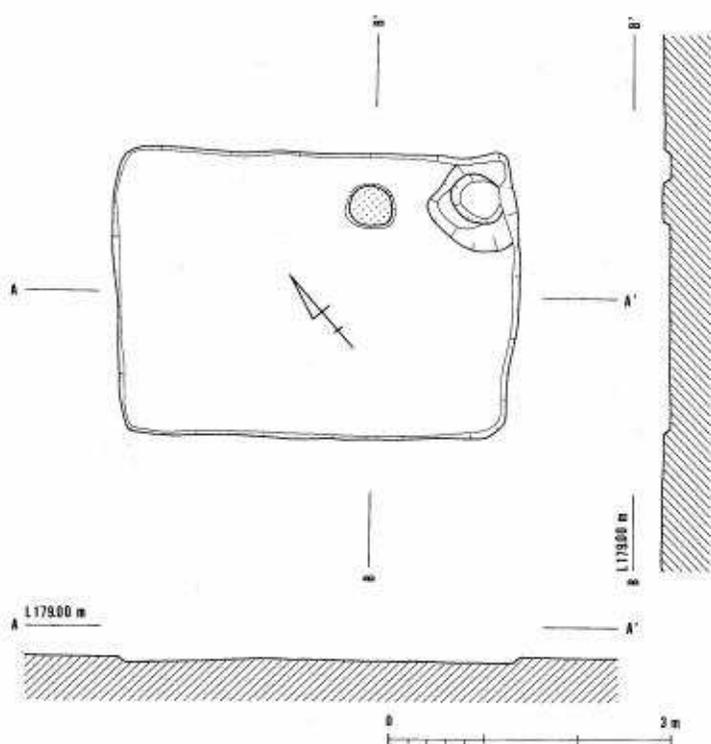
遺物の時期は、23・26は6世紀後半から末と考えられ、TK43型式併行。28を除く他は、TK209併行と考えられる。28の時期は7世紀前半から中頃と考えられ、若干時期が離れる。住居址廃絶後に流入した遺物の可能性が高い。(西口)

竪穴住居 4

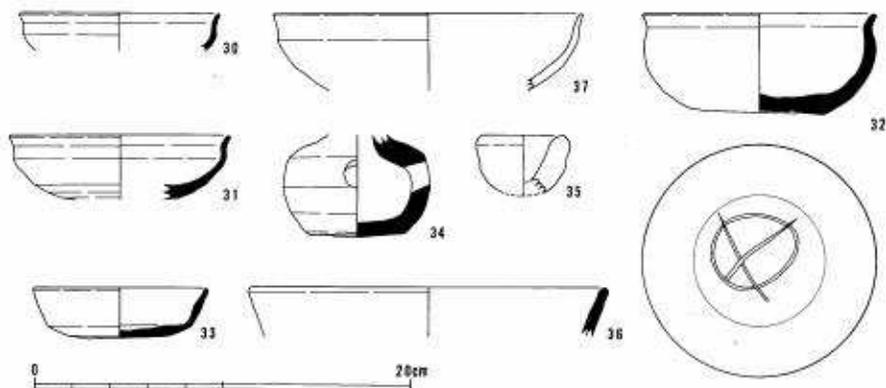
中央区の東端中央付近で検出された竪

穴住居址で、長辺約4.3m・短辺約3.1mを測る長方形プランの住居址である。今回検出された竪穴住居址の中では最も小規模なもので、後世の削平を大きく受けたためか、残存壁高は約4cmを測るだけであった。

床面は斜面下方側に緩く傾斜していたが、ほぼ平らである。床面上では斜面下方側の長辺中央からやや南寄りの所に焼土が、南東コーナー部で貯蔵穴と思われる土壌が検出されたが、柱穴等の施設は検出されなかった。



第92図 竪穴住居 4



第93図 竪穴住居 4 出土土器

土壌は住居址のコーナーに接し、径約96cmの不整形な円形を呈する。深さは約25cmを測り、内部には黒褐色土が充満し、炭化物が少量見られた。内部からの出土遺物としては須恵器の坏身30・32・33・甕体部片34等がある。

焼土は土壌から約30cm程北によった、壁際の床面上で検出された。床面からは約2～3cm程浮いていたが、径約30cm程の円形に検出されている。位置から見て、移動式カマドに伴う焼土の可能性が高い。

遺物の多くは須恵器であるが、床面上からの出土は31の1点だけで、他はコーナー部の土壌から出土している。

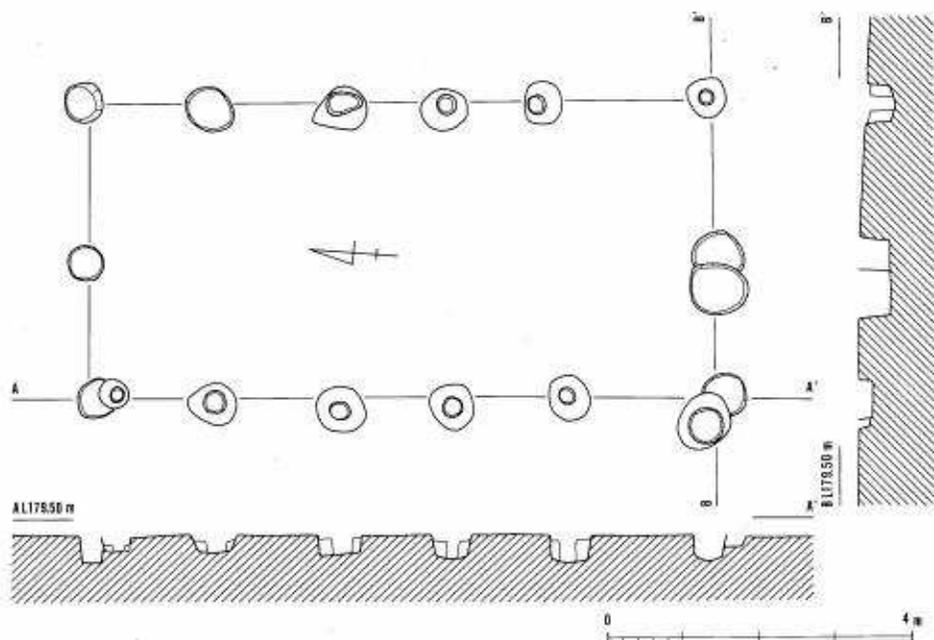
30～33は受部を持たない坏身で、30～32は体部を外反させ、口縁部としたものである。その内32には底部外面にヘラ切りの後、ナデ調整し、ヘラ記号を施されている。30・31は口縁の大きさに若干差異が認められるが、調整等に差異は認められない。33は体部がそのまま伸びて口縁部としたもので、底部の外面には回転ヘラ削りを丁寧に施している。

34は甕の体部で、体部下半の外面は回転ヘラ削りを施している。また体部下半には重ね焼の痕跡が残り、上半には自然釉がかかる。

35・37は土師器で、37は坏の口縁部片である。35は小型の粗製の土器であるが、器形等は小片のため不明である。

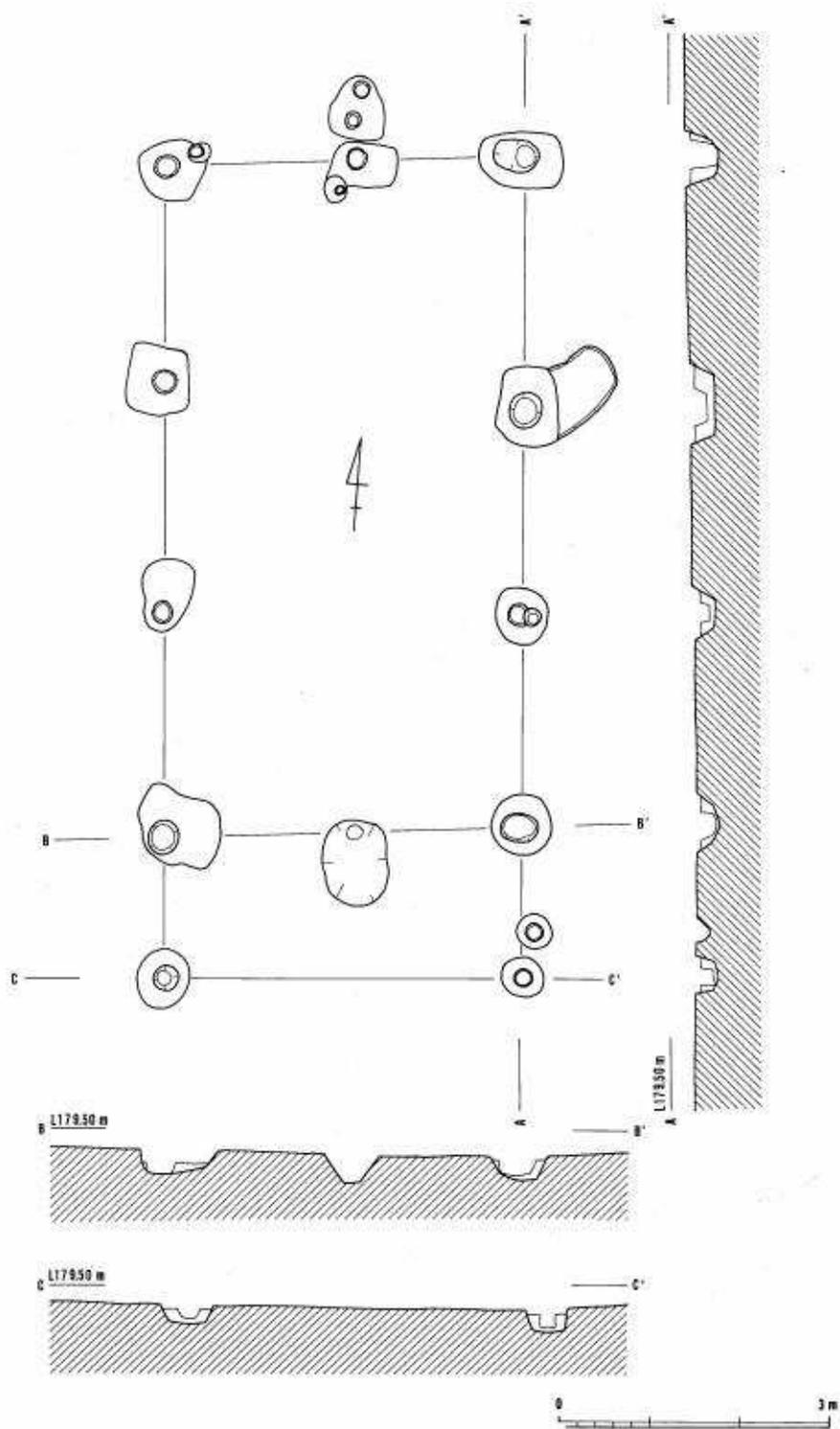
掘立柱建物 1 (SB-1)

調査区中央の南端で、竪穴住居址 2・建物址17と切り合って検出された、5間(8.27m)×



第94図 掘立柱建物 1

溝ノ尾遺跡



第95図 掘立柱建物 2

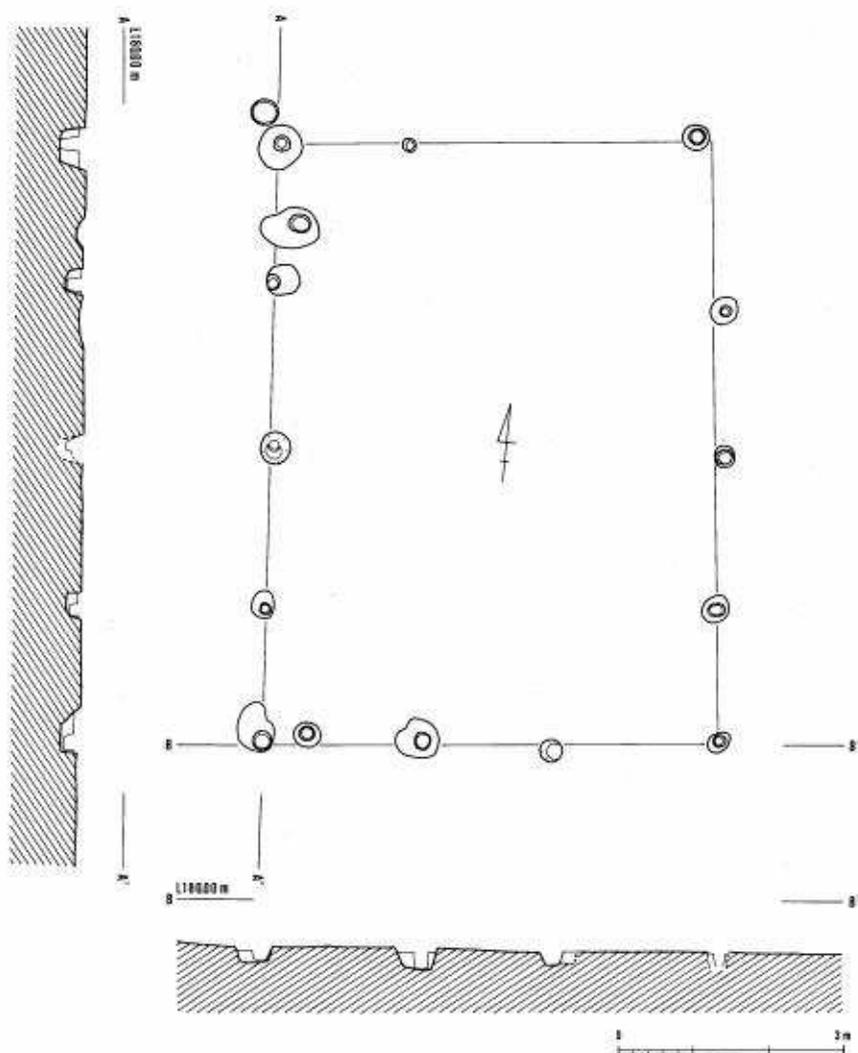
溝ノ尾遺跡

2間(4.14m)の南北棟建物である。柱間は不揃いで、桁行が南端が約2.07m、中央2間が約1.33m、北2間が約1.77mとなっている。梁行はほぼ2.07m等間となっている。柱穴は径約45~70cm、深さ約20~40cmで、7ヶ所の柱穴で径約25~30cmの柱の痕跡が確認できた。

出土した遺物は小片が多く、全て図化出来なかったが、須恵器には内面にかえりを持つ坏蓋、回転ヘラ削りを施した坏の身か蓋と思われる破片が出土している。

したがって建物址の時期については断定はしがたいが、7世紀後半と考えられるものである。これは6世紀末~7世紀前半の住居址2を切り、奈良時代後半の建物址17に切られているという切り合い関係とも矛盾しない。

また建物址2とは同じ方位を取り、南北の姿をほぼ揃える等、関連性が強く、同時期に



第96図 掘立柱建物3

存在した可能性が高い。

(吉識)

掘立柱建物 2 (SB-2)

調査区中央のやや南寄りに位置する。2×3間(4.0×7.3m)の建物址である。南北(N5°W)に桁行をもち、梁行の南側に1間(1.6m)の庇を付設している。

柱穴は長径80cm前後の四辺形、あるいは不整形円で、柱底部は直径30cm前後を測る。

遺物は、細片が多く図示できるものはないが、柱穴内から内面にかえりのある環蓋が出土していることから、概ね7世紀代に属するものであろう。

掘立柱建物 3 (SB-3)

調査区中央に位置する。3×4間(5.2×6.5m)の建物址である。建物址2と同一方位に桁方向をもつ。北辺は南辺より約50cm短く、南に開く台形の平面形を呈している。

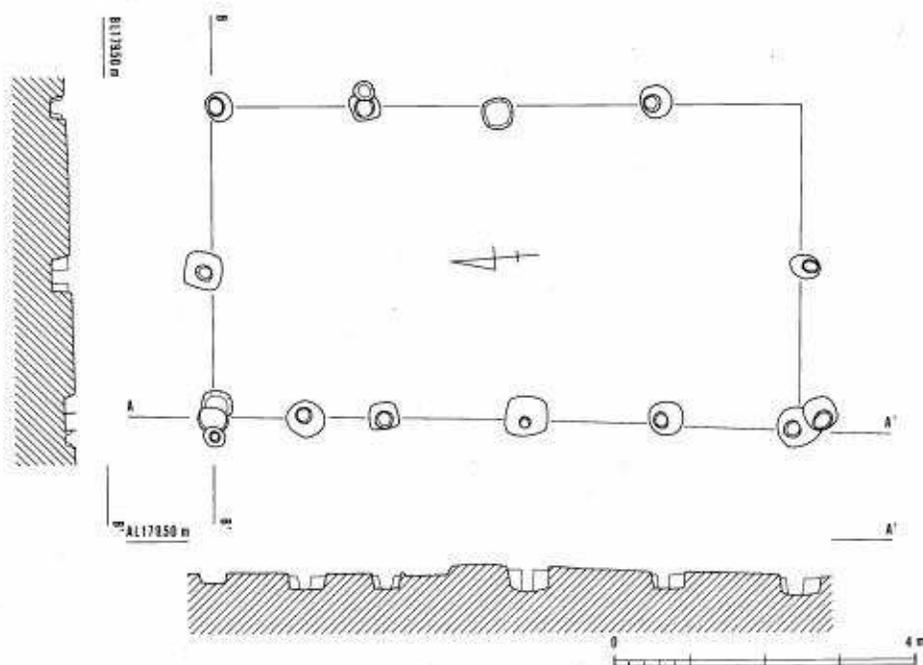
柱穴は直径30~60cmの不整形円形を呈し、柱痕は直径20cm前後を測る。

遺物は、図示できるものがないが、柱穴内から、内面にかえりのある環蓋破片が出土しており、概ね7世紀代に属するものであろう。

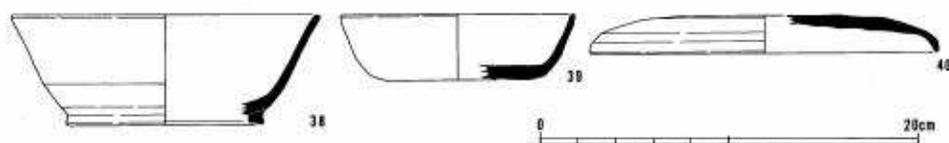
(久保)

掘立柱建物 4 (SB-4)

調査区の中央南端で、竪穴住居址2を切って検出された、4間(7.82m)×2間(4.28m)の建物址である。後世の削平のためか、南東の隅柱は検出できなかった。桁方向はN5°Eに置き、建物址7・12・21・23・24と同方位になっている。また東隣の建物址17とは若干棟



第97図 掘立柱建物 4



第98図 掘立柱建物4出土土器

方向を異にしているが、北妻を揃えているようにも見受けられる。

柱間の内、梁行は約2.14mの等間となっているが、桁行の柱間は短いもので約1.77m、長くて約2.21mを測り、かなりばらつきが大きい。

柱穴も掘り方の平面形に方形と円形の両方が見られ、大きさも約35～70cmと不揃いである。深さは約25～40cmを測る。径約15～20cmを測る柱痕跡が9本の柱穴で確認された。

出土した遺物は小片が多く、図化できたものは第98図の須恵器3点だけである。38・39は坏身で、38は貼り付け高台の比較的大型の坏Aである。口縁端部は丸く納められ、高台は低く、ふんばりも失われている。39は坏Bで、口縁端部は丸く、底部と体部の境も丸くなっている。底部はナア調整。40は坏蓋で、天井部はヘラ削りされている。天井部と体部の境は丸みを帯び、口縁端部も丸くなっている。

この他にも奈良時代後半～平安時代初頭の須恵器の坏身・坏蓋があり、この建物址を遺物の示す時期に推定することもできる。ただ建物址の北西隅柱を切ったビットからは奈良時代後半の須恵器坏蓋の完形(78)が出土している。(吉識)

掘立柱建物5 (SB-5)

調査区北部で、建物址6と重複して検出された。建物址6に先行するものである。2×4間(4.1×7.6m)の建物址で、北東-南西に桁行をとる。

柱穴は、直径80cm前後の円形を呈し、柱痕部は直径30cm程度を測る。

遺物は、柱穴内より、須恵器、土師器の出土をみた。第100図41は、須恵器坏底部である。外方へ短く張り出す高台をもつ。高台の断面形は、やや内側に肥厚している。底部から体部にかけて大きく開く立ち上がりを見せている。底部はヘラ切り未調整である。7世紀後半期に比定しうる遺物である。

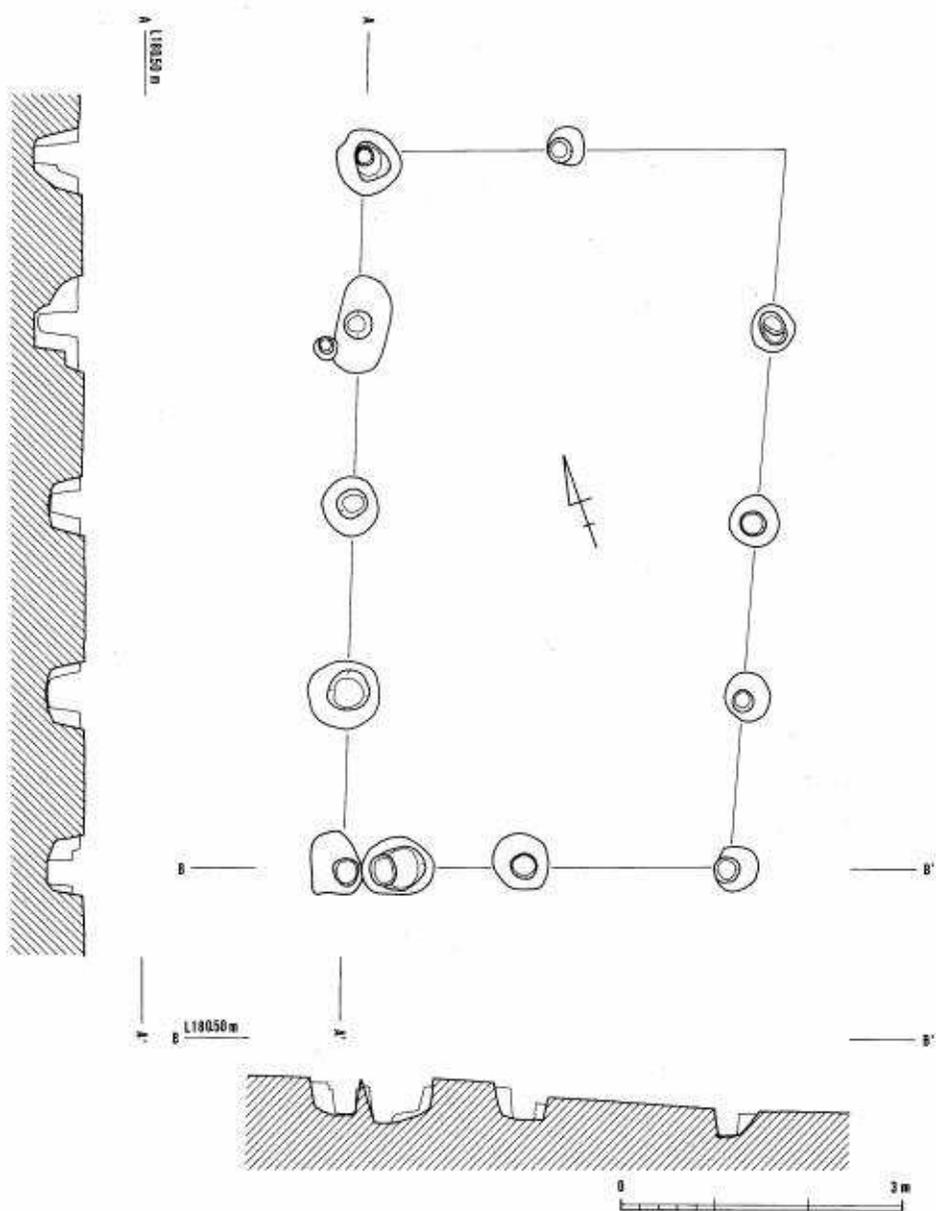
掘立柱建物6 (SB-6)

調査区北部に位置し、前述の通り建物址5と重複している。柱穴の重複関係から、建物址5に後続するものである。調査区内では3×4間(4.3×8.1m)まで検出されたが、西端部は近代溝によって破壊されていた。建物址5と直交し、北西-南東(N68°W)に桁方向を有する。

柱穴は直径80cm前後の円形を呈し、柱痕部は直径30cm内外をはかる。

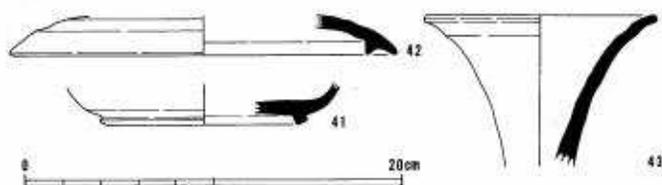
遺物は、柱穴内より、須恵器・土師器等が出土した。

溝ノ尾遺跡

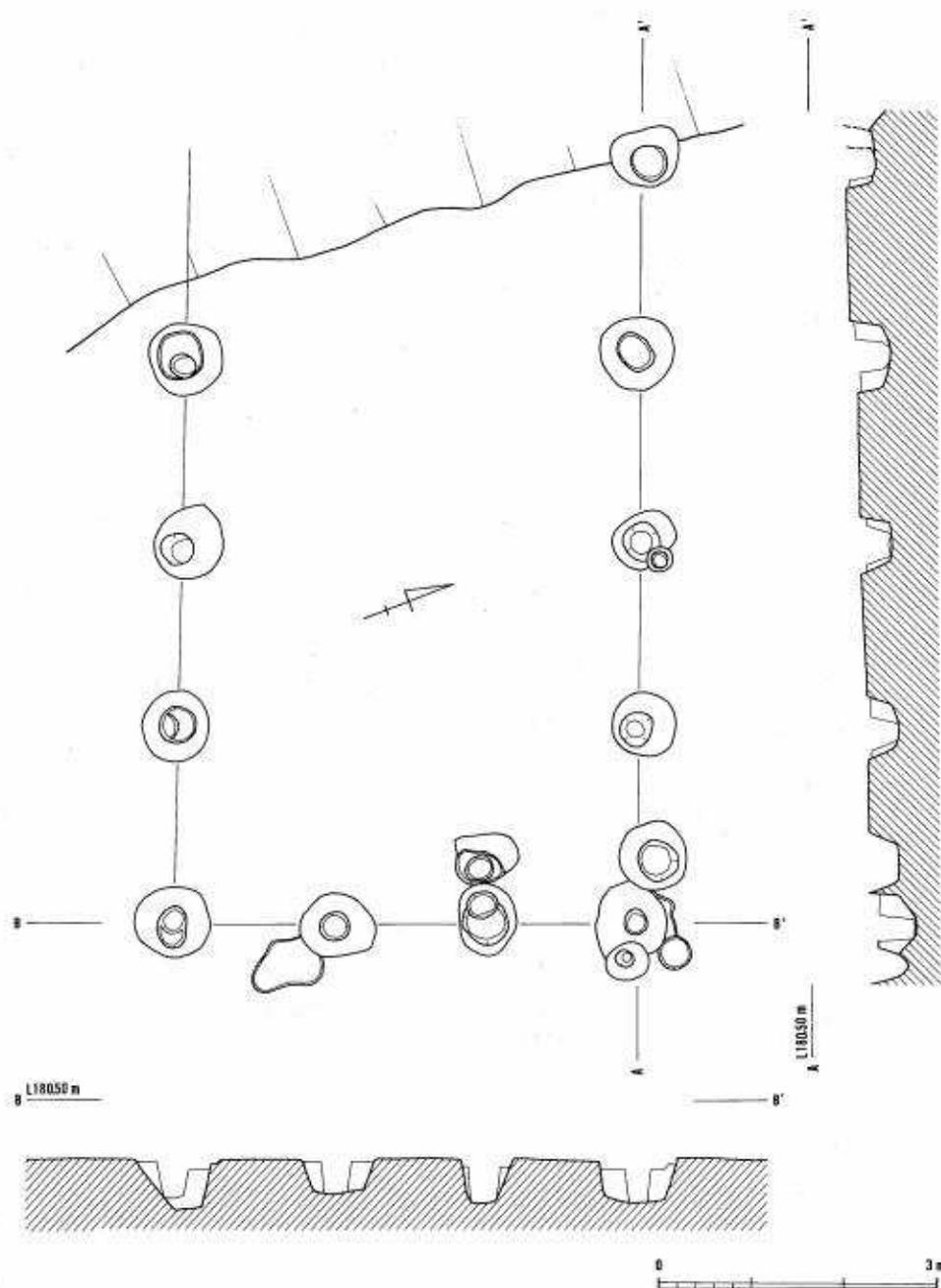


第99図 掘立柱建物 5

第100図42は、須恵器
 坏蓋である。口縁部の
 み残存していた。口縁
 部にかけては、緩やか
 な丸みをもつ形態を呈
 する。天井部は、ヘラ



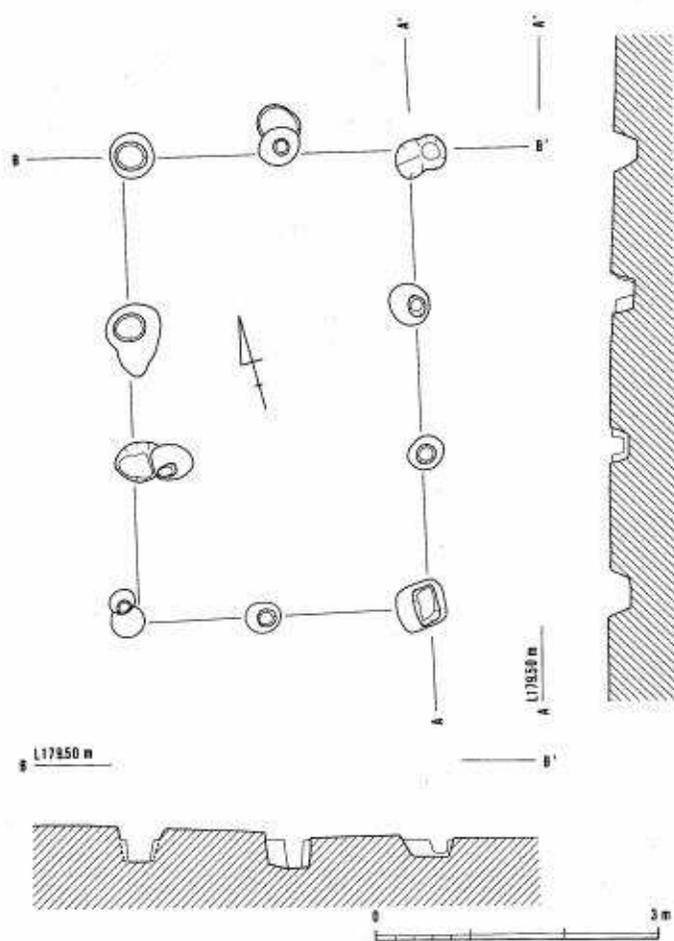
第100図 掘立柱建物 5・6 出土土器



第101図 掘立柱建物6

削りが施されている。内面のかえりは、口縁端部とほぼ水平の位置までのびており、端部は、丸くおさまられている。

43は、長頸壺の口縁部～頸部にわたる部位であろう。細い頸部から大きくラッパ状に開き口縁部に至っている。口縁部はやや反りぎみに開いて、端部は丸くおさまられている。



第102図 掘立柱建物 7

42は形態から、7世紀後半期に属するものと思われる。(久保)

掘立柱建物 7

(SB-7)

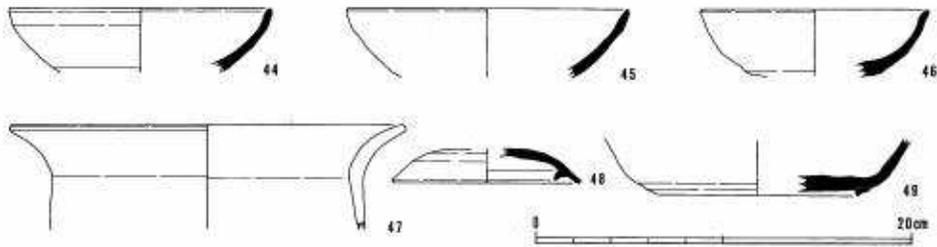
調査区北西端に位置する。規模は南北桁行3間(5.0m)、東西梁行2間(3.05m)、床面積はおよそ15.5㎡。桁方向を北北東(N14°E)にとる南北棟側柱建物址である。桁行の柱間寸法は1.6m。梁行の柱間寸法は、桁行と同じ1.6mと、1.45mがある。各柱穴の掘り方は径40cmの円形を基本としている。柱痕の径は20~25cm。5ヶ所の柱穴では、柱根を掘り出し、

建て替えを行っていた。検出面からの柱の深さは30~50cm。掘り方の底のレベルはほぼ同じである。

遺物は柱穴内より、須恵器・土師器片数点が出土したが、1点を除いて図示できなかった。44は須恵器坏身である。口径14cm、残存器高3.5cm。回転ヘラ削り底部に、丸みをもった体部、直口气味に立ちあがる口縁部をもつ。口縁部は厚ぼったく、端部は丸くおさめられている。時期は8世紀代と考えられるが、建物址の時期に対応するか否かは不明である。掘り方より出土した。

掘立柱建物 8 (SB-8)

調査区北半中央、住居址1北側に位置する。規模は南北桁行3間(4.4m)、東西梁行2間(3.6m)、床面積はおよそ16.5㎡。桁方向を北東(N25°E)にとる南北棟側柱建物址である。桁行の柱間寸法は1.6mと1.1mの2種。梁行は1.8~1.9m。各柱穴の掘り方は、径40cmの円形を基本としている。柱痕の径は15~20cm。検出面からの柱穴の深さは30cm前後と均

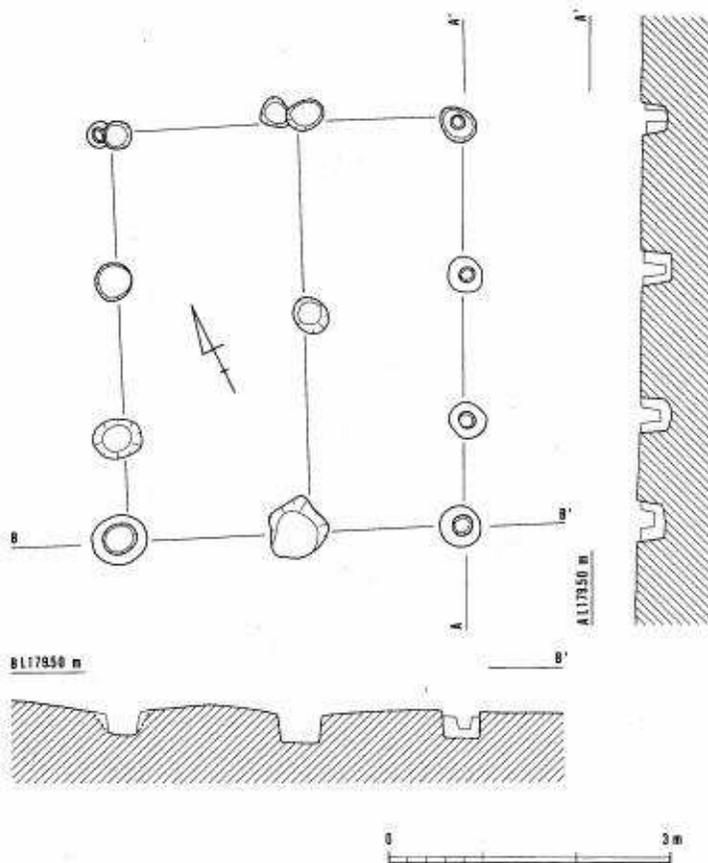


第103図 掘立柱建物7・8出土土器

一である。また、掘り方底のレベルにもばらつきはない。

北側の桁行の2カ所の柱穴及び南側の桁行中央の柱穴では柱の入れ替えが行われている。この補修によって建物址8はいびつな長方形プランになったらしく(N24°E)、中央の柱穴はその時点で補強として加えられたものであろう。

遺物は、須恵器、土師器共数点づつ柱穴内より出土しているが、図示出来たものは須恵器片4点、土師器片1点のみであった。



第104図 掘立柱建物8

45・46・49は須恵器坏身である。(46)は復原口径12cm。底部は若干突出するが、作為的なものではない。丸く立ちあがる体部に心もち外反する口縁部をもっている。口縁端部は丸くおさめている。器体の磨滅が激しく、調整等は詳らかではないが、(右まわりのロクロ回転により)底部外面はヘラ切り未調整、それ以外はロクロナデを施している。45は46に比べて復原口径15cmとやや大きい口縁が直口

している以外はほぼ同じ器形である。49は底部径10.6cm、退化した高台を貼付している。

48は須恵器坏蓋、口径10cm。全体に扁平な形状。天井部は平坦で体部から口縁端部にかけて、直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。かえりは、口縁部より下へ出ない。全体にロクロナデを施している。

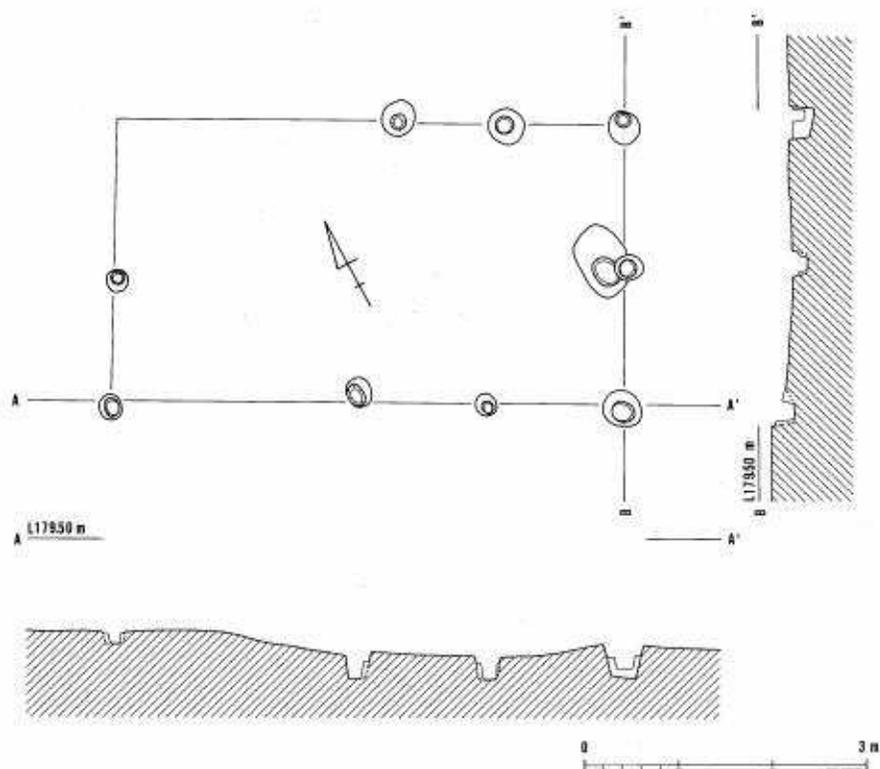
47は土師器甕、口径22cm。ゆるやかに外反する口縁に長胴形の体部をもつと考えられる。口縁端部は平坦な面をもつ。内外面の調整は不明。48は7世紀後半代の形態をもつが、他は8世紀末～9世紀前半に入るものと考えられる。

掘立柱建物 9 (SB-9)

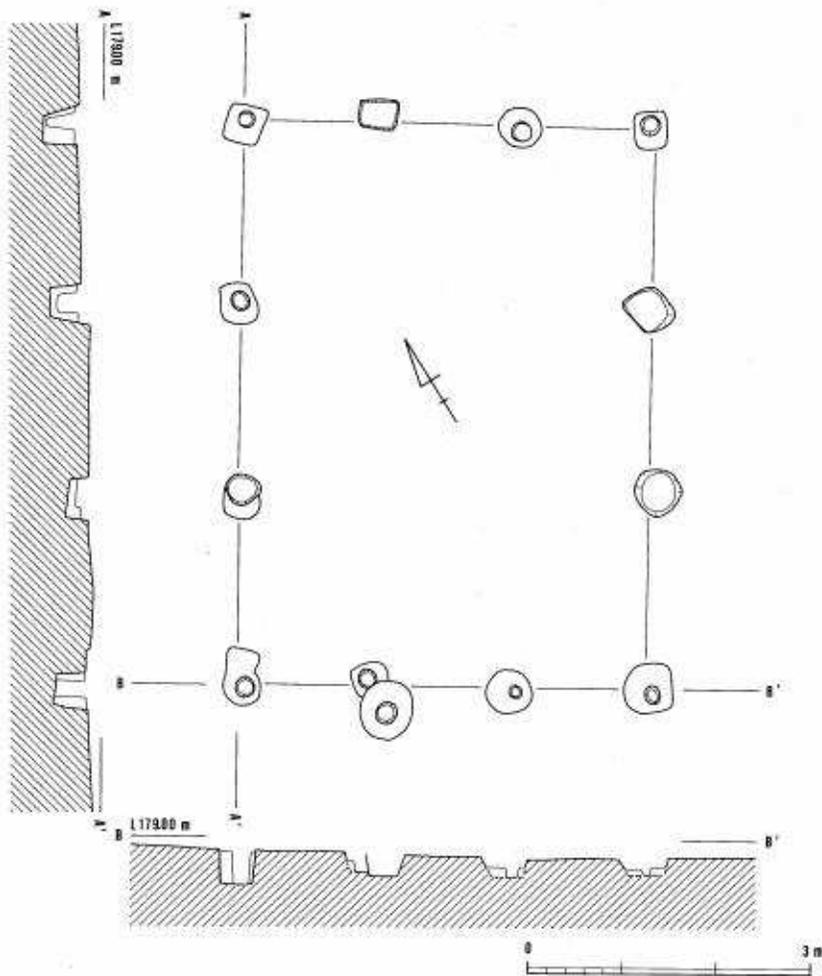
住居址1と切り合う位置にある。規模は東西桁行4間(5.5m)、南北梁行(3.0m)、床面積はおよそ16.5㎡。桁方向を西北西(N61°W)にとる東西棟側建物址である。桁行の柱間寸法は1.4～1.6mとやや不規則。梁行の柱間の寸法は1.5m。各柱穴の掘り方は25～40cmの円形。柱痕の径は15～20cm。深さは住居址内にあるものは、住居址床面より更に30～40cm掘り下げており、掘り方底のレベルにばらつきはない。

掘立柱建物10 (SB-10)

調査区中央南寄りに位置する。南北桁行3間(6.0m)、東西梁行3間(4.4m)、床面積およ



第105図 掘立柱建物 9



第106図 掘立柱建物10

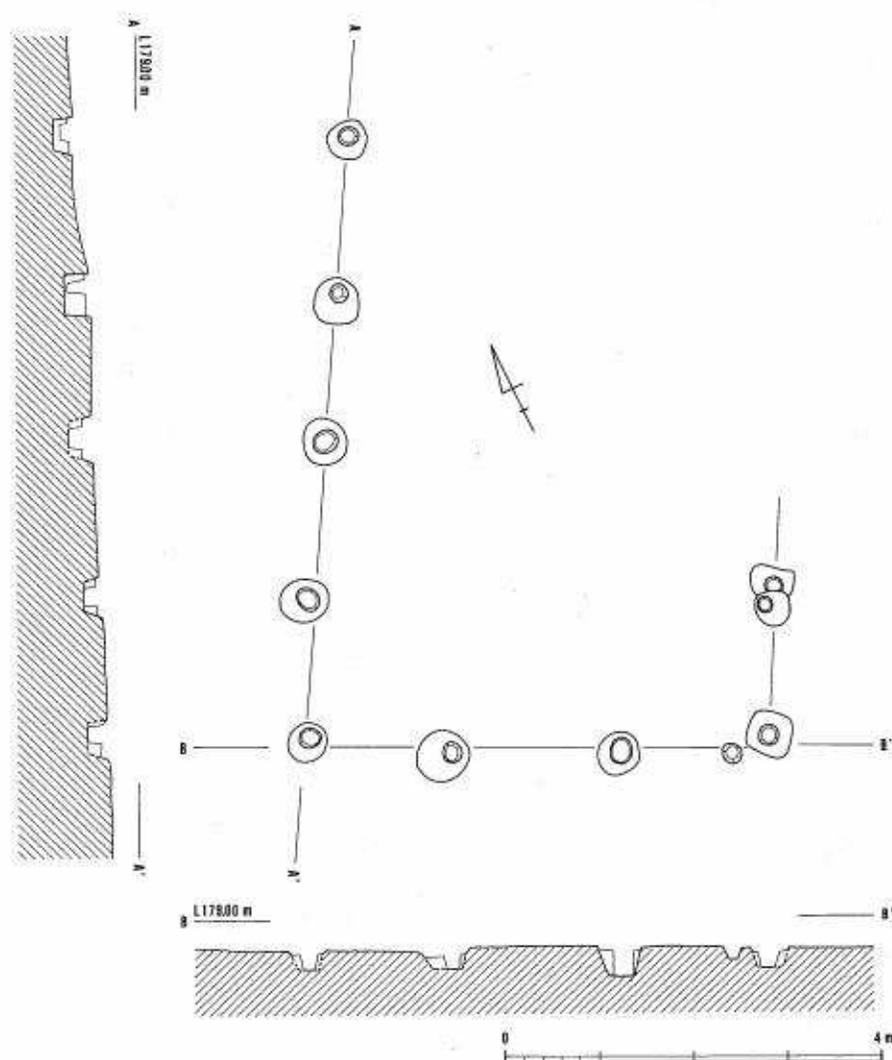
そ26.5㎡。桁方向を北東（N34°E）にとる南北棟側建物址である。桁行の柱間寸法は約2.0m。梁行は中央の柱間が1.6m。両側が1.4mである。柱穴の掘り方は径50cmの円形もしくは1辺40cmの隅丸方形。柱痕の径は20cm前後、検出面からの深さは25～40cmと均一ではないが、掘り方底のレベルにあまりばらつきはない。

3ヶ所の柱穴で柱の入れ替えの痕跡があるが、建物の大規模な建て替えは行われていない。

掘立柱建物11（SB-11）

調査区南東端、住居址3の南側にある。規模は南北桁行4間（6.5m）、東西梁行3間（5.0m）、床面積はおよそ33㎡である。桁方向を北東（N30°E）にとる南北棟側柱建物址である。桁行の柱間寸法は1.6m。梁行もまた1.6m前後におさまり、比較的規則正しい。しかし平面プランは歪みが著しい。

各柱穴の掘り方は50～60cmの円もしくは隅丸方形で、15～25cmの柱痕が認められた。検



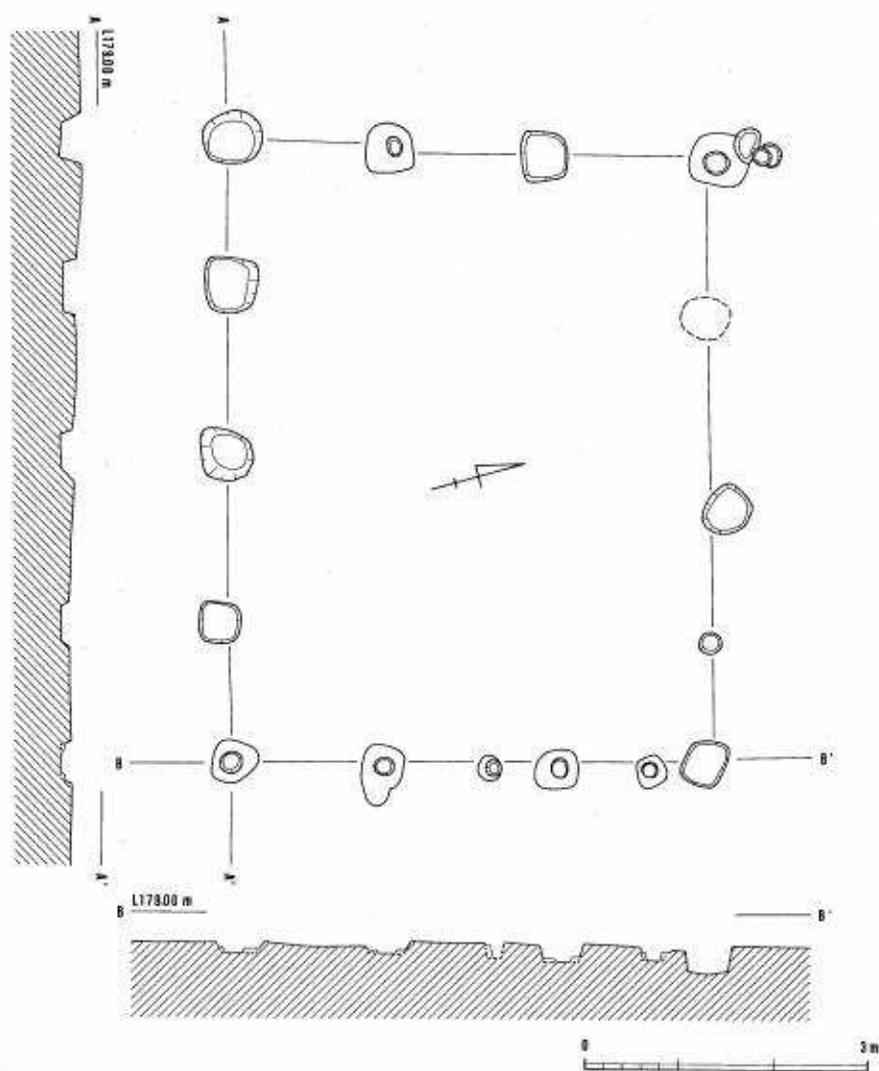
第107図 掘立柱建物11

出面からの柱穴の深さは約30cmを測り、掘り方底のレベルにばらつきはない。(西口)

掘立柱建物12 (SB-12)

調査区の東端中央で、竪穴住居址4と建物址13と切り合って検出された、4間(6.64m)×3間(5.16m)の建物址で、桁方向をN75°Wに置く、東西棟建物址である。ただ住居址4の内部となる北妻部は柱穴1本検出されただけで、他は検出できなかった。そのため建物址の梁行については不確定な部分も残る。柱間は桁行が約1.48~1.80mとばらつきがあり、梁行についても約1.44~1.84mとばらつきが見られる。

柱穴の掘り方は平面形が方形のものと円形のものがあるが、径あるいは一辺が約40~50cm、深さ約8~25cmを測る。西側梁行の南から2列目の柱穴には、根石と思われる河原石



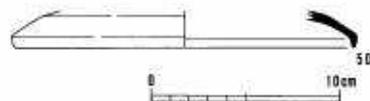
第108図 掘立柱建物12

が検出されている。柱痕跡は5本の柱穴で確認され、径約20～25cmを測る。

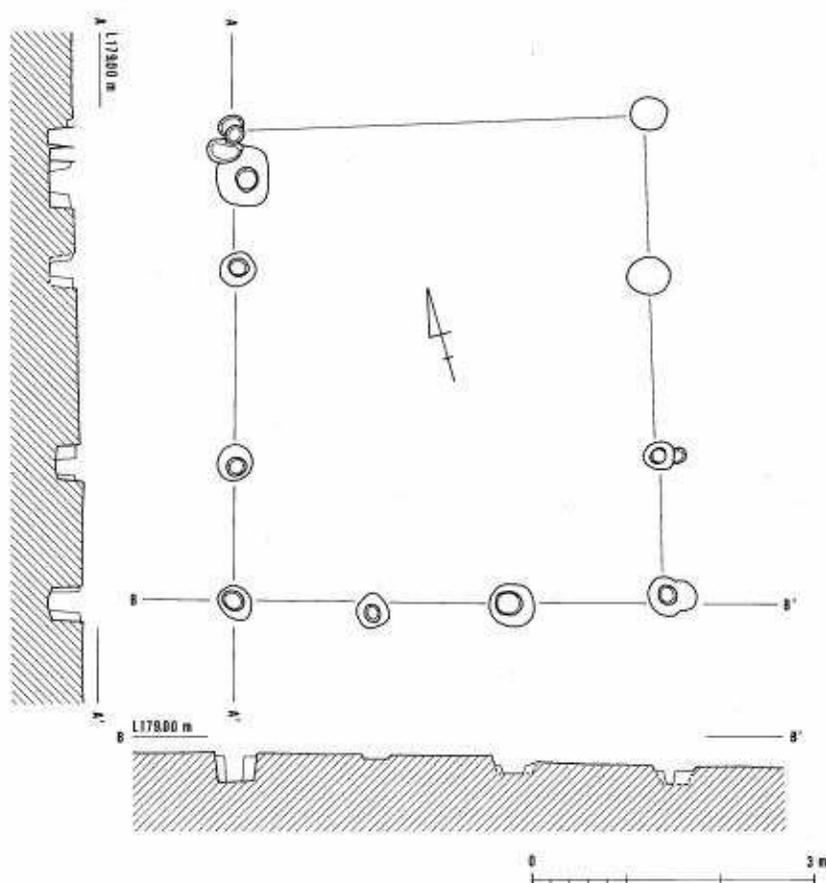
遺物はほとんど無く、時期的には不明である。また住居址4との切り合い関係は把握できなかったため、住居址4との前後関係も不明である。ただ建物址13とは北西隅柱にあたる柱穴の切り合いで、この建物址が建物址13より古いことが確認されている。建物址4・7・22・23・24とは桁・梁方向を同方位としており、関連性が考えられる。

掘立柱建物13 (SB-13)

調査区の東端中央付近で、竪穴住居址4と建物址12と切り合って検出された、3間(5m)×3間(4.6m)の



第109図 掘立柱建物12出土土器



第110図 掘立柱建物13

南北棟建物址である。ただ住居址4と切り合っている部分では住居址の床面上でも、柱穴は検出できなかった。このため建物址とするには若干疑問も残る。

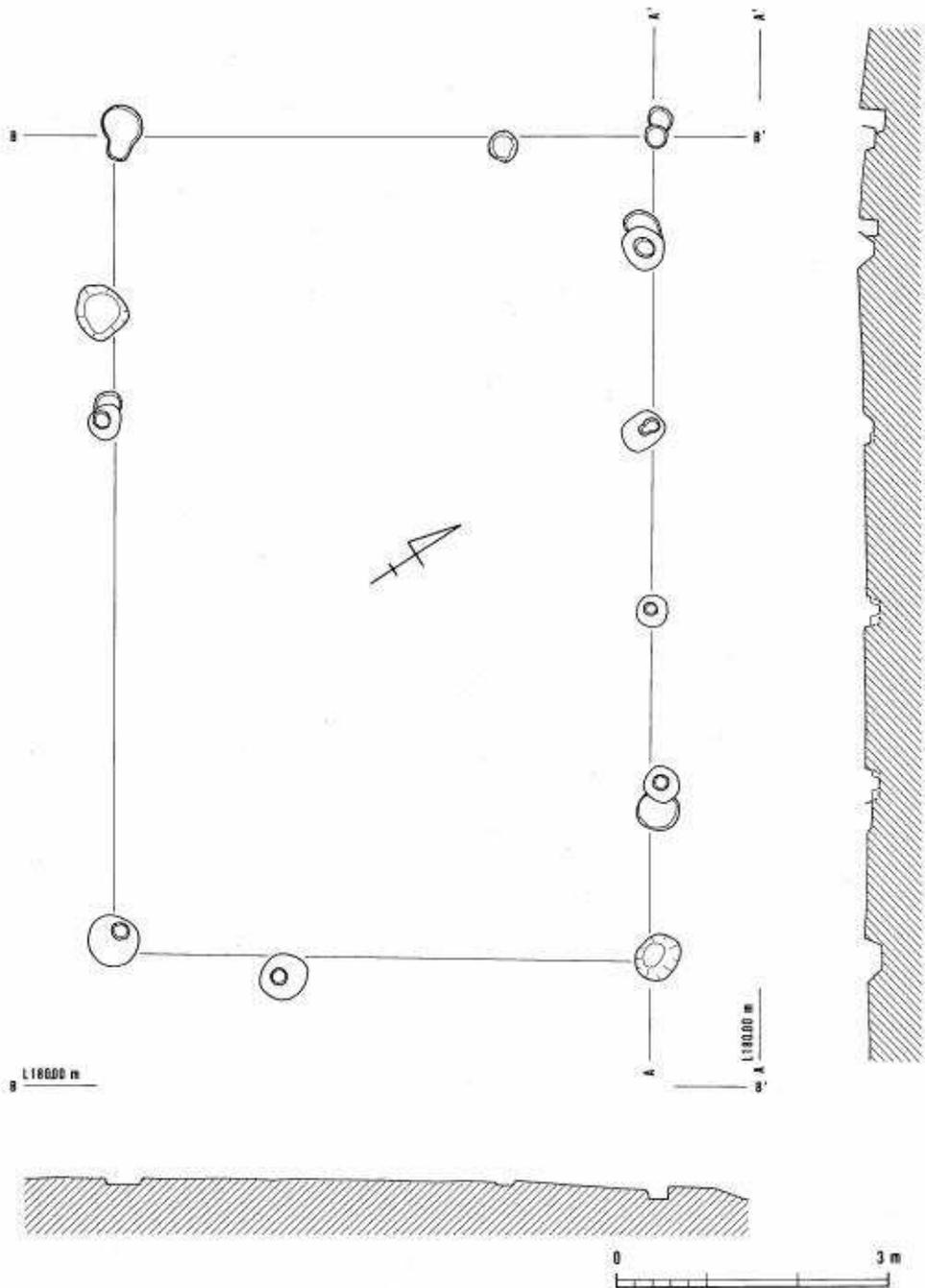
柱間もばらつきがあり、桁行では約1.40m～2.20m、梁行約1.40m～1.60mとなっている。6本の柱穴で径約15～20cmの柱痕跡が確認されている。

建物址の方位は約N14°Eであり、建物址5・8・13・19・20・21とはほぼ同じくしている。

出土遺物はほとんど無く、僅かに奈良時代後半～平安時代初頭の貼り付け高台の須恵器坏身(坏A)が出土しているにすぎない。したがって时期的には断定しがたいが、方位を同じくする建物址はほぼこの時期であることから、この建物址の時期も奈良時代後半～平安時代初頭と見てよいものと思われる。ただ建物址12とは切り合い関係から、建物址12より新しいことが確認されており、同じ時期の建物址でも新しい時期のグループに属すると思われる。(吉識)

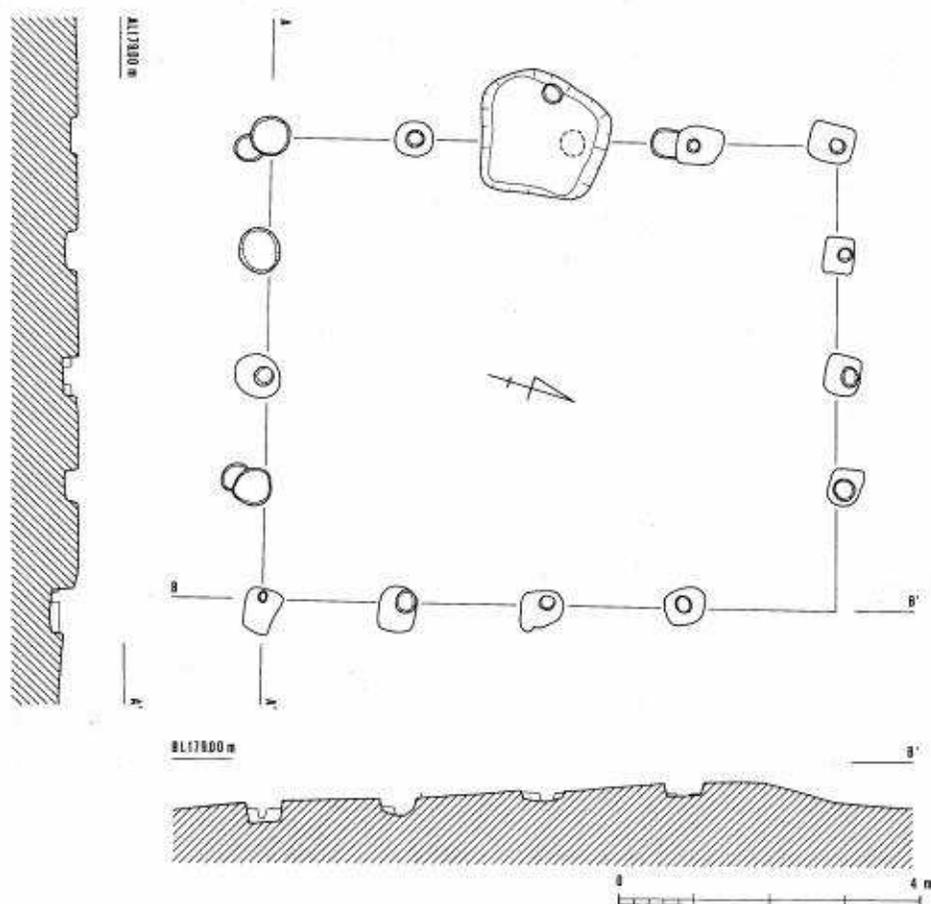
掘立柱建物14 (SB-14)

調査区南端に位置する。規模は桁行5間(9.1m)、梁行3間(6.0m)、床面積はおよそ55㎡



第111図 掘立柱建物14

を測る。桁方向を北西 (N57°W) に置く東西棟側柱建物址で、桁行の柱間寸法は基本的には2mを測る。但し、東側の2間分は1.2mと2mにしており、しかも北桁行と南桁行では1.2mと2mのとり方を逆にしている。梁行の柱間寸法は脇間が1.7m、中央の柱間が2.6m



第112図 掘立柱建物15

を測る。

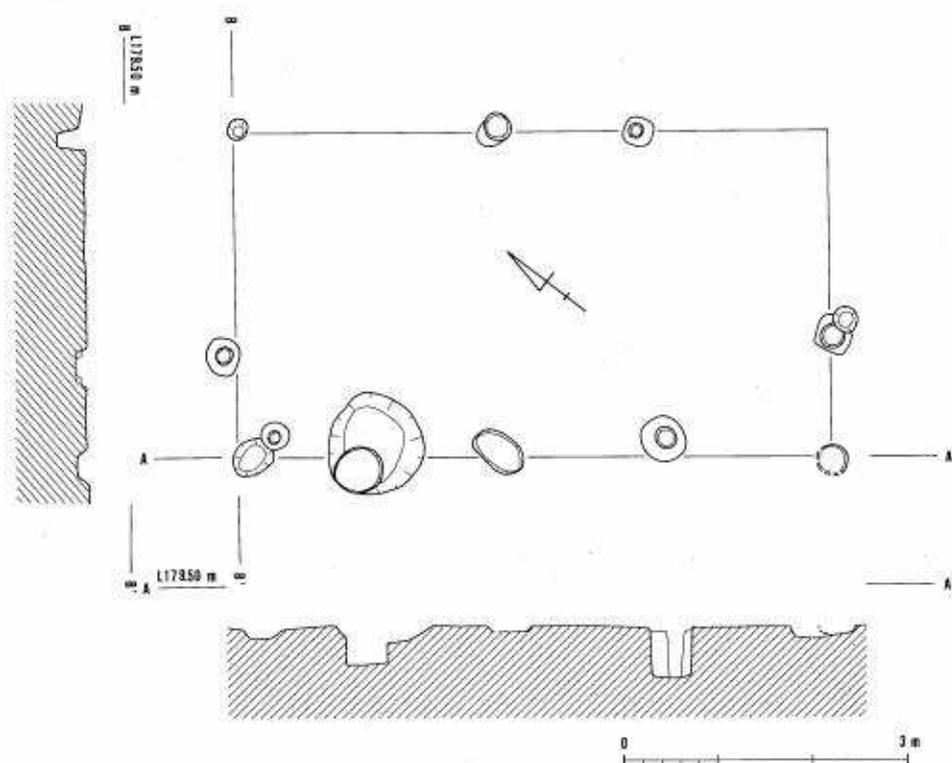
各柱穴の掘り方は径40～60cmで、柱痕の径は20cm前後を測る。検出面からの柱穴の深さは、概して浅く、しかも5～20cmと均一ではない。掘り方底のレベルはあまりばらつきがない。

柱穴の切り合い状態から、一部柱の建て替えが行われたと考えられるが、検出された柱穴が少なく、全面的な建て替えがあったか否かは明確ではない。

遺物の出土はなく、建物址の明確な時期は不明である。ただし、桁行の方位が、建物址9・10・11とほぼ同一であることから、これらの建物址と同時期の可能性が高い。（西口）

掘立柱建物15 (SB-15)

調査区南東隅で検出された、4間(7.50m)×4間(6.16m)、桁方向をN15°Wに置いた、南北棟の建物址である。後世の削平により、北東隅の柱穴は失われ、また土壌11に切られて、西側柱列の中央の柱穴を失っている。桁行の柱間は約1.87mとし、梁行の柱間は約1.



第113図 掘立柱建物16

54mとしている。

柱穴の掘り方には平面形が方形を呈するものと円形のものがあるが、柱穴の大きさは約40～60cm、深さ約20cmを測る。11本の柱穴で約20～30cmの柱痕跡が確認され、今回検出された建物址の柱痕跡としては太いものである。

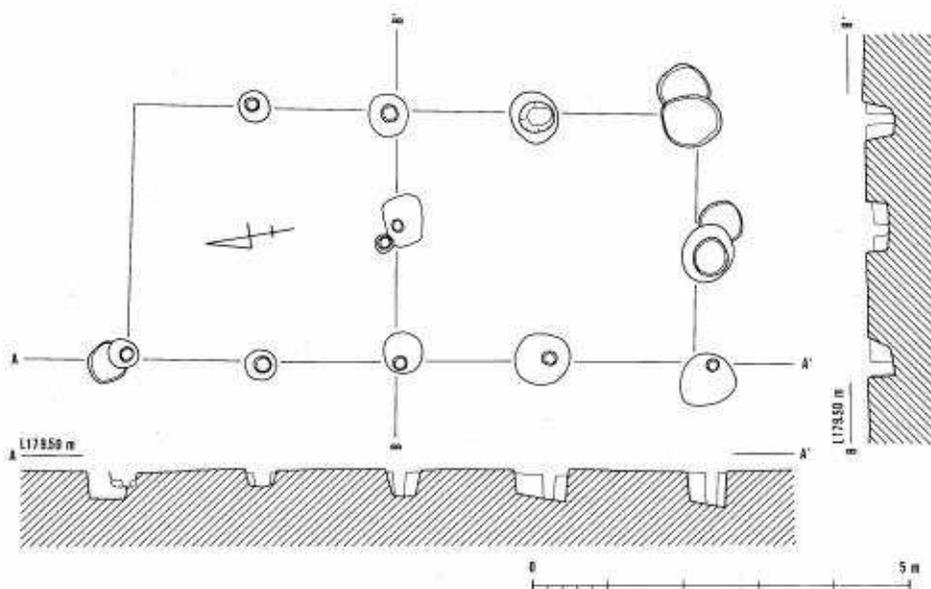
この建物址も出土遺物は少なく、柱穴内から奈良時代後半～平安時代初頭の高台付きの須恵器坏身(坏A)が僅かに出土したにすぎない。ただこの建物址と桁方位を同じくするものは無く、この建物址の時期を、遺物の示す時期に即断することはできない。(吉識)

掘立柱建物16 (SB-16)

調査区南西端に位置し、住居址2を切っている。桁行4間(6.3m)、梁行3間(3.4m)の建物址で、床面積は約21.5㎡を測る。桁方向を北西(N39°W)にとる南北棟側柱建物址である。

桁行の柱間寸法は1.4m～1.85mと不規則である。ただし、柱列がよく残る西側の並びは、1.4mの柱間寸法が2間、1.85mが2間となっている。梁行は1.2m。柱穴の掘り方は径30～50cmの円形。柱痕は25cm前後で、柱穴の深さは15～50cmと不規則である。

遺物は住居址2の土壌と切り合った柱穴より、7世紀後半～末と思われる宝珠つまみをもつ須恵器坏蓋片が出土している。(西口)



第114図 掘立柱建物17

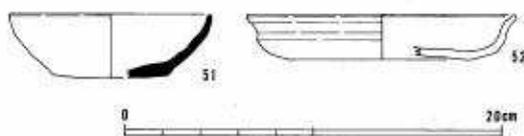
掘立柱建物17 (SB-17)

調査区中央の南端で、竪穴住居址2、建物址1を切って検出された、4間(776cm)×2間(332cm)の建物址である。桁方向をN13°Eとし、建物址4・23と棟方向をほぼ同じくする。建物の中央に間仕切りとも考えられる柱穴を持つが、間仕切りとするには柱穴が大きいように思われる。桁行の柱間は南2間が約2.20m、北2間が約1.80mを測り、梁行の柱間は約2.20m等間となっている。

柱穴の掘り方は南2間分が大きく径約80cm、北2間分が小さく径約40cmを測り、深さも南2間分が約50cm、北2間分が約20cmとなっている。8本の柱穴で径約20~25cmの柱痕跡が確認された。

出土遺物は柱穴内から小片ではあるが多く出土し、特に南2間分の柱穴から多く出土している。しかし図化できたものは2点だけであり、51は須恵器の坏身である。体部の内外面はナデ調整、底部の外表面はヘラ切り未調整である。52は土師器の坏で外反する口縁部の端部内側には工具状のものによる沈線状の強いナデにより、口縁端部が肥厚したように見せている。調整はA₀手法である(奈良国立文化財研究所 1962)。

その他の多くは須恵器であり、特徴的な遺物としては天井部に凸帯を持つ坏蓋、高台付きの坏身等がある。したがって建物址の時期をこうした遺物の示す奈良時代後半~平安時代



第115図 掘立柱建物17出土土器

初頭と捉えてよいものと思われる。これは建物址・住居址との切り合い関係とも矛盾しない。

ただ柱間の長さ、柱穴の大きさ・深さ等を見た場合、南2間分と北2間分とでは、あまりにもその様相を異にしていることから、南2間分だけで一棟の建物址と捉えたほうがよいのかも知れない。
(吉識)

掘立柱建物18 (SB-18)

建物址18は調査区中央に位置する。2×3間(4.5×6.3m)の建物址である。桁方向は北東-南西方向(N55°E)にあり、北東側に1間(2.0m)の庇を付設している。

柱穴は、直径50cm前後の円形ないしは不整四辺形で、柱痕部の直径は15cm前後を測る。

遺物は、柱穴より須恵器・土師器の細片が出土したのみで、詳細は断じえない。

掘立柱建物19 (SB-19)

建物址19は調査区南西部に位置する、2×2間(2.8×3.4m)の総柱建物址である。桁方向は北東-南西(N20°E)にあり、南北の柱間は東西よりやや長い。

柱穴は、直径60cm前後の円形、あるいは不整円形を呈するが、柱穴規模が大きいこととその配置から、倉庫的な機能が予想できよう。

建物址20と近接し、平面形、柱穴規模が近似するため、ほぼ同時期のものと思われるが、各柱間は建物址20と比べてやや長く、従って建物規模もやや大きい。

遺物は柱穴より、須恵器・土師器片が出土している。

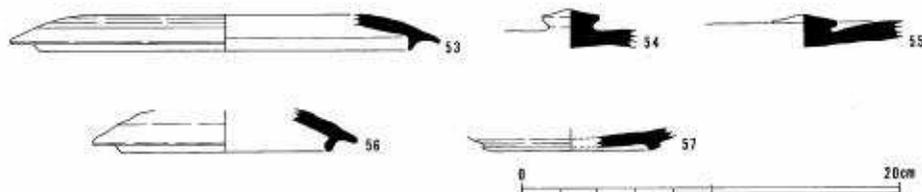
第116図53は、須恵器坏蓋で、扁平で口径の大きい形態を呈している。天井部はヘラ削りが施されており、緩やかに屈曲して口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめられており、内面のかえりは、内傾して口縁部より下方にのびている。その形態から、7世紀後半頃に位置づけられるものであろう。

掘立柱建物20 (SB-20)

建物址20は建物址19の北に接した位置にある。2×2間(2.6×3.0m)の総柱建物址である。北西の柱穴は、現代の溜池のために消滅している。桁方向はほぼ北東-東西(N12°E)にあつて、建物址19とはわずかに異なっている。

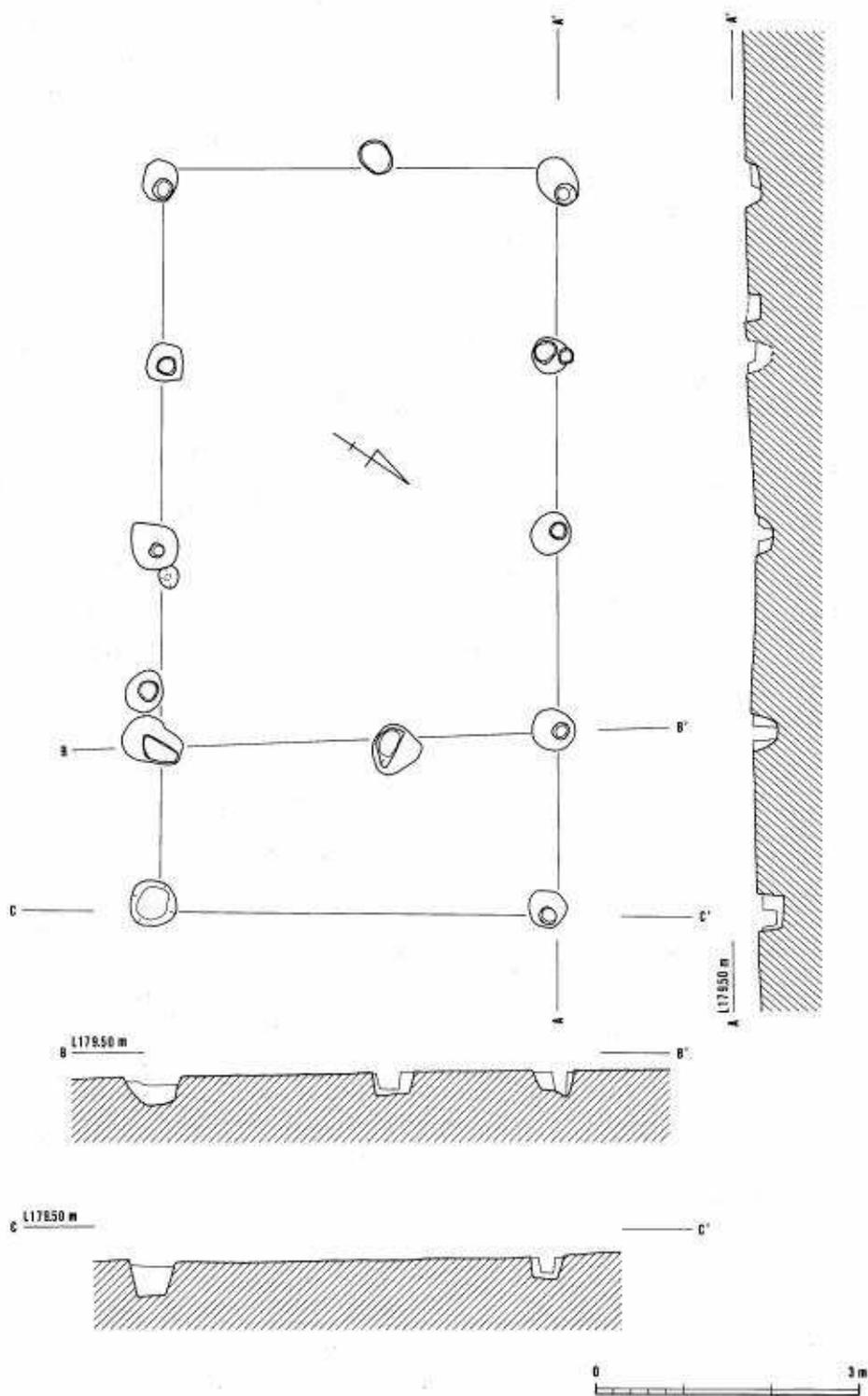
柱穴は直径50~80cmの円形、あるいは不整円形を呈し、柱痕部は直径20~30cmを測る。

遺物は、柱穴内より、須恵器、土師器が出土している。



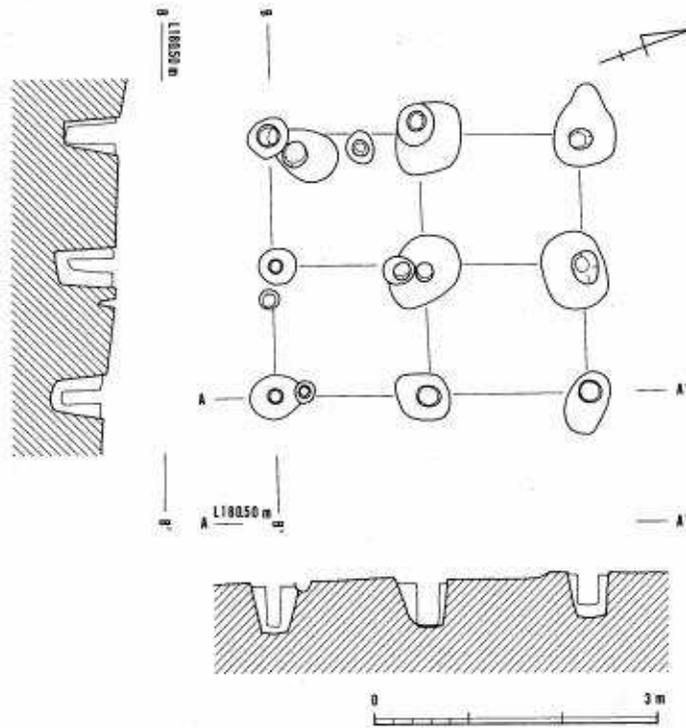
第116図 掘立柱建物19~21出土土器

溝ノ尾遺跡

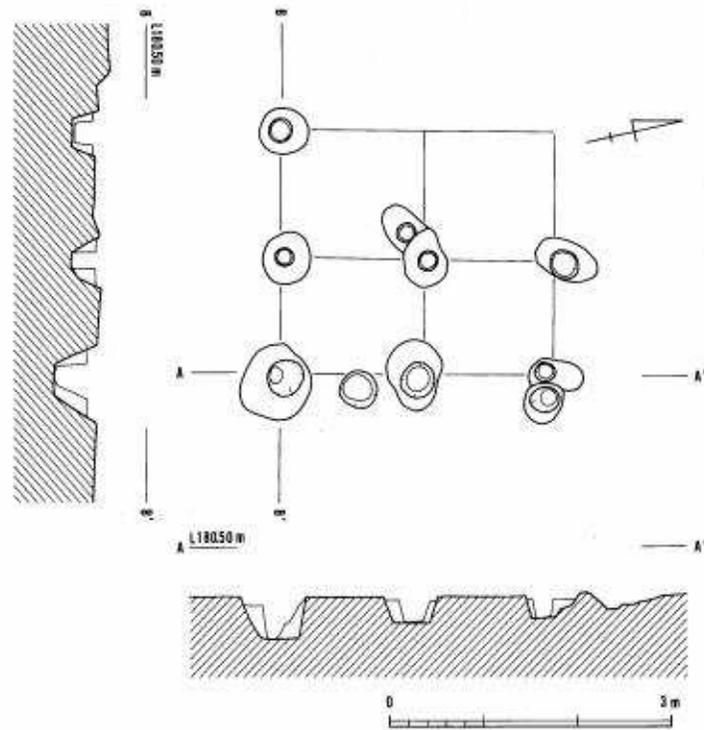


第117図 掘立柱建物18

溝ノ尾遺跡



第118図 掘立柱建物19



第119図 掘立柱建物20

第116図54は扁平化した擬宝珠つまみである。天井部はヘラ切り後、ヨコナデが施されている。8世紀代に比定しうる遺物である。

掘立柱建物21 (SB-21)

建物址21は調査区南部西寄りに位置する、2×2間(3.8×3.8m)の総柱建物址である。建物址22と重複しており、柱穴の切り合いから、これに先行するものである。東西に桁方向を有する。

柱穴は、直径60cm前後の円形、または不整形なもので、柱痕部は直径20cm前後である。

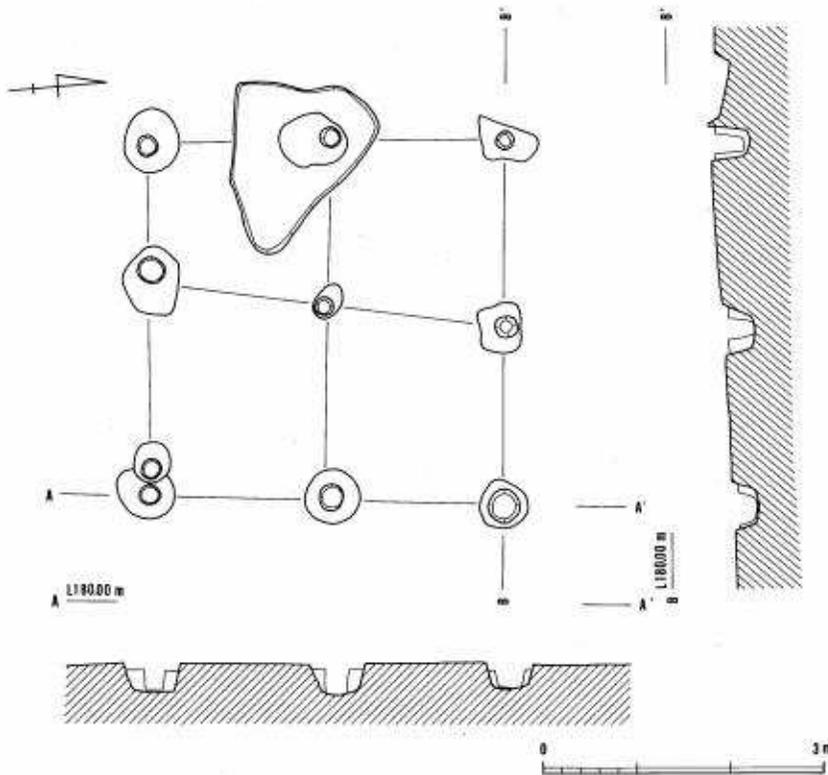
遺物は、柱穴内より、須恵器・土師器が出土している。

第116図55・56は、須恵器坏蓋である。

55は、扁平化した擬宝珠つまみである。天井部は中央で凹む形態を呈し、ヘラ削りが施されている。

56は、天井部が膨らみ、器高の高い蓋である。口縁部はやや尖り気味に、丸くおさめられており、内面のかえりは、内側に肥厚し、内傾しながら口縁より下方にのびており、端部はまるくおさめられている。

57は、須恵器坏底部である。短く外方へ張り出す高台をもち、底部~体部はヨコナデ調



第120図 掘立柱建物21

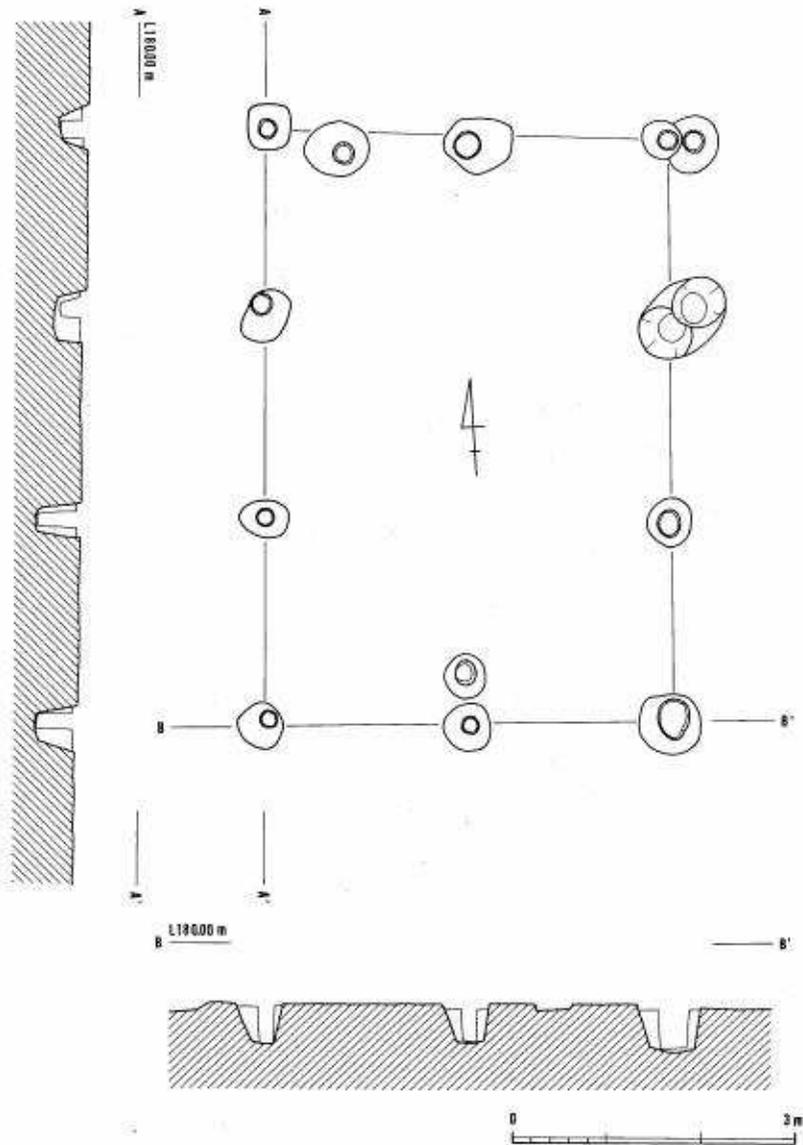
整が施されている。

55の蓋からみるならば、建物址21は8世紀代に比定しうるものと思われる。

掘立柱建物22 (SB-22)

建物址22は調査区南部西寄りに位置する。2×3間(4.4×6.2m)の建物址である。桁方向は南北(N3°E)にあり後述の建物址23・24と同一方位である。

柱穴は、直径50cm前後の円形、あるいは四辺形を呈し、柱痕部は直径25cm前後をはかる。本建物址の西側に並行して溝1・2がのびており、雨落ち、あるいは建物の外周を区画す



第121図 掘立柱建物22

るものと考えられる。

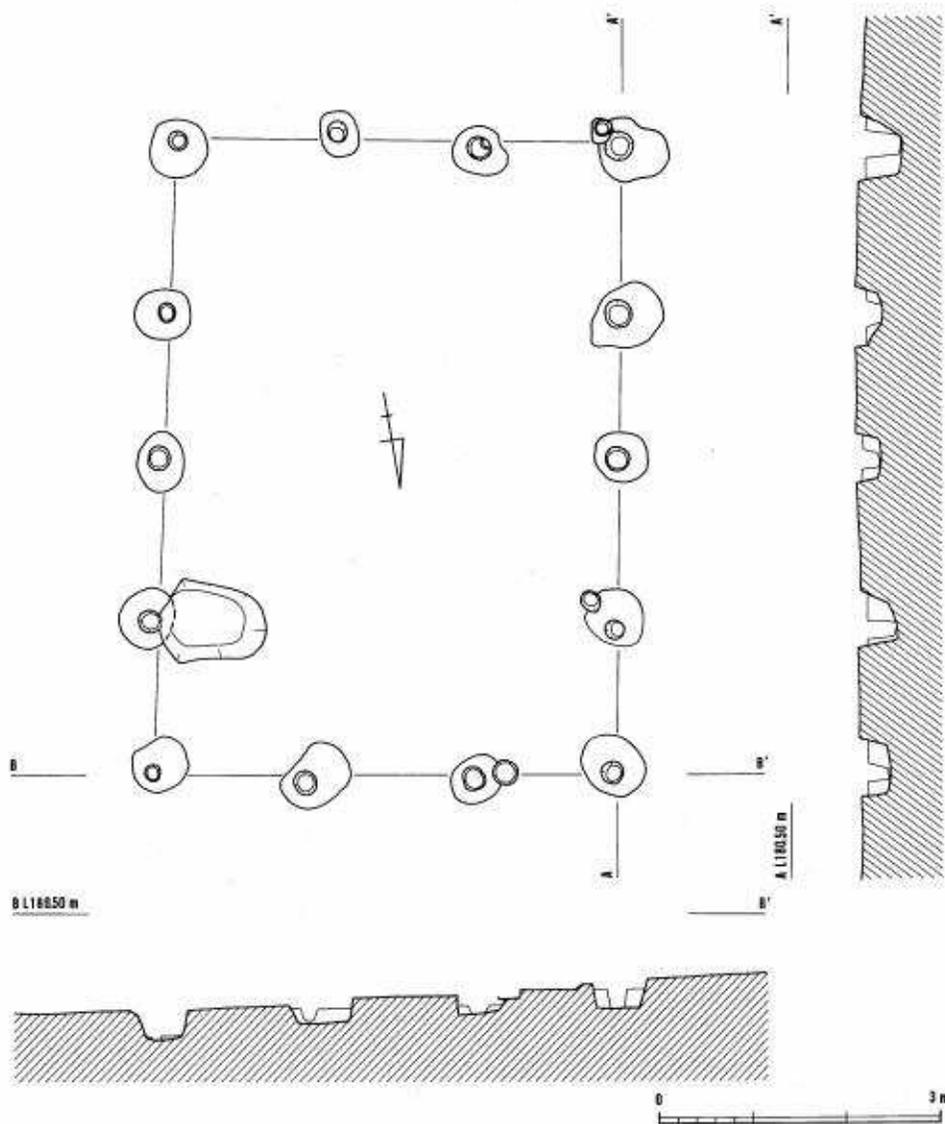
遺物は細片のため図示できないが、8世紀代と考えられる。内面にかえりをもたず、垂下した口縁端部を有する須恵器坏蓋がみられる。

掘立柱建物23 (SB-23)

建物址23は調査区中央に位置する。3×4間(5.0×6.8m)の建物址である。桁方向を南北(N4°E)にもち、先述のように建物址22・24と同一方位にある。

柱穴は、直径50~60cmの円形、あるいは不整形円形で、柱痕部は直径20cm前後を測る。

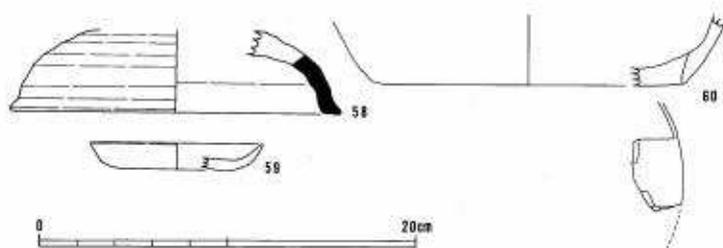
遺物は、柱穴より、須恵器・土師器が出土している。



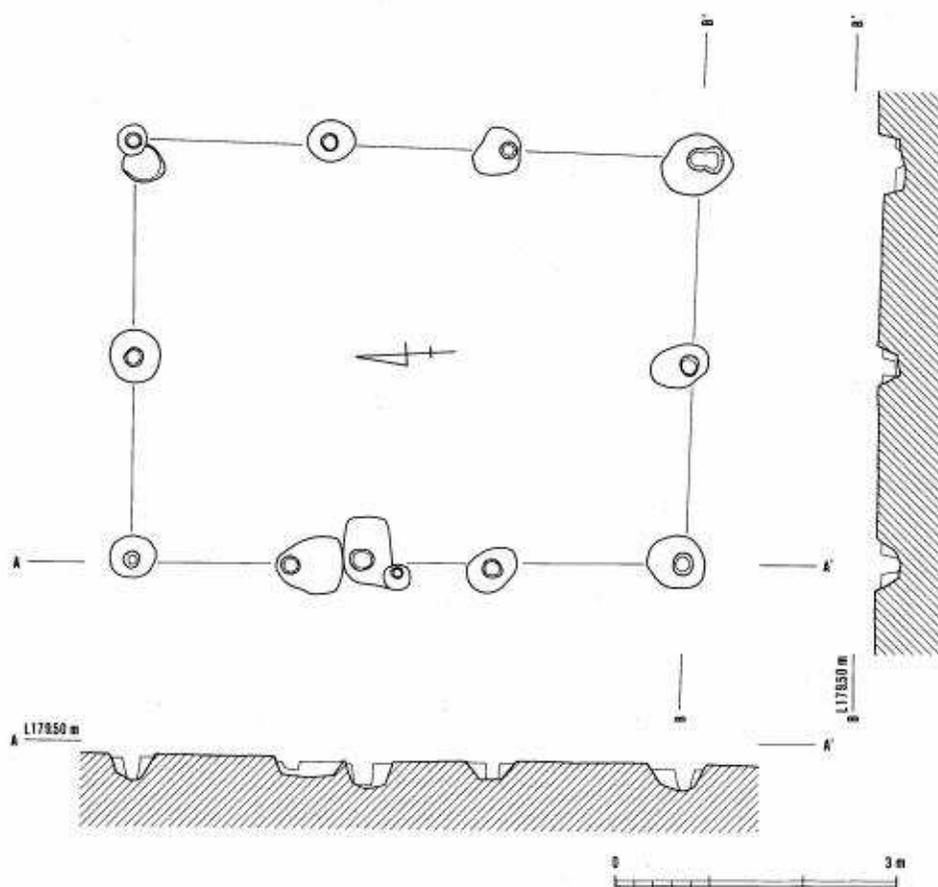
第122図 掘立柱建物23

第123図58は、須恵器の脚部である。2カ所に透しをとどめている。脚端部は、外方につまみ出されており、全体にヨコナデが施されている。

59は、土師器小皿である。全体に磨耗が著しい。体部は、底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は、器厚を減じつつまるくおさめている。



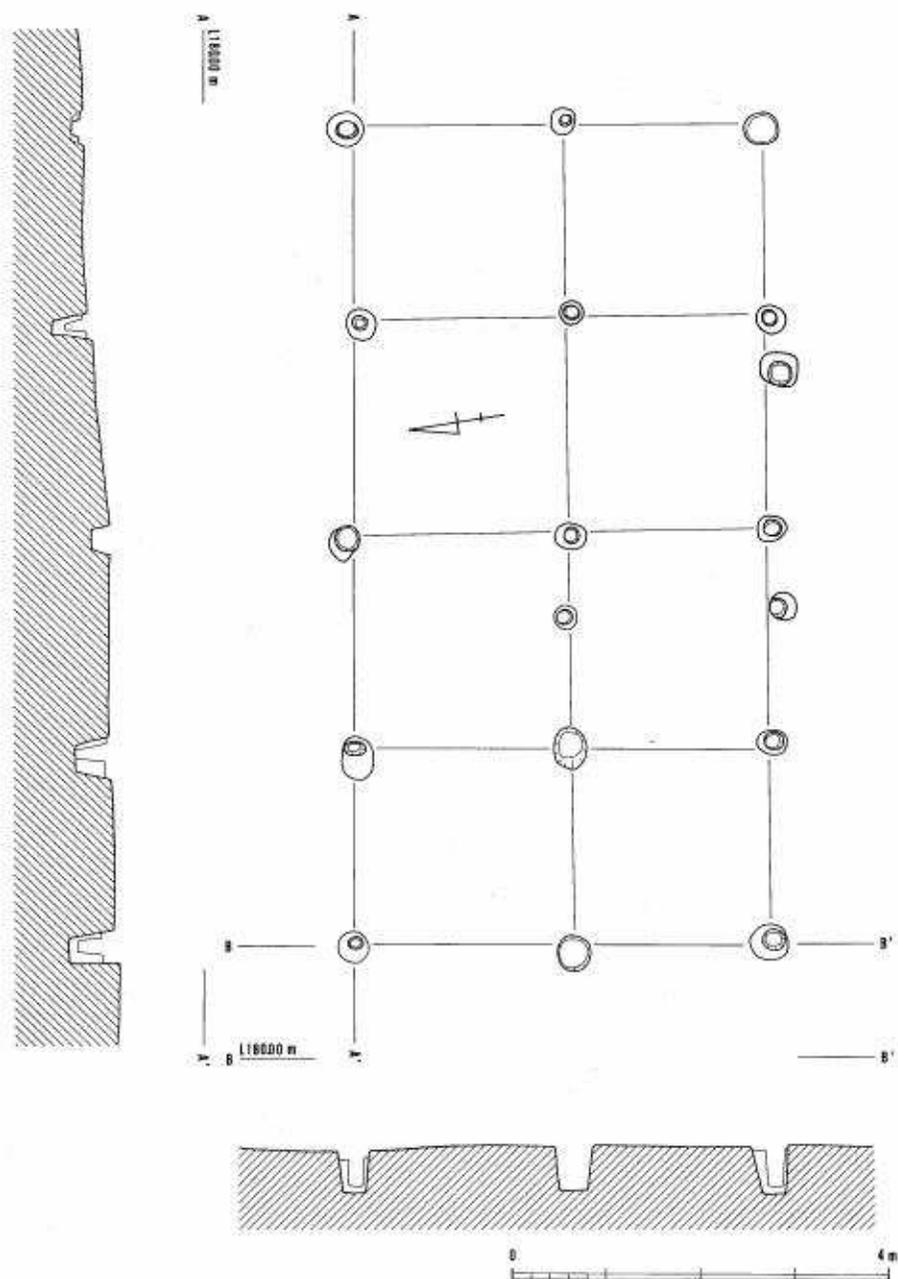
第123図 掘立柱建物23・24出土土器



第124図 掘立柱建物24

掘立柱建物24 (SB-24)

建物址24は調査区中央に位置する。2×3間(4.3×6.2m)の建物址である。桁方向は南北方向(N5°E)にあって先述の建物址22・23と一致している。この3棟は、ほぼ等間隔に、軸線をそろえて配置されており、有機的な関連が看取される。



第125図 掘立柱建物25

柱穴は、直径60cm前後の円形、あるいは不整形円形を呈し、柱痕部は直径25cm前後である。60は、須恵器甔の底部である。底部には、四辺形状の孔が設けられている。体部は、外面がへら削り、内面はヨコナデによって成形、調整されている。

他に8世紀代と思われる須恵器坏蓋が出土している。 (久保)

掘立柱建物25 (SB-25)

建物址25は調査区北端に位置する。規模は東西の桁行4間(8.6m)、南北梁行2間(4.4m)で、床面積はおよそ38㎡。桁方向を東(N81°W)にとる東西棟総柱建物址である。桁行の柱間寸法は2.2m。梁行の柱間寸法も同じである。柱穴の掘り方は径30~40cmの不整形円形。柱痕は20cm前後である。検出面からの深さは25~50cmと均一ではない。

時期を決定できる遺物はない。同様の方位にある建物址に建物址26がある。 (西口)

掘立柱建物26 (SB-26)

建物址26は調査区北部に位置する。4×4間(6.6×7.5m)まで確認された、総柱建物址である。北西隅の柱穴は、近代溝によって削平されている。南北の柱間が東西より長く桁方向は南北(N3°E)に一致する。梁行の柱列のうち、中央2間は、東・西の柱間より約20cm程度大きい。

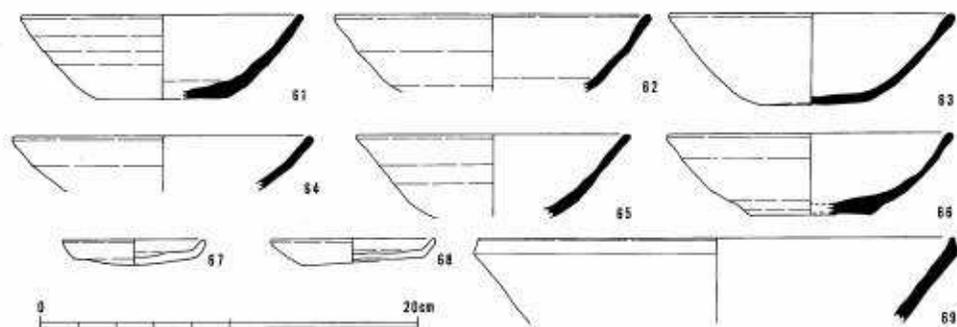
柱穴は、直径25cm前後の円形で、柱痕部は直径20cm前後をはかる。

遺物は柱穴より、須恵器・土師器が出土している。

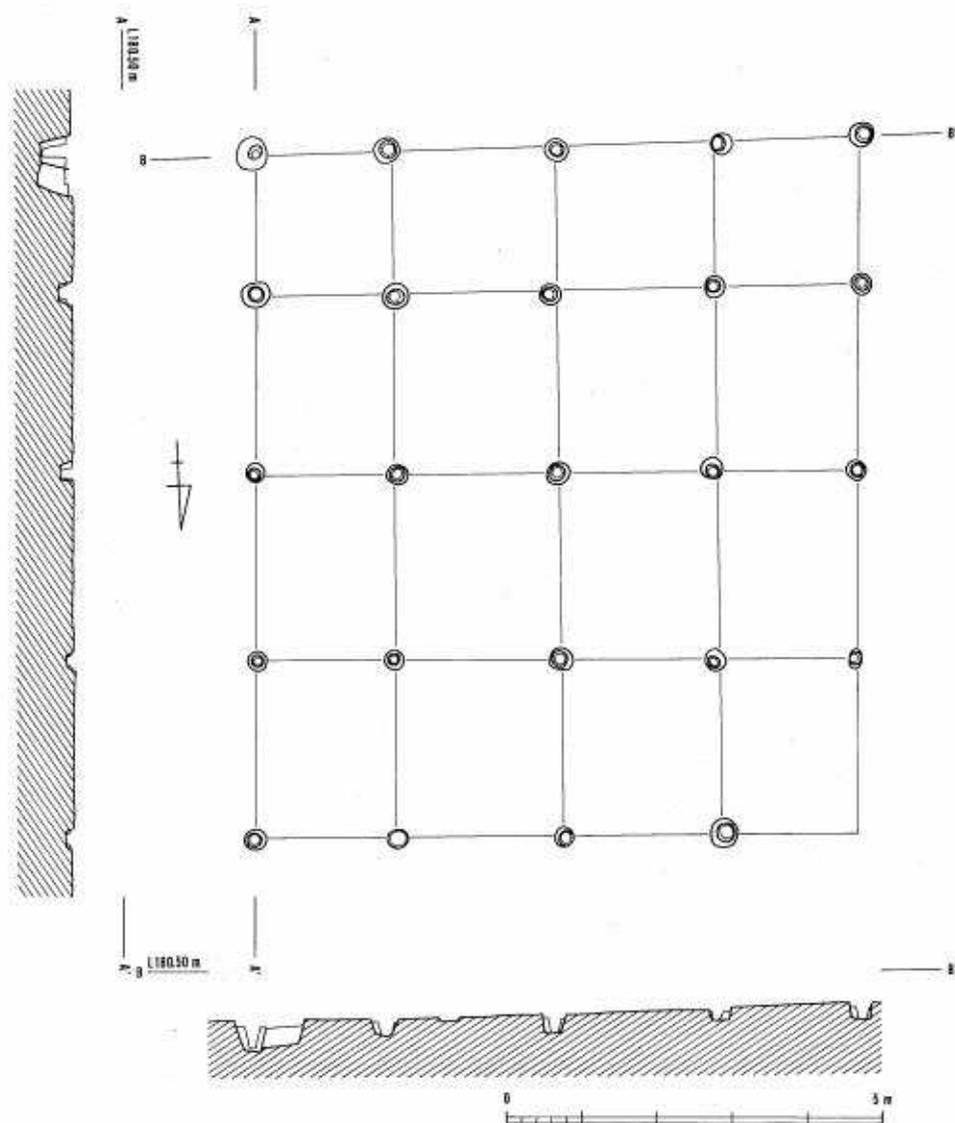
第126図61・62は須恵器甔である。

61は、回転糸切り底を有する。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がっており、ヨコナデ調整によって、ごく弱い凹凸が形成されている。底部から体部にかけては丸みをもって移行する。口縁部はほぼ直線的にのび、端部は丸くおさめられている。

62は、底部を欠き、体部は底部からまるみをもって、内彎気味に立ち上がった後、ほぼ中央部で屈曲して外反し、口縁部に至る。口縁部は、わずかに肥厚しつつ丸くおさめられている。



第126図 掘立柱建物26~28出土土器



第127図 掘立柱建物26

61・62とも、13世紀代に位置づけられるものであろう。

掘立柱建物27 (SB-27)

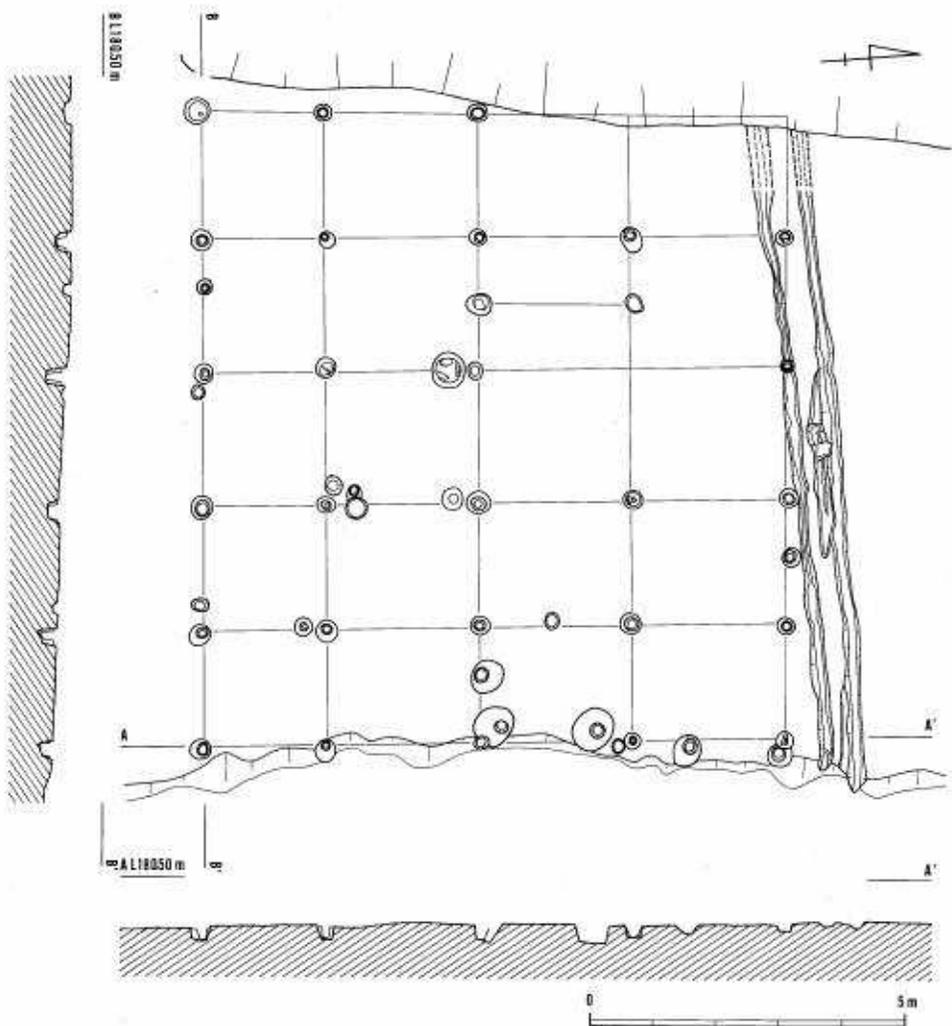
建物址27は調査区中央西寄りに位置する。4×5間(6.4×7.0m)の総柱建物址である。建物の桁方向は東西(N86°W)方向にあるが柱間は南北方向が東西よりも30cm前後長く、建物址26に近似する。また、南辺の南北柱間は、他の南北柱間より約40cm短く、あるいは底かと思われる。建物址北辺の溝(溝5 A~C)は、建物址の柱穴を切っている。柱穴は直径25cm前後の円形で、柱痕は直径20cm前後をはかる。遺物は、柱穴内から、須恵器・土師器が出土している。第126図63~66は須恵器埴である。

63は、回転糸切り底を有する。体部は、底部から丸みをもって立ち上がり、緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁部は肥厚して外反し、端部は丸くおさめられている。

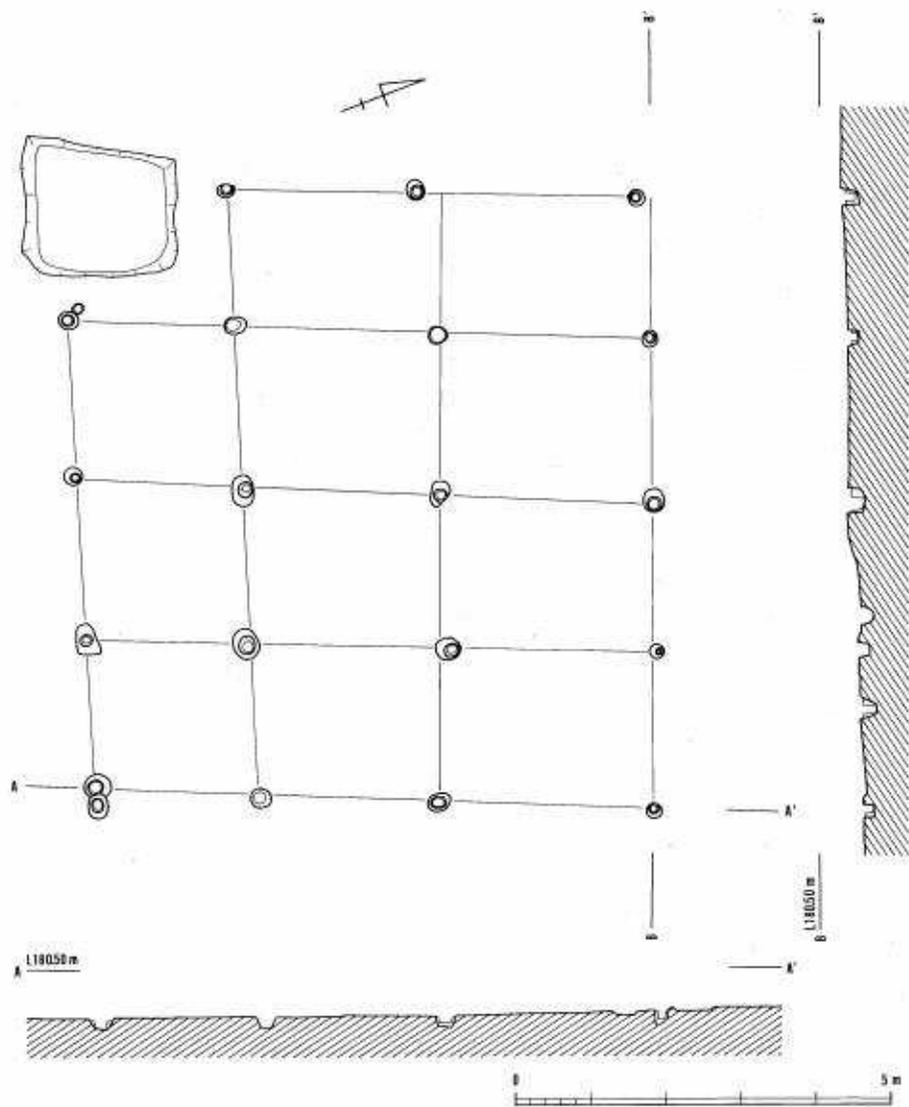
64・65は、ともに底部を欠く。64は、立ち上がりから浅い壠と思われる。緩やかに内彎しつつ立ち上がり、口縁下はヨコナデによって、やや外反気味に仕上げている。口縁端部は、丸くおさめられている。65は、口縁部が外反し、端部をわずかに外方へのぼしている。体部下半はゆるやかな丸みをもって底部に至る。

66は、わずかに平高台を有する。回転糸切り底を有し、ヨコナデによって底部外周に2条の稜を形成している。体部は、緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁下は外反している。端部は、肥厚しつつ丸くおさめられている。

建物址27は、柱穴内出土の遺物から、12世紀末～13世紀に比定される。



第128図 掘立柱建物27



第129図 掘立柱建物28

掘立柱建物28 (SB-28)

建物址28は調査区西南部に位置する。3×4間(6.1×6.6m)の総柱建物址である。桁方向は東西(N70°W)方向にあるが、柱間に変異が大きい。南北の柱間が東西より大きい点は建物址26・27に近似する。南北の柱間は、南辺の1間では他よりも約30cm短くなっている。南西隅の柱穴が欠けており、この位置に土壇14がある。柱穴は、直径25cm前後の円形を呈し、柱底部は直径20cm程度をはかる。遺物は柱穴内より、須恵器、土師器が出土している。

第126図67、68は、ともに土師器小皿である。手づくねによって成形され、ヨコナデ調整

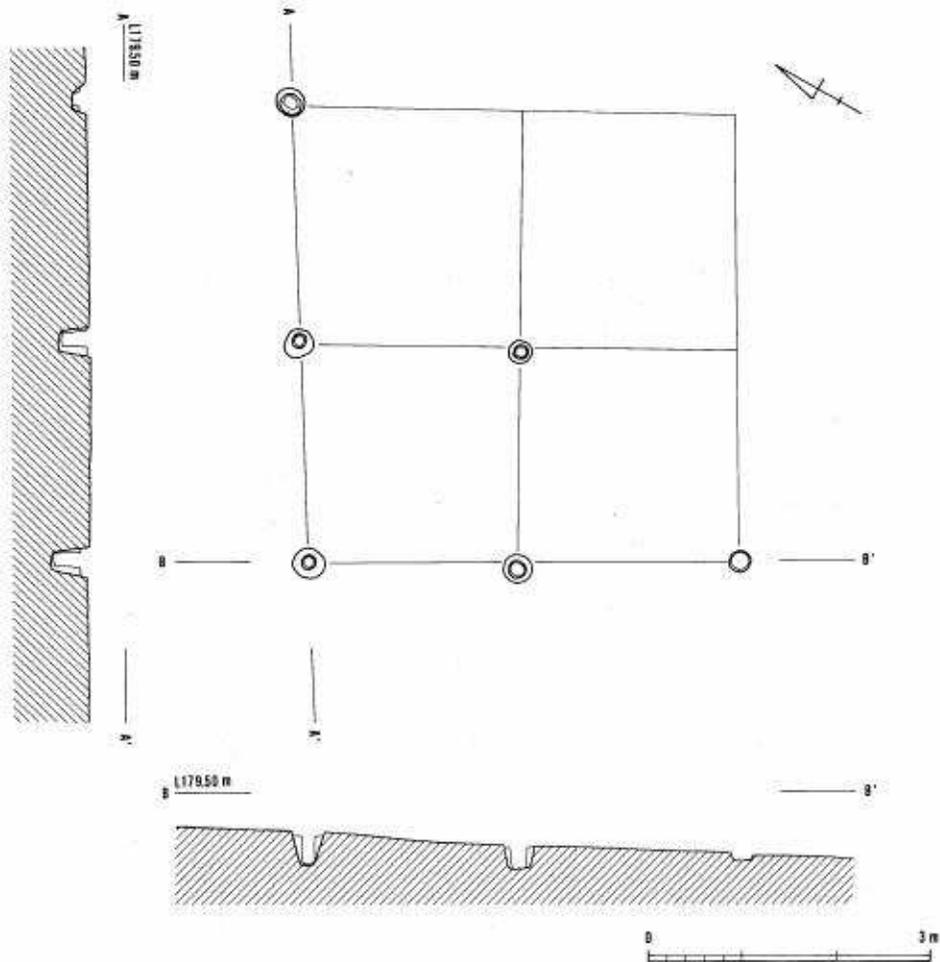
が施されている。体部は底部から屈曲して短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさまられている。

69は、須恵器の鉢である。口縁部の一部が遺存するのみであるが、片口をもつ可能性があろう。体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げられ、丸くおさまられている。12世紀末～13世紀に比定できよう。

掘立柱建物29 (SB-29)

建物址29は調査区南部で検出された。2×2間(4.0×4.6m)まで確認された。総柱建物址である。ほぼ正方形の平面形を呈しており、その方位は、北東-南西(N60°E)方向である。検出面が、西から東へ下がる傾斜をもつため、東側ほど柱穴が浅く、59年度調査区部分では、完全に削平されていた。

柱穴は、直径20cm前後の円形で、柱痕部は直径10cm前後という、小規模な建物址である。



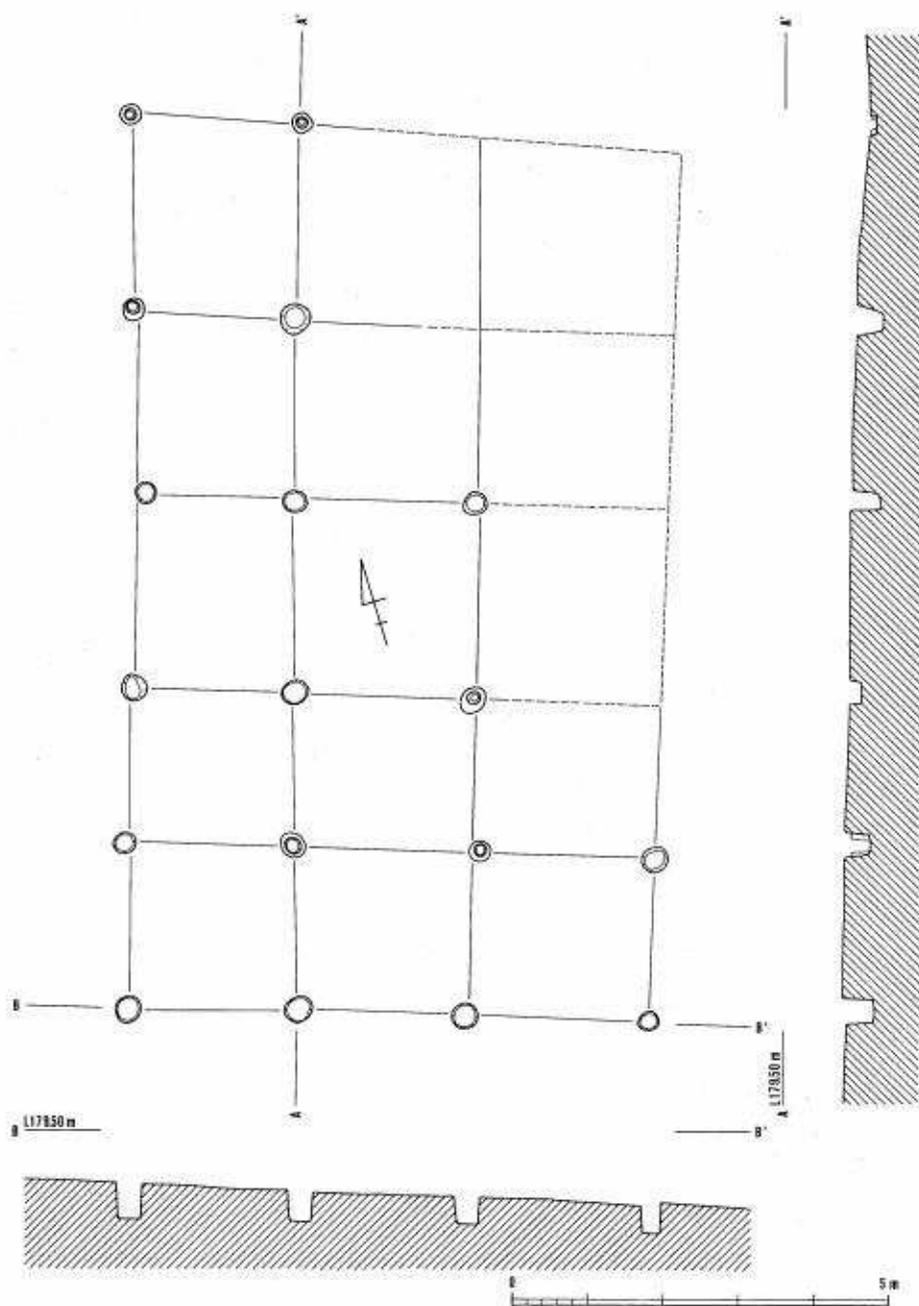
第130図 掘立柱建物29

溝ノ尾遺跡

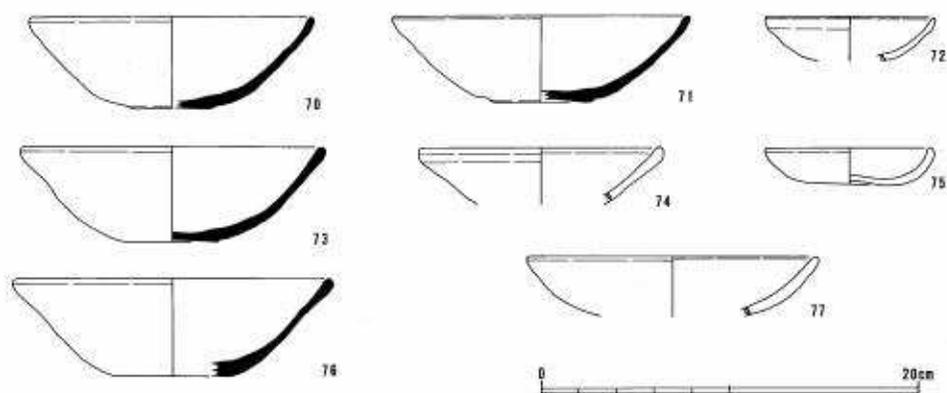
遺物は出土しておらず、時期も特定し難いが、建物の形態・規模から、中世以降のものと思われる。

なお、検出面（いわゆる地山）は、本建物址付近から南では、礫層となり、次第に傾斜を強めながら、谷部に至っている。

(久保)



第131図 掘立柱建物30



第132図 掘立柱建物30出土土器

掘立柱建物30 (SB-30)

建物址30は調査区北東端に位置する。規模は、南北桁行5間(9.8m)、東西梁行3間(5.6m)で、床面積約55㎡。桁方向を北北東(N17°E)にとる南北棟総柱建物址である。建物の北東半の柱穴は下段水田の造作によって削平をうけており検出されていない。L字形の建物址であった可能性も残る。桁行・梁行とも柱間寸法は均一性を欠いている。桁行の柱間寸法は、北側の3間分は約2.1m、4間目は1.7m、5間目は1.85m。梁行の西側の1間は約1.8m。それ以外は約2mである。柱穴の掘り形は径25cm前後の円形。径15cm前後の柱痕を持つ。検出面からの深さは40cm前後で、掘り形底のレベルにあまりばらつきはない。柱穴のいくつかは、柱痕をぬいた後割石を入れ、ていねいに埋め戻されている。この場合いくつかの柱穴では、瓦器皿、土師皿を底に埋置している。また、須恵器壺を掘り方上面に埋置したのもあった。

遺物は、須恵器壺片・土師器壺・皿片・瓦器小皿が出土している。

70・71・73・76は須恵器壺である。口径16～17cm。丸味を帯びた体部に直立気味に立ちあがる口縁部をもつもの70・71と、直線的な体部に口縁部で若干外反しやや肥厚する端部をもつもの73・76にわけられる。底部はすべて回転糸切りを施し、70・71・73は微かに突出する。76は平底。

72は小型の瓦器壺である。体部はゆるやかな丸みをもって立ち上がる。口縁部は上方にのびており、口縁下にはごく弱い稜が形成されている。口縁端部は丸くおさまられている。

75は瓦器小皿。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は上方につまみ上げられている。口縁端部は、やや肥厚しつつ丸くおさまられている。全体に磨耗しているが、内外面ともヨコナデ調整が施されており、内面には暗文をわずかにとどめている。

77は土師器皿で、丸みをもった体部が大きく開いて立ち上がる。口縁端部は丸くおさまられている。全体に磨耗が著しく、成形・調整は明らかではない。

74は、土師器境。直線的に外上方へ立ち上がる体部から、ほぼ垂直に肥厚した口縁部がつまみ上げられている。口縁端部は、丸くおさめられている。全体に磨耗が進み、成形・調整痕は明瞭ではない。(西口)

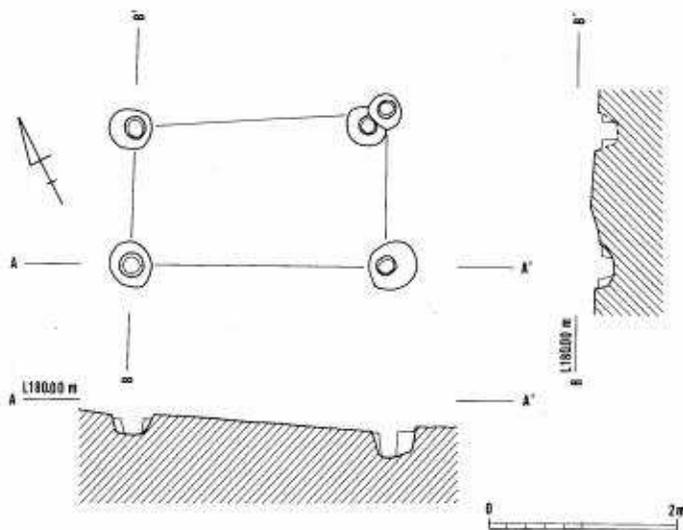
掘立柱建物31 (SB-31)

建物址31は調査区中央西寄りに位置する、1×1間(1.6×2.7m)の、ごく小規模な建物址である。桁方向は北西-南東(N62°W)方向にある。柱穴は、直径25cm前後の円形を呈し、柱痕部は、直径15cm前後をはかる。

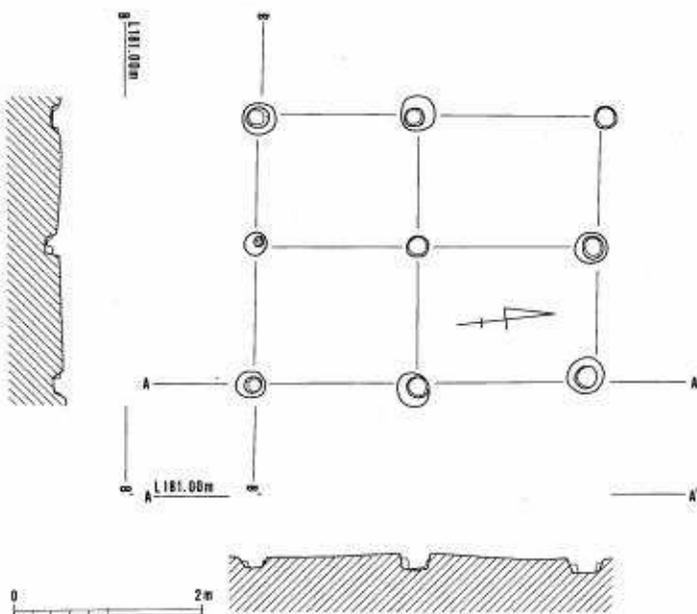
遺物は出土せず、時期は決定できない。

掘立柱建物32 (SB-32)

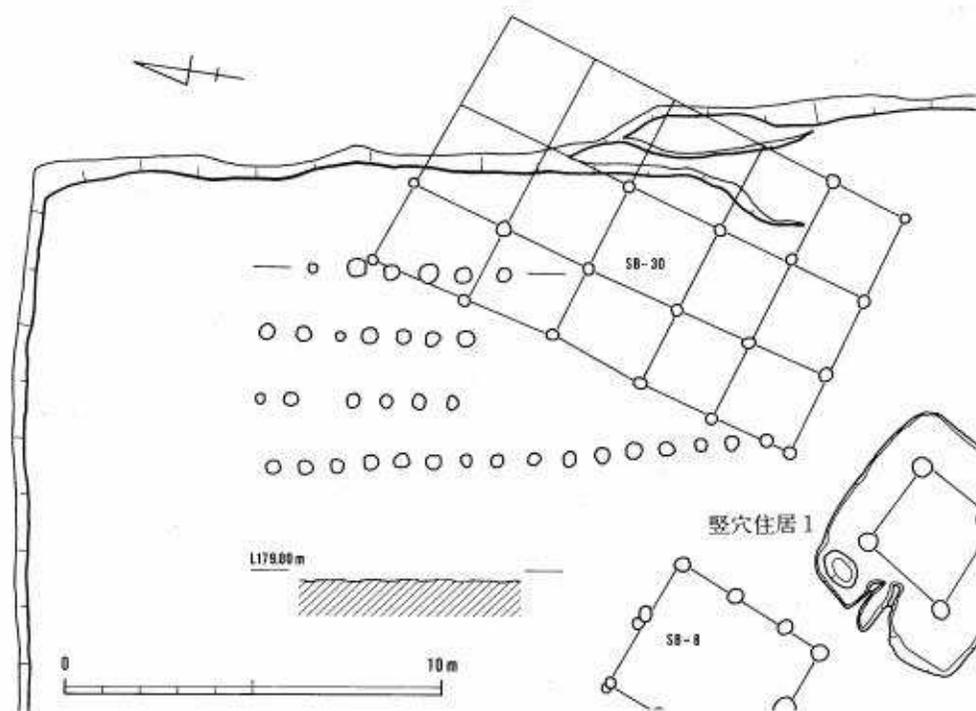
建物址32は調査区北西部に位置する。2×2間(2.8×3.8m)の総柱建物址である。桁方向は北東-南西方向(N7°E)で柱穴は直径30cm前後の円形を呈し、柱痕は直径15cm前後である。遺物は出土せず、時期の特定はできない。柱間が南北に長く建物址26~28に類似する。(久保)



第133図 掘立柱建物31



第134図 掘立柱建物32



第135図 ピット列

ピット列

調査区北東端に、南北方向(N7°W~N11°W)へ4列で並ぶ。径40~50cmの不整円または隅丸方形をしており、深さ10cm以下の浅い皿状もしくはすり鉢状を呈している。南北のピットの間隔は85~90cm。柱痕は確認されない。東西の並びについては、斜めに4列が並んでいくか、もしくは1列おきの2列づつが対応して並ぶかのいずれかと考えられるが、現況では判断材料がない。

時期は、13世紀代と考えられる建物址30と切り合い、場所によっては、20cm近く上層に位置している。また、ピットが掘り込まれている土層は中・下段水田によって大きく削平をうけている。ピットの出現は水田を造作した時期より前である。ピット切り込み面より上層では、室町時代より江戸時代にかけての遺物が混在出土してしているため、時期を絞ることは難がある。しかし、検出面直上では比較的15世紀代の遺物が多いことから、15世紀頃の可能性が高い。

遺構の性格はAW-62地点で報告されている柵列状遺構とは、形状では似るものの、柱痕の有無の違い、時期の違いがあり、似て非なるものといえよう。何らかの植物の苗床といった考えもあながち否定出来ない。

ピット出土の遺物 (59年度調査)

建物址として並ばないピット内より出土した。大半は遺構面の削平によって他の柱穴が

失われた結果と考えられるが、地鎮的な性格のものが混在している可能性がある。須恵器
 坏蓋 (78) は、陶邑 (中村) 編年IV-1型式に入るものである。AK-119で同一の蓋を焼成
 しており、この窯の産と考えられる。AK-119は8世紀後半～9世紀初頭の窯と考えら
 れている。79は体部に稜をもっており、いわゆる稜椀に属す。稜部分より外反し、口縁端部
 は肥厚し、内側に屈曲し沈線をもつ。時期は8世紀の範疇に入るものと考えられる。

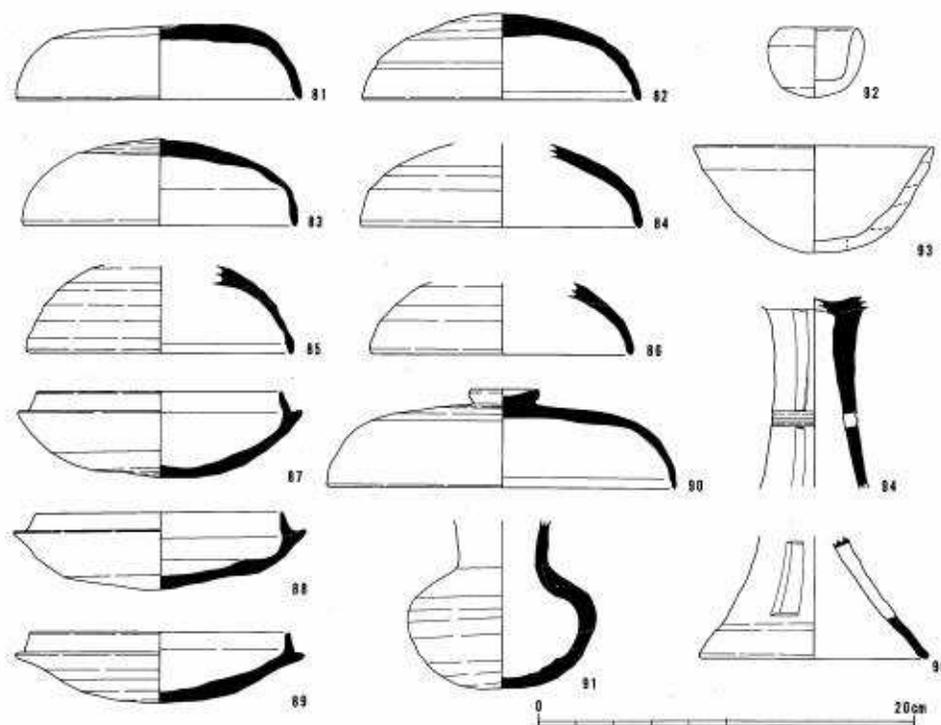
80は土師器皿。口縁部は屈曲して外方へ水平に延び端部は強いナデによってやや上方へ
 立ちあがっている。いわゆる「て」字状の口縁を有している。底部から体部は、指押しに
 よる調整を行い、底部中央は若干内側へ突出している。時期は鎌倉時代から室町時代に
 かけてと考えられるが、共伴遺物がなく明瞭には出来なかった。

土壌 1 (SK-1)

調査区南半中央、建物址1の北側に土壌4と近接して位置する。規模は長径4.15m、短径



第136図 ピット出土土器



第137図 土壌1・4出土土器

3.5m、深さ約20cm。形状は不整形楕円を呈する浅い落ち込み状の遺構である。

遺物は、須恵器坏蓋・身・高坏・壺・土師器鉢・ミニチュア土器が出土している。

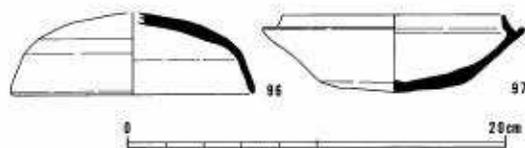
81～86は須恵器坏蓋。口径15cm前後で、天井部と体部の境が稜線、凹線で区別できる81～84と、口径14cm前後と若干小さく逆に器高が高い、天井部から口縁端部まで丸みを帯びるものに大別出来る。81は天井部全域にヘラ削りを施し全体に扁平な器形。82は天井部と体部の境に沈線をもつ。坏身は、口径13～14cm。87は器高が高く底部から体部にかけて丸みを持ち、受部のたちあがりは若干内彎しながら上内方へのびる。89は平底で体部が直線的で、受部が水平に外方へのびる。88は底部がヘラ切り未調整である。90は高坏蓋。94は無蓋高坏脚。95は有蓋高坏脚であろう。93は土師器鉢。口径12.6cm。高さ5.6cm。尖底に近い丸底で、体部は直線的に立ちあがる。口縁部はシャープで強いナデで心もち外反する。全体に粗い仕上げである。底部より体部に向って板状の工具でなでつけている。粘土紐をつぎ足した痕跡が顕著である。

92はミニチュア土器。口径4cm。器高3.7cm。口縁部は直口し、強いナデによってシャープな端部をつくり出している。焼成が甘く磨滅が激しい。

土壌1は遺物からみて時期的には7世紀初頭前後と考えられる。若干の差異はあるが、田辺編年TK209型式と並行におさまるものと考えられる。土壌の性格は不明であるが、住居址に囲まれた位置にあること、土師器の煮沸具を含まずミニチュア土器が出土していることを考えれば、単なる貯蔵や廃棄用の日常的に使用する土壌ではなく、祭祀的な役割をもつ土壌であった可能性がある。

土壌2 (SK-2)

調査区北東端、住居址1の北側に位置する。規模は長径1.25m、短径0.76m、検出面からの深さ15cm。浅い皿状を呈した不整形楕円である。隅丸方形土壌を掘りつぶしてつくられている。

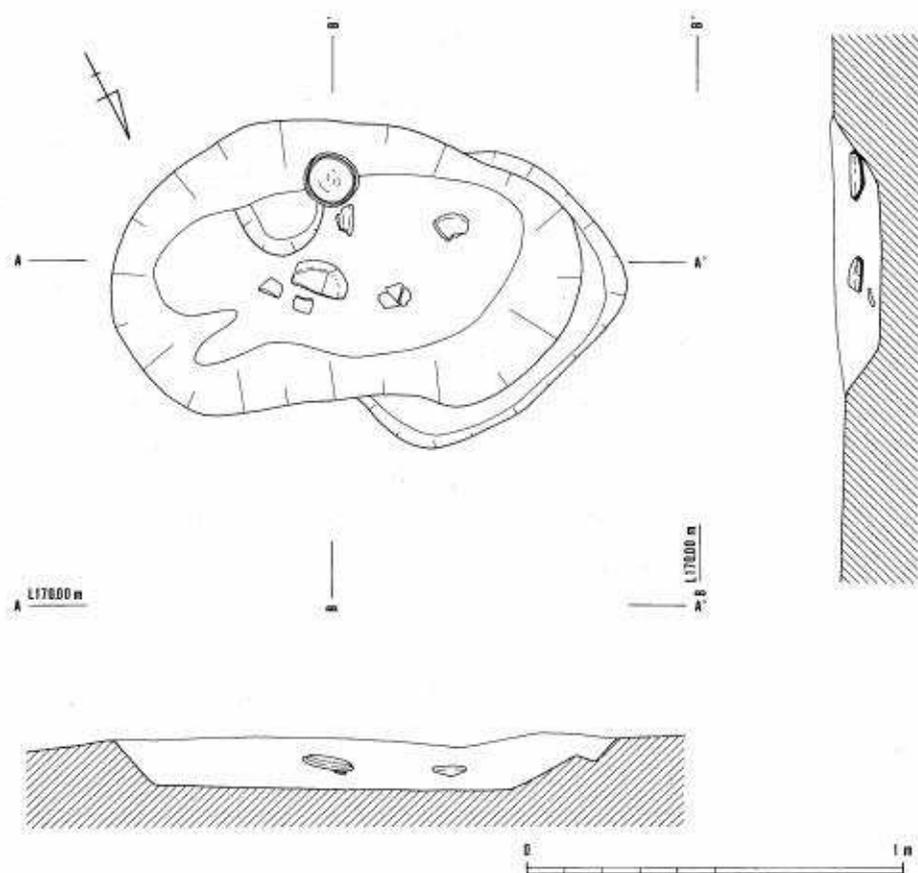


第138図 土壌2出土土器

遺物は、土師器の細片の他、須恵器坏蓋・坏身が出土した。坏蓋96は、

径13cm。残存器高4.5cm。全体に丸味を帯びた丈の高い器形である。焼成は甘く、磨滅が激しい。天井部は丸く、体部との境には、ゆるい稜線が入る。体部は直線的に外方へ開き、口縁端部はシャープさを欠いている。ヘラ削りは天井部の2/3ほど施されているが、粗雑なため、頂頭部にヘラ切り痕跡が残っている。坏身97は、口径11.6cm。器高4.5cm。ヘラ切り未調整の平らな底部に直線的に斜め上方へ立ち上がる体部を持つ。受部もまた、そのまま短く立ち上がり、水平には張り出さない。口縁部たちあがりは内傾して直線的にたちあがる。端部はシャープにおさめる。

溝ノ尾遺跡



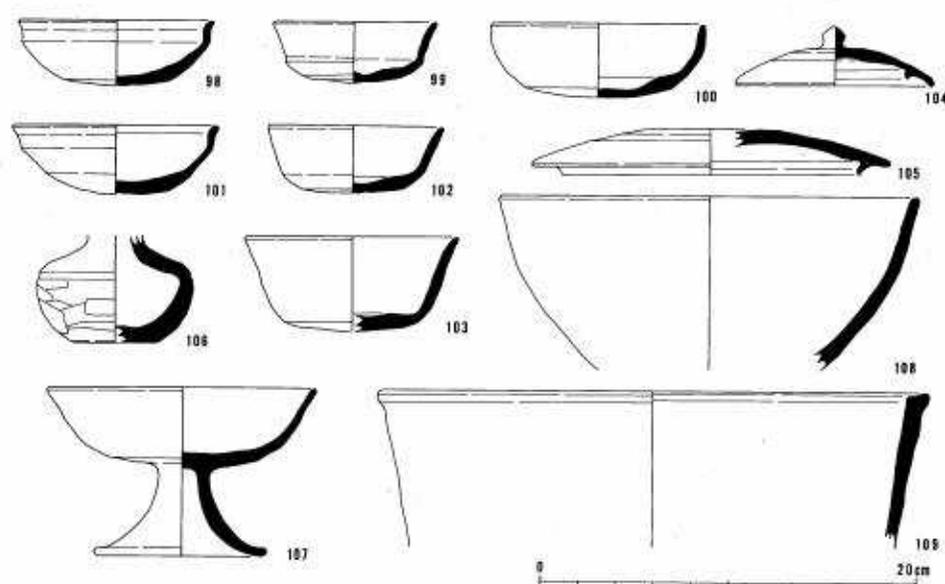
第139図 土壌 2

両者は、合わさって土壌内に埋置されていた可能性がある。但し、焼成に明瞭に違いがある。もともと別々に焼成したものを組み合わせたのであろう。時期は共に7世紀前半—田辺編年TK217併行と考えられるが、形態の割にやや法量大きい。

土壌 3 (SK-3)

調査区の南西半、住居址2の北西に位置する。南側を土壌5に切られており規模形状共に若干はつきりしない。規模は長さ4.2m、幅2.2m、深さ10cm、形状は不整形な長方形。極端に言えば足跡の様な形状を呈している浅い皿状の遺構である。

須恵器環身は無高台のものが出土している。98・101は口径12cm前後。ヘラ切りの平らな底部に、丸みをもって立ちあがる体部、口縁部は直立し端部のみ外反している。99・102・103はヘラ切りの平坦な底部に直線的に立ちあがる体部、心もち外反気味におわる口縁部をもっている。このうち99は底部に一部ヘラ削りを施し、底部と体部の間に明確な稜をもっている。100は丸い体部に直口する口縁をもち、口径11.5cm、器高3.8cm。104は坏蓋。乳頭状のつまみを持つが、器形自体は扁平。天井部から口縁部までゆるやかに傾斜してゆく。



第140図 土壌3出土土器

内面のかえりは退化して短く、口縁部にかくれ、外よりは見えない。105は、口径16cm。大型の坏もしくは鉢と考えられる器種に伴う蓋と考えられるが有蓋高坏の可能性もある。

106は須恵器甕。肩部に凹線をほどこしそれ以下には静止ヘラ削りを横方向へやや不規則にほどこしている。

107は須恵器高坏。上外方へ直線的に開く体部から口縁部に、裾部へ開く短か目の脚がつく。

108は口径23cm。須恵器鉢。丸い体部から上外方へ直線的に立ちあがる口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。全体にロクロナデを施している。

109は須恵器甕。口径29cm。口縁部は直立し端部がわずかに外方に開く円筒形。

遺物の時期は、7世紀中頃から後半に集中していると考えられる。

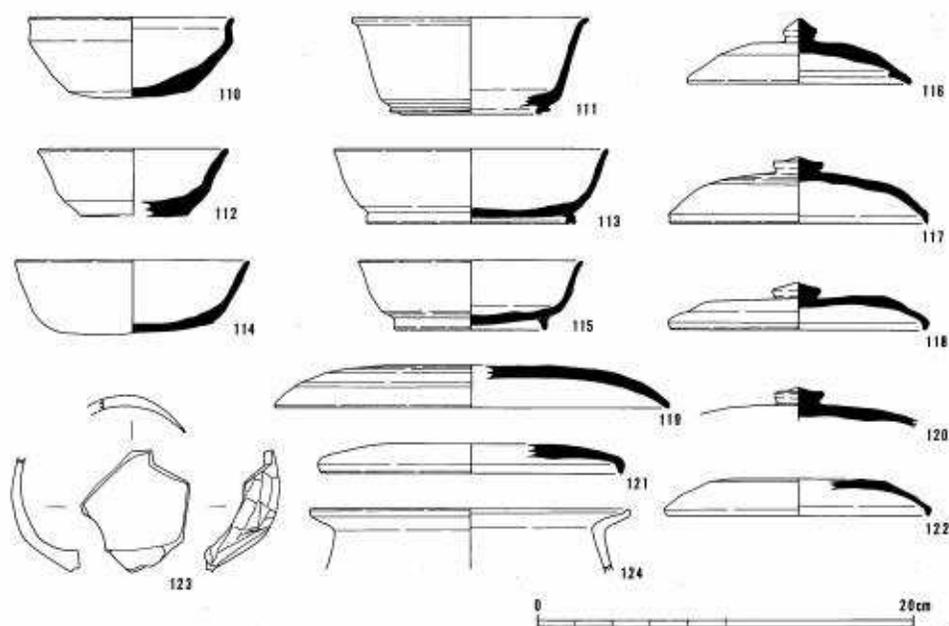
土壌4 (SK-4)

調査区南半中央、建物址の14の北側に位置する。土壌1と近接し、一連の不定形な細長い落ち込みを形成している。土壌4自体の規模は、一辺1.6m、深さは15cm。いびつな形を呈している。

遺物は須恵器甕片の他図示した須恵器壺(第137図91)が出土している。腹径10cm。肩部までロクロ削りをほどこしている。甕と考えられるが注口部が残存していない。

土壌5 (SK-5)

土壌5は調査区南西半、土壌3を切って位置している。非常に不整な隅丸五角形を呈している。土壌の長さ、幅共に2.8m、一辺の長さが1.5~2.0m程度、深さ約30cmの規模を



第141図 土壌5出土土器

もつ。

遺物の出土量は比較的多く、須恵器杯、土師器甕片、器種不明の杓子状の須恵器片が出土した。

須恵器杯身のうち110・112・114は高台のない杯身である。110は口径10.8cm、ヘラ切りそのままの平坦な底部に上方外へ直線的に立ちあがる体部、直口したのち外反する口縁をもっている。114は、口径12.5cmとやや大きい。口縁部はほとんど外反せず、上外方へのびる。111・113・115は、高台杯である。いずれも直線的に立ちあがる体部に、若干外反する口縁部をもつ。

須恵器杯蓋は7点図示した。このうち116は内面にかえりを残す。かえりは退化が著しく内面に水平に貼付いている。119は口径21cm、平坦な頂部からなだらかに口縁端部まで傾斜してゆく。端部は折れまがらず、そのまま丸くおさまる。土師器杯蓋の形態に類似している。116・117・118・120・122は、平坦な頂部。体部はゆるやかに傾斜し、周縁で下方へ折れる短い口縁部をもっている。123は杓子状の須恵器である。口縁部は一部残存している。柄があったと思われる部分から先端へかけてゆるやかに凹面をつくり出しながらのびている。全体に造りは雑で外面は全面ヘラ削り口縁部まで削りによって仕上げている。口縁端部はつまみあげ断面は三角形、一部粘土でついた形跡がある。

遺物の時期にはあまりばらつきがなく、8世紀初頭前後にすべて集中している。

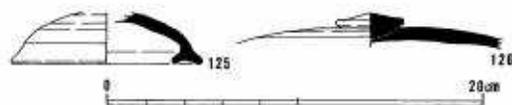
土壌 6 (SK-6)

調査区中央東端、住居址3北コーナーに近接している。浅い溜まり状の遺構である。規模は長径1.6m、短径1.2m、検出面からの深さ5cm。形状は不整形な楕円を呈している。土壌内より、数点の須恵器片が出土したが、図示出来たのは125の1点のみである。

125は復原径9.8cmの須恵器坏蓋片。天井頂頭部は欠失している。器体は、天井下部から体部にかけて丸く、口縁部は軽く屈曲して外方へのびる。口縁端部は丸くおさめ厚ぼったい。かえりは、端部が丸く厚ぼったく内傾が激しい。かえりは口縁部より下には出ない。宝珠つまみがつくであろう。

土壌 7 (SK-7)

土壌7は住居址3北側コーナーに近く位置する。長径1.2m、短径0.9m、深さ8cm。楕円すり鉢形の遺構である。土壌内には径10~20cmの割石が散乱している。割石は大半が原位置を動いた状態で検出されたが、土壌



南半部で方形に石組みをつくっていた可能性がある。

第142図 土壌6・7出土土器

遺物は坏蓋片1点のみ図示できた

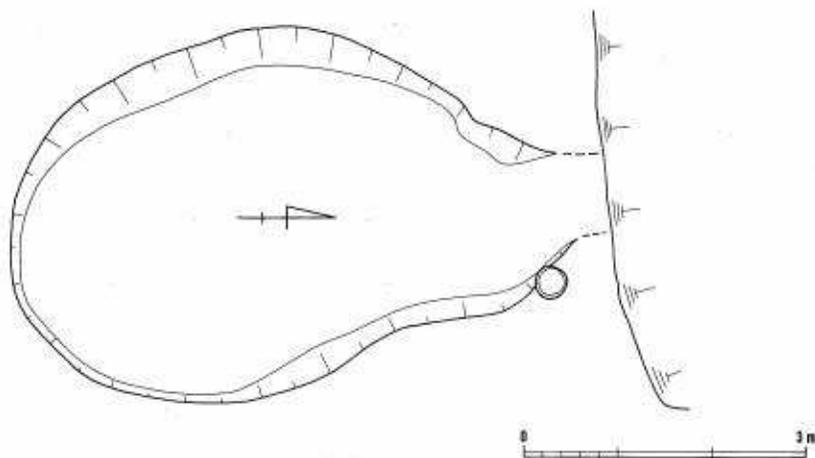
(126)。ロクロ削りを施す平坦な天井部に扁平なつまみをつけている。8世紀代に入ると考えられる。

(西口)

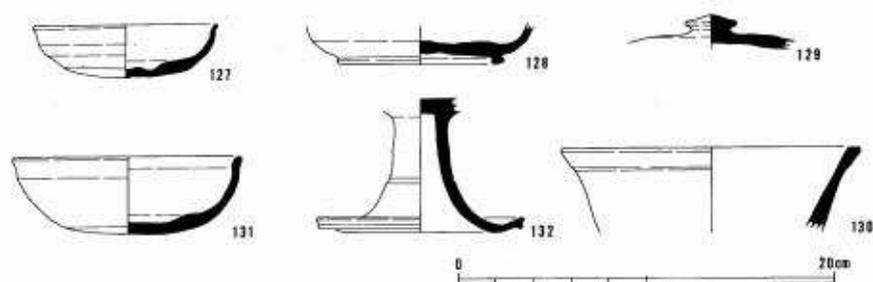
土壌 8 (SK-8)

調査区南西部に位置しており、建物址20に切られている。長径2.4m、短径1.6mの洋梨形を呈し、深度は15cmをはかる。埋土は、灰褐色砂質シルトである。

第144図127・128は須恵器坏身である。



第143図 土壌8



第144図 土壌8・9出土土器

127は高台をもたず、底部はへら切り未調整となっている。体部は緩やかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外側へつまみ出される。

128は高台をもつ平底部である。底部はへら切り未調整である。高台は肥厚して外側に張り出す形態を呈する。

129は平底部である。扁平化した擬宝珠つまみから、わずかにふくらみをもつ天井部がのびている。天井部はへら削りが施されている。

130は須恵器甕の口縁部であろう。やや外反気味に立ち上がり、口縁部は肥厚させて外側へつまみ出されている。口縁端部は、わずかに凹んだ面を形成している。

土壌8出土の遺物は、概ね8世紀前半期の範囲で扱えられるものと思われる。

土壌9 (SK-9)

調査区中央西寄りに位置し、溝2に切られている。長径1.2m、短径0.6mの楕円形を呈し、深度は20cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルトである。

溝2に埋土の上部をきられていたため、ごく少数の遺物が出土したのみである。

第144図131は、須恵器杯身である。土壌8出土の127よりも大型であるが、形態は近似する。底部はへら切り未調整である。

132は、高環の脚部である。脚中央に、1条の沈線を巡らせている。脚部は上方に反り、脚端部は下方に肥厚させつつつまみ出されている。

土壌9出土の遺物についても、土壌8とほぼ同時期と思われ、8世紀前半期に比定できるものであろう。 (久保)

土壌10 (SK-10)

調査区北西端に位置する。規模は長さ1.3m、幅0.5m、深さ5~10cm。不整長方形を呈している。遺構面の削平が激しく、浅い皿状の遺構である。周囲に数ヶ所同様の埋土(赤褐色土)をもつ方形の落ち込みが検出された。遺物は図示した須恵器杯蓋1点である(133)。復原径13.5cm、扁平な器形である。天井部はロクロ削りを施し平坦。体部から口縁端部にかけてなだらかに傾斜してゆく。口縁端部はシャープさを欠き丸くおさめる。内面のかえ

りは退化し内側をむいてほぼ水平についており、口縁下に隠れ外側からまったく見えない。

遺物の時期は7世紀後半～末と考えられるが、周囲の土壌を含め遺構の時期を示す資料とはもちろんならない。(西口)

土壌11 (SK-11)

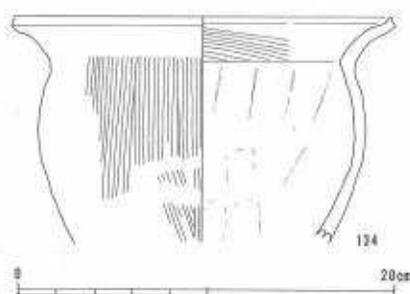


調査区の東南、建物址15の西側柱列の中央の柱穴を切って検出された、土壌である。平面形は西側の辺がやや不整形となった方形を呈し、規模は長辺約1.7m、短辺約1.6mを測る。

第145図 土壌10出土土器 深さは約20cm程度である。

北壁中央下付近の床面上には板材と思われる炭化物が検出された。また南東コーナーに付近からは土師器の甕が出土している(134)。

出土した土師器の甕は、体部に外反するくの字状の口縁部が付き、口縁端部は上方に摘み上げられている。口縁部外面はナデ、口縁部の内面はハケ調整し、体部の外面は粗いハケ調整、体部の内面はへら削りしている。

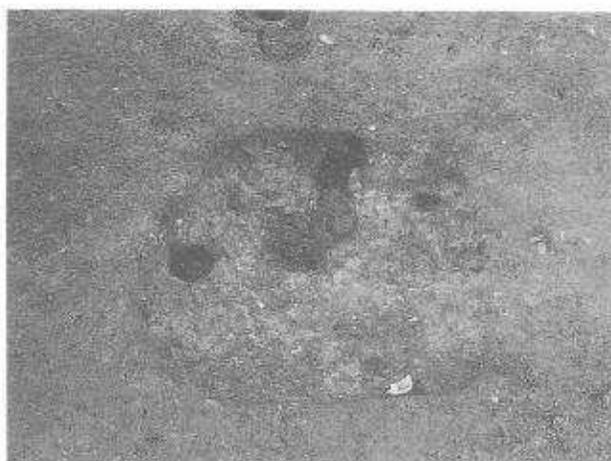


第146図 土壌11出土土器

出土遺物はこの甕1点だけであるため、土壌の時期についてははっきりしない。しかし建物址15を切っていることから、奈良時代後半～平安時代初頭以降と思われる。(吉識)

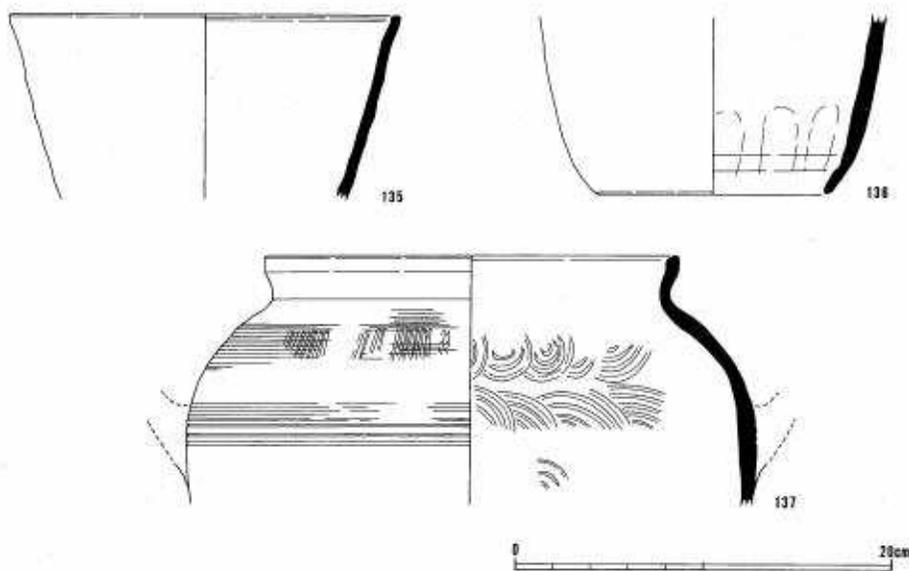
土壌12 (SK-12)

調査区北東半、住居址1東側に位置する。規模は長軸2m、短軸1m、検出面からの深さ14cm。非常に不整形な、隅丸台形を呈している。浅い落ち込み状の遺構である。土壌底より径10cm前後の数個の割石と共に須恵器把手付甕及び、須恵器甕片を出土した。



第147図 土壌11

須恵器把手付甕(137)は丸い体部に内彎する短い口縁部をもつ。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。体部中央に把手を貼付した痕跡が残っている。外面は肩部に平行タタキをほどこしたのち、カキ目調整をほどこしている。2次焼成を激しく受け特に外面は炭化している。内外面共にススは付着が激しい。



第148図 土壌12出土土器

135・136は須恵器甕である。同一個体と考えられるが接合しない。共に外面には炭素が厚く付着している。

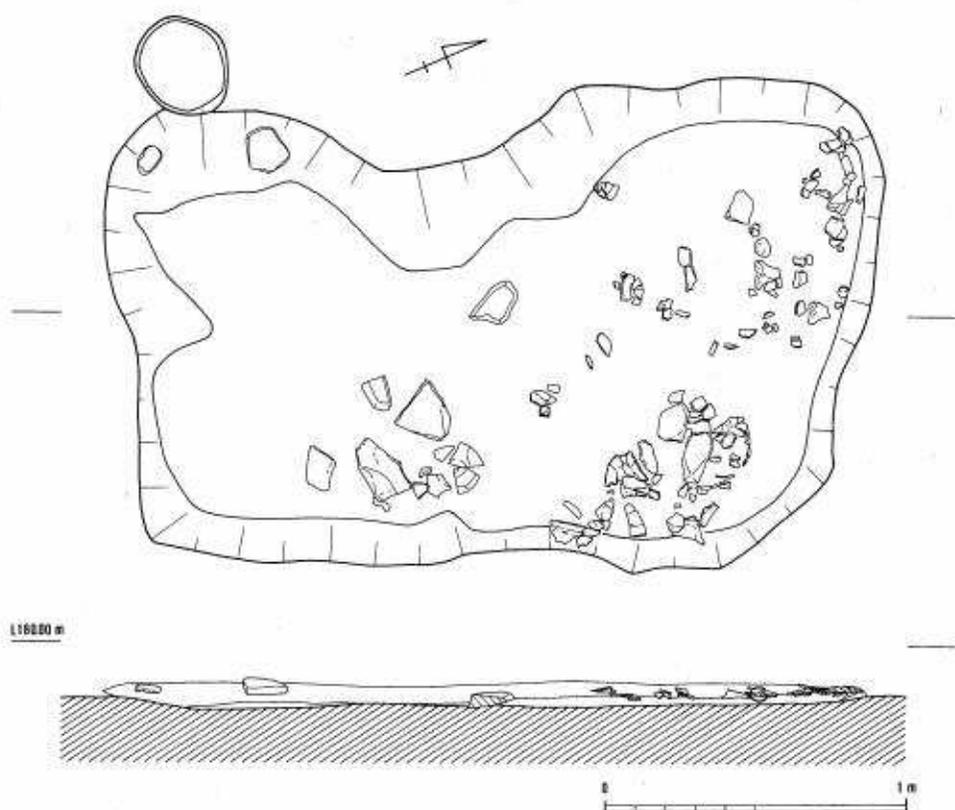
137の上に135・136を乗せ炊飯使用したと考えられるが、土壌12において焼土、炭の痕跡は見出せず、甕・甎の破片自体も乏しい。土壌内へ、使用済の兩個体を投棄したものと考えておく。但し、土壌の残りが悪く、後世の造作をうけることによって破片の大部分が土壌内より遊離流出してしまった可能性も高く、至近の建物址に伴う簡易な炊事施設であった可能性は残る。

遺物の時期は、137に近い器形の把手付甕が、藤原宮SE1105より出土している。7世紀後半～8世紀に入る時期を考えたい。(西口)

土壌13 (SK-13)

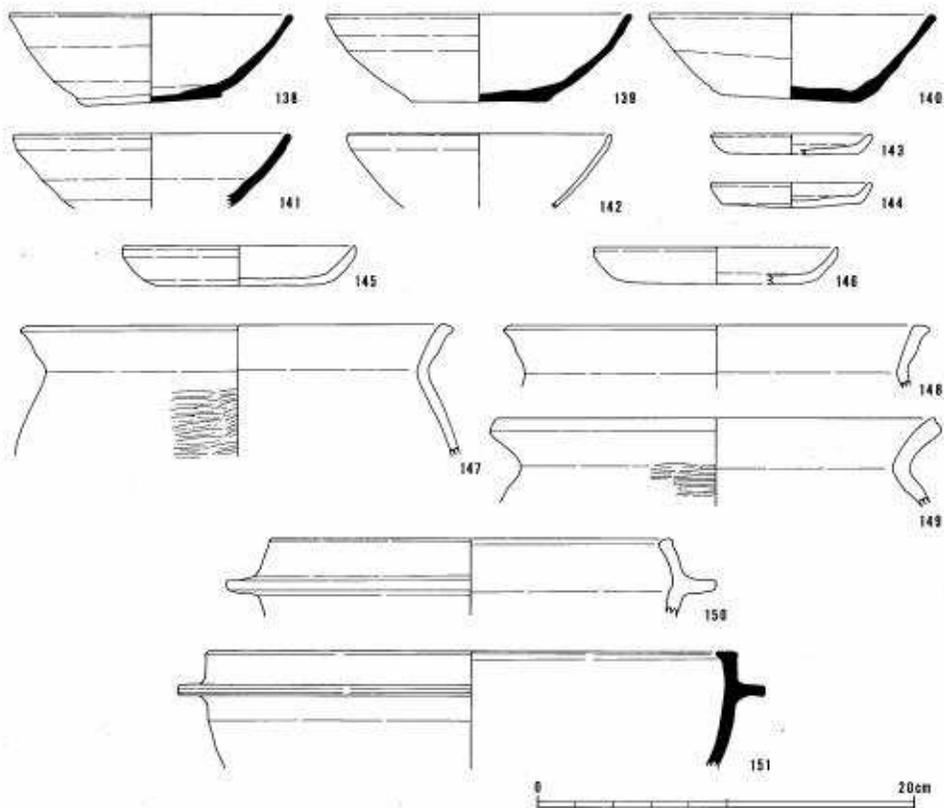
土壌13は調査区北端ほぼ中央部に存在しているやや歪んだ長方形を呈する浅い土壌である。長軸は北方向よりやや東に振れており、長さ約2.6mで、短軸は約1.6mを測る。深さは最も深い所でも9cmしかなく、平均5cm程度であり、褐色シルト混り砂で埋まっていた。土壌底はほぼ平坦である。土器は北側に集中して認められたが、殆どが細かい破片となり、土壌底からやや遊離した状態であって、他に10～20cm大の礫が出土したが、砥石等の使用痕のあるものは認められなかった。

土壌13から出土した遺物には須恵器・土師器・瓦器がある(第150図)。須恵器には壺・羽釜がある。138の壺は口径14.8cm、器高4.7cmを測り、底径7.5cmで、底部はやや突出し、回転糸切りとなっている。体部は内彎しながら外上方にのび、端部は丸くおさめている。底



第149図 土壌13

部内面はやや凹んでいる。139も底部がやや突出する塊であるが、138より不明瞭である。体部～口縁部は138同様内彎しながら外上方にのびており、端部は丸い。底部外面は平坦で、回転糸切り、内面は底部中央に向かって傾斜している。口径は16cm、器高は4.6cm、底径は7.2cmを測る。140の塊は口径15cm、器高4.6cmで、底部内面には仕上げナデを加えている。体部から口縁部は底部から屈曲して外上方にまっすぐのびており、端部は丸い。底部は内外面ともに平坦である。141は底部を欠損しているが、体部は内彎しており、塊と思われる。外面口縁部下が少し凹んでいる。また、体部内面は中央部でやや屈曲している。口径は14.4cmである。須恵質の羽釜は151に示した1点のみである。青灰色を呈し、内彎する体部をもち、髹は横外方に突出している。口縁端部は内方に大きく拡張し、上端面は水平で面をなしている。口径は27.6cmを測る。胎土には石英・長石を多く含んでいる。142は瓦器塊で、表面は遺存状況が悪く残っていないため、調整痕は全く不明である。体部は外上方にのび、口縁端部は内彎している。土師器は皿大小と甕、羽釜が出土している。小型の皿は口径8.3cm(143)と8.4cm(144)のものがある。底部はほぼ平らで、口縁部は屈曲して外上方にたちあがり、器壁の厚さは底部とほぼ同じで、端部は丸くおさめている。器高は143



第150図 土壌13出土土器

が1.1cm、144が1.3cmである。143は灰白色、144は浅黄橙色を呈している。大型の皿は145・146に示したもので、両者とも同様の特徴を示し、平らな底部から丸く屈曲して外上方にたちあがり、口縁端部は外面をナテて断面三角形に仕上げており、先端は尖る。口径は145が12.2cm、146は12.8cmであり、器高は145が2.1cm、146が2cmである。器表はともに残りが悪く、調整は不明である。甕は3点出土しているが、147・148はいわゆる土塙になると思われる。内彎する体部から「く」の字状に外反する口縁部をもち、口縁端部は外方にひきのぼしている。口縁部中位は外方に若干肥厚している。口径は147が22cm、148が21.3cmを測る。体部外面には平行タタキを横位に施している。149は外面に平行タタキを施した体部からく字状に外反する口縁部をもつ甕で、口縁端部は面をなしている。口径23cmである。土師器羽釜は150に示した1点のみである。口縁部は内彎しながら内傾し、端面は平面をなし、外方に若干ひきのぼしている。鐔は若干上反し、横方向にのび、端面は平坦である。体部は外傾するようである。口径は21cmで、鐔下面と体部外面には煤が付着している。土壌13より出土した遺物は平安時代後期～鎌倉時代に属するものと思われる。また、本土壌は出土遺物の時期および土壌の位置から建物址26に伴うものと思われる。 (岸本)

土壌14 (SK-14)

調査区南西隅に位置する。建物址28の南西隅にある。長辺1.8m、短辺1.4mの台形状を呈する土壌で、深度は約50cmをはかる。

土壌埋土は灰褐色砂質シルトを主体とするが、土壌内には、北東隅から投棄されたとみられる、焼けた痕跡のある石、土器等が堆積していた。また、炭化物も多く認められた。

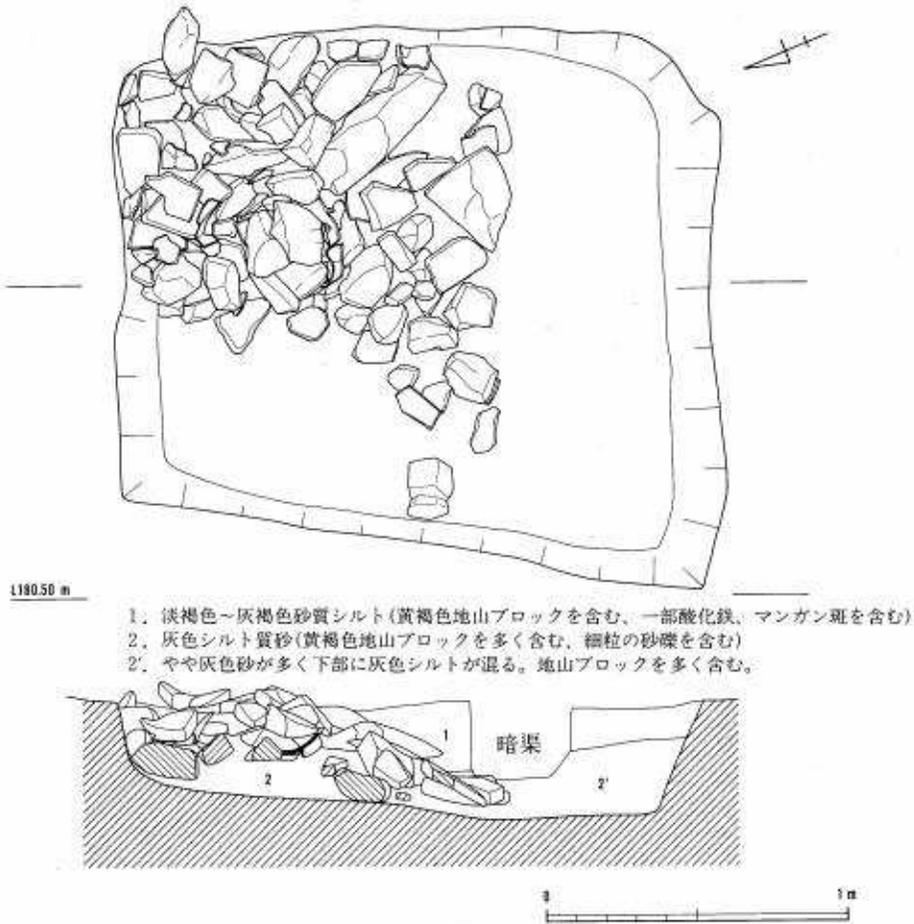
遺物は、直径10~20cmの角礫とともに、一括して投棄されたものと思われ、廃棄土壌的な機能をもっていたと考えてよいであろう。

第152図152・153は、須恵器境である。

152は境の口縁部である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。

153は境の底部である。回転糸切りが行われており、わずかながら平高台が形成されている。高台外周は未調整である。体部は内彎気味に立ち上がる。

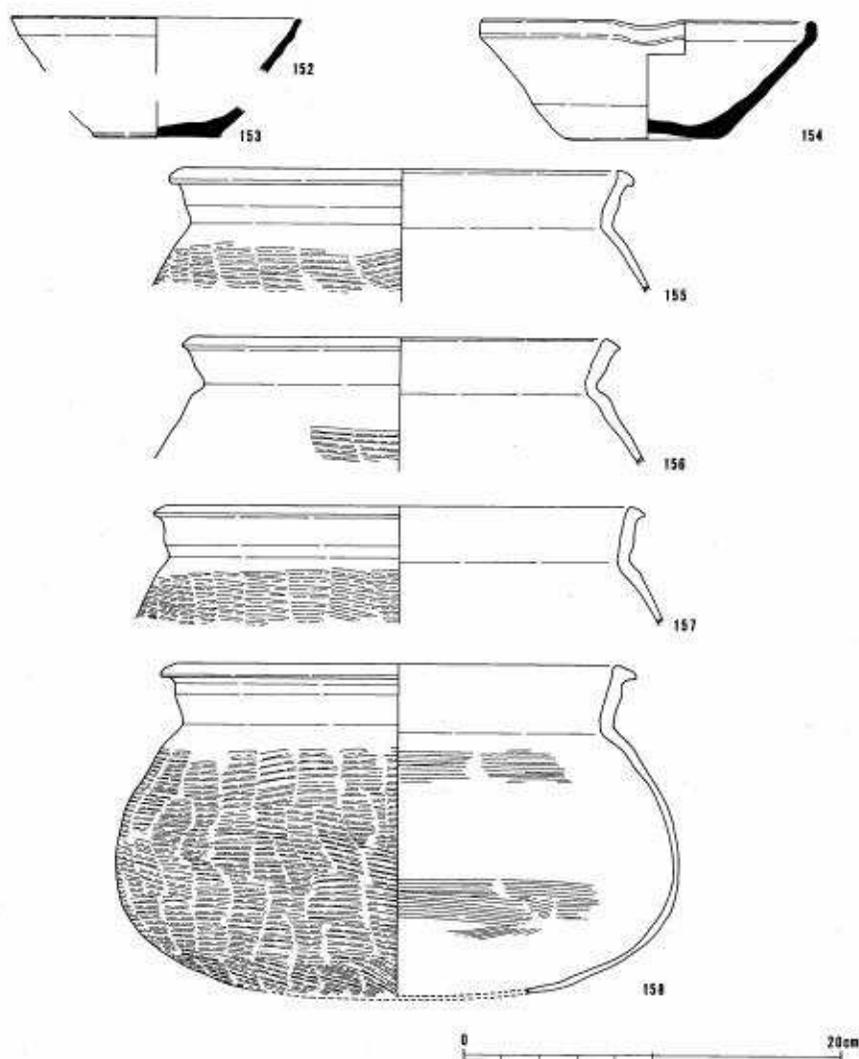
154は須恵器の片口鉢である。回転糸切り底から、丸みをもって立ち上がる体部をもつ。



L180.50 m

1. 淡褐色~灰褐色砂質シルト(黄褐色地山ブロックを含む、一部酸化鉄、マンガン斑を含む)
2. 灰色シルト質砂(黄褐色地山ブロックを多く含む、細粒の砂礫を含む)
- 2'. やや灰色砂が多く下部に灰色シルトが混る。地山ブロックを多く含む。

第151図 土壌14

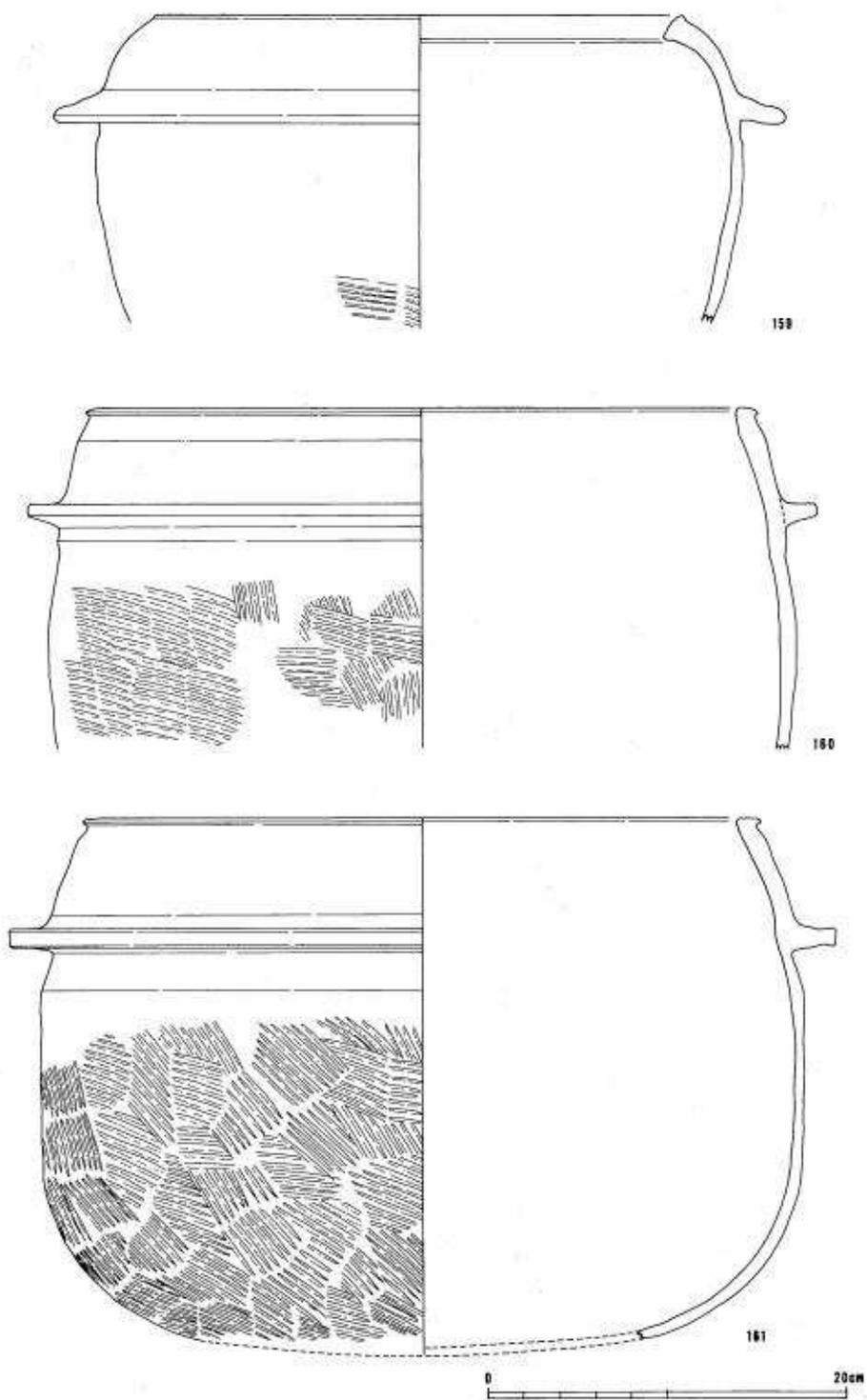


第152図 土壌14出土土器(1)

口縁部は屈曲してほぼ垂直につまみ上げられている。内側底面付近は、使用のため器表が平滑になっている。

155～158は、土師器塼である。口縁部が外へ開くもの(155・156)と、垂直に近く立ち上がるもの(157・158)とがみられる。口縁端部はいずれも外傾し、平坦面に仕上げられており、外側へつまみ出すと同時に、内側へも肥厚しているもの(155)と、外側へのみつまみだされるもの(156～158)とがある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で体部は、いずれも平行タタキによって成形されている。158は内面に、横方向のハケ目が認められる。

159～161は、大型の土師質羽釜である。159は、口縁部が丸みをもって大きく内傾する。端部は内傾する平坦面となっており、内・外側にわずかに突出している。銚部はやや下方



第153図 土壌14出土土器(2)

に垂れており、端部は丸くおさまられている。体部は、タタキの後、ナデによって調整されている。160・161は同形態を呈する。口縁部は内傾しており、端部はほぼ水平な平坦面となっている。端部は外側にわずかに突出している。鋳部は水平にのび、端部は角張っている。口縁部～鋳部はヨコナデ調整が施されている。体部は垂直に近い立ち上がりを見せ、外面は不定方向のタタキによって成形されている。

土壌14出土の遺物は、従来の編年観に従うならば、須恵器片口鉢が14世紀後半に属し、土師器埴類はこれより古い段階に編年されており、年代の齟齬をきたしている。(久保)

注 大村敬通氏、森田稔氏の御教示を得た。

土壌15 (SK-15)

調査区ほぼ中央に存在する不整円形の土壌で、本土壌にとりつたかたちで浅い円形の土壌が2基認められた。

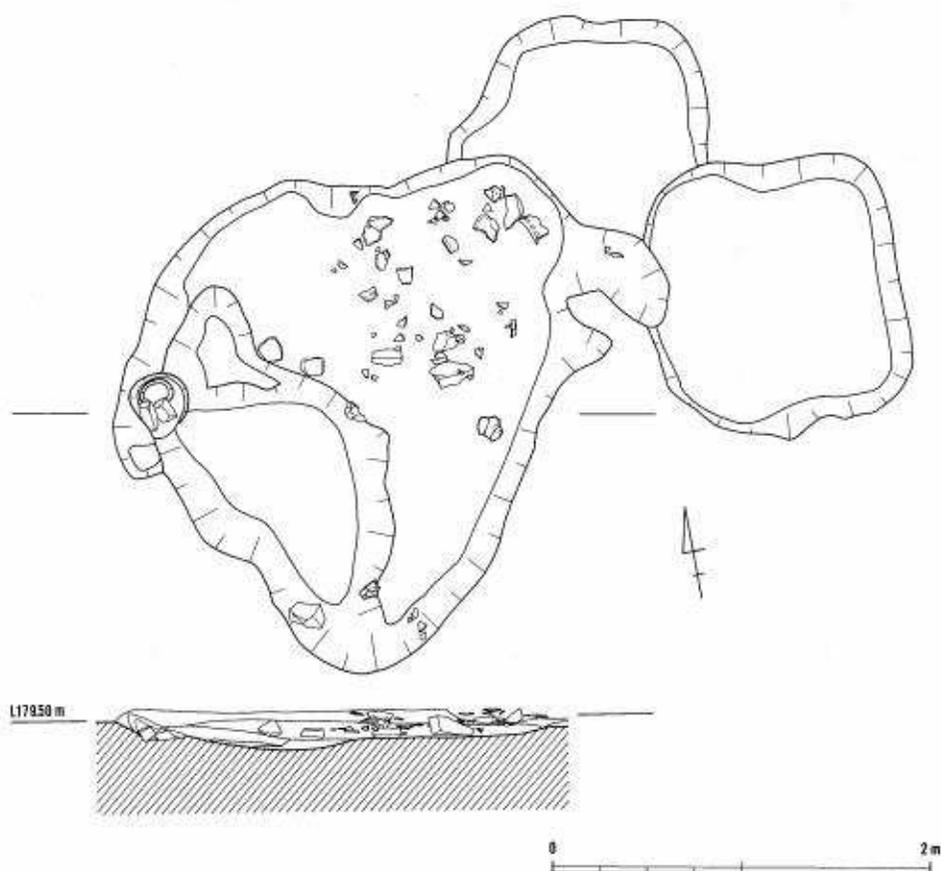
土壌15は褐色シルト質砂が埋土であり、長径2.6m、短径2.2m、底部は深さ10cm程下がってほぼ平坦となり、さらに西南部のみもう一段深くなっている。最も深い所では検出面からの深さ24cmである。

遺物は土壌内東北部で主として認められ、土壌底よりやや浮いた状態であった。すべて破片で、須恵器・土師器が認められた。

土壌15より出土した遺物は第155図に示した須恵器の埴・鉢と土師器の皿・甕・羽釜である。

須恵器の埴は図化できたもので6点ある。162は口径16cm、器高4.6cmのやや深い埴で、底部は回転糸切りである。底部は平らに近く、内彎する体部をもち、口縁部は外反し、端部は器壁が厚く、丸くおさまっている。体部は器壁が薄く、2mm程度である。焼成は良好で、灰色を呈する。163は162に比べて体部が横外方に広がっており、器高が3mmしか差がないにもかかわらず、かなり低いように見える。これは底径が5cmと162より1cm小さいことにも起因しているものと思われる。器壁は162よりも厚いが口縁端部のかたちは非常に似ている。底部内面は上方に膨らんでいる。164の体部は163とほぼ同様の傾きを示すが、内彎の度合いおよび口縁部の形態の点で異なっている。口径は15.4cm、器高は4cmである。165は外面にロクロ目が顕著に認められるもので、体部は内彎し、口縁端部は内側へ丸く、外面は外反する形態となっている。口径は16.8cmと本土壌出土埴では最も大きい。166は全体に器壁が薄く、焼成はやや悪いもので、口径16.8cmを測る。167の埴は小破片のため口径および傾きが不正確である。外面はロクロ目が顕著に認められ、口径13.6cmとなっている。171の鉢は口径27cmで、体部から口縁部へは徐々に器壁が厚くなり、端部は上方へつまみあげており、また、下方へも若干つまみだしているため、端面は凹面を呈している。

土師器の皿は小型と大型の2種認められる。168は小型の皿で、口径7cm、器高1.1cmを測り、底部から口縁部へは内彎しながらゆるやかに移行している。口縁端部は丸くおさま

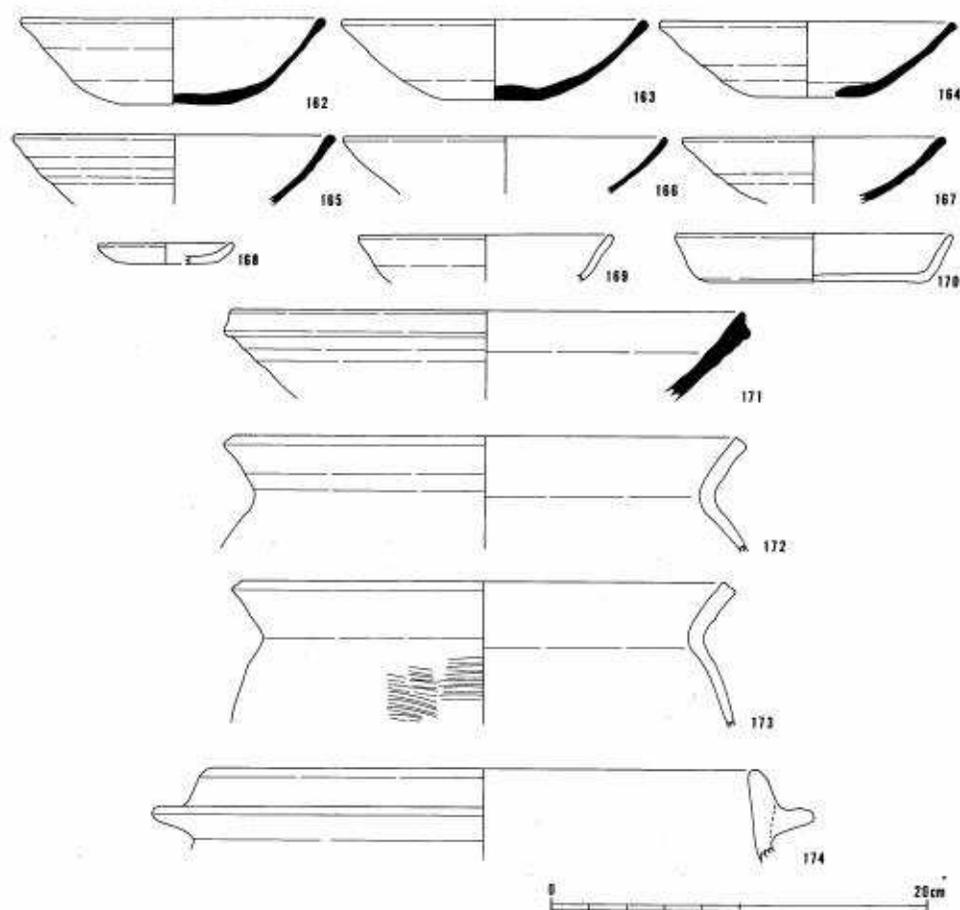


第154図 土壌15

ている。器表の残りが悪く、調整痕は不明である。169は大型の皿で、口径13.4cmを測るが、底部が遺存していないため、器高は不明である。口縁部は内彎しつつちあがったのち外反ぎみに外上方にのびており、端部は丸い。170も大型の皿であるが、大きく平らな底部から大きく屈曲して外上方にまっすぐのびる口縁部をもち、169とは形態を異にする。器厚が底部から口縁部まで均一であるのが特徴的である。器表の残りが悪いため、調整痕は不明である。口径は14.6cm、器高は2.6cmである。172・173は甕で、ともに体部からくの字状に外反する口縁部をもち、端部は平坦面をなし、口縁部外面中央部分は肥厚している。口径は172が26.6cm、173が25.4cmで、173の体部外面には平行タタキを横位に施している。174の羽釜の口縁部は端部が丸く、鈎は横やや上方にのび鈎端部も丸く仕上げている。ヨコナデ仕上げで、口径は28.8cmである。

土壌15出土土器は170を除いて平安時代後期～鎌倉時代前期に属するものと思われる。

また、土壌の位置、時期からみると、建物址27とつながりが深いものと思われる。（岸本）



第155図 土壌15出土土器

土壌16 (SK-16)

調査区南西部に位置する、ほぼ円形の土壌である。直径約1.4m、深さ0.4mをはかる。

土壌埋土は灰色砂質シルトを主体とし、自然埋没の様相を呈している。比較的急斜度の落ち込みをみせており、埋土中より、土師器・須恵器片を出土している。

第157図175は須恵器坏蓋である。天井部から緩やかな丸みをもちつつ、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめられており、内面のかえりは、口縁端部より上方にとどまる。天井部はヘラ削り、他はナデによって成形・調整されている。

176は、須恵器坏身である。丸みをおびた体部をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸くおさめられている。内・外面ともヨコナデ調整が施されている。

177は、須恵器碗。底部は、回転糸切り後にナデ調整が施される。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は、肥厚しつつ丸くおさめられている。

土壌16は、出土遺物から、13世紀代に属するものと思われる。

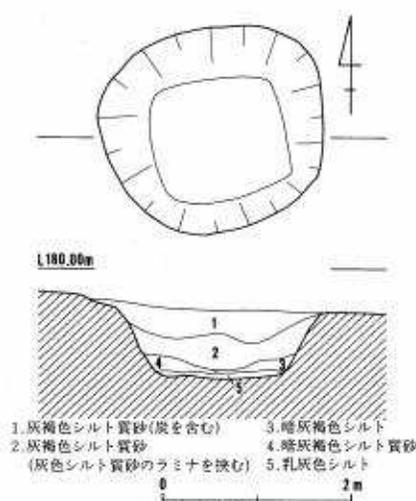
溝ノ尾遺跡

土壌17 (SK-17)

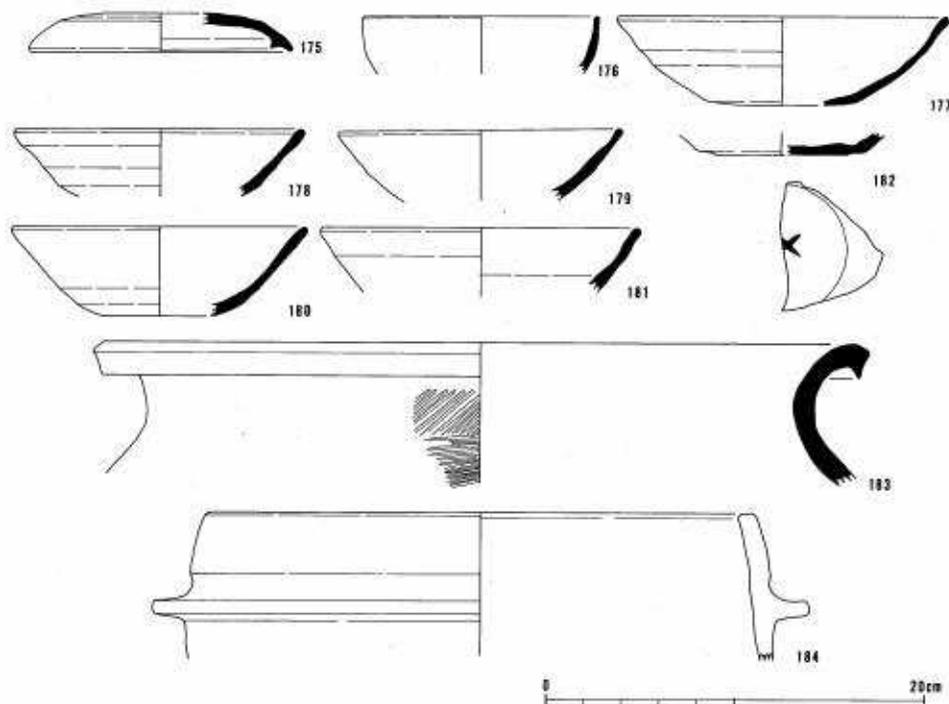
調査区西部に位置し、現代の水路のため、東・南辺を若干削平された状況で検出された。長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.4mをはかり、やや歪んだ楕円形土坑であったと思われる。

埋土は砂質シルトを主体とし、自然堆積の様相を呈しており、多数の遺物が出土している。

178~182は、須恵器坑である。体部には、やや外反気味に立ち上がるもの(178・180)と、丸みをもって立ち上がるもの(179・181)が見られる。口縁端部は、丸くおさめるものと、肥厚させるものがある。いずれも、ヨコナデ調整が施されている。



第156図 土壌16



第157図 土壌16・17出土土器

182は、坑底部である。回転糸切り底で、屈折して立ち上がる体部を有している。底部中央に、「+」字の墨書が見られる。

183は、須恵器甕である。口縁部はやや垂下し、下方に折り曲げられている。

184は土師質羽釜である。口縁部はやや内傾し、端部は平坦に仕上げられている。銜部は

やや下方にのび、端部は丸みをおびた形態を呈する。内面の口縁端部直下には強いヨコナデが認められる。

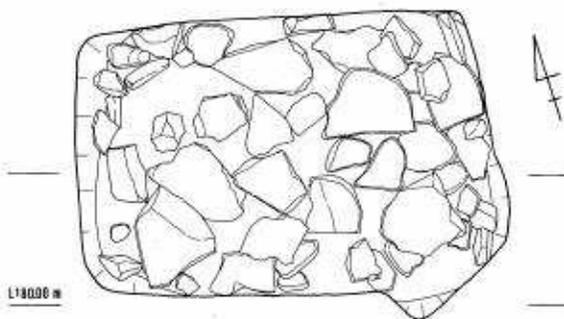
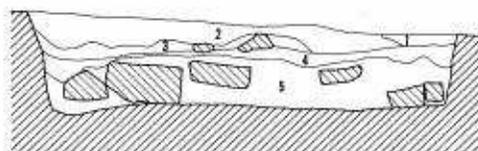
土壌17出土の遺物はいずれも13世紀代におさまるものと思われる。 (久保)

土壌18 (SK-18)

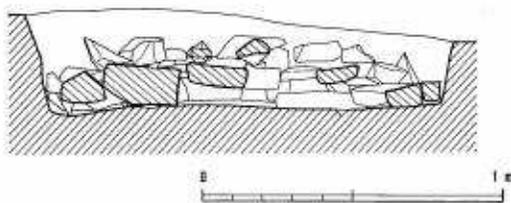
調査区ほぼ中央部、土壌15の西隣にある平面長方形の土壌である。土壌の長軸はN65°Wであり、長さ約1.4m、短軸は約0.9mである。土壌底は平坦で、検出面からの深さは最も深い所で35cmを測る。土壌埋土は最上層の第1層が灰褐色砂質シルトで、第2層は黄褐色砂質シルト、第3層は明乳灰色土である。第4層は炭と灰がぎっしり詰まった層で、厚さ平均3~4cmであった。この層は土壌内全面に認められた。その下層(第5層)は濁黄褐色シルトで、この層中には10~30cm大の礫が多く認められた。礫はその殆どが平たい石で、

L18000

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 灰褐色砂質シルト | 4. 黒色炭層 |
| 2. 黄褐色砂質シルト | 5. 濁黄褐色シルト |
| 3. 明乳灰色シルト | |



L18000



第158図 土壌18

平坦面を上にし、礫を集中して敷いた状態であった。他に遺物が全く出土していないため土壌の性格・時期ははっきりしない。火葬址とも考えられるが、礫および土壌壁面は焼けた痕跡は認められず、棺の痕跡も認められなかった。(岸本)

溝1 (SD-1)

溝1は、調査区南部西寄りに位置し、建物址22の西側に、これと平行してのびている。長さ約5mにわたって検出され、幅は約1mを測る。この位置から、建物址22に付属する、雨落ちあるいは区画のための溝であろう。溝1の北側には、同一方向にのびる溝2があり、あるいは、本来一連のものであったとも考えられる。

り、あるいは、本来一連のものであったとも考えられる。

第159図185・186は須恵器坏蓋である。いずれもつまみ部分を欠いている。

185は、緩やかに膨らむ天井部をもち、口縁部を下方に屈曲させている。天井部はヘラ削

りが3/4にわたって施されている。

186は、平坦な天井部から、下方に緩やかに屈曲し、さらに水平に屈曲した後、口縁端部を下方に屈曲させる形態を呈する。全体に磨耗が著しい。

187は鉢と思われる。体部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は厚みを減じつつ、平坦に仕上げられている。体部は、内外面とも、ヘラ削りが施されている。

溝1出土遺物は、いずれも8世紀代のものとして扱えられる。

溝2 (SD-2)

溝2は溝1の北に位置し、ほぼその延長線上を同一方向にのびており、あるいは本来、同一の溝であった可能性もあろう。しかし、溝1に比べて幅が狭く、時代の下る土器を出土していることから、ここでは別の溝として取り扱う。長さ約10mにわたって検出され、南半部では、幅約40cmであるが、北半部では幅広で不整形な溜り状となっている。

188～191は、須恵器坏蓋である。

188・189は、扁平化した擬宝珠つまみを有し、平坦な天井部から、緩やかに膨らみをもちつつ口縁部に至るものである。口縁部は、188では垂直に下方へ屈折する。189では、口縁部は188に比して、緩やかな屈曲をみせている。188では、天井部の約1/2がヘラ削り、他の部位はヨコナデが施されている。

190は、内面にかえりを有する蓋である。口縁部は、緩やかな膨らみをもちつつ外方へのび、内面のかえりは、逆三角形の断面を呈し、口縁端部よりやや上位にまでのびる。天井部は、口縁端部近くまでヘラ削りが施される。

191は、他に類例を見ない形態を呈する。極めて扁平な器高を呈するため、ここでは一応蓋として取り扱っておく。天井部に、外方へ張り出す高台状の突帯を付し、また内面にも、外方に張り出す突帯を設けている。

192は、ヘラ切り未調整の底部を有し、体部は、底部からまるみをおびて立ち上がる。口縁部は外反しており、端部はまるくおさまられている。

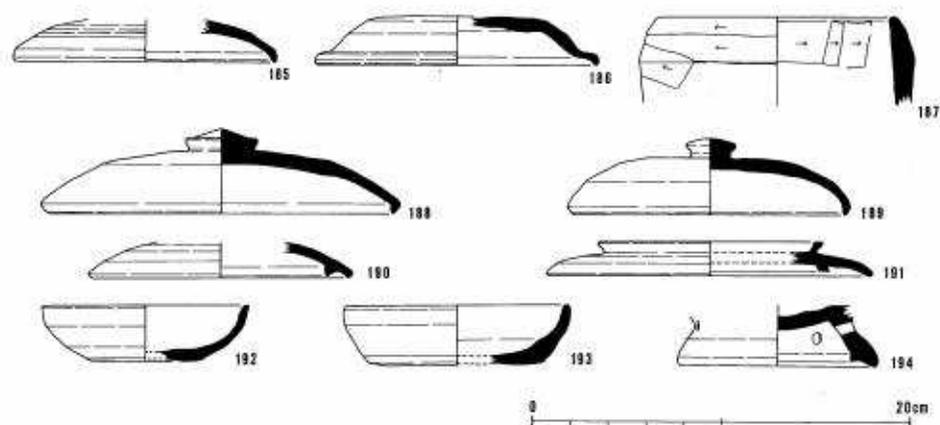
193は、直線的な立ち上がりを見せる坏身で、口縁部はやや尖り気味に仕上げている。

194は脚台である。5方向に、直径5mm前後の透し孔を穿孔している。脚は緩やかな膨らみをもって外側へ張り出し、端部は丸くおさまられている。脚内面にも、逆三角形の突帯を巡らせている。

溝2の出土遺物は、8世紀代のものが多いが、191のみは時期が下るものと思われる。異形の須恵器であるが、蓋であるとするならば、少なくとも10世紀を遡ることはないと考えられ、溝2の時期についてもこれと同様の時期を想定しておきたい。

溝3 (SD-3)

溝3は、調査区北部に位置し、建物址26の南で、ほぼこれに平行してのびている。長さ



第159図 溝1・2出土土器

9m、最大幅約1m、深さ約15cmを測る。

第160図195は、須恵器碗である。回転糸切り底を有し、体部は、底部から屈曲して立ち上がる。口縁端部は、内側に肥厚気味に、上方へつまみ上げられ、丸くおさめられている。

196は、瓦器碗である。緩やかに内彎して立ち上がる体部を有し、口縁部は上方につまみ上げられて、尖り気味に仕上げられている。高台は、逆三角形の断面形を呈する。内外面とも磨耗が著しく、調整痕等は鮮明ではない。いずれも13世紀代に属するものと思われる。

溝3は、建物址26とほぼ同時期のものと考えられ、その位置と方位から、建物址26の南限を区画するものであった可能性があろう。

溝4 (SD-4)

溝4は、溝3の南に近接した位置にあり、これと平行してのびる。長さ約5m、幅60cm、深さ10cmにわたって検出された。

197は、須恵器碗である。底部は回転糸切りによる。わずかに平高台をもつが、高台外面は調整されていない。12世紀後半～13世紀に比定できるものである。

溝5 (SD-5)

調査区中央西寄りに位置する。建物址27の北辺に重複しており、その柱穴を切って東西にのびている。3条の溝が交錯しており、北から、溝5A、5B、5Cと呼称する。溝5Bが最も古く、5A、5Cとは、5Bを切っている。

198は、須恵器碗である。体部は、緩やかな膨らみをもって立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられている。13世紀代に属する遺物と考えられる。

溝6 (SD-6)

調査区中央西寄りに位置する。建物址3の北西にあって、L字形に屈曲した溝である。

延長約5m、幅60cm、深さ20cmを測る。

199は、須恵器坏身である。平坦な底部から、屈曲して直線的に外上方に立ち上がる体部を有し、口縁端部は尖り気味に仕上げられている。7世紀後半期の所産と考えられるが、これは建物址3の時期に合致しており、建物址との有機的な関連がうかがわれる。

溝7 (SD-7)

調査区南部西寄りに位置する。西端を現代の溜池によって削平され、長さ6m、幅80cm、深さ10cmが検出された。

200は土師器、201は須恵器の小皿である。

200は、平坦な底部から、外側上方に口縁部をつまみ上げたものである。

201は、回転糸切り底を有する。体部は、底部から丸みをもって立ち上がる。口縁部は肥厚しており、端部は丸くおさめられている。

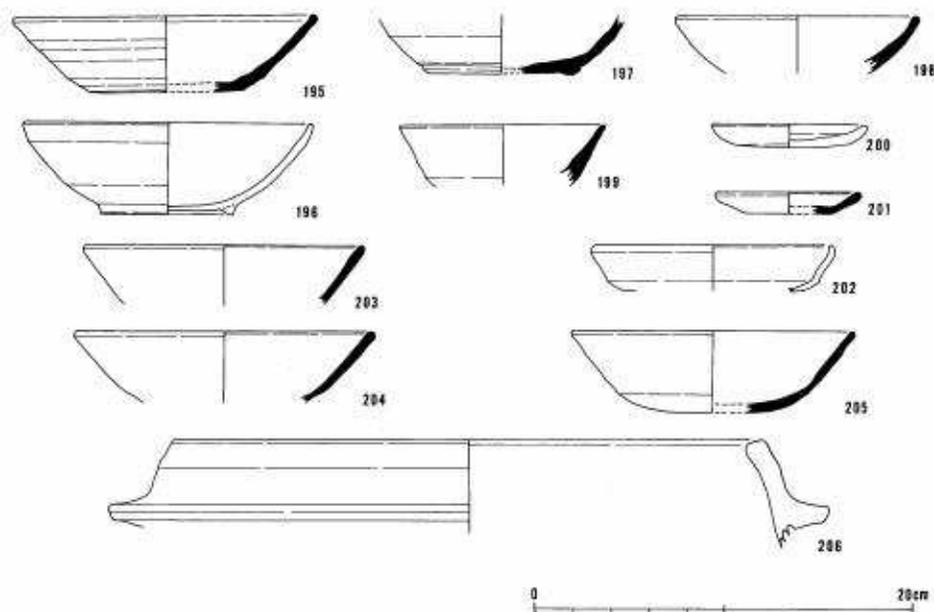
溝8 (SD-8)

調査区南部西寄りに位置する。建物址28の東辺に接して、これと平行にのびており、いわゆる雨落ち溝と考えられる。長さ3.2m、幅0.2m、深さ5cmを測る。

203は須恵器碗である。体部はわずかに内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられている。全体にヨコナデ調整が施されている。13世紀代に比定されるものである。

溝9 (SD-9)

溝9は溝8の北東側に近接する。弧状を描く溝である。延長は約2.5mを測り、幅約20



第160図 溝3～10出土土器

cm、深さ10cmである。

202は土師器坏身である。丸みをもった底部から、屈折し、外反しながら立ち上がる体部をもつ。口縁部は内傾気味につまみ上げられており、端部は丸くおさめられている。

溝10 (SD-10)

調査区南部西寄りに位置し、南北にのびる。長さ8.4m、幅40cm、深さ5cmを測る。

溝10からは第160図204～206に示した須恵器・土師器が出土している。

204・205は須恵器壺である。

204は、ほぼ直線状に立ち上がる体部を有し、口縁端部は、やや肥厚しつままるくおさめられている。

205は、回転糸切りの底部をもつ。体部は、底部から丸みをもって立ち上がり、ほぼ直線的に外側上方へのびる。口縁部はほぼ垂直につまみ上げられ、端部は丸くおさめられている。

206は、土師器羽釜である。口縁部は内傾しつつ立ち上がり、端部は内側に傾斜する平坦面となっている。鈎部は、ほぼ水平に短くのびる。

溝10出土の遺物は、13世紀代に比定しうるものである。

(久保)

包含層の出土遺物 (昭和59年度)

時期的には古墳時代後期から近現代までの遺物がみられるが、遺構面の大半が地山面上で検出される状況、各時代の遺物は包含層中で混在して、プライマリーな状態では出土してはいない。

213・214は古墳時代後期～末の須恵器坏身である。丸味を帯びた体部に外方へ水平にのびる受部をもつ。立ち上がりは、213は直立気味。214は短く内傾する。215・216・220は7世紀中頃～8世紀後半にかけての坏身である。215は底部をヘラ切りし、平坦な底部から口縁へまっすぐに立ち上がっている。口径9.5cm。220は口径12.5cm。器高約3cm。ヘラ切りの平坦な底部にまっすぐに立ち上がる体部。口縁部は外反し水平にのびる。

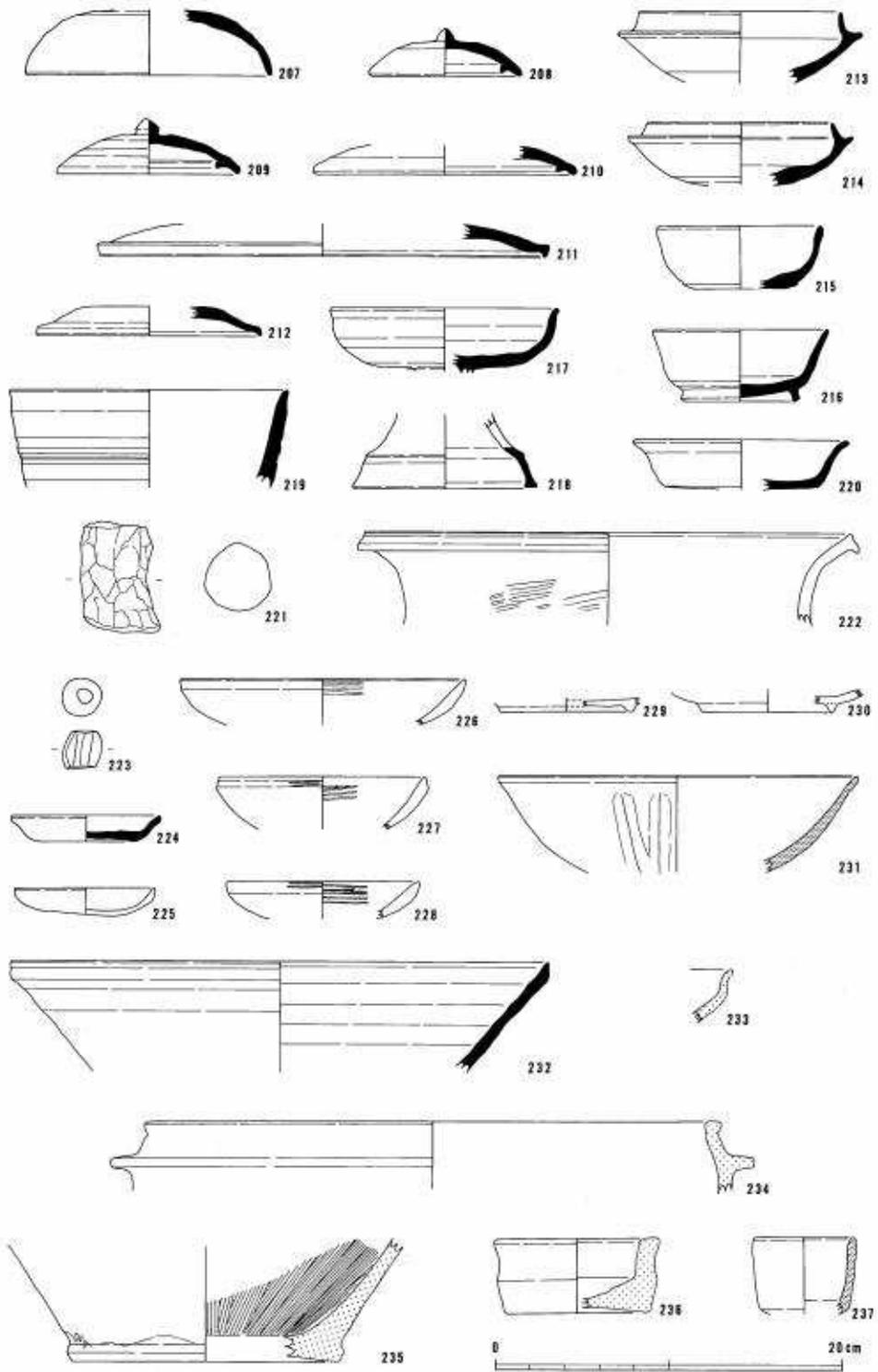
207～211は須恵器坏蓋。208・209は口径9.5～10cm。高台の付かない坏の蓋である。内面のかえりは短く、口縁部より下へ出ることがない。210は高台付の坏蓋。

219は須恵器鉢、口径は16cm。体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。体部には2本の沈線と1本の凹線が巡らされている。口縁端部は強いナデによって心もち外反し、先端はややシャープさをみせている。下半には高台が付くものと考えられる。

218は脚部である。底径10.5cmで透しを持っている。高い脚部が裾部近くで内屈してふんばる形態のもので、長頸壺の脚台であろう。

217は須恵器高坏。口縁端部が若干外反する。坏部下半は全面ヘラ削りがほどこされている。長い脚が付くものと考えられる。

溝ノ尾遺跡



第161図 包含層出土土器

221は須恵器獣足である。形状は象の足を思わせるもので、底部以外は全て指頭によって整形されている。

226～230は瓦器である。226～228は皿である。体部はあまり内彎せずに開き、口縁端部は、外側に面をもっている。体部内面には横方向の粗いヘラ磨きが施されている。229・230は埴底部である。共にごくわずかな高台をもつものである。

224は須恵器小皿、口径8.4cm底部に回転糸切り痕。底部と付部の境はロクロ削りによって整形したあとナデを施している。225は土師器小皿口径7.9cm。内外面共に底部は指頭によって調整している。内面に一部ススが附着しており灯明皿として使用していたと考えられる。231は青磁碗、外面に鎗蓮弁文を持つ。232は須恵器こね鉢、口縁部はつまみ上げられ、口縁部は外側面に面をもち直立する。端部はシャープである。

233は瀬戸美濃系の天目茶碗片である。16世紀代のものであろう。234は土師器羽釜。口縁部は若干内傾するが端部は上面に面をもち、外側は凹縁部をもっている。口縁部直下の銜は短く水平に外方にのびている。

235・236は、近世～近代にかけての遺物。235は近現代の丹波焼スリ鉢である。

237は青磁香炉片。肥前系の青磁である可能性が高い。18世紀後半以降のものである。(西口)

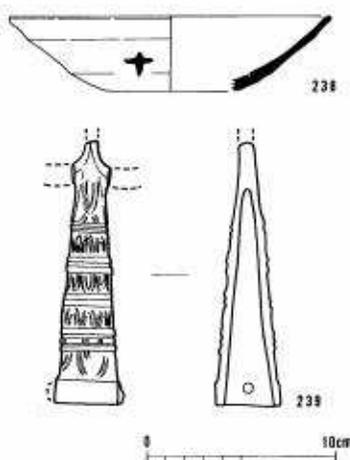
包含層出土の遺物 (昭和61年度)

昭和61年度調査でも、灰褐色系の砂質シルト層(包含層)中より、多数の遺物が出土している。出土遺物は、59年度調査で包含層より出土したものと、差異はなく、概ね古墳時代後期～近世にわたるものである。この内容は、検出された遺構の時期幅とも矛盾しない。

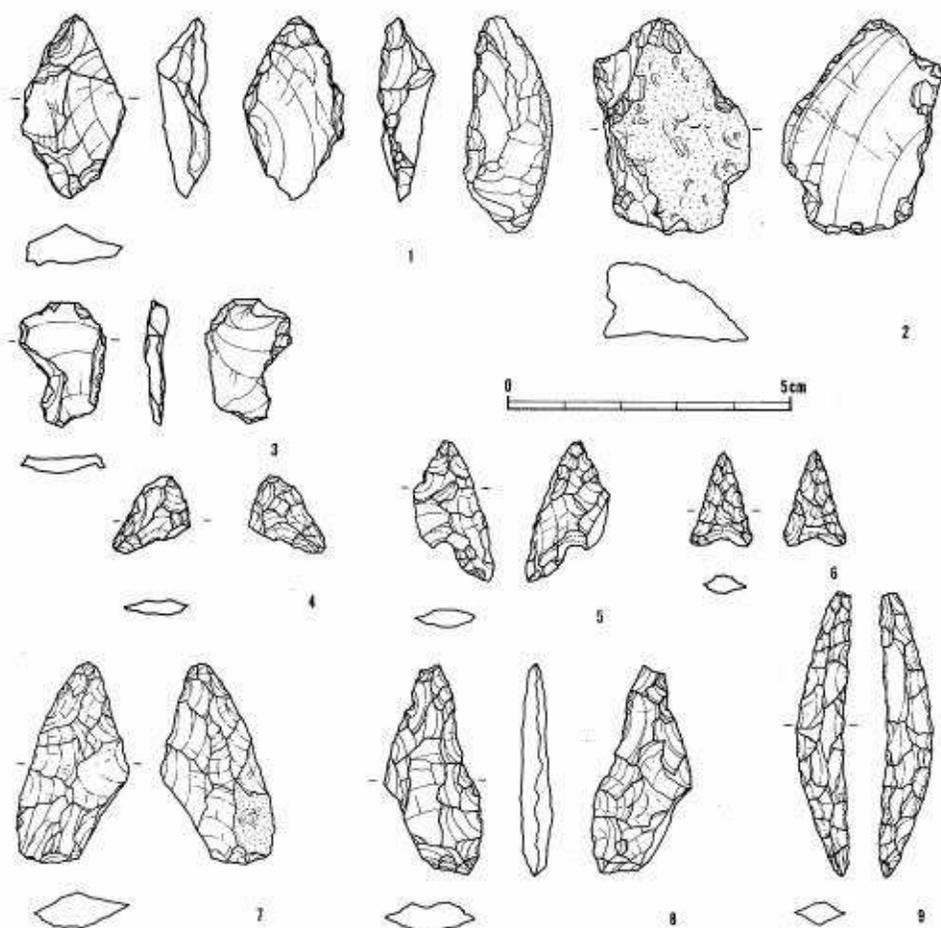
主要な出土遺物として、須恵器では坏身・蓋・皿・埴・壺・甕・鉢・片口鉢等が、土師器では坏・埴・皿・羽釜、瓦器埴・皿、および輸入陶磁器類(青・白磁)がある。

包含層より出土した遺物は、同一層中に各時代の遺物が混在していることから、本来の遺物包含層(旧表土層)が破壊されているものと見られる。各時代の遺構(特に柱穴)の遺存状況を見るならば、中世の遺構は、本来の遺構面が調査時の検出面(黄褐色シルト層上面)よりも上位にあった可能性が高い。これに加え、より古い時期の建物を純粹に包含する層準が見られないことから、本遺跡における、いわゆる「包含層」は、中世あるいはそれ以降に形成された土壌(表土)であると考えられる。(久保)

表面採集の遺物



第162図 表面採集土器・銅器



第163図 出土石器

昭和61年度には、調査区付近で多数の遺物が採集された。ここではうち2点を図示する。
 第162図238は須恵器碗である。体部はゆるやかな立ち上がりを見せ、口縁部は外反する。体部外面には、「+」の墨書が認められる。13世紀代に属するものである。

239は、銅製の錫杖頭部である。上部には環があったものと思われる。

石器 (第163図)

本遺跡では、1～3次の調査によって、31点の石器が出土している。これらのうち砥石片2点以外は、いずれも包含層あるいは後世の遺構埋土中より出土したものであり、原位置を遊離したものである。

1は、鉄石英製のナイフ形石器である。やや打点の片寄った横長剥片を素材とし、その打面側縁辺に背面側から、他の側縁には腹面側から二次加工が施されている。背面側には腹面側と斜交する剥離方向の剥離痕が認められる。表土層中より出土した。長さ32.9mm、幅18.0mm、厚さ7.2mm、重量3.7g。

2・3は、やはり鉄石英製の二次加工のある剥片である。

2は、背面が自然面に被われる剥片の打面部を除去し、その後、腹面側から細かな剥離が施されたものである。長さ38.9mm、幅25.8mm、厚さ13.5mm、重量13.3g。

3は、小型の剥片の二側縁に、不規則な剥離が加えられたものである。素材剥片の打面は、2次の剥離痕から構成されている。背面の剥離方向は腹面とは全く逆であり、本剥片が両設打面の石核から剥離された可能性がある。表土層より出土した。長さ22.1mm、幅15.3mm、厚さ2.9mm、重量1.1g。

4～8は石鏃である。9がチャート製である以外は、いずれもサヌカイトが用いられている。4～6は凹基無茎式、7は平基無茎式で、8はいずれとも判断し難い。

8は特異な形態を示し、形状も左右非対称形であることから、鏃以外の器種に属するものの可能性もあるが、入念に加工された尖頭部を有し、大きさもサヌカイト製の石鏃7と大差がないことから、ここでは石鏃と考えておきたい。長さ37.0mm、幅20.0mm、厚さ5.1mm、重量3.0g。

9は、両端を細く尖らせ、彎曲した器身を呈する特異な石器で、何れの器種にも含め難い。断面形は全体に凸レンズ形を呈する。その機能とともに、所属時期が問題となるものである。石材にはサヌカイトが用いられており、強い風化を受けている。包含層中より出土した。長さ51.0mm、幅8.2mm、厚さ3.8mm、重量1.6g。 (久保)

(3)小結

中央地区では古墳時代後期・奈良時代・鎌倉時代・室町時代及び近現代に属する遺構・遺物及び旧石器の出土を見た。

古墳時代後期の竪穴住居址は4棟検出した。住居址3から出土した須恵器蓋坏片は、田辺編年のTK43型式に相当し、住居址1・2がTK209型式にあたることから、若干古い様相をもつものと考えられる。住居址4は、規模も小さく、出土遺物はTK217型式のなかでも新しい様相を示している。他の住居址が廃絶した後に出現し、最も古い掘立柱建物址群と同時期に存在していた可能性がある。

住居址は、調査区東半に円弧状に展開している。円弧の中央にあたる位置には、土壌1が存在している。土壌1からはミニチュア土器が出土しており、住居址1・2・3の祭祀的な役割をになう土壌であった可能性がある。

32棟の建物址は、奈良時代と鎌倉時代に大別している。

奈良時代と大別してきた建物址は16棟。厳密には、7世紀後半から8世紀代にかけて建てられたものである。建物址1・2・3は桁行の方向—主軸の方位をほぼ南北方向にとるもので、時期が下がるに従って、建物址は東へと軸を振ってゆく傾向にある。 (西口)

注 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告II」1962年

4. 東地区

(1)土層

東地区の土層堆積状況を調査区南側の土層断面（第164図）で見ると、最上層から耕土・床土と続き、東半部ではその下に水田構築時の盛り土と思われる第4・5・7・9～12層が厚く堆積している。西半部では盛り土は薄く、第6層および第7層が堆積しているにすぎないが、東部では厚く、西部では薄くなっている。遺物包含層は水田下の盛り土の下に存在し、淡褐色～褐色～灰褐色の色調を呈する砂質土で、調査区中央付近で厚くなっている。この土層中には、主として平安時代末～鎌倉時代の遺物を少量含んでいる。遺構面は遺物包含層の直下であり、黄褐色の砂質土であるが、部分的に灰黄色～黄白色やあるいは第18層のように暗赤褐色の砂質土である場所もある。調査区西端付近は近世以降の掘削が認められ、遺物包含層はもちろん、遺構面も削られていた。その埋土は第14～第24層である。その東隣には遺構が断面にかかっており、橙黄褐色砂質土が堆積していた。

(2)遺構の状況

東地区で検出・掘削した遺構には竪穴住居址1棟のほか、掘立柱建物址5棟およびその他の柱穴、土壇11基である。他に土壇状の落ち込みを30基近く検出、掘削したが、これらは地山の土質の変化や風倒木の痕跡と思われ、人為的な遺構ではないと判断された。

竪穴住居

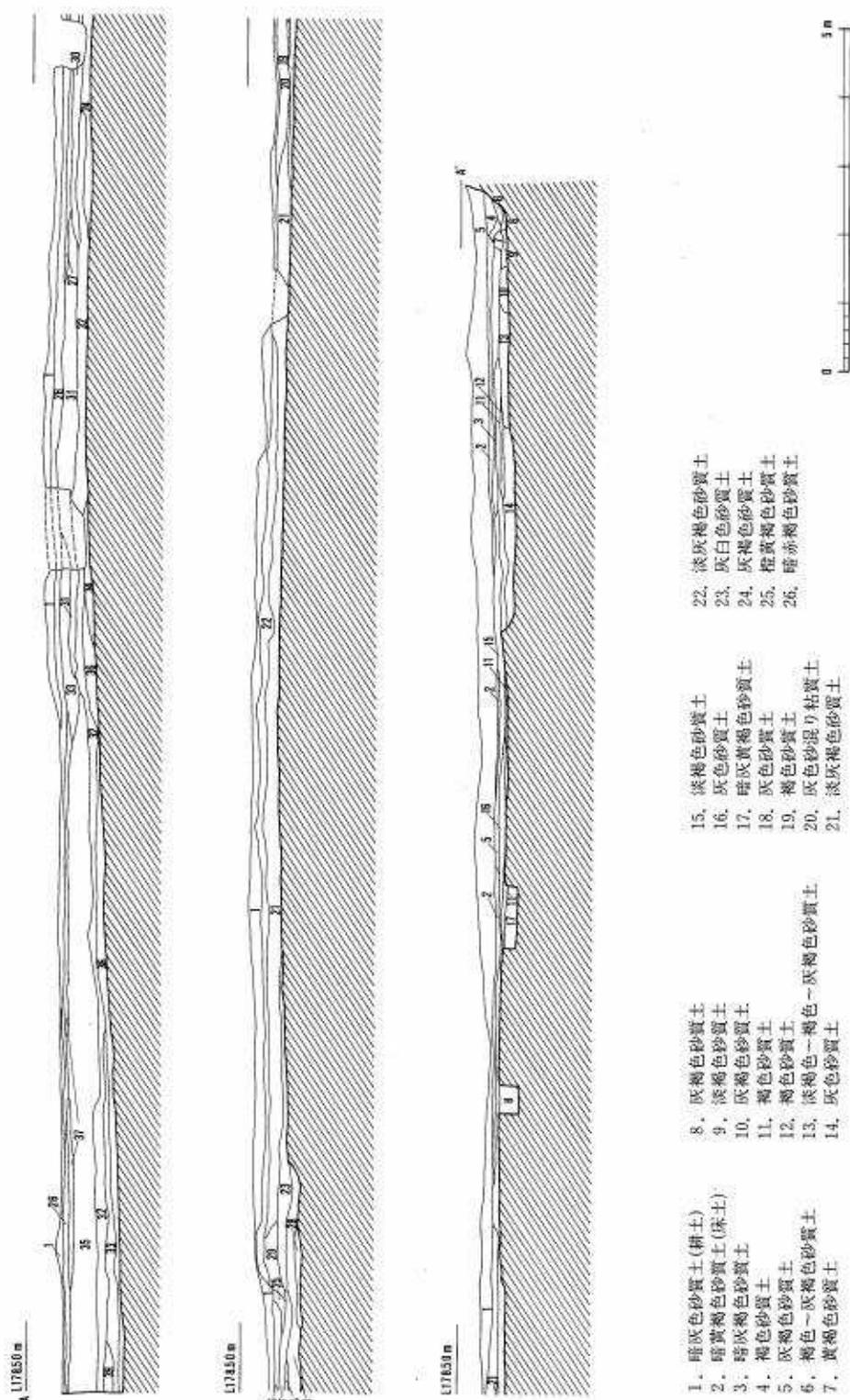
調査区の東端近くで検出した方形の竪穴住居址である。遺存状態は悪く、東半部は後世の開墾により床面下まで大きく削り取られ、かろうじて柱穴が遺存していた程度であり、西半部でも壁面が高さ僅か5cm程度残っているにすぎなかった。住居址内堆積土は暗褐色砂質土であった。竪穴住居址の規模は南北が5.6mで、東西方向の規模は不明であるが、柱穴と壁との間隔が東西とも同じであれば、6m程度であったと思われる。柱穴は4個で、柱間は長いもので2.9m、短いものでは2.65mである。柱痕が認められたものの柱の太さは26cmである。住居址の壁溝は西側と北側で認められ、幅20cm前後、住居址床面からの深さは5cm程度で、途中で途切れており、全周はしていない。炉跡は住居址北面中央付近にあり、直径35cm程の円形に淡赤褐色の焼土が存在していた。

遺物

住居址内埋土中より第168図240に示した須恵器坏身が出土している。口径は14.3cmで、たちあがり部は上方にのび、1.3cmと高い。受部はほぼ水平にのびている。現存する部分では回転ナデ調整のみである。古墳時代後期の土器である。

掘立柱建物1（SB-1）

調査区中央に存在する桁行5間、梁行4間の総立柱建物址である。桁方向はほぼ南北方向に合っており、N15°Wである。桁行の長さは両側とも11.4mで、梁行は北側で8.76mであ



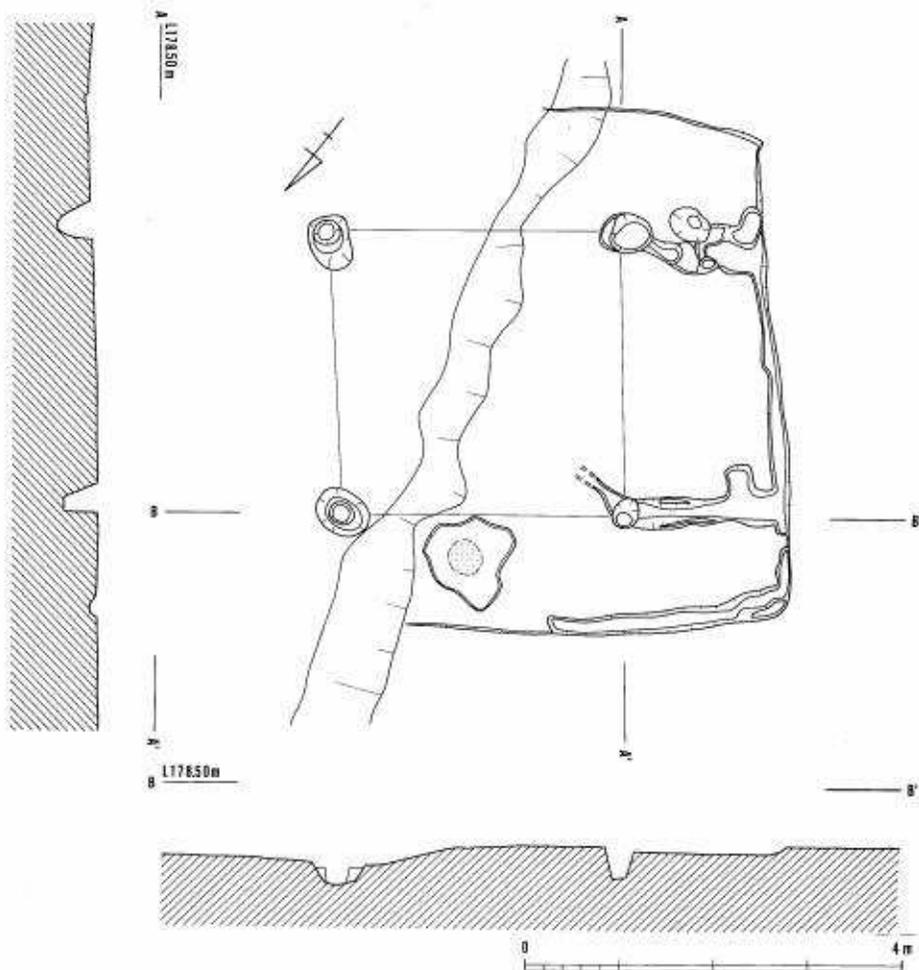
- 1. 暗灰色砂質土(粘土)
- 2. 暗黄褐色砂質土(床土)
- 3. 暗灰色砂質土
- 4. 褐色砂質土
- 5. 灰褐色砂質土
- 6. 褐色-灰褐色砂質土
- 7. 黄褐色砂質土
- 8. 灰褐色砂質土
- 9. 淡褐色砂質土
- 10. 灰褐色砂質土
- 11. 褐色砂質土
- 12. 褐色砂質土
- 13. 淡褐色-褐色-灰褐色砂質土
- 14. 灰色砂質土
- 15. 淡褐色砂質土
- 16. 灰色砂質土
- 17. 暗灰黄褐色砂質土
- 18. 灰色砂質土
- 19. 褐色砂質土
- 20. 灰色砂泥り粘質土
- 21. 淡灰褐色砂質土
- 22. 淡灰褐色砂質土
- 23. 灰白色砂質土
- 24. 灰褐色砂質土
- 25. 橙黄褐色砂質土
- 26. 暗赤褐色砂質土

第164图 東地区土層断面图

溝ノ尾遺跡 東地区



第165図 東地区遺構全体図



第166図 竪穴住居

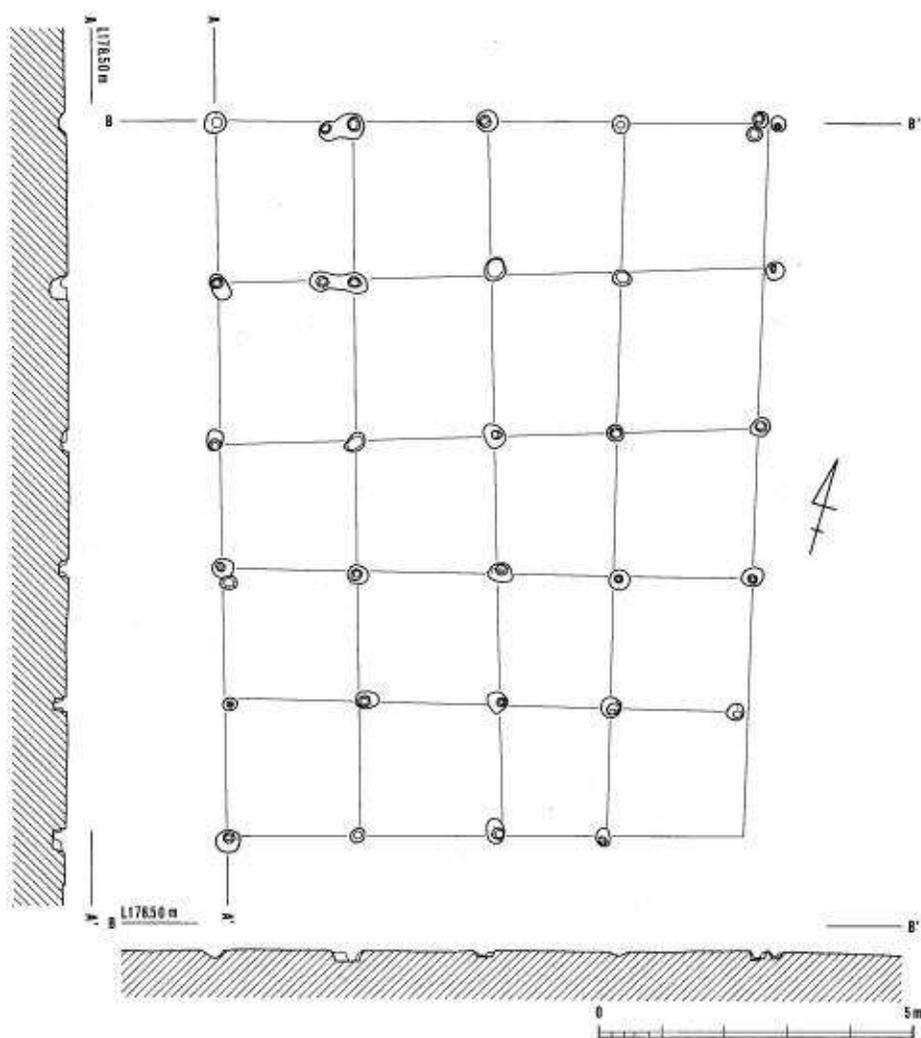
り、桁方向の柱間は1.8～2.44m、梁方向では1.52～2.24mで一定していない。柱の掘り形はすべて円形で径20～42cm、柱痕の太さは径10～24cmで、深さは柱穴検出面より5～30cmである。東南隅の柱穴が1個欠けているが、もともとなかったものかは不明である。

遺物

掘立柱建物址1の柱穴からの出土遺物のうち図示できたものは第168図241の1点のみである。この土器は柱穴柱痕内から出土しており、本建物址廃絶時以後に収められたものと思われる。須恵器の椀で、やや外彎して外上方にたちあがる体部をもち、口縁部は若干肥厚し、丸くおさめている。口径は16.3cmである。

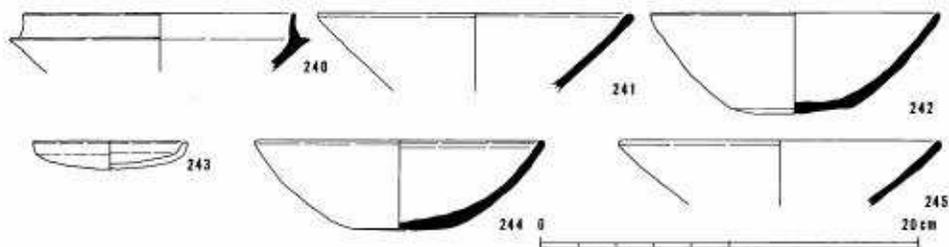
底部が残存していないため詳しい時期は不明であるが、平安時代後期～鎌倉時代前期のうちにおさまるものと思われる。

掘立柱建物2 (SB-2)



第167図 掘立柱建物 1

調査区東寄りの南端付近に存在する 1 間四方の建物址である。柱間は長い方で2.22m、短い方で1.64mであり、長い方の軸はN24°Wである。柱穴は円形で、径23~50cm、柱痕は径15~28cmである。柱穴の深さは検出面より14~32cmあった。東北の柱穴上面に須恵器の完



第168図 竪穴住居・建物 1~3 出土土器

形品が遺存していた。

遺物

柱穴上面に存在した須恵器椀で(第168図242)、灰白色を呈している。底部は平底で、回転糸切りである。口径15.1cm、器高5.4cmである。

平安時代末～鎌倉時代前期の所産と思われる。

掘立柱建物 3 (SB-3)

調査区東部中央にあり、竪穴住居址と重複関係にあり、柱穴が竪穴住居址の埋土に掘り込まれていることにより、本建物址の方が新しく築造されていることが判明している。建物址3は現状では桁行4間(5.48m)、梁行1間(1.86m)の規模であるが、東部が後世の水田構築の際に削平されていることから、さらに東側に梁方向が延びていた可能性が高いと思われる。桁方向はN1°Wである。桁方向の柱間は2～2.24mで、柱の掘り形は円形と隅丸方形であり、径26～37cmと小さく、柱痕も径14～27cmと細い。深さは検出面より9～21cmである。

遺物

柱穴柱痕内より土師器の小皿が1点出土している(第168図243)。口径8cm、器高1.5cmで、底部は丸みをもっており、そこから稜をもって屈曲して口縁部へと続いている。時期は平安時代～鎌倉時代のもと思われるが、詳細は不明である。

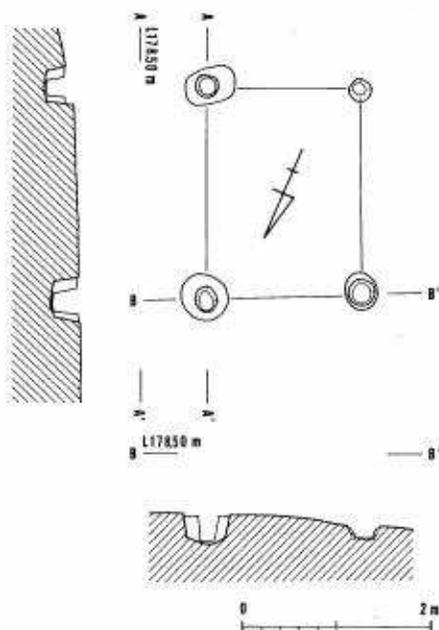
掘立柱建物 4 (SB-4)

調査区東部の北端に存在する3間四方の長方形建物である。桁行は長さ4.32m、柱間は1.28～1.6mで、1.4m前後が多い。梁行は長さ3.92m、柱間は1.12～1.6mであり、平均1.3m前後である。桁行の方向はN29°Eで、東にかなり振れている。柱穴掘り形はすべて円形で、径44～58cm、柱痕は径24～33cmと、掘り形・柱痕ともにやや大きい。

柱穴等から全く遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、他の建物と柱穴の大きさが異なる点や、西地区の建物址と比較してみると、奈良時代～平安時代前期の建物址である可能性が高い。

掘立柱建物 5 (SB-5)

調査区東端付近の南部に存在する1間四方の建物址で、柱穴掘り形の大きなものである。



第169図 掘立柱建物 2

柱間は長い方で4.16m、短い方で3.6mで、短い方がN8°Wの方向である。柱穴掘り形は径56cm程度で、柱痕も径18~26cmと大きい。柱穴内その他から遺物は全く出土していない。

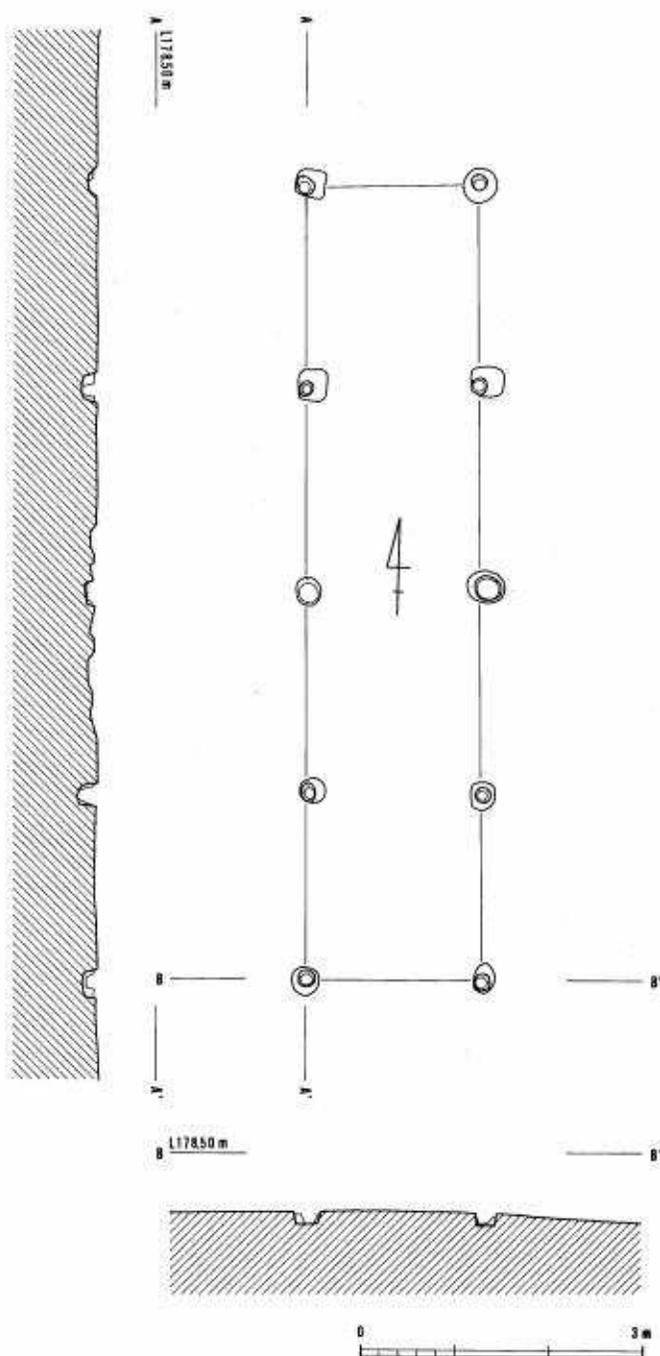
その他の柱穴

上述の掘立柱建物址他に多数の柱穴を検出、掘削したが、建物址、柵列等として組みあうものは認められなかった。柱穴は主として調査区東半部に存在し、特に掘立柱建物址1の周囲に多く存在しており、この建物跡の周囲の柵・塀あるいは垣として存在していたものかもしれないが、等間隔で一直線に並ぶものではなく、それらの施設として取りあげてはいない。

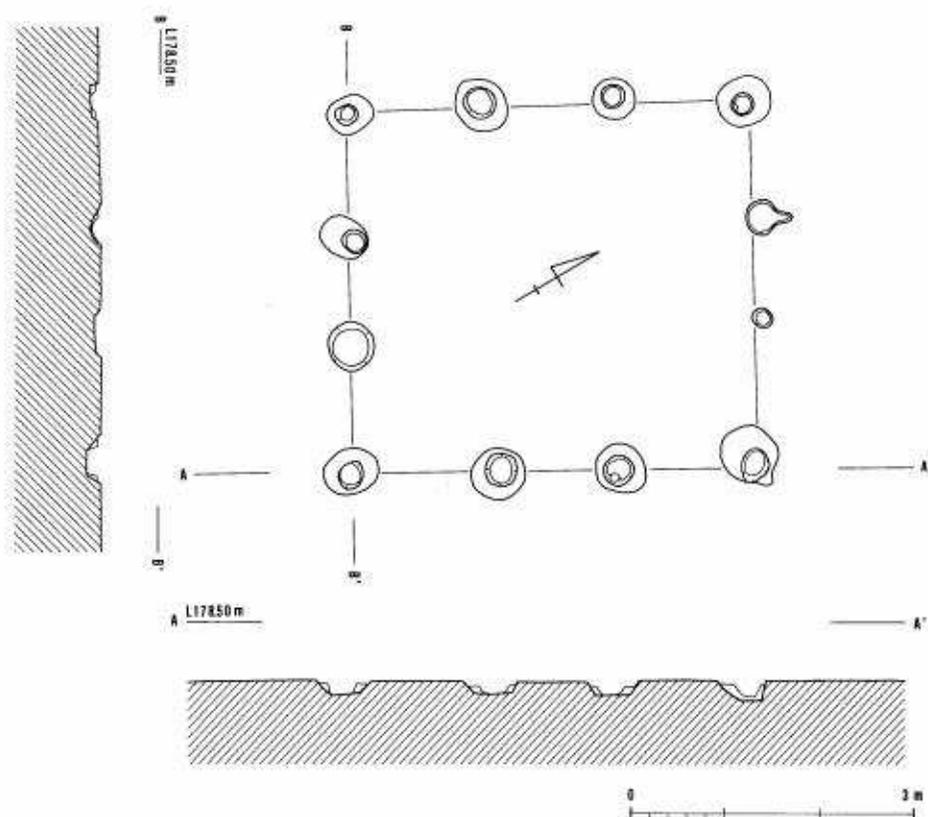
遺物

その他の柱穴からの遺物としては、調査区東部南端に存在する柱穴1 (P-1) から須恵器碗が出土している(第168図

244)。底部は回転糸切りで、体部はロクロナデ調整を施し、底部内面には仕上げナデを施している。口径15cm、器高は4.8cmである。245も須恵器碗で、調査区中央部南端の柱穴2 (P-2) から出土したもので、底部を欠失している。体部および口縁部はロクロナデ調整



第170図 掘立柱建物3



第171図 掘立柱建物4

である。口径16.8cmを測る。

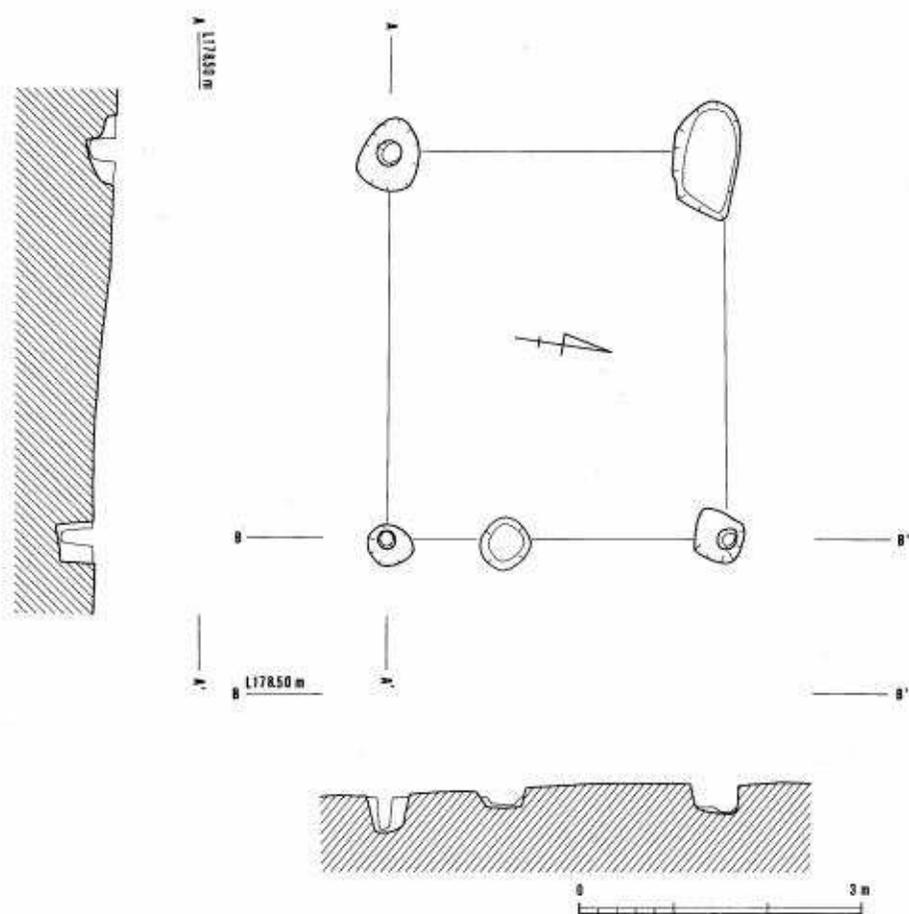
柱穴1・2出土の椀とともに平安時代後期～鎌倉時代前期のものと思われる。

土壌1 (SK-1)

先述の掘立柱建物址1の東南部に柱穴と接して存在している土壌で、東西に長い楕円形を呈している。長径1.3m、短径0.85mで、深さは47cmで、底は丸い。埋土は褐色～暗褐色の砂質土であった。本土壌上面より土器がややまとまって出土した。

遺物

土壌1の上面より出土した土器は第173図246～250に示した須恵器椀・小皿と土師器小皿である。椀は2点あり、ともに若干内彎ぎみに外上方にたちあがる体部から、丸くおさめる口縁部をもち、246の底部は平らで高台はなく、回転糸切りとなっている。246の口径は14.9cm、器高は4.4cm、底径6.7cmである。底部内面もほぼ平らで、仕上げナデ調整を施している。247の口径は17.2cmとやや大きめである。須恵器小皿(248)は口径8cm、器高1.5cm、底径4.5cmで、底部は回転糸切りである。体部は底部から大きく彎曲してたちあがり、若干外反して口縁部へとつづく。焼成は良好で、明青灰色を呈する。



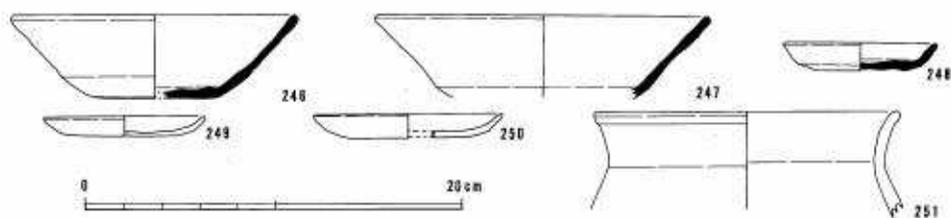
第172図 掘立柱建物 5

土師器小皿 (249・250) は同様の形態を示し、若干丸い底部から徐々に彎曲してたちあがる体部をもつ。ともに器表が荒れているため、調整痕は不明である。249の口径・器高は8.5・1.1cmで、淡橙色を呈し、250の口径・器高は9.9・1.3cmで、浅黄橙色を呈している。

土壌 1 出土土器は平安時代後期～鎌倉時代前期におさまるものと思われる。

土壌 2 (SK-2)

調査区東方の竪穴住居址と重複するかたちで存在している小さな土壌で、東西84cm、南



第173図 土壌 1・2 出土土器

北62cmの楕円形を呈している。深さは23cmで底は丸い。

遺物

土壌2の埋土中より出土した遺物は第173図251に示した土師器甕1点のみである。肩部以下は欠失しており、ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部はさらに外方につまみだしている。調整痕は不明である。口径は16cmを測る。

土壌3 (SK-3)

土壌3は調査区西北隅付近にある長方形の土壌である。南北方向の長軸は長さ3.26m、東西は1.62mで、深さ21cmを測り、底部は平坦である。内部に人頭大の礫数個と陶器の皿・鉢が存在していた。棺の痕跡は検出できなかったが、形状から墓である可能性が高いものと思われる。

遺物

土壌3から出土した遺物は第175図252・253に示した陶器の皿とサヤである。252は灯明皿と思われ、内側の突帯部分に芯置きと思われる焼成前の切り欠きが認められる。あるいは蓋を転用したものかもしれない。外面は底部から体部にかけてロクロ削り、内面および口縁部はロクロナデを施している。全面に薄く釉がかかり、底部外面には煤が付着している。口径は9cm、器高は2cmである。橙色を呈している。253のサヤは未調整の底部から一度外上方に屈曲してたちあがったのち、さらに屈曲して上方にのび、上方でやや外反したのち、もう一度上方に屈曲させたものであり、口縁部は内側に大きく肥厚させている。外面には赤褐色と黄緑色の釉が付着しており、焼成はやや悪く、淡黄色を呈している。口径は10cm、器高は5.8cmである。

遺物の時期は明瞭にできないが、江戸時代以降と思われる。

土壌5～7 (SK-5～7)

土壌5は調査区西南隅に存在する径1.76mの円形の土壌で、内部ほぼ中央に桶を収めたものである(第174図)。桶は下端部が遺存しており、径1m、高さ平均38cm遺存していた。土壌検出面から桶底までの深さは85cmである。埋土上部には人頭大の礫、燻し瓦片が投げ込まれたかたちで多く存在しており、それらに混じって播鉢片、磁器碗が出土している。掘り形は深さ1mで、桶の周囲には土壌を掘削した土を埋めて固めていた。それらは上層の暗黄褐色砂質土と下層の暗灰色砂質土の2層に分層できた。本土壌は近世以降のものであり、農業用の肥溜めと思われる。

土壌6・7についても同様の構造である。

遺物

土壌5内埋土より近世以降に属すると思われる瓦、陶器、磁器類が多く出土したが、図示したのは第175図に掲げた254・255の2点のみである。254は丹波焼播鉢の底部で、底径

は11.95cmである。内面には櫛描の描目が密に施されており、底部内面には十字状に描目を描いたのち、周囲に円形に描いている。赤褐色を呈している。255は伊万里系の染付碗で、口径9.6cm、底部を欠失している。外面に濃筆の呉須で梅花文が描かれている。

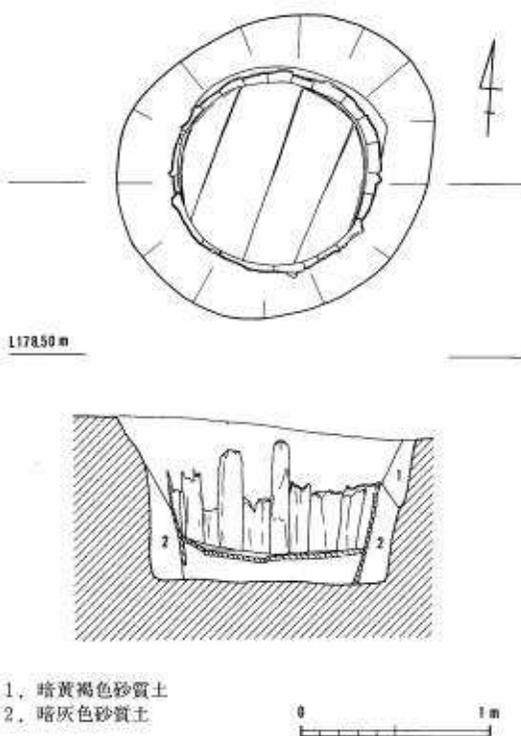
土壌5から出土した遺物には第175図257・258に示した陶器のほかには包丁片・寛永通宝3枚が出土している。また、土壌6・7からは第175図256～260に示した陶器・磁器が出土している。256は伊万里系の染付碗で、外面に呉須で草花文・丸文が描かれており、その下には界線が3条めぐるっている。高台部内面には1条

の圏線が引かれている。表面には貫入が入り、畳付部分には釉のかきとりが認められ、砂が付着している。口径10.4cm、器高6.4cm、底径4.1cmである。257は京焼系の碗で、内面見込み部分に絵付けを施しており、表面全体に灰釉がかけられているが、畳付と高台裏は露胎となっている。また、表面には細かい貫入が入っている。口径12cm、器高4.6cm、底径4.7cmで、灰白色を呈している。258は土壌3出土のサヤ253と形態が似ており、同じく丹波焼のものと思われる。口径16.6cm、器高6.9cmで、底径は13.6cmである。259は櫛目を施していない陶器のこね鉢で、にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。体部は外上方にほぼ直線的にのび、口縁部は大きく内側に折り曲げ、内傾させており、器壁も厚くしている。下方に若干垂下し、口縁端部は上方に尖っている。口径34.2cmである。260は丹波焼の櫛鉢で、口径34.7cm、器高は14.5cm、底径14.4cmを測る。体部は外上方に直線的にのび、口縁部は一度大きく外反したのち上方へのびている。口縁部外面には2条の太い凹線を施し、端面には段をつけている。体部と口縁部の境には段をつけており、体部内面には櫛描きの描目が認められるが、やや疎に施している。暗赤褐色を呈している。

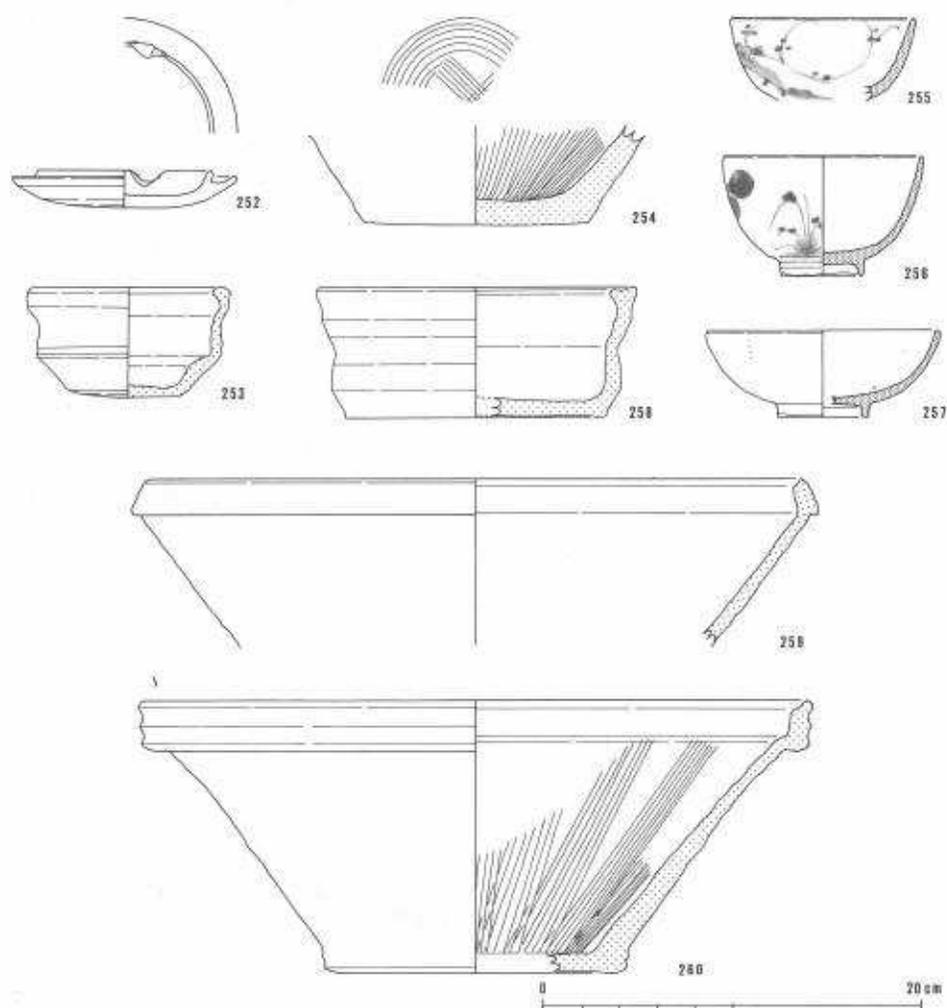
土壌5・6の出土遺物は江戸時代後期に属するものと思われる。

土壌8 (SK-8)

調査区中央部北端付近に存在する方形の土壌である(第176図)。南北2.4m、東西2.18m、



第174図 土壌5

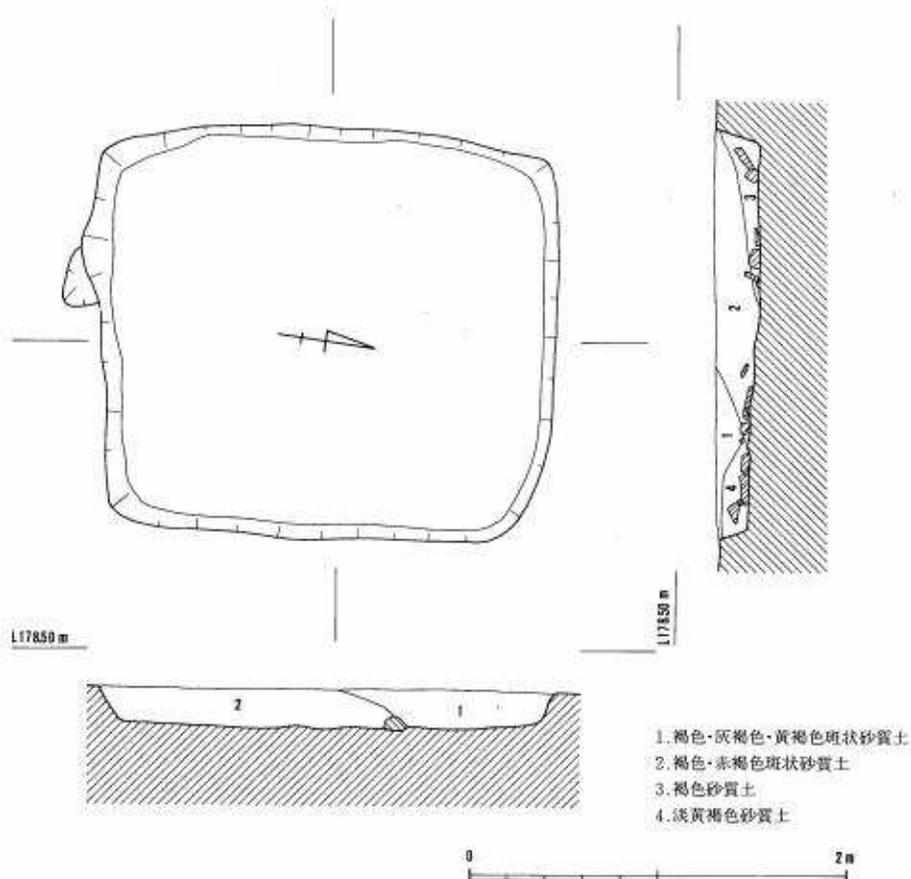


第175図 土壌3～6出土土器

深さ22cmで、底部は平坦となっている。埋土は上層より褐色・灰褐色・黄褐色の砂質土、褐色・赤褐色の砂質土、褐色砂質土、淡黄褐色砂質土となっており、土壌底付近には拳大の礫が多く存在し、陶器も若干混じっていた。

遺物

土壌8より出土した遺物は第177図261に示した陶器のほかに鉄製角釘が1本出土している。261は丹波焼の播鉢で、平たい底部から外反気味にたちあがる体部をもち、口縁部は若干肥厚している。口縁端面は垂直で面をなし、上端は丸くおさめている。口縁部内面には体部との境を示すかのように小さな段をつくっている。体部内面には櫛描きの播目がやや疎に、底部内面には十字状、その周囲に円形に施されている。口縁部には注ぎ口が1箇所つくりだされている。口径31.6cm、器高11cm、底径12.1cmで、灰褐色を呈している。



第176図 土壌 8

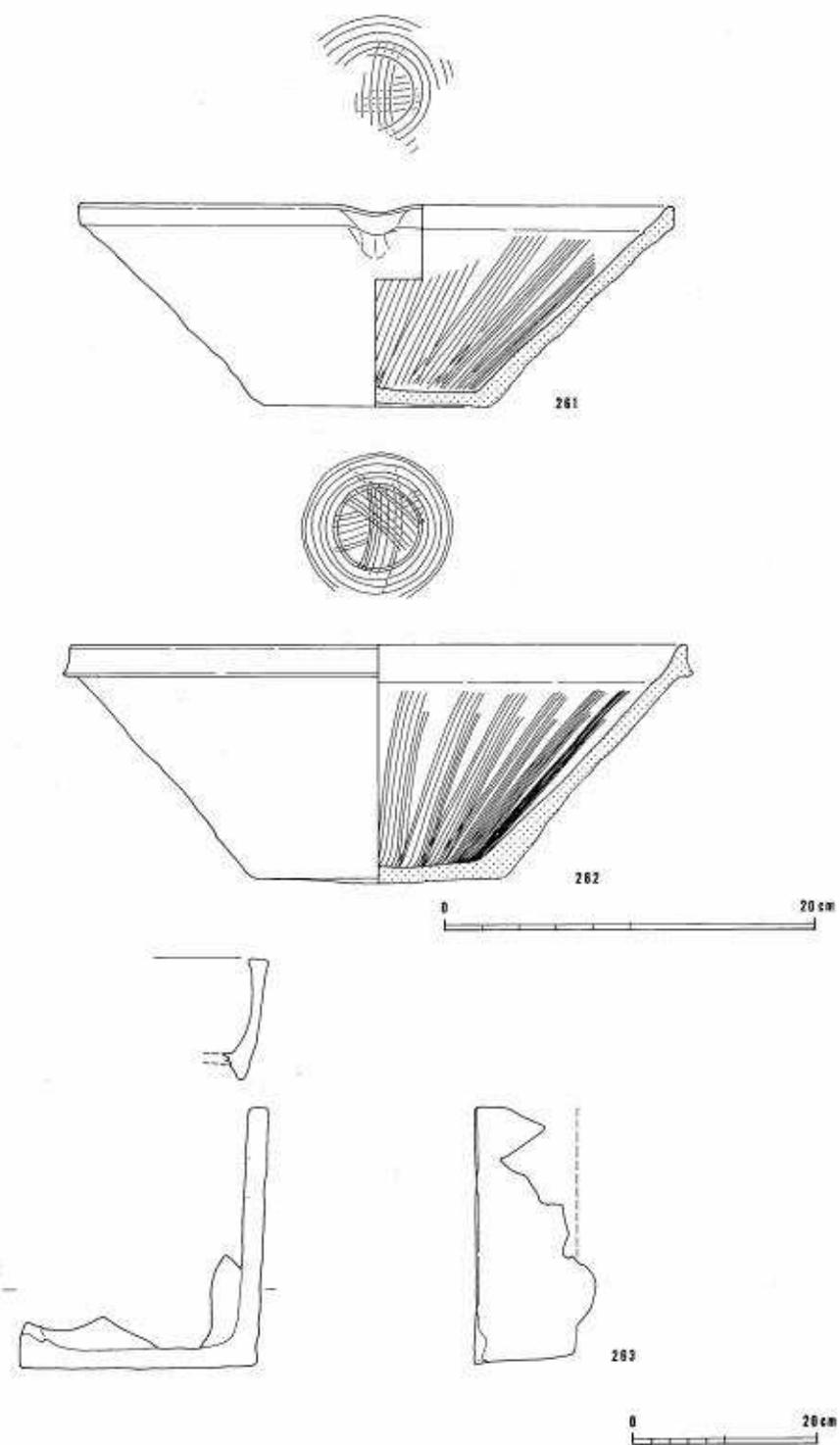
時期は江戸時代と思われる。

土壌 9 (SK-9)

調査区中央北端西寄りの土壌 8 西側にある不整形な土壌である。北側半分は調査区外の崖になっている。土壌の長さは、最も広いところで7.7m、深さは64cmである。底には一部炭が集中して認められた。

遺物

土壌 9 から出土した遺物には第177図262・263に示した土器がある。262は丹波焼の楕鉢で、口縁端面は垂直に近いが、凹面を呈しており、上端は尖り気味である。体部内面には櫛描きの楕目が認められ、口径32.8cm、器高13cm、底径は13.1cmである。263は瓦質の角形火舎で、多くの部分を欠失している。平面は長方形を呈しており、短辺26.1cm、長辺28cm以上で、内面の深さ10.3cm、高さは13.1cmで、高さ1.5mの脚を長辺に2個ずつ計4個取り付けているようである。体部の外側面はほぼ平坦であるが、内面は外彎している。口縁部は体部より徐々に厚みを増し、上端面は水平で平坦である。表面は黒灰色を呈している。



第177図 土壇 8・9 出土土器

遺物の時期は不明であるが、江戸時代以降のものかもしれない。

(岸本)

(3)出土石器 (第178図)

本地区では63点の石器が出土している。いずれも原位置を遊離し、後世の遺構あるいは包含層中より出土している。ここでは10点を図示する。

10はサヌカイト製ナイフ形石器である。

10は、打点の片寄った横長剥片を素材とし、その二側縁に腹面側より二次加工を施したものである。先端部は古く折損しているが、切出形の刃部をもつものと思われる。基部は尖鋭に仕上げられている。背面側に見られる剥離痕は、腹面の剥離方向と斜交する方向からのものであり、打点を左右に移動させる剥離工程の存在が予想される。長さ23.9mm、幅16.2mm、厚さ6.9mm、重量2.3g。

11はごく小型の石錐であろう。二次加工の状況から切出形ナイフ形石器の可能性も否定できないが、風化も浅いことから、ここでは一応石錐として取り上げておく。

素材剥片の形態は、背・腹面の剥離方向から、ごく小型の縦長剥離の可能性があろう。長さ21.1mm、幅8.8mm、厚さ4.5mm、重量0.8g。

12～14は凹基無茎式石鏃である。いずれもサヌカイトを石材としている。

12・13は、片面に丁寧な二次加工を施し、他の一面に素材剥離の腹面をとどめるものである。腹面側の二次加工は、縁辺に限定されており、剥離面中央には達していない。基部の挟りは、いずれもごく浅いものである。

12は長さ17.0mm、幅13.1mm、厚さ2.8mm、重量0.5g。13は長さ20.5mm、幅15.0mm、厚さ1.9mm、重量0.7g。

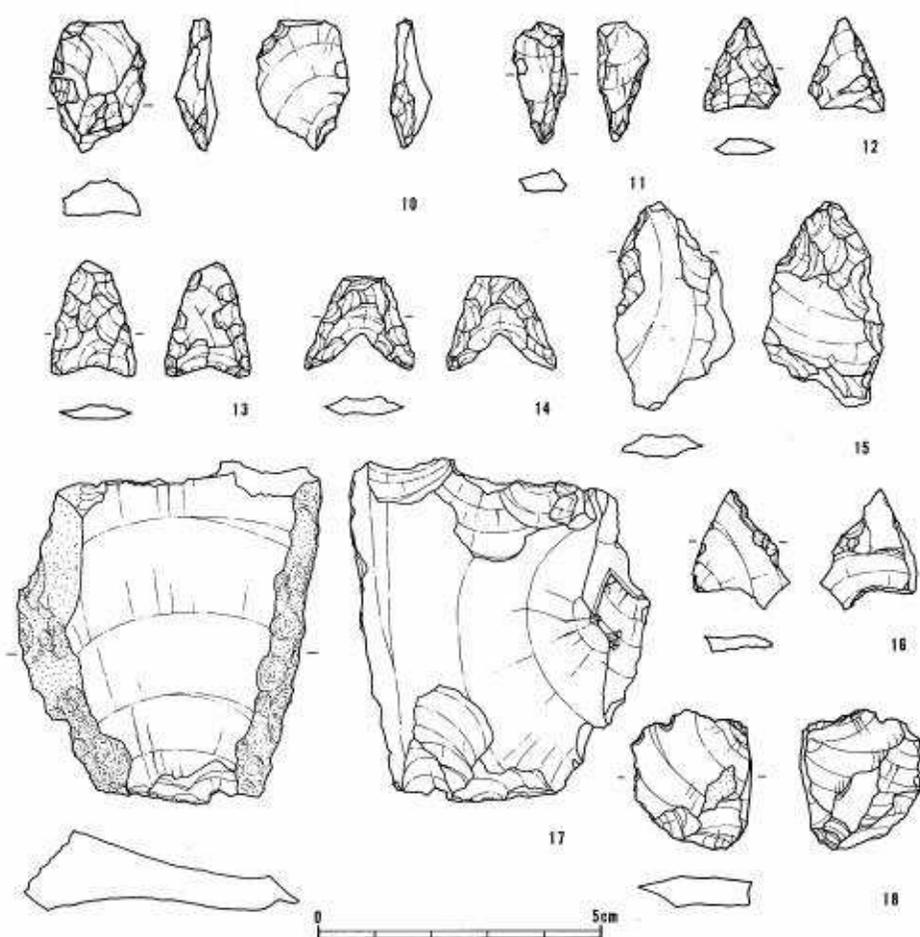
14は基部の挟りが深く、脚端部の尖る凹基無茎式石鏃である。長さ16.8mm、幅19.2mm、厚さ2.6mm、重量0.7g。

15・16はサヌカイト製の削器である。いずれも剥片の一部に、やや不規則な二次加工を施したものである。16の下半は古く折損している。素材剥片はいずれも不整形なものである。15は長さ36.8mm、幅21.4mm、厚さ3.5mm、重量4.3g。16は長さ22.0mm、幅16.0mm、厚さ1.9mm、重量0.8g。

17・18は、楔形石器である。

17は、大型・厚手のサヌカイト製横長剥片を素材とし、その相対する二辺に二次的剥離を施したものである。18は、チャートを石材とする。剥片を素材とし、その相対する二辺より剥離が加えられている。17は長さ62.0mm、幅51.2mm、厚さ14.9mm、重量35.5g。18は長さ24.5mm、幅21.2mm、厚さ5.6mm、重量3.5g。

溝ノ尾遺跡(東地区を含む)出土の石器は、二時期に大別できよう。ナイフ形石器、および鉄石英製の二次加工のある剥片は、旧石器時代後期に属するものと考えられる。他に



第178図 出土石器

については、縄文～弥生時代にわたる時期差をもつ可能性が考慮される。しかし、17の大型異形石器、18の異形石器等、弥生時代に見られない器種も存在することも考慮に留めておきたい。

本遺跡もまた、溝向・乾遺跡と同様、ごく小規模な石器出土地点であるが、東地区では破片類がややまとまって出土しており、石器製作址的な性格も、あわせ持っていたようである。

山麓部に立地する、土器を伴わない石器出土地点がもつ機能については、今後の検討課題として取り上げておきたい。 (久保)

(4)小結

東地区では古墳時代の竪穴住居址1基と掘立柱建物址を5棟検出した。掘立柱建物址の時期は、遺物が出土しているものでは平安時代～鎌倉時代に属するものである。

竪穴住居址出土遺物は須恵器坏身の小片1点であるが、田辺編年のII期TK10型式、中村

編年のⅡ型式第2～第3段階に相当し、時期としては中央地区のものよりやや遅り、竪穴住居址にカマドを持っていない点が異なっている。しかし、中央地区の竪穴住居のカマドはすべて住居址の東南辺に造られていることから、本地区住居址の削平を受けている部分に設けていた可能性は高い。

掘立柱建物については、遺物が出土した建物で時期が判明するのは掘立柱建物1と2のみで、掘立柱建物址3の土師器の皿は時期の限定が難しい。土器が示す時期でみると、掘立柱建物址1と2が同時期となる。また、掘立柱建物址3と5は方向を同一にしており、同時存在の可能性が高い。

これらの東地区の遺構は中央地区のものと同時期に存在しており、あわせて溝ノ尾遺跡として一つの集落跡と考えられる。

(岸本)

註(1) 田辺昭三『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ 1966年

田辺昭三『須恵器大成』平凡社 1981年

(2) 中村 浩『和泉陶邑窯出土遺物の時期編年』『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会 1978年

5. 結語

両地区をあわせ、竪穴住居址5棟、掘立柱建物址37棟を検出した。これらの建物址よりある程度の集落構成の変遷過程を追うことが出来る。

竪穴住居址及び掘立柱建物址の切り合い、桁行・梁行の方位、わずかではあるが、出土遺物によって10段階の建物址の存在時期区分を行った。

〈1期〉東地区住居址……………6世紀後半

東地区に単独で位置する。

〈2期〉中央地区住居址1・2・3……………6世紀末～7世紀初頭

東地区住居址に比べて1～2型式新しい。

〈3期〉中央地区住居址4……………7世紀中頃

〈4期〉中央地区建物址16・18……………7世紀中頃～後半

桁行もしくは梁行方位をN50°E前後にとる。建物址16は建物址4と切り合い先行する。建物址18は建物址4と切り合い先行する。建物址16の柱穴より7世紀中頃～後半にかけての須恵器坏蓋が出土している。

〈5期〉中央地区建物址1・2・3……………7世紀後半

桁行もしくは梁行方位をN5°W前後にとる。

〈6期〉中央地区建物址4・7・12・17・21・22・23・24……………8世紀中頃～後半

桁行もしくは梁行の方位をN5°E前後にとるもの。

〈7期〉中央地区建物址6・8・13・19・20、東地区建物址4……………8世紀後半～9世紀初頭

桁行もしくは梁行の方位をN15°EからN20°E前後にとる。建物址5・6・8では7世紀代

の遺物も出土しているが、建物址8・13では8世紀後半～9世紀初頭の遺物が出土しており、建物址13は12と切り合い新しい。

〈8期〉中央地区建物址9・10・11・14

桁行もしくは梁行の方位をN30°E前後にとる。各柱穴から時期を決める遺物の出土はない。G群の梁行2間に対して梁行3間を基本にした建物規模をもっており、方向と考えあわせ7期に比して新しい建物群と考えるべきであろう。

〈9期〉中央地区建物址15

桁行方位をN15.5°Wにとる。中央地区南端すなわち台地南縁にあり、調査区の建物址では一番悪い立地にある。土壌11に切られ、9世紀初頭前後の遺物が出土していることから9世紀初頭をそう遠く離れない時期と考えられる。

〈10期〉中央地区建物址25・26・27・28・29・30・31・32、東地区建物址1・2・5

総柱建物址を主とする12世紀末～13世紀代に属する中世建物址群。

出土遺物から見て中世の建物址はほぼ12世紀末～13世紀におさまり、各建物址はあまり時間差をもつものではない。しかし、立地や桁行・梁行の方位を考慮すれば、中央地区建物址28・29・30、東地区建物址3は若干後出する可能性がある。

以上建物址を新旧を追い10段階に分類した。機械的に建物址の方位と出土遺物による時期の1点をおさえたもので、先後関係は極めて相対的なものである。また、各期の建物址の存在時間は幅をもち、数期にわたる建物が同時に存在するものと考えべきであろう。6世紀後半から9世紀初頭（1～9期）までは切れ目なく建物が存在していたと考えられる。

溝ノ尾遺跡では6世紀後半に東地区に住居址が出現するが（1期）、本格的に集落を形成しはじめるのは、中央地区南半で、6世紀末～7世紀初頭（2期）になってからと考えられる。7世紀中頃には、やはり中央地区南半に掘立柱建物址が出現する。この時点で住居址4はまだ存在していたと考えられる（3・4期）。7世紀後半に入ると南北方向に規則性をもって並ぶ建物址群（5期）が出現する。8世紀に入ると建物址は建てかえを行いながら徐々に台地上に集落を拡大してゆく（6・7・8期）。

集落が拡大する段階で、従来まで中央地区南半に集中し、単一のグループとしてとらえられていた建物群は、4つのグループへと分れてゆく。まず6期としてとらえた建物址のうち、中央地区建物址7・12がそれぞれ従来の建物群と離れた地点に出現する。建物址7は、中央地区中央の空白帯を挟んでいる。6期建物群の方位と直交する走行をもつ溝（11）（12）はおそらく、この時点で両グループの境にもうけられたものであろう。7期の建物址が出現した時点で東地区に建物址が出現する。

9世紀初頭には中央・東地区両地点に4グループにわかれる建物群が展開し、15棟前後

溝ノ尾遺跡

の建物址が同時に存在していたと考えられる。

便宜上、4つの建物群を群と呼び、A～D群として以下にまとめておく。

〈A群〉中央地区建物址4・17・22・23・24及び19・20・21。

7世紀代から継続して建て替えが行なわれている。5期以降、梁行3間の建物址1棟に梁行2間の建物址を2～4棟もつ。建物址19・20・21は倉庫の可能性が高い。

〈B群〉中央地区建物址5・6・7・8・9。

6期に建物址7が出現、7期に入って複数棟の建物址をもつ。梁行3間の建物址(建物址6)及び梁行2間の建物址を2棟前後最終的にもつものと考えられる。

〈C群〉中央地区建物址10・11・12・13・14。

6期に建物址12が出現。8期に入って梁行3間、桁行5間の建物址、同時に梁行3間、2間の建物址をもち、A群に近い規模となる。

〈D群〉東地区建物址4。

7期に出現し、それ以降建て替えがなく廃絶する。

A～D群間では、建物址の棟数規模に差異がある。各期での建物址の出現状況は、集落内での各群を構成する集団の盛衰消長を示すものであろう。

各群内の建物址の構成は、基本的には梁行3間の比較的規模の大きな建物址1棟に、やや規模の小さな梁行2間もしくは3間の建物址2～3棟としている。梁行3間建物址は主屋、2間建物址は付属屋であろう。これら主屋と付属屋を居住棟と作業棟と考えるべきか、また両者共に居住棟と考え、小集団内での階層性のあらわれとするべきかは問題が残る。

溝ノ尾遺跡の周辺には、小さな谷を挟んで北側に乾遺跡、南側には南台・溝向遺跡が位置しており、この4遺跡は青野川へむかってのびる台地末端上に近接して位置する。一つの集落、おそらく「村」としてとらえることが出来よう。

溝ノ尾遺跡を含む4遺跡はその形成時期に若干の時期差がある。溝ノ尾遺跡は古墳時代後期より。乾・南台遺跡は7・8世紀代より。溝向遺跡に至っては、中世に入って集落として本格的に機能しはじめる。溝ノ尾遺跡の出現は、一集落と考えられる範囲のなかで最も古い。溝ノ尾遺跡は両側に谷川が流れる台地上に位置しており、古代の水田開発において、その谷水の占有統御という点で好位置を占めている。溝ノ尾遺跡の建物群、特に中央地区南半に出現し、200年以上にわたって継続して営まれた建物群(A群)は、谷水の利用によって土地開発を行った「村」の「草わけの家」的な存在としてとらえることが出来る。

末西・北浦・末野周辺には、多数の窯址が存在し、その多くの操業時期は、溝ノ尾遺跡の存続時期と重複する。また、南接する南台遺跡では7世紀前半の窯址の存在が指摘されている。調査対象地域外に、集落遺跡が存在する可能性は高いが、現在知り得る限り、青野川流域では、溝ノ尾・乾遺跡が構成する集落が、同時期に存在した唯一の集落であり、

溝ノ尾遺跡

おそらく、青野川流域の窯址に最も近く、大きな集落であったと考えられる。集落の性格を考えた場合、窯業と密接に結びついていたと考えるべきであろう。

青野川流域で調査が行われた各集落遺跡では、乾遺跡をのぞき、9世紀代で廃絶している。10～11世紀にかけての集落遺跡は乾遺跡以外検出されていない。窯業の衰退という地域的な事情が可耕地に限りのある青野川流域の集落を廃絶させた理由と考えられる。加えて、律令体制の崩壊・村落の再編成といった更に大きな網をかぶせるべきかもしれない。

(西口)

第6節 ^{みなみだい}南台遺跡 (AW-73)

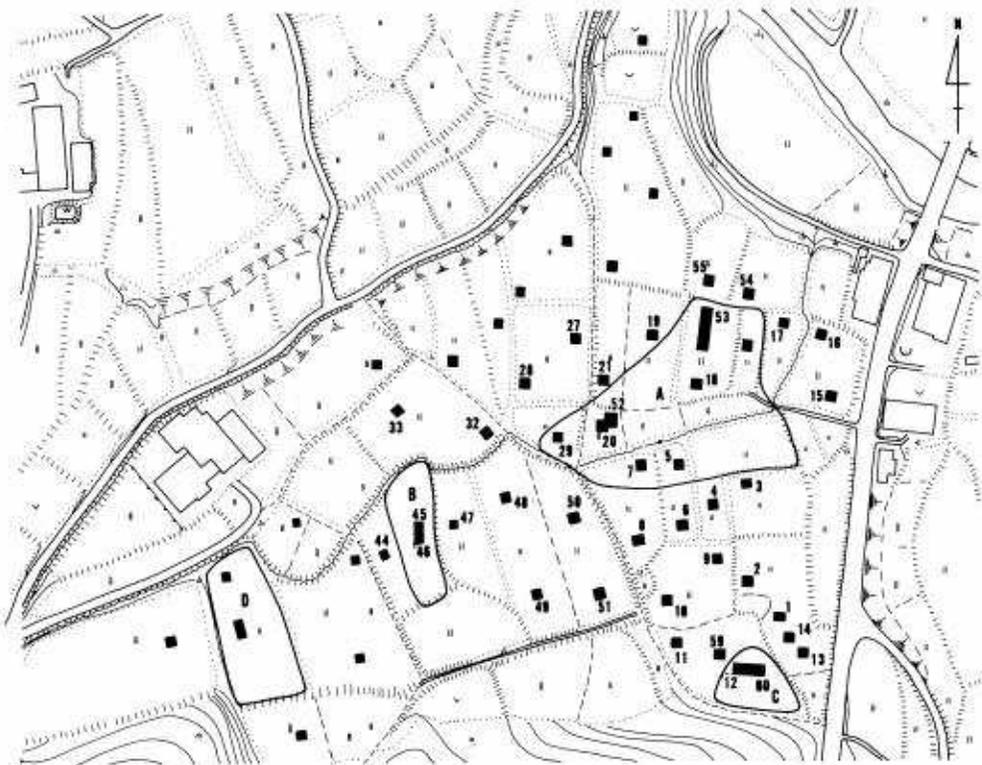
1. はじめに

末西地区の南端に位置する遺跡で、南側には末野地区との境界となる東山から延びてくる丘陵が存在する。北東方向約40mのところから青野川が南流している。北西方向から流れてくる青野川は、当遺跡の立地する丘陵によって流れを大きく東に変えて丘陵に沿って南西方向に蛇行して流れている。遺跡の立地する丘陵は緩斜面を呈しているが、青野川の流れが大きく変換している地点では崖になっている。緩斜面上は、現状は階段状の水田で、直ぐ北側に溝ノ尾遺跡が存在する。

遺跡の地目は水田で、所在地は三田市末西字南台である。

2. 調査の経過

調査は、分布調査の成果を踏まえて確認(坪掘り)調査から実施した。確認調査は昭和55・56年度に実施した。昭和55年度に60箇所、昭和56年度に20箇所の坪を設定して調査を行った。その結果、昭和55年度に11箇所、昭和56年度に5箇所の坪で遺構・包含層を確認した。坪は、地形を考慮して任意に設定した。部分的に坪を拡張して、調査方針を確定した。その結果、4地点で全面調査が必要となり、A～D地区と呼称して調査を進めることに



第179図 位置図 (1:2000)

南台遺跡 A地区



第180図 A地区遺構全体図

した。A地区は、2400㎡、B地区は、340㎡、C地区は、150㎡、D地区は、760㎡を調査した。全面調査は、昭和56年度に実施したが、D地区の実測のみ昭和57年度当初まで継続した。調査期間は、確認調査を昭和55年11月29日～12月12日、昭和56年6月11日～23日までの17日間を、全面調査を昭和56年5月21日～昭和57年4月7日までの125日間の合計142日間を費やした。

なお、調査はA地区を櫃本・岡田・渡辺が、B・C地区を櫃本・渡辺が、D地区を櫃本・山本・岡田が主に担当した。

3. A地区

南台遺跡で最も面積の広い調査地区である。丘陵の先端近くで、比較的平坦な部分である。北方へ緩やかに下がっており、調査地の端から約20mで青野川の旧河道となる。全体的な地形も川の方へ下がっている。西から東、南から北へ向かっているが、南から北の方が顕著である。古墳時代から室町時代にかけての遺構が検出されている。掘立柱建物跡1棟、土墳墓2基、銭埋納遺構、溝、土壇、ピットを検出している。

①掘立柱建物

掘立柱建物1 (SB01) は、調査区中央で検出している。2×2間の建物跡で、東西3.3m、南北4.0mを測る南北方向に長い総柱の建物跡である。主軸はN24°Eである。掘り方は0.5～0.6mとやや大型である。中央の柱穴の掘り方は円形であるが、他の柱穴の掘り方は方形である。柱の深さは0.3mと深いとは言えないが、小規模の建物にすれば、柱痕も0.2mとやや径が大きい。

柱穴から時期を示す遺物は出土していない。A地区の遺構面の遺構のほとんどは平安時代末～鎌倉時代の遺構であるが、柱穴の大きさから奈良時代に遡る時期の可能性も十分に考えられる。

②土壇

不明瞭な浅い遺構を除くと、21基の土壇を検出している。しかし、大半は性格不明の遺構である。

土壇1 (SK01)

I 04に位置し、SK02との距離が0.2mと隣接している。長径1.3m、短径0.7mの楕円形で深さ0.2mを測る。

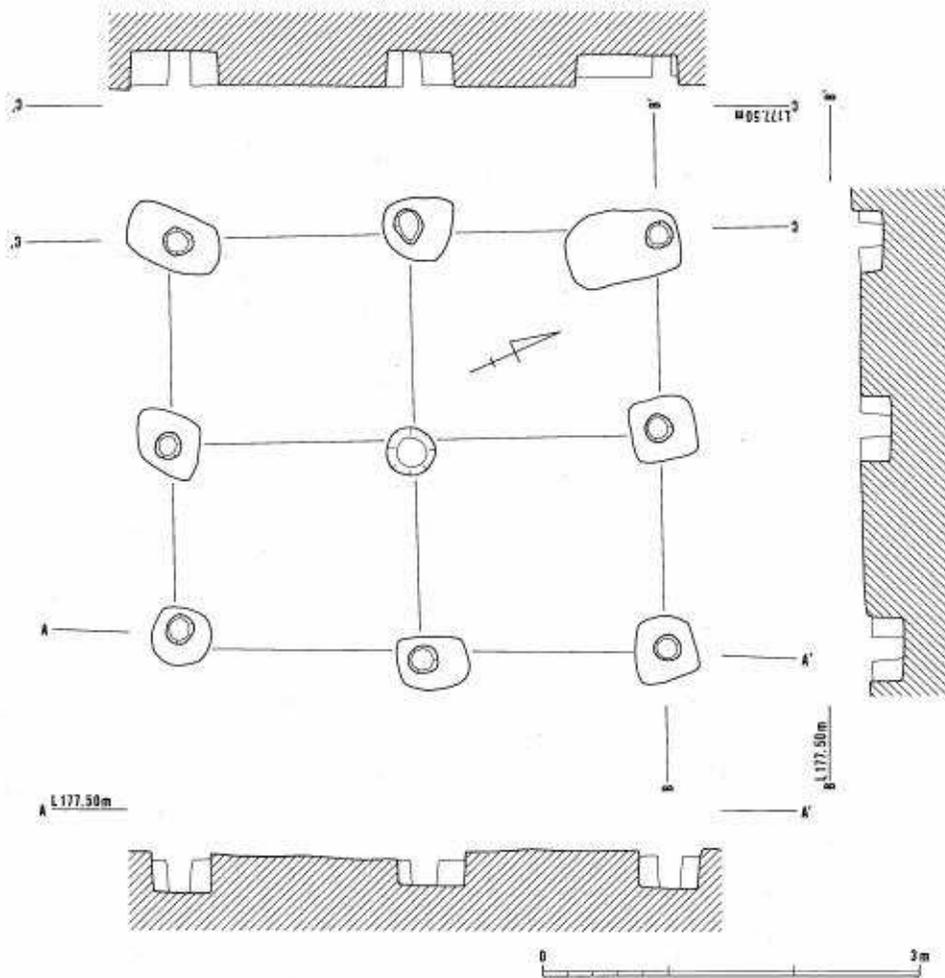
土壇2 (SK02)

SK01に近接して築かれた土壇で、長径1.25m、短径0.7mの楕円形をしている。深さは0.2mと浅い。

土壇3 (SK03)

SD01の後に築かれた土壇で、SK02の北側0.7mのところの位置する。長径2.3m、短径1.8

南台遺跡 A地区



第181図 掘立柱建物1 (SB01)

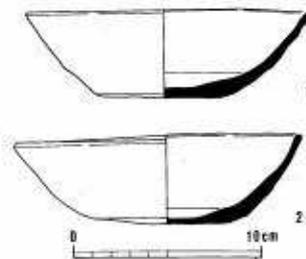
mの楕円形をしており、掘り下げは垂直でなく、北側方向に斜めに下げられている。そのため、断面は半葉研状となっている。深さは0.53mを測る。埋土は灰褐色土であり、SD01を切っていることから新しい時期の遺構と考えられる。

土壌4 (SK04)

残存長3.0m、幅1.5mを測る不定形の土壌である。深さ0.65mと比較的深く、底面は平坦である。

土壌5 (SK05)

長径1.8m、短径1.1mの楕円形の土壌で中央部分は二段に掘り下げられている。深さは0.24mと深くはない。SK04の北西に2.8m離れている。



第182図 土壌7出土土器

南台遺跡 A地区

土壌6 (SK06)

K04に位置し、SB01の北側1.8m離れて存在する。長径2.05m、短径1.0mの楕円形をしており、全体的には播鉢状に落ち込んでいる。深さ0.3mを測る。

土壌7 (SK07)

L04に存在する土壌で、最大長1.2m、幅0.55mを測る。深さは0.18mと浅いが、壙内に円礫とともに土器が出土している。

図化したものは2点で共に須恵器碗である。(1)は口縁部の一部を欠くが完形品に近いもので、口径15.0cm、器高4.7cm、底径7.3cmを測る。底部の切り離しは糸切りで行っており、体部はヨコナデで仕上げている。灰白色を呈しており、胎土は緻密で焼成は良好である。底部と体部との稜線は不明瞭で、内彎ぎみに口縁部へと続いている。口縁端部は丸くおさめており、端部下方でヨコナデのためやや断面が薄くなっている。口縁部に若干の焼きひずみが見られる。

(2)も須恵器碗で、口縁部は半分近く残っている。底部は糸切りで、(1)以上に底部と体部の境界が不明瞭である。全体的に稜線はなく器壁も厚い。口縁端部は(1)と同じく肥厚ぎみに丸くおさめている。口径15.1cm、底径8.3cm、器高4.8cmを測る。焼成はやや甘く、灰白色を呈している。

土壌8 (SK08)

L03に位置している不定形の土壌である。最大長2.6mで西側は二段に下げられている。深さ0.69mとやや深い遺構である。

土壌9 (SK09)

SK08が南東1mのところであり、不定の長楕円形をしている。長径3.15m、短径1.2m、深さ0.7mを測る。比較的深い土壌で、底面は東側が最も深く、西側に徐々に浅くなっている。埋土は灰褐色土で、新しい時期の遺構と思われる。

土壌10 (SK10)

L04に位置し、SK09と0.7mと近接している。壙内東端に1辺0.45mの方形のピットが穿たれている。長径2.2m、短径0.9mの不定形をしており、深さ0.43mを測る。東側が最も深く西側の底の方が浅くなっている。ピットの方が土壌より浅い。

土壌11 (SK11)

ややいびつであるが、楕円形の土壌で長径1.16m、短径0.8mを測る。土壌底面西側に径0.18mの円形のピットがさらに深く下げられている。埋土が同じだったため、時期が異なる遺構か同時期のものかは判断出来なかった。土壌底面は平坦でなく、西側が浅く東側が深い。深さ0.29mを測る。ピット底面と土壌最深部の深さは同じである。

土壌12 (SK12)

南台遺跡 A地区

SK11の北側に0.55m離れて築かれている。長径1.6m、短径0.65mの不定形をしており、東半分は0.1m前後さらに掘り下げられている。底は中央部分が最も深く0.42mを測る。

土壌13 (SK13)

最大長2.05mの中央部が膨んだ長方形の土壌で0.39m掘り下げられたのち、東側を長さ0.85m、幅0.5mの方形に0.2m深掘している。深さは上面から0.59mを測り、やや深い土壌である。

土壌14 (SK14)

SK11・12の西方、SK13の南方に位置している長径0.6m、短径0.5mの不定形の土壌である。深さは0.15mと浅いが、壙内から土師器鍋の口縁部が出土している。

土壌15 (SK15)

L05に位置する小型の土壌で、最大長1.27mを測る不定形の土壌である。深さも0.15mと浅いものであるが、壙内から土師器が出土している。

土壌16 (SK16)

SK15の西方1.41m離れて存在する。緩やかな弧を描いた不定形の平面形態を示し、最大長1.75m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色土である。

土壌17 (SK17)

K05に位置する長辺1.15m、短辺0.8mの長方形の土壌である。底はほぼ平坦で、深さは0.19mを測る。

土壌18 (SK18)

J05に位置しており、長方形に近い不定形をしている。長径2.90m、短径1.75m、深さ0.43mを測る。底面は平坦でなく、中央部北寄りが最も深く舟底状を呈している。埋土は黒褐色土である。

土壌19 (SK19)

SK18の南西側に0.34mと近接して築かれている。最大長2.27mを測る不定形の土壌である。深さは0.37mで、SK18と同様に中央部分が最も深い舟底状の底面である。

土壌20 (SK20)

I・J06に位置する不定形の土壌で、最大長3.4mを測る。深さは0.2mと浅く、底面は比較的平坦である。土壌底西端に径0.65mの円形のピットが掘り込まれている。

土壌21 (SK21)

不定形の土壌で最大長3.7m、幅1.5mの土壌で、深さ0.51mを測る。中央部が最も深く、東西方向にいずれも浅くなっている。

土壌22 (SK22)

I 06に所属する方形の土壌で、2基切り合っているが、古い段階のものは数cmとほとんど

残っていないため明らかではない。新しい段階の土壌は、長辺1.90m、短辺0.95mの多少歪んだ長方形である。深さ0.4mで平面および中央畦畔での観察から木棺の痕跡は確認出来なかった。そのため、土壌墓としたが、木棺墓の可能性も残されている。東西方向に主軸を持ち、西側部分に角礫と土師器小皿が置かれていた。土師器小皿から平安時代末～鎌倉時代の墓と考えられる。

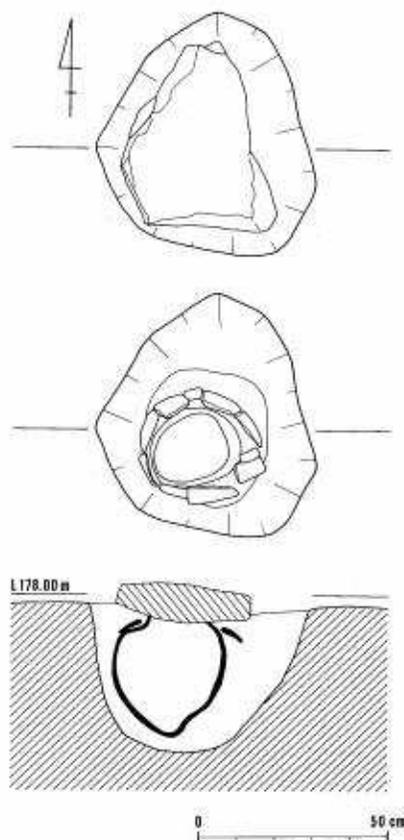
古い段階の土壌は、長径1.6mを測る隅円方形である。

③銭埋納遺構

A地区調査区の南東隅の溝に近い部分で確認された遺構である。不時発見で古銭埋納遺構が確認されることは、しばしば例があるが、発掘調査時の数少ない検出例と言えよう。兵庫県下でも14例以上知られているが、全く調査によって検出されたものは初めてであろう。ただ、宝塚市堂坂遺跡では偶然出土したのを契機に調査を行って、新たに古銭埋納を確認した例はある。調査前の地目は、水田であった。

遺構は、須恵器甕の中に古銭を束ねた、いわゆる「ひとさし」の状態でぎっしりと蓄えられた状況で埋納していた。陶器の鉢を蓋とし、さらに石を載せていた。

まず、径が約65cmのやや楕円形の古銭埋納容器を埋めるための掘り方を深さ50cm掘り下げている。埋納壕の断面は掘鉢状でなく、片側が垂直に近い片葉研状の断面を呈している。その垂直に近い急傾斜部分に甕（容器）を接するように据え置いている。甕自身も直立ではなく少し傾けて置かれていた。蓋は、捏鉢と石を二重にした構造である。捏鉢は、丹波焼と思われる陶器製のもので、口縁部を下に逆位置に蓋している。完形品ではなく、破片を使用している。さらに鉢の上に最大長50cm、厚さ10cmの比較的平たい石材を載せて二重の蓋としていた。台形に近い不定形をしている。石材は、三田市横山周辺で採取され、今も露頭の見られる凝灰岩質砂岩である。板状節理する石材で、蓋として使用された石材も平坦面は節理面である。その後、埋め戻しているが、埋土は周辺の遺構と同じ灰褐色土である。



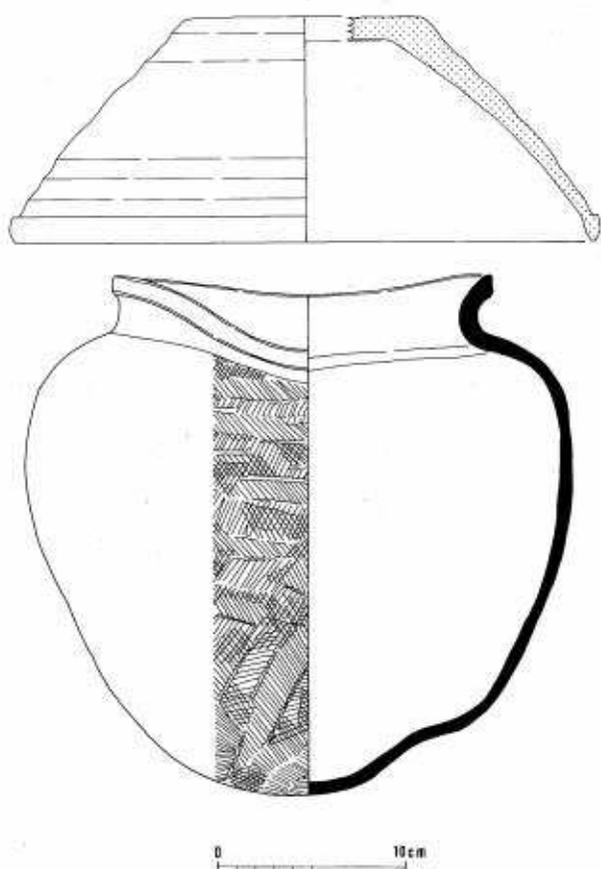
第183図 銭埋納遺構

現地での実測を終えたのち、すでに割れていた土器片は取り上げたが、古銭は取り上げず、埋納されている状態のまま甕を取り上げ、整理作業を開始した。甕と掘り方の間には礫など詰めておらず、埋土も同一の土で粘土などは使用していなかった。

すでに遊離している古銭は別としたが、「ひとさし」の状態で見納されていたので、その単位を重視することにした。口縁部に近い順から1・2・3・・・と取り上げ、66さしを数えた。その際、分離していた銭も不明として扱い、不明は当初のものと合わせて63枚となった。他は藁でまとめた状態で埋納されていた。ただ、

7さしと8さしは銹着しており、2連が纏められていた可能性もある。それ以外は1さしで入れられていたものと思われる。縞単位として取り上げ、さらにその状況で写真撮影(図版123下)を行ったのち、1縞から順に1枚ごとに離す作業を行った。その際、片側から順に取り外していった。原則的には結び目の小さい方から1・2・3・・・と数え、第1縞の1枚目というふうに銭の番号を与えた。(第1縞の1枚目を記す際に、以下1-1と略記することとする。他の銭も同様に略記する。)縞単位として保存しておくことにも十分に歴史性を感じるが、それ以上の価値が考えられたので、すべてについて分離することにした。個々について銭名を判読することと、縞として1本に包含されている銭に意味があるのかなどを考えるのも重要であろうと思われ、取り外し作業を行った。

すべて、藁で纏められており、布や繊維質の糸は使われていない。また、藁には稲藁が付いているものも含まれている。基本的には右捻りの藁縄であるが、すべてを確認出来るほど残存状態は良好ではなかった。銭穴に縄を通して両端を結んで縞としている。両端のいずれから先に結んだかの先後関係は不明で、判断出来ない。結び目の大きさに差がある



第184図 銭埋納遺構容器

南台遺跡 A地区

第6表 南台遺跡出土古錢一覽表

No.	錢貨名	王朝	鑄年(西曆)	枚數			合計
				楷書 a	行書 b	篆書 c	
1	五銖	漢	元狩5年(B.C.118)		2		2
2	開通元寶	唐	武德元年(621)	521	2	8	531
3	貞元重寶	唐	乾元2年(759)	38	0	0	38
4	乾德元寶	前蜀	王衍乾德元年(919)	1	0	0	1
5	漢通元寶	後漢	乾祐元年(948)	1	0	0	1
6	周通元寶	後周	顯德2年(955)	1	0	0	1
7	唐國通寶	南唐	中興2年(959)	1	0	9	10
8	宋通元寶	北宋	建隆元年(960)	18	0	0	18
9	太平通寶	北宋	太平興國元年(976)	66	0	0	66
10	淳化元寶	北宋	淳化元年(990)	24	33	0	57
11	至道元寶	北宋	至道元年(995)	28	43	13	84
12	咸平元寶	北宋	咸平元年(998)	113	0	0	113
13	景德元寶	北宋	景德2年(1005)	123	20	2	145
14	祥符元寶	北宋	大中祥符元年(1008)	134	32	0	166
15	祥符通寶	北宋	大中祥符元年(1008)	84	5	0	89
16	天禧通寶	北宋	天禧元年(1017)	130	3	0	133
17	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	164	9	130	303
18	明道元寶	北宋	明道元年(1032)	20	3	11	34
19	景祐元寶	北宋	景祐元年(1034)	68	5	37	110
20	皇宋通寶	北宋	寶元2年(1039)	443	12	384	839
21	至和元寶	北宋	至和元年(1054)	46	4	28	78
22	至和通寶	北宋	至和元年(1054)	13	0	18	31
23	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年(1056)	24	3	24	51
24	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年(1056)	100	8	49	157
25	治平元寶	北宋	治平元年(1064)	54	3	64	121
26	治平通寶	北宋	治平元年(1064)	15	0	6	21
27	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	291	11	284	586
28	元豐通寶	北宋	元豐元年(1078)	0	393	335	728
29	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086)	34	288	255	577
30	紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094)	15	113	132	260
31	元符通寶	北宋	元符元年(1098)	9	42	44	95
32	聖宋元寶	北宋	建中靖國元年(1101)	20	100	125	245
33	大觀通寶	北宋	大觀元年(1107)	74	0	0	74
34	政和通寶	北宋	政和元年(1111)	169	0	115	284
35	宣和通寶	北宋	宣和元年(1119)	10	0	14	24
36	建炎通寶	南宋	建炎元年(1127)	0	1	0	1
37	紹興元寶	南宋	紹興元年(1131)	2	0	0	2
38	正隆元寶	金	正隆3年(1158)	10	0	0	10
39	淳熙元寶	南宋	淳熙元年(1174)	42	0	0	42
40	紹熙元寶	南宋	紹熙元年(1190)	10	0	0	10
41	慶元通寶	南宋	慶元元年(1195)	12	0	0	12
42	嘉泰通寶	南宋	嘉泰2年(1202)	12	0	0	12
43	開禧通寶	南宋	開禧元年(1205)	5	0	0	5
44	嘉定通寶	南宋	嘉定元年(1208)	36	0	0	36
45	紹定通寶	南宋	紹定3年(1230)	14	0	0	14
46	嘉熙通寶	南宋	嘉熙元年(1237)	2	0	0	2
47	淳祐元寶	南宋	淳祐2年(1242)	10	1	0	11
48	皇宋元寶	南宋	寶祐3年(1258)	2	0	0	2
49	開慶通寶	南宋	開慶元年(1259)	2	0	0	2
50	景定元寶	南宋	景定元年(1260)	9	0	0	9
51	咸淳元寶	南宋	咸淳2年(1266)	20	0	0	20
52	至大通寶	元	至大2年(1310)	2	0	0	2
53	私鑄錢				1		1
54	不明				118		118
	合計			3,042	1,134	2,087	6,384

南台遺跡 A地区

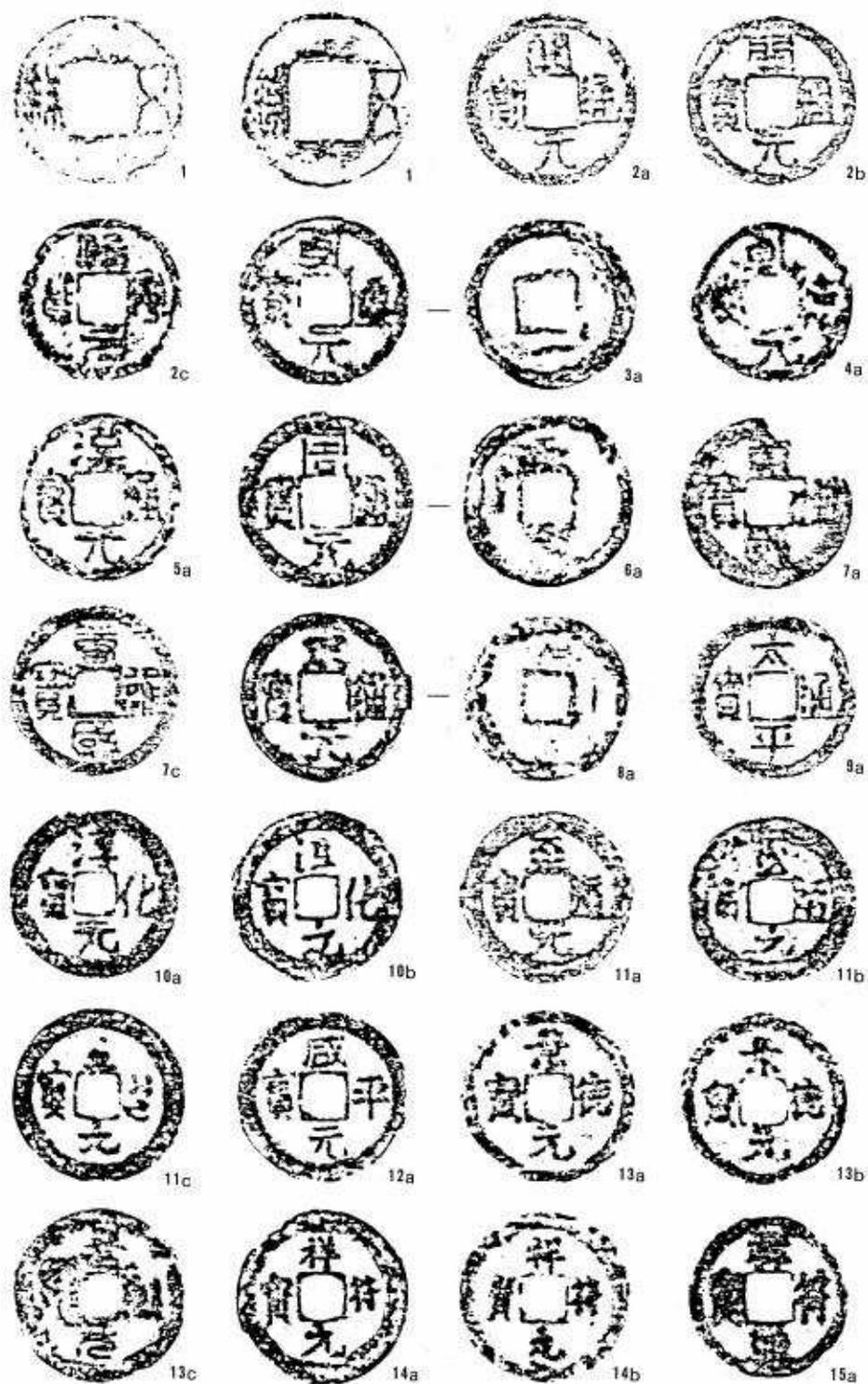
第7表 南台遺跡「一纏」ごとの銭銘一覧表

	銭名				
	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 9
1	不 明	熙寧元寶	聖宋元寶	天聖元寶	不 明
2	祥符元寶	元豐通寶	元豐通寶	皇宋通寶	天聖元寶
3	皇宋通寶	景德元寶	元豐通寶	至道元寶	嘉祐通寶
4	元祐通寶	熙寧元寶	淳化元寶	元豐通寶	咸平通寶
5	正隆元寶	至和元寶	政和通寶	皇宋通寶	元祐通寶
6	熙寧元寶	五 銖	嘉祐元寶	元祐通寶	元祐通寶
7	元豐通寶	聖宋元寶	皇宋通寶	元豐通寶	元豐通寶
8	元豐通寶	至和元寶	景祐元寶	皇宋通寶	元祐通寶
9	景德元寶	元祐通寶	天禧通寶	聖宋元寶	唐国通寶
10	元符通寶	皇宋通寶	政和通寶	天聖元寶	天禧通寶
11	天禧通寶	天聖元寶	大觀通寶	景德元寶	元祐通寶
12	開通元寶	紹聖元寶	皇宋通寶	元豐通寶	皇宋通寶
13	嘉祐通寶	元豐通寶	皇宋通寶	元豐通寶	天祐通寶
14	開通元寶	景德元寶	天禧通寶	元豐通寶	開通元寶
15	政和通寶	聖宋元寶	開通元寶	熙寧元寶	皇宋通寶
16	皇宋通寶	開通元寶	嘉祐通寶	熙寧元寶	淳熙元寶
17	嘉定通寶	嘉祐通寶	政和通寶	天禧通寶	政和通寶
18	開通元寶	嘉祐通寶	皇宋通寶	開通元寶	至和通寶
19	太平通寶	嘉祐通寶	天聖元寶	皇宋通寶	開通元寶
20	紹聖元寶	開通元寶	元豐通寶	冬元重寶	元祐通寶
21	聖宋元寶	不 明	元豐通寶	天聖元寶	開通元寶
22	熙寧元寶	不 明	嘉祐元寶	元豐通寶	政和通寶
23	軋元重寶	元豐通寶	元豐通寶	皇宋通寶	皇宋通寶
24	開通元寶	至道元寶	天聖元寶	皇宋通寶	元符通寶
25	元豐通寶	皇宋通寶	元豐通寶	咸平元寶	開通元寶
26	元豐通寶	熙寧元寶	紹聖元寶	聖宋元寶	元豐通寶
27	熙寧元寶	熙寧元寶	天聖元寶	紹聖元寶	元祐通寶
28	聖宋元寶	嘉祐元寶	紹聖元寶	治平元寶	皇宋通寶
29	治平元寶	元豐通寶	至道元寶	明道元寶	景祐元寶
30	元豐通寶	聖宋元寶	正隆元寶	熙寧元寶	元豐通寶
31	嘉祐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	開通元寶	天聖元寶
32	皇宋通寶	至和通寶	開通元寶	熙寧元寶	元符通寶
33	嘉祐通寶	政和通寶	元豐通寶	天聖元寶	景德元寶
34	元祐通寶	熙寧元寶	淳熙元寶	開通元寶	至和元寶
35	熙寧元寶	天聖元寶	嘉祐通寶	至道元寶	元豐通寶
36	紹聖元寶	天禧通寶	開通元寶	開通元寶	治平元寶
37	熙寧元寶	熙寧元寶	祥符通寶	開通元寶	熙寧元寶
38	至道元寶	開通元寶	政和通寶	開通元寶	不 明
39	嘉祐通寶	熙寧元寶	政和通寶	元符通寶	皇宋通寶
40	元豐通寶	正隆元寶	景祐元寶	元祐通寶	大觀通寶
41	不 明	元豐通寶	熙寧元寶	熙寧元寶	熙寧元寶
42	元豐通寶	熙寧元寶	大觀通寶	聖宋元寶	景祐元寶
43	元豐通寶	天聖元寶	開通元寶	皇宋通寶	熙寧元寶
44	淳熙元寶	開通元寶	嘉定通寶	元祐通寶	嘉定元寶
45	元豐通寶	治平元寶	元豐通寶	不 明	元祐通寶
46	慶元通寶	皇宋通寶	元祐通寶	元符通寶	元豐通寶
47	元祐通寶	至和元寶	政和通寶	元祐通寶	政和通寶
48	政和通寶	元豐通寶	紹聖元寶	皇宋通寶	熙寧元寶
49	景德元寶	元祐通寶	元符通寶	至和元寶	祥符通寶
50	元豐通寶	嘉祐元寶	聖宋元寶	天聖元寶	紹聖元寶
51	元祐通寶	開通元寶	元豐通寶	熙寧元寶	天禧通寶

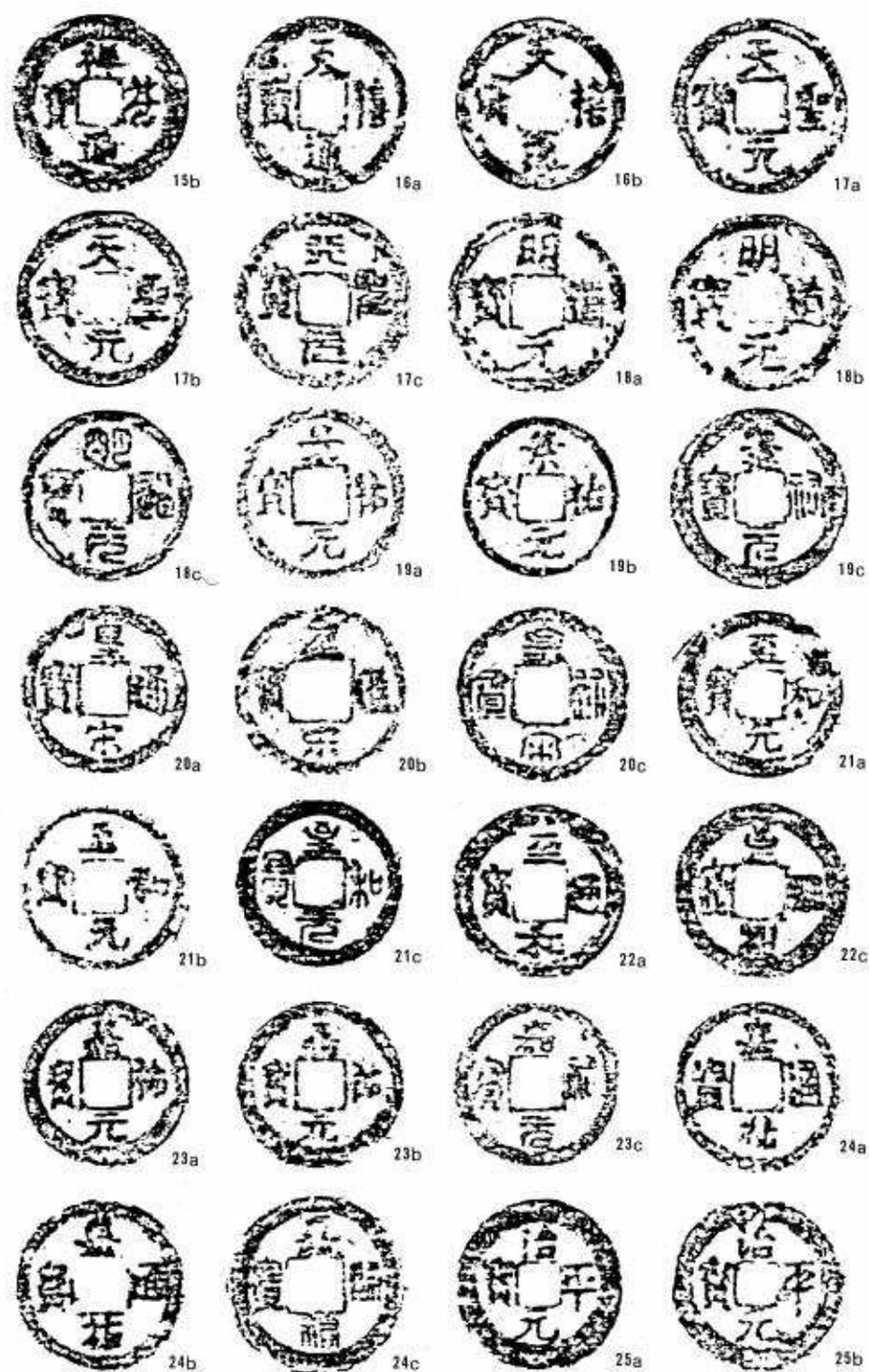
南台遺跡 A地区

	錢 名				
	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 9
52	不 明	開通元寶	開通元寶	政和通寶	淳化元寶
53	元豐通寶	開通元寶	祥符元寶	紹聖元寶	祥符元寶
54	天禧通寶	元豐通寶	元豐通寶	紹聖元寶	元豐通寶
55	天禧通寶	開通元寶	政和通寶	嘉祐元寶	政和通寶
56	天禧通寶	天聖元寶	祥符元寶	元祐通寶	宋元通寶
57	熙寧元寶	元祐通寶	景德元寶	皇宋元寶	元祐通寶
58	熙寧元寶	熙寧元寶	大觀通寶	皇宋元寶	政和通寶
59	熙寧元寶	嘉祐通寶	開通元寶	至道元寶	慶通元寶
60	熙寧元寶	元豐通寶	皇宋通寶	皇宋通寶	元豐通寶
61	元豐通寶	元豐通寶	元豐通寶	政和通寶	至道元寶
62	元豐通寶	天聖元寶	至和元寶	天聖元寶	皇宋通寶
63	至和通寶	政和通寶	治平通寶	元祐通寶	政和通寶
64	天禧通寶	天禧通寶	淳熙元寶	開通元寶	元豐通寶
65	皇宋通寶	皇宋通寶	開通元寶	太平通寶	政和通寶
66	元豐通寶	紹熙元寶	元祐通寶	皇宋通寶	開通元寶
67	皇宋通寶	大觀通寶	元祐通寶	祥符元寶	天聖元寶
68	治平元寶	天聖元寶	元豐通寶	開通元寶	至道元寶
69	祥符元寶	軋元重寶	政和通寶	皇宋通寶	天聖元寶
70	祥符元寶	天聖元寶	嘉定通寶	紹聖元寶	至道元寶
71	元祐通寶	嘉祐通寶	皇宋通寶	元祐通寶	元豐通寶
72	? 道元寶	天禧通寶	不 明	景德元寶	元豐通寶
73	熙寧元寶	天聖元寶	聖宋元寶	元豐通寶	大觀通寶
74	聖宋元寶	元祐通寶	至和元寶	元豐通寶	至和通寶
75	元豐通寶	天聖元寶	咸平元寶	元符通寶	天聖元寶
76	元豐通寶	天聖元寶	元豐通寶	太平通寶	不 明
77	元豐通寶	不 明	皇宋通寶	元符通寶	開通元寶
78	政和通寶	至和元寶	元祐通寶	祥符元寶	熙?元寶
79	開通元寶	至和元寶	元祐通寶	聖宋元寶	咸平元寶
80	皇宋通寶	皇宋通寶	皇宋通寶	元祐通寶	元祐通寶
81	嘉定通寶	淳化元寶	熙寧元寶	嘉祐通寶	咸平元寶
82	天聖元寶	天聖元寶	元豐通寶	景德元寶	天聖元寶
83	政和通寶	至和元寶	祥符通寶	軋重元寶	祥符通寶
84	皇宋通寶	皇宋通寶	熙寧元寶	嘉祐通寶	
85	聖宋元寶	元豐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	
86	元豐通寶	熙寧元寶	景德元寶	元符通寶	
87	熙寧元寶	至和元寶	政和通寶	紹聖元寶	
88	元祐通寶	治平元寶	聖宋元寶	天聖元寶	
89	嘉祐通寶	淳化元寶	皇宋通寶	開通元寶	
90	皇宋通寶		元祐通寶	咸平元寶	
91	開通元寶		不 明		
92	元祐通寶		皇宋通寶		
93	聖宋元寶		皇宋通寶		
94	嘉祐通寶		政和通寶		
95	元祐通寶		嘉定通寶		
96	治平通寶		嘉祐通寶		
97	政和通寶		紹聖元寶		
98	太平通寶		熙寧元寶		
99			元祐通寶		
100			元豐通寶		
101			政和通寶		

南台遺跡 A地区

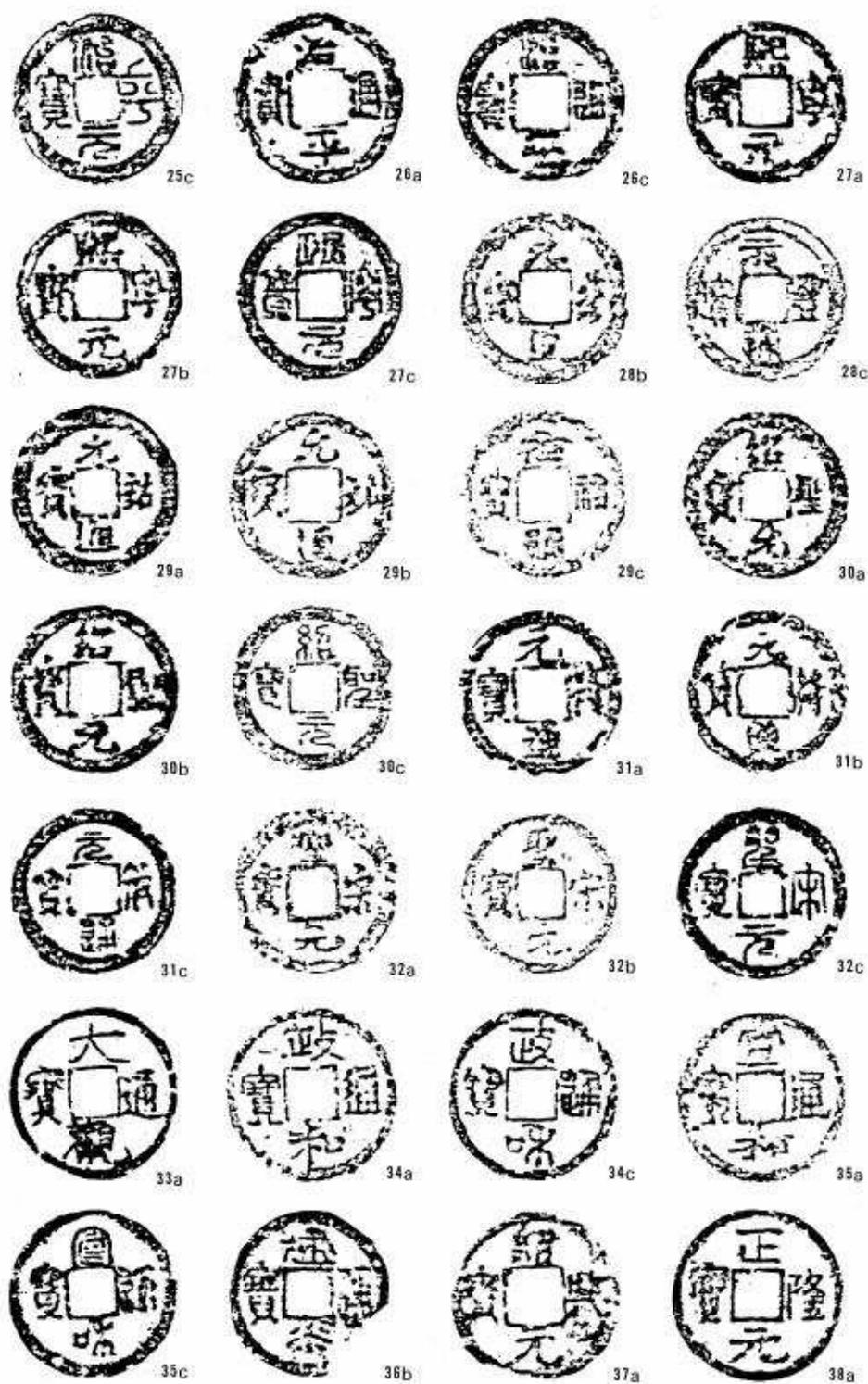


第185圖 出土古錢拓影(1)

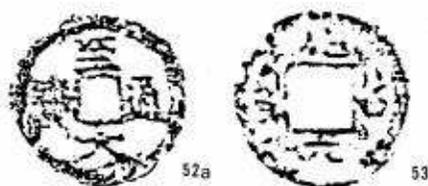


第186圖 出土古錢拓影(2)

南台遺跡 A地区



第187圖 出土古錢拓影(3)



第189図 出土古銭拓影(5)

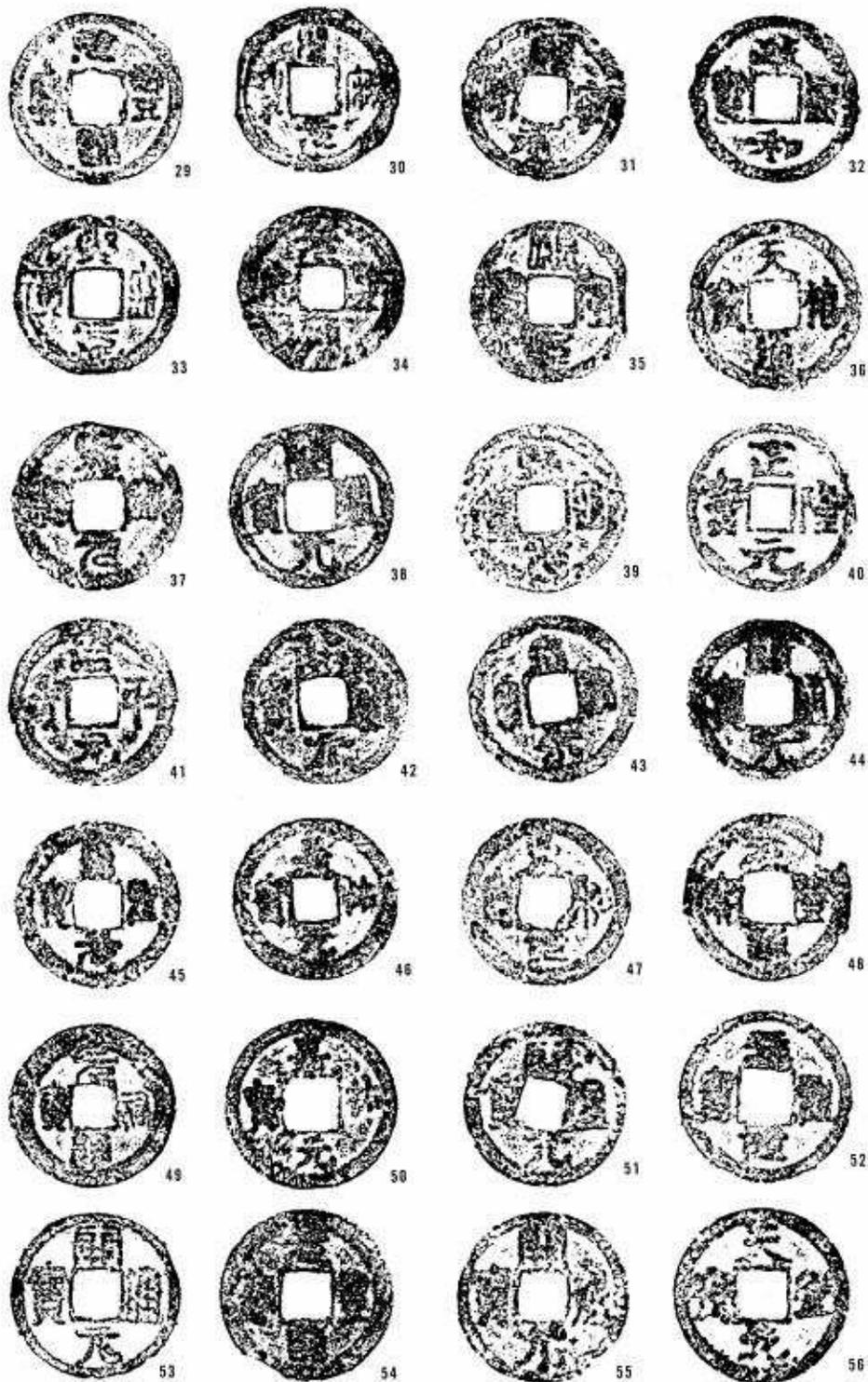
ことは明らかである。分類の際には便宜的に結び目の小さい方から数えた。

次に古銭の表裏についても、すべてについて確認したが、明らかな規準が序列は考えられなかった。1 縷目だけを例とすれば、
「裏・表・裏・表・表・表・表・表・表・

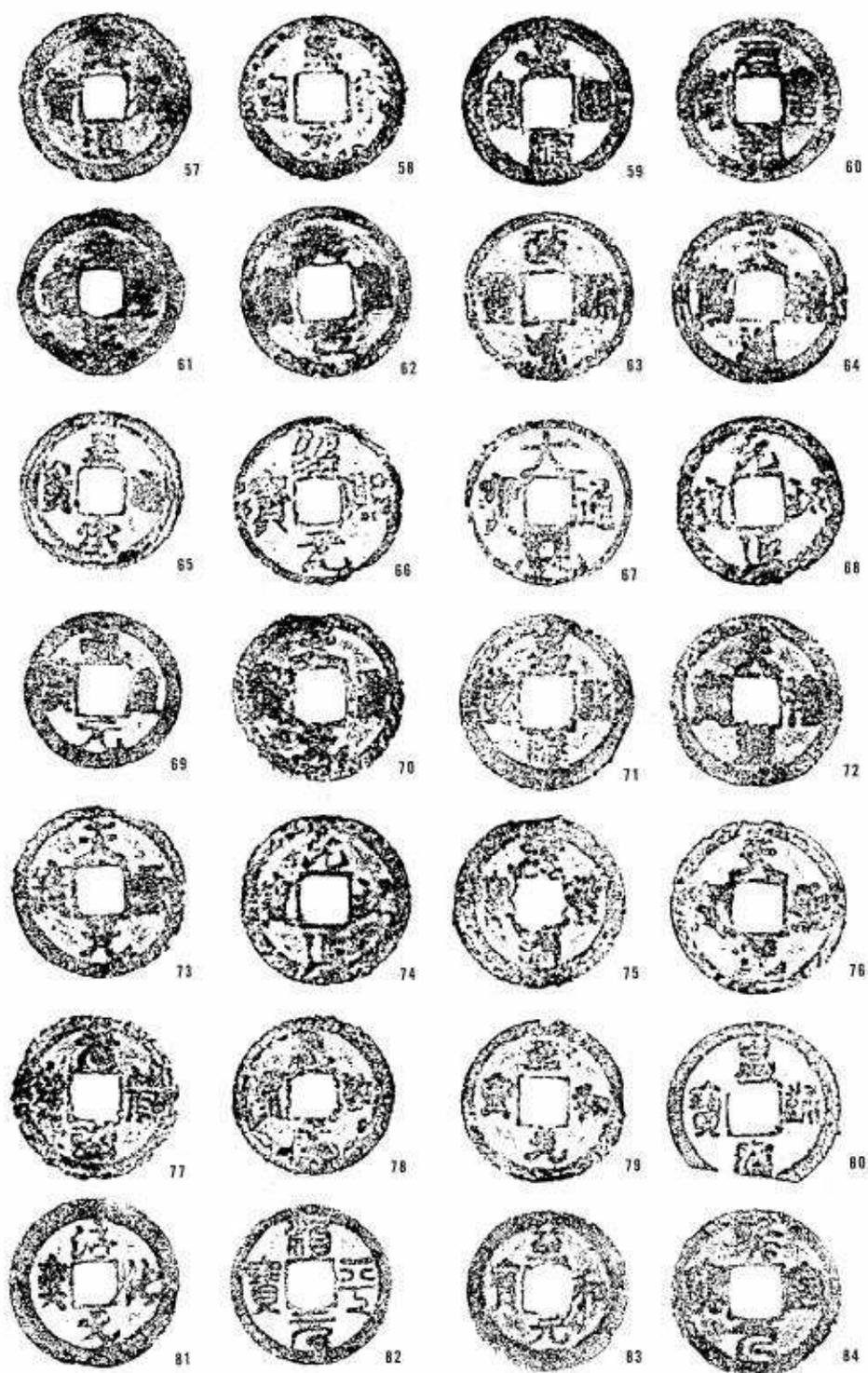
第 8 表 南台遺跡「一縷」ごとの新旧銭銘一覧表

No.	最古銭	最新銭	No.	最古銭	最新銭	No.	最古銭	最新銭
1	開通元寶	宣和通寶	23	開通元寶	嘉泰通寶	45	開通元寶	紹定通寶
2	開通元寶	政和通寶	24	開通元寶	慶元通寶	46	開通元寶	景定元寶
3	開通元寶	嘉定通寶	25	開通元寶	咸淳元寶	47	開通元寶	咸淳元寶
4	五 銖	紹熙元寶	26	開通元寶	嘉定通寶	48	開通元寶	咸淳元寶
5	開通元寶	嘉定通寶	27	開通元寶	景定元寶	49	開通元寶	咸淳元寶
6	開通元寶	政和通寶	28	開通元寶	嘉定通寶	50	開通元寶	宣和通寶
7	開通元寶	宣和通寶	29	開通元寶	咸淳元寶	51	開通元寶	咸淳元寶
8	開通元寶	紹熙元寶	30	開通元寶	嘉定通寶	52	開通元寶	景定元寶
9	開通元寶	景定元寶	31	開通元寶	紹定通寶	53	開通元寶	咸淳元寶
10	開通元寶	紹定通寶	32	開通元寶	咸淳元寶	54	開通元寶	政和通寶
11	開通元寶	嘉定通寶	33	開通元寶	正隆元寶	55	開通元寶	咸淳元寶
12	開通元寶	嘉定通寶	34	開通元寶	咸淳元寶	56	開通元寶	咸淳元寶
13	開通元寶	淳熙元寶	35	開通元寶	紹定通寶	57	開通元寶	紹定通寶
14	開通元寶	正隆元寶	36	開通元寶	嘉泰通寶	58	開通元寶	慶元通寶
15	開通元寶	紹定通寶	37	開通元寶	淳熙元寶	59	開通元寶	咸淳元寶
16	開通元寶	咸淳元寶	38	開通元寶	嘉泰通寶	60	五 銖	咸淳元寶
17	開通元寶	淳熙天寶	39	開通元寶	紹定通寶	61	開通元寶	咸淳元寶
18	開通元寶	紹定通寶	40	開通元寶	紹定通寶	62	開通元寶	淳熙元寶
19	開通元寶	嘉定通寶	41	開通元寶	景定元寶	63	開通元寶	紹定通寶
20	開通元寶	咸淳元寶	42	開通元寶	嘉泰通寶	64	開通元寶	嘉定通寶
21	開通元寶	嘉定通寶	43	開通元寶	嘉定通寶	65	開通元寶	淳熙元寶
22	開通元寶	咸淳元寶	44	開通元寶	嘉定通寶	66	開通元寶	開禧通寶

南台遺跡 A地区



第191圖 第3編古錢拓影(2)



第192図 第3 緒古銭拓影(3)

裏・裏・表・表・表・裏・表・・・・」となり、90枚のうち表51、裏39となる。緡の頭尾が逆なら数字は逆転する。順序に配列の意味があるようには思われず、銭の表裏は意識されていなかったものと思われる。藁に通す時に、手にしたまま順に通しただけと考えられる。

緡内の銭種であるが、第7表のように5緡について一覧表を掲げたが、やはり銭名にも意味がないように思われる。偶然、開通元寶が多い緡があるが、その緡に他の特徴を指摘することは出来ない。結論的には、銭名にも意図がないように思われる。緡ごとに含まれる銭の最古と最新銭を見ていると、第8表のように開通元寶を最古とし、咸淳元寶を最新とする組み合わせが16緡もあるように緡ごとの特徴は指摘出来ない。南宋銭が含まれる緡はまちまちで、南宋銭だけで構成される緡はない。これらのことから、銭種にも意味がないように思われる。

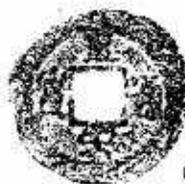
すでに他報告などで言われていることと、同じ結論しか得られなかったことになる。1緡ごとに分け、1枚ずつ取り外して見ていったが、銭種・銭名に意味がなく、1緡として通用したものと考えて大過ないものと思われる。また、当然書体も関係ないものである。その際に銭の表裏を合わすこともなく、古銭の数というより重さに問題があったように思われる。このような作業は、兌換紙幣を使用する現代人の慣習からの発想によるものである。作業の結果、銭種・銭名に意味がなく、緡として使われていたという1例を追加したという価値が見出されただけである。



85



86



87

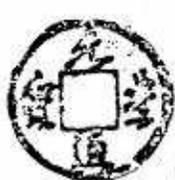


88



89

古銭は、総数6384枚である。銭名を分類すると初鑄年で分 第193図 第3緡古銭拓影(4)けると漢代の五銖から元代の至大通寶まで55種確認された。書体も加えて分類すると106種になる。王朝別に分けると前漢が五銖1種、唐が開通元寶・乾元重寶の2種、五代十国の



1



2

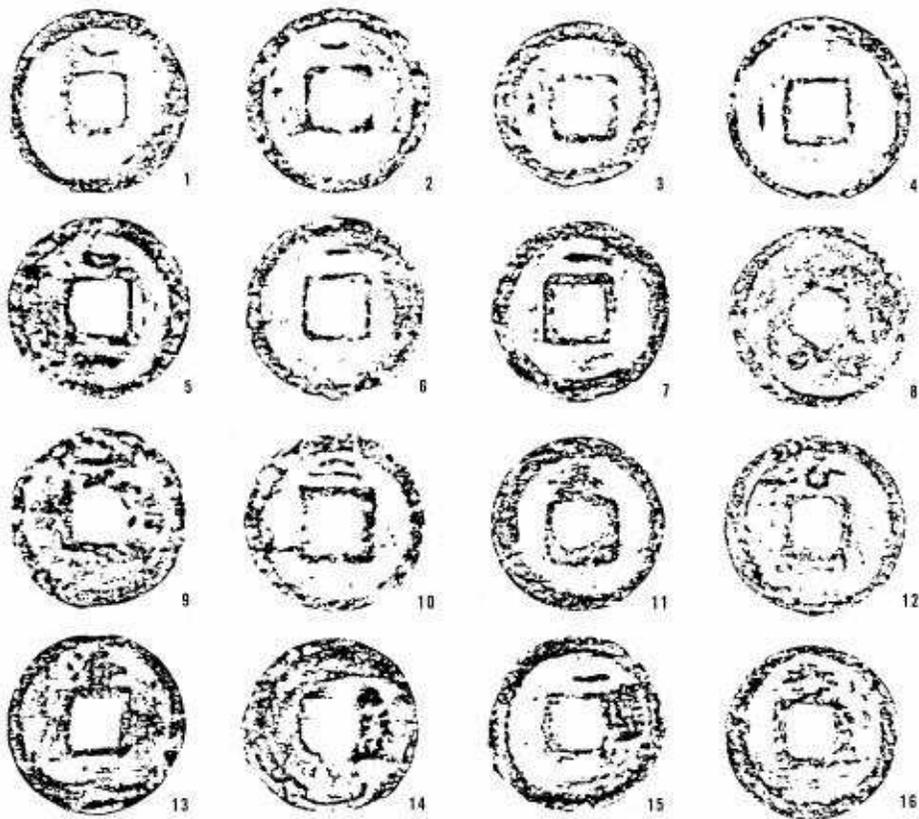


3



4

第194図 元豊通寶にみる范の違い



第195図 開通元寶の背文の種類

乾徳元寶・漢通元寶・周通元寶・唐国通寶の4種、北宋が宋通元寶から宣和通寶までの31種、南宋が建炎通寶から咸淳元寶までの15種、金が正隆通寶の1種、元が至大通寶1種である。日本をはじめ朝鮮・琉球の古銭は見られない。ただ、1枚だけであるが、銭名が読めず私鑄銭と思われる銭が1枚含まれている。現時点で、いつの時期で、どこで鑄造されたかを調べられなかったため、国内産の可能性も残されている。現時点で不明として扱うならば、中国銭に限られることになり、その枚数は北宋銭5490枚、唐銭569枚、南宋銭182枚となり、割合にすると北宋銭86.0%、唐銭8.9%、南宋銭2.9%、その他2.2%となる。北宋銭が圧倒的で、次に唐銭・南宋銭と続いている。銭種を個々に見てみると、最も多いのが皇宋通寶の839枚、次いで元豊通寶の729枚、開通元寶の531枚である。1枚だけのものは、前割の乾徳元寶をはじめ、漢通元寶(後漢)・周通元寶(後周)・建炎通寶の4種である。

書体は、楷書・行書・宋書・隸書・篆書に分けられようが、細別が困難な銭もあったので、楷・行・篆書の3つに分けた。楷書が全体の半数を占める。行書に分けた中に他の書体が入っていることは否めない事実である。皇宋通寶のように明らかに隸書と判断出来るものもあるが、他の詳細について分類出来なかったため、行書として統括した。担当者の

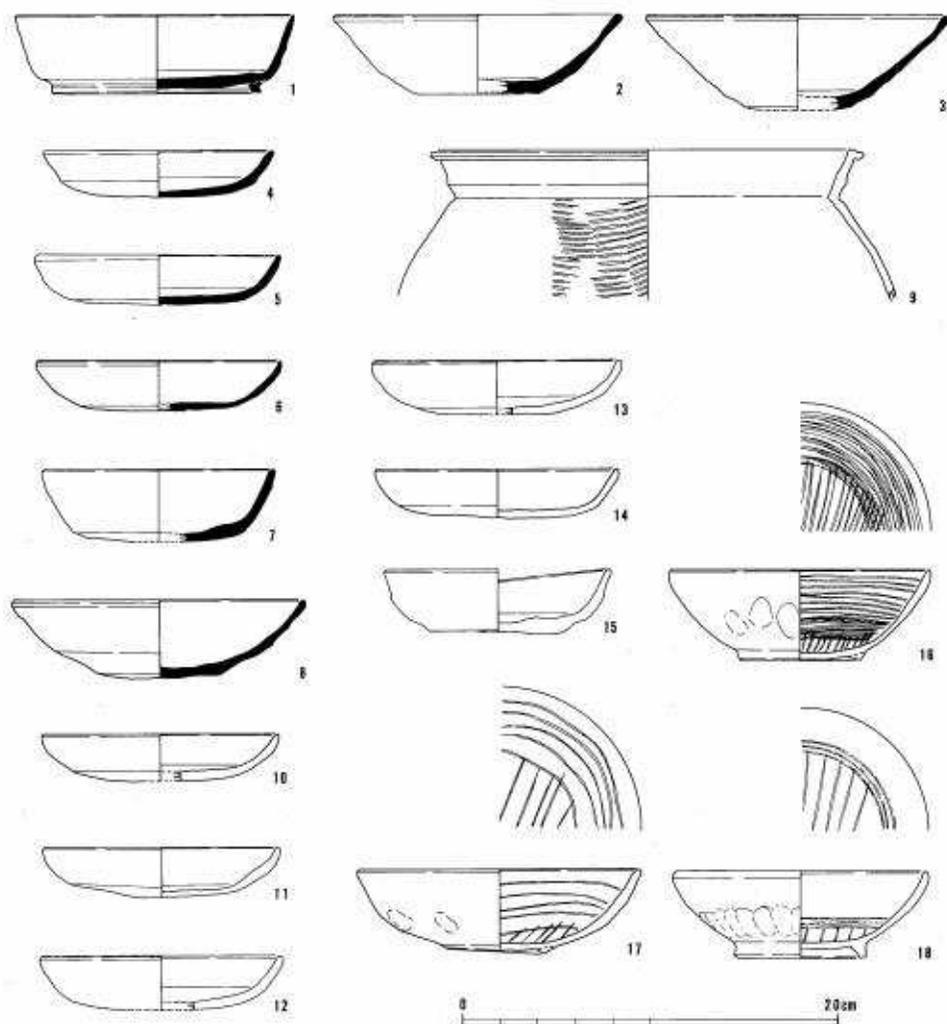
力量不足によるため、今後細分類を行う必要があろうと思われ、残された課題である。

次に、加工を加えられたものは認められず、欠けた部分についても後世の意図が働いたか否か不明である。ただ、1枚だけであるが、銭名が文様化している私鑄銭が含まれている。

背文があるものは、開通元寶を筆頭に南宋銭に限られる。開通元寶では、オーソドックスな月文・星文をはじめ、文字が鑄出されている。それらから、ある程度鑄造地も推定出来る。文字は、「洛」「藍」「元」「二」「六」「益」があり、「藍」には月文を伴うものも存在する。「洛」は洛陽、「藍」は関内道（陝西省）藍田、「益」は劍南道（四川省）益州が鑄造地と考えられている。南宋銭の背文は鑄造年号である。

④溝

時期に差はあろうが溝を7本検出している。SD07以外はほぼ同じ位置に同じ主軸を持つ



第196図 溝1出土土器(1)

て掘られている。

溝1 (SD01)

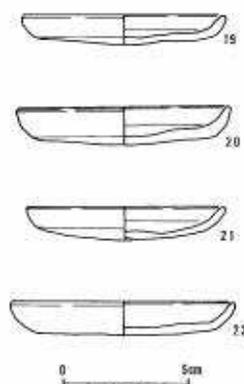
調査区南側を東西に走る溝である。直線ではなく緩やかな弧を描いて西へ伸びており、南西隅近くで90°近く北へ曲がって終息している。幅は中央部分が最も狭く0.7mで、最大幅1.4m前後の規模である。地形的にも東側へ下がっているが、西から東へ流れていたものと思われる。西端は0.25mの深さで、東端は、0.3mの深さを測る。ただ、標高差を測れば、西端の底と東端の底は0.6mの相違がある。埋土は灰褐色土で、新しい段階の遺構である。出土遺物は中央部分に集中して出土して

いる。一部奈良時代の遺物も入っているが、平安時代末～鎌倉時代前半の時期と考えられる。

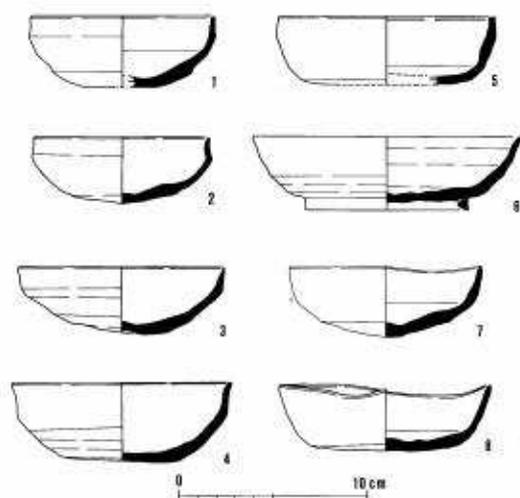
出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器がある。土師器が最も多く、次いで須恵器である。図化したものは22点で土師器10点、須恵器9点、瓦器3点である。土師器は皿・鍋で、皿は小皿と中皿に分けられる。小皿は形態は僅かに異なるが、技法的には同じである。ユビ成形したのち口縁部のみヨコナデで仕上げるものである。白っぽい色調を呈しており、焼成はやや甘い。(19)で口径8.1cm、器高1.2cmを測る。中皿は5点出土しており、口径は12cm前後である。全体的に焼成はやや甘く、色調も灰白色～淡褐色と淡い色調である。ナデで全体を成形・調整しているが、(10)(13)(14)はヨコナデで仕上げている。(10)(13)は口縁部のみであるが、(14)は全体を丁寧に仕上げている。鍋(9)は淡褐色で胎土にチャート・酸化粒を含む。口径21.4cm、残存高8.0cmを測る。口縁端部は外方へ大きくつまみ出しており、頸部の稜線は明瞭である。外面は右上がりのこの時期にしては細かいタタキで成形している。

須恵器は杯・碗で、(1)は奈良時代に遡る杯である。外方に張り出しぎみの退化した輪高台が付いている。底部はへら切りののち高台を付けている。(4)～(7)も杯で(7)だけ3.8cmと高いが、他は2.5～3.0cmと器高は低い。へら切りののちナデで仕上げており、口縁部はヨコナデで仕上げている。

(2)(3)(8)は碗で、糸切りで切り離



第197図 溝1出土土器(2)



第198図 遺構出土土器

南台遺跡 A地区

しており底と体部との稜線は明らかでない。

ヨコナデで仕上げしており、底部内面は不定方向のナデで仕上げている。色調は灰白色で、焼成・胎土は良好である。(2)は口径15.0cm、器高4.2cm、(3)は口径15.6cm、器高5.0cm、(8)は口径15.4cm、器高4.2cmを測る。

(16)～(18)の3点は瓦器で、(16)(17)は退化した断面三角形の輪高台を持つ。体部内面は平行の暗文を見込み部分は1方向の直線の暗文が施されている。ユビ成形ののち、口縁部はヨコナデで仕上げる。(16)は口径13.6cm、器高4.8cm、(17)は口径14.8cm、器高4.5cmを測る。(18)は口径13.2cm、器高4.6cm、底径7.0cmを測る。高台は高さ0.7cmと高く逆台形をしている。外面の指圧痕が良く残っており、ヨコナデは口縁部のみ施されている。

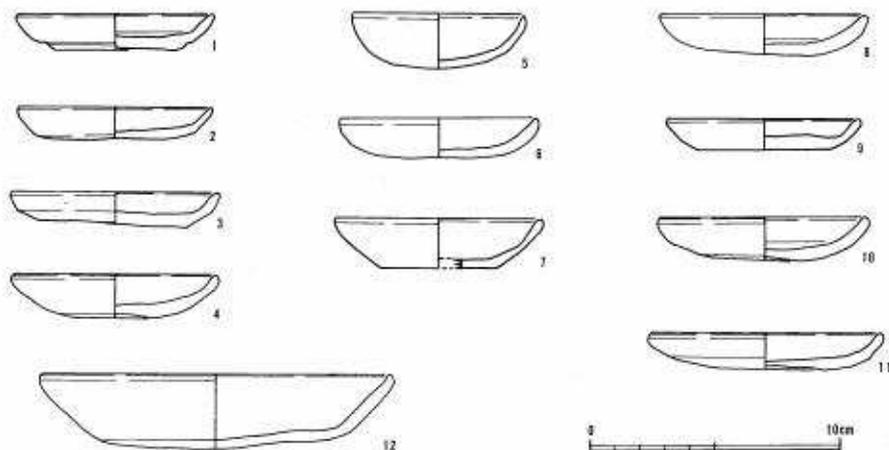
(1)をはじめ古い段階の土器も出土しているが、新しい段階を示す(2)(3)(8)(9)(16)～(22)などが遺構(SD01)の時期の遺物であろう。埋土も新しい埋土で、平安時代末～鎌倉時代前半の時期が考えられる。

溝2 (SD02)

SD01の北側をほぼ平行に築かれた溝で、西側は自然に消滅し、東側は水田の地下げによって切られている。残存長16.2mを測る溝で、直線的から緩やかに弧を描いている。幅は1.0m、深さは0.3m前後である。SD01に比べて出土遺物は少量であった。

溝3 (SD03)

SD01・02と平行に存在する溝で、SD02と同じく西側は自然に終息し、東側は水田の地下げによって残っていない。残存長14.2m、最大幅で2.1mで、他は1.0m前後である。西側は1度上端が見られ、細くなってさらに3.2m続いている。深さは0.45mを測る。中央部北肩には小さなピットが16基見られるが、径0.1～0.2mと小さく後世の杭跡かと思われる。溝内からは須恵器、土師器、瓦器が出土しており、SD01と同時期の遺構と思われる。



第199図 A地区出土土器(1)

溝4 (SD04)

SD03の延長上にあり、水田の地下げによって、分断されていることから同一の溝かどうか断定出来ない。SD04と報告するが、SD03と同じ溝の可能性が高い溝である。直接切り合い関係はないが、SD02を切っている可能性が高く、SD01とは同時期かと思われる。残存長6.5mを測り、深さは0.15~0.2mと浅い。ただ、レベル的にはSD03よりも底は低くなっている。

溝5 (SD05)

SD01~04と直交する主軸を持つ小さな溝である。長さ3.0mと短く、中央をSD06に切られており南北に分断されている。幅は0.3mで、深さも0.1mと浅いものである。

溝6 (SD06)

調査地中央部分をL字形に屈曲した溝である。南北6.9mに伸び、直角に東へ曲がり14.2m伸びて水田の地下げによって消滅している。溝内には角礫を詰めており近代の暗渠と思われる。

溝7 (SD07)

東西方向に伸びる溝で、幅0.3m、残存長4.0mを測る。深さも0.15mと浅い溝である。

⑤柵1 (SA01)

調査区南東部分に南北方向に並んだピット群で、北側はSD01によって切られている。現代の電柱によっても一部損壊を受けている。溝を伴う柵で、幅0.6mで残存長7.1mを測る。溝は0.1~0.2mの深さで底中央に径0.1m前後の小型のピット列が見られる。ピットは18基確認しており、溝を伴う柵列と考えられる。主軸方向はN14°Wで、SD01などと直交している。

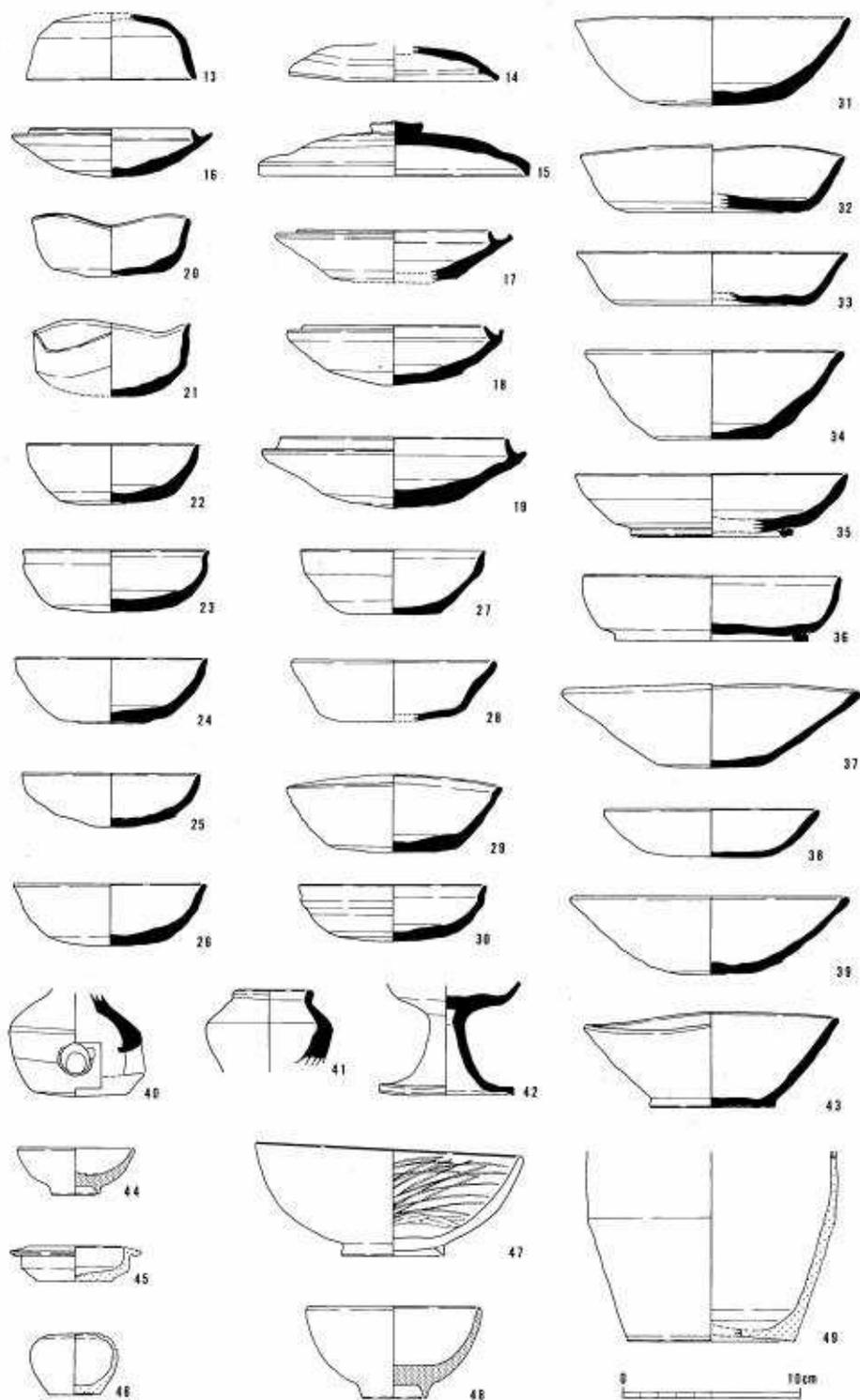
⑥小結

A地区は、南台遺跡の最も広い部分を占めている。遺構は、建物跡・土壇・銭埋納遺構・溝・ピットなどである。ピットは多数検出している割に建物跡が少ないことが惜しまれる。遺構の時期幅も出土土器から古墳時代後期から室町時代までの幅がある。遺構の中には墓と考えられる遺構もあることから、集落跡内に墓が存在したものと思われる。細かい時期の検討が可能なら、生活の場から墓地へと変化したかもしれない。調査地南側に溝が数条あり、集落を画する遺構と考えられる。その内側である北側に遺構は広がっている。溝の内側に建物跡・土壇・土壇墓などが築かれている。外側には銭埋納遺構が見られる。

出土遺物の大半は、溝からの出土である。他に遺物が纏まっているのは、墓と考えられる遺構と銭埋納遺構で、他はほとんど遺物は出土していない。

遺跡の性格は1単位の集落と考えるのが妥当かと思われるが、性格の明らかな遺構の数が僅少であることから、検討しがたい面がある。周辺の確認調査では、遺構をはじめ包含

南台遺跡 A地区



第200图 A地区出土土器(2)

層も確認されていないことから、大規模な遺跡とは考えられない。B地区の古墳時代末の遺構、D地区の古墳～鎌倉時代の遺構との関連も直接的には結びつかない。ただ、溝を数条ほぼ同じ位置に同じ方位で穿っていることは、当地区の遺構の性格を考える上の一助になろうかと思われる。発掘で確認した錢埋納遺構も意義深いものである。C地区寄りには遺構が認められないことから、遺跡を画する溝の外側に銭を埋納していたことになる。遺跡内での蓄銭例として重要であるが、出土位置が遺跡（集落）外という点の一つの新しい視点となろう。集落での出土関係が興味深く、今までの錢埋納遺構が集落に伴って検出されていないことから貴重な調査例となろう。

4. B地区

南台遺跡の西寄りに位置し、南西から北東方向への緩斜面上に立地する。確認調査でピットを数基検出したことから、集落跡の可能性を考えて全面調査を実施した地点である。

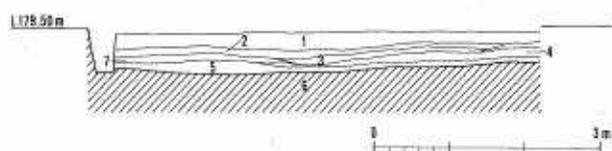
(1)調査結果

確認調査の結果、水田1枚の約340㎡を対象とした。確認調査では、最も出土遺物量が多く、またピット5基と遺構の密度も高かった。しかし、全面調査の結果では、中央に土壇1基と性格不明のピット20数基を検出したにすぎなかった。ピットの中には、明らかに柱痕が認められるピットもあったが、建物を復原するには至らなかった。そのため、周辺地域の高い部分である南から西へかけても確認のためのグリッドを設定したが、遺構は認められなかった。出土遺物量が多く、時期も同時期の遺物であることや磨滅を受けていないことから近くに遺構が存在したことは明らかである。

基本層序は、耕土—床土—灰褐色砂質土—暗茶褐色砂質土—(黒褐色土)—黄灰色砂質土(地山)となり、黒褐色土は全域には広がっていない。遺物は黒褐色土に多く含まれ、暗茶褐色土にも遺物は包含している。地形的に北東方向の方が厚く堆積している。

明確な遺構はF11の調査区ほぼ中央に土壇を1基検出している。やや不定の長方形の平面プランを呈している。長辺83cm、短辺55cmで、検出面からの深さ30cmを測る。急傾斜で掘り下げられほぼ垂直の肩を持つ。南側の2辺の肩部は5～10cm垂直の部分があり、北側も掘り下げた底面では無遺物部分が存在した。このことから木箱状の外容器に遺物を入れ

1. 灰褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 灰色砂層
4. 暗茶灰褐色土
5. 黒褐色砂質土
6. 黄灰色砂質土
7. 暗灰色砂層土



第201図 B地区土層断面図

南台遺跡 B地区

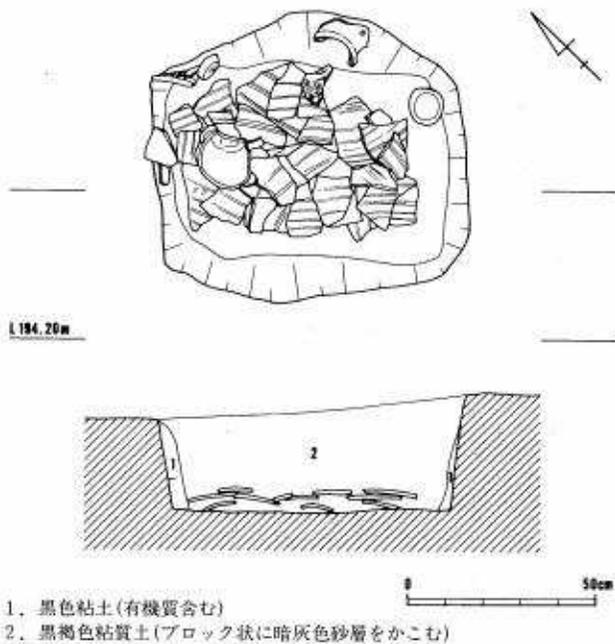
ていた可能性も十分に考えられる。遺物は底面に接した部分を中心に北側の肩部上部からも出土している。出土遺物は全て須恵器に限られており、蓋・杯身・杯蓋の3個体の遺物がある。蓋は中型の直口壺で破碎されて埋納されたものと思われる。破片の向きに一定性はなく、表裏も意識されずに入れられている。壺胴部は土壌の底面にあり、口縁部は離れて北東の長辺肩に着いて出土している。胴部の破片の数が多く、別個体の胴部も入れられている可能性が高く、4個体の土器が納められていたものと思われる。完形品である杯は、身が北側コーナー上部に、蓋は逆位置で東コーナー上部から出土している。杯2点は完形品を、壺は破碎して木箱状のものに入れて土壌に埋納された遺構である。

ビットは20数基検出されており、10~35cmと径に開きがある。

(2)出土遺物

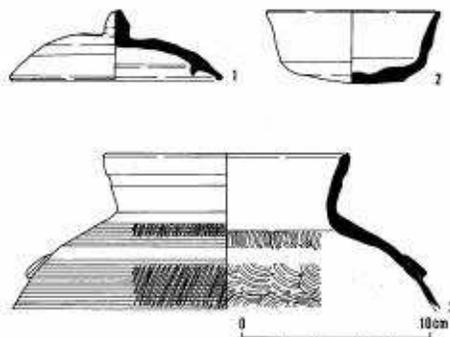
①土壌出土遺物

胴部だけの破片が1個体あり図化しておらず、残り3個体を図化した。(1)は杯蓋で宝珠つまみを持ち、内面にシャープに作られた反りを有する。反りが口縁端部より下方にまで下がっていない。口径11.0cm、器高3.7cmの完形品であるが、僅かにひずみを持っている。(2)は杯身の完形品で、やや焼成は甘い製品である。器高3.85cm、口径9.1cmを測り、不安定な底部から緩やかに外方に彎曲しており、端部は尖りぎみに仕上げている。(3)は壺で他に底部の破片も出土しているが接合できなかった。底部は丸底で、口径16.8cm、残存高8.2cmを測り、推定復原すると30cm前後の壺になるものと思われる。球形に近い胴部か



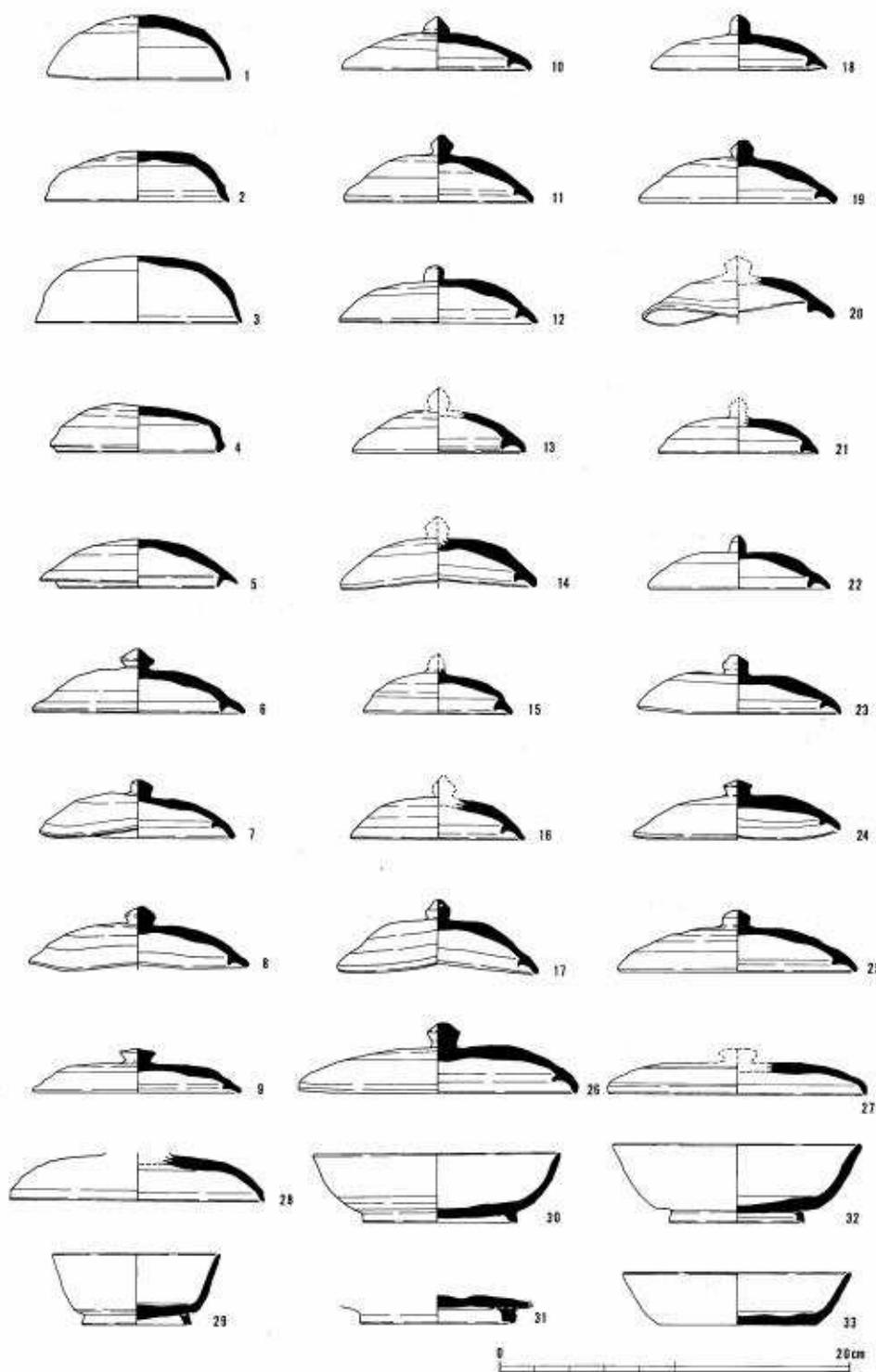
1. 黒色粘土(有機質含む)
2. 黒褐色粘質土(ブロック状に暗灰色砂層をかこむ)

第202図 B地区土壌1



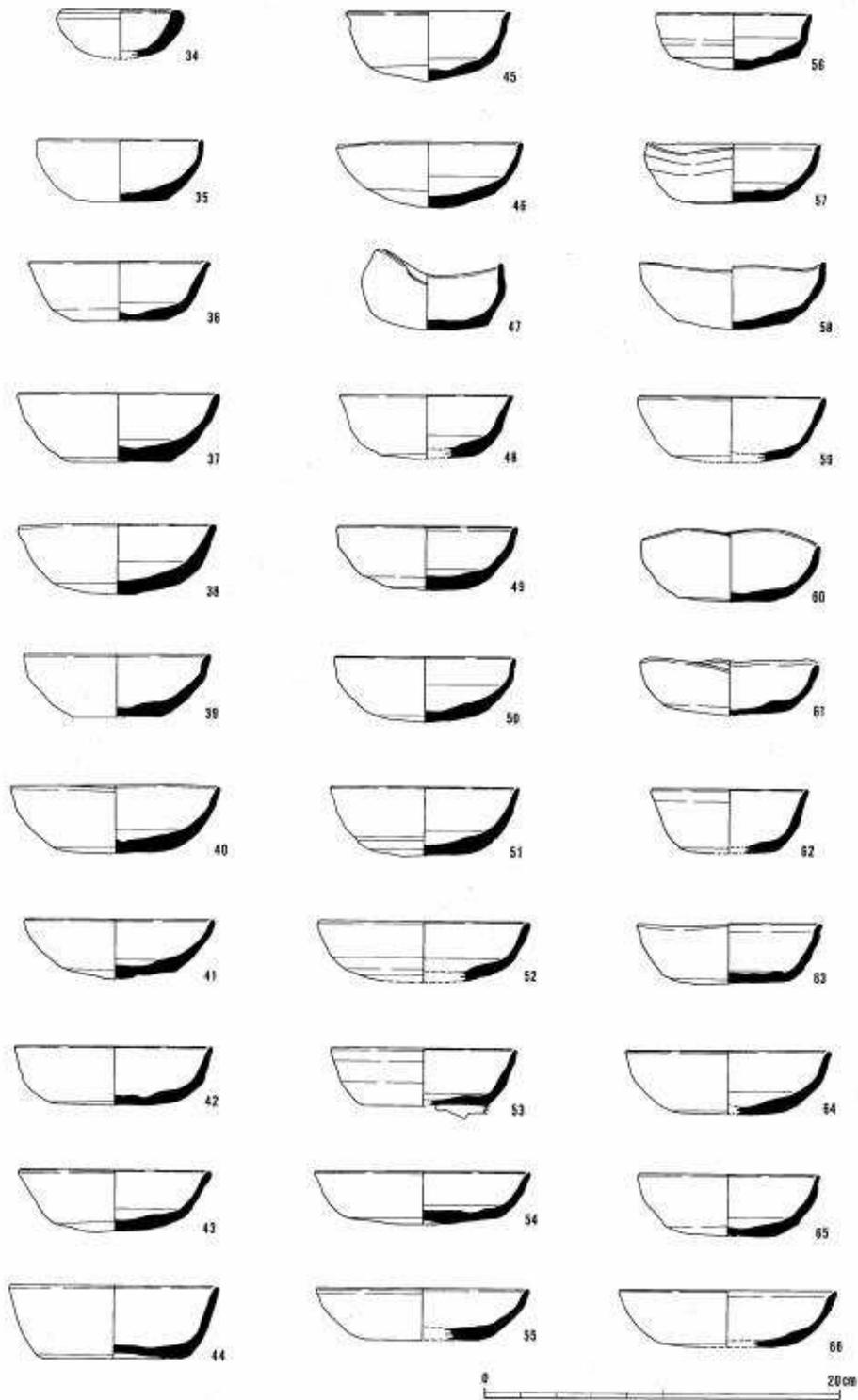
第203図 土壌1出土土器

南台遺跡 B地区



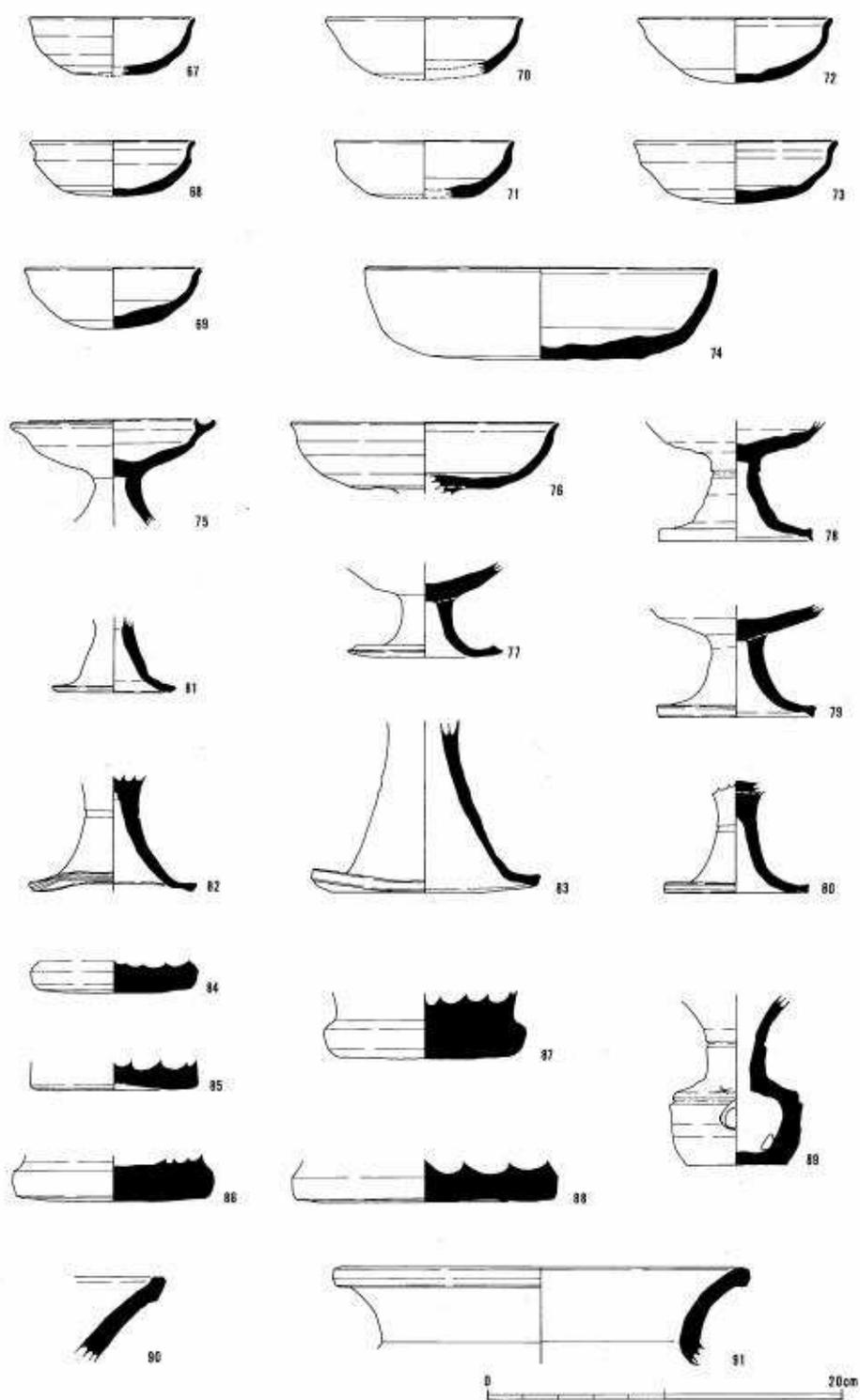
第204图 B地区出土土器(1)

南台遗址 B地区



第205图 B地区出土土器(2)

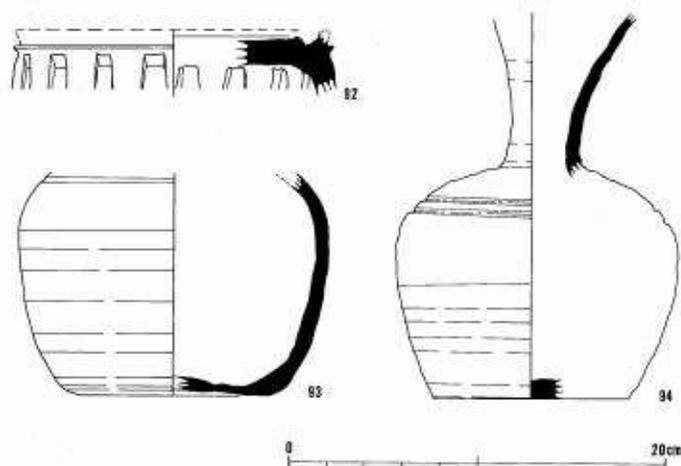
南台遺跡 B地区



第206图 B地区出土土器(3)

南台遺跡 B地区

ら、鋭い稜線を持たずに僅かに外方へ直線的に延びる口縁部を付ける。口唇部は内側にやや肥厚させている。口縁部はヨコナデで仕上げられている。外面はタタキののち強いヨコナデが行われ、内面は青海波文のタタキ成形のままである。肩部に円形の浮文を2個以上付加している。



第207図 B地区出土土器(4)

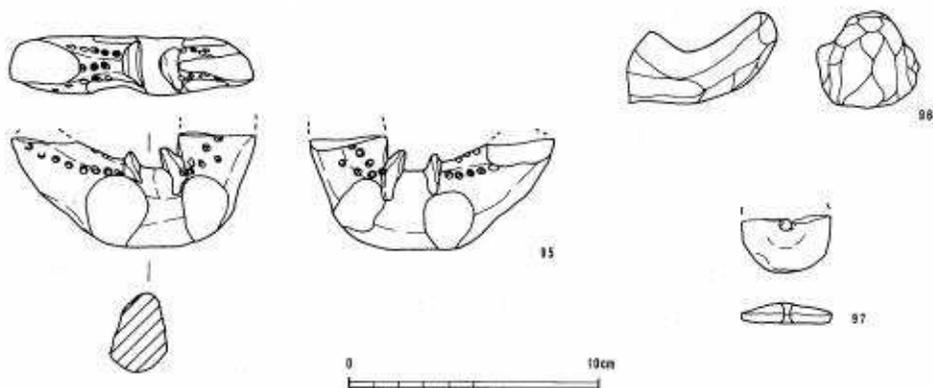
②遺構外出土遺物

出土総量(セキスイコンテナTS-28タイプ)40数箱出土している。実測図を作成したものは97点を数える。杯蓋28点、杯身46点、高杯9点、播鉢5点、甕1点、甕2点、円面碗1点、壺2点、土馬1点、把手1点、紡錘車1点を図化した。

杯蓋 (1~28)

宝珠つまみを有さない蓋(1~4)と反りを持つが宝珠つまみを有さない蓋(5)と宝珠つまみを有する蓋(6~28)に分類出来る。全体的に焼成は良好で、色調は青灰~暗青灰色を呈するが、一部生焼けの土器も含まれる。

宝珠つまみを有さない蓋は4点である。口径は(1)(2)が10.5cm、(3)が12.0cm、(4)10.0cmと小型である。器高も比較的低く、天井部は丸味を持ち、明らかな稜線は有さない。



第208図 B地区出土土器(5)

(5)はタイプからは宝珠つまみを有するタイプの蓋であるが、剥離した痕跡は見られない。つまみ部を付加せず焼成されたものであろうか。口径9.0cmと小型で器高は28cmを測る。反りはシャープで薄く仕上げている。全体的にシャープで丁寧な作りである。

出土した杯蓋のうち大半の蓋は宝珠つまみを有するものである。口径7.2cmと非常に小型のもの(15)もある。つまみ部を欠失しているものも多く、つまみの形態も宝珠形やそのくずれた形や扁平なもの、途中でくびれない砲弾形のものなど形態差がある。(6)～(24)は口径10.0～11.5cmと小型で、内面の反りも口縁端部の上方に位置している。反りも先端は尖りぎみのものである。ひずみのある歪んだ土器が多いのも特徴の一つである。(25)～(28)はやや径の大きな蓋で、(25)(26)は反りが内面におさまり同じ形態を取る。(27)(28)は反りを持たないタイプで明らかに時期の下るものである。つまみ部も扁平な退化したタイプのものが付くと思われる。

杯身〔(29)～(74)〕

杯身も杯蓋同様、時期差・形態差のあるものが出土している。図化したものは45点と全器種のなかで最も多い数を占める。蓋と同じく大別して古墳時代と奈良時代に分けられる。古墳時代の土器の方が多く、古墳時代のものには焼け歪みのあるものが含まれている。

古墳時代の土器は、口径10～12cmで器高も4cm前後の数値が得られる。色調は灰白色が多く、胎土に小石粒、砂粒を含んでいる。杯身と杯蓋の区別が難解な時期の物であるが、内面の調整技法で蓋に区別している。口縁端部に強いヨコナデが見られるのが多く、特にそれが発達したものが(67)～(73)の土器である。明石市高丘遺跡で見られるタイプで、技法の影響・伝播が指摘出来るものである。搬入品でなく、生産は末(遺跡周辺)で焼成されたものであろう。

高杯〔(75)～(83)〕

9点図化している。(75)は受部を有する唯一の個体で6世紀末～7世紀初頭と考えられる。焼成良好で青灰色に焼き上げられている。(80)～(83)は色調も灰色と淡い色を呈し、胎土も(75)に比べると緻密である。自然釉がかかっているものもあり、時代が下る遺物である。

描鉢〔(84)～(88)〕

全て底部だけの破片である。底面にヘラで刺突した穴が穿たれている。(88)のように底径14.3cmと大きいものと、(84)の8.6cmと小さな底径のものとの幅がある。

甕〔(89)〕

底径5.6cm、残存高9.6cmを測る小型の甕である。胴部肩近くに1条の凹線があり、その上にヘラで描かれたヘラ記号が見られる。底面にも胴部より大きな同種の×のヘラ記号が施されている。頸部中央にも1条の凹線が施されている。胴部内面に粘土塊が入っている。

円孔を開ける際に内面に入り込んだものか、意図的に入ったものかは不明だが、興味ある資料である。

甕〔(90)(91)〕

どちらも口縁部のみ残存している。(91)は壺の可能性もあるが、一応甕として報告する。(90)は中型甕になるもので、口縁端部を内外面に肥厚させ端面を作り出している。暗灰色を呈し、焼成は良好である。(91)は口径22.7cm、残存高5.5cmを測り、口縁端部に内外面に肥厚しながら丸くおさめている。端部に稜線を有する。

円面碗〔(92)〕

裾部・口縁端部の両端を欠失した碗である。残存高3.4cmで、推定口径16.8cm、陸部径13.0cmを測る。脚台部には長方形の透孔を全面に開けている。

壺〔(93)(94)〕

(93)は胴部のみ破片で、口頸部を欠く壺である。最大腹径16.2cm、残存高10.0cmを測る。(94)は口縁端部を欠くが、それ以下はほぼ完全に残っている。(93)も形態的には近いタイプになるが、肩は張らずに緩やかな曲線となっている。肩部に2条の凹があり、最大腹径は胴部の3分の2近くの上側にあり15.0cmを測る。頸部は4.0cmと細くなっており、ラッパ状に外反していく口縁部へと続く。残存高20.5cmで灰色と明るい色調に焼き上げられている。胎土は(93)(94)も砂粒を含むものの良好である。

土馬〔(95)〕

黒褐色土から出土している。頭部・尾部・足部を欠く胴体部分が残存している。四足の剥離痕は明瞭である。鞍は粘土で2条付加して表現しており、竹管文で装飾している。残存長9.7cmで鞍の間での高さ3.1cm、幅2.3cmを測る。

把手〔(96)〕

成形したままの手捏ねの状態の把手部で、土器本体との接続面で残っている。復原した状態で長さ6.5cmを測り、最大幅は3.1cmである。時期的に考えて鉢よりも甕の把手と考える方が妥当であろう。

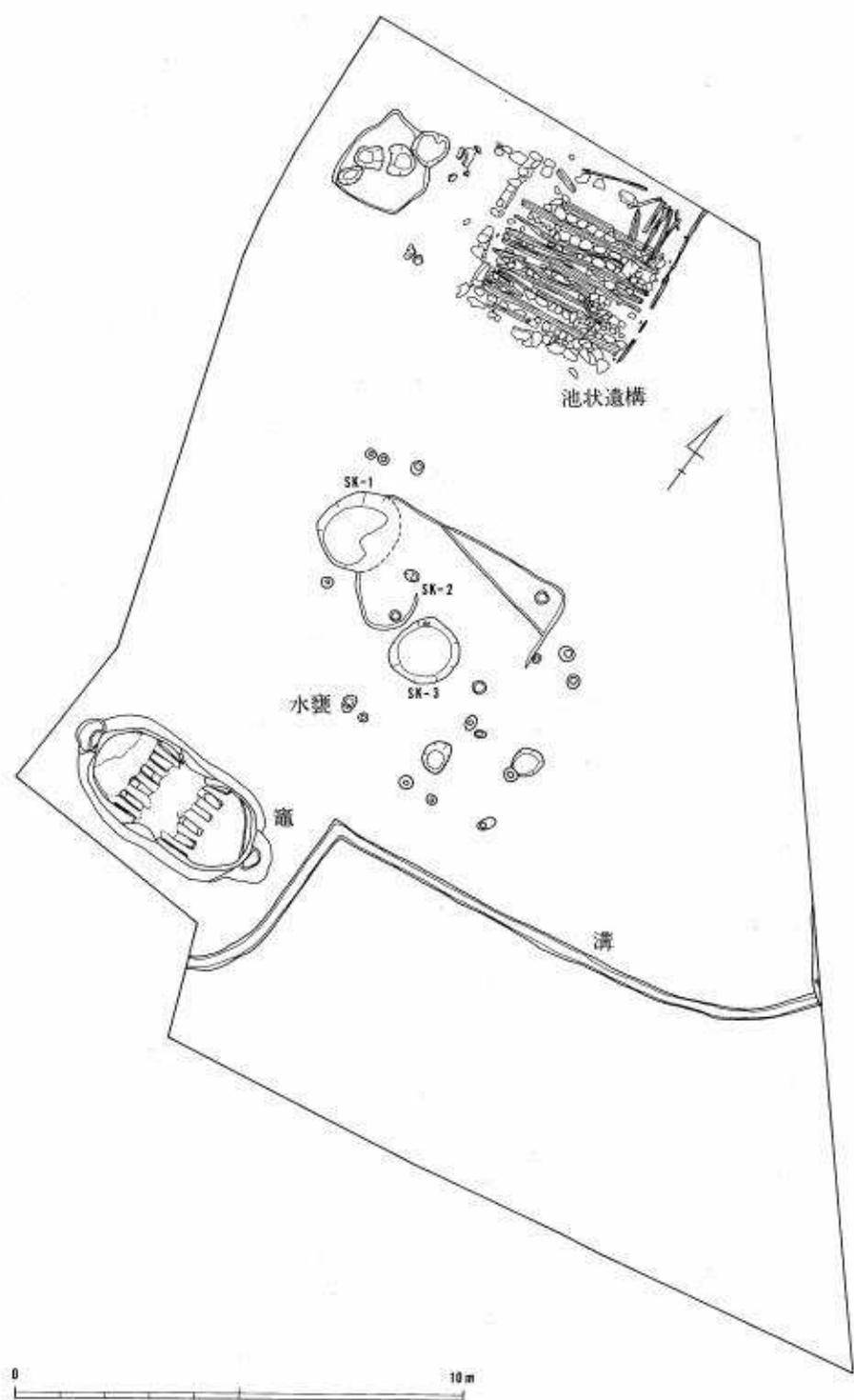
紡錘車〔(97)〕

須恵質の紡錘車で2分の1余り残っている。径3.6cmを測り、中央に両面から穿孔された径0.4cmの円孔がある。断面形態は長方形の平たいものではなく、下面は平坦だが上面は中央が最も厚くなっている。中央で0.8cm、端部で0.4cmの厚さである。

5. C地区

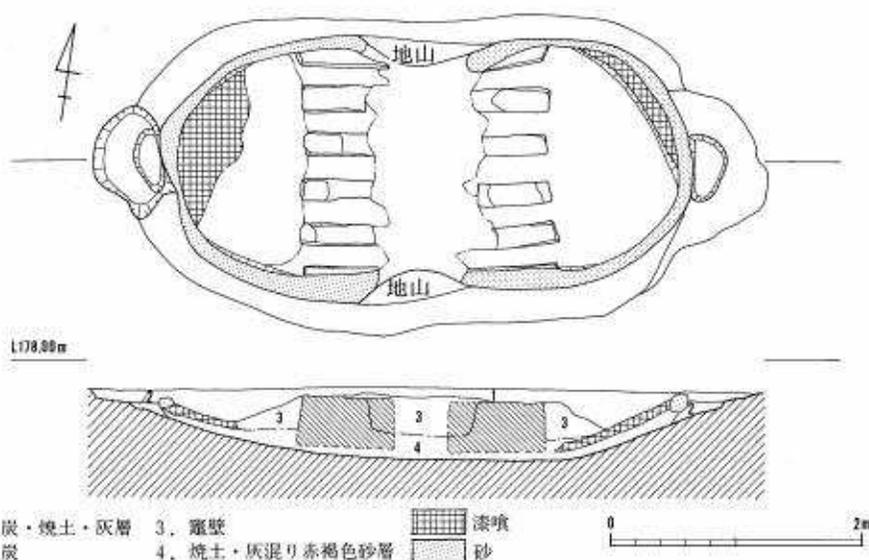
南台遺跡の南東部を占め、南側に丘陵があり日当りの悪い立地条件の不良の地点である。確認調査で平安時代の完形に近い土師器が出土したことから、平安時代の集落跡を想定して全面調査を実施したが、その時期の遺構は確認されず、近世の遺構に限られた調査とな

南台遺跡 C地区



第209図 C地区遺構全体図

南台遺跡 C地区



第210図 竈

った。全面調査は約150㎡を対象とした。

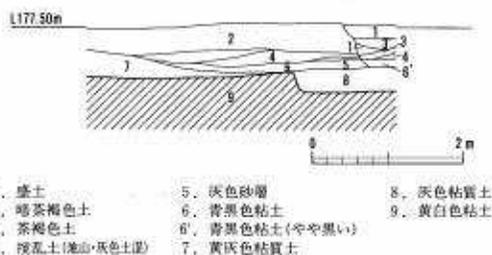
(1)調査結果

南側に求女塚から延びてくる丘陵が迫っており、立地条件の悪い地点で日照時間も短い地点である。調査段階で、当地区には明治期まで建物が存在したと伝えられている事実を入手し、その通り建物の痕跡が確認された。

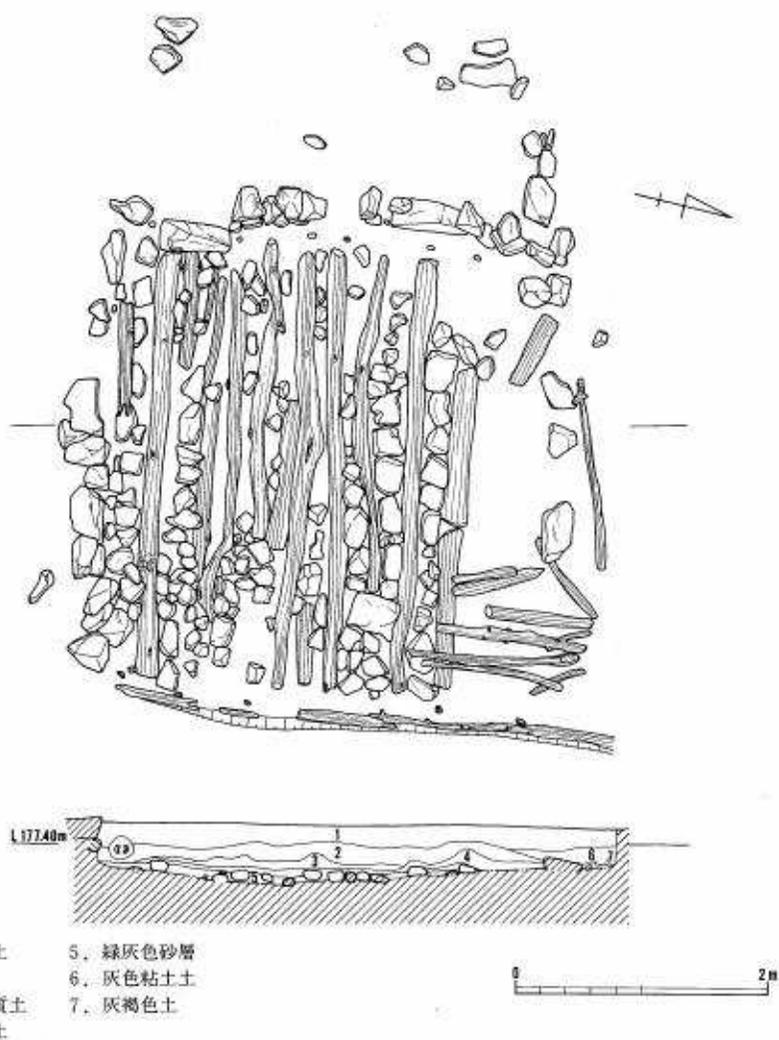
遺構は竈(へっつい)、水甕、池状遺構、溝、汚水溜などである。ピットなども検出しているが、時期は決定出来ない。先代に遡る遺構も存在する可能性はあるが立地条件は不良で、古代・中世の遺構は存在しない可能性が高い。

①竈

調査区西端で確認した遺構で、約0.6m離れて弧状に巡っている溝を伴っている。楕円形の掘り方で、中央から両端に向けて焚く形態を取っている。長径5.1m、短径2.5mのトラック形で楕鉢状に掘り下げてから、中央に対峙するように支柱を6本ずつ据え付ける。漆喰部分は半球状になっており、当然ながら赤変している。中央の焚口部分は崩壊しており、旧態は不明である。漆喰と掘り方間は真砂土を入れている。支柱間は約18cmの間隔を開けており、7.5cm前後の長さを持っている。煙り出し部分には土壘が端部に接して築かれている。西側のは最大径85cm、東側のは110cmを測る。



第211図 池状遺構土層断面図



第212図 池状遺構

②溝

幅40cm、深さ20cm前後の溝で調査区内の東西に延びている。調査地南寄りを東西に12m伸びて、そこから弧状に約5mを回るように巡っている。溝の底は青灰～灰色のシルトが溜まっており、排水溝として機能していたと思われる。

③池状遺構

落ち込み底面に礫と自然木を敷いた遺構である。東西4.4m、南北4.2mの方形の落ち込みで、深さは最深部で0.6mを測る。地山である黄灰色粘土を方形に掘り下げ、西・南辺は石組で、東・北辺は木組で遺構を限っている。石組の2辺の掘り方は垂直に掘り下げずに、二段掘りに近い形状で、その上段に石組を施している。石材は全て地元山塊で採集される流紋岩の角礫である。

南台遺跡 C地区

底面はほぼ平坦であり、その上に枝を払った自然木を東西方向に置き、その間に礫を並べている。礫は大半は石組と同じ流紋岩であるか、少量チャートも使用されている。底面には灰色細砂が堆積していた。出土遺物は全く出土せず、明確な遺構の時期は判断出来ない。が、遺構面や埋土から考えて、近世末か近代の遺構と考えられる。性格も不明なことから池状遺構として報告するが、近・現代の例から考えると鯉の養殖池に似かよっている。

④水甕

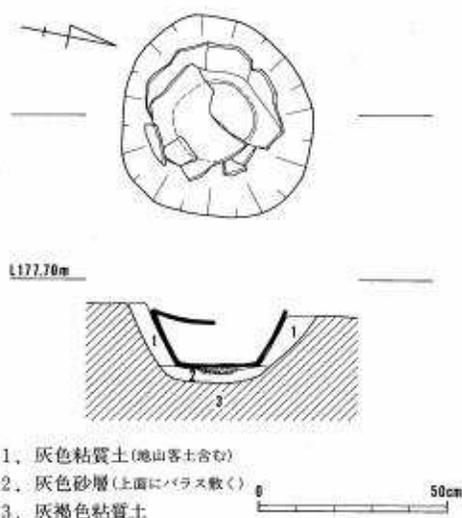
径50cmの土壌に丹波焼甕が据え置かれた遺構である。甕の上半は欠失しており、底部から胴部下半が残存している。土壌底には砂を敷き、その上に甕底部中央のみ細礫を敷いている。甕胴部と土壌層の間には灰色粘土を詰めている。復原すると、底径27cm、残存高25.5cmの中型の甕になる。内面は茶褐色の釉を施しているが、外面は全体に釉が及んでおらず、還元状態を呈する部分もある。

出土位置が竈に接した部分であることから飲食用の水甕と考えている

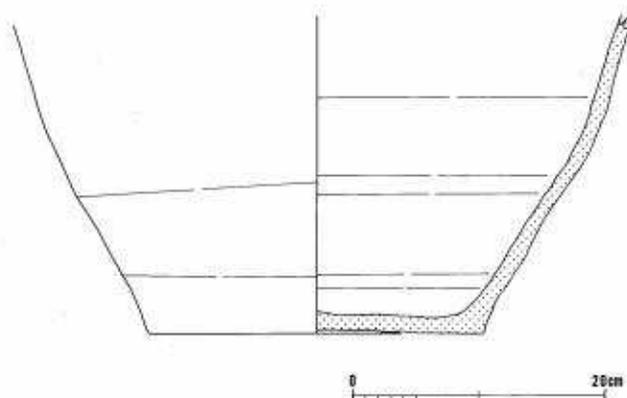
⑤その他の遺構

調査区東側で切り合い関係のある3基の円形土壌を検出している。最後に築かれた土壌は、径120cm、深さ65cmを測る。地山土を切り込んでおり、施設は全く残っていないが雪隠の可能性が高い土壌である。

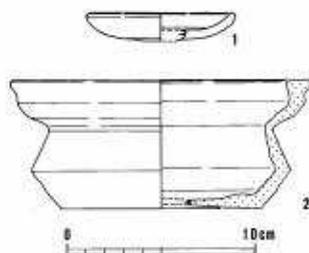
また、周辺にはピットが10数基検出されている。明らかに柱の痕跡が窺えるものもあり、建物跡が存在した可能性が高い。ただ、近世・近代の遺構によって切られているため、規



第213図 水甕遺構



第214図 出土水甕



第215図 C地区出土土器

模など把握出来ない。しかし、出土遺物のなかに円面碗の破片が含まれていることは注目される点であろう。

⑥小結

C地点の遺構は、一部のピットを除くと近世末～近代の遺構に限られる。台所関係の竈、水甕と排水施設の溝の遺構が明確なものである。主屋部分の遺構は確認されていない。溝を隔てた北側の円形土壇は雪隠と考えられる。立地条件は南に丘陵が迫り、日照時間が短いという悪条件である。しかし竈の規模は両方に鍋などをかけられる大規模なもので、矛盾を感じる。周辺には建物はなく、現在に至っても建物は見られないことは、一時期の単独の民家と考えられよう。

6. D地区

南台遺跡の西端に位置する全面調査地区である。段丘上の平坦面に相当していることからB地区との標高差はほとんどない。丘陵の北側に立地しており、必ずしも好適な占地とは言えないものと思われる。北側の里道は東山方向へと続いている。B地区とは35m離れている。調査面積は760㎡である。確認調査で周辺では遺構面が確認出来ず、水田1面の調査となった。

水田1面の全面調査の結果、掘立柱建物跡2棟、溝2条、土壇5基の他にピットを検出している。

①掘立柱建物跡

掘立柱建物1 (SB01)

調査で両側を検出しており、3×3間の主軸方向をN5°Eに持つ建物跡である。総柱の建物で、東西方向7.0m(西から2.2m、2.4m、2.4m)、南北方向6.3m(北から2.1m、2.2m、2.0m)を測る。柱穴の規模は余り大きくなく、0.4m以内で0.3m前後の柱穴が多い。ピットからの出土遺物はほとんどなく、土師器皿の小片が出土しているだけである。

掘立柱建物2 (SB02)

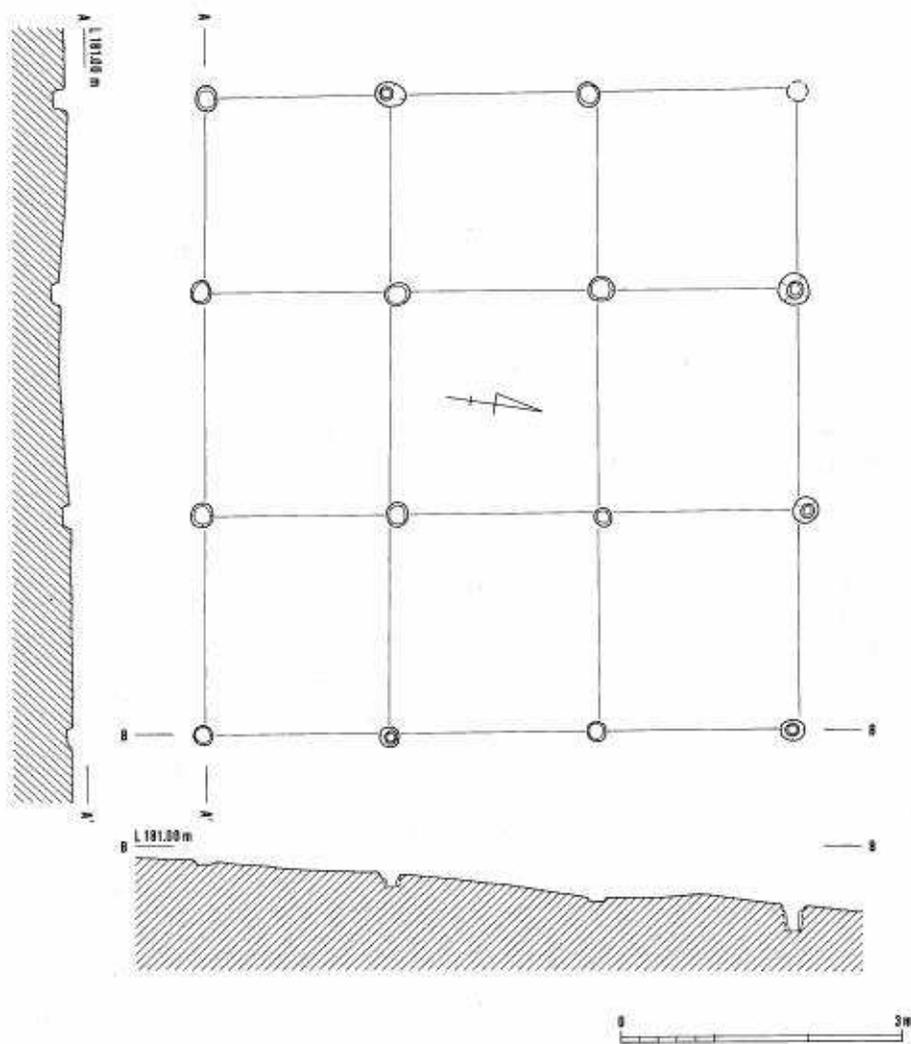
SB01の北側に位置する掘立柱建物跡で、主軸はN5°EとSB01とはほぼ同じ主軸を示す。SB01と5.4m離れている。主軸方向が同じであるが、軒先を並べてはいない。SB01の東辺とSD02の東から2列目のラインが通ってはいるが、柱間を同一にするなどの建て方はされていない。東西方向3間、南北方向4間の建物跡である。棟方向(東西)の柱間は、西から1.9m、2.1m、2.0mを測る。棟方向は6.0mである。桁(南北)方向は8.9mで、柱間は南から2.0m、2.1m、2.4m、2.4mを測る。東西の東側に2.4m離れて、SD02が主軸方向を合わせて存在する。南側はSD01によって切られていることから、SD02がどこまで続いていたかは不明であるが、建物跡に伴う溝の可能性も考えられる。

②溝

溝1 (SD01)

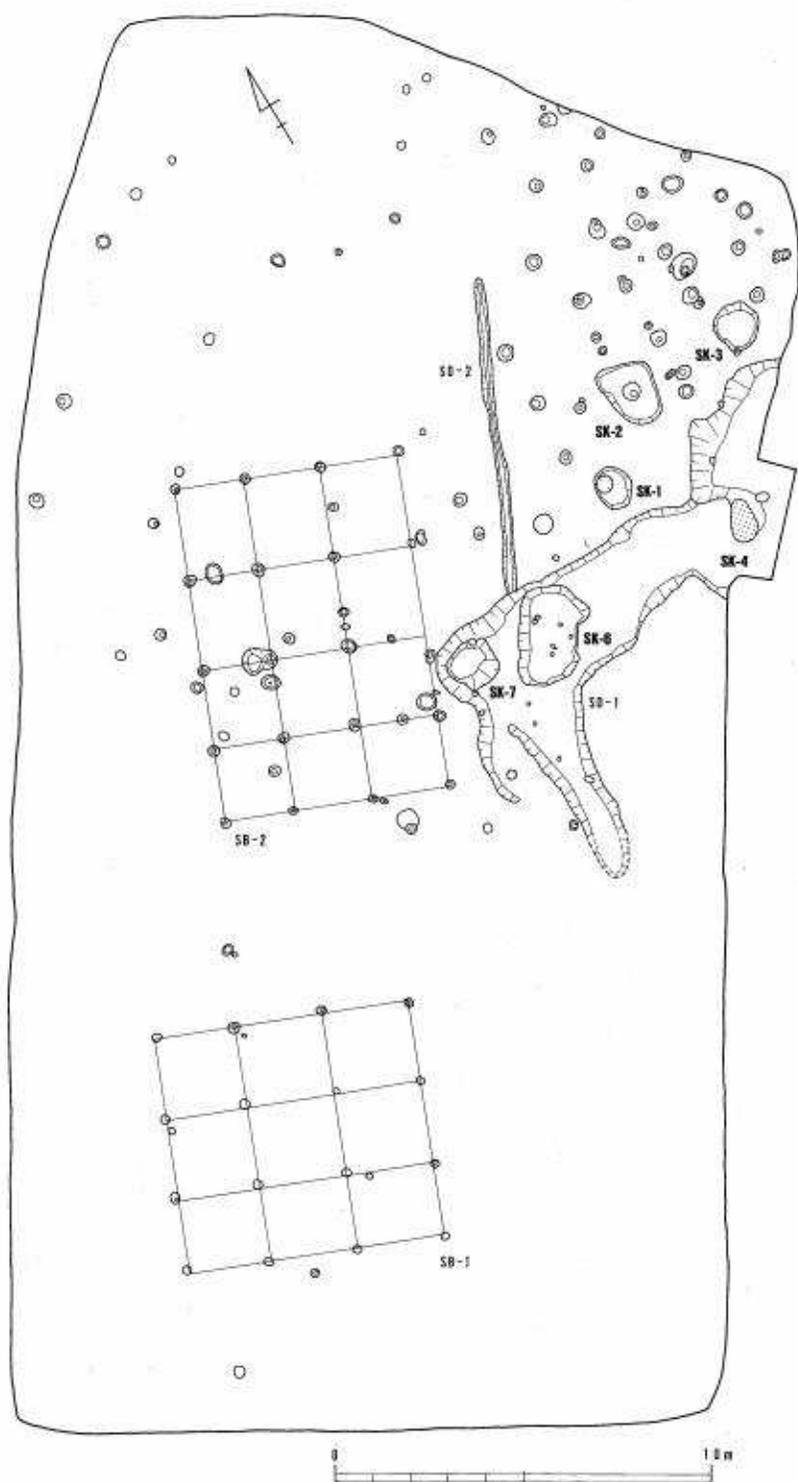
企画性を持たずに不定形に屈曲している溝で、落ち込みとした方が良いかとも思われる遺構である。最も広いところで幅2.6mを測る。大局的には鍵状のクランクを呈しているが、整然とした遺構とは思われない。最も深い部分で0.95mで平均0.55mの溝である。溝底は平坦でなく凹凸が見られる。また、2基の土塼も認められる。調査した総長は19mを測る。幅の広い部分を中心に遺物を多く含んでいる。

SD01内には多くの土器が出土している。土器群として幾つかに分けて取り上げているが、時期差や特徴など看取出来ず、1群の土器群と考えて良いものと思われる。

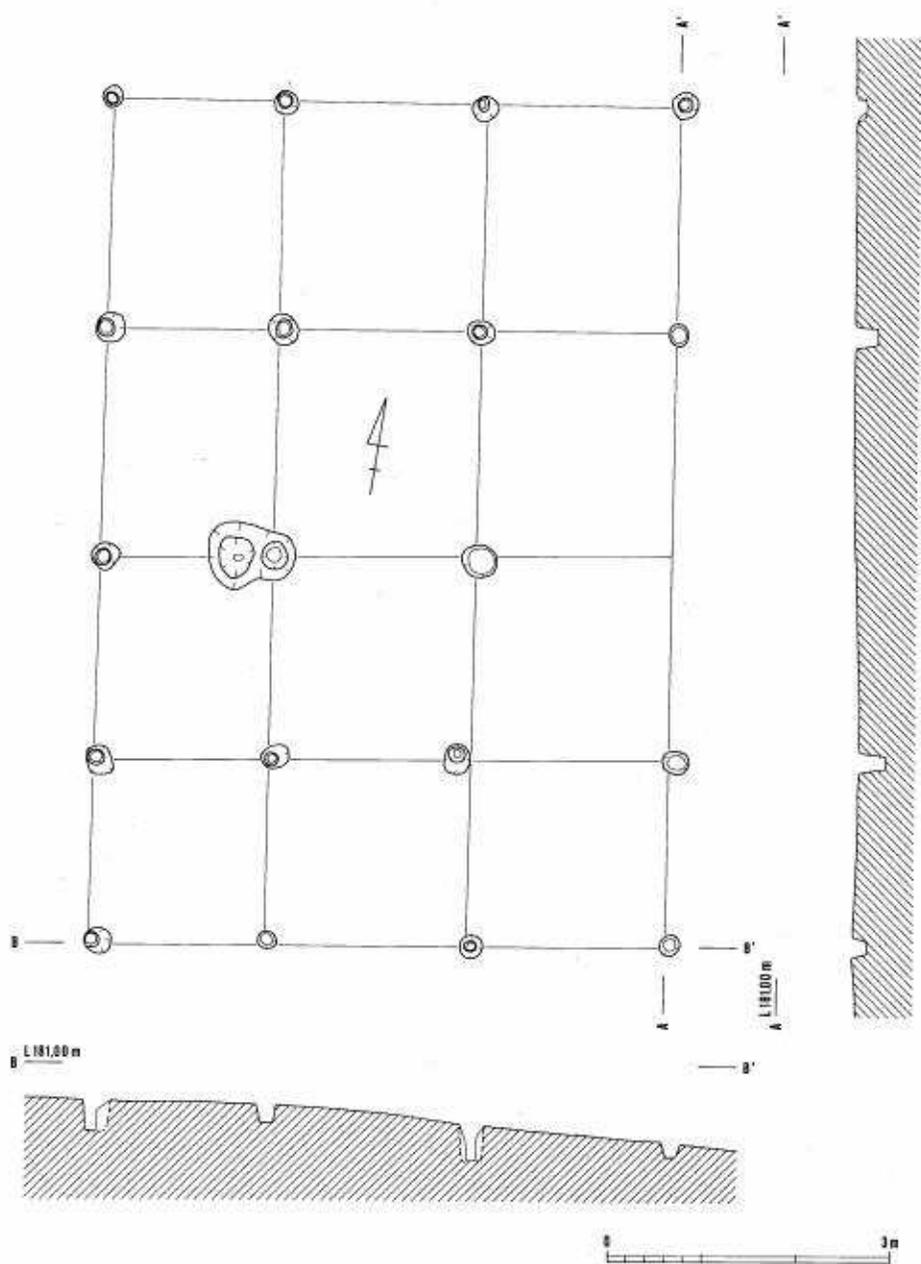


第216図 掘立柱建物1

南台遺跡 D地区



第217图 D地区遺構全体図



第218図 掘立柱建物 2

出土遺物の大半は須恵器であるが、少量の土師器も含まれている。ただ、土師器は小片で図化可能なものはなかった。図化した土器は29点ですべて須恵器である。器種ごとにみると、蓋12点、杯身13点、高杯1点、平瓶1点、大型高杯（皿）1点、鉢1点である。时期的には古墳時代から奈良時代までの幅がある。

(1)は杯蓋で天井部を欠いている。口径10.6cmで、口縁端部近くで緩やかに内湾しS字

状に外方へ開き、端部は丸く納めている。(2)も天井部を欠いている杯蓋である。口縁部の形状から宝珠つまみが付くタイプとなろう。口径10.1cmで、反りは口縁端部より内側(上方)となっている。(3)も(2)と同じタイプの杯蓋で、口径10.8cmを測る。(2)と比べていびつで、器肉の厚さも均一でない。反りは短く太いもので、反りは口縁端部より内側で納まっている。(4)も宝珠つまみを有する杯蓋で、口径13.8cm、器高3.9cmを測る。つまみの上端を欠いているが、ほぼ復原出来るものである。反りは内側に付いており、約1cm離れている。端部はシャープで、体部全体も平滑に仕上げられている。内面に自然釉が薄く付着している。色調は灰色で、やや淡い。(5)～(12)は時期の下る杯蓋で、すべて退化した宝珠つまみが付くものと思われる。すべて反りでなく、口縁端部を折り曲げているが、端部を下方へつまみ出すように肥厚している程度である。折り曲げた部分が明瞭な面となる(5)(7)(11)(12)と、稜線が鋭くなく丸みを持つ(6)(8)(9)(10)の2タイプがある。天井部近くはヘラケズリのままで、他はヨコナデである。(13)(14)は小型の杯身で端部は外反しているが、(13)は丸く(14)は薄く尖りぎみである。(15)は口径11.0cmとやや大きい(13)と同じ古墳時代末と考えている。口縁部の形状は(14)に近い。(17)～(20)も杯身で高台の付かないものである。底部が丸い(16)(17)とやや平たい(18)～(20)に分かれる。底部の切り離しはヘラ切りののち未調整である。(21)はほぼ完形の高杯で口径9.7cm、器高7.7cmを測る。(22)～(26)は高台の付く杯である。(27)は平瓶の口縁部で、ひずんでおり、頸部には指圧痕を残している。

溝2 (SD02)

SD01によって南側を切られた溝で、幅0.3m～0.4m、深さ平均0.3mを測る。残存長は8.4mで直線的に伸びている。方位はN5°EとSB01・SB02と同じ主軸方向をとっており、特に2.2mと近接しているSB02とは有機的な結びつきがあるのかもしれない。

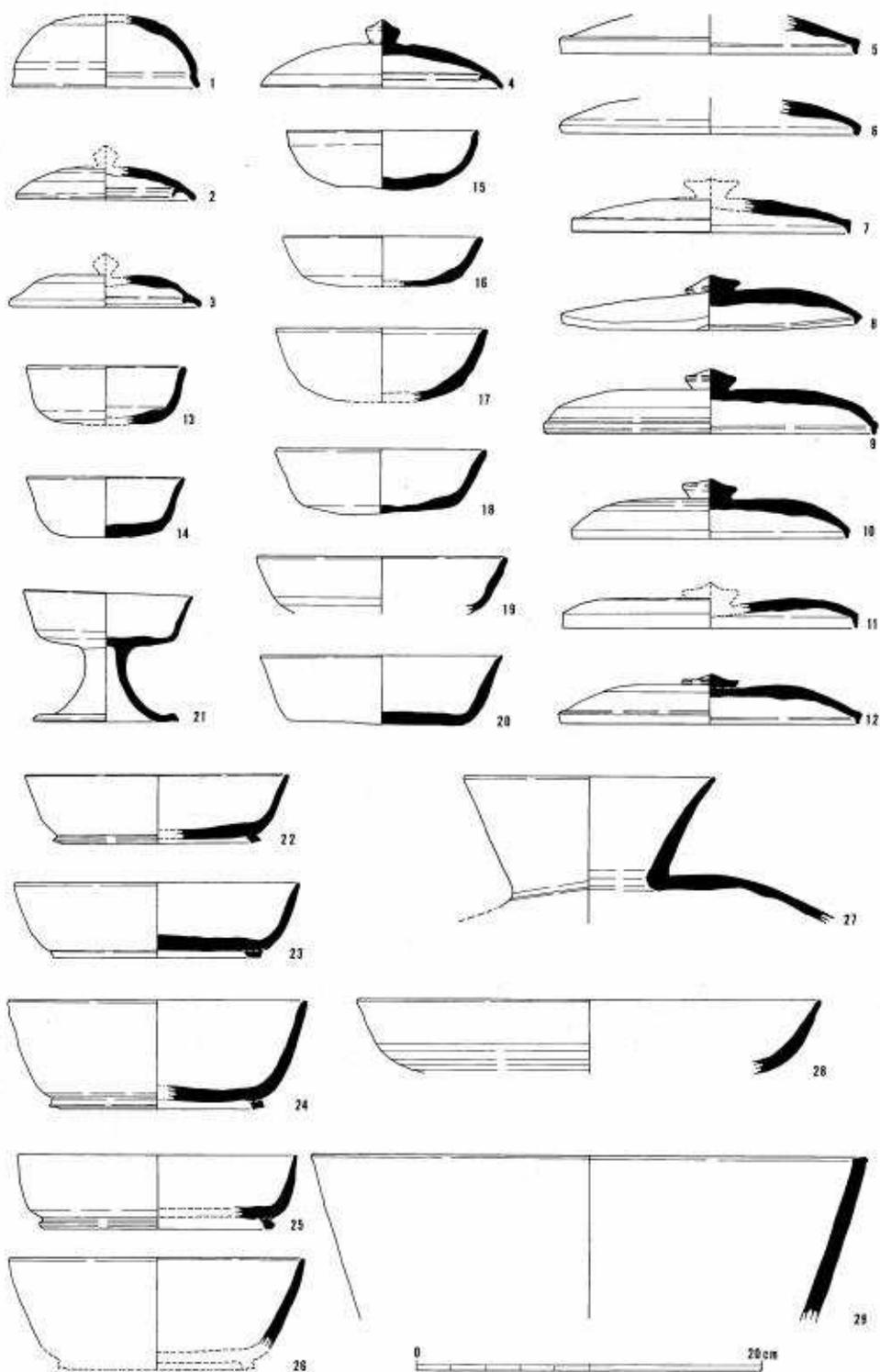
③土壌

性格の明らかな土壌は1基もない。SD01内に2基存在しており、他の3基も調査区北東側に片寄っている。

土壌1 (SK01)

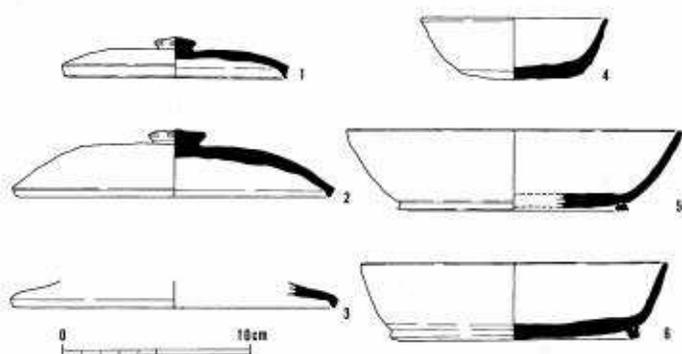
SD01に0.4mと近接して築かれている。径1.0m前後のややいびつな円形プランで、深さ0.25mを測る。境内にさらに0.15m深掘されている径0.42mのピットが西側に偏在している。境内底面から上面にかけて遺物を包含している。須恵器・土師器・鉄器が出土している。図化したのは須恵器に限られる。6点図化しており、杯蓋・杯身3点ずつである。(1)は口径11.7cm、器高2.2cmの小型の蓋で退化しかかった径2.2cmの宝珠つまみが付いている。外面は灰が被っており調整痕は不明である。口縁部を下方に細くつまむことによって端部を作っている。(2)は口径16.4cm、器高3.6cmの内彎する蓋である。全体にヨコナデで仕上

南台遺跡 D地区



第219图 溝1出土土器

げられており、退化した宝珠つまみを持つ。(3)は蓋の口縁部のみの破片で、口径17.0cmに復原できる。端部は内側につまんで肥厚させている。外面に重ね焼の痕跡がうかがわれる。(4)は口径9.7cm、器高3.3cmの小型の杯



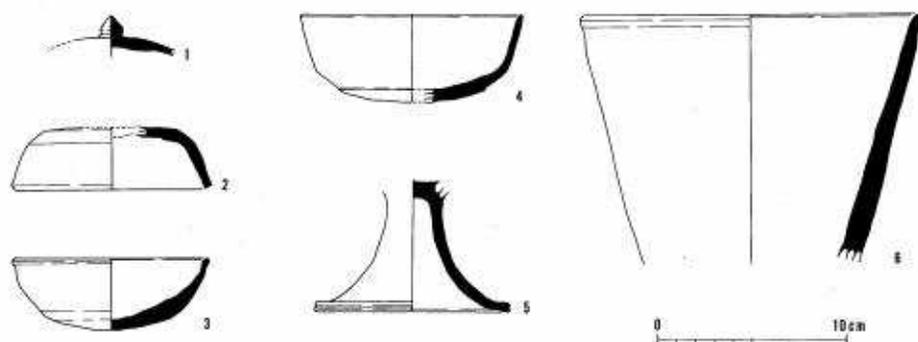
第220図 土壌1出土土器

身で明らかな底部は持たず、直線的に外開きに伸び端部は丸くおさめている。(5)は輪高台を持つ口径16.1cmの杯身で、底部はヘラ切りののち高さ0.5cmの断面方形の高台を付けている。器高は4.1cmで焼成はやや悪く、灰白色と白っぽく焼き上げられている。(6)は緩やかに内彎しながら丸くおさめた端部へ続く身で、ヘラ切りののち外方へふんばり気味の高台をつけている。

土壌2 (SK02)

SK01の北側約1.2m離れたところに位置する。長径1.8m、短径1.4mの不定形を示しており、0.25m掘り下げられている。SK01と同様にほぼ中央に径0.44mの円形のピットが存在する。深さ0.2mさらに下げられている。

(1)(2)は杯蓋で(1)は乳頭状のつまみを持つ。(2)は角張った端部を持ち、天井部は欠失している。(3)(4)は杯身で(3)は口縁端部に凹みの見られる形態で器壁は厚い。(4)は底部をヘラで切った状態で未調整である。底部は厚いが口縁部は薄く仕上げられている。端部は丸くおさめており、口径11.6cmを測る。(5)は高杯脚部で、裾部径10.2cm、残存高6.9cmを測る。裾部端面に1条の凹線が見られ、内面の端部に近いところに稜線を有する。(6)は口径17.8cm、残存高13.2cmで、全体的に軟質である。口縁部だけの破片であ

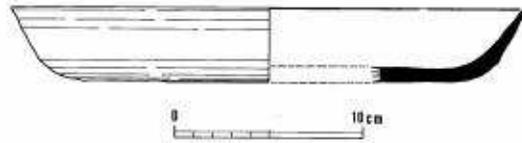


第221図 土壌2出土土器

るが、甌と思われる。

土壌 3 (SK03)

調査区北東隅近くに位置しており、SD01と0.4mと近接して築かれている。径1.2mの不定円形のプランで、深さ0.4mを測る。

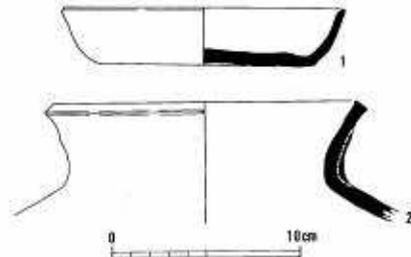


第222図 土壌 3 出土土器

図化した遺物は、大型の盤1点である。口径27.2cm、器高3.9cmを測る。底部との境界は明らかでなく、稜を有さずに口縁部へと続く。口縁部は外方へ直線的に器壁を薄くしつつやや外開きにつまんで端部としている。

土壌 4 (SK04)

SD01溝内の屈曲部に集石部分が検出された。南北1.1m、東西0.7mの長方形の部分に角礫が置かれている。最も大きな石は0.35mを測るが、他は拳大の礫で構成されている。礫を除去するとすぐ地山面で深さはほとんどなかった。集石遺構であるが、取り敢えず土壌として報告する。



第223図 土壌 5 出土土器

土壌 5 (SK05)

SD01溝内に存在する土壌であるが、遺物除去するとほとんど掘り込みがなかったが、上面では僅かの差を確認しているので土壌とした。SK04とSK06の中間に位置する土壌である。

(1)は内外面共青灰色の杯身で、口径14.8cm、器高3.1cmを測る。底部は平たく、内彎気味に口縁部に続く。口縁部はヨコナデで仕上げており、底部はヘラで切り離している。(2)は口径16.0cmの壺口頸部で、内外面に僅かに肥厚し、角張った端面を作っている。胴部内面と外面に自然釉が付着している。頸部外面に粘土を補充している。

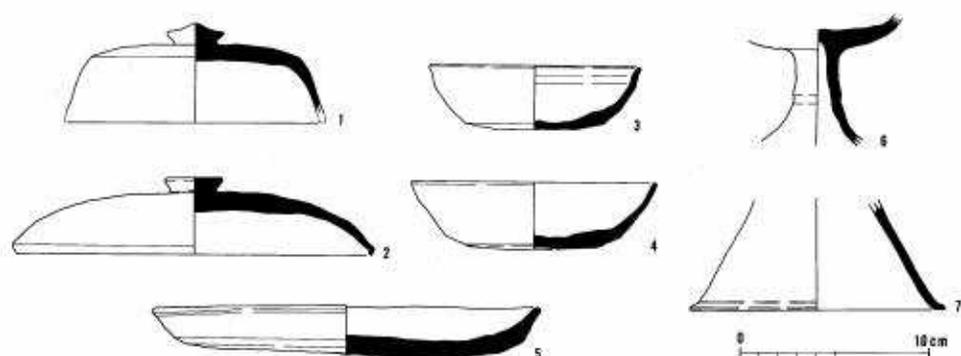
土壌 6 (SK06)

SK07と同じくSD01内に掘り込まれた遺構である。境内上面には円礫が検出されている。やや不定の長方形で長辺2.6m、短辺1.6m、深さ0.22mを測る。

(1)は口径11.1cm、器高3.2cmの宝珠つまみを有する蓋で、内面には反りが付いている。ロクロ回転方向は時計回りで、外面の一部はケズリのままであるが、ほとんどはヨコナデで仕上げている。内面は灰色、外面は暗青灰色を呈し、焼け歪みが見られる。(2)も(1)と同じく遺構の時期



第224図 土壌 6 出土土器



第225図 土壌7出土土器

より遡る遺物である。口径10.8cm、器高3.8cmを測り、底部はへら切りののち粗いナデを施している。(3)は口径12.7cm、器高3.9cmの小型の身で、外方へ開き内外面に肥厚する高台を有する。(4)は器壁の厚い身で外方へ開く断面方形の高台を付ける。口縁端部付近で外反している。口径13.8cm、器高3.6cmを測る。

土壌7 (SK07)

SD01内の屈曲部に位置している。最大長1.4m、深さ0.21mを測る。

(1)(2)は蓋であるが形態は異にする。(1)は径3.0cmのしっかりした宝珠つまみを持ち、器高の高い蓋である。口縁端部を欠いているが、器高5.3cm前後、口径14.0cm前後が想定される。(2)は断面逆台形の平たいつまみを持ち、器高4.1cm、口径18.8cmを測る。天井部が最も器壁が厚く、口縁部に向かって徐々に薄くなっており、口唇部は内側に肥厚させている。(3)(4)は身で口径は(3)11.0cm、(4)が12.8cmを測る。(3)は端部近くで緩やかな曲線となっている。ともに底部をへらで切ったのちナデ調整している。(5)は口径20.4cm、器高2.8cmの皿で、器壁は全体的に厚い。若干のひずみが見られる。(6)は両端部を欠く高杯である。色調は灰白色で胎土も緻密な土器で、自然釉が付着している。(7)は全体にヨコナデを施している小片で、一応脚部としているが口縁部の可能性も考えられる。端部は着地部から水平に外方へ肥厚させている。

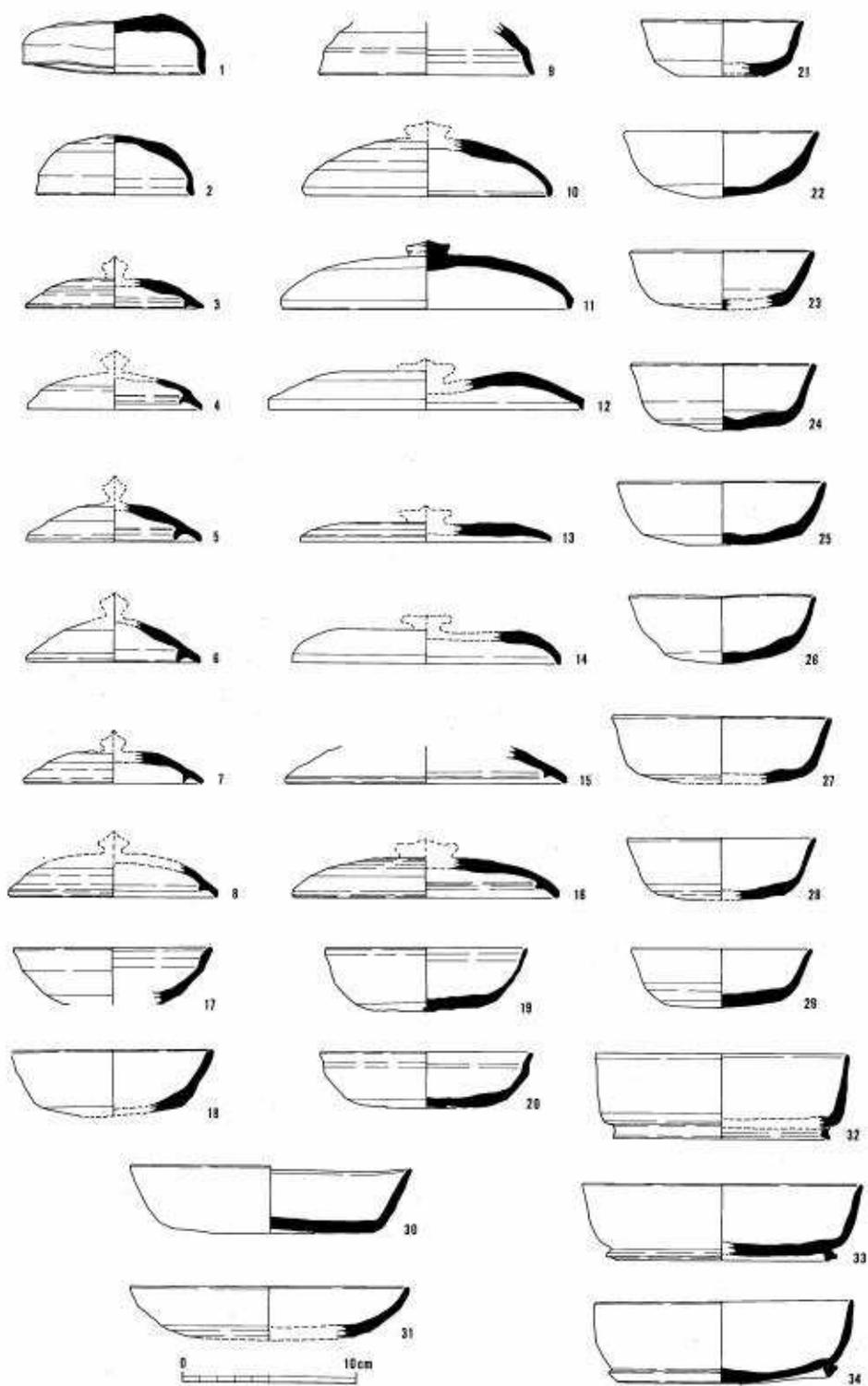
④その他の遺構

北東部にビットが集中しているが、明らかに建物跡に復原出来なかった。櫓列などに復原可能かもしれない。明らかに柱痕と考えられるビットもあることから建物・櫓の可能性は残されている。

⑤小結

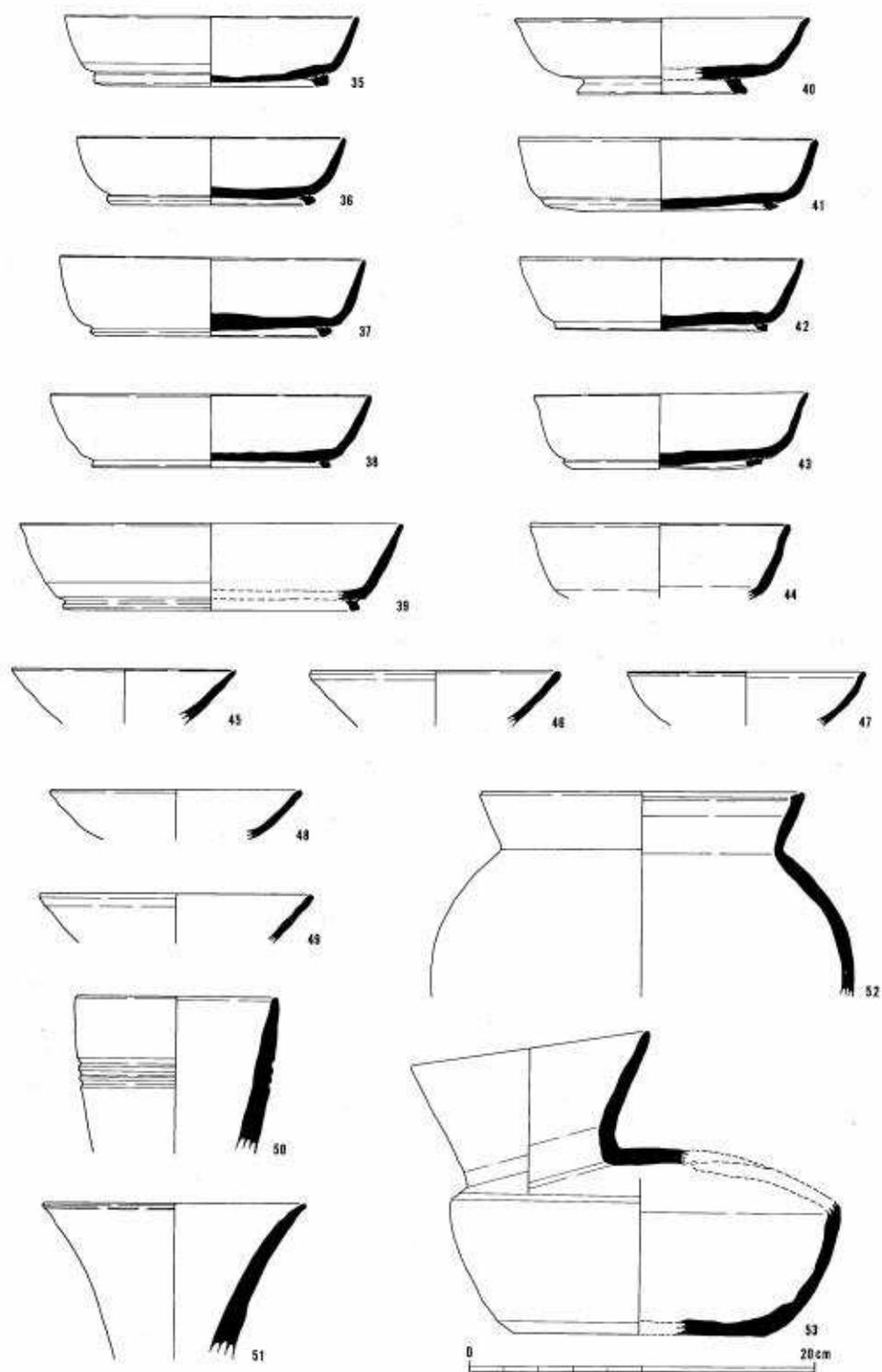
南台遺跡の西側に位置する地区である。B地区とは約35m離れており、間の部分では遺構は確認されなかった。遺構は、建物・溝・土壌など生活に関連する遺構に限られている。B地区に関連する生産遺跡や墓などは確認されていない。

南台遺跡 D地区

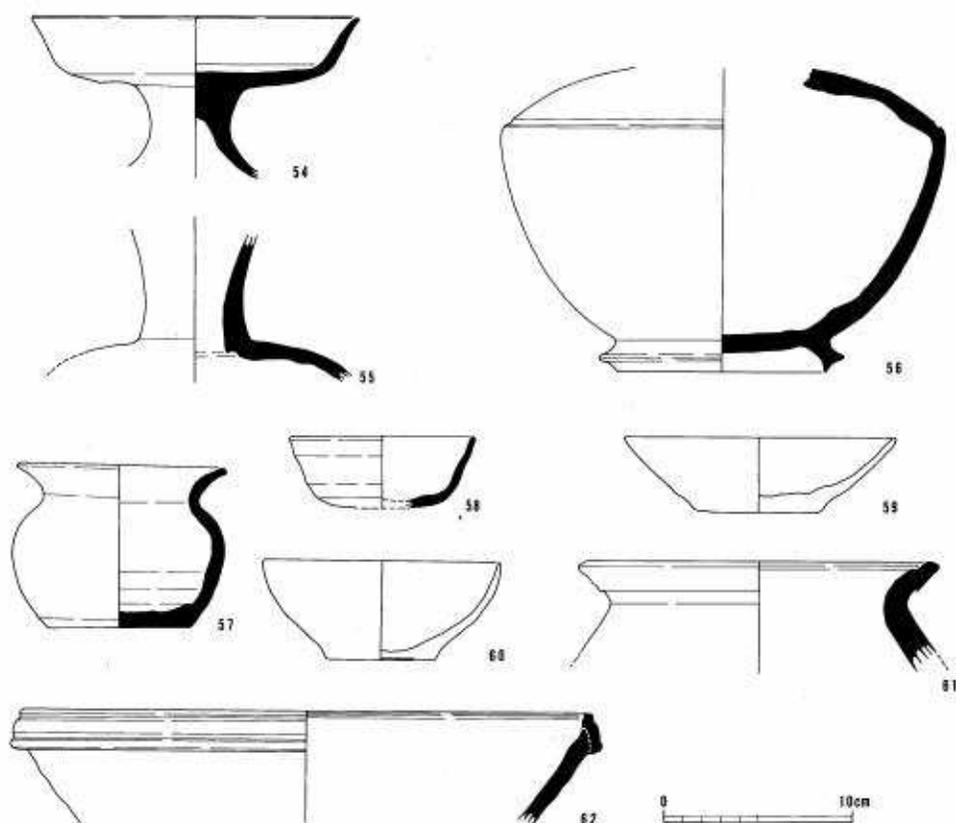


第226图 D地区出土土器(1)

南台遺跡 D地区



第227图 D地区出土土器(2)



第228図 D地区出土土器(3)

建物跡の時期は決定しがたいが、遺構面の他の遺構の時期が単一であることから、同じ時期と考えて良いかと思われる。古墳時代末の集落跡と考えられる。ただ、出土遺物には新しい時期の遺物も少量ずつながら出土している。

遺構は、建物跡2棟とそれに伴うと考えられる溝(SD02)1条が有機的な関係にある遺構である。主軸方向が同一(N5°E)であることから、特に平行に近接して築かれているSB02とSD02は関連が深いものと思われる。SD02は、SD01によって切られているが南側では検出されていないことから、SB02の南端までしか続いていることは明らかである。それゆえに、SD02はSB02に伴うものと考えられる。柵は2棟とも伴っていない。北東部分にピットが検出されているが、遺構として復原出来なかった。復原した場合でも主軸方位は異なり、時期差があるものと思われる。

出土遺物のほとんどは、SD01内の土器群である。須恵器を主とした遺物が多数出土しており、廃棄したものかと思われる。SD01出土遺物は奈良時代の遺物が多く、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

建物跡とSD02の遺構の時期と、他の遺構の時期の2時期に大別出来るものと思われる。

第4章 北浦地域の調査

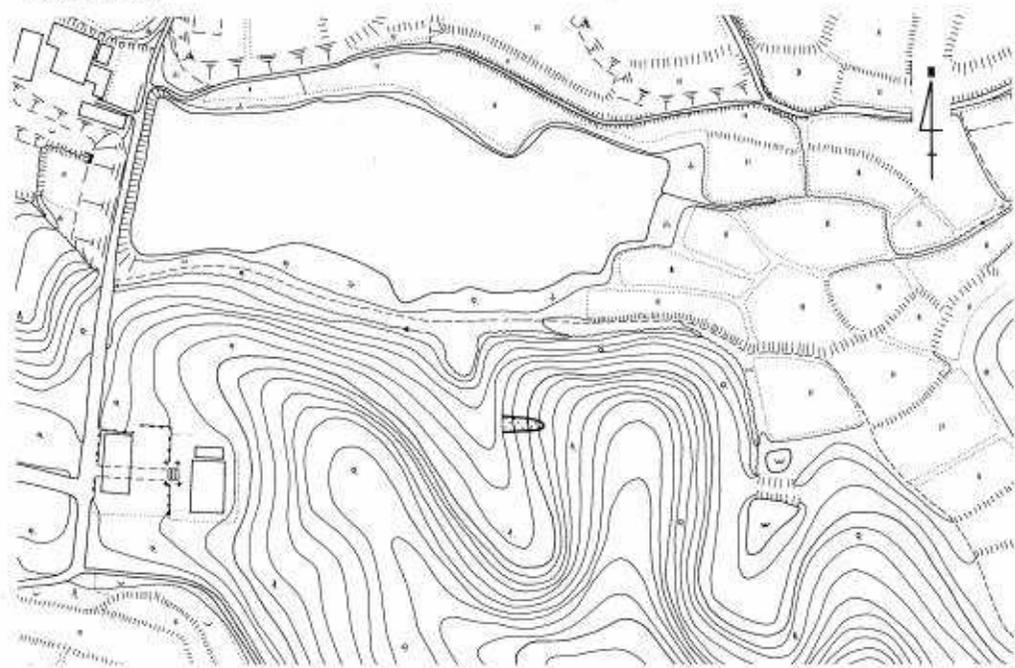
第1節 みどろ池窯跡 (AK-76)

みどろ池窯跡は、地福窯と同じ丘陵の反対斜面に位置する。この窯については、地形測量をおこなったところ、地形から推定される窯体および灰原の位置がダム満水時の最高水位面187m以上にあたることから、保存が可能と判断し、調査は実施しなかった。このため、窯の基数・規模・構造・操業回数などについての詳細は、明らかにしえない。

ただし、ボーリングステッキによるボーリング調査の結果、及び地形測量による微地形の観察において、窯体の位置が推定できる(第230図の推定線)。さらに、灰原についても、窯体の下方がテラス状となっており、その位置が明瞭に観察できる。

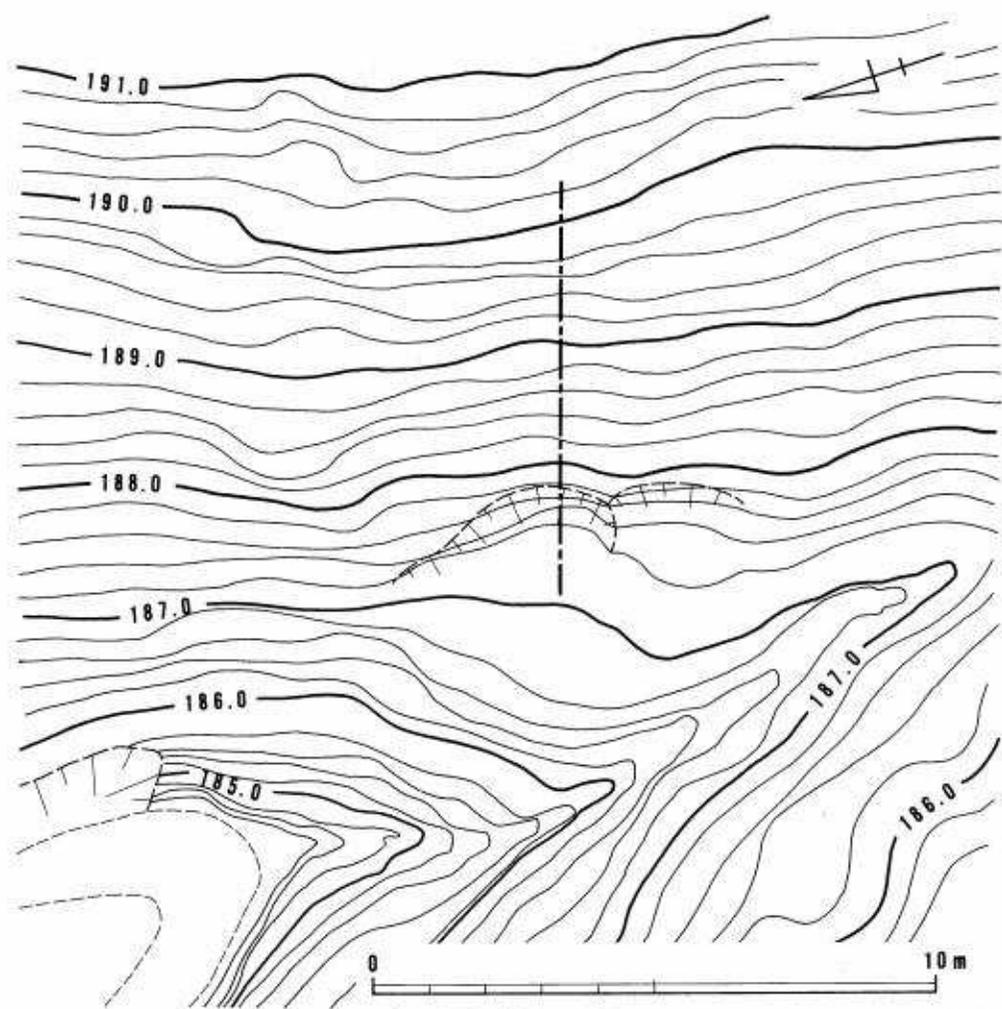
また、同じく微地形の観察によると、窯体の周囲に周溝の存在も推定できる。

当窯の時期については、調査が行われていないため、明確にしえない。ただ、灰原下部の谷部において、遺物を若干表採しており、ある程度の時期をおさえることは可能である。表採遺物としては、坏A・坏B・坏蓋・甕・長頸壺などがあるが(第231図)、皿は表採されていない。これらの遺物から、末古窯跡群において最も操業が盛んであった時期のものと考えられる。

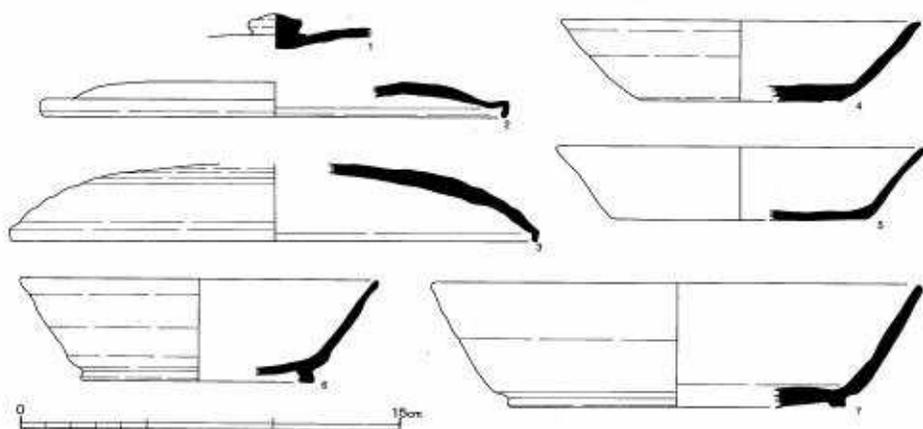


第229図 位置図 (1:2000)

みどろ池窯跡



第230図 地形測量図



第231図 表採土器

第2節 みぞむかい 溝向遺跡 (AK-78)

1. 立地

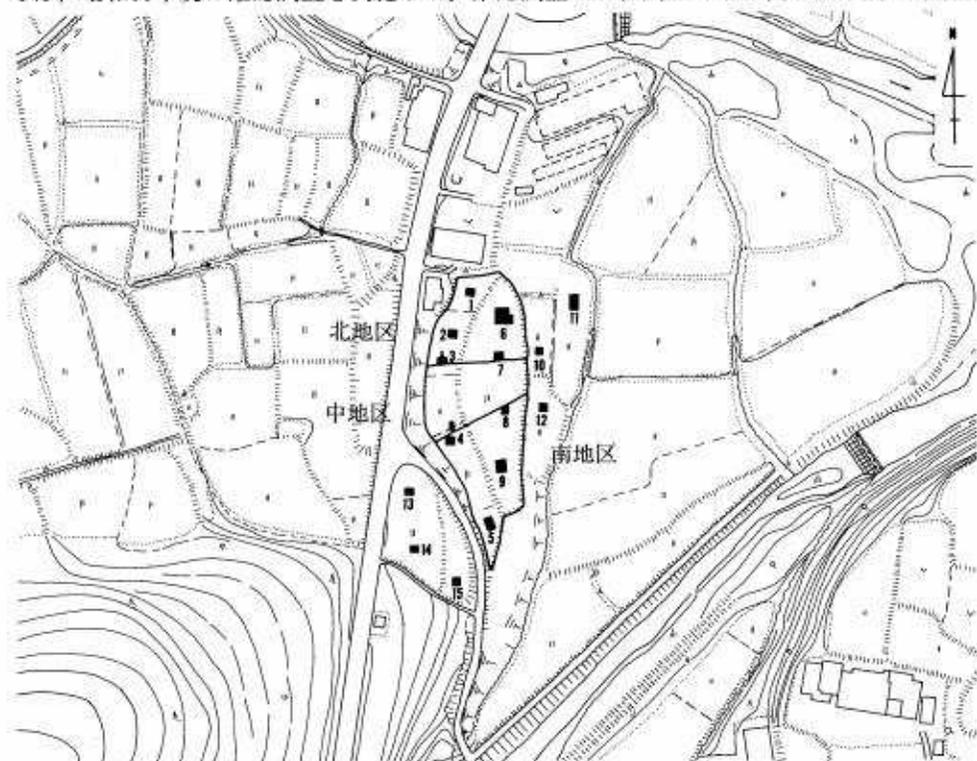
溝向遺跡は、三田市末東字溝向に所在する。遺跡は、東面して青野川にのぞむ丘陵の、小規模な平坦面上に立地しており、調査地付近の標高は約172mを測る。青野川をはさんで東南方には井ノ方遺跡 (AK-80)、西方の丘陵上には溝ノ尾遺跡 (AW-71) が立地している。

溝向遺跡が立地する地形面を詳細に見るならば、西から東へゆるやかな傾斜をもって下るとともに、調査地中央部には、東に開く小規模な谷が入りこんでおり、その南・北が微高地となっている。遺構はこの微高地、及び谷が自然埋没した後に形成された平坦面上に分布している。

調査区は、遺構が分布する地形面をほぼその内におさめており、今回の調査によって遺跡の全領域を把握できたと考えられる。

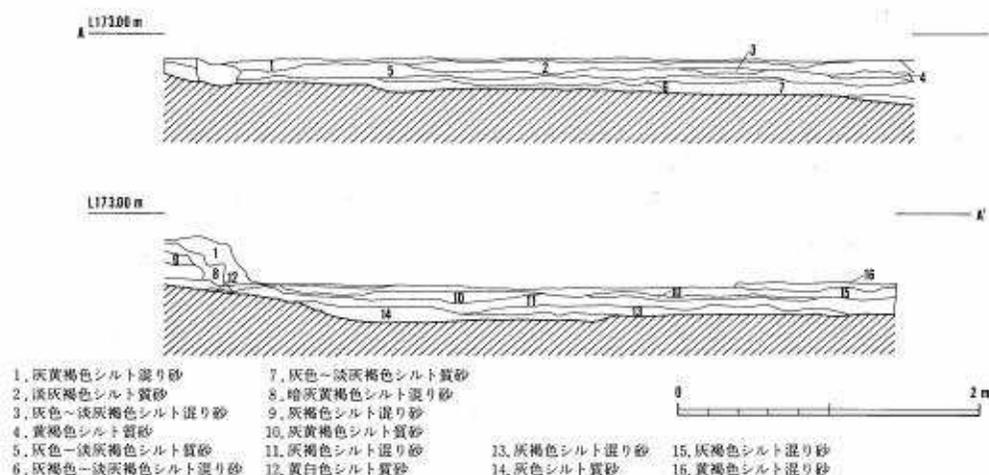
2. 調査の経緯と経過

本遺跡は、青野ダム建設によって削平・水没する地域にあたるため、兵庫県教育委員会では、昭和60年度に確認調査を実施した。確認調査では、周辺の水田面で15か所の坪掘り



第232図 位置図 (1:2000)

溝向遺跡



第233図 土層断面図

をおこなったが、その結果、先述の微高地に相当する部分から遺構を検出したため、各々北・南地区と仮称して、全面調査を実施した(第232図)。

この全面調査の際、遺構の一部が両微高地間の谷部分にも分布することが確認されたため、この部分を中地区と仮称して、あわせて全面調査の範囲とした。

調査地内では、0.3～1 mの土壌の堆積が見られたが、全面調査に際しては、近世以降の遺物を含包する上部については重機によって掘削し、以下については人力による掘削をおこなった。

遺構面の調査は、北地区－南地区－中地区の順に実施した。この際に、北・南地区の微高地上で旧石器の出土をみたため、遺構面の調査終了後、基盤の黄褐色シルト層のトレンチ調査をおこなったが、遺物の出土は見られなかった。

また中地区の谷部の堆積状況と埋没時期を決定するため、トレンチ調査をおこなった。

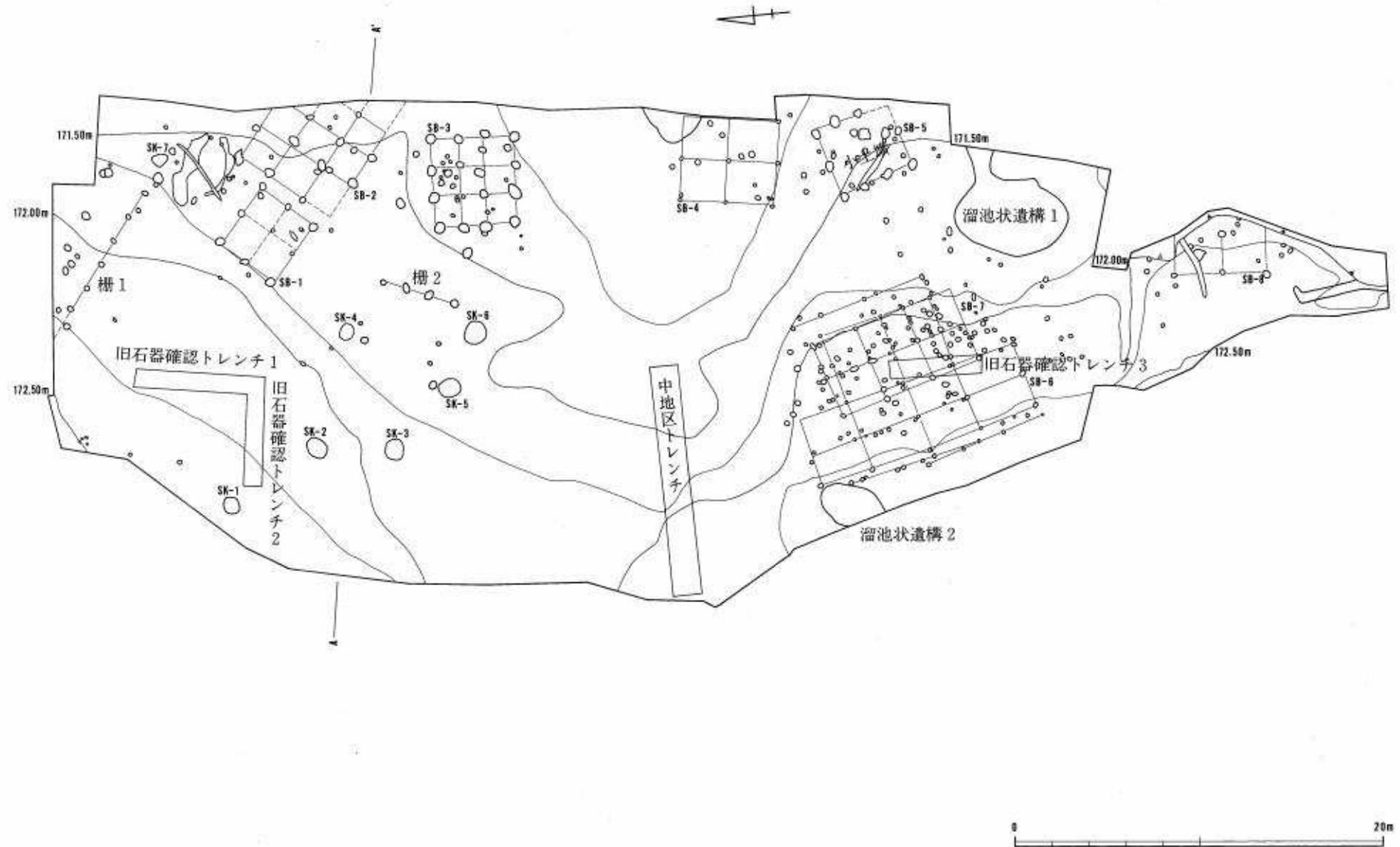
3. 層序 (第233図)

調査区内では、基盤が東方に下る傾斜をもち、その上に0.3～1 mの堆積がみられた。南北の微高地部分では、総じて堆積物は薄く、中地区及び調査区東側では厚みを増す。

現表土(耕土)下には、旧水田面ないしは水田造成時の客土かと思われる、灰色～灰褐色の砂質シルトが堆積している。このシルト層は数枚以上に細分されるが、各層にわたって近世以降の遺物が混在していた。さらに堆積の厚い部分では、基盤上にやや暗い灰色～灰褐色を呈するシルト層が認められたが、これが、中世の遺物包含層にあたる。基盤層は、水成堆積物と考えられる黄褐色シルト層である。

中地区の谷部分では、近世以降の灰色～灰褐色シルト層・中世遺物包含層の下位に、谷を埋める砂礫・黒褐色シルト等の堆積が認められた。

溝向遺跡



第234図 遺構全体図

4. 遺構と遺物

調査によって検出された遺構は、掘立柱建物跡8棟、土塋9基、溜池状遺構2基、溝5条の他、多数の柱穴である(第234図)。遺構は、微高地部では基盤の黄褐色シルト層上面で、谷部では埋没後の平坦面を形成する灰色シルト層上面で各々検出された。

遺構の遺存状況は全般にやや悪く、柱穴の深度は、微高地上では10cmに満たないものが見られたことから、耕地化された際に削平を受けた部分も多かったものと思われる。

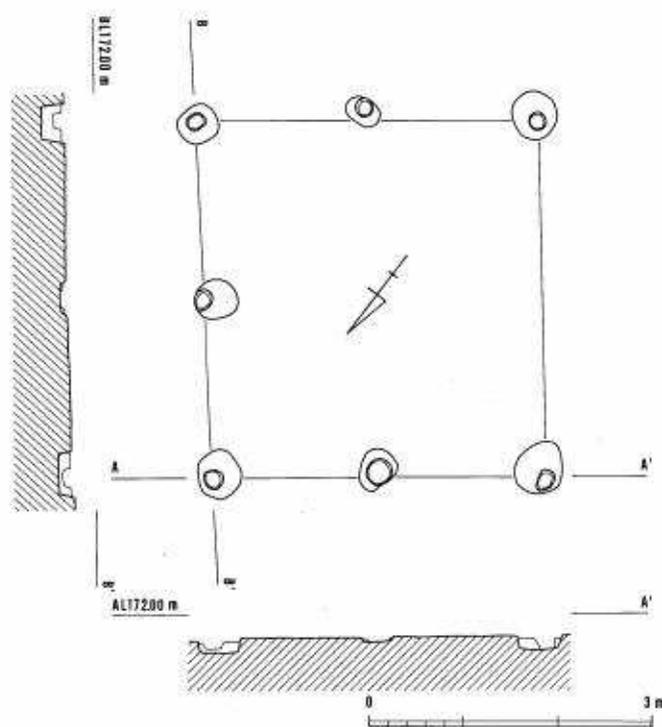
遺構内からの出土遺物は少なく、またその大半を細片が占めているため、時期決定に困難を伴うものが少なくないが、断片的な出土遺物から見ると、概ね、奈良時代～鎌倉時代におさまるものと思われる。

(1) 掘立柱建物

建物跡は、8棟が確認された。いずれも掘立柱建物である。北地区2棟、中地区2棟、南地区4棟の分布状況を示す。建物跡は、その方位から、3～4群に分けられ、平安時代末～鎌倉時代前半期のものが主体を占める。

掘立柱建物1 (SB-1)

調査区北東部に位置する。2×2間(3.6×3.8m)の建物跡である。柱穴の遺存状況は極めて悪く、深さ10cmに満たないものもある。南辺中央の柱穴を欠いている。また、建物



第235図 掘立柱建物1

跡中央部でも、調査時に柱穴に痕跡と考えられるわずかな凹みが見られたことから、総柱の建物であった可能性が高い。

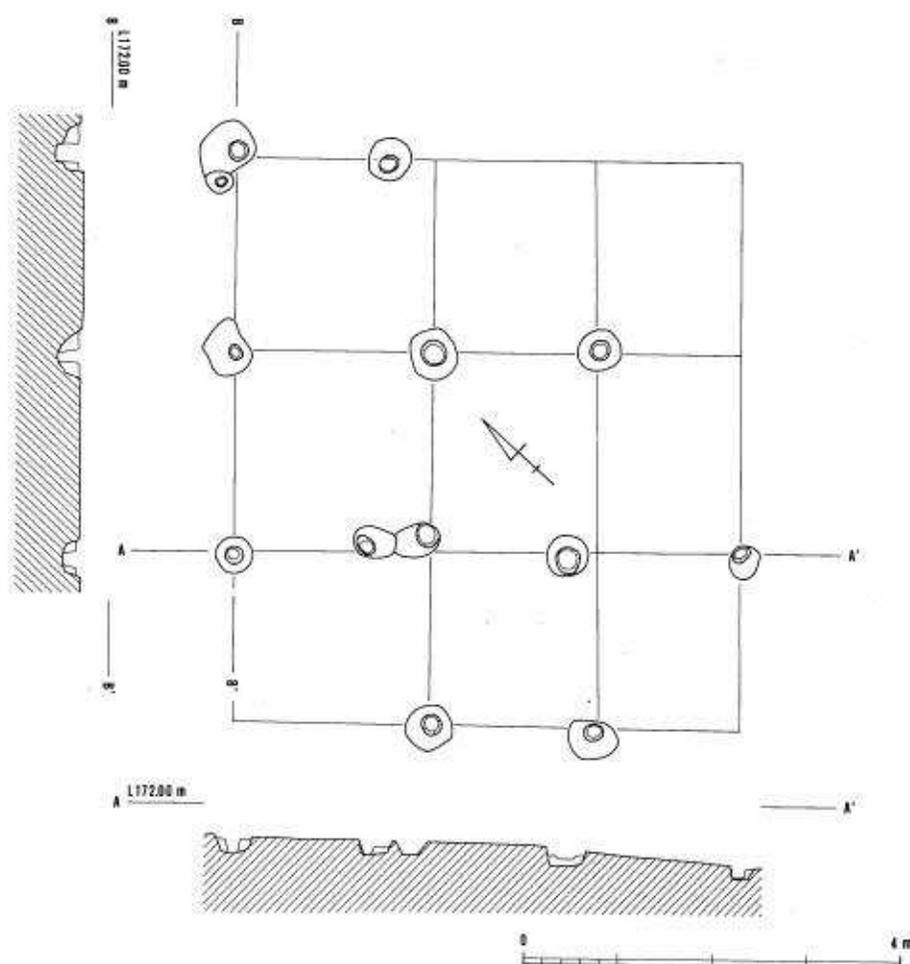
建物の長軸は、南北より約45度傾斜している。

柱穴は直径40cm前後の不整形であり、柱痕部は直径15cm内外をはかる。柱穴埋土は、暗褐色の砂質シルトである。

遺物

柱穴の遺存状況が極めて悪かったため、遺物はほとんど出土していない。わずかに柱穴1より須恵

溝向遺跡



第236図 掘立柱建物 2

器の小型の壺と思われる口縁部破片と、土師器片が出土したのみである。

壺口縁部は、ほぼ水平に開き端部をまるくおさめるもので、小型の長頸壺と思われる。

掘立柱建物 2 (SB-2)

調査区北東部に位置する。建物跡 1 に近接し、同一方位を向くことから、ほぼ同時期の建物跡であろう。調査区内では 3 × 3 間 (5.4 × 6.4m) の範囲まで検出されたが、さらに東側へ広がっていた可能性もある。

柱穴は直径 30 ~ 50cm の不整形形で、柱痕部は直径 15 ~ 20cm をはかる。

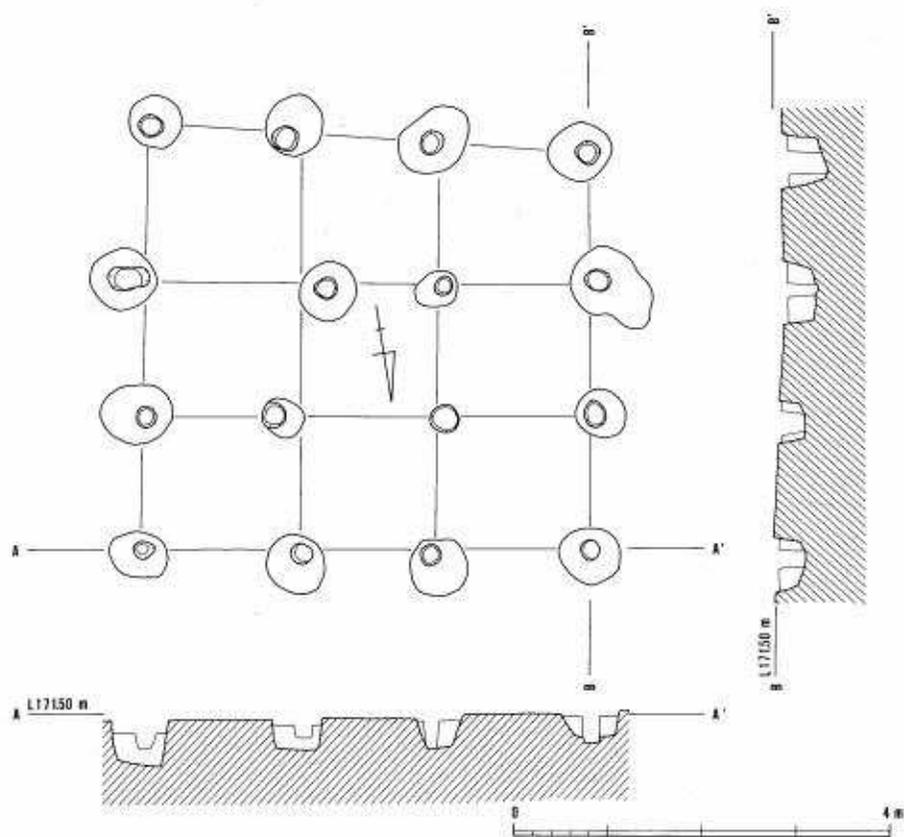
柱穴の遺存状況はやはり不良で、一部の柱穴を欠いている。柱穴埋土は、掘立柱建物 1 とほぼ同様である。

遺物

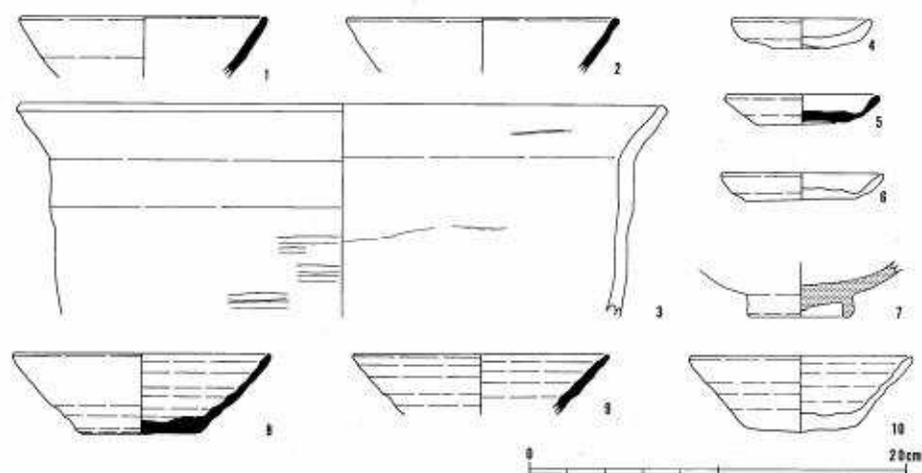
柱穴内からは遺物の出土を見ず、建物跡の時期は不明である。

掘立柱建物 3 (SB-3)

中地区南東部に位置する。検出面は、谷部分を埋める灰色～褐色シルト質砂礫層上面で

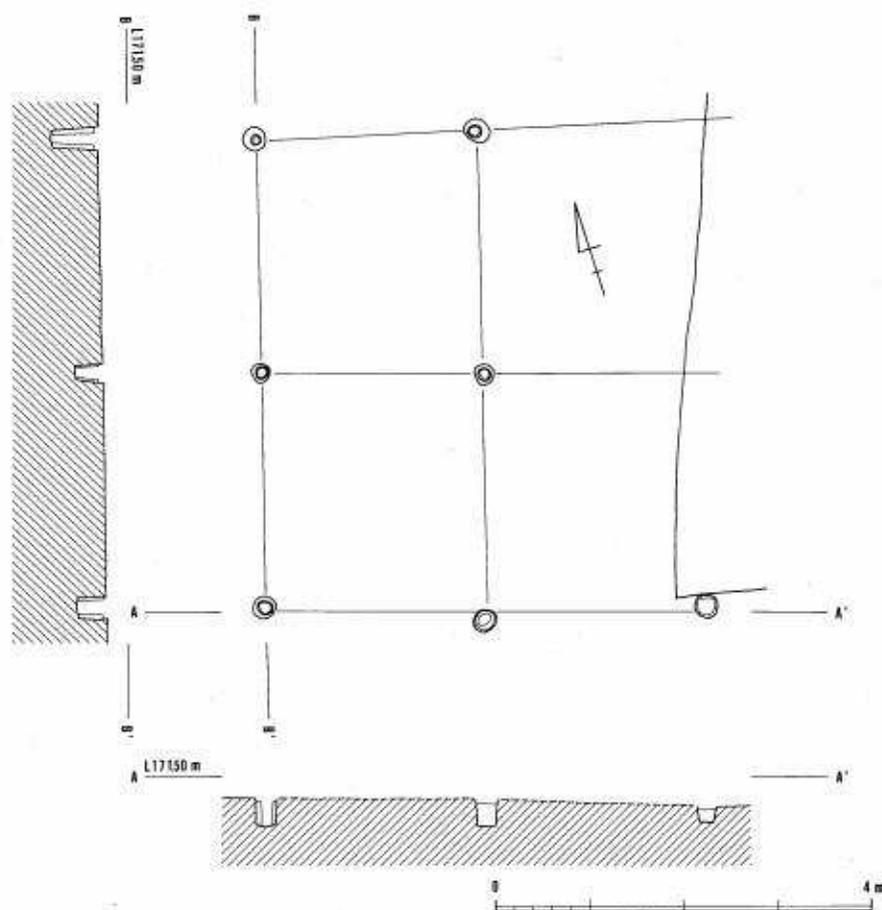


第237図 掘立柱建物 3



第238図 遺構出土土器

溝向遺跡



第239図 掘立柱建物 4

ある。3×3間（4.8×4.6m）の総柱建物で、方位は東西に一致する。

建物の東辺は、西辺より約40cm長く、柱穴列は東に開く形をとっている。

柱穴規模は大きく、最大値径約80cmの不整形を呈し、柱痕部は直径20～25cmをはかる。建物内側の4基の柱穴は、周辺よりも小規模で浅い傾向がある。柱穴の遺存状況は良好で、深さは30～40cmをはかるが、これは本建物跡が他よりも低い位置にあるため、耕作による削平を受けなかったためであろう。

遺物

柱穴1内より、須恵器小皿1点が出土している（第238図5）。

回転系切りの底を有し、体部下半はやや強いヨコナデによって、わずかに外反気味に立ち上がる。口縁部は肥厚しており、端部はまるくおさめている。口径8.3cm、器高1.5cm。12世紀後半に属するものであろう。

掘立柱建物 4 (SB-4)

中地区東南部に位置する。調査区内では2×2間(5.0×4.7m)まで確認できたが、さらに東側へ広がっていた可能性が高い。総柱建物で、長軸は東西方向にあった可能性が高い。検出面は、谷部分を埋める灰色シルト層上面で、柱穴埋土は暗灰色シルトである。

柱穴は直径25cm前後の円形で、柱痕は直径15cm前後をはかる。

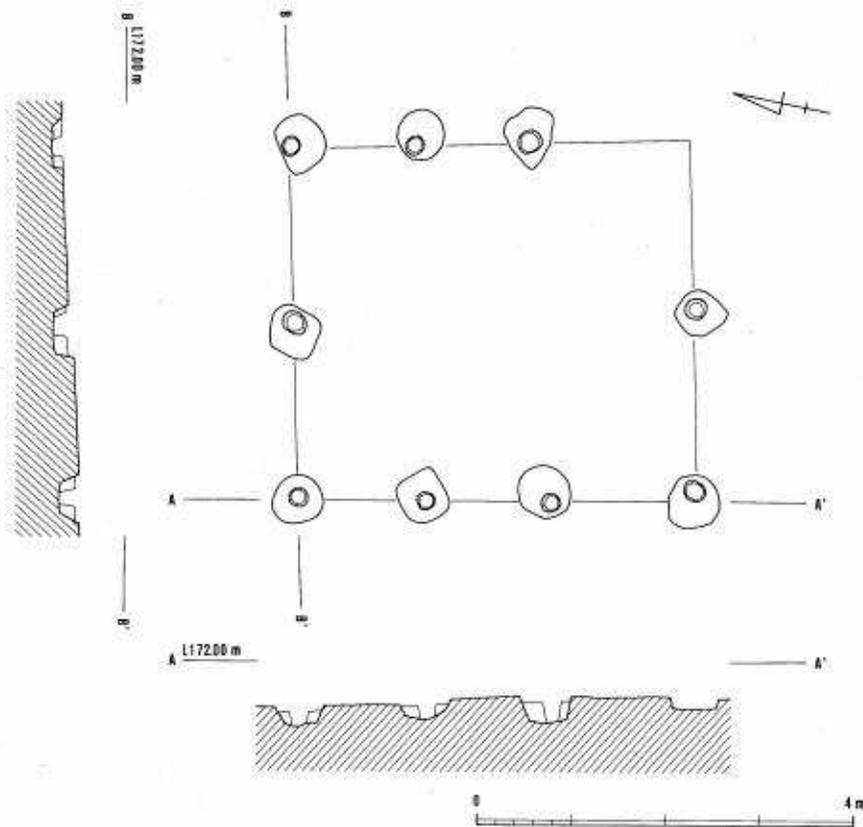
掘立柱建物 5 (SB-5)

南地区東部に位置する。2×3間(3.8×4.2m)の建物跡である。長軸は南北方向にある。検出面は基盤の黄褐色シルト層上面で、柱穴埋土は、灰色～灰褐色砂質シルトである。柱穴の遺存状況は不良で、深さ20cm前後が残存していた。東南隅の柱穴は、開墾のため消滅していた。

柱穴は、直径40cm前後の不整円ないし不整四辺形で、柱痕部は直径15～20cmをはかる。

遺物

柱穴1より須恵器埴2点(第238図1・2)が、また柱穴9より土師器甕(第238図3)がそれぞれ出土している。



第240図 掘立柱建物 5

須恵器壺は、復原径が14cm前後をはかるものである。

1は、体部上半がわずかに外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや上方に向けてまるくおさまられたものである。

2は、口縁部外面をヨコナデによって外反させている。

3は、復元口径34.0cmをはかる大型の甕である。口縁部外面にススの付着が認められ、煮沸用土器として用いられたものであろう。

上半部では、ほぼ垂直に立ち上がる体部から、ゆるやかに屈曲して口縁部に至っている。体部には、平行タタキ目が観察され、口縁部外面付近はヨコナデによって調整されている。

口縁端部は、ヨコナデによって、外に傾く面を形成している。

掘立柱建物6 (SB-6)

南地区西半の微高地上では、多数の柱穴が検出されたが、その中から2棟の建物跡が復原された。さらに多くの建物跡が重複していた可能性が高い。

掘立柱建物6は、4×4間(7.8×12.6m)の総柱建物である。柱穴の遺存状況は良好とは言えず、北辺3基、南辺2基の柱穴が消滅している。南北に長軸があり、桁行は梁行の約2倍の長さとなっている。

柱穴は直径25cm前後の円形で、柱痕部は直径15cm前後をはかる。

遺物

各柱穴からの出土遺物は細片が多く、図示しうるものはなかった。

須恵器壺、土師器小皿等が出土している。

須恵器壺は高台をもたず、底部から体部への立ち上がりにも、シャープな稜を形成しないものである。また、口縁部の破片は、緩やかに内彎しながら立ち上がり、端部をやや肥厚させつつまるくおさまるものである。

細片のため時期の確定は困難を伴うが、概ね12世紀末～13世紀前半に比定しうるものと思われる。

掘立柱建物7 (SB-7)

掘立柱建物7は、3×3間(8.0×6.4m)まで復原された。掘立柱建物6と同一方位を有する、総柱建物跡である。桁行が梁行と1.2～1.3倍の長さを有する。

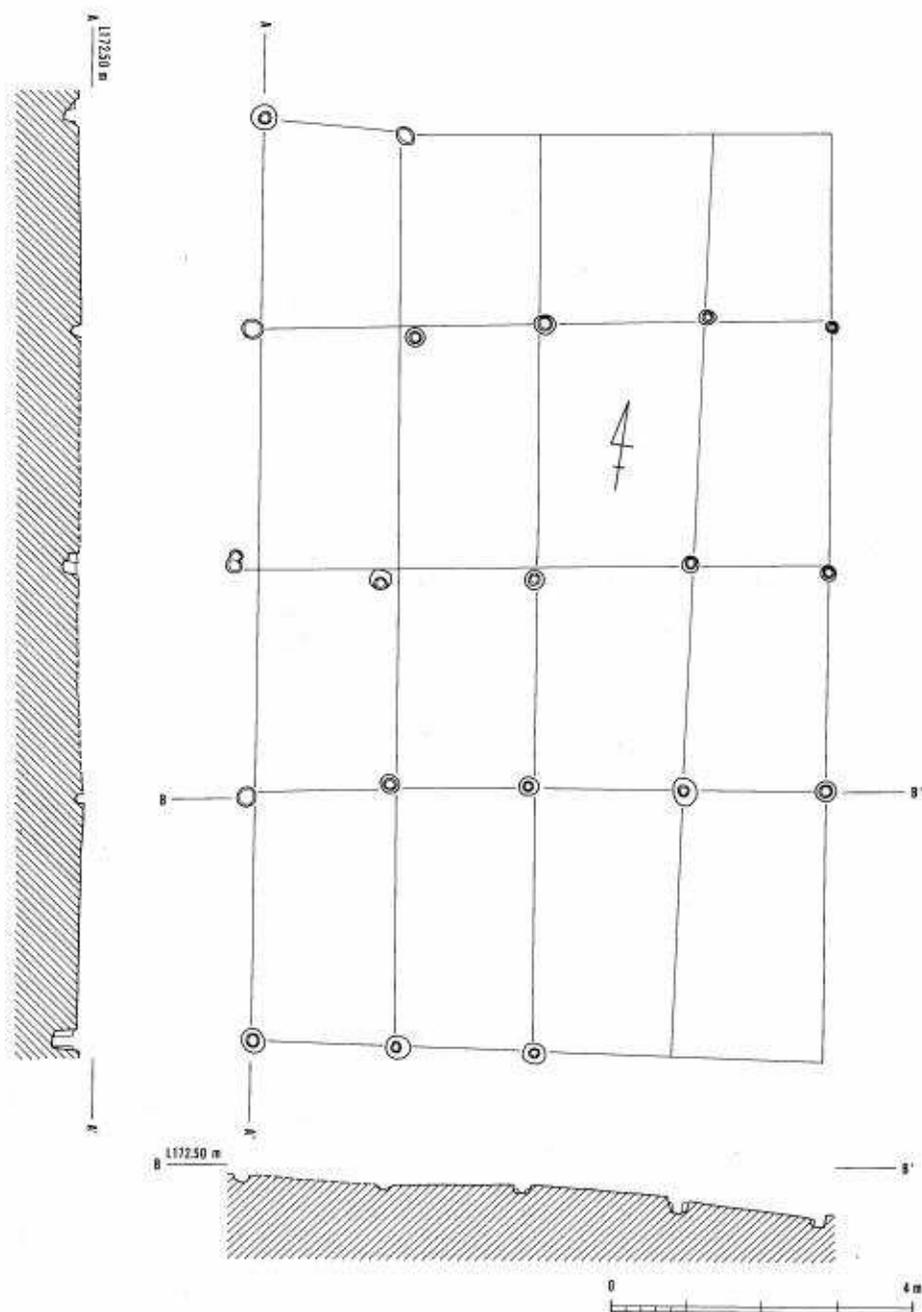
柱穴は建物跡6よりやや規模が大きく、直径30cm前後の円形を呈し、柱痕分は直径15～20cmである。

遺物

柱穴内からの出土遺物は、建物跡6と同様細片のみで、図示しうるものがなかった。

須恵器壺、土師器小皿、青磁等が出土している。

溝向遺跡



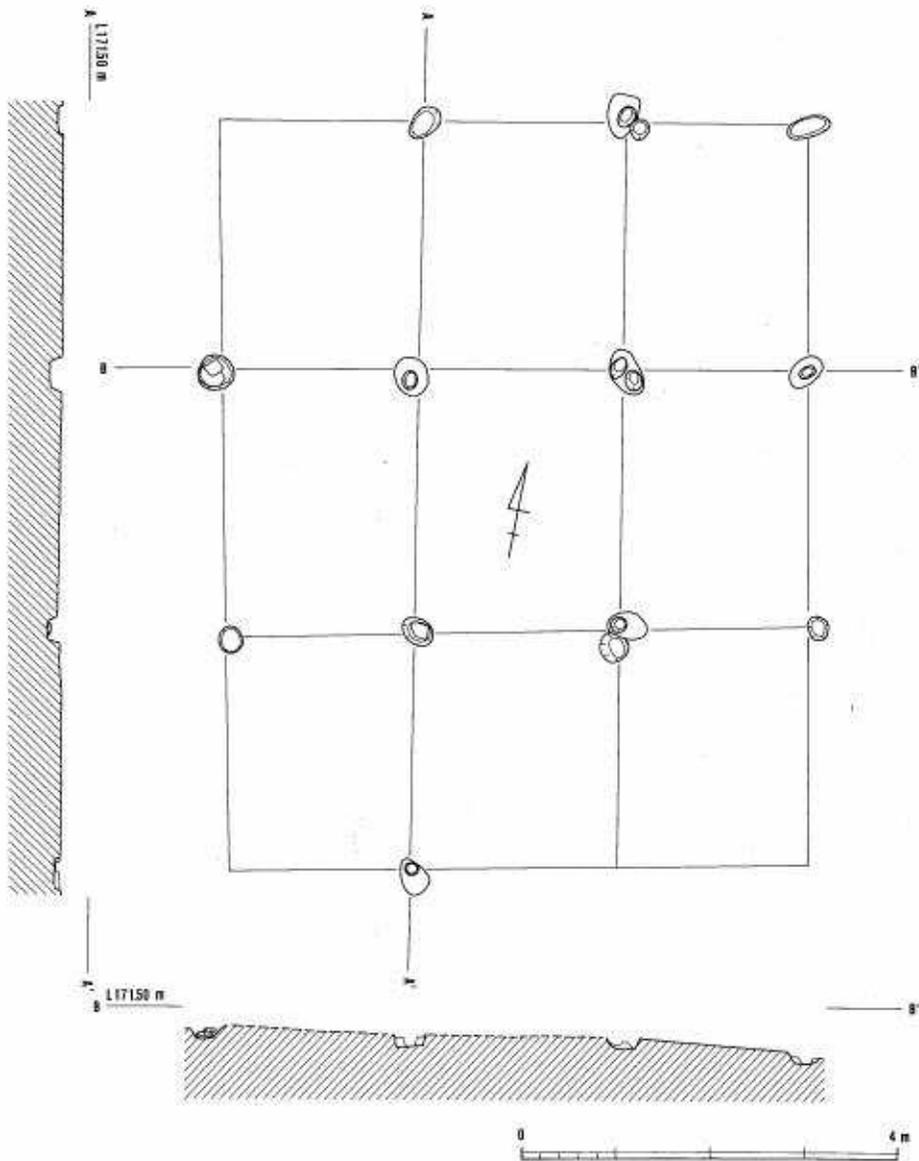
第241図 掘立柱建物 6

須恵器坑には、糸切底を有し、体部へ緩やかにつづくもの、やや肥厚させつつまるくおさめた口縁端部等が認められ、所属時期も建物跡6と大きな懸隔はないものと思われる。

掘立柱建物 8 (SB-8)

調査区南東隅に位置する。2×1間(5.2×2.0m)まで検出されたが、東側は開墾によ

溝向遺跡



第242図 掘立柱建物 7

って完全に削平されていた。ほぼ南北に方位を有する。

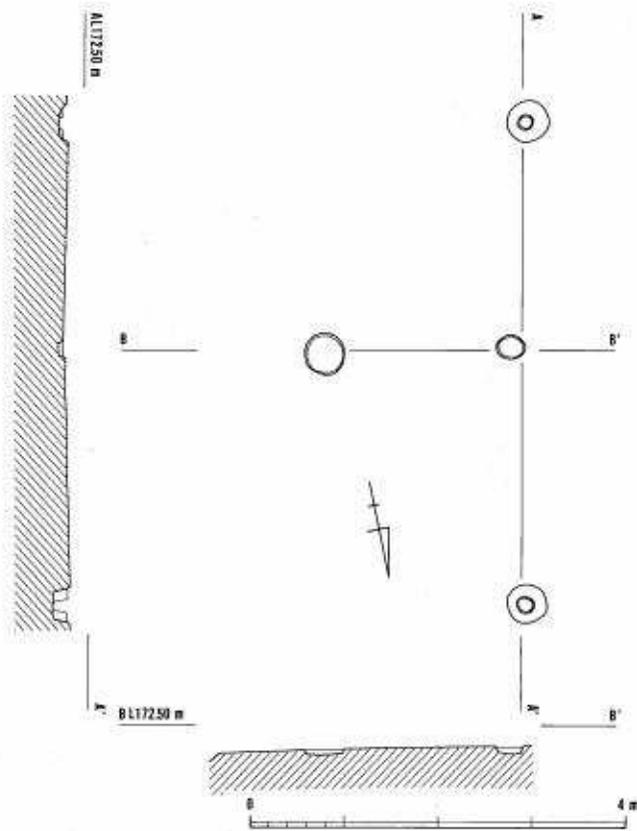
柱穴は直径30cm前後の円形で、柱底部は直径15cm前後をはかる。

検出面は基盤の黄褐色砂質シルト上面で、柱穴埋土は灰色～灰褐色砂質シルトである。

(2) 柵

北地区において、2か所で柱穴列が検出された。いずれも柱穴が直線状に並ぶもので、柵状の遺構と考えられる。

溝向遺跡



第243図 掘立柱建物 8

柵 1 (第244図 1)

北地区北端に位置する。5間(7.5m)まで検出された。建物跡1・2と同一方位にのびることから、この2棟に付属する施設であったと考えられる。

柱穴は直径30cm前後の不整円、あるいは四辺形で、柱痕部は直径15cm前後をはかる。

検出面は基盤の黄褐色シルト層上面で、柱穴埋土は暗灰色砂質シルトである。

遺物は出土を見なかった。

柵 2 (第244図 2)

北地区南半部に位置する。3間(4m)まで確認された。南北よりやや東へ傾斜した方位を有する。方位を同じくする建物跡等はなく、削平された建物跡の一部である可能性もあろう。

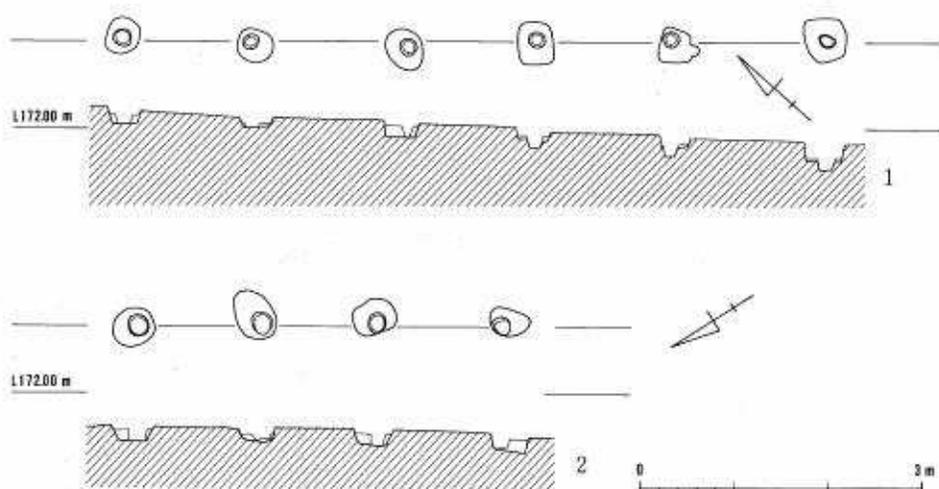
柱穴は直径30cm前後の不整円形で、柱痕は直径20cm前後をはかる。

検出面は、基盤の黄褐色砂質シルト層上面であり、柱穴埋土は灰色砂質シルトである。

(3)土壌 (第245・246図)

北地区で7基、南地区で1基の土壌が検出された。

溝向遺跡



第244図 柵1・2

北地区で検出された土塚1～7は、いずれも円形あるいは不整形を呈し、直径1～1.5mをはかるものである。

垂直に近い掘り方を有するもの(1・4・5・7)と、皿状のもの(2・3・6)とに大別される。埋土はいずれも自然堆積の状態を呈している。

いずれもほとんど遺物が出土しておらず、所属時期・機能は全く不明である。しかし、北地区の他の遺構とまったく重複しないことから、建物跡等と近接した時期の可能性もあろう。

南地区土塚8は、掘立柱建物5と重複した位置で検出されたが、柱穴との直接的切り合いがなく、前後関係は明らかではない。一辺70cm前後の不整形四辺形を呈し、二段に掘りこまれているが、遺存状況は極めて悪く10～15cm程度の深度しかない。

遺物

北地区の土塚では、土塚2の埋土中から、須恵器・土師器の細片が出土したのみである。南地区土塚8からは、土師器小皿1点が出土している(第238図6)。回転糸切り底を有し、体部下半にヨコナデによると思われる弱い稜を形成する。口縁部は丸くおさめている。口径8.4cm、器高1.4cm、底径5.9cm。

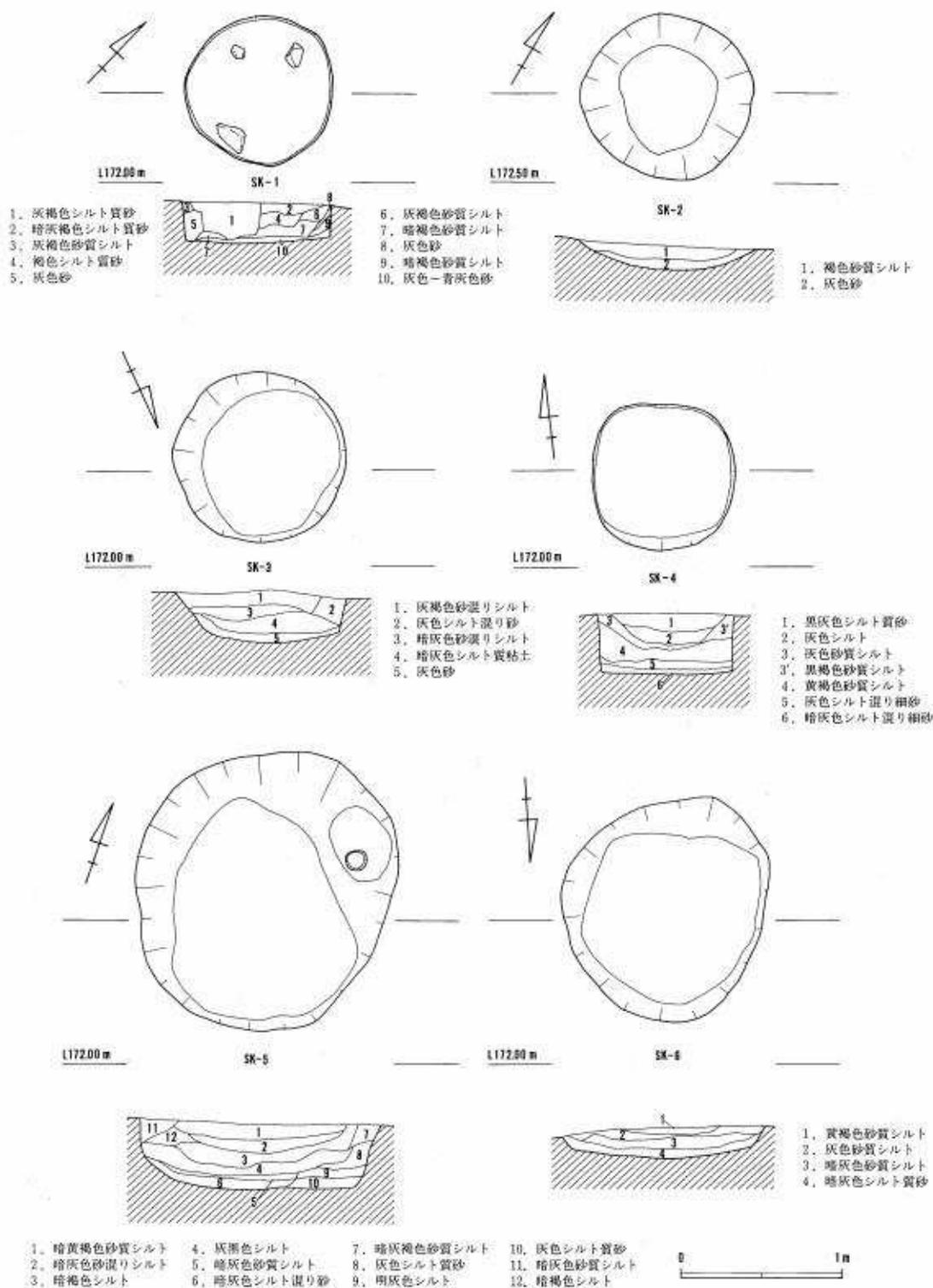
(4)溜池状遺構

南地区の微高地上東端部と、西端部とで2基が検出された。いずれも土塚と比べて規模が大きく深いことから、溜池状遺構と呼称した。いずれも中世の遺構を切っており、本遺跡での集落廃絶後、耕地化された際に掘削されたものであろう。

溜池状遺構1 (第247図)

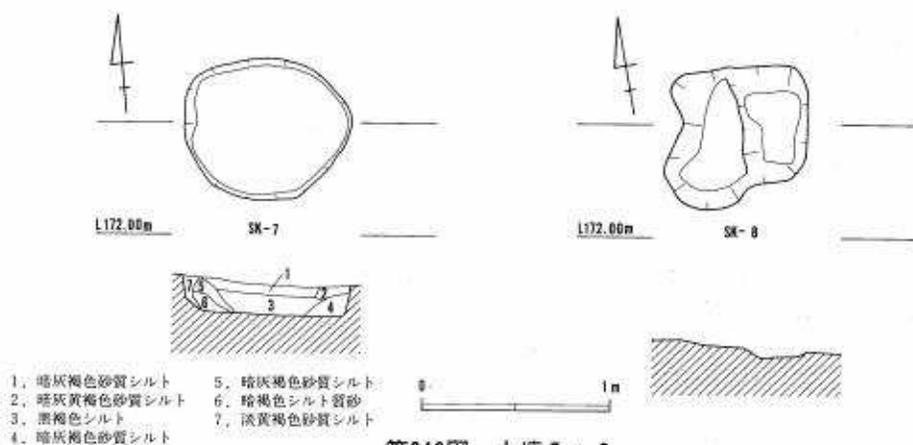
南地区東端部に位置する。長径6m、短径4mの楕円形を呈し、深度は0.6mをはかる。

溝向遺跡



第245図 土壌 1 ~ 6

溝向遺跡



第246図 土壌 7・8

深皿状の落ちこみを見せ、東側には出水口とみられる幅約1.7mの溝がのびている。この溝内から、池の北側にかけては、巨礫が投入されており、周辺に石組施設が存在したか、または、人為的に埋没された際の投入であったものと思われる。

遺構内の堆積は、下部が自然堆積を示し、上部は人為的埋没によるものと思われる。

遺物

遺物はほとんど出土しておらず、わずかに磁器碗底部があるのみである(第238図7)。

溜池状遺構 2 (第248図)

南地区西端に位置する。長径4.0m、短径2.3m、深度0.4mをはかる。遺構埋土が建物跡6の柱穴をわずかに被覆していたため、これよりも新しい時期に比定できよう。

埋土は暗灰色を呈する砂質シルト～シルト質砂で、溜池状遺構1と同様、多量の巨礫を投入することによって埋没されている。

遺物

縄文時代に属すると思われる石鉄1点が出土したのみで(後述)、他には見られなかった。

その他の遺構内出土の遺物 (第238図)

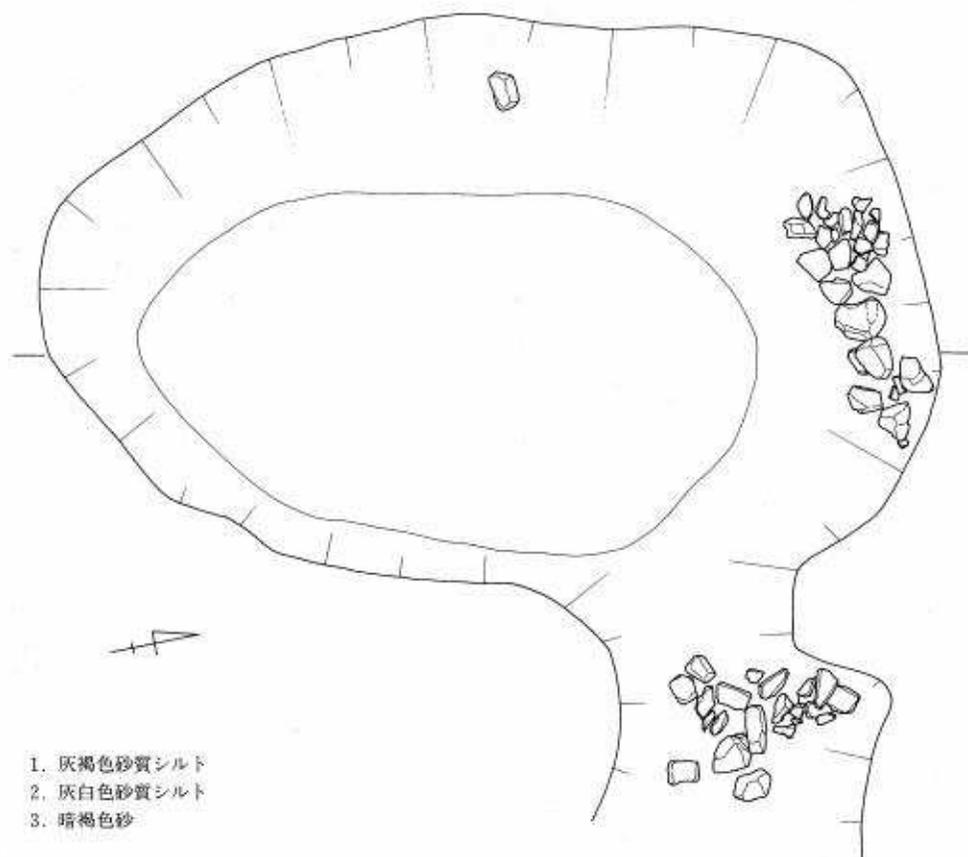
北・中地区では、柱穴内からの出土遺物はごく少数であったが、南地区の微高地上、特に建物跡6・7周辺に分布する多数の柱穴群からは、小片ながら遺物の出土は少なくなかった。主な出土遺物は、須恵器碗、土師器碗・小皿である。

須恵器碗 (第238図8・9)

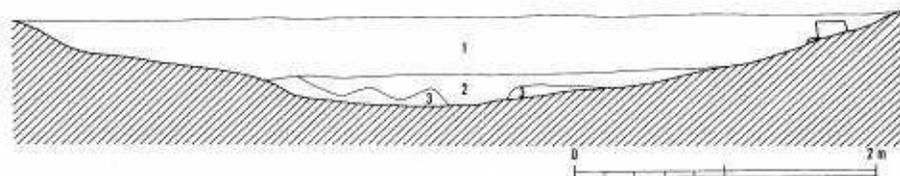
いずれも南地区の出土である。8は柱穴1、9は柱穴8より出土している。

8は、回転系切り底を有し、ヨコナデによって仕上げられている。体部外面下半は、強いヨコナデによって、2条の弱い稜を形成している。体部は緩やかに内彎気味に立ち上がり、口縁端部はまるくおさめられている。復原口径13.9cm、器高4.3cm、底径6.2cm。

9も8と近似したものであるが、8と比べて直線的に立ち上がる体部を有している。ヨ



L172.00 m



第247図 溜池状遺構 1

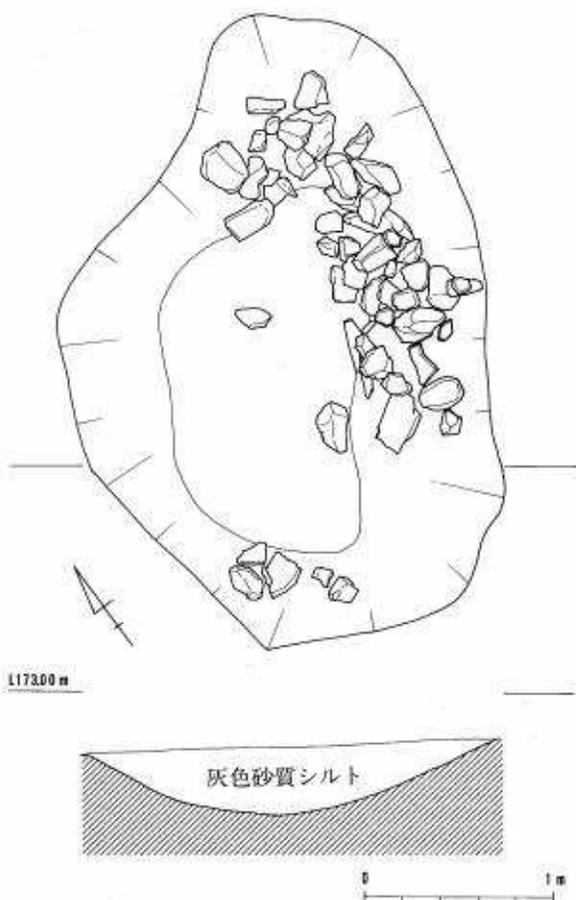
コナデによって仕上げられており、口縁端部はまるくおさめられている。復原口径13.4cm。
土師器埴 (第238図10)

10は南地区柱穴70より出土した。形態は須恵器埴に近似している。回転糸切り底を有し、ヨコナデによって仕上げられている。体部はやや外反気味に立ち上がっている。

土師器小皿 (第238図 4)

4は南地区柱穴62より出土した。手づくね成形による土師器小皿である。磨耗のため、調整痕は鮮明ではない。復原口径7.2cm、器高1.6cm。

溝向遺跡



第248図 溜池状遺構 2

包含層出土の遺物

包含層からは、既述のように古墳時代（6世紀）～近世にわたる、多様な遺物が出土している。主要な遺物は、第249図～第256図に示した通りである。

須恵器には、皿、坏、埴、甕、鉢、鍋等、多様な器種が見られる。

平安時代末～鎌倉時代に属すると思われる埴は多数出土しているが、うち1点は底部に墨書が施されている。

77は、底部外面に墨書が施されたものである。外反気味に立ち上がる体部をもち、底部周縁はやや強いヨコナデが施される。底部は、回転糸切りがおこなわれている。底部には、「 」形の墨書が施されるが、文字とは考え難く、何らかの記号的なものであろう。

78は大型の鉢である。ほぼ直線的にひらいて立ち上がる体部をもち、口縁部は垂直につまみ上げられている。

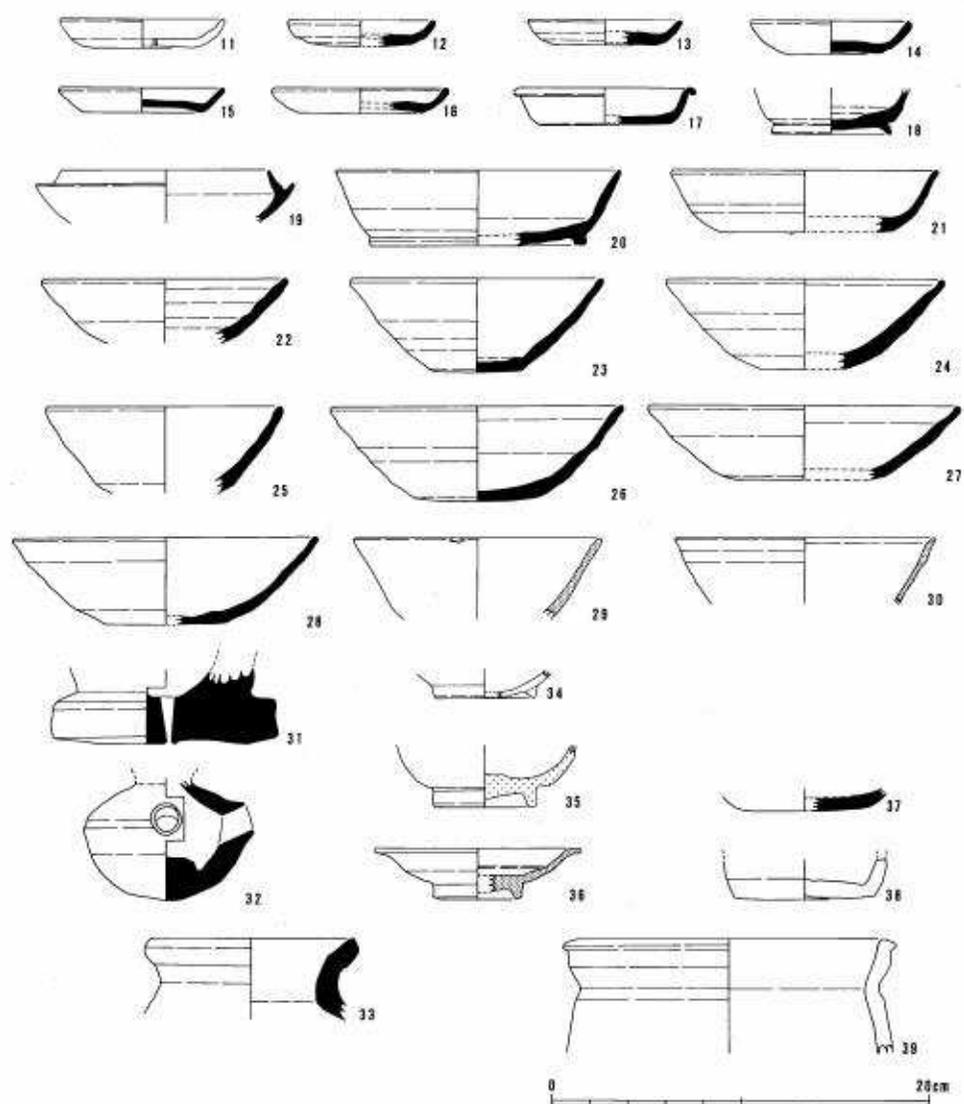
80～88は鍋である。

80は、屈曲した口縁部をもち、端部をほぼ水平に外側へつまみ出して、鋭い稜を形成したものである。

81・82・88は、体部外面に平行タタキ目が施される。口縁部は、81が開くほかは、垂直に近い立ち上がりを見せる。また端部は、いずれも外側に肥厚している。

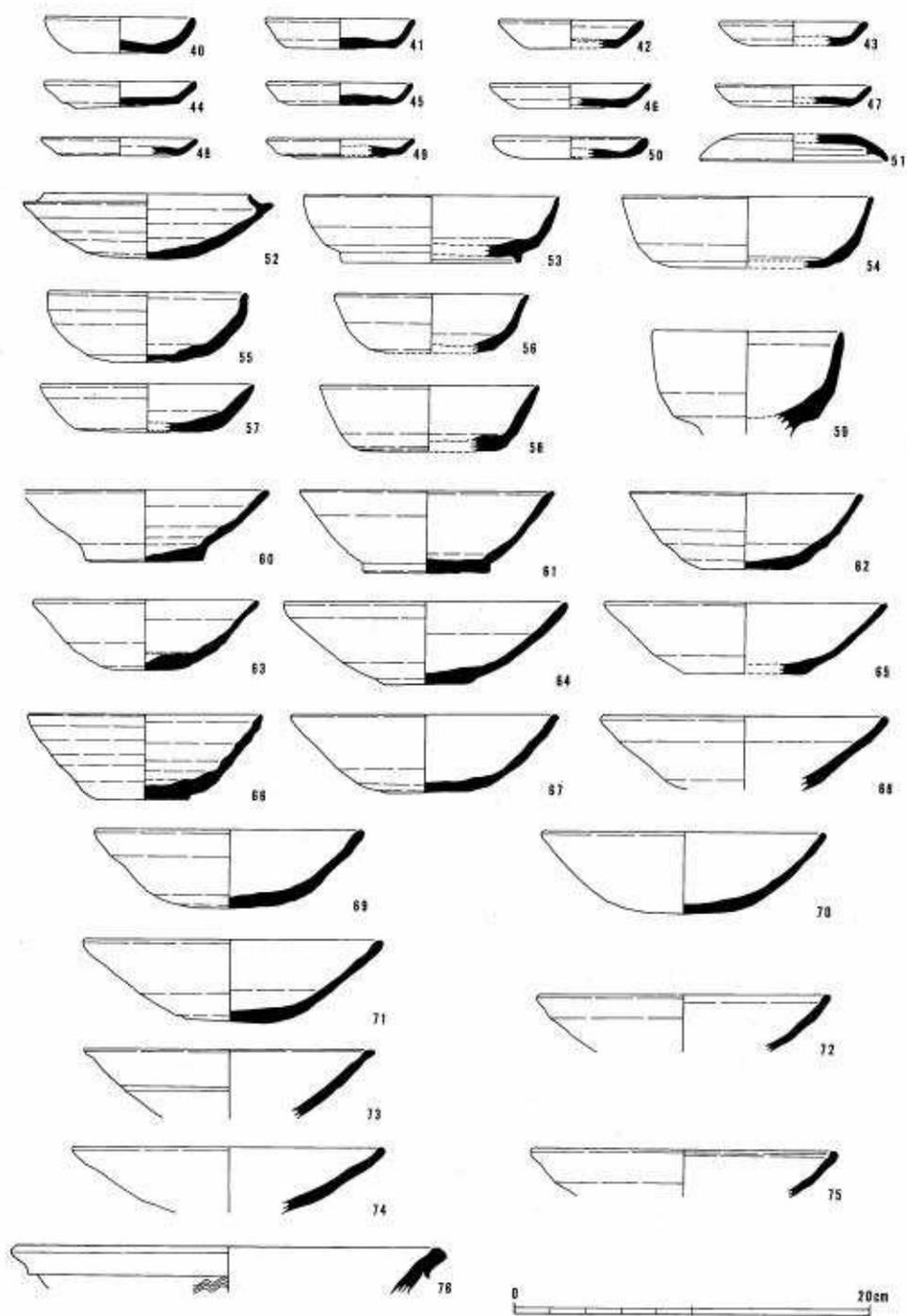
土師器は、皿、碗、羽釜等が出土している。

83～87は、鍋である。体部外面には平行タタキ目が施され、口縁部は開くもの(83～85)と垂直に短かく立ち上がる。口縁部には、いずれもヨコナデが施されている。端部は、83・84は垂下気味につまみ出され、86～88では、肥厚しており、特に、88では玉縁状の口縁部

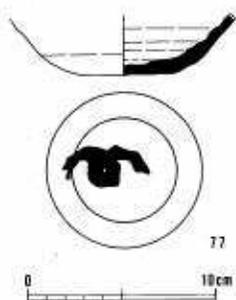


第249図 包含層出土土器(1)

溝向遺跡



第250圖 包含層出土土器(2)



第251図 出土土器(3)

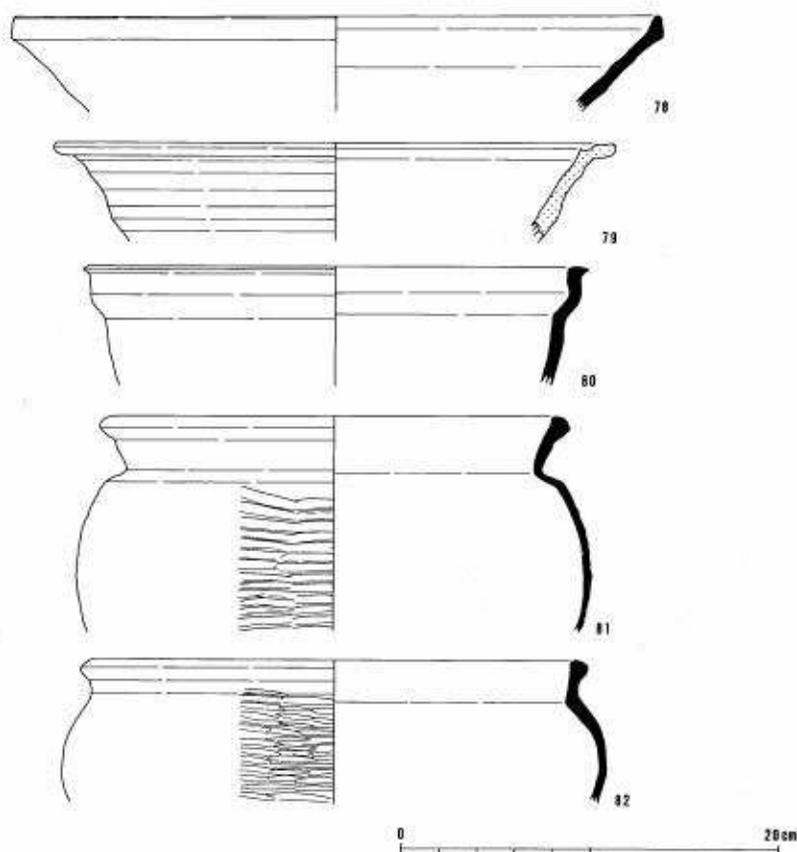
が形成されている。

89・90は羽釜である。罎部は、89ではほぼ水平、90では垂下している。口縁部は、89では、やや外側に開き気味に、90では内傾して立ち上がる。口縁端部は、いずれも平坦な面が形成され、外方へつまみ出されている。

99は青磁碗である。外面には鑄蓮弁文を施文している。体部はゆるやかな膨らみをもって立ち上がり、口縁部に至る。高台は欠損している。

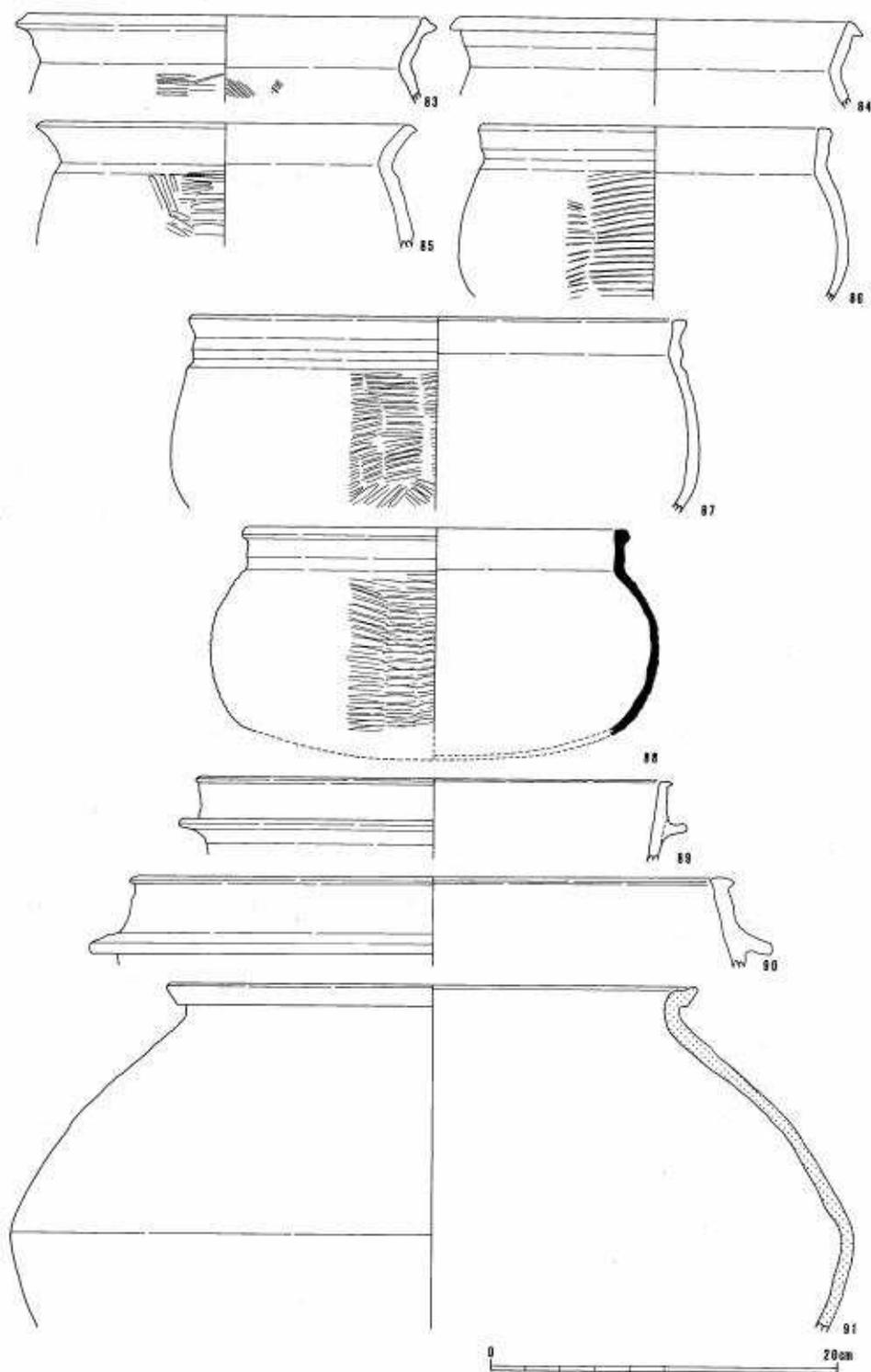
100も青磁碗であるが、蓮弁文は簡略化されたものとなっている。

101～103は白磁碗である。口縁部が強く外反するもの(101)、わずかに外反気味におさめるもの(102)、玉縁状に肥厚するもの(103)といった形態差が見られる。体部は、101がゆるやかな膨らみをもつほかは、102・103ともに、わずかに内彎気味の立ち上がりを見せている。

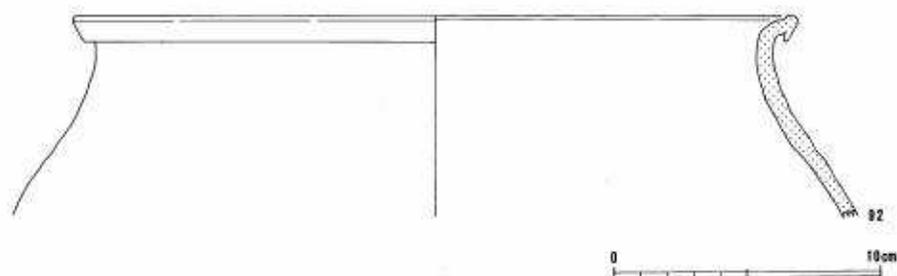


第252図 包含層出土土器(4)

溝向遺跡



第253圖 包含層出土土器(5)



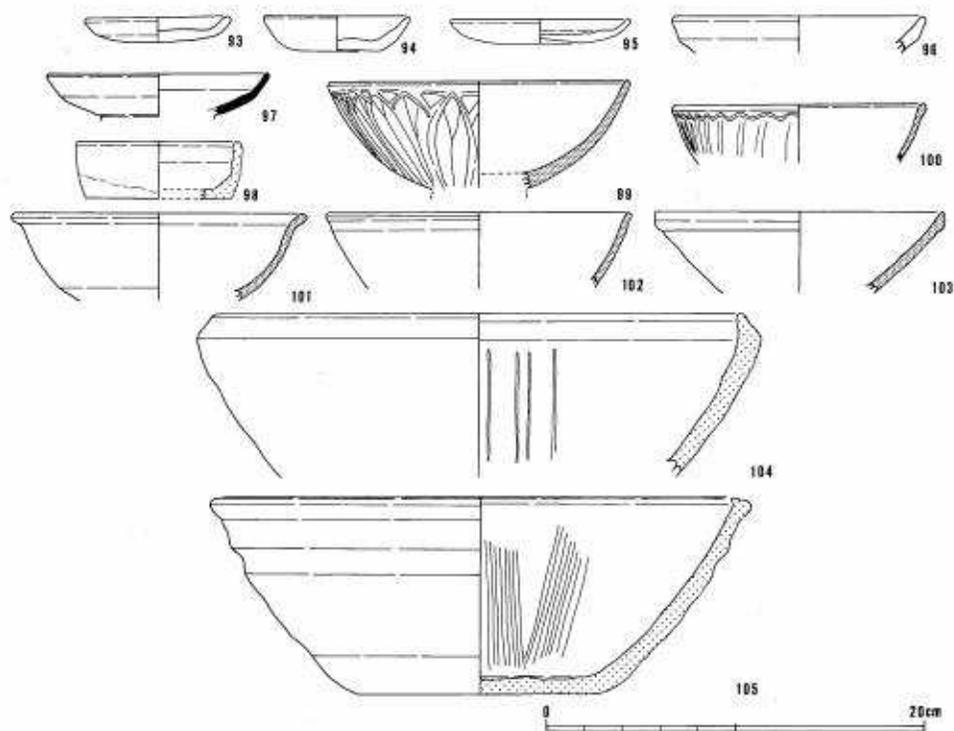
第254図 包含層出土土器(6)

瓦器は、量的に顕著ではないが、埴、皿等が出土している。34は、逆三角形を呈する高台をもつ椀である。

106は、須恵器の陶棺片である。

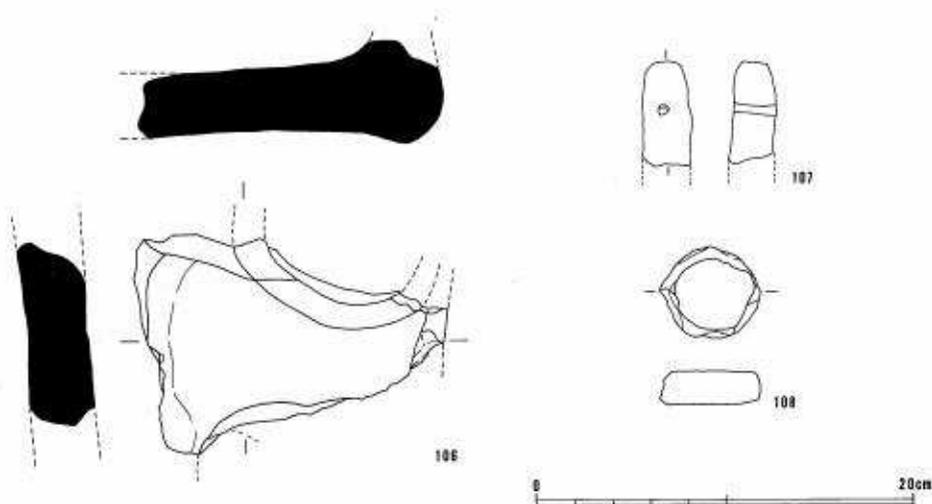
107は、土師質の土錘である。下半部を欠くが、棒状の錘であり、上部には紐孔が穿孔されている。

108は、瓦質の面子であろう。周縁部は敲打によってごく丁寧に仕上げられており、平面形は、ほぼ円形を呈している。



第255図 包含層出土土器(7)

溝向遺跡



第256図 包含層出土土器(8)

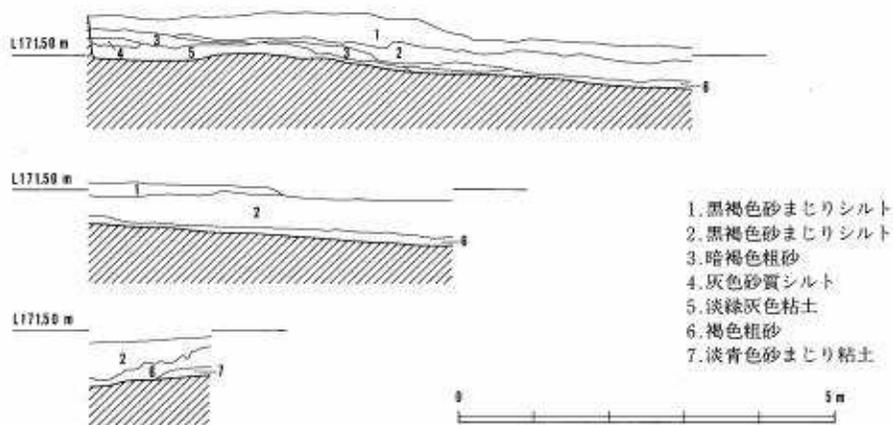
5. 中地区トレンチの調査

遺構面の調査終了後、中地区谷部の埋没時期を確認するため、中地区西半部においてトレンチ調査を実施した。トレンチは、谷の方向とほぼ同一方向に長軸を合わせて設定した(13×1.8m)。その結果、谷を埋める堆積層より、ごく散漫ではあるが、遺物の出土を見た。

層序 (第257図)

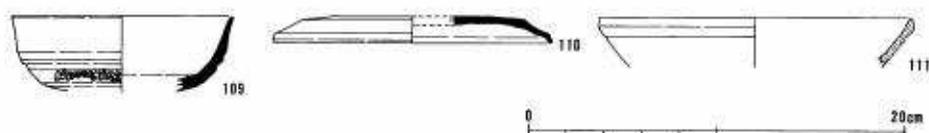
トレンチ内では谷は比較的浅く、堆積は1m内外であったが、これより東側では深度を増すものと思われる。

堆積は基盤の灰白色砂質シルト層上に、砂礫層・暗褐色腐植質シルト層等が見られ、沢を中心とした低湿地であったものと思われる。また、植物遺体も多数包含されていた。



第257図 中地区トレンチ土層断面図

溝向遺跡



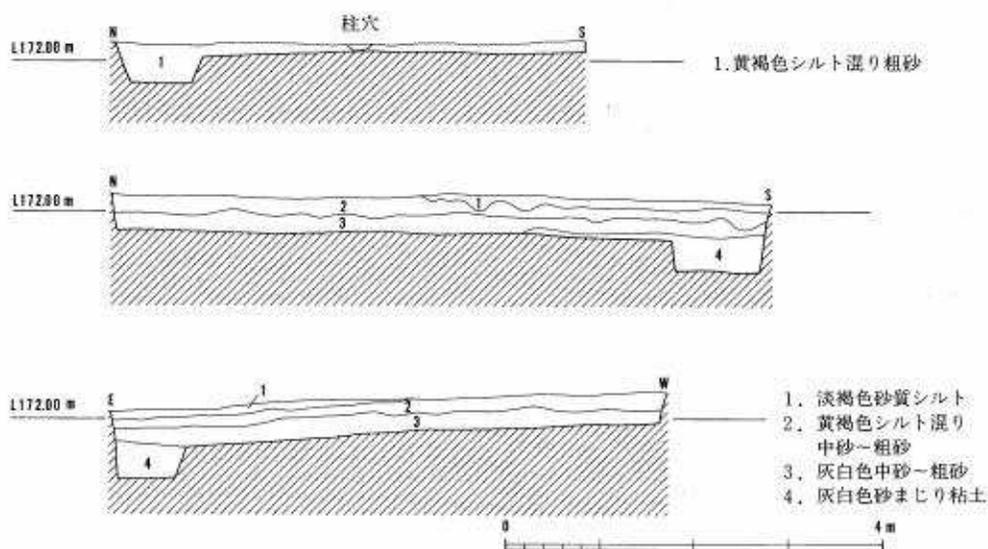
第258図 中地区トレンチ出土土器

遺物 (第258図)

遺物はごく少数が出土したのみである。ここではうち3点を図示する。

109は、須恵器高環の坏部である。脚部を失っているが、器形から長脚の高環であろう。体部外面には、2条の凹線を周らせ、その間に櫛の刺突による列点文を施している。底部はヘラズリ後にヨコナデ、体部はヨコナデによって調整されている。口縁部は外反しつつ立ち上がり、端部はまるくおさまられている。6世紀後半期に比定しうる遺物であろう。黒色粘土層中より出土した。

110は坏蓋である。つまみ部分を失っている。天井部はヘラ切り後、ヨコナデが施される。口縁部はヨコナデが施され、天井部との間に稜を形成している。内面には反りをもたず、口縁端部は下方に屈曲させてまるくおさめている。平安時代前半期に比定しうるもの

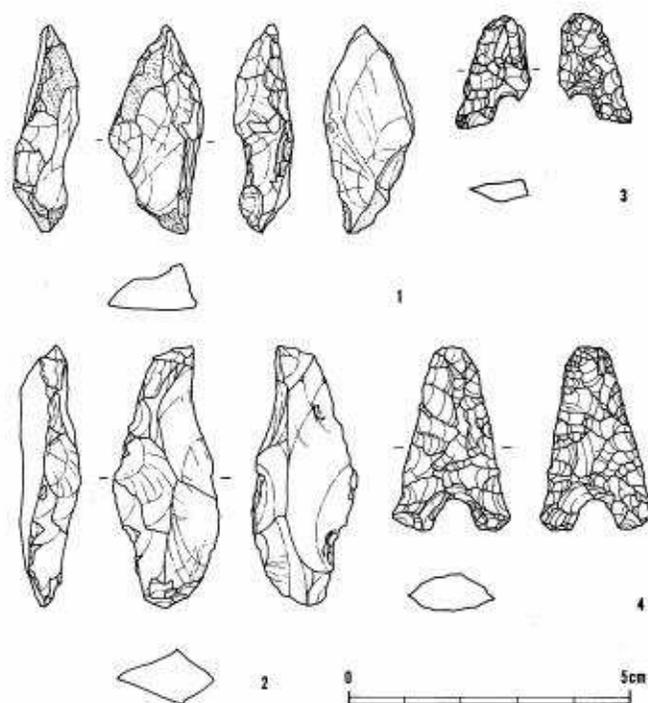


第259図 旧石器確認トレンチ土層断面図

である。黒色粘土層中より出土した。

111は白磁碗である。口縁部が肥厚し、玉縁状を呈するもので、わずかに内彎しつつ立ち上がる体部を有している。横田・森田分類の白磁碗IV類に属するものと考えられる。やはり黒色粘土層中からの出土である。

中地区トレンチ出土の遺物は、古墳時代～平安時代前半期にまでわたる時期差を有して



第260図 出土石器

シルト層)直上、および南地区の中世柱穴内より、各1点の旧石器(第260図1・2)の出土をみた。このため、その文化層を確認する目的で、出土地点付近を中心としてトレンチ調査を実施した。北地区では、微高地上に7×1mと6×1mのトレンチをL字形に、南地区では、5×1mのトレンチを各々設定して、調査を実施した(第234図参照)。

層序(第259図)

北地区では、黄褐色シルト層は最大20cm程度の厚さで残存していた。この下位には、水成層と考えられる、硬化の著しいシルト質砂層が続いていた。

南地区では、黄褐色シルト層はほとんど遺存しておらず、やはり硬化の著しい水成堆積物が確認されたのみである。

調査は、北地区で最深80cm、南地区で40cmの基盤層掘削をおこなったが、極めて硬い層で人力による掘削が困難であるとともに、水成層の連続的な堆積と判断されたため、調査を終結した。

トレンチ調査では、石器、あるいは生活跡を示す礫群・炭化物等はまったく出土せず、本来の旧石器時代の文化層は、すでに削平を受けて遺存していないものと考えられた。しかし、原位置を遊離したものとはいえ、遺構面調査の際に出土した石器は、転磨等の痕跡をまったくとどめていない。従って、長距離を運搬された二次堆積とは考えられず、本遺

いる。この長い期間にわたって、中地区は小規模な谷を中心とした低湿地となっていたものと思われる。腐植質に富む黒色粘土層の発達は、これを反映するものであろう。

谷が埋没した時期は、中央区に位置する建物跡3が12世紀後半にあたることから、これ以前であると考えられる。

6. 旧石器確認トレンチの調査

遺構面調査の際に、北地区の基盤(黄褐色

跡、あるいはごく近接した地点に、後期旧石器時代の生活跡が存在したものと思われる。

石器 (第260図)

本遺跡からは8点の石器が出土している。いずれも原位置を遊離し、後世の遺構あるいは包含層中より出土した。ここでは4点を図示したが、他に、サヌカイト剥片1点、楔形石器1点、砂岩製砥石1点、チャート剥片1点がある。

1・2は、ナイフ形石器と思われる。

1は、鉄石英と考えられる石材を用いている。横長剥片の二側縁に二次加工を背・腹両面より施し、先端部は鋭利に仕上げられている。刃部には、刃こぼれ状の不規則な小剥離痕が認められる。いわゆる切出形ナイフ形石器に含めてよいであろう。南地区の柱穴31内より出土した。長さ36.7mm、幅16.7mm、厚さ0.8mm、重量 5.0g。

2は、サヌカイトの横長剥片を素材とし、その打面側縁辺に腹面側から、他の縁辺には背面側から、二次加工を施したものである。先端部を古く折損しており、刃部の形状は明瞭ではない。基部は腹面側から細かな剥離を重ねて整形されている。北地区の遺構検出面(黄褐色シルト層上面)より出土した。長さ46.7mm、幅18.0mm、厚さ10.0mm、重量6.4g。

3は、チャート製石鏃である。古く $\frac{1}{4}$ 程度を欠損しているが、表裏ともに丁寧な押圧剥離によって仕上げられている。先端部付近からの数条の縫状剥離状の剥離痕が認められ、また、欠損面も先端付近からの加撃によって形成されたものと思われることから、製作段階での破損品とも考えられる。南地区の溜池状遺構1内より出土した。長さ18.6mm、幅13.3mm、厚さ3.3mm、重量0.9g。

4は、チャート製の異形石器(いわゆる「トロトロ石器」)と思われる。通常、この器種に見られる部分的研磨は施されていないが、先端部がまるく仕上げられていることから、同器種に含めておきたい。表裏とも、入念な押圧剥離によって仕上げられ、脚は左右非対称をなしている。青野ダム地域では、川端遺跡(AN-91地点)に類例が求められる。長さ33.0mm、幅20.0mm、厚さ6.7mm、重量3.5g。

7. 小結

遺構群の変遷

今回の調査で検出された遺構群は、出土遺物に乏しく、時期・前後関係の特定に困難を伴う。

建物跡に限るならば、その方位から3~4群に分類できる。

建物跡1・2、および柵1は一連の遺構群と思われる。出土遺物は極めて少なく、その時期については明らかにし難い。

建物跡3・8についても、方位の近似性が認められる。建物跡8の全容が不明のため、断定は避けねばならないが、建物跡3については、柱穴内出土遺物から、12世紀後半期に

溝向遺跡

位置づけられよう。建物跡3の柱穴は、一部が中地区谷部分の埋没土上にかかっており、少なくともこの時期には、谷は完全に平坦化している。

建物跡5～7は、やはり同一方位をもち、出土遺物からも、大きな時期差は認められない。建物跡6・7は重複しており、若干の時期差は伴うものの、概ね12世紀末～13世紀前半に比定できよう。

溜池状遺構1・2は、これらの建物跡より新しく、本遺跡の集落廃絶後、耕地化に伴って掘削されたものであろう。

溝向遺跡の建物跡と同時期の建物跡は、近接する溝ノ尾遺跡(AW-71)、乾遺跡(AW-65)等でも検出されており、今後、これらの遺跡との関係についても検討する必要がある。また、本遺跡のような小面積の集落跡のもつ意味についても注目してゆかねばならない。

石器とその時期

溝向遺跡出土の石器は、二時期に大別できよう。1・2のナイフ形石器は、旧石器時代後期に属するものであり、3・4は、縄文時代に属するものであろう。特に4は、これまでの出土例から、縄文時代早期にその時期を求められる。いずれも他に共伴遺物がなく、原位置を遊離していることから、詳細は明らかにし難い。しかし、本遺跡を含め青野ダム地域内では、ごく小規模な段丘、丘陵から、縄文時代の石器が散発的に検出されているほか、川端遺跡(AN-91地点)、北台遺跡(AW-62地点)等では、縄文時代早期の所産と思われる石器が多数出土しており、その出土量・質の差異が注目される。ここでは、集落とそれをとりまく生活圏を示唆する可能性を考えておきたい。また、旧石器時代の遺物についても、本遺跡のような小規模出土地点のもつ意味を、検討してゆく必要がある。

第3節 井ノ方遺跡 (AK-80)

1. 立地

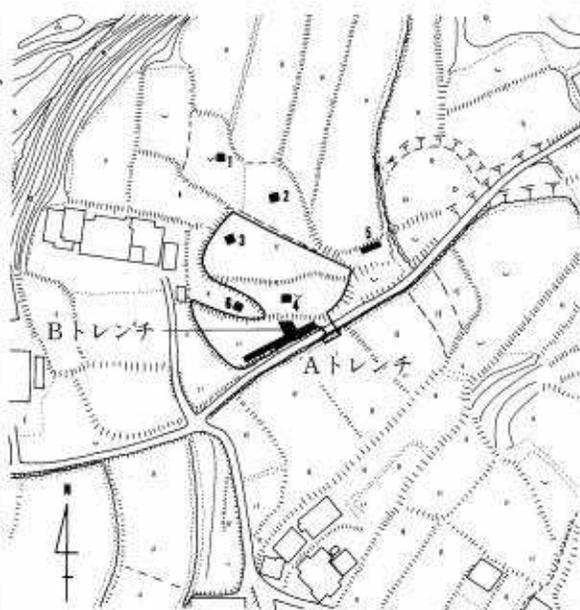
井ノ方遺跡は三田市末東字井ノ方に所在し、調査時にはAK-80地点と呼称していた遺跡である。遺跡は青野川左岸の丘陵先端付近の南向き緩斜面上に位置する。現標高は海拔176~178m付近にあたり、現在は水田に利用されている。谷を挟んだ向かい側には庵ノ谷古墳が存在する。

2. 調査の経緯と経過

当遺跡は分布調査時において遺物の散布が認められていたため、昭和60年4月に確認調査を行った。その結果、5箇所のグリットのうちグリット3・4で柱穴・遺物包含層を検出し、昭和60年6月より水田2筆分についての全面調査を行った。その際、調査区の東南隅において須恵器窯跡を検出したため、その部分について調査区を拡張するとともに、2本のトレンチを設定し、他の窯跡の存否を確認した。このトレンチでは窯跡は見つからなかったものの柱穴・土蔵などを検出したため、水田1筆分について全面調査を追加した。また窯跡の灰原が道路下に続くことが予想されたため、その箇所についても調査を行った。全面調査の面積は合計1,205㎡となる。全面調査は昭和60年5月17日~6月11日と11月11日~11月30日の2回に分けて実施した⁽¹⁾。その結果、平安時代~室町時代にわたって数次に営まれた集落跡、平安時代末~鎌倉時代初頭の須恵器窯跡などを検出した。

3. 土層

井ノ方遺跡の基本層序は大きくI層耕作土、II層黄灰色砂質土(床土)、III層灰褐色砂質土、IV層暗褐色砂質土に分けることができる。V層は遺構面であるが、調査した3筆の水田のうち、上段の水田では明黄色粘質土、中段では淡黄灰色岩盤、下段では黄褐色砂質土を遺跡の基盤の層としている。これらの層のうちII~IV層から弥生時代後期~室町時代の遺物が出土した。特に平安時代中頃~鎌倉時代の土器は混在しており、層ごとの堆積時期を判断するのは困難な状況であった。



第261図 位置図 (1:2000)

4. 遺構の状況

井ノ方遺跡は3筆の棚田を調査範囲としているため、それぞれの水田の山側は開墾時に削平を受けて遺構の密度が薄い傾向がある。遺構の分布はそのカット面を境に大きく上段・中段・下段の3区に分けることができる。

上段は最も遺構の密度が濃く、土層的にも安定した状態であった。遺構は平安時代の建物跡2棟を調査した他、土塋・柱穴・溝などを検出した。遺構は西半部に集中する反面、東半部には遺構はほとんど存在せず岩盤が露出しており、この部分については大きく削平を受けたものと考えられる。

中段では斜面をカットした小さな平坦面に建物跡2棟・土塋・柱穴・溝などを検出し、特に掘立柱建物4は別に報告する窯跡を切って建てていることが判明した。この中段の建物跡は2棟とも柱穴が全部は残っておらず、大きく削平されたと考えられる。

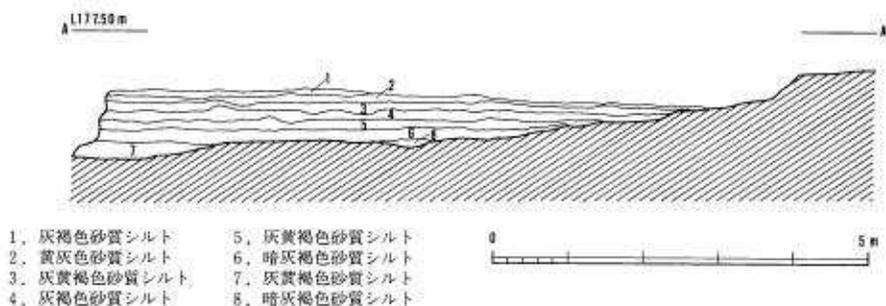
下段では逆に覆土が大きく、表土より70cm～140cm下げたところで遺構面を検出した。この地区では建物跡1棟・配石土塋・柱穴などを調査した。

掘立柱建物1 (第264図、第266図1～5)

上段水田の西半部に位置し、規模は東西の梁行2間×南北の桁行4間で、北端の梁行のみ1間分東へ張り出しており、床面積は約58㎡である。柱間は不規則で、梁行は2.5m～2.6m、桁行は2.2m～3.0mを測る。柱の掘り方は直径40cm～50cmの円形で、張り出し部の柱穴のみ直径約20cmと若干細くなっている。建物の桁行方向は真北に近いが、東へ約5°振る⁽²⁾。この建物は基本的には総柱であるが、南から2本目の柱が検出できなかった。なお、建て替えなどの痕跡は認められなかった。

遺物 遺物は柱穴から須恵器坏・埴、土師器甕などが出土した。

須恵器坏(1) P-116の掘り方から出土した。口径12.2cm、器高4.1cm、平高台で、体部は直線的に上外方へ立ち上がる。体部調整は内外面ともロクロナテで仕上げ、底部の切り離しは回転ヘラキリで行う。



第262図 土層断面図

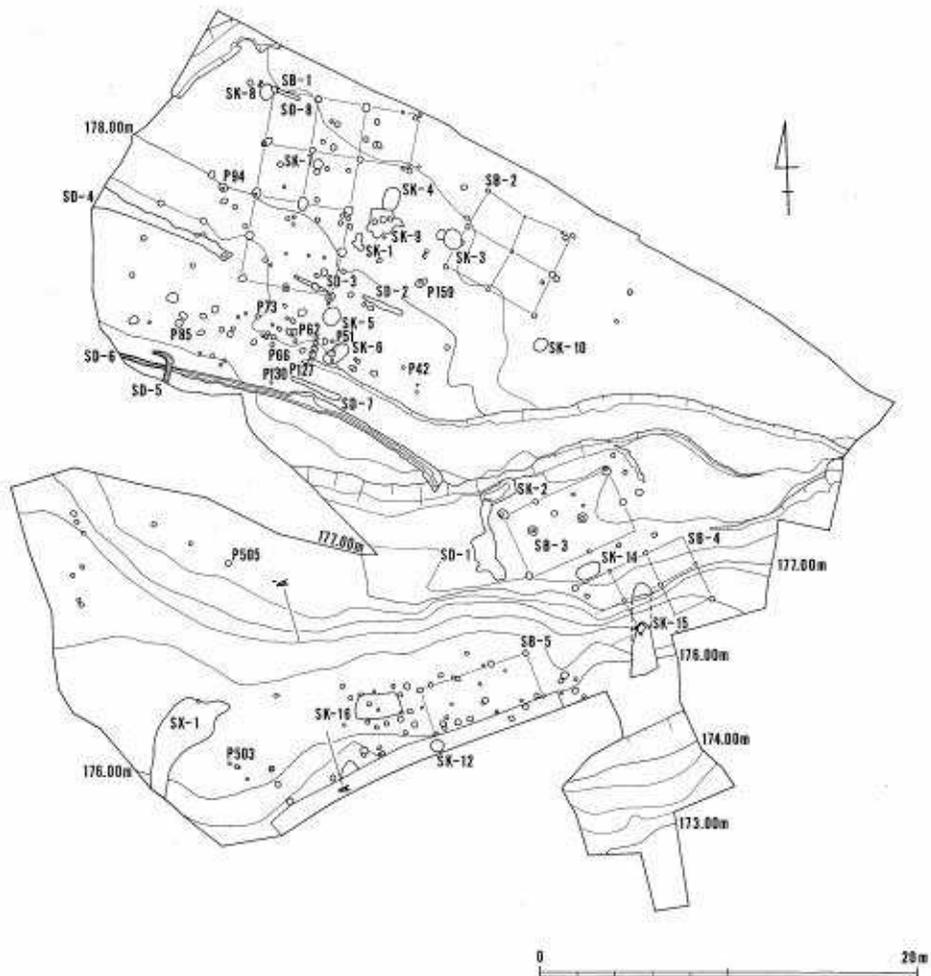
井ノ方遺跡

須恵器埴(2~4) 2はP-115から出土した。口径16.8cm、口縁部だけの破片で、体部は大きく開く。調整は内外面ともロクロナデで、口縁部付近のみ強くナデて稜埴風に仕上げる。3はP-111の掘り方、4はP-113から出土した。底径は3が8.1cm、4が7.2cm、いずれも平高台の底部で、底部の切り離しは回転ヘラキリによる。4は見込部の凹みの強いタイプである。

土師器甕(5) P-109から出土した。口径は18.9cmで、口縁部はくの字に外反したあと端部が内屈する。調整は体部外面にタタキの痕跡が残っている他は不明である。

掘立柱建物2(第265図、第266図6~8)

上段水田のほぼ中央に位置し、規模は桁行南北2間×梁行東西2間の総柱の建物で、床面積は約23㎡である。柱間は不規則で、桁行2.0m~2.4m、梁行2.4m~2.8mを測る。桁行方向は北東方向へ傾いており、真北から約26°東へ振る。柱の掘り方は円形で、直径15cm



第263図 遺構全体図

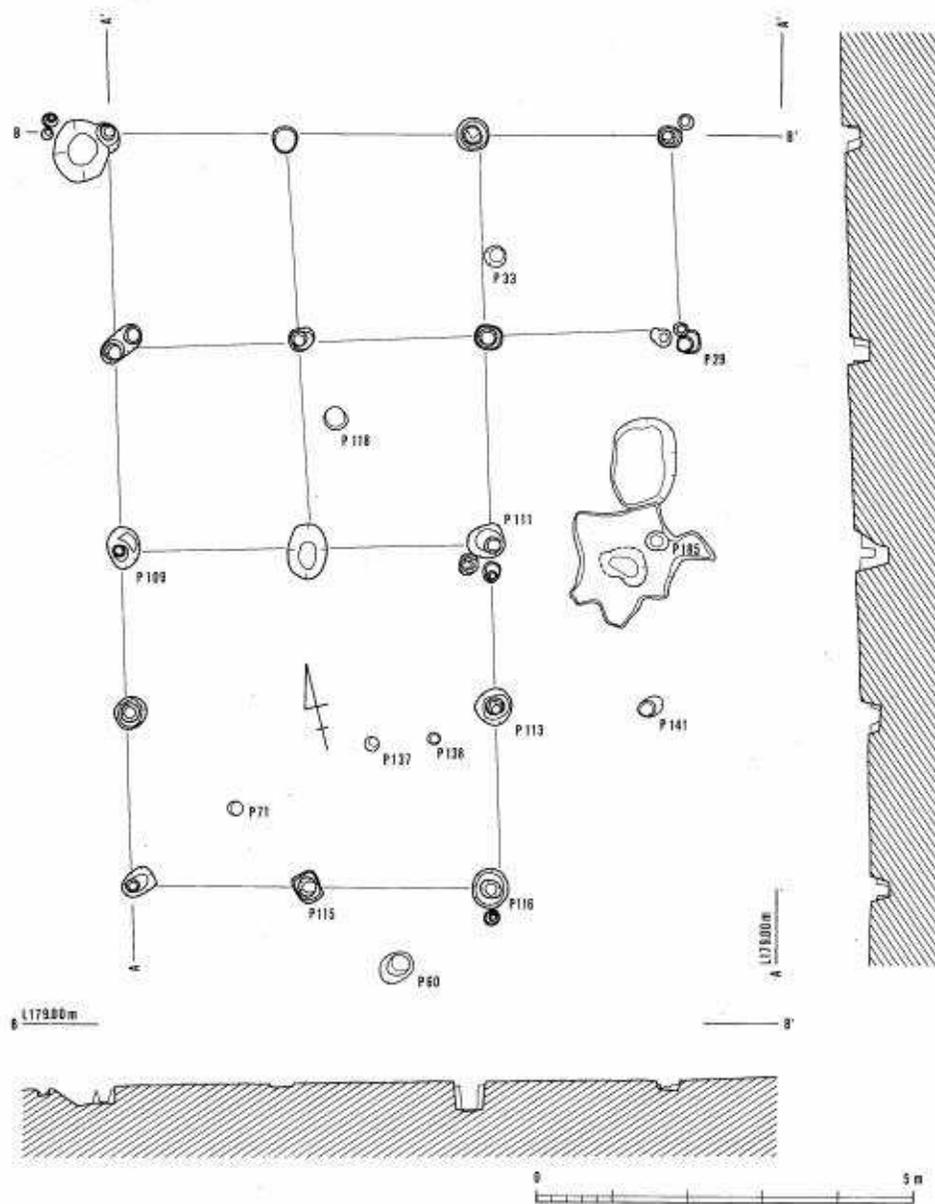
井ノ方遺跡

～35cmを測る。建て替えの痕跡は認められなかった。

遺物 遺物は柱穴から須恵器杯・土師器甕などが出土した。

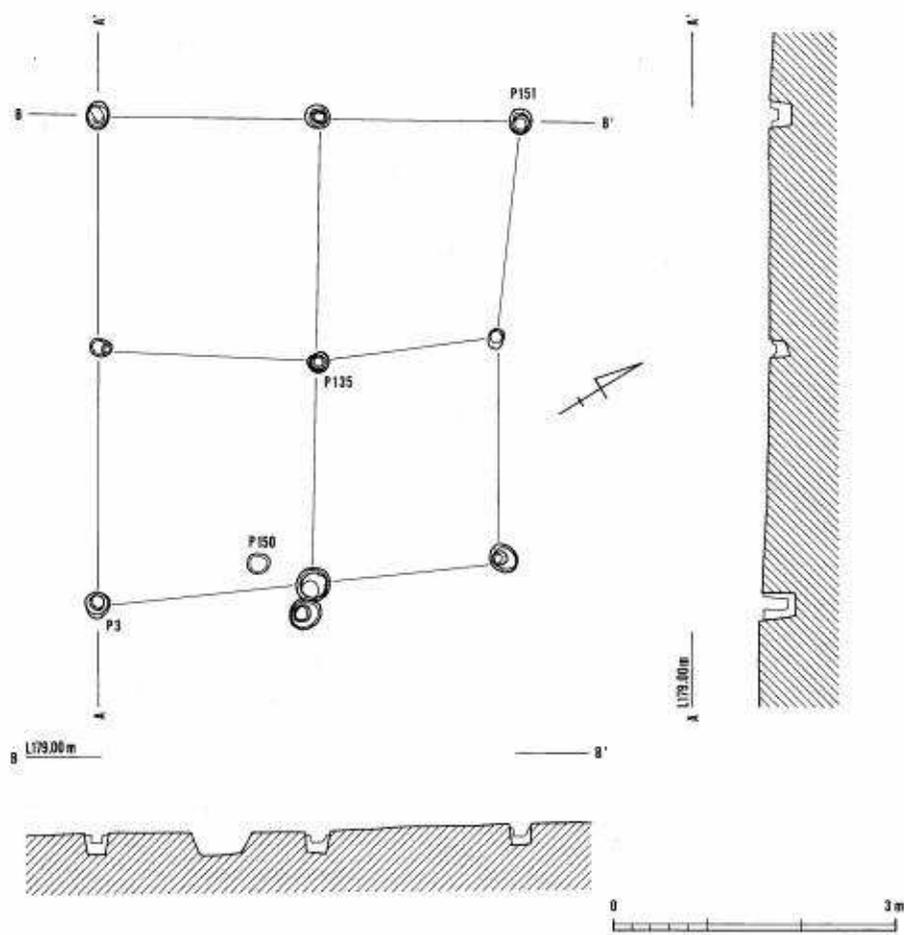
須恵器杯(6) P-3からの出土である。底径9.4cm、粘土紐巻き上げ成形で、平底から体部が立ち上がる。底部は回転ヘラキリによって切り離す。調整は内外面ともロクロナデである。

土師器甕(7・8) 7はP-3から出土した。口径13.6cm、口縁部はくの字に外反し、端

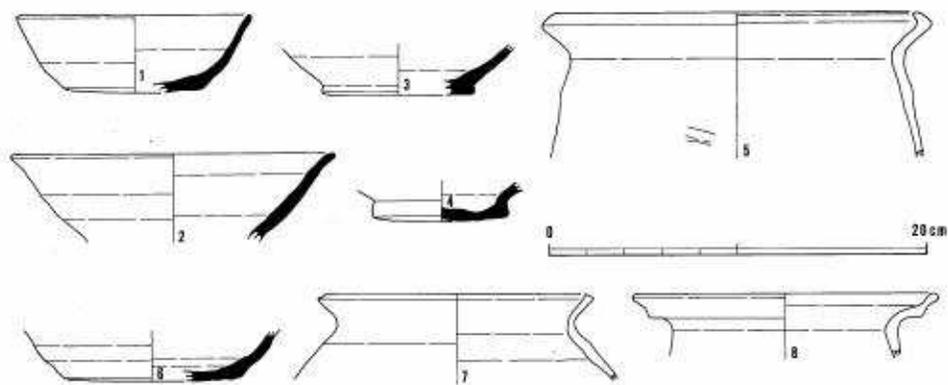


第264図 掘立柱建物1

井ノ方遺跡



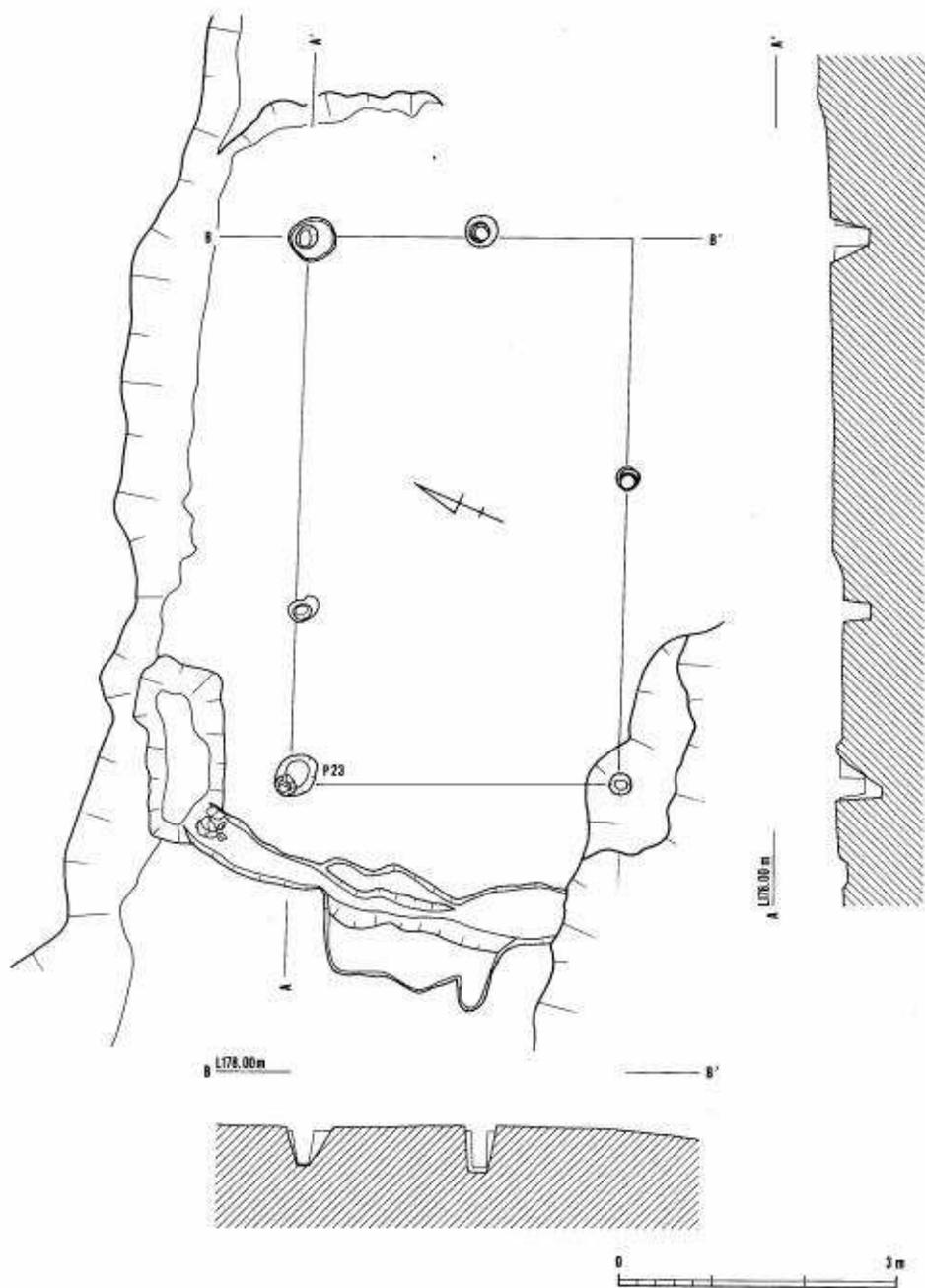
第265図 掘立柱建物 2



第266図 掘立柱建物 1・2 出土土器

井ノ方遺跡

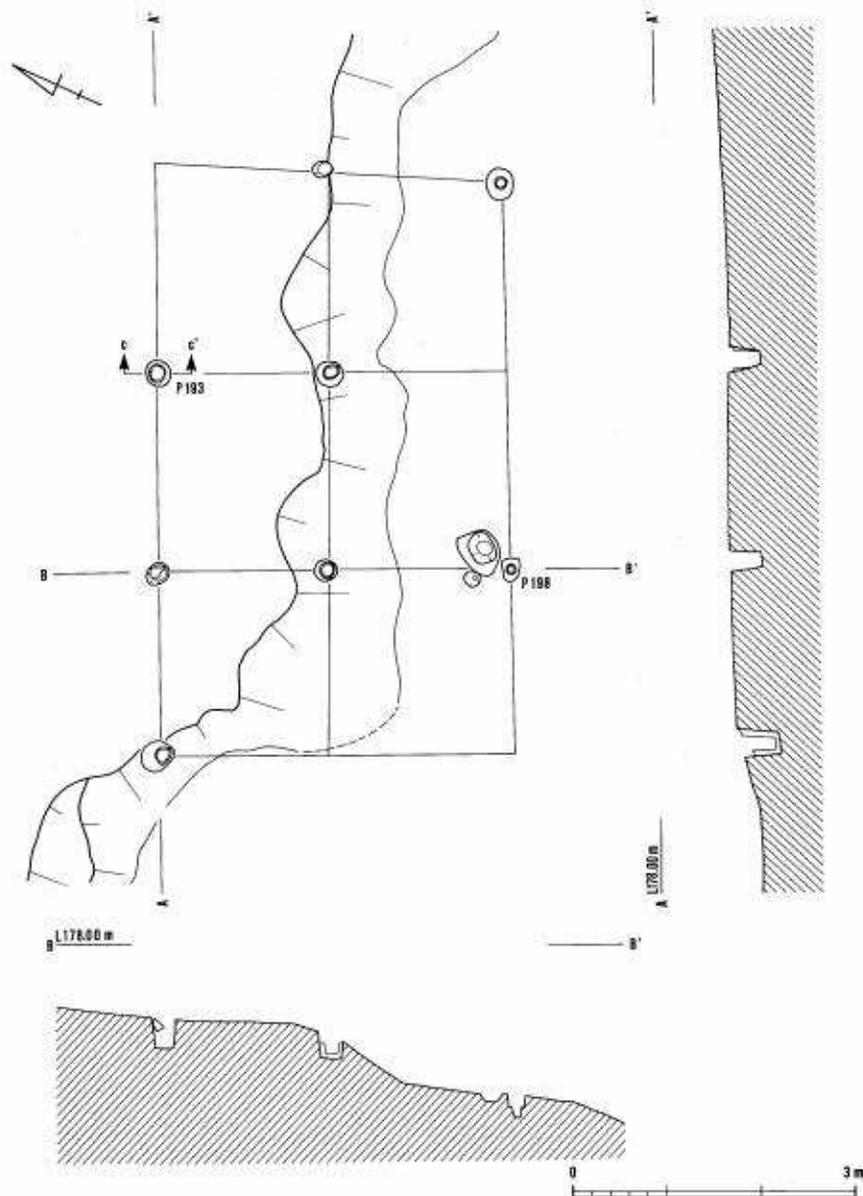
部は面をもつ。胴部径は口径を凌ぐ。内面には粘土紐痕を残すが、その他の調整は不明である。8はピット151の掘り方から出土した。口径15.8cm、口縁部は一旦水平に近く外反したあと短く立ち上がり、所謂受け口状口縁の形態をとる。口縁部は強いナデで外反させ、端部は丸く収める。頸部外面はヨコナデで調整する。



第267図 掘立柱建物 3

掘立柱建物 3 (第267図)

中段水田のほぼ中央に位置し、規模は梁行南北2間×桁行東西3間の建物で、床面積は約22㎡である。削平を受けたためか柱穴の数が揃っていないが、西・北・東側を雨落溝が断続的に廻っているため、建物跡であると判断した。柱間は梁行約1.8m、桁行約2.0m程度と推測できる。梁行方向は北西に傾いており、真北から西へ約31°振る。柱の掘り方は直径20cm～50cmの円形で、建て替えの痕跡は認められなかった。



第268図 掘立柱建物 4

井ノ方遺跡

出土遺物は細片のみで、時期の判別するものはなかった。

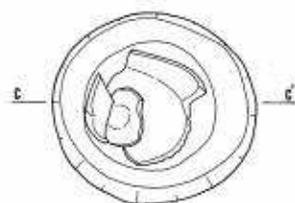
掘立柱建物 4 (第268~270図)

掘立柱建物 3 の南側に位置し、梁行方向をほぼ同じにする。規模は梁行南北 2 間×桁行東西 3 間、床面積は約 23㎡である。柱間は梁行約 1.8m、桁行約 2.1m 程度である。柱の掘り方は直径 20cm~30cm の円形で、建て替えは認められなかった。

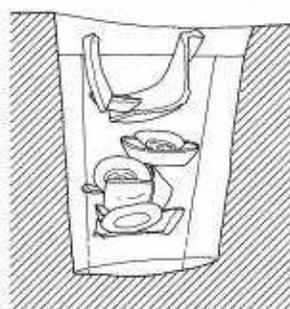
遺物 遺物は P-193 の柱痕内より土師器皿・小皿・塀、丹波系陶器鉢が一括に出土した。

土師器皿(9~12) 9は口径11.9cm、器高3.8cm、底径4.5cm、10は口径11.5cm、器高3.2cm、底径7.2cm、11は口径11.5cm、器高2.9cm、底径5.0cm、12は口径11.4cm、器高2.7cm、底径9.0cmを測る。9・10は粘土紐巻き上げ成形で、体部の調整はロクロナデ、底部の切り離しには回転糸切り技法を用いる。11・12は手捏ね成形で、体部をナデで調整する。

土師器小皿(13~19) 13は口径7.0cm、器高1.7cm、底径5.0cm、14は口径7.6cm、器高1.7cm、底径4.2cm、15は口径7.7cm、器高2.1cm、底径4.2cm、16は口径7.5cm、器高1.6cm、底径4.7cm、17は口径7.6cm、器高1.5cm、底径5.3cm、

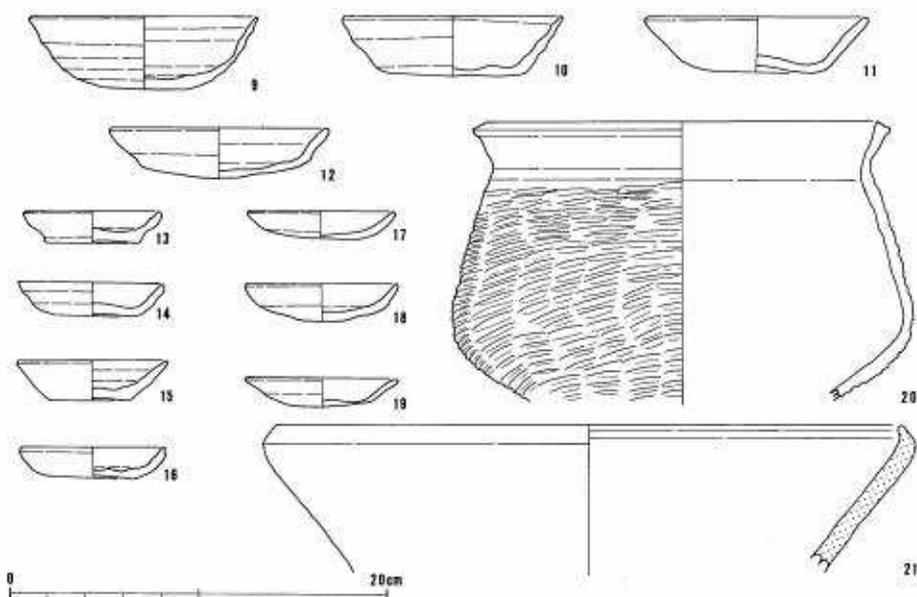


L177.90m

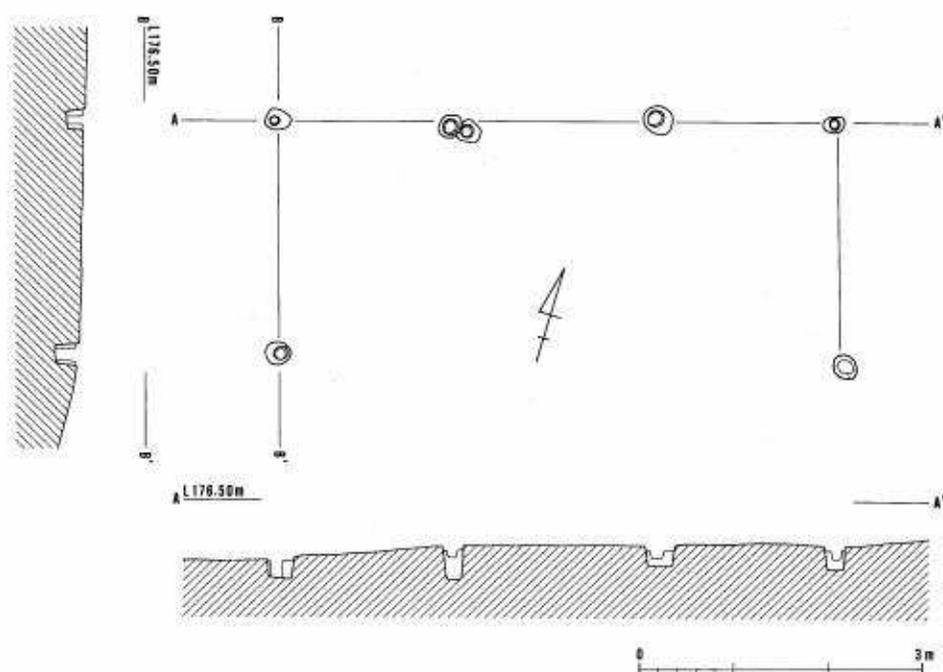


0 20cm

第269図 P-193



第270図 掘立柱建物 4 出土土器



第271図 掘立柱建物 5

18は口径8.0cm、器高2.0cm、底径6.9cm、19は口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.6cm。13～16はロクロ水挽き成形で、底部は回転糸切り技法で切り離す。17～19は手捏ね成形で、体部と底部の境は不明瞭である。底部外面は不調整で、口縁部外面のみヨコナデで調整する。

土師器埴(20) 口径20.9cm、口縁部がやや外傾して端部に面をとり、胴部下半で腰を強く張るタイプである。胴部外面はタタキ、内面はユビナデ、口縁部内外面は強いヨコナデで調整する。

丹波系陶器鉢(21) 口径32.9cm、体部が直線的に開き、端部を内側につまみ出す。体部内外面はロクロナデで調整し、内面にはオロシメをもたない。

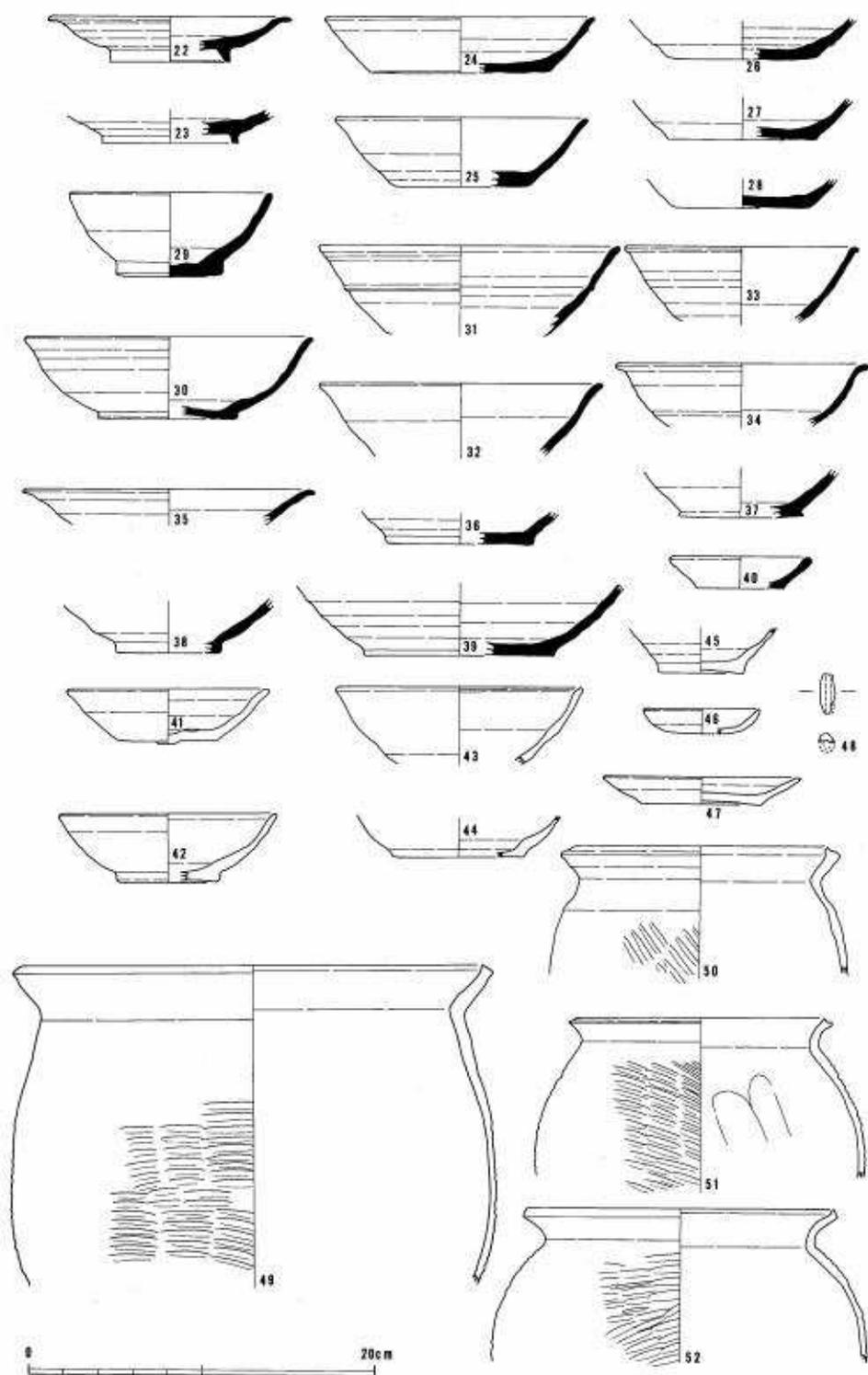
これらの土器は柱痕内に重ねて納められており、建物廃棄時の祭祀に伴う一括埋納と考えられる。

掘立柱建物 5 (第271図)

下段水田のほぼ中央に位置する。規模は桁行東西3間、梁行南北1間分を検出した。梁行はさらに南へ広がる可能性があるが、地形的にみて既に削平を受けていると考えられる。柱間は不規則で、桁行1.9m～2.2m、梁行2.5mを測る。梁行方向は真北から約24°西へ振る。柱の掘り方は直径約25cmの円形で、建て替えは認められなかった。

遺物は全く出土しなかった。

井ノ方遺跡



第272図 柱穴出土土器

柱穴出土遺物 (第272図)

以上の建物跡以外にも建物に伴わない柱穴を多数検出し、柱穴内から須恵器環・埴・皿・小皿、土師器環・埴・皿・小皿・甕・土錘などが出土した。

須恵器皿(22) P-85の掘り方から出土した。口径13.5cm、器高2.6cm、輪高台が付き、浅い体部から口縁部が水平に開く。

須恵器環(23~28) 23はP-138から出土した。底径7.8cm、底部の切り離しはヘラキリで、輪高台が付く。環に分類したが、皿の可能性もある。24はP-60、25はP-505、26はP-73、27はP-137、28はP-62から出土した。24は口径15.4cm、器高3.3cm、25は口径14.3cm、器高4.0cmを測る。いずれも粘土紐巻き上げ成形で、回転ヘラキリの底部から体部が直線的に立ち上がる。

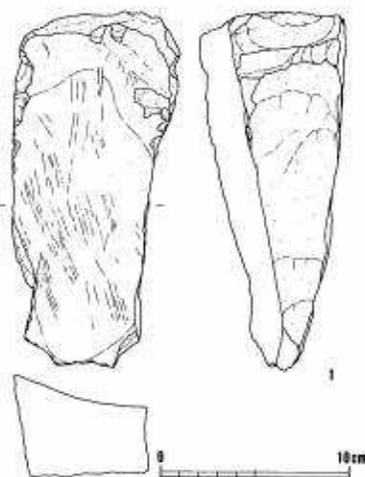
須恵器埴(29~38) 29はP-66の掘り方から出土した。口径11.4cm、器高4.9cm、底部は平高台で、体部はあまり開かず内彎気味に立ち上がる。30はP-127の掘り方から出土した。口径16.3cm、器高4.7cm、底部は平高台で、内彎した体部が大きく開く。31はP-189、32はP-51から出土した。口径は31が17.2cm、32が16.1cm、体部は中段で稜をもって開く。33はP-42の掘り方、34はP-137の掘り方から出土した。口径は33が13.1cm、34が14.3cm、体部は内彎気味に立ち上がり、端部を外につまみ出す。35はP-42の掘り方から出土した。口径16.2cm、皿とも考えられる。36はP-33、37はP-51、38はP-29の掘り方から出土した。いずれも平高台の底部で、回転ヘラキリで切り離す。38は見込みに凹みをもつ。

須恵器小皿(40) P-503から出土した。口径7.7cm、器高1.8cmを測る。底部は回転ヘラキリによる平底で、体部は直線的に開き、端部は若干肥厚する。

須恵器鉢(39) P-71の掘り方から出土した。底径10.9cm、底部は平高台で回転ヘラキリで切り離し、体部は内彎気味に立ち上がる。体部調整は内外面ともロクロナデである。

土師器環(41) P-185の掘り方内から出土した。口径11.2cm、器高3.1cm、粘土紐巻き上げ成形で、平底から内彎気味に立ち上がった体部が、端部近くで外反する。

土師器埴(42~45) 42はP-130から出土した。口径12.4cm、器高3.9cmを測り、平高台から体部が内彎気味に開く。底部の切り離しは回転ヘラキリによる。43はP-141からの出土で、内面黒色の土器である。口径13.9cm、体部は内彎気味に立ち上がり、端部に沈線状のナデを施す。44はP-62から出土しており、底



第273図 柱穴出土磁石

井ノ方遺跡

径7.6cm、回転糸切り技法で切り離した平底から体部が内彎気味に立ち上がる。45はP-159の掘り方からの出土で、底径5.0cm、小ぶりの平底から体部が急な角度で立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。

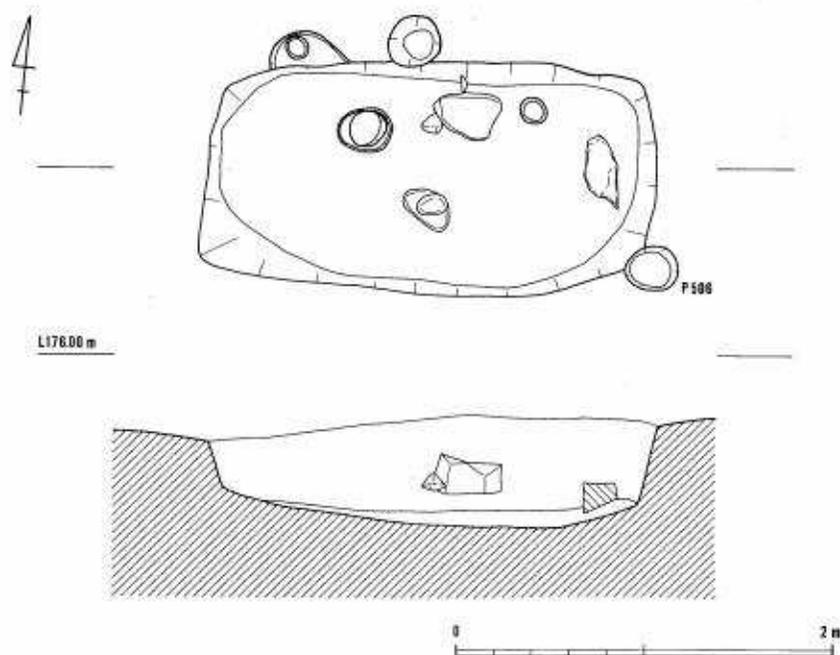
土師器皿(47) P-118から出土した。口径11.2cm、器高1.6cm、底径6.9cm、平底から体部が直線的に開く。底部の切り離しは回転糸切り技法で行う。

土師器小皿(46) P-506から出土した。口径6.5cm、器高1.5cm、体部は平底から緩やかに立ち上がり、端部は尖り気味に収まる。器面の風化が激しいため、調整などは不明である。

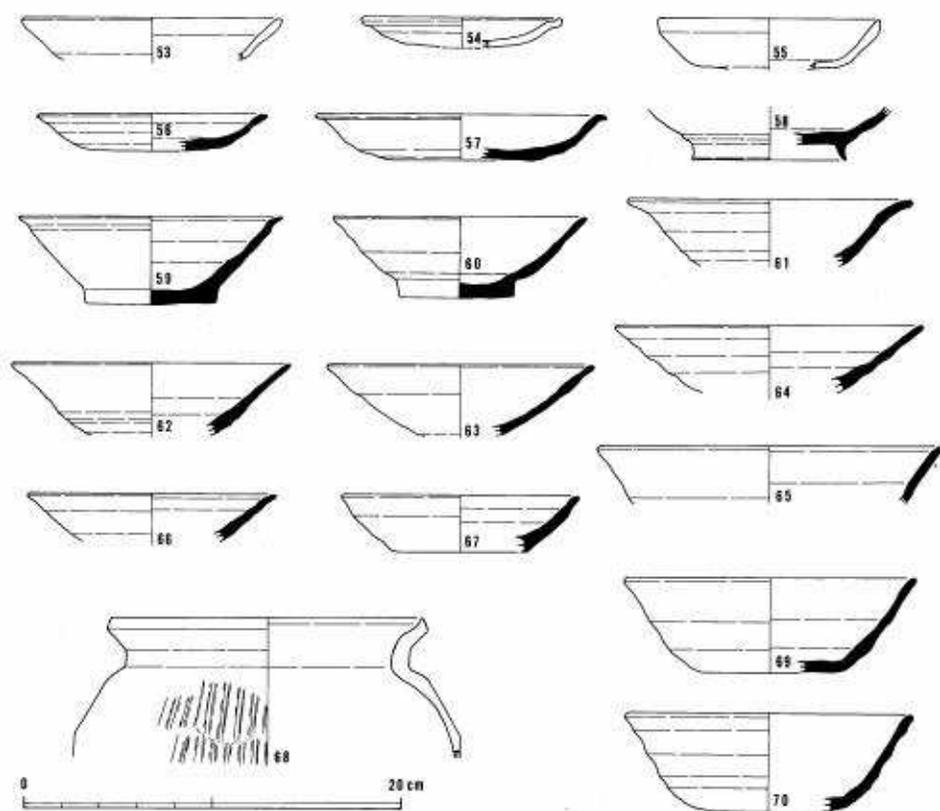
土師器土錘(48) P-51から出土した。径0.9cm、長さ2.3cmの紡錘形で、手捏ね成形である。

土師器甕(49~52) 49はP-185の掘り方出土で口径26.6cm、50はP-94出土で口径14.6cm、51はP-159の掘り方出土で口径14.3cm、52はP-150の掘り方出土で口径17.6cmである。いずれも丸みを帯びた胴部をもつ。外面はタタキ調整の痕跡が残り、内面は指でナデ消す。50は頸部下に強いナデを施す。口縁部は内外面ともヨコナデ調整をし、内彎気味に開くもの(49・50)と、外反するもの(51・52)がある。口縁端部は強いナデで面をとり、若干上方へつまみ出す。(中川)

砥石(第273図1) P-23から出土した。細砂岩製の砥石で、砥ぎ面はやや凹面をなす。砥面の一部が黒色化しており、火熱を受けた可能性があろう。(久保)



第274図 配石土壌



第275図 配石土壌、土壌1・5・9・14・15、溝6出土土器

配石土壌 (SK-16) (第274図、第275図53)

この土壌は確認調査時にBトレンチにおいて検出されていたもので、下段水田のほぼ中央、掘立柱建物5のすぐ西に位置する。長さ約2.5m、幅約1mの長方形の掘り方で、深さ約30cmである。土壌内の東小口側には板石が置いてあり、形状からみて墓の可能性が高い。ただし木棺の痕跡・骨などは検出できず、墓であるならば土壌墓と考えられる。

遺物 遺物は土師器の皿(53)1点のみが出土した。口径13.6cm、口縁部には1段のヨコナデを施し、端部が肥厚する。

土壌1 (SK-1) (第275図54)

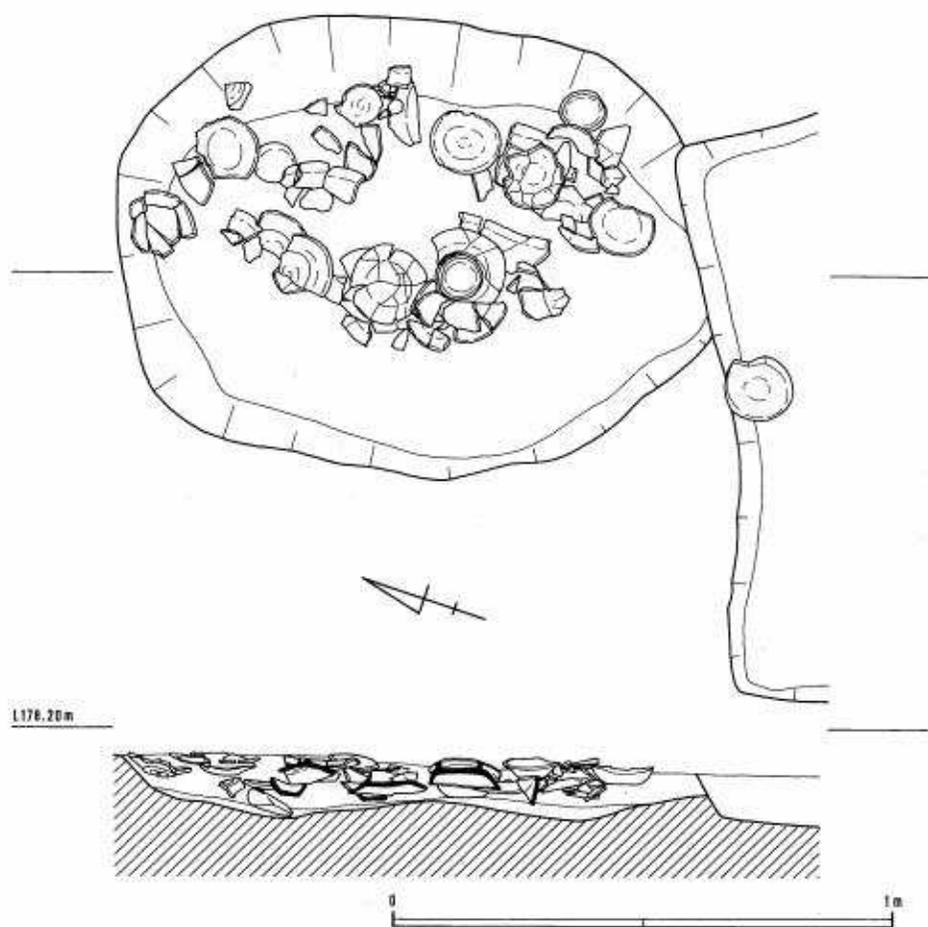
上段水田に位置し、掘立柱建物2の東南側に隣接する。径約80cm×65cmの楕円形で、深さは10cmである。

遺物 遺物は土師器小皿(54)が出土した。口径10.2cm、所謂「て」字状口縁で、口縁部を強いナデで水平に近く外反させ、端部を内側に肥厚させる。成形は手捏ね技法である。

土壌4 (SK-4) (第276図、第277図)

上段水田の掘立柱建物1東側に位置し、建物跡の張り出し部に囲まれた状況にある。掘

井ノ方遺跡



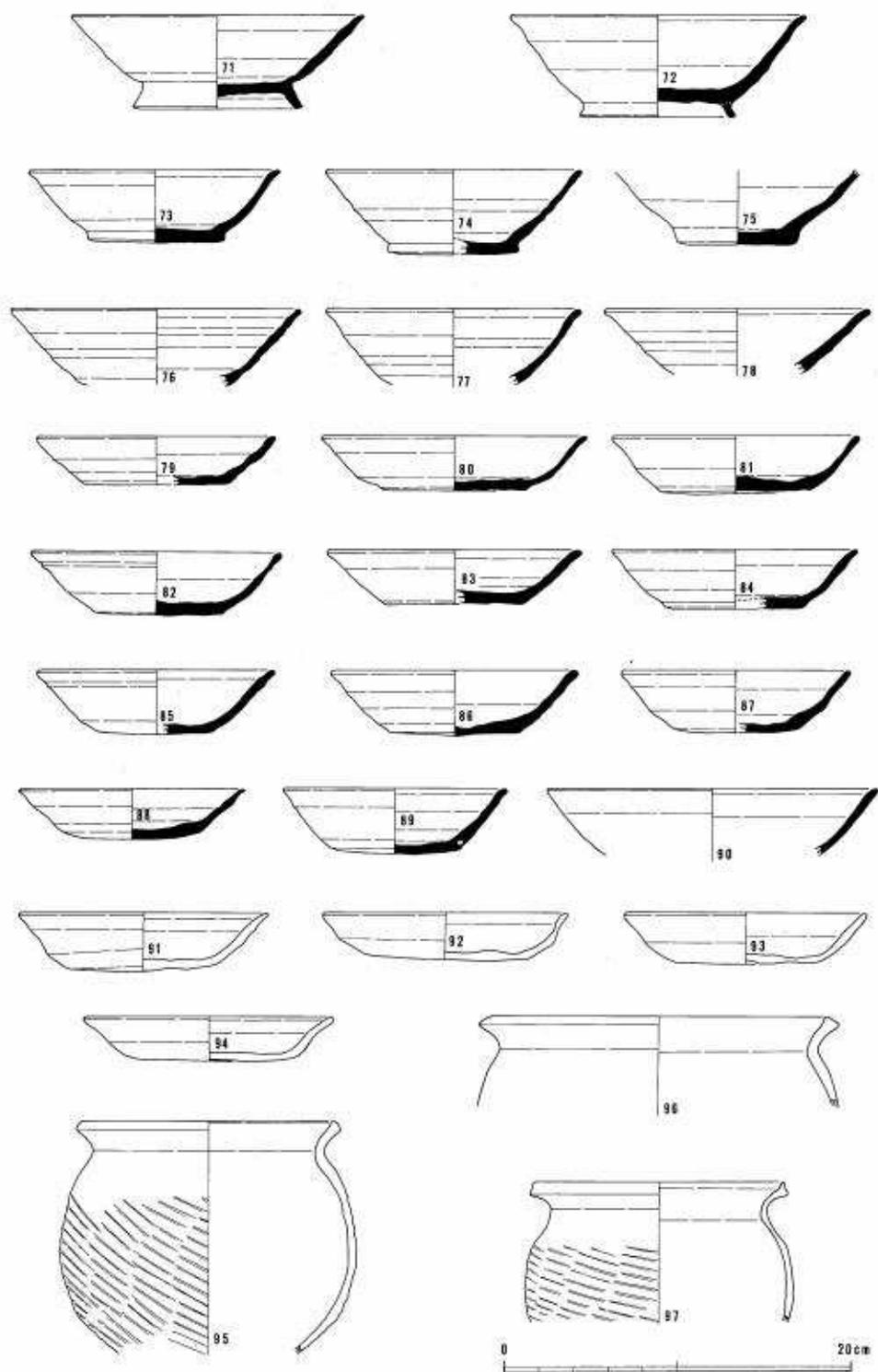
第276図 土壌 4

り方の南端は土壌 9 に切られる関係にある。径約125cm×約90cmの楕円形で、検出面からの深さは約10cmであった。

遺物 土壌内からは須恵器壺・坏、土師器皿・甕など20数個体の土器が一括で出土した。

須恵器壺(71~78) 71・72は輪高台付きの須恵器壺で、71は口径16.7cm、器高5.4cm、高台径9.7cm、72は口径16.8cm、器高5.9cm、高台径9.0cmを測る。回転ヘラキリの底部に外方へよく踏ん張る輪高台が付き、高台の角は軽く削る。体部は直線的に開き、口縁端部はナデで弱く外反する。調整は内外面ともロクロナデである。73~75は平高台の壺である。73は口径14.1cm、器高4.1cm、底径7.9cm、74は口径14.4cm、器高4.9cm、底径7.6cmである。底部は回転ヘラキリで切り離し、体部が内彎気味に立ち上がる。見込みの凹みは強い。76~78は底部を欠失している。口径は76が16.4cm、77が14.2cm、78が14.9cm、体部は粘土紐巻き上げ成形で、ロクロナデで仕上げる。76・77は体部が直線的に開く。78は内彎気味に開き、端部が弱く外反する。

井ノ方遺跡



第277図 土壌4出土土器

井ノ方遺跡

須恵器杯(79~90) 79~89は口径12.6cm~15.0cm、器高2.8cm~3.7cm、底径5.7cm~8.4cmで、平均すると口径13.6cm、器高3.4cm、底径7.4cmである。法量は80がやや大きめで88がやや小さめなのを除くと、ほぼ同形・同大である。成形技法についてもいずれも粘土紐巻き上げ成形で、回転ヘラキリの平底から体部が直線的に立ち上がる。口縁部形態には若干内彎するもの(79)、弱く外反するもの(80・83・84~89)、端部が肥厚するもの(81・82)があり、いくらか個体差がみられる。体部調整は内外面ともロクロナデで、底部外面は不調整である。90は口径18.7cm、体部内外面はロクロナデで仕上げる。杯に分類したが、碗の可能性もある。

土師器皿(91~94) 91は口径14.2cm、器高3.3cm、底径8.5cm、92は口径13.8cm、器高2.7cm、底径9.3cm、93は口径13.6cm、器高2.9cm、底径7.9cm、94は口径14.0cm、器高2.5cm、底径8.9cm、粘土紐巻き上げ成形で、成形にはロクロを使っていない。91は口縁部に2段のナデを施し、端部は尖り気味になる。92~94は口縁部に1段のナデを施し、端部は丸く収まる。底部外面は不調整である。

土師器甕(95~97) 口径は95が14.4cm、96が19.2cm、97が14.2cm、球形の体部から口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面をもち、若干つまみ上げる。体部外面はタキ調整痕が残り、内面は不明である。

土壌 5 (SK-5) (第275図56・58)

上段水田の掘立柱建物1の南側に位置する。径約1mの円形土壌で、深さは約7cmである。

遺物 遺物は須恵器皿・碗が出土した。

須恵器皿(56) 口径11.7cm、器高1.9cm、回転ヘラキリによる平底から体部が直線的に開く。体部調整はロクロナデである。

須恵器碗(58) 輪高台付きで、底径8.2cmを測る。輪高台は先細りになっており、外方への張りも弱い。

土壌 9 (SK-9) (第275図59~68)

上段水田の掘立柱建物1の東側に位置し、北端が土壌4を切っている。輪郭は不整形ではっきりしておらず、最も広い所で東西約1.8m、南北約1.6m、深さは約10cmを測る。

遺物 遺物は須恵器碗・杯・皿、土師器甕が出土した。

須恵器碗(59~64) 59は口径13.8cm、器高4.6cm、底径7.0cm、60は口径13.2cm、器高4.3cm、底径6.1cm、いずれも平高台の底部をもち、体部が直線的に開く。口縁端部は59が短く外方に折れ、60が丸く収まる。体部の調整はロクロナデで、底部の切り離しは回転ヘラキリによる。見込みの凹みは弱い。61~64は口縁部のみで、底部を欠失している。口径は61が14.9cm、62が14.6cm、63が13.9cm、64が16.2cmを測る。61は内彎気味に立ち上がり、端

部は強く外反する。62～64は直線的に開き、端部は丸く収まる。いずれも粘土紐巻き上げ成形で、ロクロナデで調整する。

須恵器坏(65) 口縁部のみ出土で坏に分類したが、壺・皿の可能性もある。口径17.8cm、体部は反り気味に立ち上がり、端部をナデで仕上げる。

須恵器皿(66・67) 66は口径12.9cm、67は口径12.4cm、器高3.0cm、体部が直線的に開き、端部をナデで弱く外反させる。底部の切り離し技法は不明である。

土師器甕(68) 口径16.4cm、丸みを帯びた肩部から頸部が短く直立し、口縁部が内彎気味に開く。体部外面はタタキ調整痕が残るが、それ以外は不明である。

土壌12 (SK-12) (第282図1)

下段水田のほぼ中央に位置し、掘立柱建物5と一部重複する。この土壌は確認調査のAトレンチで検出されていたもので、径約60cmの円形を呈し、深さは約20cmを測る。

遺物 遺物は鉄釘(1)が出土した。先端を僅かに欠いており、残存長4.4cmを測る。断面は方形で3～4mmの厚みをもつ。頭部は直角に折り曲げて面を作る。

土壌14 (SK-14) (第275図55)

中段水田の東半部、掘立柱建物3と掘立柱建物4に挟まれた地点に位置する。径約130cm×約70cmの楕円形で、深さは約30cmを測る。土壌内から炭化物層を検出した。

遺物 遺物は土師器皿(55)が出土した。口径11.6cm、器高2.7cmを測る。体部は直線的に開き、端部が肥厚する。口縁部には1段のナデを施す。底部の切り離し技法は不明だが、糸切りは行われていない。

土壌15 (SK-15) (第275図69・70)

中段水田の東半部に位置し、窯跡の床面を切り込んで作られている。径約40cmの円形で、深さは約15cmを測る。土壌内には須恵器と石が詰まっていた。

遺物 遺物は須恵器壺(69・70)が出土した。69は口径15.1cm、器高5.0cm、底径7.9cm、70は口径14.8cm、器高5.1cm、底径7.9cmを測る。粘土紐巻き上げ成形で、体部が直線的に立ち上がり、端部は丸く収まる。底部は平底であるが、体部との境は不明瞭である。体部内外面はロクロナデで調整し、底部は回転糸切り技法で切り離す。

溝1 (SD-1)

中段水田の掘立柱建物3の西側を区切る溝で、雨落ち溝と考えられる。南端は削平を受けており、現存長約4m、幅30cm～75cm、深さ約10cmを測る。

遺物は細片のため時期の判別するものはなかった。

溝4 (SD-4)

上段水田の西端に位置し、等高線と平行に東西方向に延びる。溝の東端は掘立柱建物1の西側から始まり、西は調査区外に続く。幅35cm～100cm、深さ5cm～8cmを測る。

遺物は図示していないが、底部を回転ヘラキリで切り離した須恵器壺が出土した。

溝 5 (SD-5)

上段水田の南西隅に位置する。溝 6 を切って南北に延びる溝が北端で西に折れ、L字状を呈する。南は調査区外に続く。幅20cm~30cm、深さ約5cmを測る。

遺物は細片のため時期の判別するものはなかった。

溝 6 (SD-6) (第275図57)

上段水田の南縁に位置し、等高線とほぼ平行に東西方向に延びる。上段水田ではこの溝より南側には柱穴などの遺構は存在しないため、集落を限る溝の可能性がある。幅35cm~80cm、深さ5cm~15cmを測る。

遺物 遺物は須恵器皿(57)が出土した。口径14.6cm、器高2.4cm、底径7.4cm、底部は平底で、体部は丸みを帯びて立ち上がり、僅かに外反する。口縁端部は外方へつまみ出し、先端が尖り気味に収まる。体部の調整は内外面ともロクロナデで、口縁部のみナデを加える。底部は回転ヘラキリ技法で切り離し、再調整しない。

5. 包含層出土の遺物

第II層出土遺物 (第278図98・99)

土師器壺(98) 口径22.6cm、体部は下半部が強く腰を張り、肩部は内傾する。口縁部はゆるく外傾し、端部は面をもつ。口縁部内外面はヨコナデで調整し、特に外面は強いナデを施し2条の凹線状にする。体部外面は右上がりの平行タタキ調整、内面はナデ消す。

土師器羽釜(99) 口径21.7cm、鏝径25.1cm、体部上半から口縁部にかけてやや内傾し、口縁部外面に断面三角形の鏝部を設ける。口縁部内外面はヨコナデ調整し、体部外面は右上がりの平行タタキ調整、内面はナデ消す。

第III層出土遺物 (第278図100~128、第279図129~138)

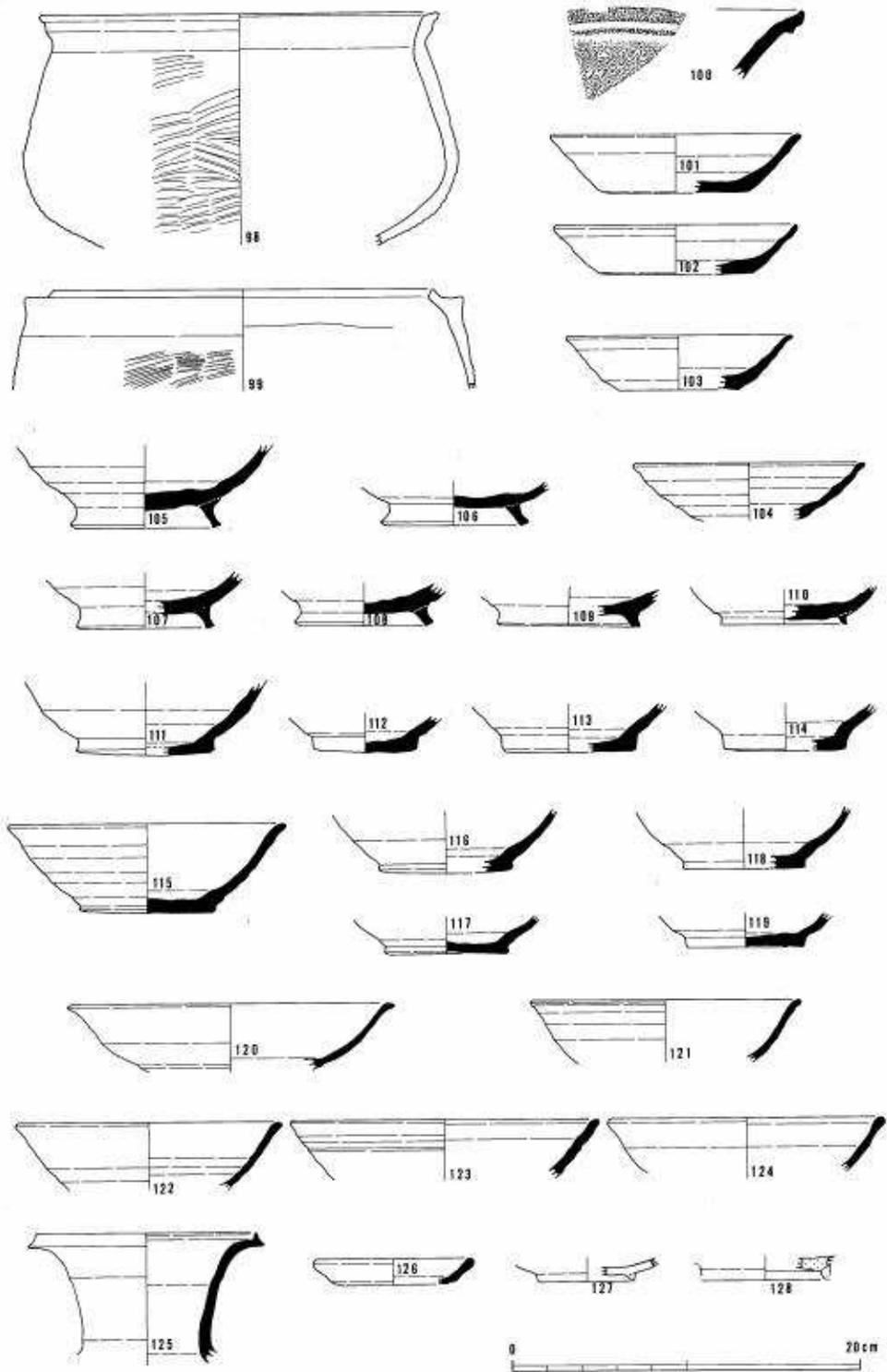
須恵器甕(100) 大きく外反する甕の口縁部である。口縁直下に一条の突帯を設け、その下に櫛描波状文を施す。細片のため口径は不明である。

須恵器長頸壺(125) 口径12.6cm、やや外傾する頸部から口縁部が大きく外反し、端部を内傾気味につまみ上げる。内外面ともロクロナデ調整し、自然釉が付着する。

須恵器坏(101~104) 101は口径14.1cm、器高3.4cm、102は口径13.8cm、器高2.8cm、103は口径12.7cm、器高3.1cmを測る。いずれも粘土紐巻き上げ成形で、平底から体部が直線的に開く。調整は内外面ともロクロナデで、底部の切り離しは回転ヘラキリによる。104は口径12.9cm、体部は内彎気味に開き、端部を外方へ僅かにつまみ出す。調整は内外面ともロクロナデである。

須恵器壺(105~124) 105~110は高台付壺の底部である。底径は105が8.6cm、106が8.5cm、107が7.9cm、108が7.9cm、109が8.2cm、110が7.1cmを測る。いずれも輪高台の底部が

井ノ方遺跡



第278図 第II・III層出土土器

ら体部が内彎気味に立ち上がる。調整は内外面ともロクロナデで底部の切り離しはヘラキリによる。110の輪高台は外方への張りが弱く、退化形態を示している。111~119は平高台をもつ壺である。115は口径15.7cm、器高5.1cm、底径7.8cmを測る

111~118は粘土紐巻き上げ成形で、体部は内彎気味に立ち上がる。調整は内外面ともロクロナデ、底部の切り離しは回転ヘラキリである。119は底径6.8cm、底部の見込みの凹みは弱く、体部は内彎気味に立ち上がる。調整は内外面ともロクロナデ、底部の切り離しには回転糸切り技法を用いる。120~124は壺の口縁部のみの残欠である。口径は120が18.0cm、121が15.1cm、122が14.9cm、123が17.5cm、124が15.4cmを測る。体部調整はいずれもロクロナデである。口縁端部の形態は外へつまみ出すもの(120)、やや外反するもの(121)、丸く収まるもの(122・123)、若干肥厚して丸く収まるもの(124)がある。

須恵器小皿(126) 口径8.8cm、器高1.5cm、平底から体部が直線的に立ち上がり、端部は丸く収まる。調整は内外面ともロクロナデで、底部の切り離しはヘラキリと思われる。

須恵器鉢(129~131) 129は口径30.3cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は面をもってそのまま終わる。130は口縁端部を上方に拡張し、外へ傾斜した面をもつ。131は口縁付近で外反し、上方に立ち上がる。体部調整はいずれも内外面ロクロナデである。

須恵器羽釜(132) 口縁部のみの細片で、口径は不明である。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、外面は強いヨコナデを受けて凹線状となる。口縁直下には断面台形の罫がつく。

須恵器鉢(134) 口径21.9cm、体部は外傾気味に立ち上がり、口縁付近で短く外反する。端部は上方につまみ上げる。調整は内外面ともロクロナデである。

須恵器小壺(133) 口径5.0cm、器高5.0cm、平底から体部が球状に立ち上がり、丸く収まる。手捏ね成形であるが、約1/2の残欠のうち半面は不調整なのに対し、もう半面はナデで丁寧に仕上げられており、正面を意識した調整が行われたものと考えられる。

黒色土器壺(127) 底径5.4cm、内面のみ黒色の壺で、底部には断面三角形の輪高台が付く。磨滅が激しいため調整は不明である。

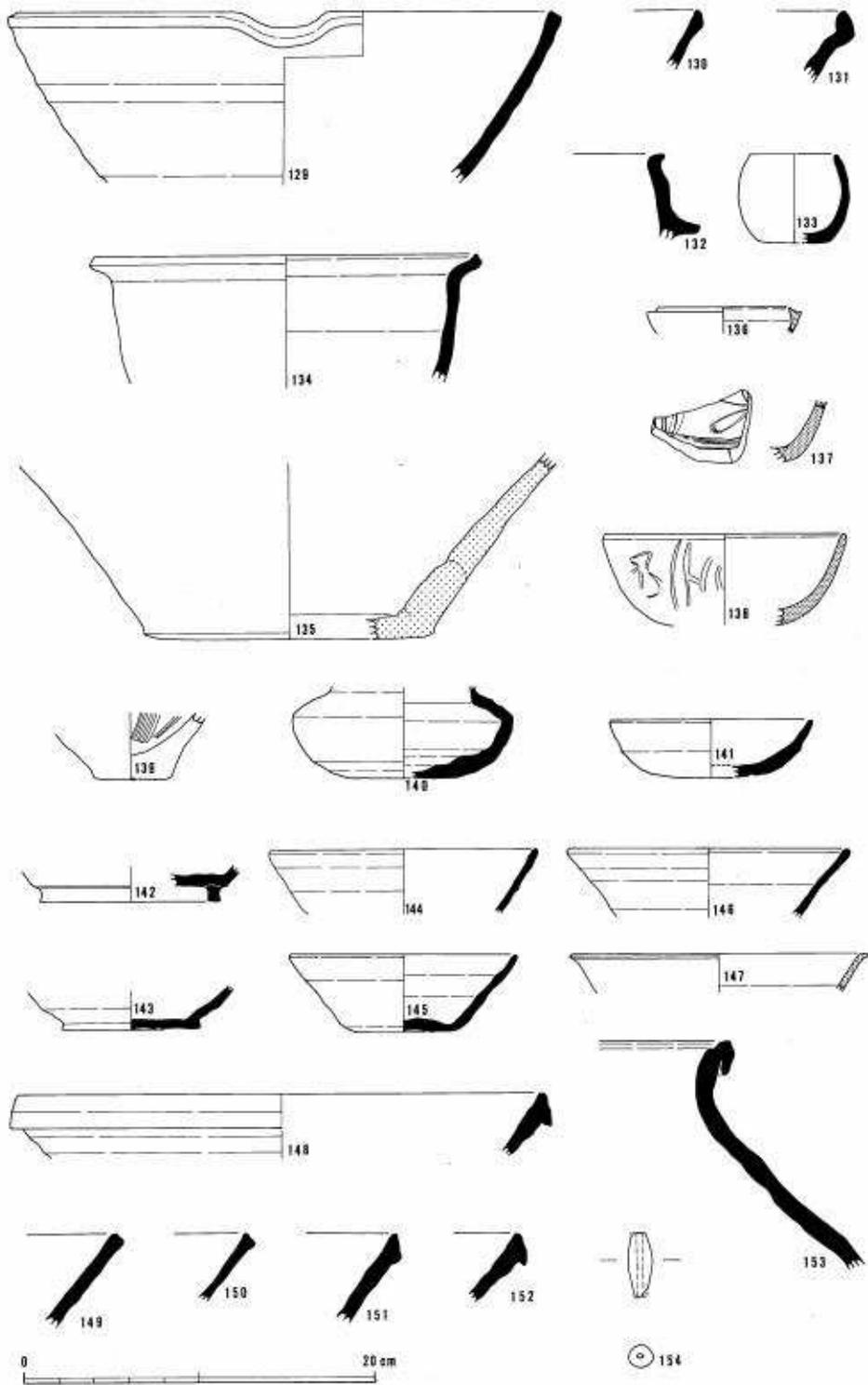
緑釉陶器壺(128) 底径7.3cm、平底に断面四角形の輪高台が付く。硬質の焼成で、釉は高台下端面を除いて、高台内外面、底部内外面に施される。

丹波系陶器鉢(135) 底径16.5cm、平底から体部が直線的に開く。体部内外面はハケメ調整で仕上げ、底部外面は不調整である。体部内面にはオロシメをもたない。

白磁合子(136) 口径7.5cm、合子の身で、体部はほぼ垂直に近く、受部の立ち上がりは強く内傾する。内外面に施釉しており、受部のみ釉を掻き落とす。外面は剥離が激しいが、片切り彫りの菊花文の痕跡がみられる。

青磁碗(137・138) 碗の体部の破片で、下半は丸みをもって立ち上がり、上半は直線的に伸びる。137は内面に片切り彫りの草花文を施し、外面は無文である。138は口径13.7cm、

井ノ方遺跡



第279図 第III・IV層出土土器

口縁部はヨコナデで再調整し、端部は丸く収まる。内外面とも釉を施すが、無文である。

第IV層出土遺物（第279図139～154）

弥生土器甕(139) この土器は確認調査の第1グリッドから出土した。甕の底部で、底径は4.4cm、内面の調整はハケメ、外面は不明である。

須恵器短頸壺(140) 丸みを帯びた底部から肩の張った体部が立ち上がり、肩部から急に内傾する。口縁形態は端部を失っているため不明であるが、短く直立するものと思われる。調整は体部上半と内面がロクロナデ、体部下半が回転ヘラケズリで一部ナデ調整を行う。

須恵器環(141・142) 141は口径11.3cm、器高3.2cm、底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は開き気味になる。口縁部内外面はロクロナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。142は底径10.2cm、平底にはほぼ直立する輪高台が付く。体部の調整は内外面ともロクロナデである。

須恵器壺(143～146) 143は平高台をもつ壺の底部で、底径8.0cmを測る。粘土紐巻き上げ成形で、見込みの凹みは弱い。体部の調整は内外面ともロクロナデで、底部の切り離しは回転ヘラキリによる。144は口径15.4cm、146は口径15.7cm、体部は直線的に開き、端部は丸く収まる。調整は内外面ともロクロナデである。145は口径12.8cm、器高4.4cm、底径5.5cm、平底から体部が直線的に開き、端部は丸く収まる。体部の調整は内外面ともロクロナデで、焼成も良好であるが、胎土には粗砂を含み、全体的に雑な仕上げである。底部の切り離しは糸切り技法による。

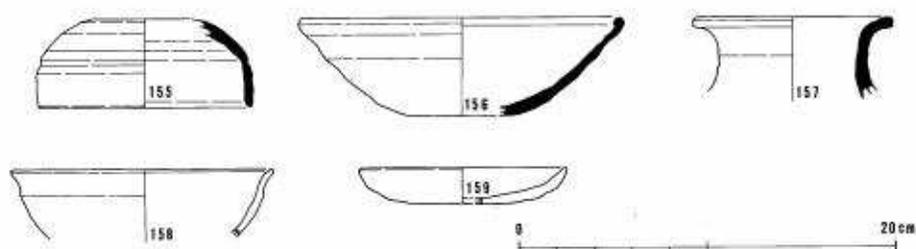
須恵器鉢(148～152) 148は口径29.8cm。いずれも口縁部のみの破片で、148以外は口径は不明である。口縁形態は、端部が面をもってそのまま終わるもの(149)、端面を強くナデるもの(150)、上方に拡張するもの(151)、上下に拡張するもの(148・152)がある。調整は内外面ともロクロナデによる。

須恵器甕(153) 大型の甕の口縁部で、内傾する肩部が僅かに外反し端部に至る。口縁端部は外方へ折り返し垂下させる。器形的には常滑産の甕に類似するが、色調は青灰色を呈し、須恵質の焼成である。

須恵器土錘(154) 手捏ね成形で、長さ3.6cm、最大径1.3cmを測る。

表面採集遺物（第280図155～159）

須恵器壺(155・156) 155は口径11.1cm、器高4.7cm。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、中段からは直立する。口縁端部内面は凹線状のナデをめぐらす。口縁部内外面および体部内面はロクロナデ、体部外面には1条の沈線をめぐらし、下半線はヘラケズリで仕上げる。156は口径16.7cm、器高5.2cm。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縁端部は内側へ折り返し、丸く肥厚させる。体部と底部の境は不明瞭である。調整は内外面ともロクロナデで、底部の切り離しは糸切り技法による。



第280図 表面採集土器

須恵器広口壺(157) 口径10.0cm、直立した頸部から口縁が水平に近く外反する。調整は内外面ともロクロナデである。

土師器小皿(159) 口径10.8cm、器高1.9cm、平底から体部は丸みを帯びて立ち上がり、端部は丸く収まる。手捏ね成形で、調整は底部外面が不調整の他は不明である。

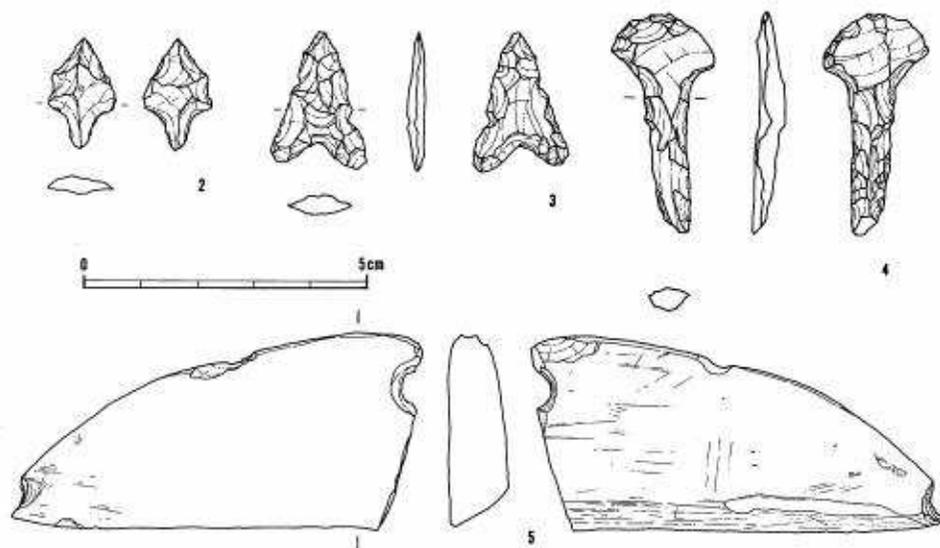
瓦器壺(158) 口径13.7cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部近くで外反する。調整は口縁部外面がヨコナデ、体部下半がナデ、内面には暗文を施す。

白磁碗(147) 口径16.4cm、体部は直線的で、口縁端部を外方につまみ出す。(中川) 石器(第281図2~5)

本遺跡からは5点の石器が出土した。いずれも原位置を遊離し、後世の遺構あるいは包含層中に混入した状況で出土した。ここでは、サマカイト剥片1点を除く4点を図示する。

2・3はサマカイト製石鏃である。

2は小型の有茎式石鏃である。一側縁をわずかに欠損しているが、ほぼ左右対称で、各辺がやや内彎した五角形を呈している。風化が著しく進行し、灰白色を呈しており、細部



第281図 出土石器

の剝離痕の識別は困難である。長さ29mm、幅18mm、厚さ4mm、重量0.6g。

3は凹基無茎式石鏃である。器面の二次加工はやや粗く、図右面には素材剥片上の剝離面をとどめている。2に比べて風化度は弱い。長さ37mm、幅25mm、厚さ5mm、重量0.8g。

2・3ともに包含層中よりの出土である。

4はサヌカイト製石鏃である。扇形の基部に、断面形がやや片側に張らむ形状を呈する、長い錐部を作出している。先端部は新しく欠損している。P-135より出土した。長さ59mm、錐部幅12mm、錐部の厚さ6mm、重量1.7g。

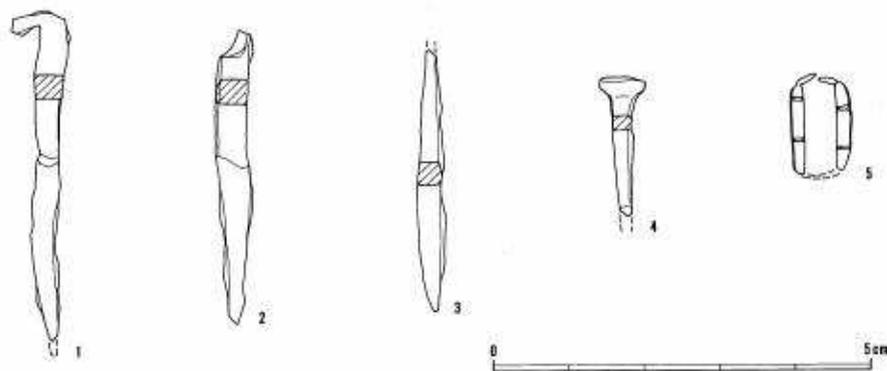
5は泥岩あるいは極めて細粒の砂岩かと思われる石材を用いた石包丁である。1/2強を折損しているが、一孔をわずかにとどめている。端部は両面からの加撃によって抉られている。器面は丁寧な研磨によって仕上げられているが、片面は鉄分の付着のため、観察できない。刃部は急斜度の厚い片刃となっている。包含層よりの出土である。現存長98mm、幅52mm、厚さ16mm、重量30.8g。 (久保)

金属器 (第282図2～5)

包含層出土の金属器は鉄釘3点、銅製品1点を図示した。全て第III層からの出土である。

鉄釘(2～4) 2は完存しており、全長3.9cmを測る。断面は方形で3～4mmの厚みをもつ。頭部は平らではなく、斜めに抉られたような面をもつ。3は両端を尖らせており、材を継ぐ際に用いられた相い釘であると考えられる。片方の先端を僅かに欠損しており、現存長3.5cmを測る。断面は方形で約3mmの厚みをもつ。4は先端を欠損しており、現存長1.85cmを測る。断面は方形で約2mmの厚みをもつ。頭部はT字状を呈す。

銅製品(5) 2片に分裂し、さらに一部を欠損する。復元すると縦1.4cm、横0.8cm、内法は縦1.2cm、横0.4cmの小判形の環状の金具になる。金具の片面の外縁には僅かに立ち上がりの痕跡が認められる。以上の特徴からみて、これは鞆の縁金具であった可能性が大きい。



第282図 出土金属器

6. 小結

今回の調査によって、井ノ方遺跡は平安時代～室町時代の集落であることが判明し、建物跡5棟、須恵器窯跡1基、土塋16基、溝8本、ピット多数などの遺構を検出した。平安時代中期の遺構は主に上段水田に、鎌倉時代～室町時代の遺構は中・下段水田に存在しており、集落の立地の変遷が窺える。また、遺物としては弥生時代～室町時代のものが出土しており、以下、時代を追って説明を加えたい。

弥生時代

弥生時代の遺物としては、甕の底部(139)、サヌカイト製の石鏃(第281図2・3)・石錐(同4)、石包丁(同5)などが出土したにすぎないが、付近に集落が存在した可能性が考えられる。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺物としては須恵器甕(100)・短頸壺(140)・坏(141)・埴(155)などがある。断片的な出土であるが、概ね6世紀代の年代を示す。

平安時代中期

平安時代中期の主な遺構としては掘立柱建物1・2、土塋1・4・5・6・9、溝4・6などがあり、遺構の切り合い関係・出土遺物などからⅠ期～Ⅲ期の三期に細分できる。

Ⅰ期の遺構としては掘立柱建物1、土塋4などがある。

土塋4からは先にも述べたように、計28個体の土器が一括に出土した。この土器群は須恵器埴・坏、土師器皿・甕のセットである。須恵器埴には輪高台をもつもの〔A類〕(71・72)と、平高台で高台部外面をナデで再調整するもの〔B1類〕(73～75)とがある。須恵器坏(79～89)は平底で底部の切り離しは回転ヘラキリである。土師器皿(91～94)は非ロクロ成形で、口縁部に2段のナデを施すもの(91)、1段のナデを施すもの(92～94)がある。土師器甕(95～97)は口縁端部に面をもち、先端をつまみ上げる。体部外面は右下がりのタタキ調整を行う。以上の特徴から、類例は姫路市書写山円教寺の第2～4層出土遺物に求められ、およそ10世紀中頃の年代が与えられる⁽⁵⁾。

Ⅱ期の遺構としては掘立柱建物2・土塋5・6・9、溝6などがある。

土塋9は土塋4を切っており、土塋内から11個体の土器が出土した。この土器群は須恵器埴・坏・皿、土師器甕のセットで、須恵器埴が主体を占める。須恵器埴で底部形態の判っているのは、平高台で高台部外面を再調整しないもの〔B2類〕(59・60)だけで、〔A類〕は含まれていない。底部の切り離し技法は回転ヘラキリで、見込みの凹みは若干弱くなっている。土師器甕(68)は直立した頸部から口縁部が内彎気味に開く。体部外面にはタテ方向のタタキ調整を施す。以上の特徴は土塋4の一括資料よりも若干新しい様相を示しており、ほぼ10世紀後葉の年代が与えられる。

掘立柱建物2は掘立柱建物1と方位を大きく異にしており、同時期とは考え難い。また、P-151より出土した土師器甕(8)は、口縁部の外反が強い点で書写山円教寺第2-4層出土の甕よりやや後出すると考えられることから、II期に含まれるものとする。

溝6は集落の南を限っており、この溝以南ではI・II期の遺構は検出されないことから、I・II期を通じて存在していたものと考えられる。遺物は10世紀後半-11世紀前半頃の須恵器皿(57)が出土した。

III期に属すると判別した遺構は土壌Iのみである。

土壌1からは土師器皿(54)が出土した。54は所謂「て」字状口縁の皿で、宇野分類によると土師器皿のB3類に分類され、ほぼ11世紀代(平安京III期)の年代が与えられているものに相当する⁽⁵⁾。

平安時代中期の遺物はこの他にも須恵器壺・坏・皿・壺、土師器壺・坏・甕、緑釉陶器壺などが出土した。

須恵器壺は〔A類〕(105-110)と〔B類〕があり、B類はさらに高台部外面を再調整するもの〔B1類〕(111-114・116・117)、再調整しないもの〔B2類〕(115・118)、回転糸切り技法で切り離すもの〔B3類〕(119)に分かれる。A類・B1類は10世紀中頃、B2類は10世紀後葉、B3類は11世紀代の年代が与えられる。

平安時代末～室町時代

平安時代末～室町時代の集落は中・下段水田に位置し、遺構の切り合い関係、出土遺物などからIV～VI期の三期に区分できる。

IV期の遺構としては須恵器窯跡があるが、これについては別に詳述するため、ここでは割愛する。尚、この窯の製品と考えられる須恵器壺(156)などが出土している。

V期の遺構としては土壌15などがある。

土壌15は須恵器窯跡の床面を掘り込んでおり、明らかに窯の放棄後の遺構である。

土壌内からは須恵器壺(69・70)が出土した。この壺はIV期の窯跡の製品に比べて底径が大きく、体部の立ち上がりがやや急で、器壁が若干厚く、全体にどっしりした印象を受ける。69・70は形状・調整技法・胎土が同一で、同じ窯で焼かれた製品とみられる。上記の特徴は見比窯産のものに近く、13世紀前半の年代が与えられる⁽⁶⁾。包含層中からも同窯産の壺(145)が出土している。窯跡は当遺跡から北西へ約5kmの地点に在り、製品の流通が頻繁であったことが窺える。

VI期の遺構としては掘立柱建物3・4、溝1などがある。

掘立柱建物4のピット198は須恵器窯跡の床面を掘り込んでおり、明らかに窯の放棄後に作られた遺構である。また掘立柱建物3・4は桁行方向がほぼ北31°西に一致しており、同時期の建物であると考えられる。

遺物は掘立柱建物4のピット193の柱痕部から13個体分の土器が出土しており、建物廃絶の際に一括に埋納したものとみられる。この土器群は土師器皿・小皿・埴、丹波系陶器鉢からなり、須恵器を含んでいない。土師器皿(11・12)・小皿(17~19)は宇野分類のE1類あるいはE2類にあたるもので、14世紀(中世京都II期)の年代が与えられている⁽¹⁾。丹波系陶器鉢(21)は稻荷山期のもので、14世紀代の年代が与えられて⁽²⁾。ただ糸切り底をもつ土師器皿(9・10)・小皿(13~16)、下膨れの胴部外面に横位の平行タタキをもつ埴(20)は、これまで、より古い様相を示すものと考えられており、両者の年代観に隔たりが認められる。これを新旧の要素の混在とみるか、編年の修正を要するものとみるかは現段階では判断できず、今後の資料の増加に期待する。

平安時代末~室町時代の遺物はこの他にも須恵器埴・鉢・甕・羽釜、土師器埴・皿・埴・羽釜、丹波系陶器鉢、白磁合子・皿、青磁碗などが出土した。

須恵器鉢は129・149・150が12世紀、130・151が12世紀末葉~13世紀前半、131が13世紀中葉~後半、148・152が14世紀~15世紀前半の年代を示す。須恵器甕(153)は常滑風のプローションを呈するが、胎土・色調は東播系のものに近似する。この土器を焼いた窯は未発見であるが、宝林寺北遺跡の中世墓の周溝より類例が出土しており、平安時代末~鎌倉時代の年代が与えられている⁽³⁾。

土師器羽釜(99)は末西地区の平井遺跡などの例から、15世紀代の年代が与えられる⁽⁴⁾。

青磁碗(137・138)はどちらも龍泉窯系の劃花文碗で、森田分類によると137はI-2類、138はI-1類に属する⁽⁵⁾。年代は13世紀前半頃と考えられる。(中川)

註(1) 全面調査は井守徳男・岸本一宏・久保弘幸・中川 渉が担当した。

(2) 挿図中の方位は磁北を表すが、本文中の方位は真北を基準としている。三田盆地付近での磁北の誤差は真北よりN6°30'Wとする。

(3) 水口富夫「薬師堂出土遺物について」『開館三周年記念特別展 1000年の歴史を秘める書写山円教寺』1986 兵庫県立歴史博物館

(4) 同(3)

(5) 宇野隆夫「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告』1981 京都大学埋蔵文化財研究センター

(6) 島中 剛「見比窯址採集の須恵器について」『三田考古』第13号 1984 三田市教育委員会 吉田 昇氏より御教示を頂いた。

(7) 同(5)

(8) 大槻 伸「丹波」『世界陶磁全集』3 1977 小学館 岡崎正雄氏より御教示を頂いた。

(9) 市村高規「中世墓(方形周溝墓)」『宝林寺北遺跡』1987 兵庫県教育委員会 渡辺 昇氏より御教示を頂いた。

(10) 岡田章一他「平井遺跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』1987 兵庫県教育委員会

(11) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978 九州歴史資料館

第4節 井ノ方^{かた}窯跡 (AK-80)

1. 立地

井ノ方窯跡は三田市末東字井ノ方に所在し、井ノ方遺跡の全面調査の際に発見されたもので、それまでの分布調査・確認調査では全く確認されていなかった。

窯跡は青野川左岸に西方に張り出したいくつかの小尾根の1つにあり、西北方から流れてきた青野川が大きく曲がって西南方に方向を変える位置の東岸にあたる。尾根は西方にのび、途中からやや南方に向きを変えており、窯跡はその突端付近の南側斜面に存在し、前面には谷が入り込んでいる。調査時には、水田構築および道路によって窯跡が削り取られ、分断されたかたちで部分的に遺存していたにすぎない。

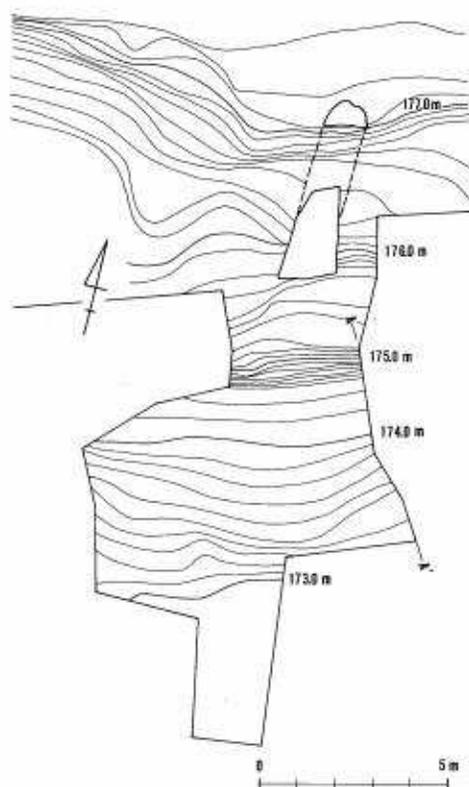
一方、窯跡前面の道路の南側は工事用の仮水路が掘削されており、その壁面を観察したところ、黒灰色土の中に土器が多く含まれており、灰原が遺存している可能性が認められたため、灰原と予想される部分についても調査を行った。

2. 窯跡の構造

窯跡は水田構築により2分された焼成部が遺存していたのみで、燃焼部および煙道部は削平を受け、存在していなかった。

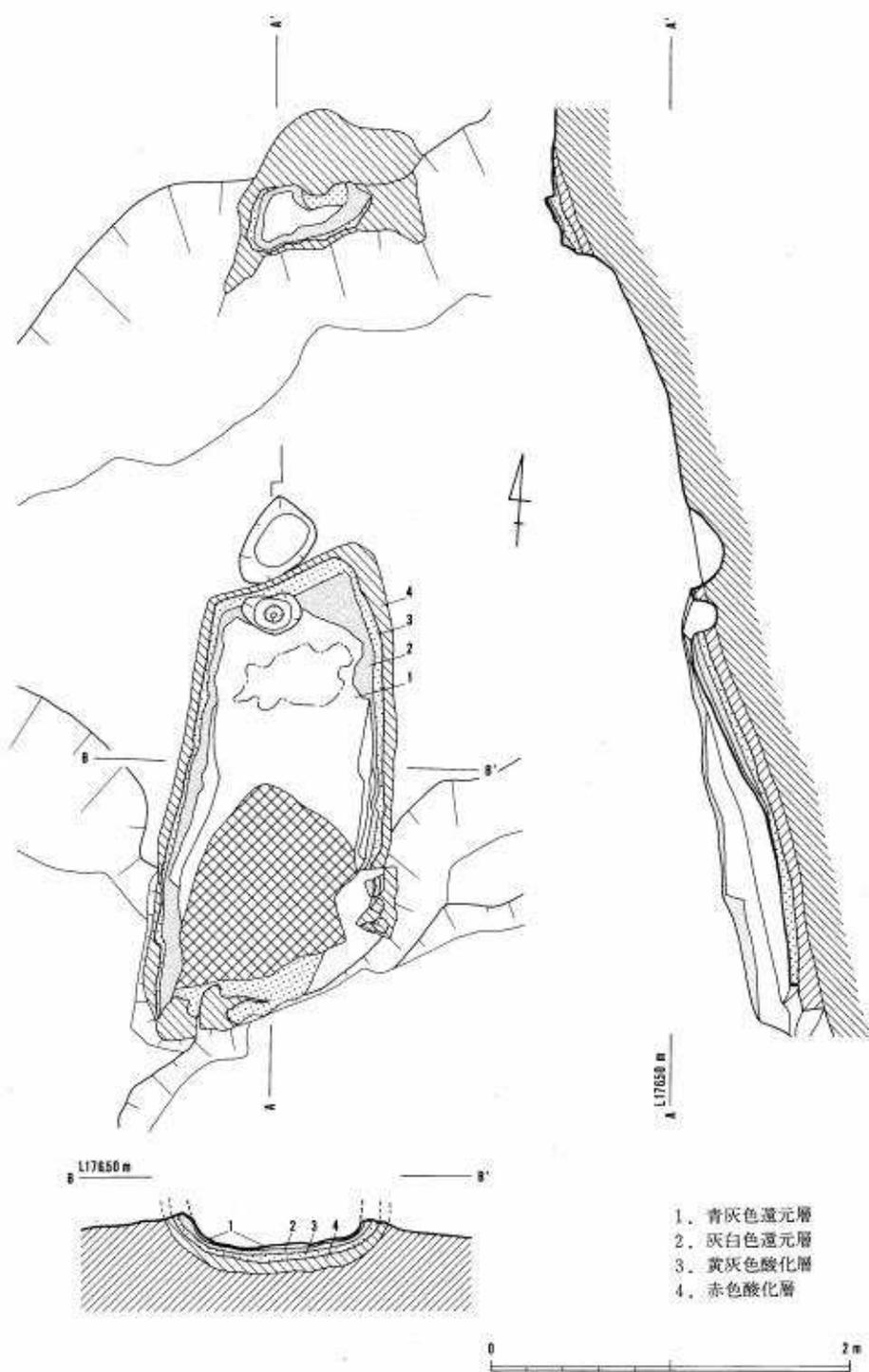
遺存していた焼成部は、還元した部分の長さが、大きい方で2.38m、幅1.14mで、小さい方は長さ33cm、幅67cmであった。深さは最も遺存状態のよいところでも18cmの高さしか残っていなかった。現存する窯跡の全長は4.66mで、床面の傾斜角度は上半部で25°、下半部で8~13°を測り、主軸方位はほぼ南北方向である。標高は175.85~177.2mである。

窯は黄灰色砂質土の地山を掘り込んでその上に粘土を貼ってつくられており、床の厚さは10cmで、地山は酸化され、厚さ7cmにわたって赤褐色を呈していた。床面は中央部で部分的に表面がなめらかで堅い面が遺存していたが、その他の部分は表面が薄く剥がれた状況が認められ、表面が軟かく、荒れた状態であった。



第283図 地形測量図

井ノ方竈跡



第284図 竈体実測図

窯体内下方には床面幅いっぱい土器の集積が認められ、焼成部にあったものがずり落ちて溜った状況であった。土器は生焼け状態のものが殆どで、小さく割れて炭・灰とともに存在していた。器種としては壺が殆どを占め、片口鉢・小皿が若干認められた。

窯体残存部下方は幅約2mの道路になっており、地山まで下げた結果、窯南端で約

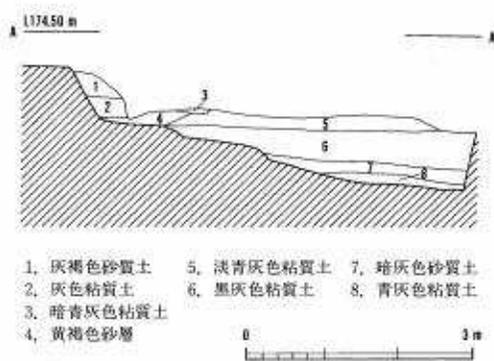
60cmの落差が認められ、窯体は全く遺存していなかった。さらに下方は現状では水田となっており、先述のように遺物の包含層が認められたため、灰原の存在を予想して南北6m、東西8mの範囲を地山まで掘り下げた。土層は上から淡青灰色粘質土(第5層)、黒灰色粘質土(第6層)、暗灰色砂質土(第7層)、青灰色粘質土(第8層)と続いていたが、それらの層中には窯以前の時期の土器が多数混入しており、しかも使用された痕跡があるものが数多く認められた。また、白磁碗も存在していた。しかし、灰原の証拠となる窯壁、炭の集積、焼け歪みのある土器などは全く認められなかった。

3. 窯体内出土遺物

窯体内に集積した状態で出土した遺物は灰白色を呈する生焼けの壺が殆どを占め、口縁部には重ね焼の痕跡が認められた。他の器種では片口鉢・小皿がある。

壺(第286図・第287図23~30)は全体的に高台をもたない回転糸切りの平底をなし、一部では上げ底風となっている。口径は15.2~18.4cmで、大半は15.2cm前後のものと16.5cm前後のもの2種類認められる。器高指数は口径の大きい方で31以下、小さい方で31以上である。底径は5.1~8.6cmで、おおむね6.4cmである。焼成は大半が悪く、乳白色を呈する脆弱なものから青灰色を示す焼成良好なものまで認められ、すべて口縁部外面が変色しており、重ね焼の痕跡であろう。胎土には1mm程度の石英粒を多く含み、他にチャート・長石粒、まれに黒色粒を含んでいる。全体を通して体部にはロクロ目が認められ、口縁部の形態は内彎しながら外上方にのびるだけのものや、端部付近を若干肥厚させるもの、外側に少しつまみ出すもの、また、反対に内側にひきのぼしたり折り返したりするものが認められる。これらの違いのなかには微妙なものがあり、製作時のちょっとした力の加わり方で変化するものと思われ、特に完形品については部分により異なった特徴を示している場合が多い。全体のプロポーシオンでは、口径が器高に対して小さい壺形を呈するものと、口径が大きく器高が低い鉢形を呈するものがある。

片口鉢(第287図31~35)は図示し得たものが5点しかなく、完形品が認められな



第285図 土層断面図

め、正確な口径・器高は不明である。破片より復原した口径では25.6~32.5cmまであり、口径が復原できた4点のうち3点までが30~32cm程度であり、もう一点は25.6cmとやや小さめである。胎土には石英・長石粒を多く含み、他にチャート粒も含んでいる。焼成は非常に堅致な焼成良好のもので青灰色を呈するものから、灰白色を示すやや焼成の悪いものまでである。底部は平底で、全体にやや突出しており、底面はへらによる切り離しののち特に調整は施していない。体部はほぼまっすぐに外上方にのびて口縁部へと続くものと、内彎しながら外上方にのびるもの、また、まっすぐ外上方にのびたのち内彎して上方にのびるものの3種が認められる。また、口縁部は体部の厚みのままで、端部のみ内外に少し拡張しているのが特徴的である。内方へのひきのばしが顕著なものと、内外両方のものがある。端面は概ね外傾し、平坦なもの凹面を呈するものがある。片口部は1点についてのみ確認できたが、側面からみると幅の広いU字形を呈している。

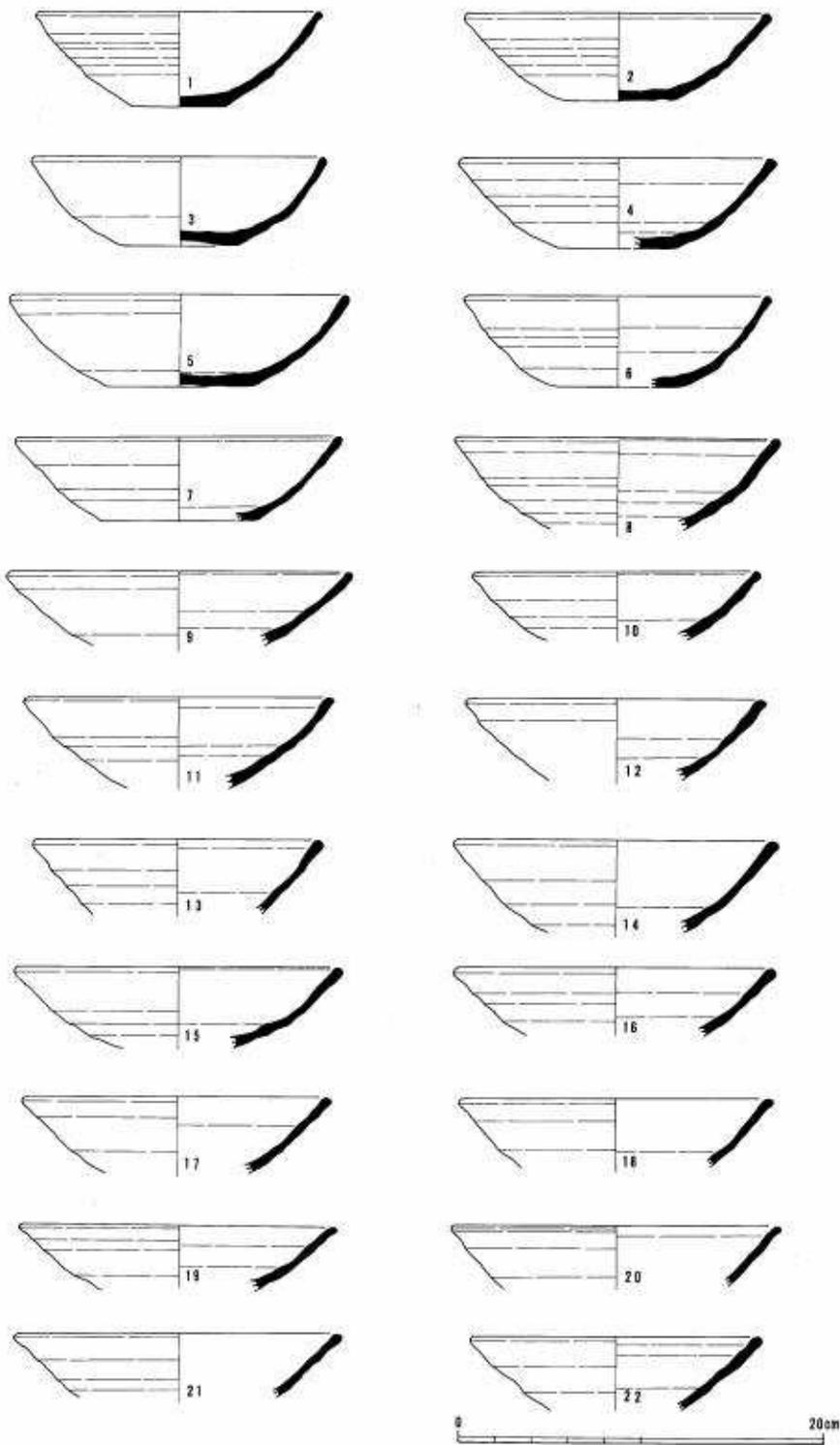
小皿(第288図36)は口径8.5cmの底部を欠失したものの1点のみ図示できた。平らな底部から稜をもってたちあがる口縁部をもち、端部は肥厚しない。底部は回転糸切りで、色調は青灰色、胎土には石英・チャート粒を含む。

4. 包含層出土遺物

窯跡南側下方の調査区では、黒灰色粘質土中から須恵器・土師器が出土した。また、この地区については表土より包含層の一部まで重機により掘削しており、土層は不明であるが、その排土中からも須恵器・土師器・白磁が出土している。人力掘削により出土した遺物については第288・289図、重機掘削の排土中より出土した遺物については採集遺物として第290図に掲げた。

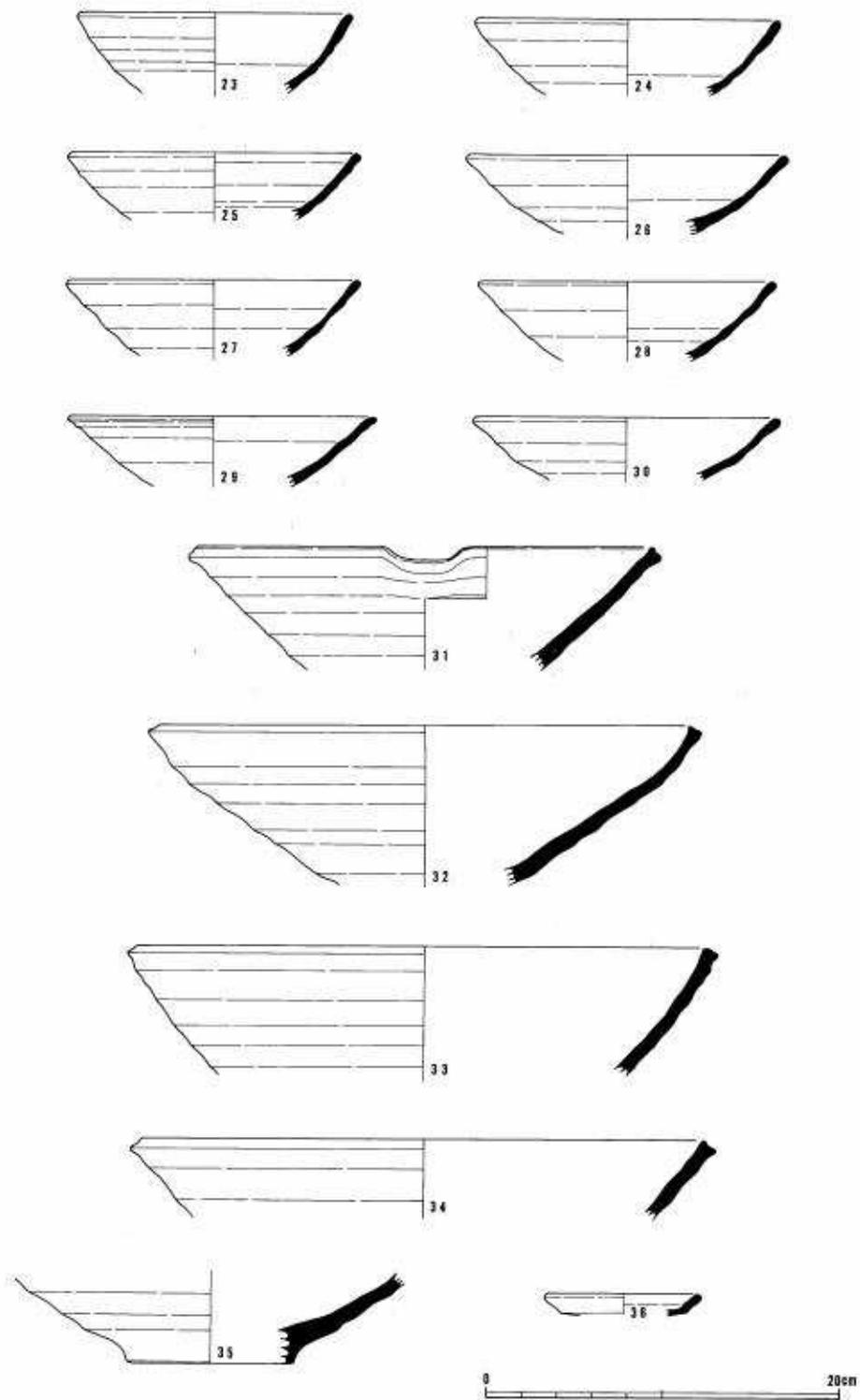
第288図37~46は須恵器坏身で、高台を有しない底部へら切りのもので、平らな底部から外上方に開く口縁部をもつ。体部から口縁部へは直線的に続き、器高は低く、3.5cm程度で、46のみやや深く、4.5cmである。43の外面には墨書が認められ、文字のようであるが判読できない。47は須恵器皿で、底部は殆ど欠失しているが、平高台をもつものと思われる。口径は15.1cmである。一方、48は輪高台付の皿で、口縁端部は外方に大きくひきのばしている。体部は底部から稜をもって屈曲して外上方にのびている。口径14.9cm、器高2.5cmである。49~52は坏もしくは埴の底部で、輪高台を貼り付けているものである。高台の下端は外方にややつまみだす感じのものである。49の底部外面の高台で囲まれた範囲内には墨痕がかすかに認められ、文字が書いてあるようだが、墨が薄いので判読できない。53~55は輪高台付の埴の底部破片である。53は大形のものになると思われる。54は底部から屈曲して体部に至る。56~64は平高台付の埴で、56の底部は大きく張り出しており、高さ約1cmである。底部の内面も凹んでいる。底部外面はへら切り未調整である。体部は内彎しながら外上方にのび、口縁部は小さく外反する。口径は13.3cm、高さ4.6cm、底径6.8cmであ

井ノ方窯跡



第286図 窯体出土土器(1)

井ノ方窠跡



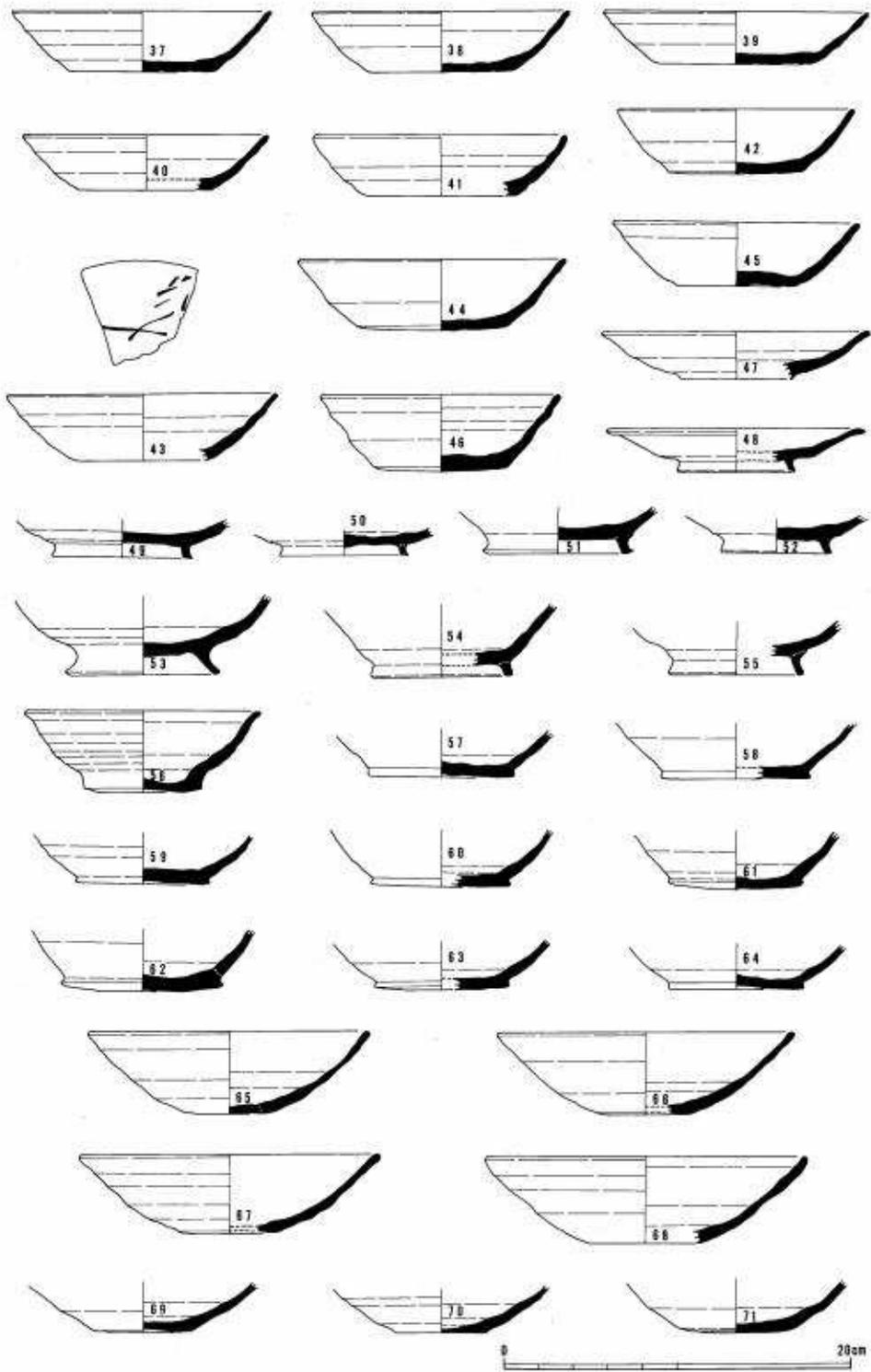
第287図 窠体出土土器(2)

る。57～64の高台部は低く、0.2～0.5cmで、外面はヘラ切り未調整である。底径7.7～9.7cmである。底部内面はほぼ平らで、体部は屈曲して外上方にのび、若干内彎する。65～68は高台の付かない平底の壺で、底部外面は回転糸切りである。底部から体部へはゆるやかに移行しており、体部は若干内彎する。口縁端部はやや厚みを増して、丸くおさめている。口径は65が15.8cmと最も小さく、66～68はそれぞれ16.7・17.2・17.9cm、器高は65が4.7cm、66は4.2cm、67は4.9cm、68は5cmである。69～71は壺の底部で、3点とも底面は回転糸切りである。69はやや上げ底風、70・71は平底となっている。第289図72～80は壺の口縁部で、内彎しながら外上方にのびる体部をもち、口縁部は外反して横外方にひきのばすもの(72・73)や、器壁が体部と同じ厚みのまま丸くおさめるもの(74・80)、75～77のように口縁端部を内外に肥厚させているもの、内面のみ肥厚させるもの(78・79)がある。口径は13.6～19.6cmで、72のみ大形で、口径が最大となっている。80は口縁部の一部を押し広げて注口部をつくりだしており、壺としては珍しいものである。81は口縁部下に断面四角形の突帯を貼り付けた壺の口縁部と思われるものである。あるいは壺になるかもしれない。焼成は良好で堅致である。口縁端部はほぼ水平にひきのばしている。口径は21cmである。須恵器小皿は82～84に示したもので、口縁部は外反している。82は口径10.2cm、高さ1.9cm、83は口径8.4cm、84は口径4.1cm、高さ1.4cmで底面は回転糸切りとなっている。85は土師器の小皿で、ナデ調整である。口径7.4cm、高さ1.3cmである。内外面に点状にススが付着しており、灯明皿として使われていたものと思われる。86～89は片口鉢の破片で、86～89の口縁端のつくりや胎土をみると、本窯で焼成されたものと思われる。87の底部外面はヘラ切り後未調整である。90～93は壺口縁部の破片で、外反して水平にひきのばされた口縁部の上部に突帯を貼り付け、上端を尖らせたもの(90)や口縁端部の上に貼り付けて受口状にしたもの(91)、上下に拡張して端面に2条の凹線を施しているもの(92)がある。92では頸部と肩部との境は大きく屈曲しており、明瞭である。93も壺口縁部であるが、90～92とは異なり、体部からゆるやかに外反しながら頸部へと続き、さらに外反して口縁部に至っている。口縁端部は丸くおさめている。94は壺又は甕の底部と思われ、体部は直線的にすばまり、底面は平坦である。95の甕は大きく外反する口縁部をもち、端面には1条の凹線を施し、片口鉢の口縁端の手法と似ている。体部外面には平行タキを施す。

包含層出土の土器は平安時代前期から鎌倉時代初頭に属するものと思われる。

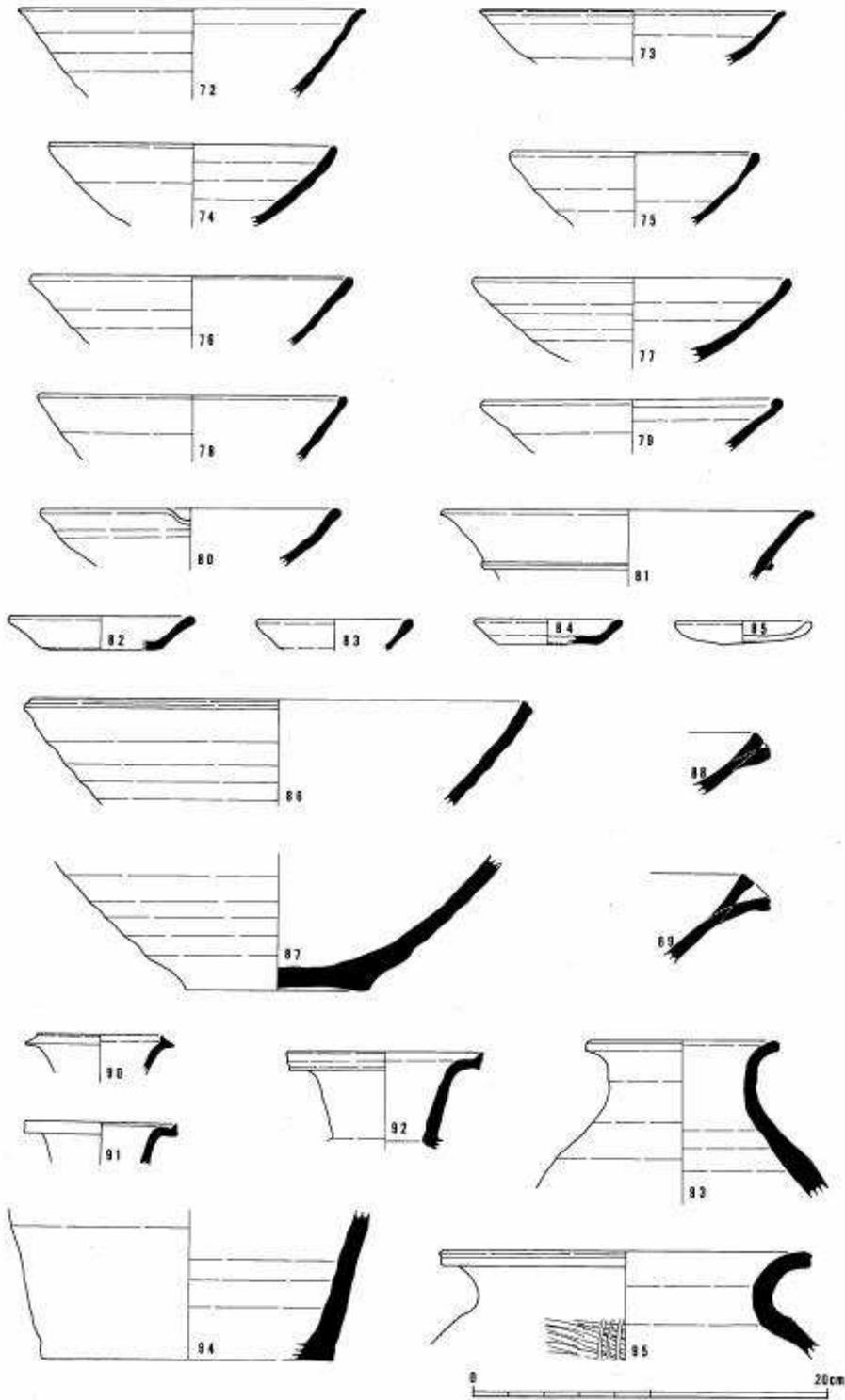
第290図96～103は窯南部調査区を重機で掘削した際に出土したもので、層位は不明である。96は須恵器の坏蓋と思われ、端部は内屈する。体部と天井部の境は明瞭な稜をもち、天井部外面は平坦で、ヘラ切り未調整、つまみはつかないものと思われる。口径14.2cm、器高2.4cmである。97の壺の底部は回転糸切りで、体部は若干内彎する。器高は4.8cmで、口径は17cmである。98の須恵器小皿は完品で、体部で一度器壁が薄くなり、口縁端部で肥

井ノ方窠跡



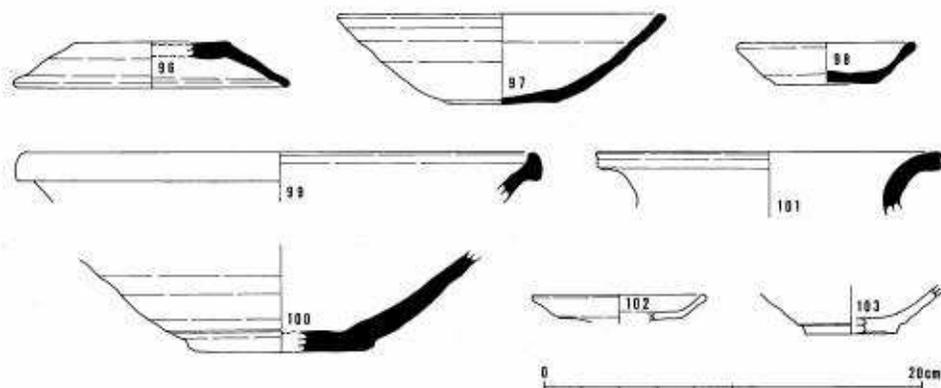
第288図 包含層出土土器(1)

井ノ方窯跡



第289図 包含層出土土器(2)

井ノ方窯跡



第290図 採集土器

厚する。口径9 cm、器高2.3 cmで、底部外面は回転糸切りである。99・100は片口鉢の破片で、99は口縁部であり、口縁端は上下に拡張している。100の底部は少し張り出した平たい底部をもち、底面はへら切り未調整である。内面は摩耗しており、使用痕と思われる。101は甕の口縁部片で、大きく外反している。口縁端面には凹線を1条施している。102の土師器小皿は底部から稜をもって屈曲してたちあがっている。口径9 cm、器高1.4 cmである。103は白磁碗の底部で、内面に淡いオリーブ色の釉がかかっている。外面は削り放しのままで、底部高台部も削り出している。内面上端部に沈線が1条認められる。

採集遺物は96のように平安時代前期と思われるものと、97～100のように鎌倉時代に属するものがある。

5. 小結

井ノ方窯跡は窯体の一部しか残存していなかったが、窯体内に遺存していた土器により平安時代末～鎌倉時代初頭に操業されていたことが判明した。

三田盆地内での当該期の窯跡は、これまで見比窯跡⁽¹⁾が知られていたのみであったが、今回新たな資料が加わった。また、青野川流域においても、この地域の窯業がこの時期まで続いていたことも判明した。

一方、包含層出土土器は平安時代前期～鎌倉時代前期にわたっており、これらは井ノ方遺跡で廃棄された土器が溜ったものと考えられる。

註(1) 高島信之・島中 剛「見比窯址採集の須恵器について」『三田考古』第13号 1984年

第5節 ^{かいたに}貝谷窯跡 (AK-86)

1. 遺跡の立地

貝谷窯跡は三田市末東字落合に所在する窯跡であり、遺跡分布⁽¹⁾地図に示される末2号窯跡である。今回青野ダム建設に伴う発掘調査及び分布調査を契機に、窯跡の増加もあり、混乱解消の為、正式名称で呼称する。

当窯跡は青野川東岸、西に開口する小支谷の1つに位置し、標高185~189m付近の北東斜面に築かれている。

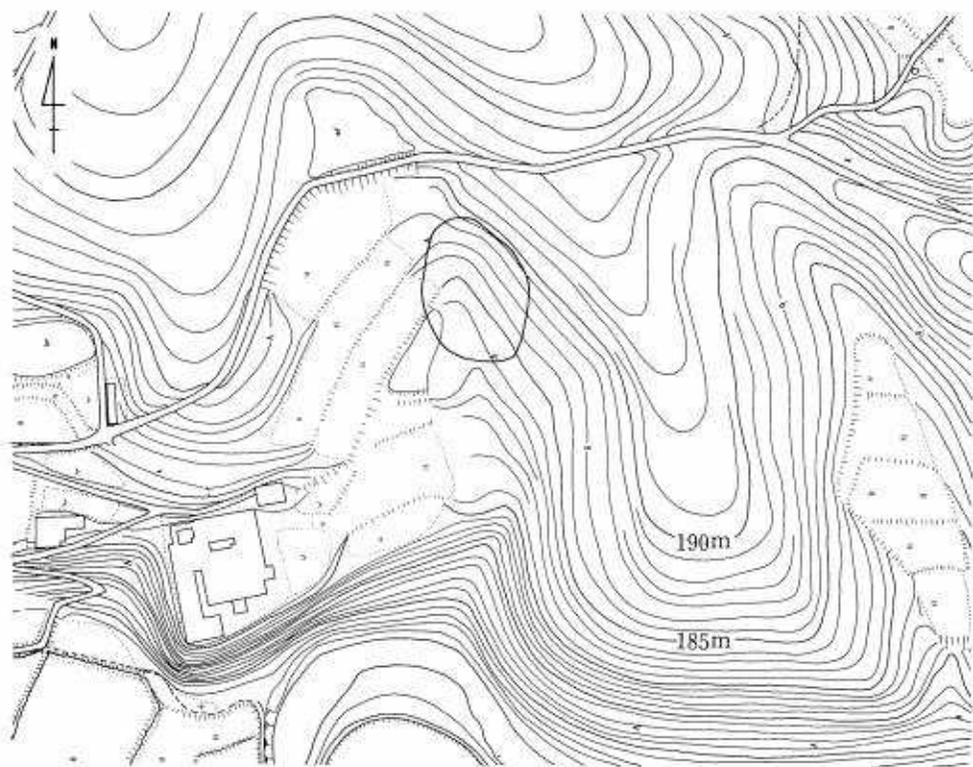
窯跡に接して「羽路」氏宅があり、土師→羽路の転化とし、焼きものに関係ある家系との伝承も伝えられている。

2. 窯の構造

窯は全長6.6mの半地下式の窖窯である。

窯体の幅は焚口で1.2m、焼成部で1.3m、先端部で0.6mを測る。一見して非常に細長い窯体と判る。

前庭部は3.2mの楕円形であり、中央部付近には不定形な凹みを持つ。床は全般に焼けて



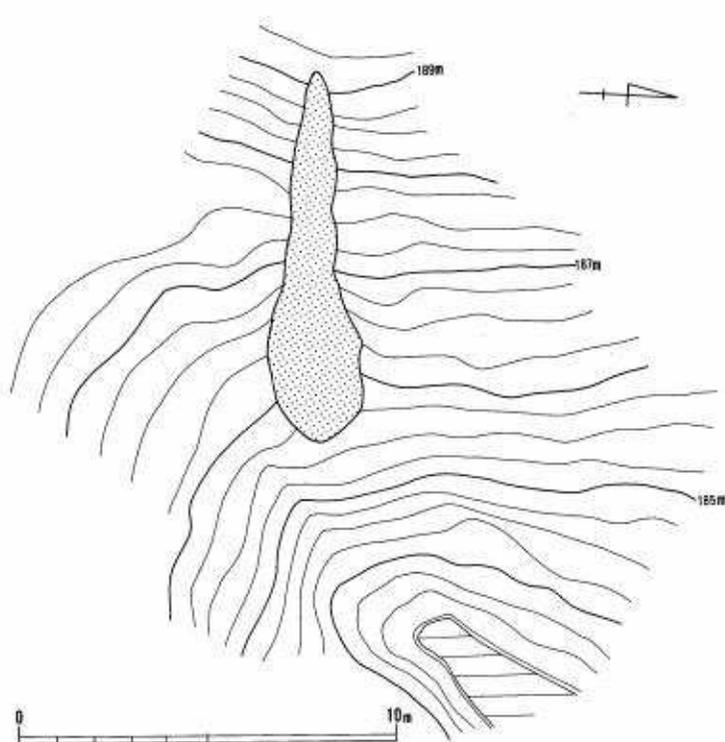
第291図 位置図 (1:2000)

貝谷窯跡

おり、赤く酸化している。

側壁の立ち上がりは、焚口付近で45cm、焼成部付近で30～40cm残存しているが、先端部では全く残存しておらず、平坦となっている。

床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけては27°の傾斜を持つが、先端部に向かっては31°と傾斜の度合いが高くなる。



第292図 地形測量図

窯体の主軸方位はS18.5°Wである。

側壁にはスサ混じりの粘土を貼り付けており、指の痕跡が到る所で見受けられる。

床面も全体に粘土が貼られており、先端部まで還元焼成され、青くなっている。窯体のたち割りには、窯跡の位置するレベルの検討から、水没しない事が判明し、埋めもどした後、芝を張って保存されることになった故、実施しなかった。

灰原は前庭部の下方から、長径7m、短径5.5mの範囲で、楕円形に拡がっており、下端は斜面裾部の池の中まで見られる。灰層の拡がりは狭く、集中して見られ、下から順に地山・黒色灰層・暗黄褐色土・表土の堆積となっている。

池の部分については、池内堆積物の上部に灰層の堆積が見られることから、窯の操業時には、すでに池状のものが存在していたことが窺える。

同一地域内での、他の窯跡の有無については、広範な調査を実施したにもかかわらず、認められなかった為、他には存在せず、一基のみと判断する。

3. 遺物

灰原を中心に土器が検出されている。窯体の規模からも窺えるように、器種は限られており、小型品の焼成を目的に操業された窯跡の実態が遺物からも窺える。

器種としては、椀A・坏A・椀B・蓋・皿・台付皿・鉢・双耳壺・長頸壺などが見られ

る。最も多く焼成されているのは坏Aであり、椀A・椀B・台付皿・蓋・皿の順に見られ、壺・鉢は僅かである。

椀A (第294～295図1～53)

口径は15cm前後を中心に、13.6～17cmと幅のある椀である。底部はヘラ切り未調整の平高台となり、底部端面はヘラ切り離し手法の影響で外方へ鋭角的に広がる。底部の厚みは1cm前後と厚い。

大部分の底部は下ぶくれ気味に緩やかに外反して立つが、直線的に立つものも見られる。

また、(16)のように体部中央で段になるものや、(3・6・28)のように屈曲するものも見られる。体部から口縁にかけては、少し凹んで屈曲する。

口縁は屈曲して外方に開くものが大部分となっているが、(30・34・44)のようにまっすぐ上方に延びるものも見られる。

口縁端部は丸く仕上げられるタイプと、先細りの状態で終わるものが見られ、丸く仕上げられるタイプには、口縁部周辺にロクロ目が顕著に見られる。器高は5～6cmを中心に見られる。

体部器壁は底部から徐々に薄くなるものと、極端に体部のみ薄くなるものが見られる。体部には火禿が見られる。

坏A (第296～297図54～116)

歴史時代に一般的に見られる坏の形態を継続するものであり、高台の付かない坏である。

口径は14cmを中心に13.2～15.6cmと幅広く見られる。器高は3～3.5cmと一定しているが、(95)のように口径の割に器高の低いものもある。

ヘラ切り未調整の底部からは、体部との境に明瞭な稜を持って体部から立ち上がる。体部は緩やかに外反するものが大部分であるが、(56・107)のように底部から直線的に立ち上がるものも僅かに見られる。また、(62)のように体部中央で屈曲するものもある。体部外面のロクロ目は、比較的明瞭に表れており、体部下端はナデ調整の影響で、一段くびれる傾向が見られる。

口縁は椀Aと同様、体部上端で一度凹んで外方へ屈曲する。口縁端部は先端部に向かって先細りの状態で丸く終わる。口縁端部内面には1条の沈線が施されるもの(77)もある。

器壁は底部で5mm程度を測るが、体部から口縁にかけては薄くつくられている。

体部表面には火禿が見られる。

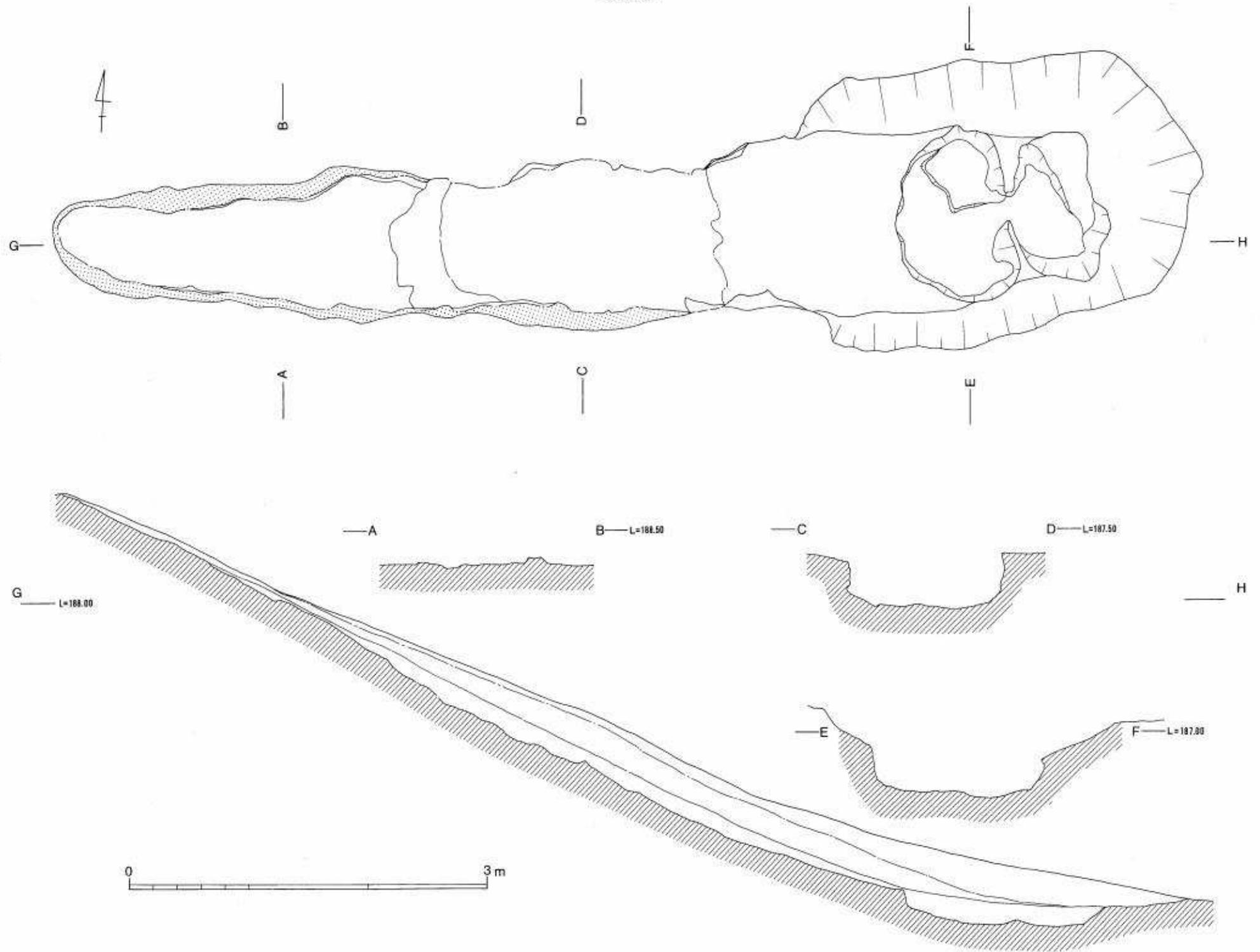
椀B (第297図117～131)

前述の椀Aに高台を貼り付けたタイプのものが椀Bであり、少量検出されている。

器形の法量から3タイプに区分できる。

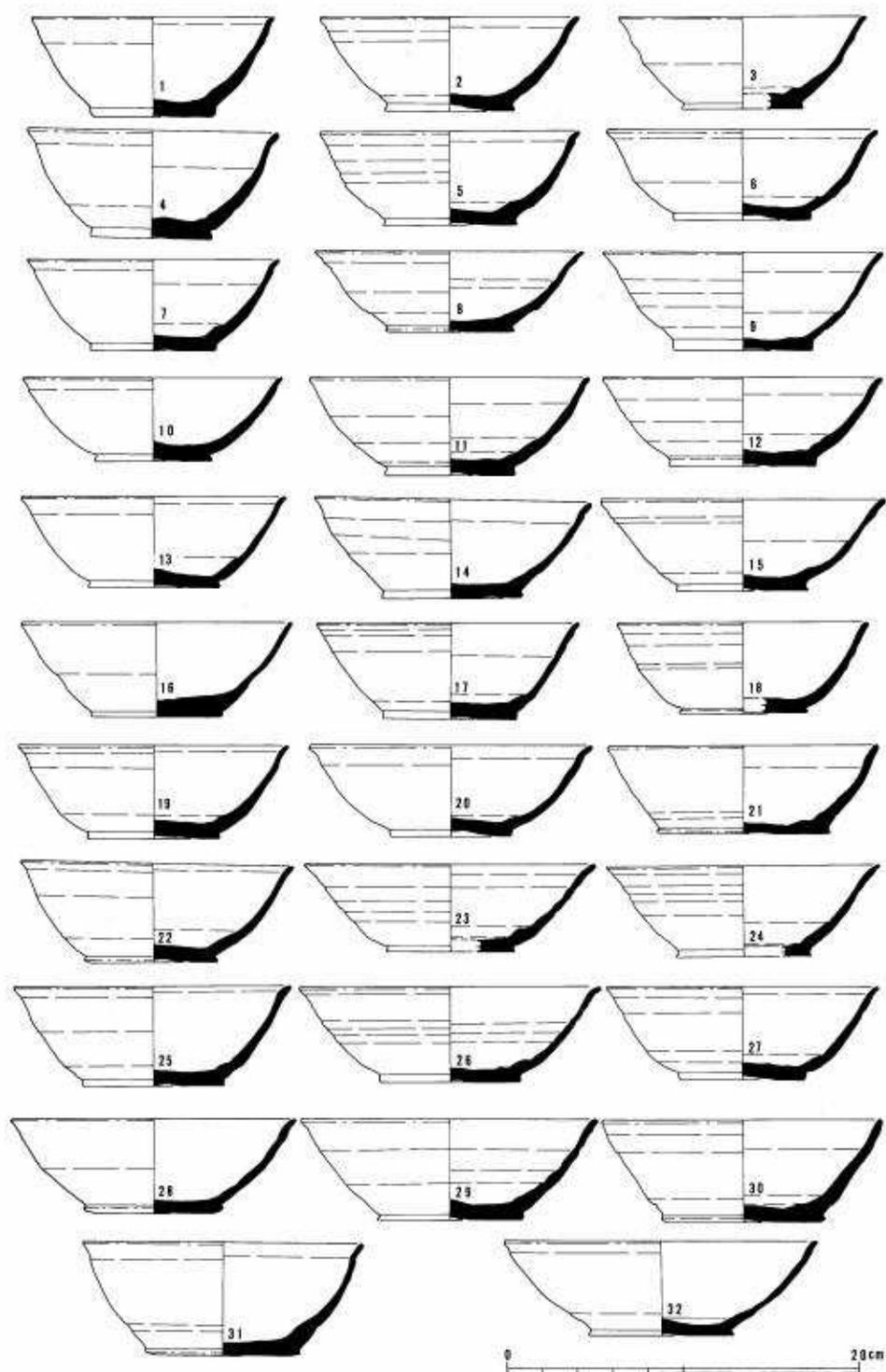
椀B I

貝谷窠跡



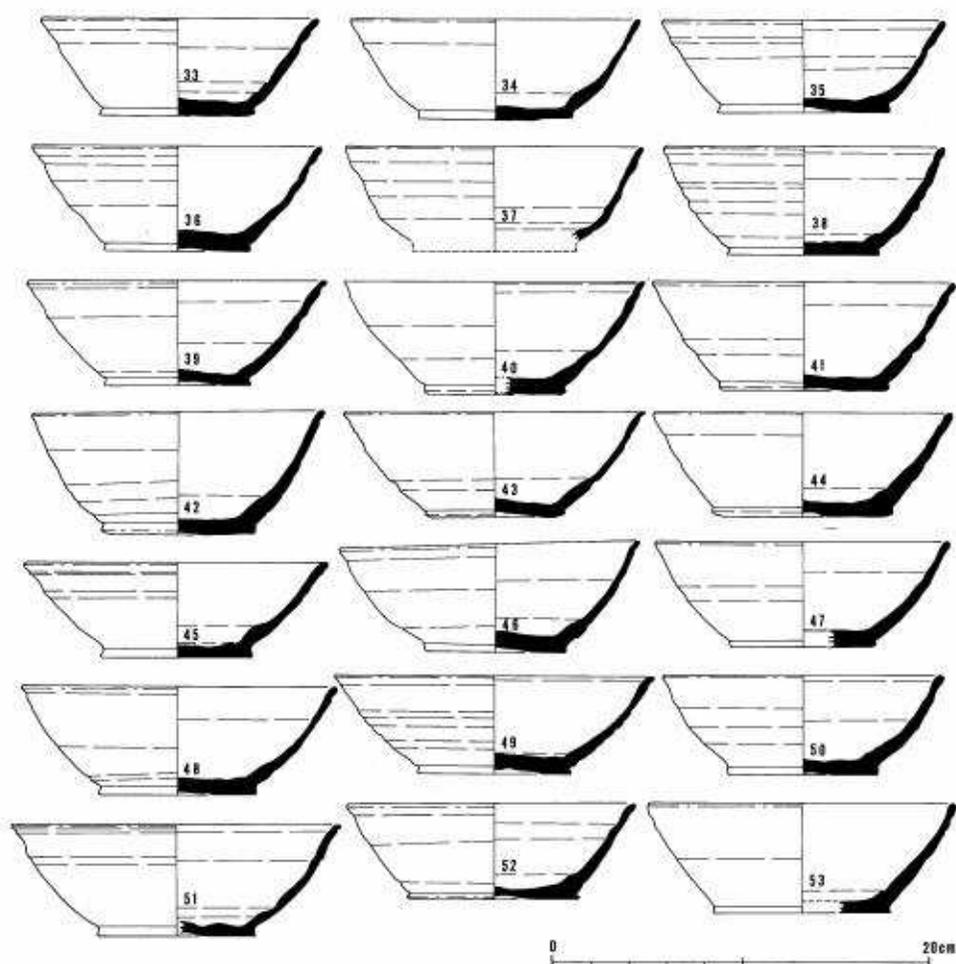
第293圖 窠体実測図

貝谷窯跡



第294図 出土土器(1)

貝谷窯跡



第295図 出土土器(2)

口径14~15cm、器高5~6cmのもので、椀Aのサイズに近い法量を持つ。下ぶくれ気味の体部が最も萎む所に、径7cm前後の高台を持つ。高台は断面三角形・台形の両者が見られ、外方に踏ん張るタイプよりは、内方に踏ん張るタイプが目に着く。高台は張り付けであり、ヘラ切り未調整の底部に貼り付けた後、周辺を丁寧にナデている。

椀BII

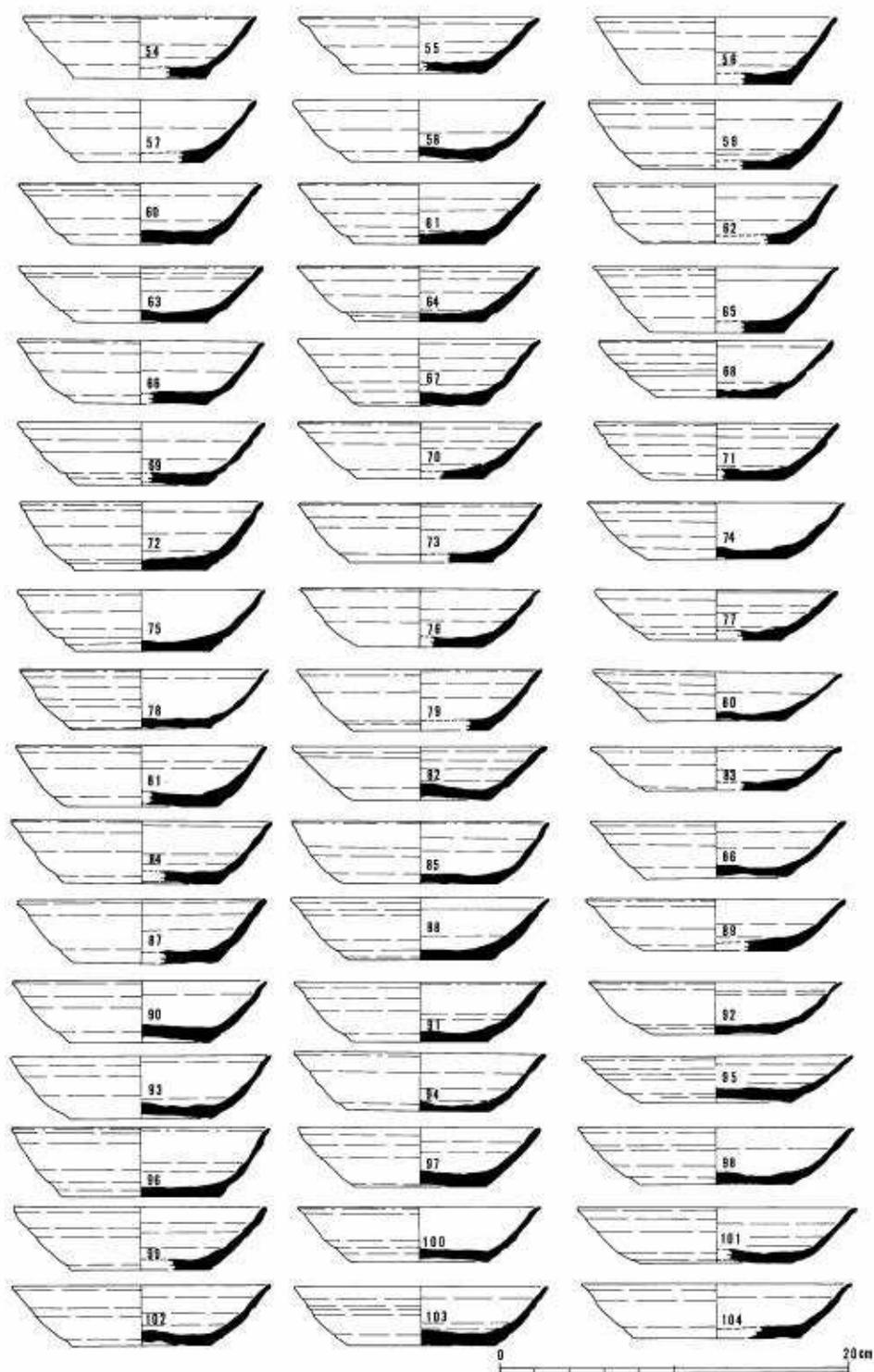
口径16~18cm。器高6~7cmのものであり、中型の形態をとる。法量の変化以外は、椀BIと同様である。

椀BIII

口径20~22cm、器高7.5cmのもので、数量的には少ない。体部の立ち上がりは他に比べ、緩やかになっており、高台下端は全て外方へ踏ん張る。

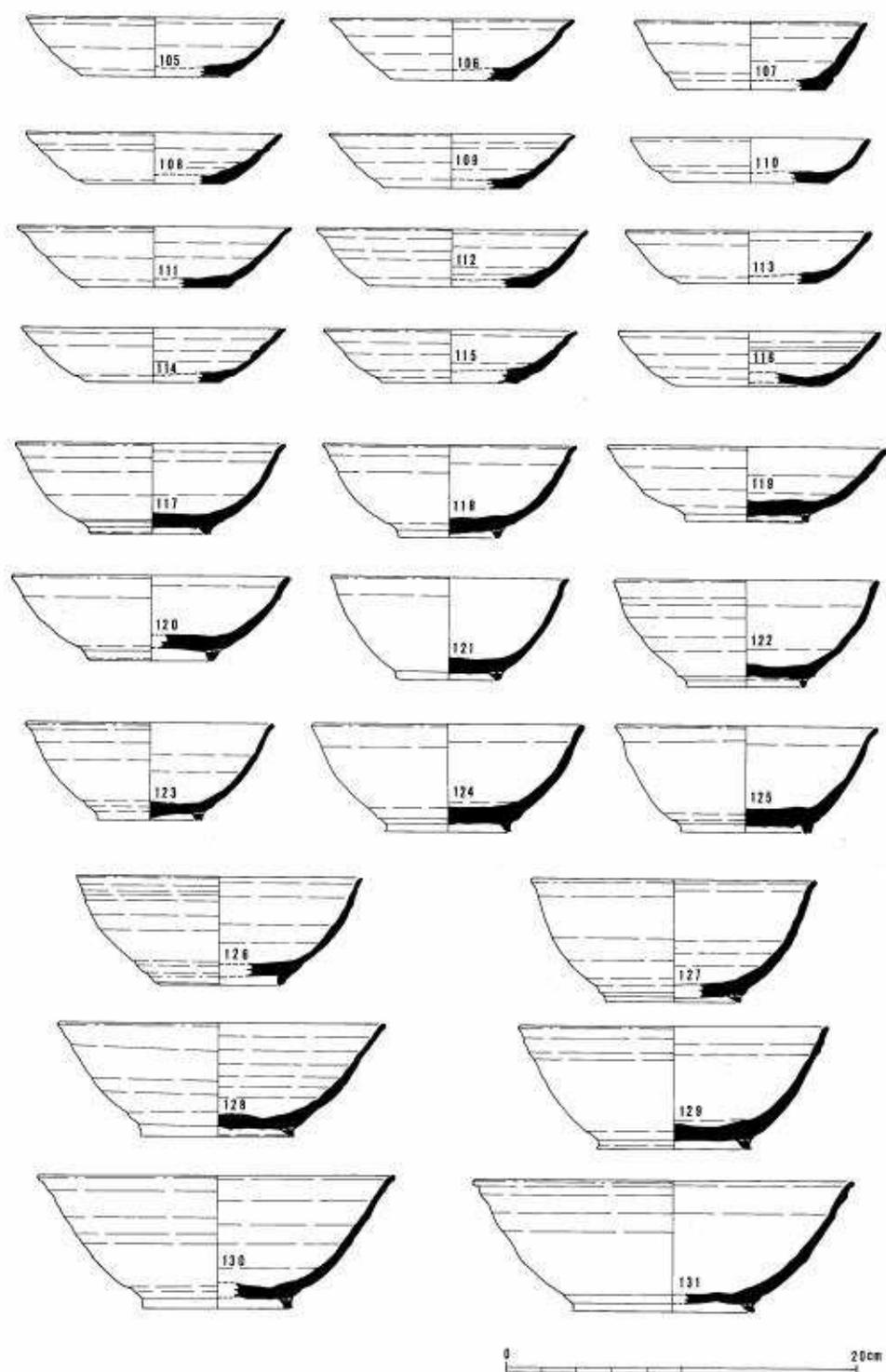
全般にロクロ目は明瞭であり、器壁は薄く仕上げられている。体部表面には火燵痕が多

貝谷窯跡



第296図 出土土器(3)

貝谷窯跡



第297図 出土土器(4)

く見受けられる。

蓋（第298図132～152・第299図184～185）

摘みを持つものと、持たないものの両者が見られる。前者が大部分であり、後者は2点のみであり、壺の蓋と考えられる。

前時代からの蓋の形態を踏襲し、天井部中央に摘みの存在しないもので、体部から口縁にかけて1度明瞭に屈曲して延び、更に下方に屈曲するタイプ（137・143・150）と、天井部から緩やかに下方へ拡がり、端部で下方に屈曲するタイプが見られる。口縁端部は全て内傾気味に突出して終わるが、つくりは甘い。

また、端部内面には沈線状の凹みを持つもの（133・134・140・141）も見られる。

口径は15cm前後を中心に、13.8～16.8cmまで見られ、法量的には3タイプ程度の区分が可能と考えられる。器高は3cm未満となっている。

天井部はヘラ切り未調整のまま終わっている。体部から口縁部にかけての器壁は薄くつくられており、体部表面には火礫が多く見られる。

（184～185）は壺形態の蓋と考えられる。

共に宝珠形の摘みを持つが、（184）は頭の凹む扁平なタイプであり、破片の為、全容は不明確である。

（185）は頭の突出して高くなる宝珠形の摘みを持ち、口径は12cmを測る。天井部から口縁にかけてナデ調整が見られる。口縁端部外面は少し凹み、先端の突出は外方へ尖って延びる。器壁は薄くつくられており、天井部には自然釉が付着している。灰原最下層からの出土である。

皿（第298図153～159）

量的には少ない器種であり、口径は15cm前後である。

ヘラ切り未調整の底部から、緩やかに大きく外反する体部を持つ。口縁部は更に緩く外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げられて終わる。

底部へ連なる体部下端は、環Aと同様ナデ調整による凹み状の段を形成するものが多い。端部突出の有無のみで、蓋と形態を同じくするものである。

台付皿（第298図160～182）

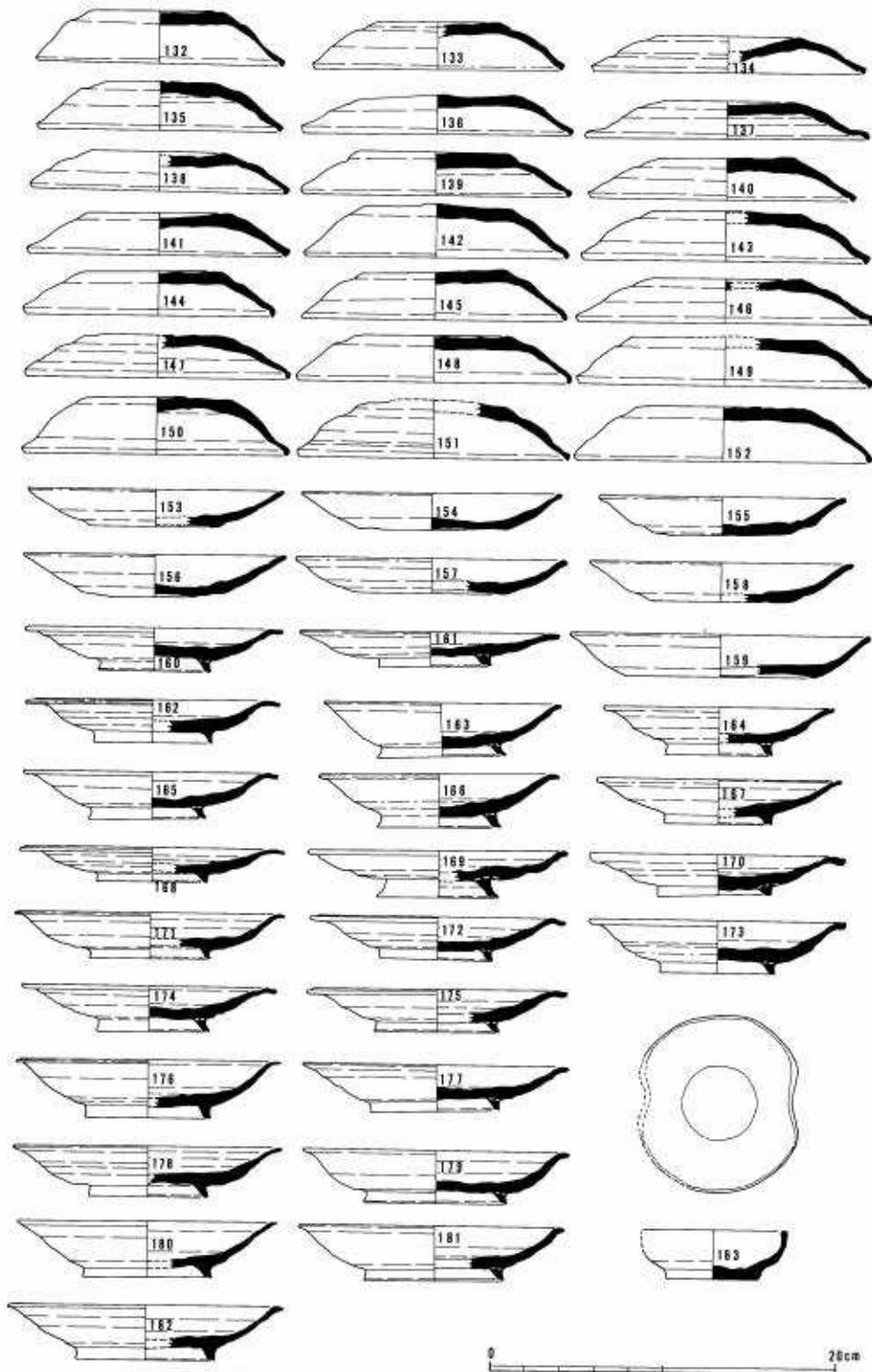
施釉陶器に見られる形態の皿であり、高台を持つタイプの須恵器である。

口径15cm前後、器高3cm前後と法量はほぼ一定している。

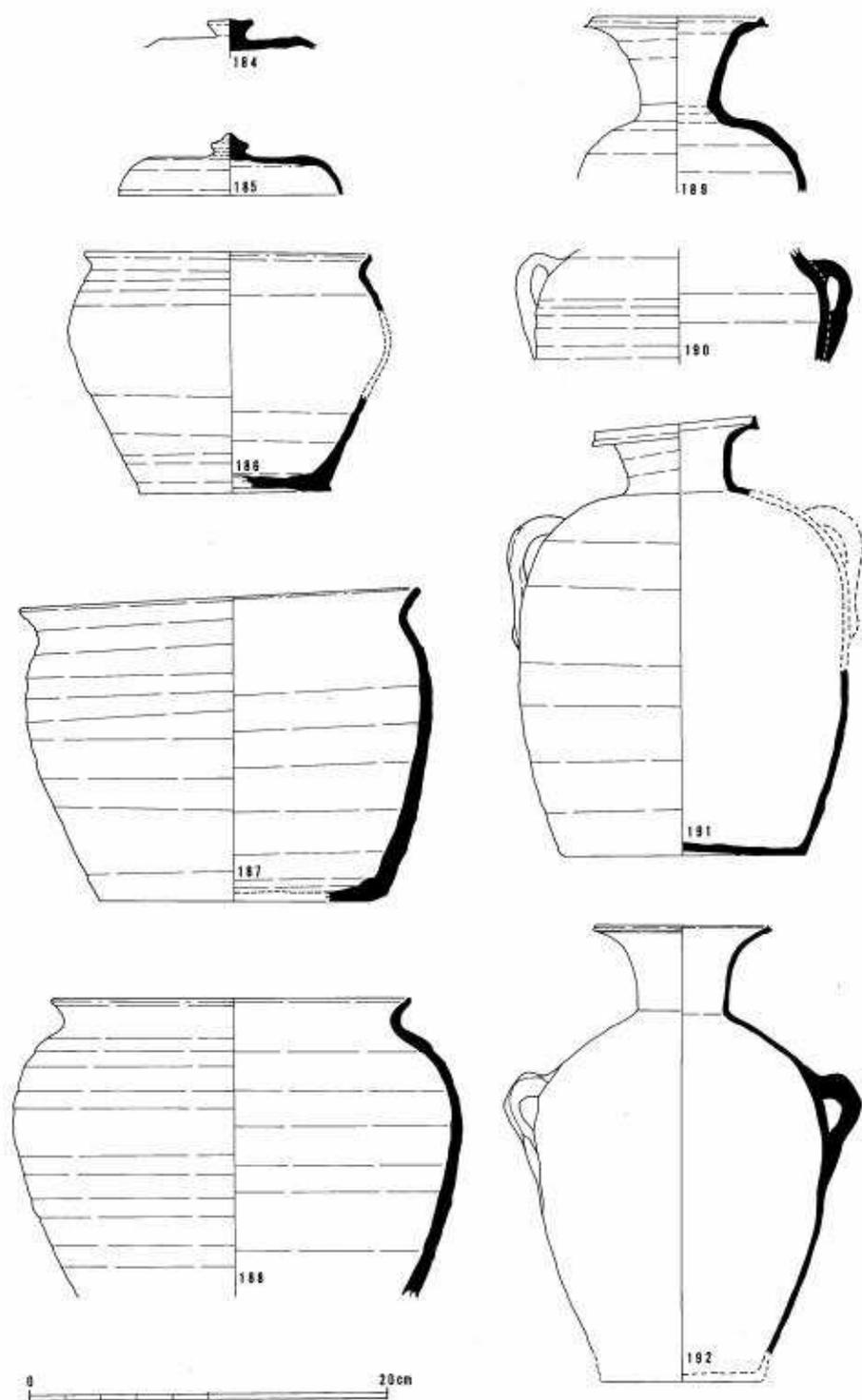
ヘラ切りの底部から横方向あるいは少し傾斜気味に延びる体部は、1度屈曲して外方又は横方向に延びる口縁を持つ。口縁端部は先細り気味に長く延びて丸く終わるものが多いが、（180）のように先端が鋭く尖るものも見られる。

また、口縁端部が垂下しているものも多く見られる。

貝谷窯跡



第298図 出土土器(5)



第299図 出土土器(6)

口縁端部内面に、1条の沈線が見られるもの(167)もある。

高台は径7cm前後、高さ0.5~1cmのものを中心に、端部が外方に延びて踏ん張る。高台断面は台形を呈するものが多く、僅かに三角形状を呈するものも見られる。高台貼り付け部付近は貼付後丁寧¹⁸に仕上げられている。

耳皿(第298図183)

底部へら切りの耳皿であり、片方の耳は折り曲げ部付近から欠失する。長径10.4cm、底径5.3cm、器高2.8cmを測る。1点のみ知られている。

壺(第299図189~192)

一般に長頸壺と呼称されるものであり、2タイプに区分される。

(189~190・192)は緩やかに外反する頸部から、「く」字状に屈曲する口縁の付く壺であり、口縁端部が上方に向かって垂直に突出するもの(189)と、屈曲して終わるもの(191)の両者が見られる。両者とも肩は撫で肩で緩く、胴部中央寄りの最大幅付近に縦長の把手を貼り付けている。(191)は器壁も薄く、丁寧なつくりとなっている。

(190)はほぼ直立する短めの頸部から、大きく「く」字状に屈曲する口縁を持つ壺であり、胴部は筒形に近く肩は張り気味である。把手は肩部付近に貼り付けられており、縦長で、中央部の平たくなるタイプである。

口縁端部は上方に向かって垂直に突出している。器壁も薄い。

鉢(第299図186~188)

中小で3個体見られる。

(186)は小型品で、口径15.7cm、器高13.5cmを測る。胴部中央やや上方に最大幅を持ち、短い頸部から「く」字状に屈曲して口縁となる。口縁端部は内傾気味に突出する。現存部での、片口は見られない。

底部はへら切りで、内面にはへら工具を使って削り取った痕跡が窺える。

(187~188)は中型のタイプに属する。

(187)は口径22cm、器高17cmを測り、あまり変化の見られない体部から「く」字状に屈曲して口縁に至る。口縁端部は丸く仕上げられており、現存部での片口は見られない。

(188)は口径19.4cmの丸味を持つ肩から「く」字状に屈曲するものであり、口縁端部は丸く仕上げられているが、内面には小さな凹みによる段を持つ。

文字刻印土器(第300図193)

へら状工具によって、文字を刻印した土器が4点検出されている。その内、全容が把握できるのは、1点のみ(193)であり、他は全て断片である。

(193)は坏A土器の底部内面に文字の刻まれたものであり、「美萬」と表現されている。

文字の解説では「ヨシマロ」と読まれ、人名であろうとのことである。¹⁸⁽²⁾

他の3点の内、1点には「美」の一部と思われるものが見られる。他は複数の文字構成と考えられ、(193)よりは字体が小さく、1字程度の解読は可能なものである。

刻印された文字が人名とした場合、窯の性格とも関連してくるが、窯を操業させていた人物なのか？また、焼成の依頼主なのか、問題を今後に残す。

4. 小結

貝谷窯跡の調査から、窯体の規模があまり大きくなく、灰原の形成も小規模であった点を考え、小型品を中心とした短期間の焼成を想定させる。

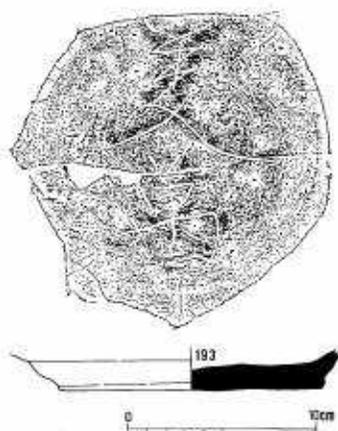
遺物の面からは、末古窯跡群の中にあつて時期・焼成品共に、他の窯跡と様相を異にするものである。すなわち、従来の須恵器生産に見られる、坏・椀・蓋・皿・壺類の器種構成にあつて、施釉陶器としての性格を持つ、台付皿・高台付椀・耳皿が須恵器として焼成されている点である。

また、当窯の焼成品が施釉陶器のみの焼成で終わっているのではなく、従来からの須恵器としての器種をも伝統的に焼成しており、言わば、伝統的なものと、外来的なものとの二元性を持った性格のものと思われる。

ここで最も問題となるのは、当窯の時期決定であるが、第6章まとめの項で触れる為、ここではあまり触れないが、底部へら切りのみの技法や、伝統的な坏A・皿・蓋・椀A・長頸壺などの壺類・甕の形態変化などから、9世紀末から10世紀はじめ頃に比定するのが妥当と考える。その場合問題となるのは、台付皿などの外来的土器との矛盾点が考えられるが、京都府亀岡市の篠窯跡群⁽³⁾と違って緑釉土器等の焼成が実施されておらず、末古窯跡群の消長関係からも、操業の最盛期を過ぎ、衰退の道を歩む複雑な時期を迎える頃の結果と考えたい。

消費地の一つとして、青野ダム予定地内の調査で判明した井ノ方遺跡がある。

井ノ方遺跡では、坏A・椀A・台付皿などの出土が見られるが、椀Bは見られず、貝谷窯跡においても椀Bの出土量の少なさが指摘できる為、妥当な状況を呈しているものと考えられる。



第300図 文字刻印土器

註(1) 『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』 第2分冊 昭和48年 兵庫県教育委員会

(2) 京都教育大学 和田 幸氏の御教示。

(3) 『埋蔵文化財発掘調査概報』 (第1分冊) 昭和55年 京都府教育委員会

第6節 地福^{じふく}窯跡 (AK-119)

1. 遺跡の立地

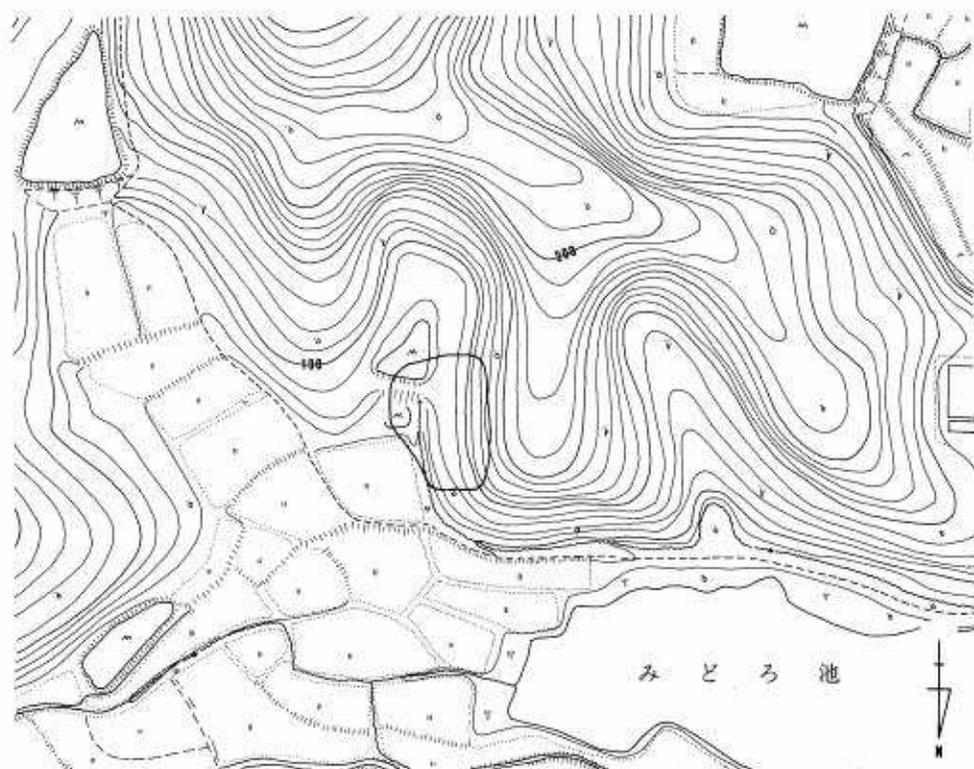
地福窯は三田市末東字地福に所在する窯跡であり、以前から分布調査に基づいて判明していたものである。

青野川の東岸、天満神社の裏山に入り込む幾つかの小支谷に位置する。通称「みどろ池」と呼ばれる池の南で、北に開口する谷の東向き斜面に立地する。谷の最深部は池となっており、更に手前は湿地状の窪地となっている。当初窯跡の発見されていたのは、池の西岸で堤に近い所であり、池の中に灰原が見られ、土器の散布が知られていた。この池は自然の窪地を利用し、更に人工による掘り下げが加えられている為、斜面裾部は削平された状態となっている。

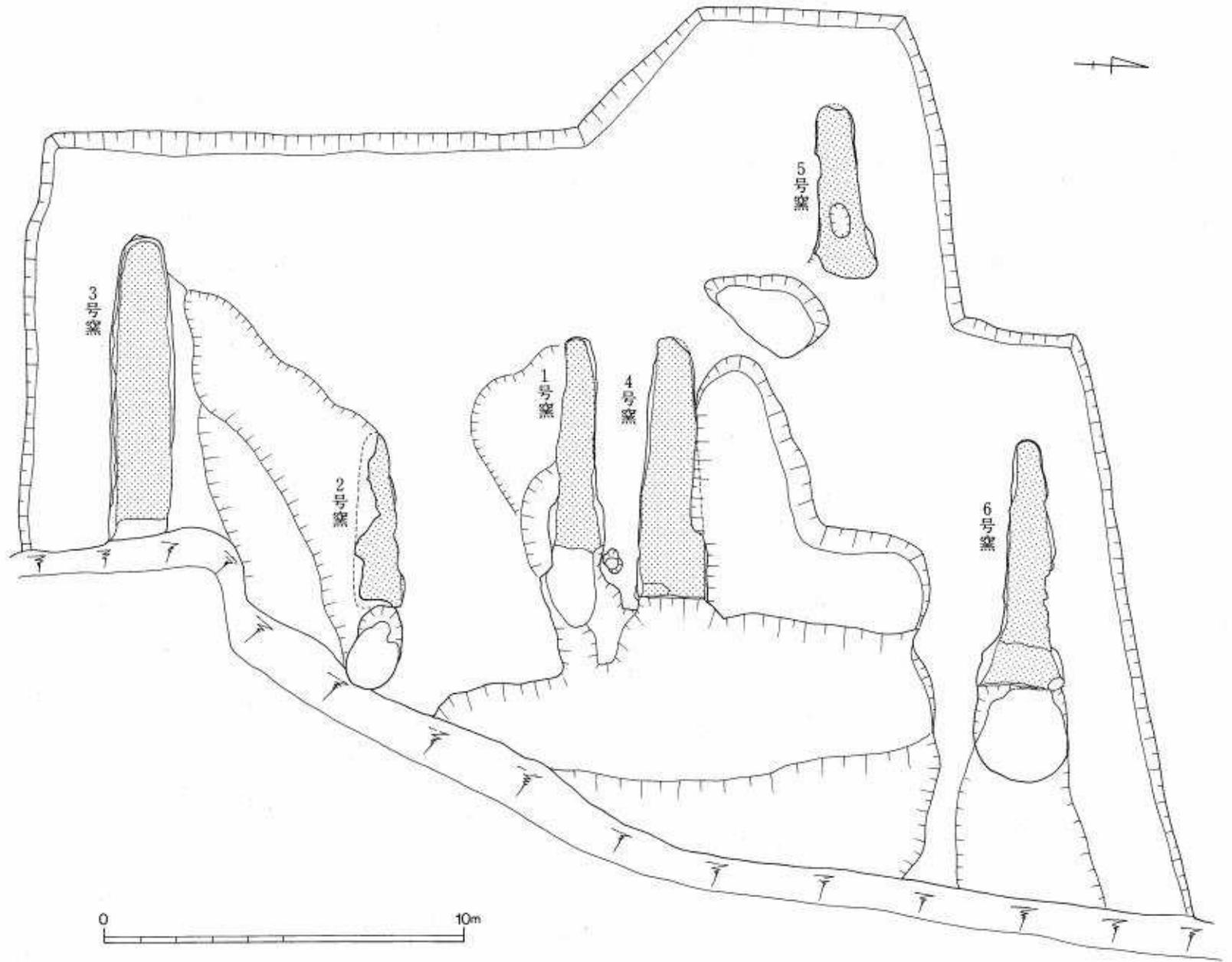
この付近は末古窯跡群の最盛期に於いて、最も窯跡の集中する地域であり、周辺の谷筋にも窯跡が見られる。

2. 窯跡の概要

地福窯は正式には地福窯跡群と呼称すべきと考えられる。



第301図 位置図 (1:2000)



第302図 窠跡全体図

地福窯跡

すなわち、当初1基の予定で調査を実施したが、対象地の拡張に伴って、1基更に1基と増加し、結局は6基の窯跡の存在が知られることとなった。

以下、概要を述べる。

窯跡の番号は、検出した順に1から6号窯とした為、順序は一定していない。

谷の最深部（南）から、3号、2号、1号、4号、尾根の方に高く5号、下がって6号となっている。

3号窯は焚口付近から下を、池の掘りさげによって破壊されている。窯体はあまり幅に変化の見られない長胴形を呈す。灰原は全て池の中となっているが、窯体右側に地山整形の痕跡も見られる。分布調査で見つかった窯跡がこれである。

2号窯は残存状態の非常に悪い窯跡であり、床面の一部と前庭部状の凹みを確認している。規模としては、小型の部類に入り、灰原は池に続き湿地状を呈する。

1号窯は調査地区のほぼ中央に位置し、全容が知られる窯跡の1つである。

灰原は斜面をカットし、平坦面が造りだされた所を中心に、湿地付近まで広がっている。

4号窯は1号窯に近接して検出された窯跡である。窯体は幅の広いタイプであり、1号窯前庭部壁と連結している。窯体右側の側壁部分は、5号窯の灰原を形成するための地山整形によって破壊されている。

また、窯体内には床面から黄色土のきれいな堆積が見られることから、他の窯体構築に伴って埋められた可能性も考えられる。灰原は1号窯と共有の関係にあり、4号窯を中央にして左右に広がっている。

5号窯は他の窯と違って、斜面の上方、尾根から少し下った所に位置する小型の窯である。焚口が「ハ」の字状に広がるタイプで、舟底状ピットも見られる。

また、焚口の左下には、不定楕円をした土壌が見られ、作業に伴う遺構と考えられる。灰原は4号窯の右付近を地山整形しており、灰層が見られる。

6号窯は谷の入口にあたる所に所在する小型の窯であり、前庭部が明瞭に検出されている。灰原は前庭部に続いて下方に延びており、一部は湿地内に到達している。

遺構の切り合い関係から見ると、窯の操業順序は2号・3号→1号・4号→6号・5号が考えられ、この場合2号と3号、1号と4号の関係は不明であるが、同時操業の可能性も高いと思われる。

すなわち、大型の4号窯と1号窯、大型の3号窯と2号窯の組み合わせであり、焼成品としての大型甕・壺類の在りかたとも注目される。

(1) 1号窯

窯体の構造

窯は全長5.9mの半地下式の窖窯である。

窯体の幅は、焚口で1.5m、焼成部で1.05m、先端部で0.5mを測る。焚口付近を最大として、先端に向かってしばむタイプの窯である。前庭部は長径2m、短径1.3mの楕円形を呈し、焚口付近とのレベル差は大きく、一段低くなっている。

また、窯体前庭部右側には不整形なピットが1つ見られ、底径0.3mを測る。

側壁の立ち上がりは焚口部で0.3m、焼成部で0.45m、先端部で0.25mとなっており、あまり深くはない。床面の傾斜は、焚口から焼成部付近で17°と緩いが、先端部に向かっては31°と急傾斜となる。

窯体の主軸方位はS85°Wである。壁面はスサ混じりの粘土を貼り付けているが、粘土は比較的薄い。

たち割り調査の結果、床面は1枚であるが、焼成部付近の壁面で、補修に伴う壁面の重複が見られる。このことは、前庭部に於ける灰層の堆積からも窺え、2回目の焼成時には、前庭部に0.2mの灰層が堆積しており、1回目の時点より高くなっていることが判る。

地山面の赤焼けは0.1m未満であり、前庭部床面までは及んでいない。

窯体左側全域で径2.5mの半円形状に地山整形の痕が見られ、斜面の傾斜が緩やかになっている。

灰原は前庭部前方に拡がり、10m×6m程の範囲である。幅1m隔てて4号窯と接しており、灰原は共有関係にある。

遺物

1号窯の遺物は、窯体内及び灰原を中心に検出されている。

器種構成を見ると、供膳形態のものを中心に、小型品の焼成を目的としての操業が想定される。器種としては坏A・坏B・蓋・皿・壺類・平瓶・鉢・甕であり、蓋・坏が大部分を占める。

窯体出土土器（第304図1～35）

窯体内からは坏A・坏B・蓋が検出されている。

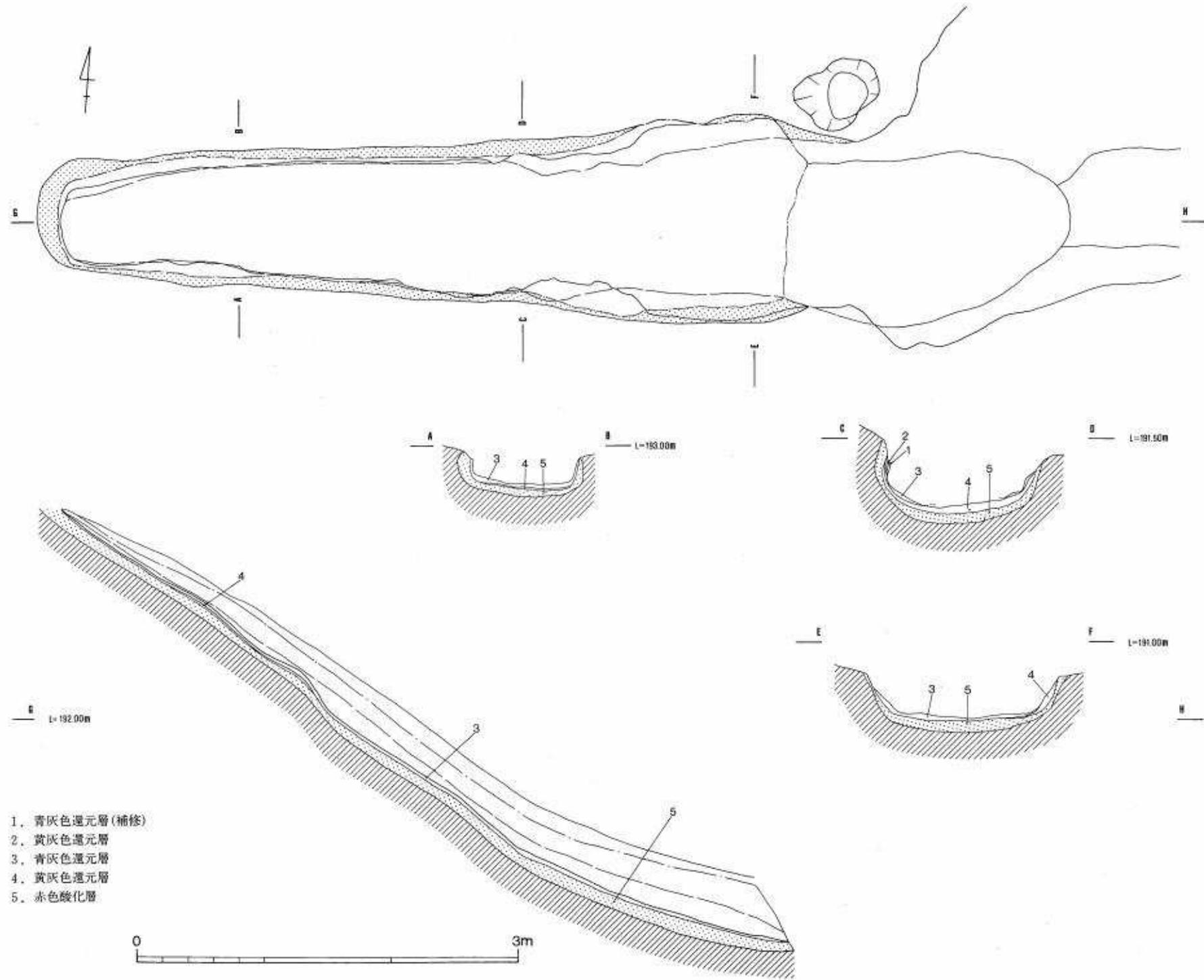
蓋（1～4）

輪状の摘みを持つ蓋で、口径は14.5cmを測る。扁平な天井部から丸味を持って下降するもの（1）と、緩やかに下降して口縁に至るもの（2～4）が見られる。口縁端部は丸く仕上げられている。

坏A（5～21）

ヘラ切りの底部から少し丸味を持って、体部の立ち上がる坏である。口径は14cm前後、

地福窯跡



第303图 1号窯実測图

器高3cm前後を測る。体部と底部の境は、稜が明瞭となるものと、丸くなるものの両方見られる。

口縁端部は丸く仕上げられるが、(5)のように、屈曲して横方向に延びるものも見られる。

坏B (22~35)

口径の大きさによって、15cm前後と17cm前後のもの(28・31・34・35)に分かれる。両者の間には、法量的差異以外の変化は見られない。

体部下端に貼り付け高台を持つ坏であり、底部からやや丸味を持って、斜上方に立ち上がる体部を持つ。形態的には下脹れ気味になるが、(23)のように真っ直ぐに斜方向に立ち上がるものもある。

高台は外方に踏ん張る傾向にあり、断面は四角形を呈す。体部上端付近に、ナデ調整の影響で凹むもの(25~27・33)も見られる。

体部下端付近にロクロ削りの痕が見られるもの(34)もある。

灰原出土土器

灰原出土の土器を、便宜的に暗黄褐色土・黒色灰層の両者に区分して記述する。窯跡の立地が1カ所に6基見られることから、混入は避けられないと思われるが、可能な限り区分した。

暗黄褐色土出土土器 (第305~306図36~78)

窯体出土土器に、稜碗・皿・壺・鉢・甕・平瓶を加えた器種が見られる。

蓋 (36~50)

摘みの形態に様々なものが見られる。頭の高い宝珠形のもの(36)、宝珠形のもの(44・47)、小さく扁平なもの、輪状を呈するもの(49・50)などであるが、口径から見ると14~15cmのものと、20cm程度のもの(48・49)にわかれる。形態的にはA形態をとるものが2点(38・48)見られる他は、全てB形態となっている。

坏A (51~56)

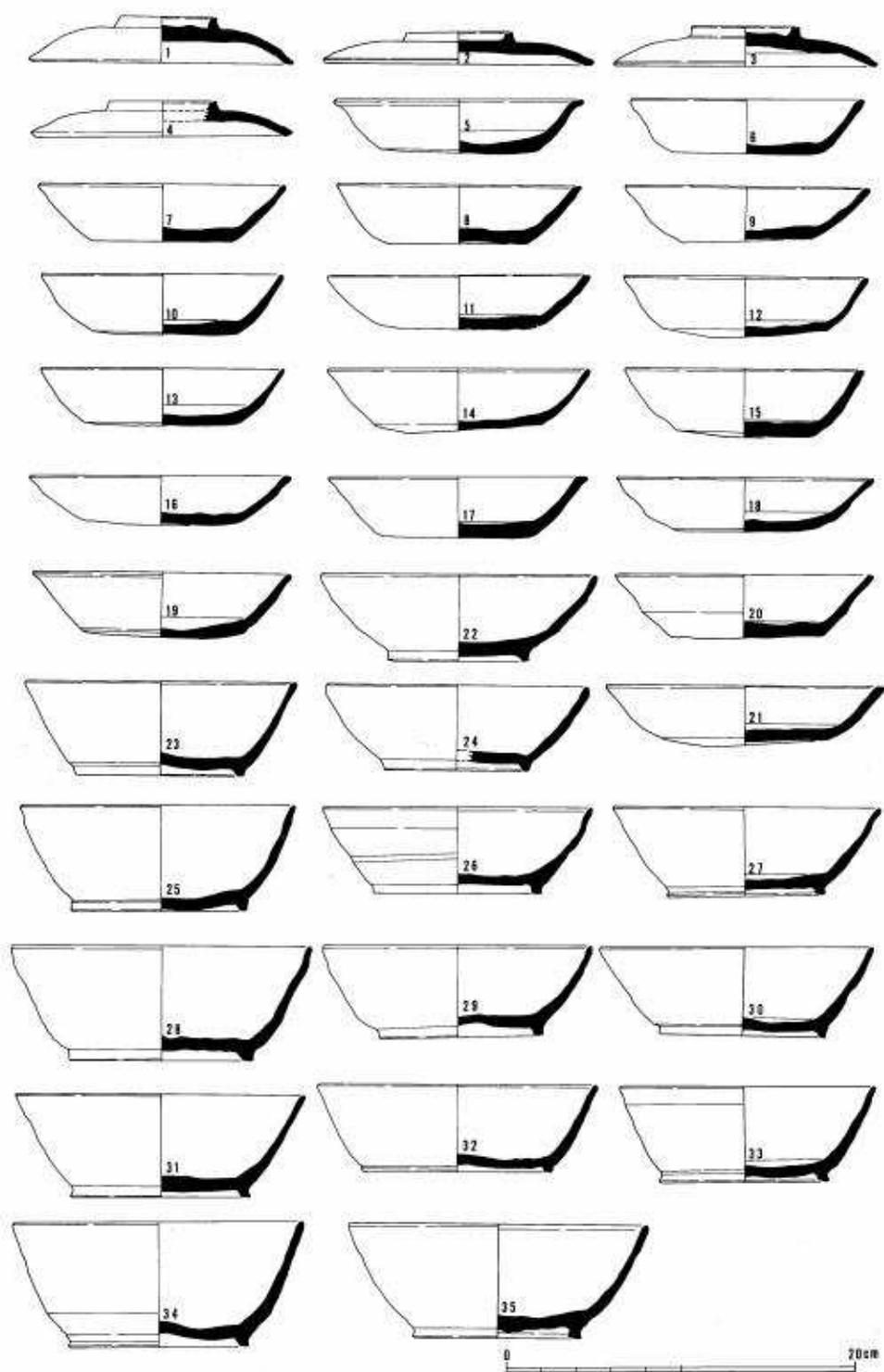
へら切りの底部から、斜め外方に大きく開く体部を持つ。口径は全て14cm前後であり、器高は3~4cmとなっている。体部と底部の境は丸味を持ち、あまり明瞭ではない。

坏B (57~63・65)

底部からやや斜め外方に開く体部を持ち、体部下端付近に高台を持つ。高台は外方に踏ん張るものが多いが、(57・59)のように内側に立つものも見られる。体部下半は下ぶくれの傾向にある。口径からは、10~12cmの小型のもの(59・62・63)と、14~16cmのものと、18cm前後の大型のもの(65)の3タイプ見られる。

皿 (64)

地福窯跡



第304図 窯体出土土器

皿として、窯体・灰原を通して1点のみ検出されているが、点数の上から当窯で焼成されていた器種かどうか問題は残る。

口径15.4cm、器高2.3cmで、ヘラ切りの底部から少し外方に開き気味に体部が立つ。

稜碗 (66・67)

大きさを異にする2点が出土している。

(66)は口径15.5cm、器高5.6cmで体部下端にしっかりした高台を持つ。高台はやや外方に踏ん張り気味の傾向がある。稜は体部中央付近に見られる。口縁端部内面は少し段状になる。

(67)は口径18.2cm、器高6.4cmのもので、高台は細身で端面のみ肥厚され、外方に踏ん張る。稜は体部中央より下方に見られる。

長頸環 (70)

大きく肩の張る体部から、緩やかに外反する口縁を持つタイプで、口縁端部を上方に突出させる。口径10.3cmを測り、肩部上方に1条の沈線を施す。

平瓶 (75)

やや傾斜する口縁と、体部に稜角を持つ平瓶であり、提梁の断面は長方形を呈する。

底部は平底ではなく、高台を意識した痕跡を残す。

鉢 (71~74、76~78)

形態の上からは2タイプ見られる。

緩やかに外反する体部がそのまま口縁に至り、端部をやや内傾気味につまみ上げるタイプ(74・77)と、緩やかに外反してきた体部が、口縁付近で大きく屈曲し、更に端部を内方につまみ上げるタイプ(71~73・76・78)がある。前者の方が大型化する傾向にあり、口径25~30cmを測る。後者は口径20cm前後であり、口縁付近の屈曲の度合いに差異が見られるが、器高に由来する結果と考え、屈曲が大きければ大きい程、器高は低くなると考えられる。

(78)は全容を知れるものであり、口径21.2cm、器高13.3cm、底部に径12cmの高台を持つ。残存部での片口は知られていないが、黒色灰層出土例などから片口の付くものである。

甕 (68・69)

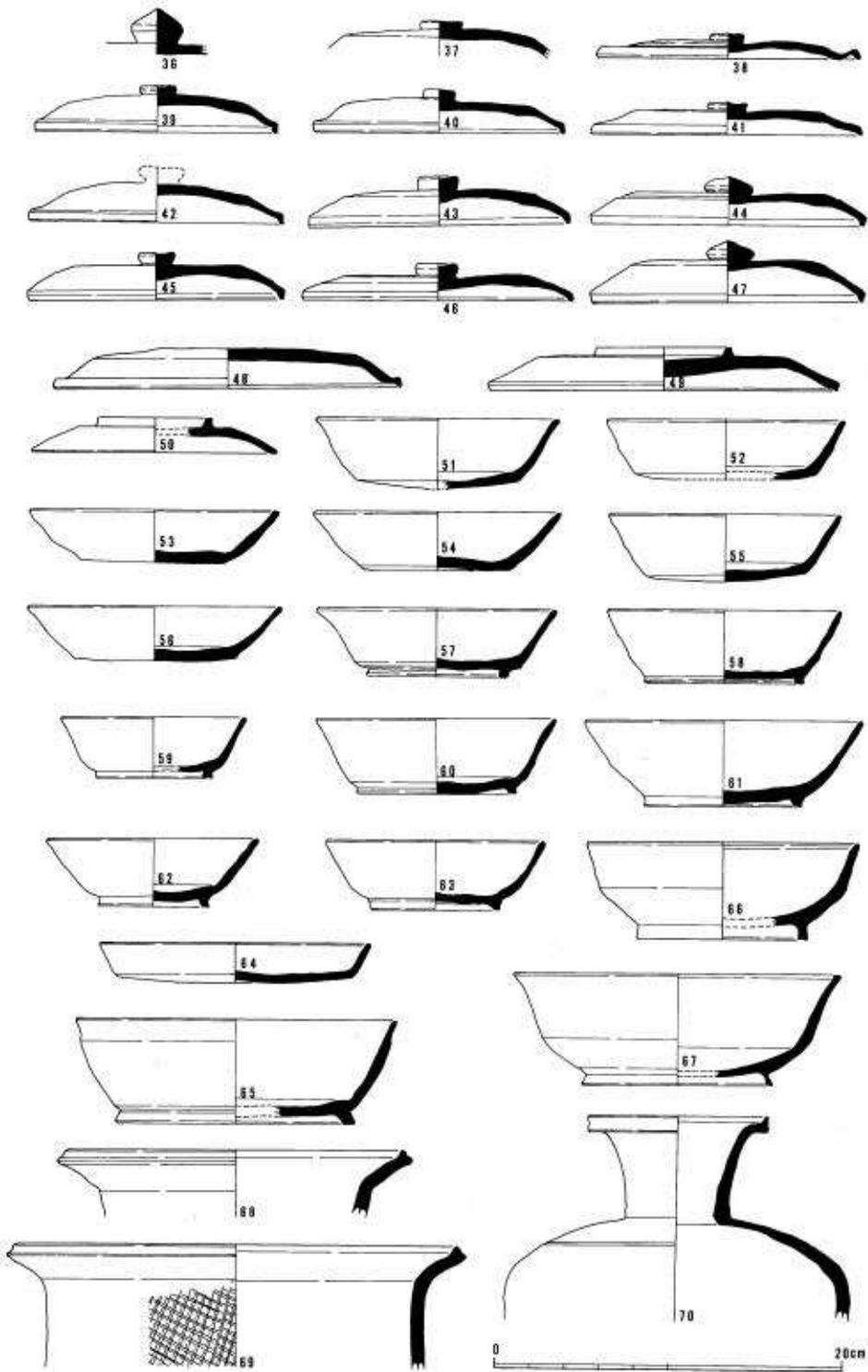
ほぼ真っ直ぐに立つ体部から、大きく「く」字状に屈曲する口縁を持ち、口縁端部は上方につまみ上げられる。体部には格子目状のタキ調整が施される。煮沸用の甕と思われる。一般に土師質の類品が多く知られている。

灰層出土土器 (第307~309図79~143)

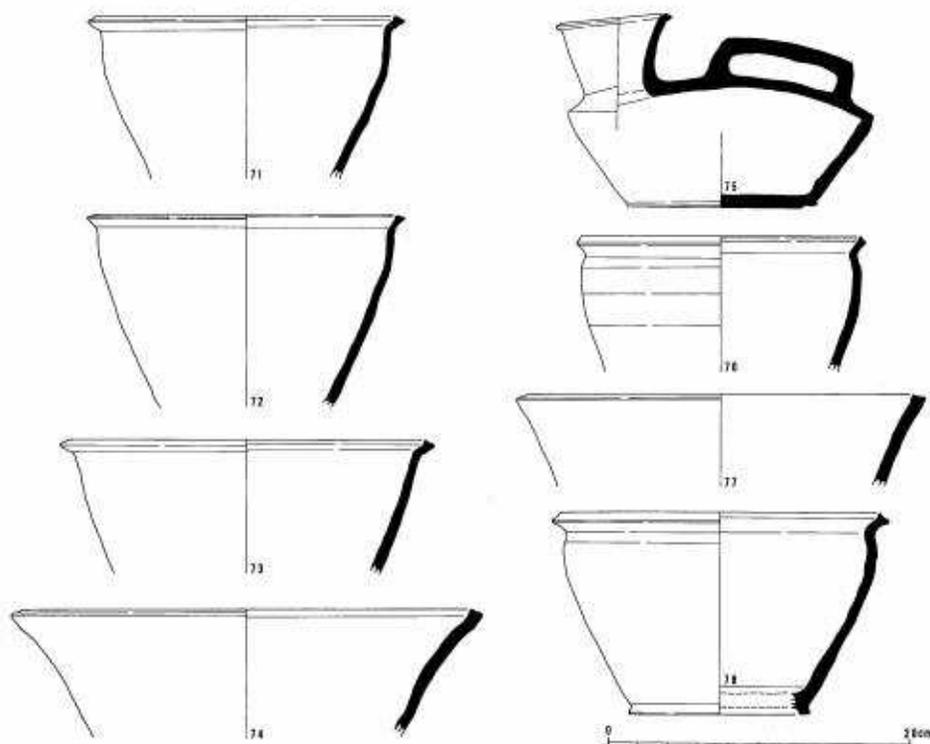
蓋 (79~107)

灰原流土出土土器同様、摘みに各種の形態が見られる。

地福窯跡



第305圖 灰原出土土器(1)



第306図 灰原出土土器(2)

その内、輪状の摘みを持つ蓋に2つのタイプが見られる。口縁端部が先細り気味に丸く終わるタイプ(83~85)と、口縁端部を下方に延ばすタイプ(79~82)であり、前者は口径14cm前後の小型に見られ、後者は口径18~19cmのものに見られる。

宝珠形・扁平な摘みをもつもの全体で見ると、口径15cm前後のものが最も多く、12~13cmのもの、17cm前後のもの、20cm前後のものが見られる。図示していないもので、25~28cmの大型品も存在する。形態的にはBタイプのみでAタイプは見られない。

環A (108~116)

口径11~12cmのもの(108・113・114)と、14cm前後のもの(109~112)、15cm前後のもの(115・116)が見られる。

最後のタイプは特異で、底部付近の広い範囲をヘラで削り、丸く仕上げている。胎土・焼成とも他と異なり、重量感があまりない。

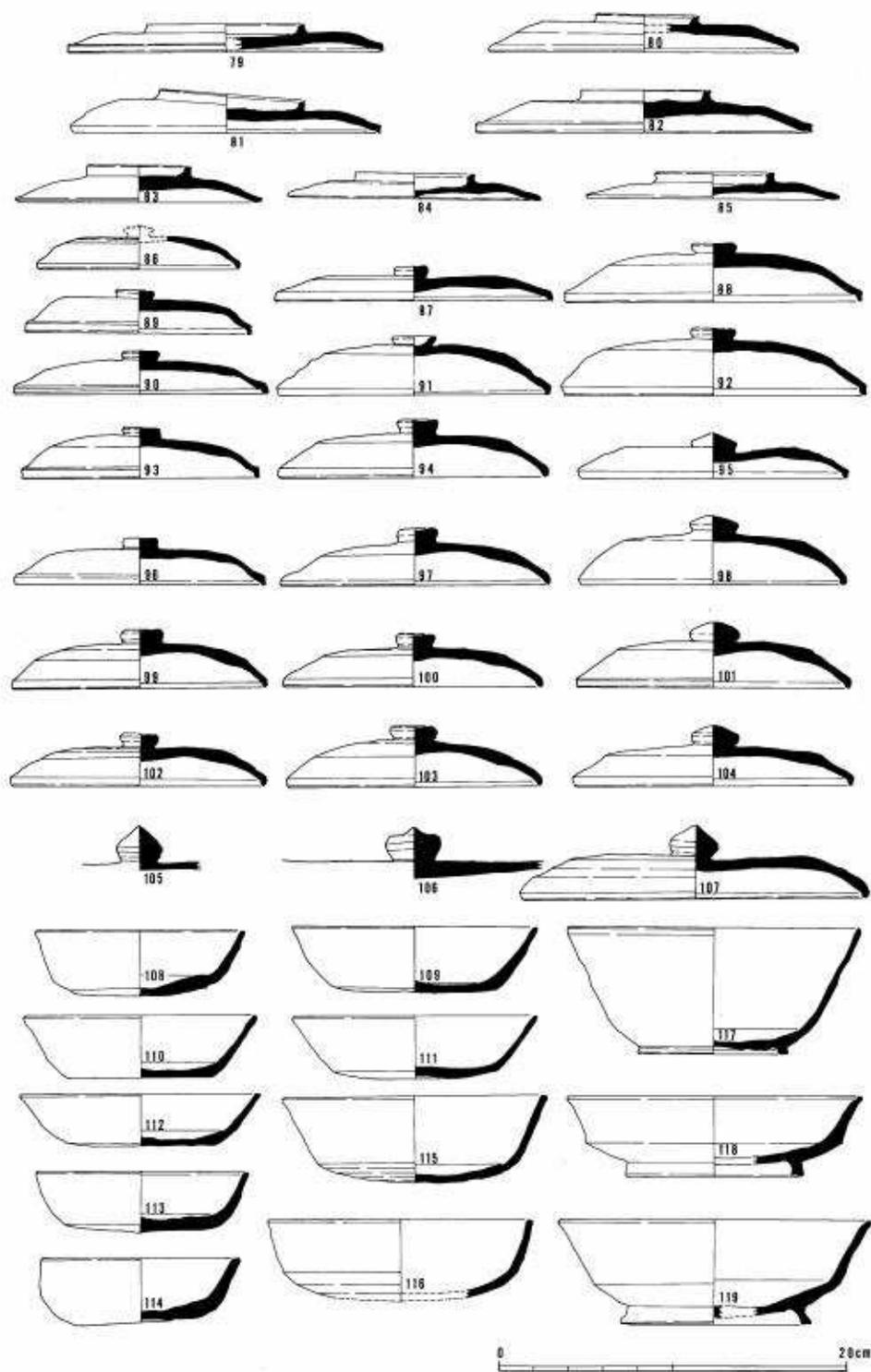
落合窯・川端窯などで少量の出土例が知られており、供給先に興味を持たれる。

環B (120~132)

口径10~13cmのもの、15cm前後のもの(129~132)が見られる。体部は底部から丸味を持って外反するもの(125・129~132)と、直線気味に外反するものが見られる。

高台は体部下端付近に貼り付けられるが、(122・126)のように底部やや内側に付くもの

地福窯跡



第307図 灰原出土土器(3)

も見られる。

また、高台の踏ん張りは外方が多いが、(120・123・129)のように内傾気味に踏ん張るものも見られ、断面が台形のどっしりしたものに加えて、端面のみ広がる形態(127・128)も見られる。

(117)は碗の部類に入るものであり、口径16.6cmの割に、器高7.25cmと器高が高い。低い高台を持つ底部から、丸味を持って緩やかに外反する体部で、中央やや上方にナデ調整に伴う凹みを持つ。

長頸壺 (137)

球形に近い体部から緩やかに外反する細長い頸部を持つ。口縁端部は少し外反気味に真っ直ぐ突出し、外面は凹線状を呈す。底部には外方に踏ん張った高台を持つ。体部および底部に「牟」のヘラ記号が見られる。

壺 (141・142)

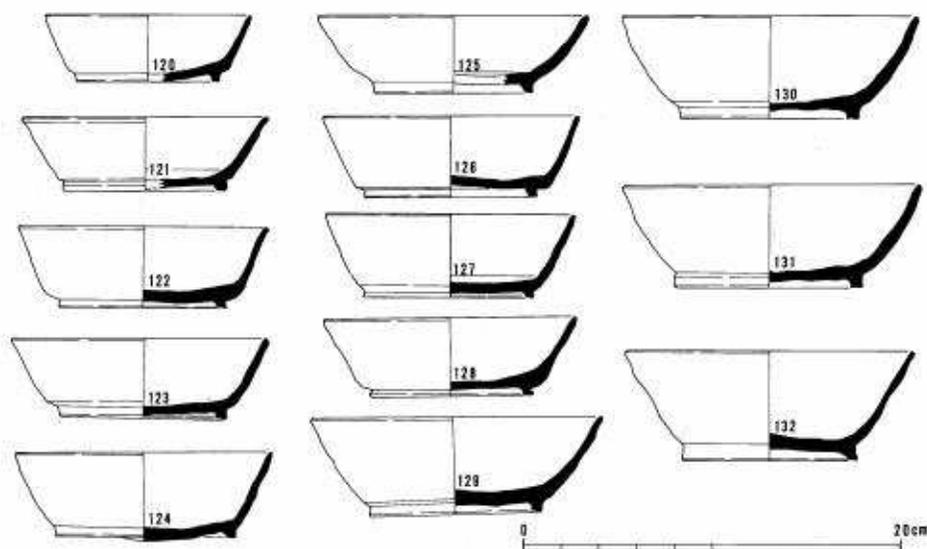
やや外傾気味に直立する短い口縁部を持つ壺であり、緩やかに下降する肩部に耳を持つ。耳は中央部に丸い小さな孔を穿っており、四耳壺の形態をとる。

口径15cm前後で、体部には左下がりの平行タタキ目文による調整が施されている。

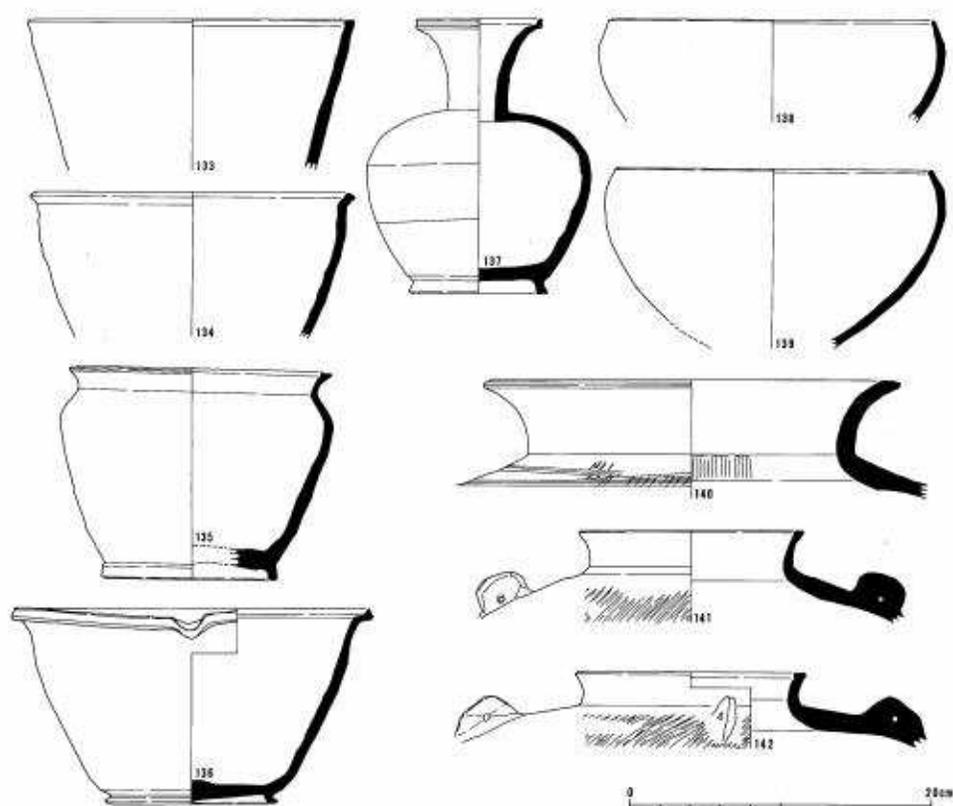
また、口縁端部は内側に延びている。

鉢 (133～136・138・139)

灰原流土中で見られた鉢の他に、鉄鉢と呼称されるタイプの鉢(138・139)が検出されている。



第308図 灰原出土土器(4)



第309図 灰原出土土器(5)

共に底部を欠くが、体部下半の傾斜などから、底部は尖底となろう。口径21cm前後を測り、体部下半で底部に近い部分をへら削り調整している。

甕 (140)

大きく外反する口縁を持つもので、口径は30.8cmである。外面は、頸部以下に平行タタキ目文を施した後、カキ目調整を加えており、内面は同心円文による調整を施している。

(2) 2号窯

窯の構造

窯は推定4.7mを全長とする半地下式の窖窯である。3号窯に近い部分に改変を受け、ほとんど破壊されており、僅かに右側壁の一部と右床面の一部を残して検出された。

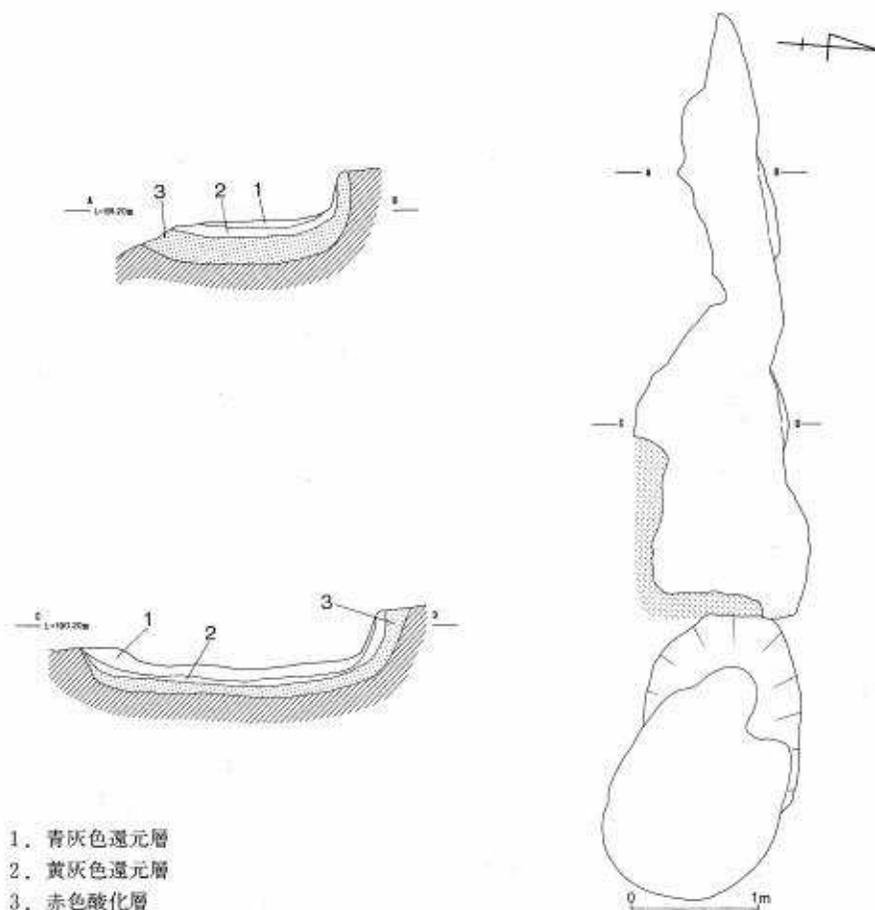
窯の幅は焚口・焼成部付近で、推定1.6mと考えられる。

前庭部は長径1.7m、短径1.2mの長楕円形を呈す。

側壁の立ち上がりは0.15~0.2mの残存が見られるが、床面は凸凹となり、左側は赤焼けの地山面が露出している。

断ち割り調査の結果、床面は一枚のみであり、青灰色還元層、黄灰色還元層・赤色酸化層となっている。焼成部付近での青灰色還元層の厚みは5cmとなっている。

窯体主軸の方位はS86°Wである。床面の傾斜は焚口付近で10°と緩やかである。



第310図 2号窯実測図

灰原は前庭部下方・傾斜面に僅かに灰層が残っていた他は、大部分湿地内に形成されており、流路内での遺物採集となった。3号窯灰原土器との区別は困難な状況である。

遺物

灰原出土土器 (第311・312図)

灰原(湿地)出土の土器がほとんどであり、器種としては坏A・坏B・蓋・皿・長頸壺・壺・高坏である。

蓋 (1~19)

摘みは扁平で中央の高くなるもので、口径13~14cm、16cm前後、18cm前後の3タイプに分かれる。器高は共に3cm前後である。

形態的には、A形態のもの(1・2)は少なく、B形態がほとんどとなっている。

(12)は蓋の蓋で、口径13.2cm、器高4.2cmを測り、乳頭状の摘みを持つ。

(19)は水平な天井部が屈曲して下降する稜の部分に、環状の突帯を持つもので、通常の摘みも持つ蓋である。口縁の形態はA形態であり、口径19cmを測る。

坏A (20~38)

口径12~13cm前後の坏であり、器高は3~4cmとなっている。(38)のように重ね焼きの状態を知る資料も見られる。

皿 (39・40)

口径14cm、器高2cmの皿であり、平底を呈す。底部付近にロクロ削り痕が見られる。

坏B (44~61)

口径が大きく、器高の低いもの(45~58)と、そうでないもの(44・59~61)の2タイプが見られる。前者は口径で14cm前後、16cm前後、18cm前後に分かれる。高台は体部下端よりやや底部寄りに貼り付けられており、端面のあり方には様々なものが見られる。

(46)のみは、底部から直線的に斜方向に立ち上がる。

後者は口径15cm前後を中心に12.8~16cmまで見られ、器高も6cm弱となっている。

長頸壺 (62~70)

細長く伸びる頸部に、「ハ」の字状に開く口縁を持つ。口縁端部は開いた状態のまま丸く仕上げられ、2条の沈線を持つもの(65)もある。口径12~13cmを測る。

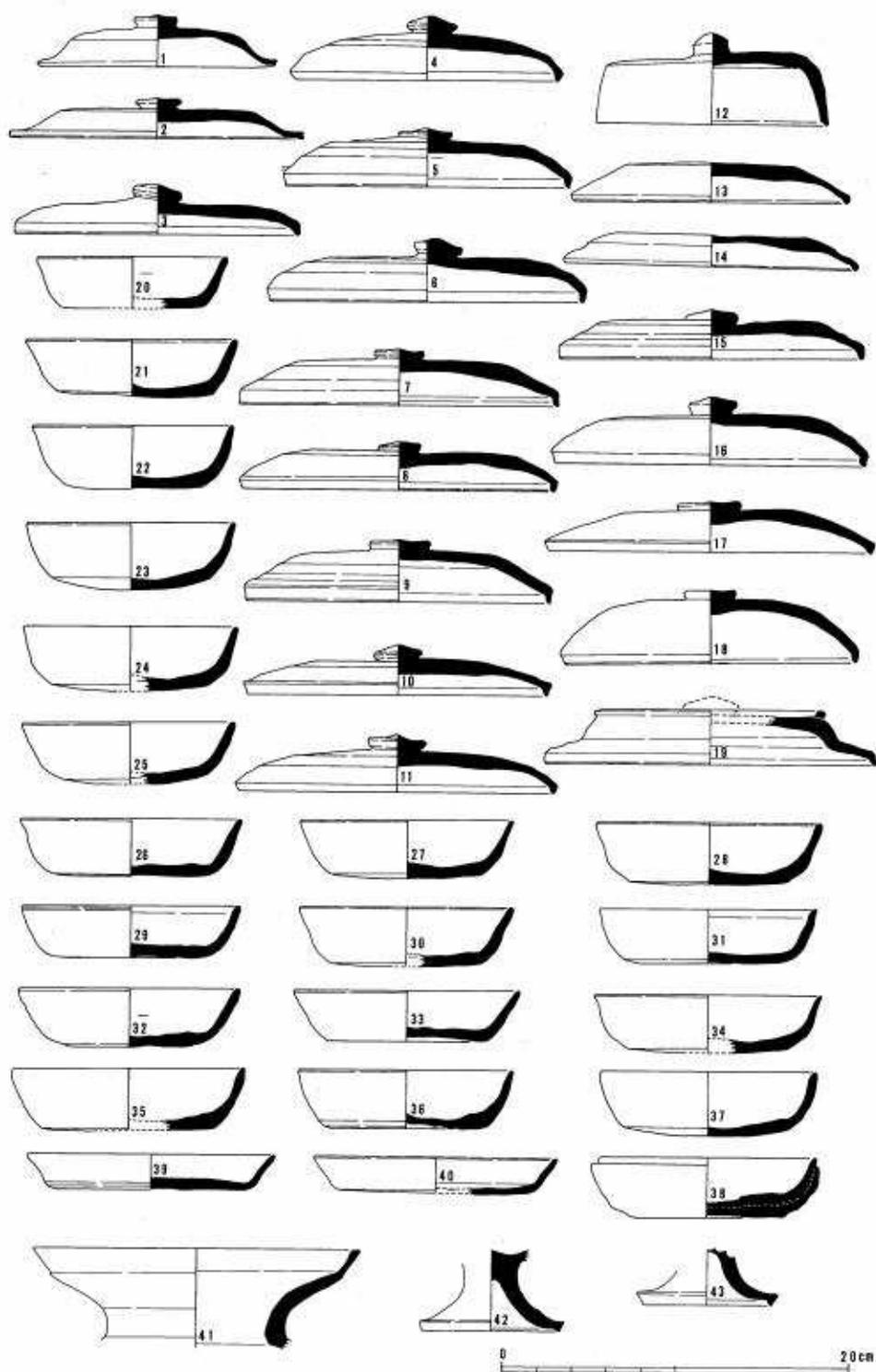
底部は高台を持つが、高台には2種類の形態がある。断面が四角で、断面の内側1点が接地するもの(66・69・70)と、丸味を持つ断面を呈し、端面下方が接地するもの(67・68)である。

壺 (41)

口径18.8cmの壺口縁部破片が見られる。

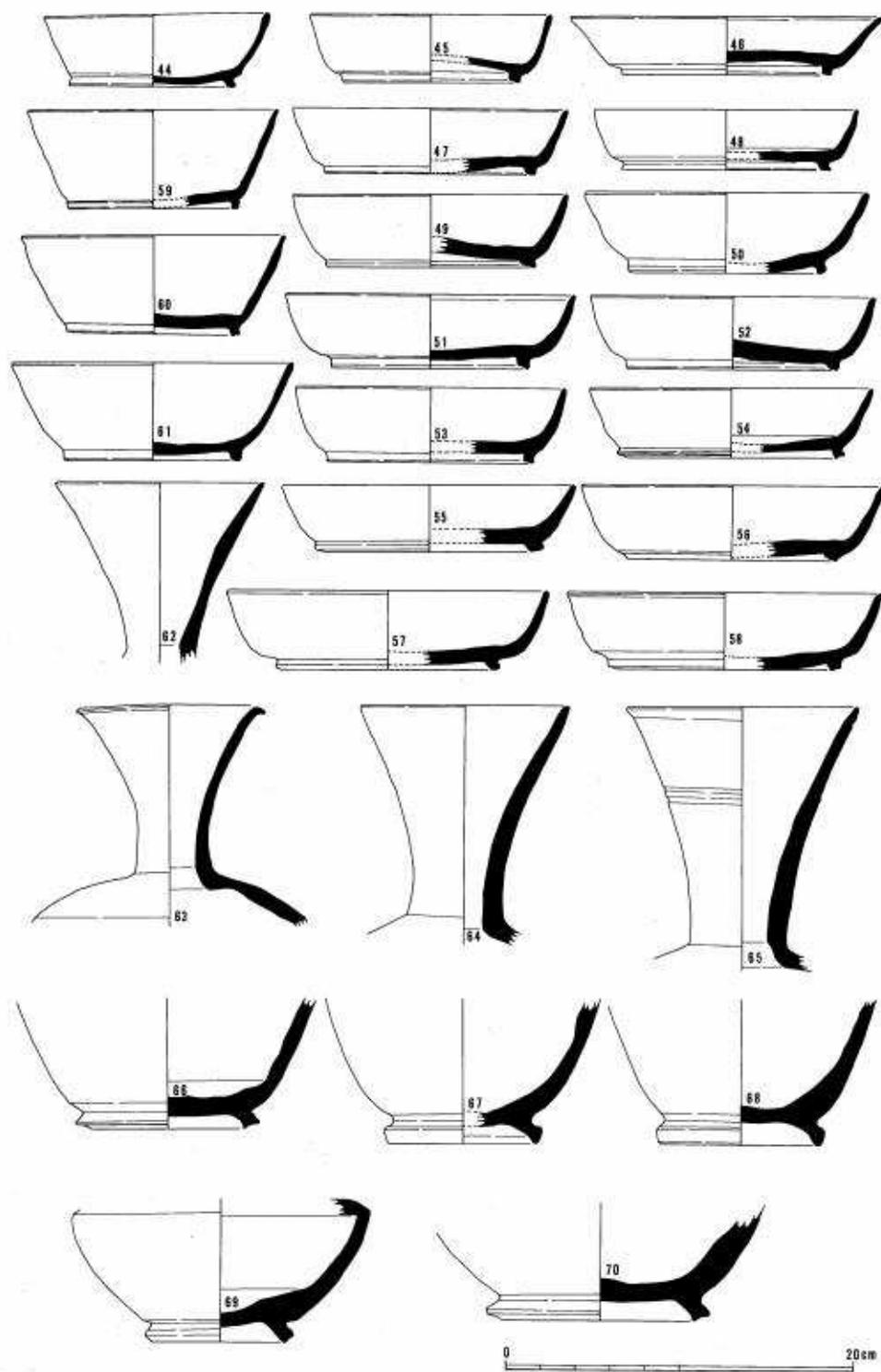
頸部から延びる口縁は1度屈曲して、外上方に開く。屈曲部に稜を持ち、口縁端部は平

地福窯跡



第311圖 灰原（湿地）出土土器(1)

地福窯跡



第312図 灰原(湿地)出土土器(2)

坦な面を形成する。

高坏 (42・43)

共に脚部のみで、脚端部下方を内傾気味に拡張している。

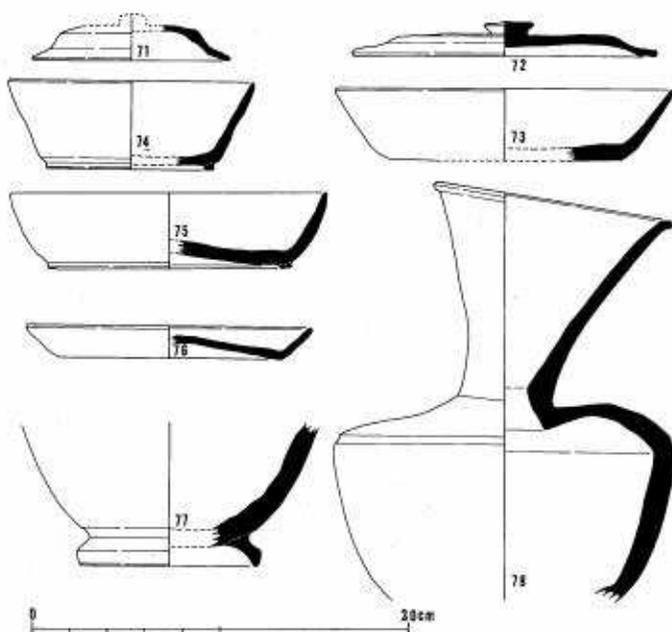
窯体出土土器

(第313図)

蓋 (71~72)

口径16cmで天井部が水平な蓋 (72) で、口縁部はA形態を呈す。

(71)は壺の蓋であり、口径10.4cmで口縁部はA形態を呈す。



第313図 窯体出土土器

坏A (73)

底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。口径17.8cmを測る。

坏B (74~75)

2タイプ見られ、共に高台は低く断面は四角形を呈す。口径は13cmと16.8cmである。

皿 (76)

口径は15.2cmであるが、焼成に伴う歪みが見られる。

長頸壺 (78)

大きく開く口縁をもつ長頸壺であり、口縁端部で少し外反気味に屈曲する。口縁には沈線を持たないで、肩部最大幅付近に1条の沈線を持つ。体部の状況は歪みのため不明瞭である。

(3) 3号窯

窯体の構造

窯の全長7.8mの半地下式の窖窯である。

焚口付近は池の構築で破壊されており、8m以上の規模が想定される。

窯体の幅は残存部下端で1.7m、焼成部で1.6m、先端部で1.5mとあまり変化はなく、寸胴形となっている。

側壁は全て垂直に近い状態で立ち上がっており、焼成部付近で0.6m、先端部で0.45mを測る。

なお、右側壁は窯体下方で1.9mにわたって破壊されており、残存しない。

床面の傾斜は焼成部付近で28°であり、先端部で30°となる。ほとんど傾斜に変化は見られない。

窯体主軸はS87°Wである。

たち割り調査の結果、床面で2枚、壁面で2回の補修痕が確認されており、少なくとも2回の操業が想定される。

灰原は全て現在の池の中であり、前庭部等の状態も不明である。

遺物

3号窯の遺物は、窯体及び灰原（湿地）を中心に多く出土している。

窯体内には、床面に密着した土器群が残存しており、最終床面に伴う資料と考える。

器種構成としては、坏A・坏B・蓋・高坏・長頸壺・壺・甕・平瓶・瓶・硯・鉢・甕などが見られる。

窯体（流土）出土土器（第315図1～12）

蓋（1～7）

蓋は扁平で中央が高くなる摘みを持つものであり、口縁は全てB形態をとる。口径は14cm前後と17～18cmのもの、20cm前後のもの3タイプが見られる。

坏A（8・9）

口径11～13cm、器高3～4cmを測る。底部付近はロクロ削りを受け、丸味を持つもの（9）もある。

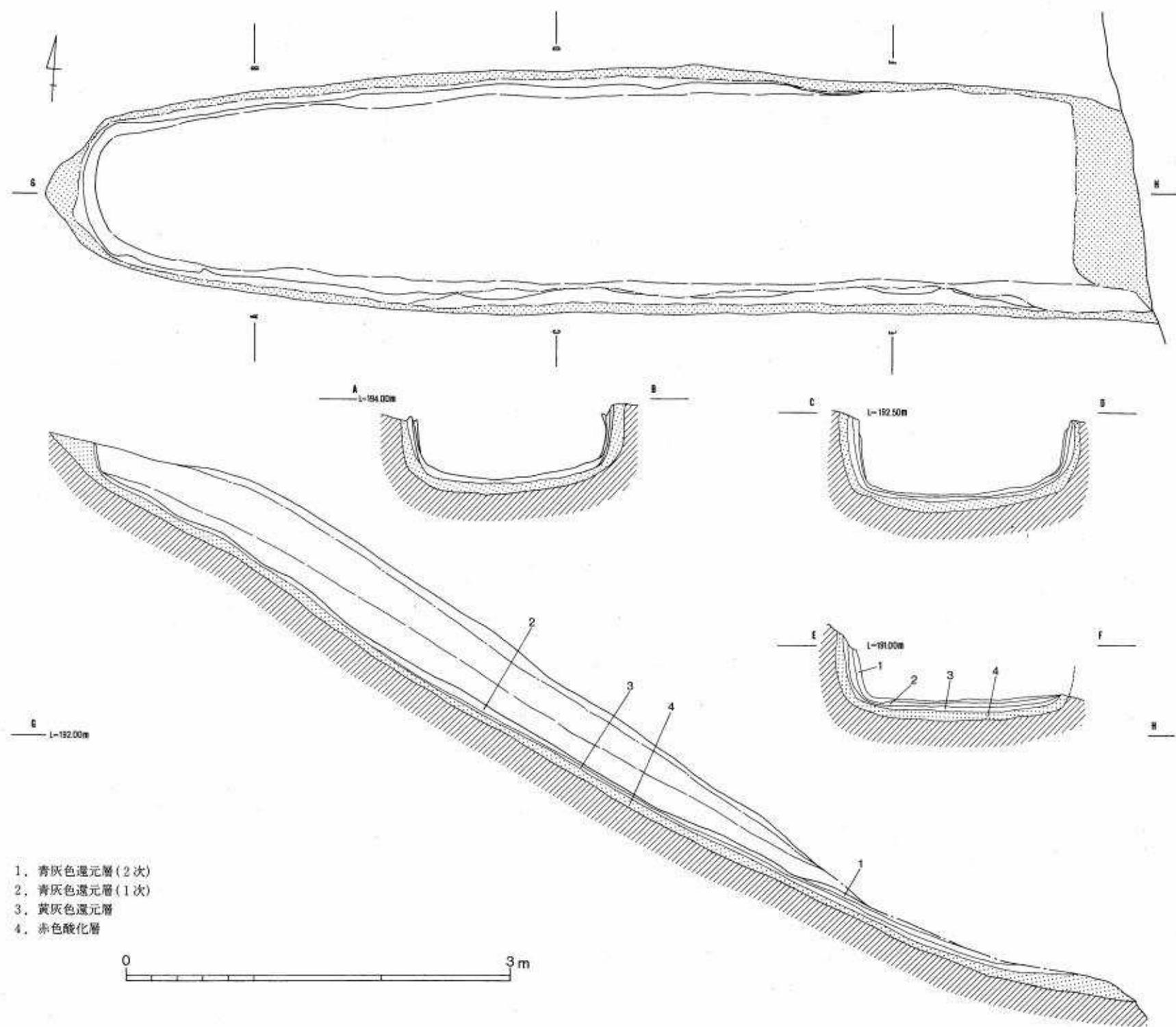
坏B（10・11）

口径は17cm前後で、底部付近にロクロ削りの痕が窺える。高台は断面四角形を呈し、端面は平坦かやや内傾する。

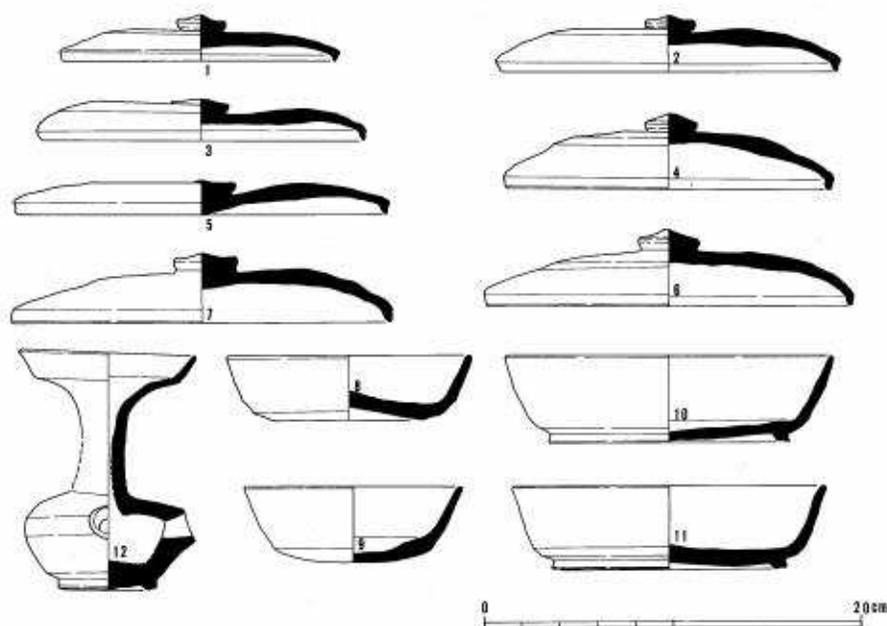
甕（12）

細長い頸部から大きく外反し、屈曲して外上方に開く口縁を持つ。体部は丸味を持っており、胴部最大幅付近に突出気味の円孔を穿つ。

地福窠跡



第314图 3号窠窠体实测图



第315図 3号窯窯体出土土器(1)

底部には低く小さな高台を持つ。口径9.2cmを測る。

窯体（床面）出土土器（第316図13～48）

器種としては、蓋・坏A・坏B・長頸壺・碗・甕が見られる。

蓋（13～23）

扁平で中央の高くなる摘みを持つタイプで、口縁はB形態をとる。

口径は17～18cmと20cm前後のものが見られるが、天井部が水平のまま下降して、口縁端部に至るもの（13）も見られる。

（22・23）は環状の突帯を巡らせるタイプの蓋であり、（23）は天井部の屈曲部より内側に突帯を巡らせている。

坏A（24～32）

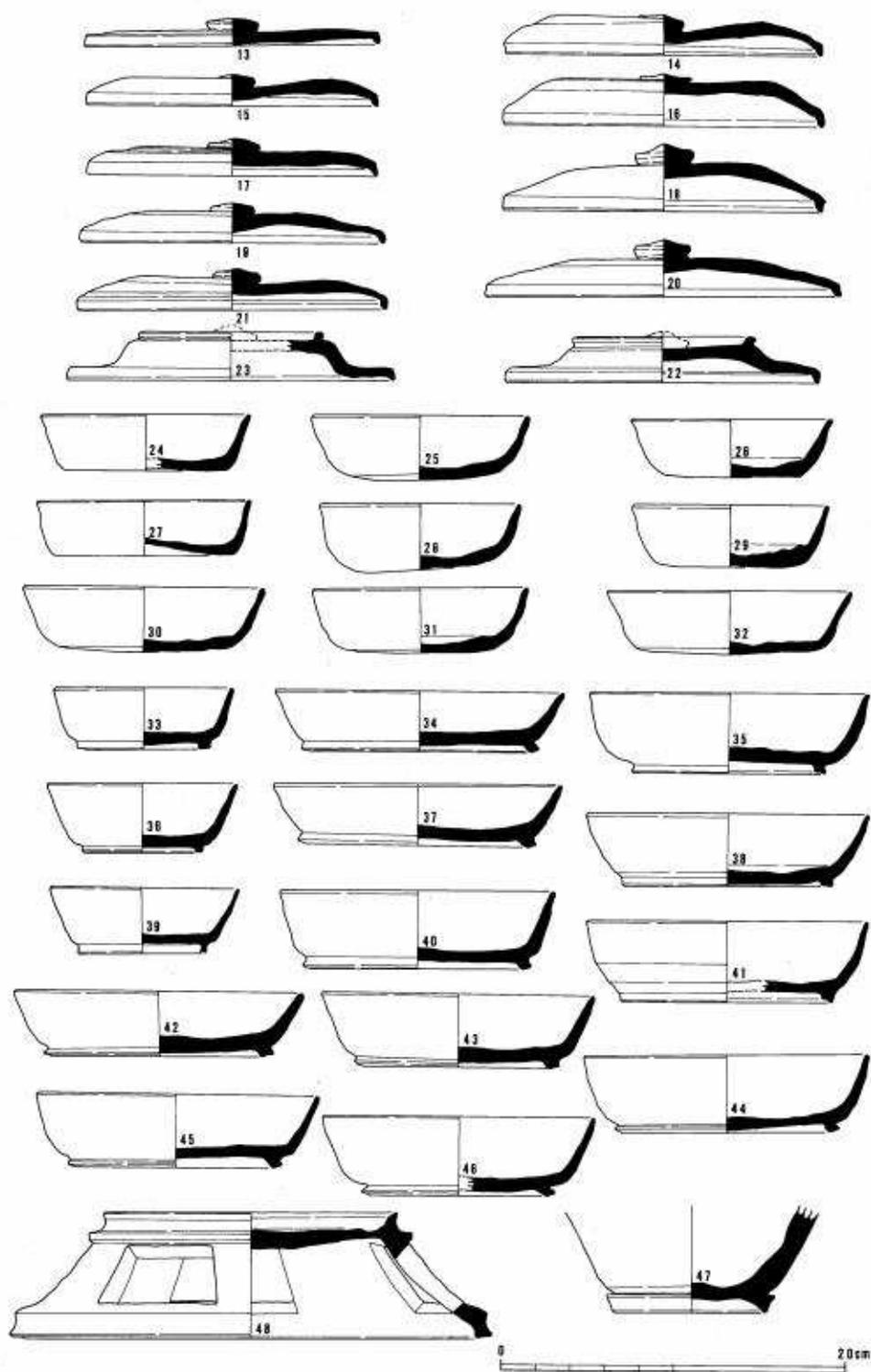
口径12cm前後と14cm前後のものが見られる。体部と底部の境は丸くなるものが多いが、（24・27）のように直立に近い状態で立ち上がる体部を持つものもある。

坏B（33～46）

口径10～11cm前後のもの、口径16cm前後のものに大きく別れる。

前者の高台は、ほぼ断面四角形を呈するが、端面が内傾気味のものが見られる。（39）は端面の幅が狭い縦長タイプの高台である。後者は全て外方に踏ん張る高台を持つが、断面形は四角とは限らず、崩れた形態となっている。端面は内傾するものが多く、（35・38・41）

地福窯跡



第316図 窯体出土土器(2)

のみ外傾し、凹面となる。体部下半から底部にかけてロクロ削りの見られるもの(41)もある。

台付円面硯(48)

硯部と台部とが連続的に整形されたもので、陸と海の区別が明確なものである。

硯部外面には、角張った突帯を巡らせ、上端部は鋭角的に外向する。

台部の透しは台形を呈し、六方にあけられている。

台部下端は緩やかに下降し、1度屈曲してからやや外方に力強く踏ん張る。

灰原(湿地)出土土器(第317-319図49-135)

蓋(49-71)

扁平で頭の高い摘みを持つが、天井部の水平になるタイプに加えて、天井部から体部にかけて笠形を呈するタイプ(50・62-67)が見られる。

口径は18cm前後のものがほとんどであり、(49・50)のように11-13cmの小型品は僅かである。

(61)は輪状の摘みを持つタイプであり、(69)は環状の突帯が巡るタイプである。

口縁の形態は(69)を除き、全てB形態をとる。

坏A(72-93・97・98)

口径で12-13cmのものが中心であり、11cm前後のもの(73-75)も僅かに見られる。

底部と体部の境は、明瞭なもの丸味を持つものの両者が存在しているが、体部下半から底部にかけて、ロクロ削りの施されるものも見られる。

(97・98)は焼成状態を知る資料であり、口縁と口縁、底部と底部の接着が見られる。

坏B(94-96・99-117)

横長タイプとそうでないタイプ(94-96・117)が見られる。

前者は口径が17cm前後で、体部下半が丸味を持って立ち上がるものが中心であるが、(108)のように直線的に外反するものも見られる。後者においても同様であり、体部下半から底部にかけて、ロクロ削りの施されたものも見られる。

高台は断面が四角のものばかりでなく、三角形なども見られ、崩れた形態が多く、端面も様々であるが、内傾のものが多い。

また、(114)のように細く縦長のものも見られる。

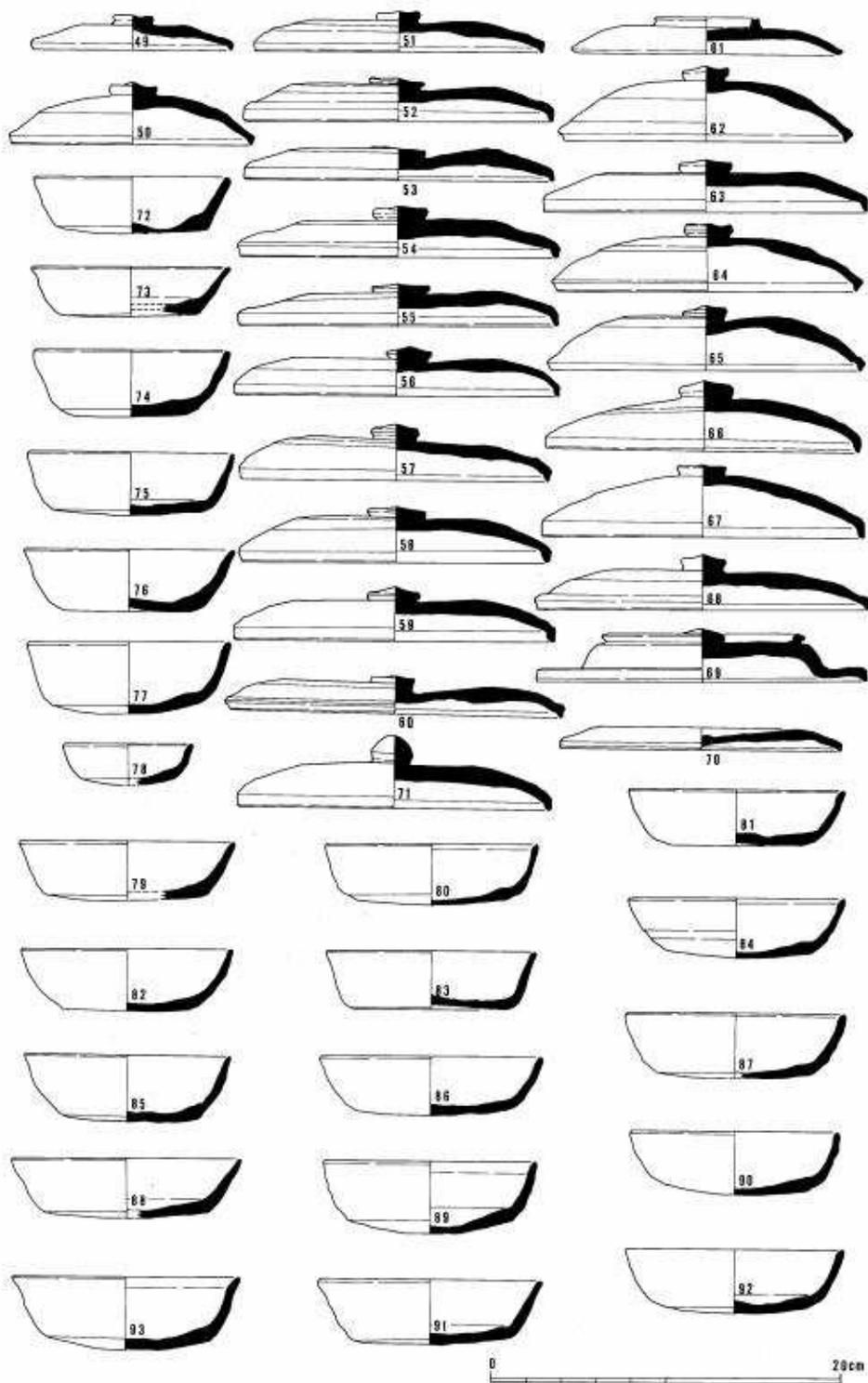
高坏(119-122)

坏Aに脚台を付けたような高坏であり、口径12.4cm、器高7.7cmを測る。

脚部は緩やかに外反し、下端部を垂直か内傾気味に拡張する。(121)のように、ほとんど真っ直ぐに延びる筒部が、下端でラッパ状に開いたまま終わるものもある。

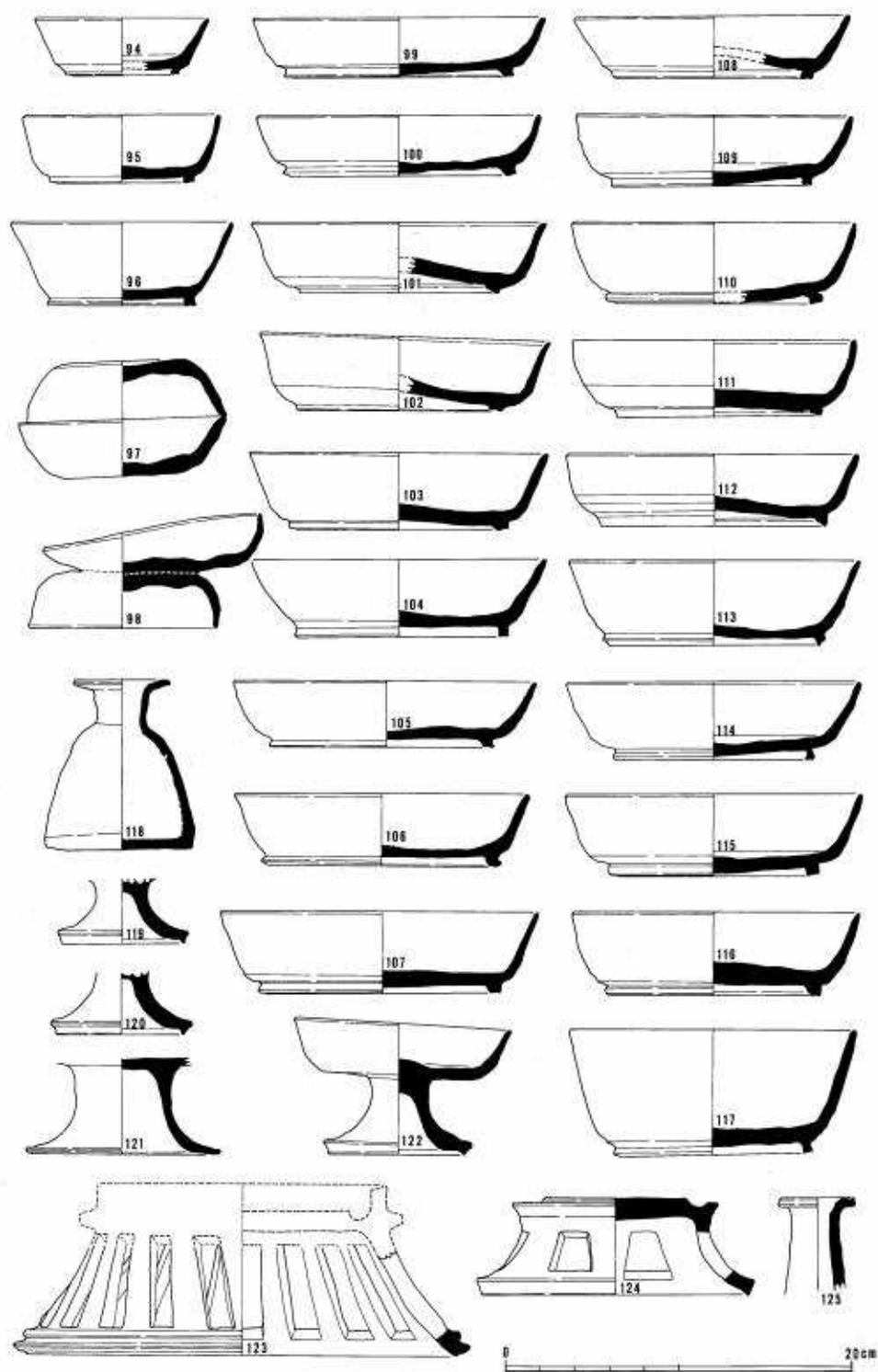
壺(118)

地福窯跡



第317図 灰原(湿地)出土土器(1)

地福窯跡



第318図 灰原(湿地)出土土器(2)

地福窯跡



第319図 灰原（湿地）出土土器(3)

器高10cmの小型の壺である。

短くて真っ直ぐに延びる頸から、大きく屈曲して横方向に開く口縁を持つ。

体部から底部にかけては三角形を呈し、底部は平底となる。

水瓶 (125)

口頸部破片であり、細長い口頸部から丸く屈曲し、更に先端を上方につまみ上げている。

碗 (123・124)

(123)は台部のみであり、長方形の透しを持つ。端部には2条の突帯を施している。

(124)は海と陸の区別が明瞭に見られるものであり、硯部外面より陸の部分の方が高くなっている。台部の透しは台形を呈し、六方に見られる。突帯は見られず、台部下端が鋭角的に延びて終わる。

壺 (127)

口径9.8cm、器高12cmの小型壺である。

胴部最大幅付近に1条の突帯を巡らせ、大きく屈曲して頸部に至る。頸部は短く、少し閉き気味で上方に立つ。口縁端部は外方に引っ張られ尖る。底部は平底となる。

長頸壺 (131~135)

細長い頸部から大きく「ハ」字状に開く口縁を持つタイプ (132~135) と、僅かに広がる筒状の口縁を持つもの (131) が見られる。

前者は、大きさから大小に区分される。

器高25cm前後のもの (132・133) と、30cm前後のもの (134・135) で、胴部最大幅付近に1条の沈線を巡らせ、段のような状態となる。口縁端部は開いたままで終わるもの (134) と、少し屈曲して横方向に垂れるものが見られる。

高台は高く外方に踏ん張り、端面内側を延ばして接地させている。

口頸部と体部は3段構成である。

後者は、底部が平底となっており、重みで変形しているが、器高30cm程度と考えられ、肩部付近に2条の沈線を施す。底部周辺には、ロクロ削りの痕が見られる。

平瓶 (128)

口縁部のみであり、外上方へ広く開く。

口径16cmを測り、端部は少し外方へ屈曲して終わる。

鉢 (129・130)

器壁の厚い造りで、台形を呈する。

口径17.6cmを測り、口縁下にナデ調整に伴う凹みが見られる。口縁に2カ所方形の切り込みが見られる。

底部は平底で、中央に円孔を穿つものも見られる。破片のみの資料では、3方・4方の切り込みのものも見られる。落合窯にても同様の土器の報告がある。

甕 (126)

短く外反する口縁の甕であり、口径29cmを測る。端部は少し下方に拡張され、突帯状になる。

(4) 4号窯

窯の構造

窯は全長7.2mの半地下式の窖窯である。

隣接する窯の操業に伴って「消滅」させられた窯とでも呼ぶべき状況を呈している。

窯体の幅は、焚口付近で1.8m、焼成部で1.5m、先端部で1mを測る。3号窯と同様あまり変化のない寸胴に近い形態をとる。

側壁は左側壁部は残存するが、右側壁部は先端部と焚口付近の少しを除いて、削平されており、一部床面も含めて破壊されている。

すなわち、5号窯の操業に伴う破壊であり、灰原形成による地山整形の為、削平されたものである。

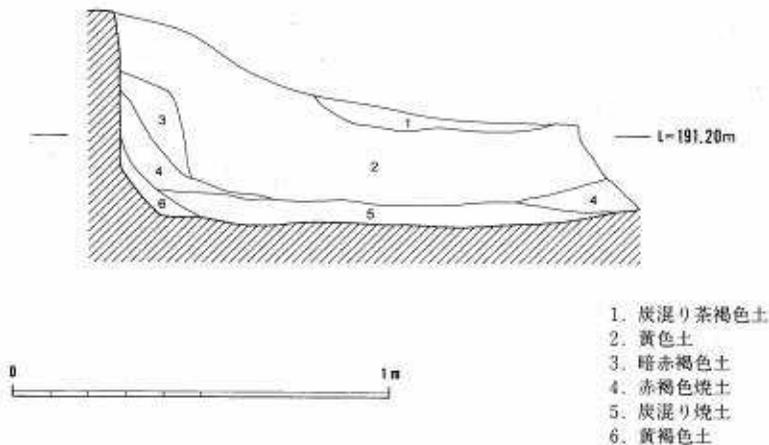
窯体内の土層堆積を見ると、床面上に堆積した赤褐色焼土の上面は、全て黄色土の単純堆積となっており、一時に埋められた状況を呈している。おそらく、窯体構築時に地山掘込み土を廃棄された窯体内に放り込み埋めてしまったものと考えられる。更に黄色土の上面は、炭混じり黄褐色土が堆積しており、灰原としての機能が考えられ、前後関係も明白である。

左側壁部残存高は、焚口付近で18cm、焼成部付近で40cm、先端部で44cmである。

前庭部は焚口床面から少し凹み、「ハ」の字状に拡がり、1号窯の前庭部とは出っ張りを間に挟んでつながる。

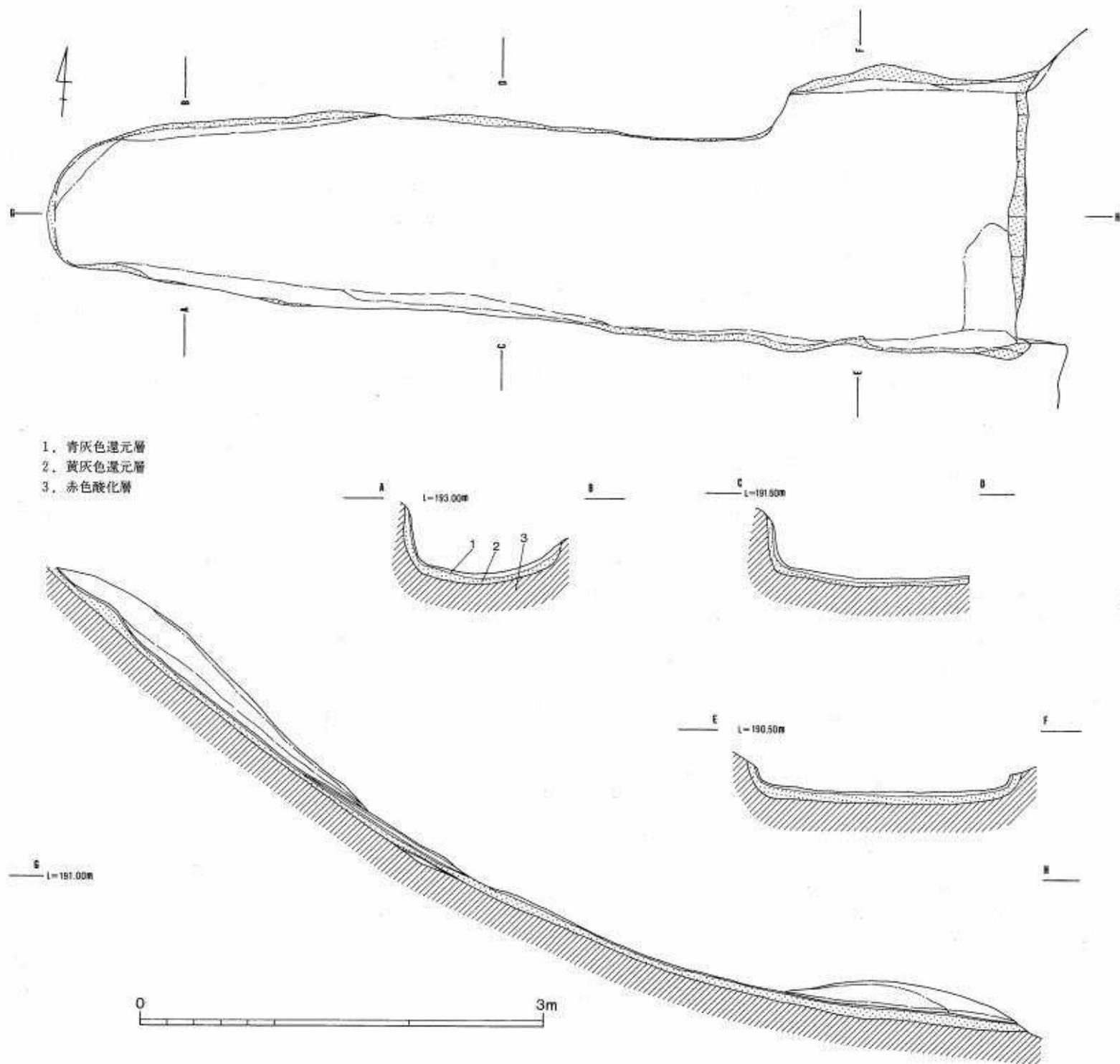
床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけて23°であるが、先端部にかけては38°となっている。

窯体の主軸方位はS85°Wである。



第320図 4号窯窯体土層断面図

地福窠跡

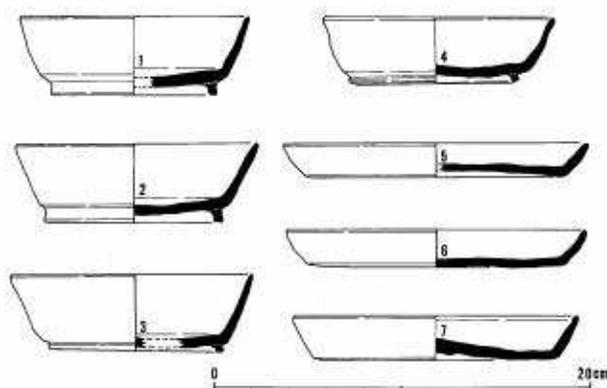


第321图 4号窠窠体实测图

地福窯跡

たち割り調査の結果、床面壁面共に1枚のみであり、短期間の操業が想定される。

灰原は、窯体の位置が地福窯跡の中央に位置していることから窺えるように、中央平坦面に面しており、山裾平坦面と考えられる。



遺物

坏B (第322図1～4)

口径12～13cm、器高4cm前後を測る。底部から比較的直線的に伸びる体部を持つもの(1～3)と、体部下半に丸味を持って立ち上がるもの(4)が見られる。

前者の高台は、高くしっかりしたもの(1・2)、と低いもの(3)が見られる。

後者の高台は、体部下端よりやや底部寄りに貼り付けられており、端面は内傾している。

皿(第322図5～7)

口径15～16cm、器高2cm前後を測る。

底部から直線的に体部が外反するもの(7)と、体部中央で僅かに屈曲するもの(5・6)が見られる。(7)は口縁部内面に1条の沈線を持つ。

第322図 出土土器

(5) 5号窯

窯体の構造

窯は全長4mの半地下式の窖窯である。

地福窯跡の中で最も高位に築かれている。

窯体の幅は、焚口付近で1.37m、先端部で0.9mを測り、幅の割に長さの短い形態である。

側壁は焚口で0.2m、焼成部付近で0.35m残存しており、床面との境を明確にして立ち上がる。

床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけて24°を測るが、先端部にかけては40°の傾斜となっている。

窯体主軸の方位はS87°Wである。

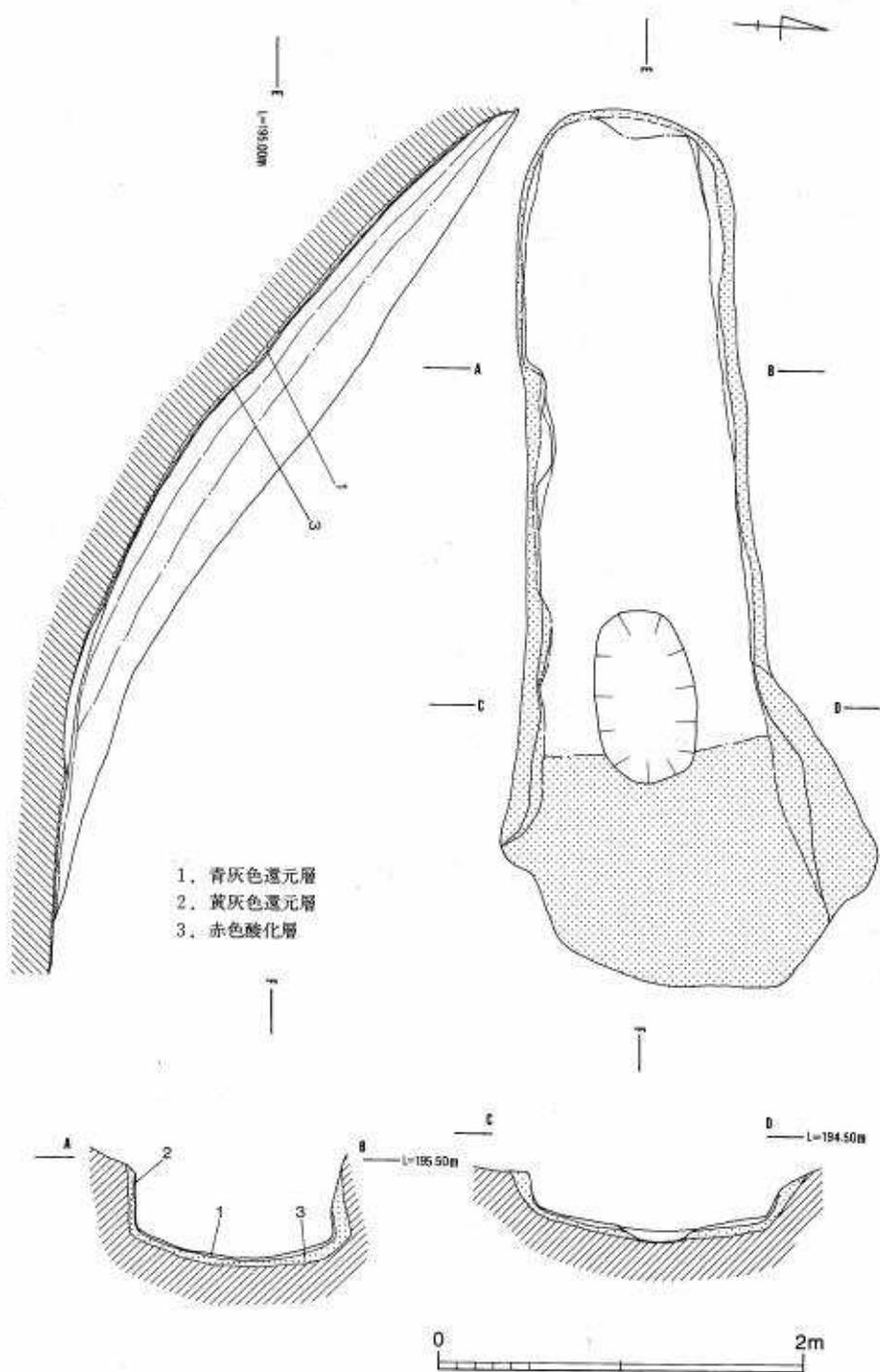
焚口付近には長径96cm、短径55cmを測る舟底状のピットが見られる。

前庭部は焚口から少し開き気味に拡がり、平坦な底面は赤く酸化している。

灰原は山裾に向かって形成されており、一部は4号窯の窯体を破壊している。

また、灰原と焚口の間には、長径3.5m、短径2.2mを測る不定楕円形の土塊が見られ、

地福窠跡



第323图 5号窠窠体实测图

高位傾斜地における作業に伴うスペースと考えられる。

断ち割り調査の結果床面は1枚であるが、舟底状ビットの存在から複数の操業が想定される。

遺物

窯体・灰原を中心に土器が見られる。

器種構成は、蓋・坏A・坏B・椀・皿・壺・横瓶・鉢・甕である。中でも特に、他の窯に比べ皿の焼成が目につく。

窯体出土土器（第324図1～25）

蓋（1～5）

口径13cm前後と18cm前後のものが見られる。中央部の高くなる扁平な摘みを持つ。

口縁部の形態には、A形態（2・3）とB形態（4・5）の両者が見られ、A形態の口縁端部外面には凹面を持つ。（1）は径4.8cmの輪状の摘みの付くものである。

坏A（6～13）

口径13～14cmのものが中心で、底部から直線的に体部が立ち上がる傾向がある。器壁は比較的薄く、底部付近にロクロ削りの見られるものが多く、底は平坦よりも少し丸味を持っている。（6）は口径の少し小さなタイプであり、体部下半は丸味を持ち、口縁端部内面は少し段状となる。

坏B（14～20・24）

口径14cm前後で、断面四角形の高台を持つ。高台は外方に踏ん張っており、端面は平坦なものが多いが、内傾するもの（16）や凹面を持つもの（14・17・19・20）も見られる。

（14）は口縁下外面に3条の沈線が施されている。

（24）は口径19.8cm、器高6.2cmと一段大形のタイプであり、端面に凹みを持つ、高い高台を持つ。

皿（21～23）

口径15～16cmで、ロクロ削りの施された底部は、丸味を持つ。

口縁端部内面には1条の沈線を持つが、段状を呈す。

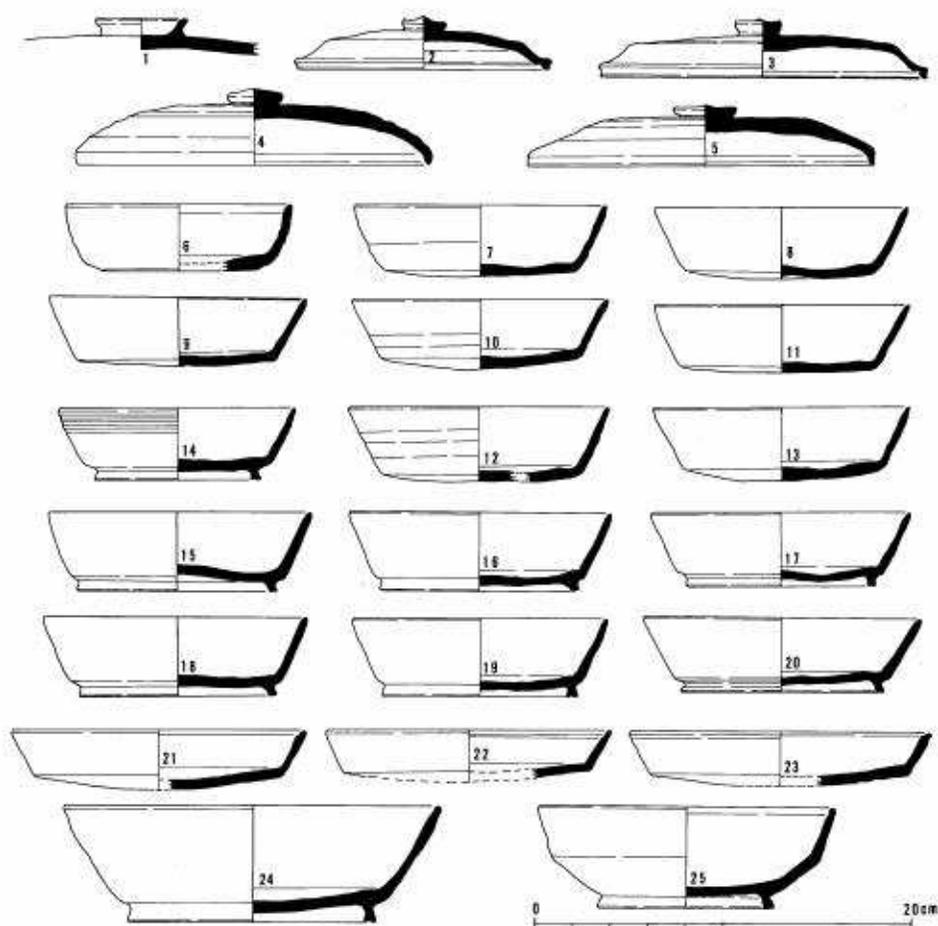
稜椀（25）

口径15.6cm、器高5.5cmで、外方に踏ん張る高台を持つ。体部中央付近に稜を持ち、口縁端部内面には1条の弱い沈線を施している。

灰原（湿地）出土土器（第325・326図26～100）

蓋（26～44）

中央部の高くなる扁平な摘みを持つタイプで、口径は14cm前後と18cm前後のものが中心に見られる。口縁部の形態はA形態をとり、端部外面は沈線状に凹む。



第324図 窯体出土土器

(29)は壺の蓋で、口径11.4cmを測り、口縁端部は内側に屈曲する。

その他、緩やかに口縁まで下降して終わるもの(30)や、大形でB形態の口縁を持つもの(44)も見られる。

坏A (45~54)

口径13cm前後、器高4cm弱のものであり、底部付近はロクロ削りが見られ、体部は直線的に外方に立ち上がる。体部中央に沈線が3~4本見られるもの(49~52)もある。

(45)は口径8.7cmと小さく、体部も丸味を持って立ち上がる。(51)は口縁端部に平坦な面を持つ。

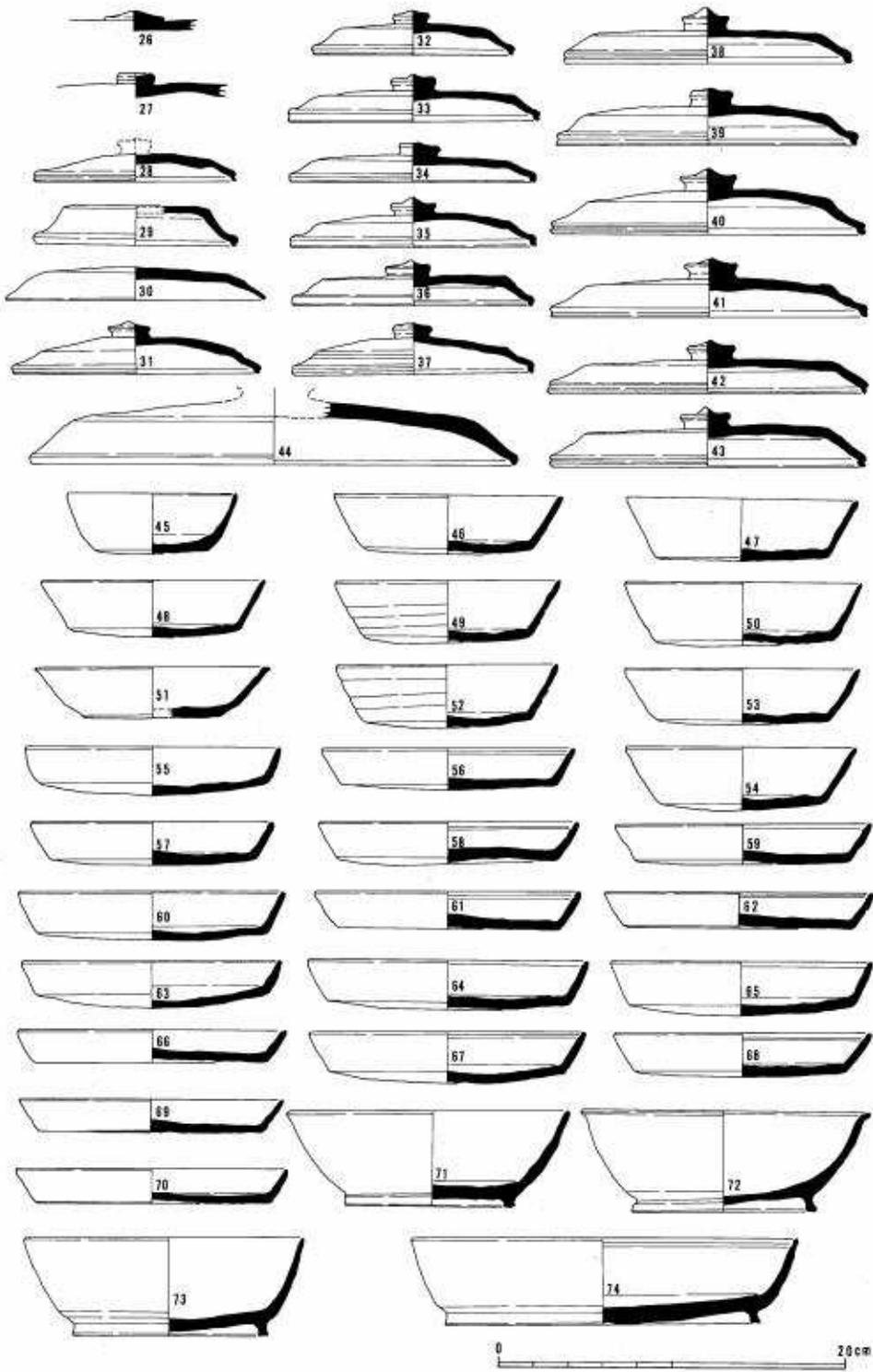
皿 (55~70)

口径15cm前後で、底部から直線的に体部が立つ。

底部付近はロクロ削りが施され、丸味を持つものと、平坦なものが見られる。

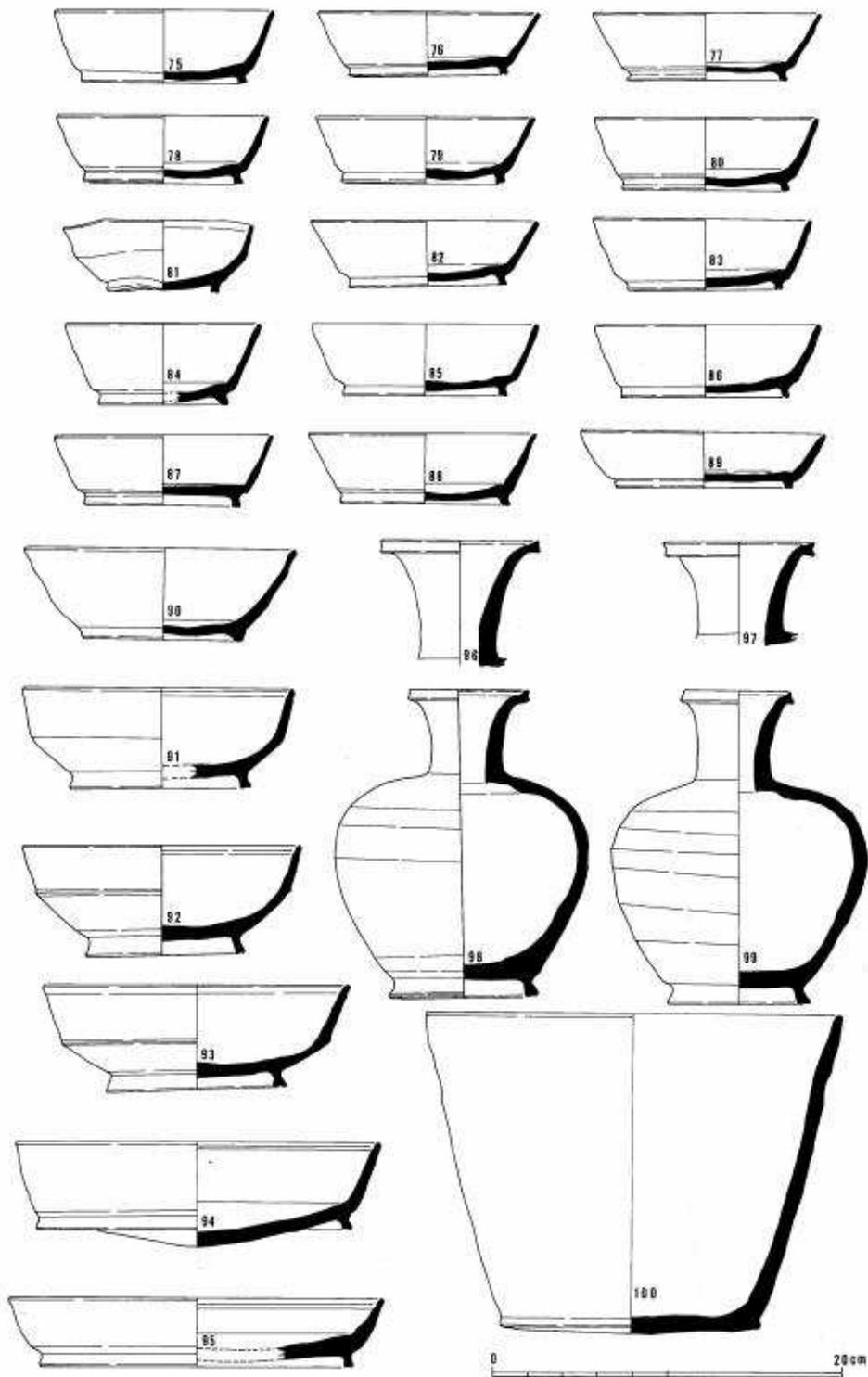
口縁端部内面に1条の沈線を施したり、段状になるものが多いが、(55・69)のように丸

地福窯跡



第325図 灰原（黑色灰）出土土器(1)

地福窯跡



第326図 灰原（黒色灰）出土土器(2)

く終わるものも僅かに見られる。

坏B (71~73・75~80・82~90)

口径13cm前後を中心に、11~14cmまで見られる。体部は高くなる傾向が見られる。

高台は断面が角張るタイプで、外方に踏ん張っている。端面は平坦・内傾両者が存在し、凹面を持つものもある。高台張り付け付近にはナデ調整が見られる。

(89)は口径ともども他と異なる。

(90)は椀に近い形態をとり、高台も形の崩れたものとなっている。

稜椀 (81・91~93)

大小のタイプが見られる。共に体部中央付近に稜を持つが、(92・93)は突帯風の稜となっている。

高台は縦長の高いものが見られ、端面に凹面を持つが、内傾の傾向が強い。

皿B (74・94・95)

坏Bの口径を大きくしたもので、坏Bの範疇に入るかも知れないが、一応皿Bとする。

口径20cmを越すもので、坏Bとほとんど変わらないが、口縁端部内面に、皿に見られたような沈線をもつもの(74・95)もある。

長頸壺 (96~99)

球形に近い胴部で、細長い頸部が少し外方に開く口縁を持つもので、口縁端部を上下あるいは上方に拡張している。

口径は6~9cmで、全容の知れるものは、器高18cmで高台を持つ。高台は高いもので、丸味を持った断面四角を呈し、外方に踏ん張る。

鉢 (100)

台形状を呈する鉢であり、口径23.8cm、器高18.4cmを測る。口縁の切り込みは、残存部からは見られない。底部と体部の境は、横方向に少し引っ張られている。

灰原(流土)出土土器(第327図101~127)

蓋 (101~109)

口径14cm前後と18cm前後のものが中心で、摘みは輪状・扁平・頭の高い扁平など様々見られる。口縁の形態はA形態をとる。

(105)は壺の蓋で、口径11.2cmを測る。口径で20cmを越えるもの(109)も見られる。

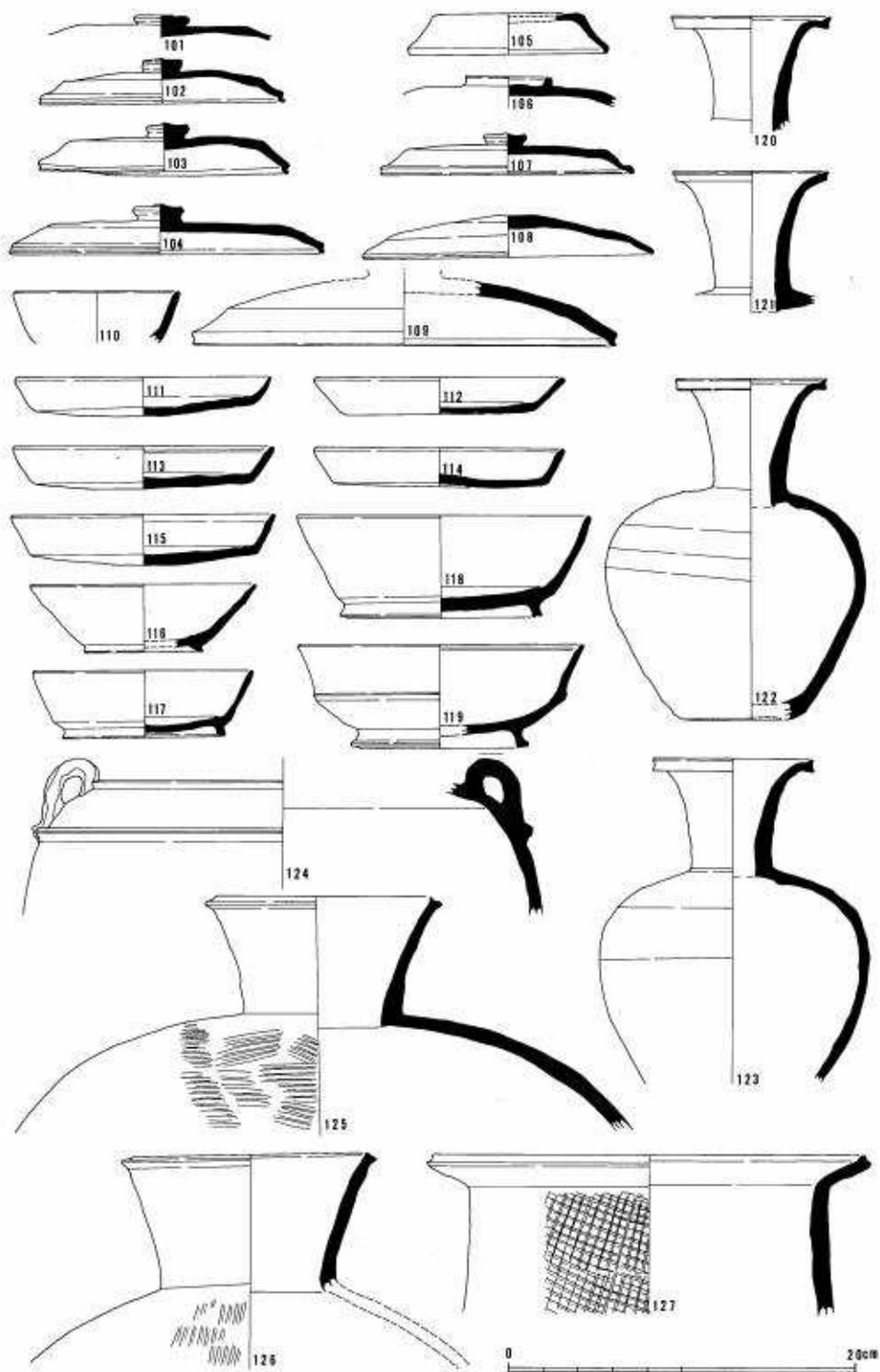
皿 (111~115)

全て口径15cm前後で、口縁端部内面に沈線・段を持つもの(113~115)と、丸く終わるもの(111・112)の両者が存在する。

坏B (116~118)

(116)は底部から45度で、直線的に開く体部を持つもので、椀に近い形態をとる。

地福窯跡



第327図 灰原（流土）出土土器

(117)は口径12.6cmで、端面に凹みを持ち外傾する高台を持つ。(118)は口径16.8cmで、端面に凹みを持ち、内傾する高台を持っている。

稜椀 (119)

口径16.4cm、器高6cmの稜椀であり、体部中央付近に幅のある突帯の稜を持つ。

長頸壺 (120~123)

球形の体部で、細長い頸部から緩やかに開く口縁を持つもので、口縁端部で大きく外反し、先端部を上方に拡張する。

口径は9cm前後で、灰層出土土器から考えると、高台の付くものであろう。

壺 (124)

丸味を持つ肩部に、縦長の耳を持つ双耳壺で、耳を挟むような形で2条の貼り付け突帯を巡らす。時期的には少し下がるが、貝谷窯でも数例知られているタイプのものである。

横瓶 (125~126)

丸味を持つ肩から、外反する短い口頸部を持つもので、口縁端部は内側上方へつまみ上げられる。口径13cm前後を測り、体部外面は平行タタキ目文で調整されている。

甕 (127)

口径25cmで直立気味に立ち上がる体部から、大きく屈曲して口縁部に至る。口縁端部は上方に小さくつまみ上げられている。

体部外面には、格子状のタタキ目文で調整が加えられている。

(6) 6号窯

窯体の構造

窯は全長6.8mの半地下式の窖窯である。

地福窯の中でも最も谷の入口に位置し、最も残りの良い窯である。

窯体の幅は、焚口付近で1.3m、焼成部で1.3m、先端部で0.6mを測る。細長い形態の窯である。

側壁は焚口で0.4m、焼成部で0.6m、先端部で0.3m残存する。側壁の形態は、焼成部ではほぼ垂直に立ち上がる他は、焚口・先端部共に左右非対象で、右側壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がるが、左側壁は内向あるいは外向し、右側壁に対する意識の強さを感じさせる。

前庭部は径2.5mの円形を呈しており、焚口部とは少し段を持って下がり、平坦な底面を持つ。

床面の傾斜は、焚口から焼成部にかけては25°を測るが、先端部にかけては30°となっている。比較的傾斜の緩やかな形態である。

窯体主軸の方位はS86°Wである。

たち割り調査の結果、操業の変遷に伴う窯体の変化を明瞭に知ることができた。焚口に

地福窯跡

関すれば断面観察の結果、30～40cm外方で旧前庭部の赤色酸化土（赤焼け）が検出されている。このことは、旧前庭部の幅を狭めて粘土を貼り、床面・壁面を形成し焚口とした結果を示している。

また、先端部の床面は、断面観察の結果、最終床面を含めて3枚の床面が見られ、赤色酸化層は窯体端から更に90cm上方に延びて見られる。焼成部・焚口部の床面は一枚のみであるが、壁面は2枚見られ、補修の痕が窺える。

たち割り調査の結果を総合すると、少なくとも3回の操業が想定され、先端部で15～20cm下方への縮小が見られる。そして焚口では1m下方への延長が実施され、それに伴って前庭部も移動している。

すなわち、焼成部付近はそのままの状態、焚口部と先端部の両端を触る方法で、窯体の長さ・傾斜を変化させ、より良い窯業生産の工夫なり努力がなされたものと考えられ、地福窯の中での6号窯の立地が、谷入口（端）に位置していることから、もはや他に構築の場が容易ではなかった状況なども想像できる。

灰原は前庭部の下方に、前庭部の幅から徐々に広がって湿地に至る。前庭部の下方は地山整形による灰原が形成されている。

遺物

窯体を中心に遺物の出土が知られており、3号窯同様、床面に一括して土器の残存が見られた。

器種としては、坏・蓋・皿の小型品が中心で、僅かに壺が数点見られるのみである。

窯体出土土器（第329・330図1～89）

蓋（1～8）

中央部の高い扁平な摘みを持つ口径14～15cmの蓋で、口縁部の形態はA形態が大部分となっているが、B形態のもの（6）も見られる。

坏A（9～41）

口径13～14cm、器高3～4cmの一定した法量を持つ。

底部と体部の境は丸味を持つものが多く、底部付近にロクロ削りの痕が見られるものもある。口縁端部は丸く仕上げられている。

皿（44～54）

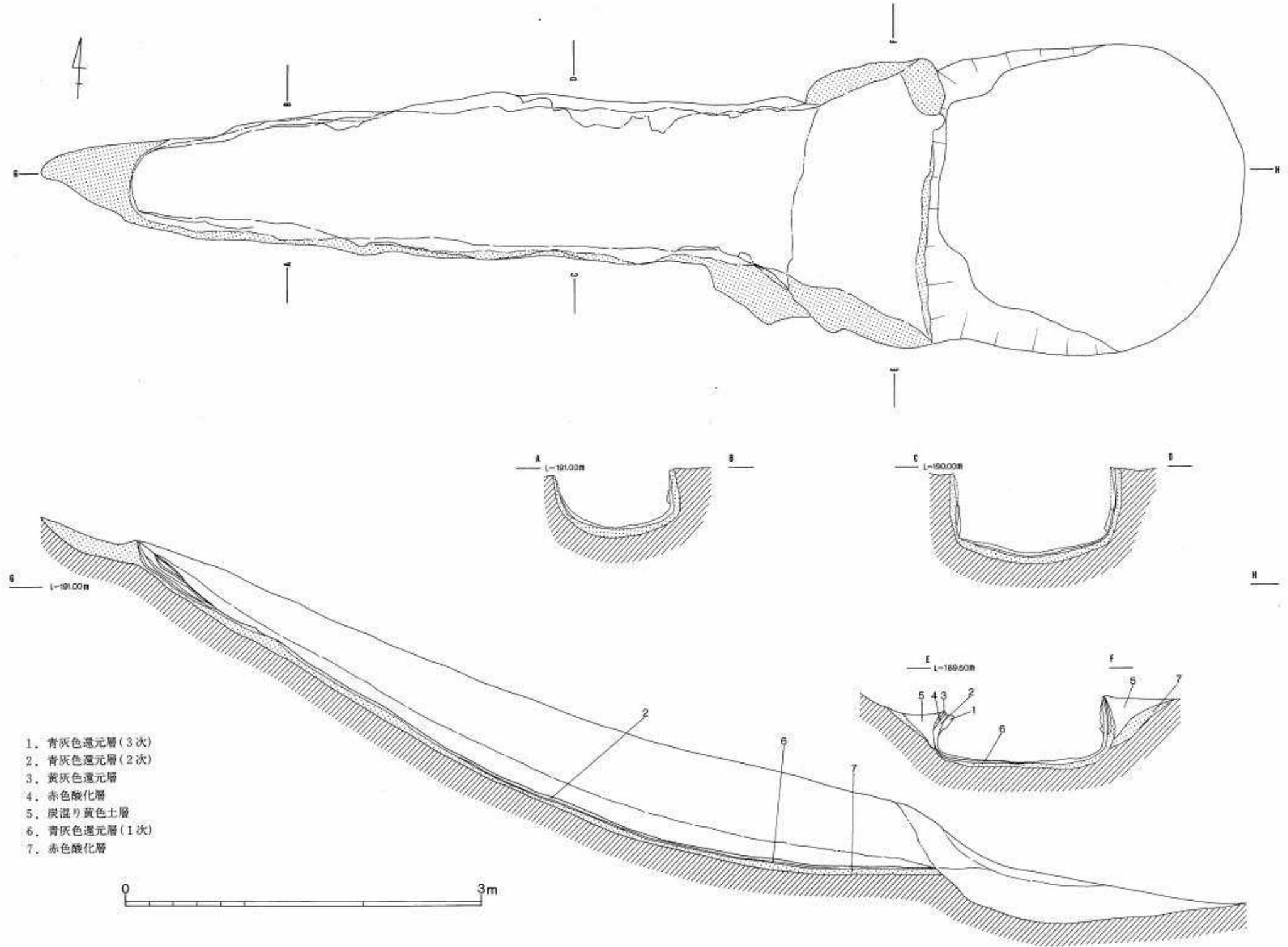
口径15～17cmを測り、全ての口縁端部内面に、1条の沈線か段を持つ。

皿B（43）

口径26.4cm、器高5cmの高台を持つ皿であり、平底の皿同様、口縁端部内面に1条の沈線を施す。高台は断面四角で、ほぼ直立気味で平坦に踏ん張る。

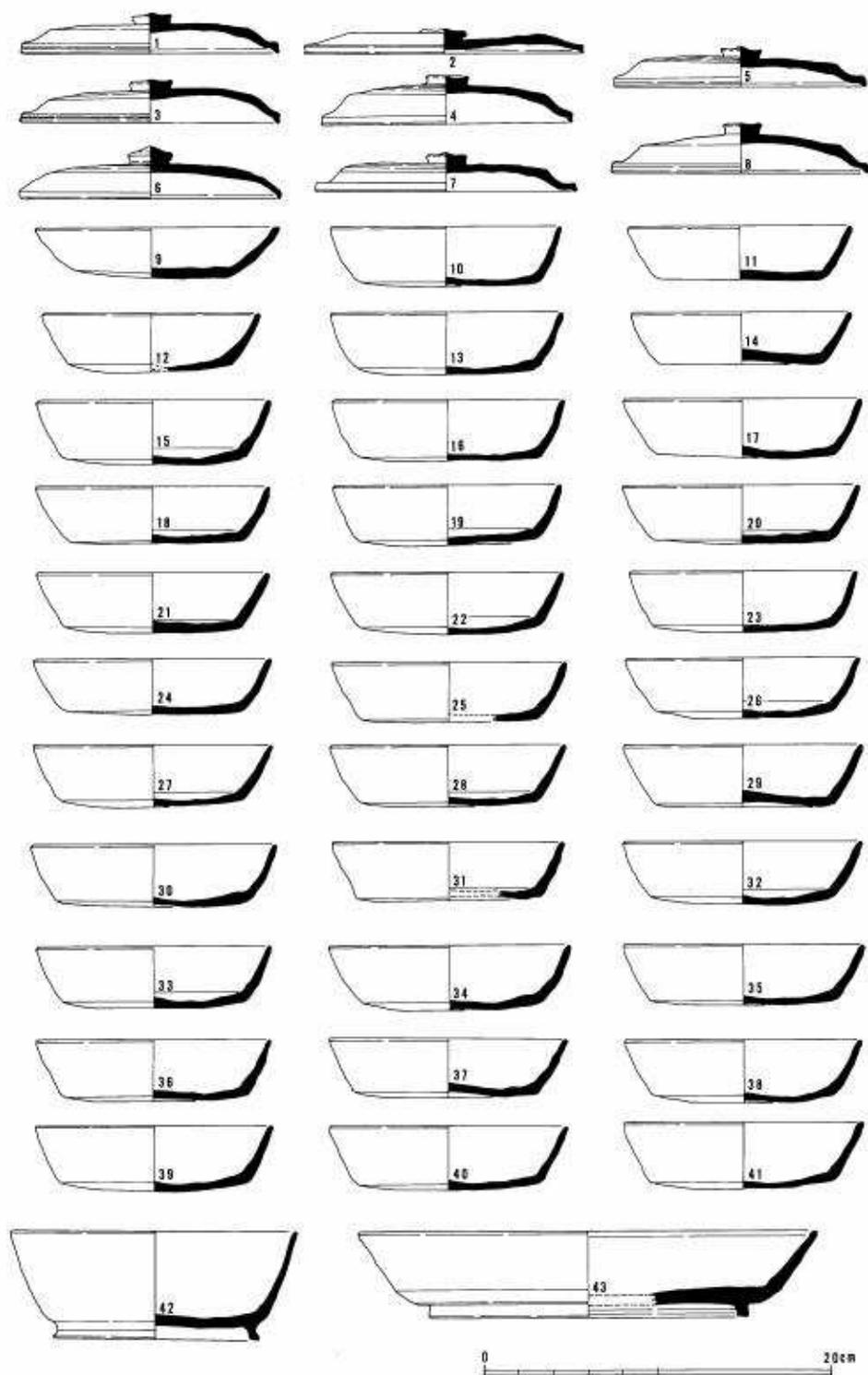
坏B（42・56～86）

地福窯跡



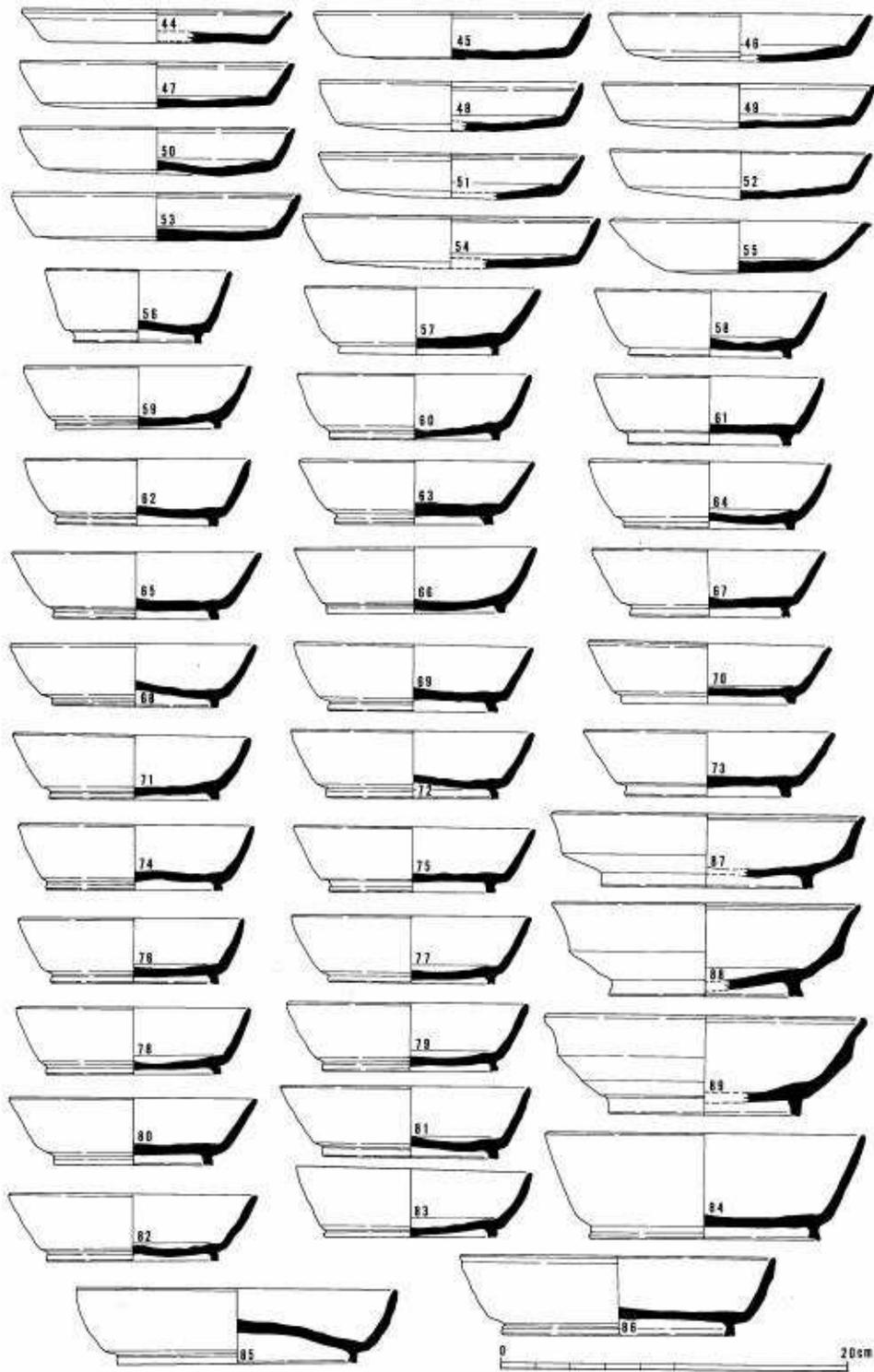
第328図 6号窯窯体実測図

地福窯跡



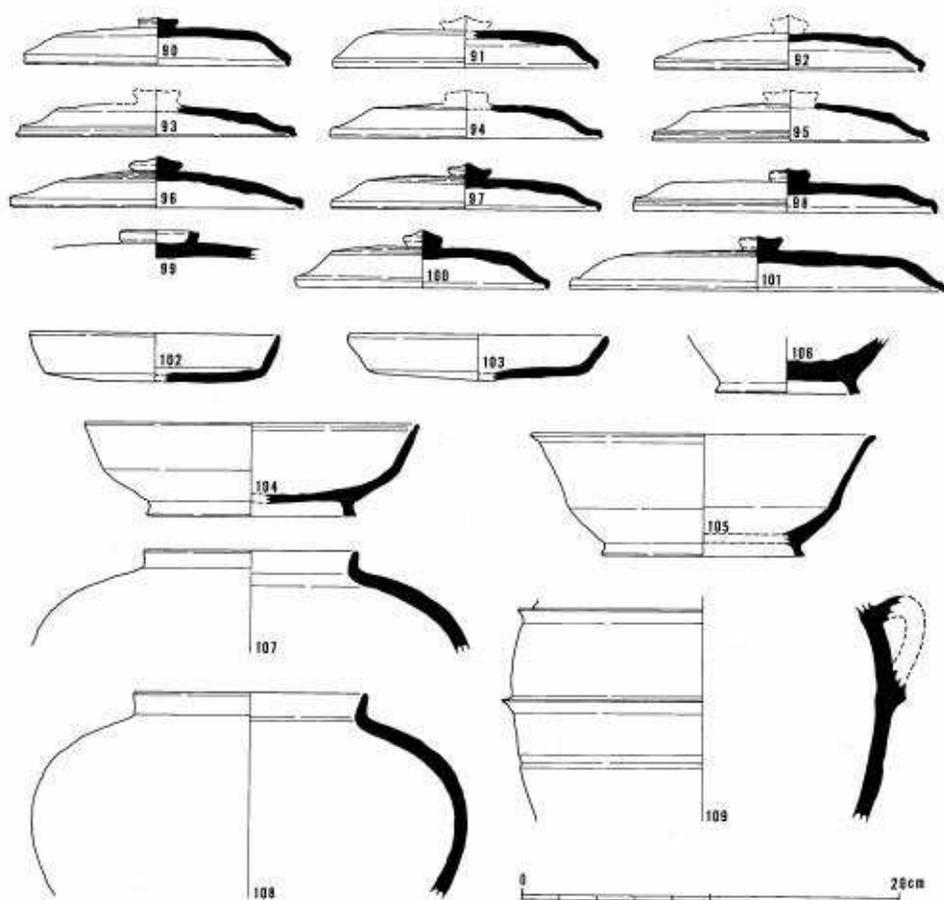
第329図 窯体出土土器(1)

地福窯跡



第330図 窯体出土土器(2)

地福窯跡



第331図 灰原（流土）出土土器

口径14cm前後、器高3～4cmのものがほとんどであり、僅かに口径10.6cmの小型のもの(56)や、口径18cm前後の大形のもの(84～86)が見られる。

体部は底部から丸味を持って立ち上がるタイプと、直線的に立ち上がるものが見られるが、前者の方が多く見られる。

高台は断面が角張るものが多いが、崩れたタイプも見られ、端面も内傾・平坦・外傾様々である。高台貼り付け部付近はナデによる調整が顕著に見られる。

稜椀 (87～89)

口径18cm前後の椀であり、体部中央付近に明瞭な稜を持つ。

高台は大きく外方に踏ん張っており、端面は外傾気味に立つ。

口縁端部内面に1条の沈線を持つ。

灰原（流土）出土土器（第331図90～109）

蓋 (90～101)

中央部の高い扁平な摘みを持つタイプで、口径14cm前後を中心に、口径16cm前後や20cm

のものも見られる。口縁部の形態は、A形態・B形態の両者が見られる。(99)は輪状の摘みを持つものである。

皿 (102・103)

口径13~14cmを測るへら切りの皿であり、口縁端部は丸く仕上げられている。

稜椀 (104・105)

口径18cm前後で、体部中央付近に明瞭な稜を持ち、口縁端部内面に1条の沈線を持つもの(104)と、体部が深く、体部中央やや下位に明瞭な稜線を持ち、器壁が薄くつくられているもの(105)が見られる。(105)の口縁は端部が小さく屈曲して外反する。

壺 (107~109)

(107・108)は球形の体部から、ほぼ垂直かやや外傾気味に立つ短い口縁を持つ壺であり、直口壺の部類に属す。

口径11~12cmで、口縁端部は丸く仕上げられている。

(109)は胴部に数条の断面三角形を呈する突帯を貼り付けた壺で、突帯を挟んで縦長の耳が付く。類例から双耳壺となるであろう。

灰原(湿地)混入土器 (第332図110~136)

調査時点で、所属窯体の不明確であった土器を一括して記述する。

蓋 (110~121)

壺蓋(110)も含め、宝珠形・頭の高い宝珠形・中央の高い扁平な摘みが見られる。

口径は16~18cm前後を中心に、10cmに満たないもの(110)や、12cm前後のもの(111)が見られる。

口縁部の形態は、A・B形態の両方が見られる。

(121)は20cmを越える口径を持つものであり、3号窯の製品とも考えられる。

坏B (123~128)

体部下端付近に高台を貼り付けた坏であり、体部は直線的に外上方に立つ。

口径は15cm前後を測り、高台は低く内傾気味に立つものが多い。

(123)は口径の少し小さなタイプであり、体部の延長上に高台を持つ。高台は縦長で、内傾気味に立つ。5号窯の特徴が見られるものがある。

高坏 (129)

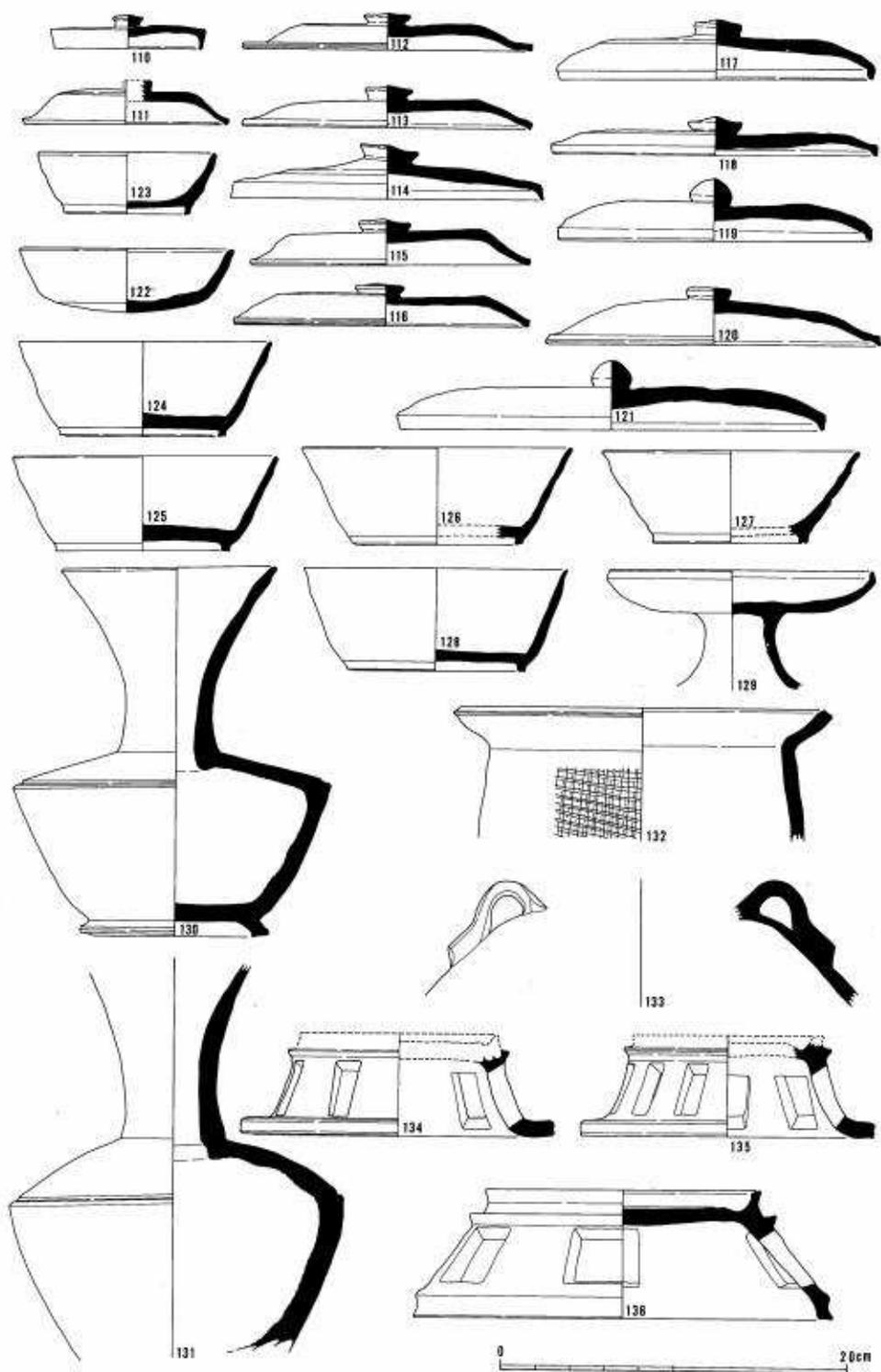
幅の広い脚部に浅い坏部を付けたタイプの高坏で、坏部は緩やかに開き、短い口縁を垂直に立てる。口径15.2cmで、口縁端部は丸く仕上げられている。3号窯の製品であろう。

長頸壺 (130・131)

細長い頸部から大きく開く口縁をもつもので、肩部に1条の沈線が巡る。

肩部は緩やかなもの(130)と、丸味をもつもの(131)があるが、共に体部との境は明

地福窯跡



第332圖 灰原（湿地）混入土器

瞭な稜となる。(130)は外方に大きく踏ん張る高台を持つ。3号窯の製品であろう。

台付円面硯 (134~136)

硯部と台部の境に、1条の突帯を持つもので、台部に長方形の透しを持つもの(134・135)と、台形の透しを持つもの(136)が見られる。(136)の硯部は、海と陸が明確に分かれるものであり、台端部は高台のように、外方に踏ん張る。他は屈曲して水平に延びて終わる。

各窯出土大型壺・甕 (第333~335図1~15)

各窯出土の大型品(壺・甕類)について、ここで一括して記述する。

大型品の焼成は、1・3・5号窯の奇数の窯で操業されていたと思われ、偶数の窯からのものは見られない。各窯別の土器番号を記すと、1号窯(1・3・8・10~12・14)、3号窯(4・6・7・9)、5号窯(5・13)となる。

壺A (2・3・13)

口径15~16cmで、器高42cmのもの(2・3)と、口径11.6cm、器高31cmのもの(13)が見られる。前者は肩の張る卵形を呈し、肩部中程に扁平な耳を持つ。耳は四方に付けられており、中央付近に小さな円孔を1個穿つ。

口縁端部は内傾気味につまみ出されるものと、段状となるものがある。

体部外面は、左下がりの平行タタキ目文で調整されている。底部は丸底である。

後者は、胴部中央付近に最大幅を持つ丸底のものであり、短い口縁が少し外傾して立つ。体部外面は、縦方向の平行タタキ目文で調整が行われている。

甕A (1・5・8・9・11)

ここでは、短い口頸部が大きく外反するものを全て甕Aとして扱う。

短い口縁が大きく外反し、端部を上方に拡張し、つまみ上げた状態のもの(1・5)と、端部外面に面を持つもの(11)が見られる。

口径は、30cm前後から40cmまで見られ、器高は50cm前後から70cm前後まで見られる。

体部は球形に近いもの(5・11)や、卵形に近いもの(1)などが見られる。

体部外面には、左下がりの平行タタキ目文を施した上に、カキ目を施して調整するものを中心に、不定方向の平行タタキ目文のみで調整するもの(5)もある。

体部内面は、同心円文を中心とした青海波文による調整が見られる。

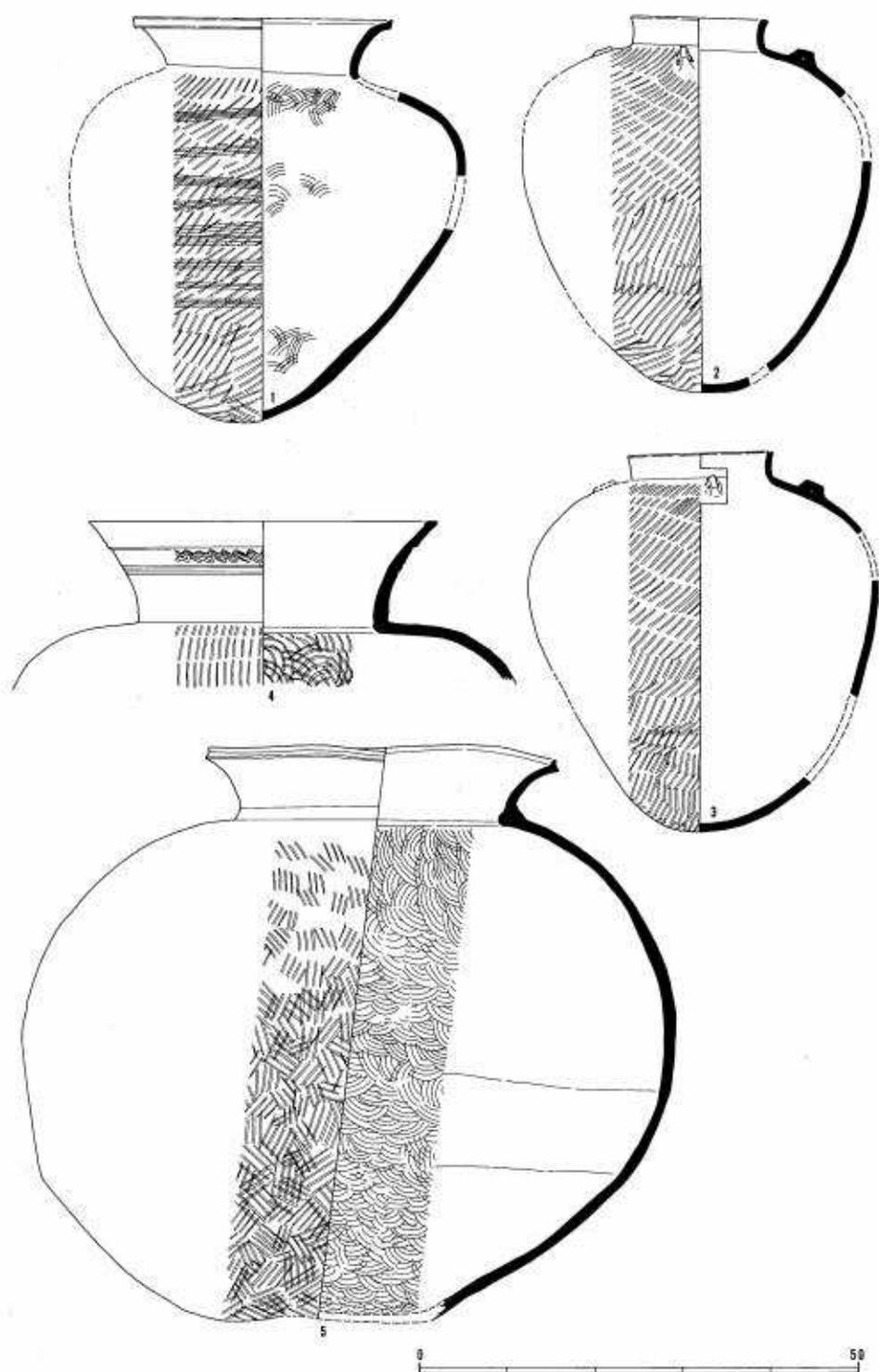
(8・9)は一応、甕の部類で記述する。

(8)は短い口縁が小さく外反するもので、肩部下端が「く」字状に屈曲し、屈曲部分に明瞭な稜を持つ。口縁端部は内側に、角張って突出する。

体部外面は、胴部に平行タタキ目を施した後、頸部以下をカキ目で調整している。

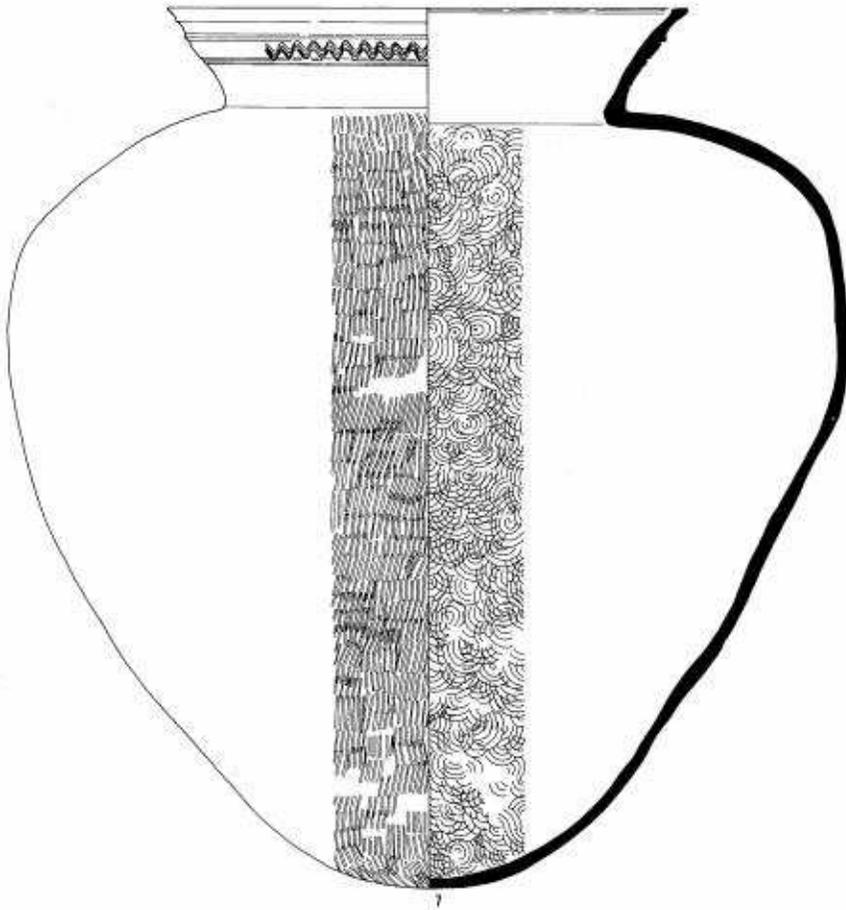
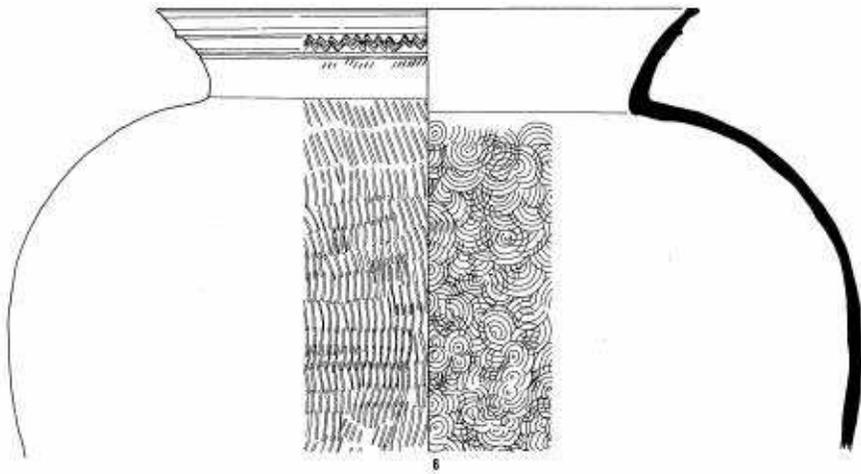
体部内面には、同心円文の調整が見られる。

(9)は、丸い体部に、「く」字状に短く屈曲する口縁を持つ。口縁端部は平坦な面を持



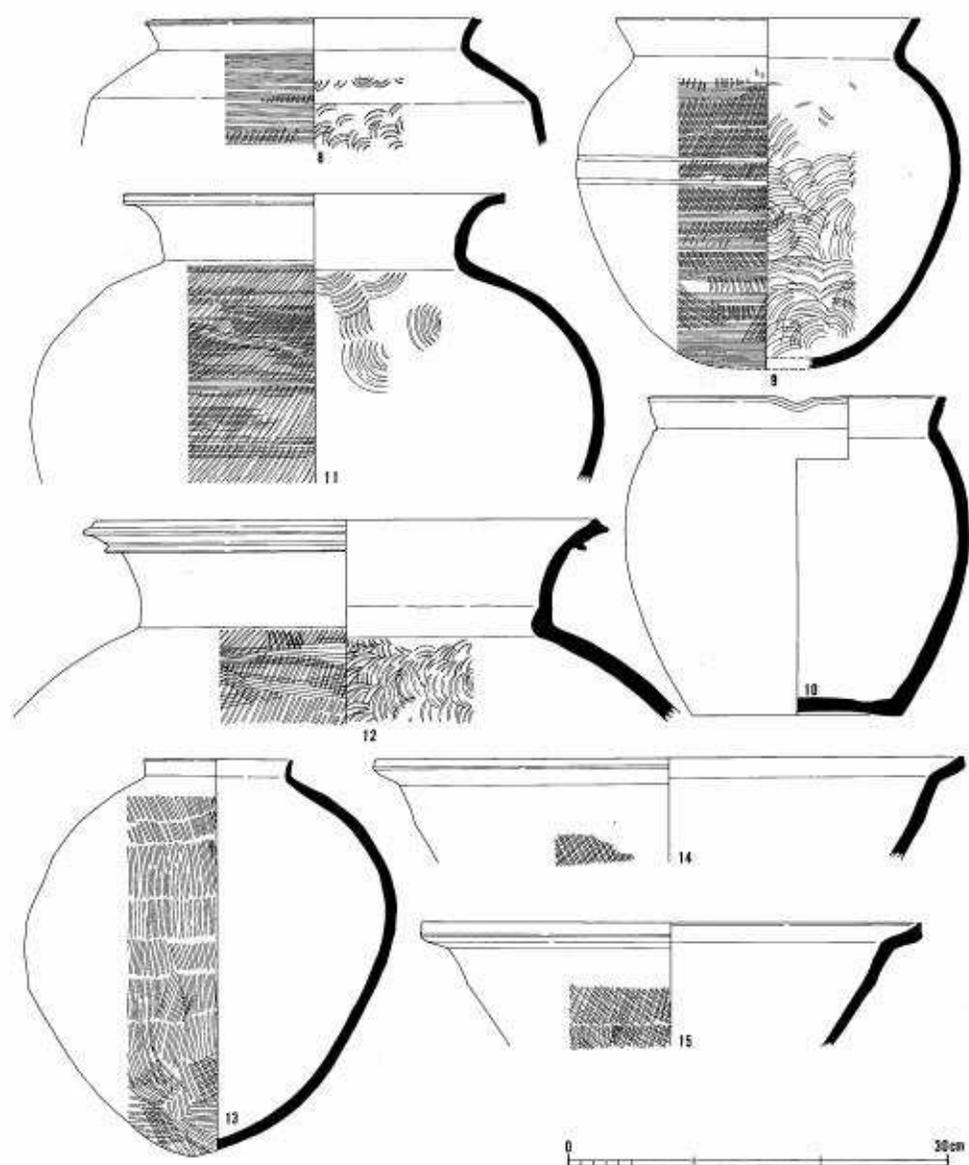
第333図 各窯出土大型土器(1)

地福窯跡



0 50cm

第334図 各窯出土大型土器(2)



第335図 各窯出土大型土器(3)

つ。胴部最大幅付近に、2条の沈線を持つ。

底部は丸底で、体部外面は斜方向の平行タキ目文の後に、カキ目を施して調整をしている。体部内面には青海波文による調整が見られる。

(12)は大きく外反する口縁の端部付近に突帯を持つものであり、口縁の拡張を含めると2条突帯のように見える。体部の調整は、他と同様であり、頸部内面は接合に伴い、内側

に肥厚されている。

甕 (4・6・7)

卵形の体部で丸味を持つ肩から、大きく外反する口縁を持つ。

口縁端部は平坦な面を持つものであり、内側に引っ張られている。

口縁部中央には、2条の突帯を巡らせて文様帯を構成し、4～5条の波状文を施す。

体部外面には、縦あるいは斜方向の平行タタキ目文による調整を、内面には青海波文による調整が見られる。

鉢 (10・14・15)

(10)はあまり胴の張らない体部に、短く屈曲する口縁を持つ。

口縁は片口状になり、底部は平底を呈する。

(14・15)は斜方向に立つ体部に、緩やかに外反する口縁を持つ。口縁端部は上方に拡張されて立つ。

体部外面には格子目状のタタキ目文を施している。

3. 小結

以上、各窯の土器について見てきたが、6基全てが同一の時期のものでなく、同一器種においても、形態・法量などに大小の差異が見られる。

各窯跡の土器は、器種構成の上からは蓋・坏などの小型供膳形態と壺・甕・鉢などの貯蔵形態とからなっているが、数量的には、坏・蓋類の小型供膳形態のものが圧倒的に多く見られる。

各窯間での器種における有無関係を見ると、全ての窯に見られる坏A・坏B・蓋以外では、皿は1・2号窯で1～2点のみ、3号窯はなく、4～6号窯に多く見られる。口径は15～17cmのものばかりである。

稜椀は1・5・6号窯に見られ、口径16cm前後と18cm前後のものが見られる。

鉄鉢は1号窯にて見られるが、底部は尖底となっており、平底のものは見られない。

長頸壺は2・3号窯に見られ、肩部と体部の境付近に、1条の沈線を持つ。

高坏は2・3号窯で見られる。

肩部に耳を持つ壺Aは1号窯でのみ見られ、耳を持たない直口壺は6号窯に見られる。

縦長の耳と突帯を持つ壺は5・6号窯に見られる。

各種小型壺は2・3号窯でのみ見られるものである。

瓶子は1・5号窯で見られ、水瓶は3号窯で見られる。

横瓶は5号窯でのみ見られるものであり、円面硯は2・3号窯でのみ見られる。

各種鉢は1・2・3・5号で見られるが、個々に変化が感じられる。

大型の壺・甕類は1・3・5号窯でのみ焼成されており、6号窯では2～3点の小型壺

類を除いて、小型供膳形態のものばかりの焼成となっている。

次に小型供膳形態のものを窯別に見てみると、坏Aは、1号窯では口径11~12cmと14cm前後のものが、2号窯では口径12~13cm前後のものが、3号窯は口径12cm前後と14cm前後が、5号窯では13~14cmのものが、6号窯では13~14cmのものが見られ、体部下半部の形態では、2・3号窯では丸味を持つタイプが中心で、1号窯では少し丸味が見られ、6号窯では直線的なものが目につくが、少し丸味を持つタイプも見られ、5号窯ではほとんどが直線的なものとなる。

坏Bに関しては、1号窯で口径10~12cm、14~16cm、18cm前後が、2号窯で14cm前後、16cm前後、18cm前後、3号窯で10~11cm、17cm前後、5号窯で13~14cm、20cm前後が、6号窯で14~15cmのものが見られ、体部の変化は坏Aと同様に見られる。

蓋では、1号窯で12~14cm、15~17cm、20cm前後の3種、2号窯で13~14cm、16cm前後、18cm前後の3種、2号窯で11~13cm、14cm前後、17~18cm前後、20cm前後の4種が、5号窯で13~14cm、18cm前後、20cm以上の3種、6号窯で12cm前後、14~16cm、18cm前後、20cm以上の4種が見られる。

蓋口縁の形態からは、2・3号窯ではほとんどがB形態を呈し、1号窯で少しA形態が見られるものの、大部分がB形態であるのに対し、5・6号窯はA形態が大部分となる。

以上の要素を組み合わせると、各窯間の新旧関係を考えると、長頸壺において2・3号窯に形態的な共通性が見られ、坏A・坏B・蓋の形態・法量においても差異は感じられない。

1号と5号窯の関係は、瓶子において共通の器種を持つが、耳を持つ壺を見ると、1号窯では、中央に小さな円孔を穿つ扁平な耳を持つ壺（四耳壺）であるのに対し、5号・6号窯では、紐状の粘土帯で縦長になる耳を、突帯の間に持つ壺（双耳壺）である。

また、大型の甕においても、1号と5号窯の間に調整などに変化が見られ、1号と5・6号窯の間に前後関係が知れる。

5号と6号窯の間では、蓋・坏A・坏Bにおいて形態的に若干の差異が見られ、5号窯に少し新しい形態をみる事ができるもののほとんど同じと考える。

以上から作業の順序を考えると、2・3号窯→1号窯→6・5号窯と想定される。

2号窯と4号窯は窯体の残存が悪く不明確であるが、大型壺・甕の焼成が1・3・5号窯でしか見られない事を考慮して、2窯同時作業を想定すると、2・3号窯→1・4号窯→5・6号窯の順で焼成されたものと考えられる。

これは、6号窯に見られる器種が小型品中心であることでも傍証されている。

次に他の窯跡との比較検討によって、時期決定の材料としたい。

青野ダム予定地内の窯で見ると、川端窯とは、2・3号窯の長頸壺において形態・法量、^口部と体部の境の沈線の存在などの共通点が見い出せ、更に、報告書中に指摘のある口縁

地福窯跡

部における波状文の存在も3号窯の甕に見られる、他の小型供膳形態との共通性、稜碗が見られないなど共通する要素は多い。

しかし、川端窯で見られる小皿(坏A)が見られないことや、小壺の器種に見られる豊富さが、2・3号窯に見られないなども指摘できる。

落合1・2号窯との比較では、2号窯の長頸壺は報告書で指摘のように、後進的要素を持つと思われる。

落合1号窯の瓶子や坏Dにおいて、地福1号窯のものと共通性が見い出せるが、皿に見られる大口径のものや、台付の皿は見られず、同様に5号・6号窯の皿にも見られない。

また落合2号窯に見られる壺D(四耳壺)の耳には、地福5・6号窯に見られるタイプの耳が見られ、壺Eでも地福6号窯に見られるものと共通性が見られる。

ここで青野ダム予定地内の窯跡を順に並べると、川端窯・地福2・3号窯→落合2号窯→落合1号窯・地福1号窯→落合1・2号窯(Ⅱ)→地福5・6号窯の操業となり、平城宮の発掘調査報告書の編年⁸²を参考に、地福5・6号窯の時期を検討すると、平城Vの時期頃か少し後付近と考えられ、8世紀の終わり頃を想定しておきたい。

前述の甕口縁部に見られる波状文は、地福窯においては3号窯にのみ見られ、1号窯には全く見られない事や、落合2号窯においても、量が少なくて不適當であるかも知れないが、見られない事などから、三田地域においては川端窯、地福3号窯の時期(平城Ⅲ)で消滅するものと指摘しておきたい。

注(1) 森内 秀造 「川端窯」 青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1) 1987年 兵庫県教育委員会

(2) 奈良国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告」 VII 奈良国立文化財研究所学報 第26冊
1976年

第7節 ^{ひろた}蛭田遺跡 (AK-128)

1. 立地

蛭田中・近世墓は三田市末東字蛭田に所在し、南東から北西に延びる丘陵の北西端に位置する。昭和58年度、当該地区では、青野ダム建設に伴う県道敷設工事が行われる事となった。

工事に先立って行われた、工事用道路建設中に甕が発見されたとの通報が、北摂整備局を通じて県教委に入った為、県教委ではただちに現地立会を行った。その結果、近世の後半に属すると思われる甕が正位で埋納されており近世墓の可能性が高いと判断された。

これらの結果から、周辺に近世墓もしくは中世墓が複数存在する可能性が高いと判断されたため、県教委では、近世墓を中心に、道路建設に伴って削平を受ける部分約195m²について全面調査を実施した。

2. 調査の概要

立木伐採と表土除去を行った結果、近世墓が1基と、中世墓に伴うと考えられる、須恵器碗及び青磁皿が集中して出土する地点が確認された。以下検出された遺構・遺物についてその概要を述べる。

1. 遺構



第336図 位置図 (1:2000)

姪田遺跡



第337図 地形測量図

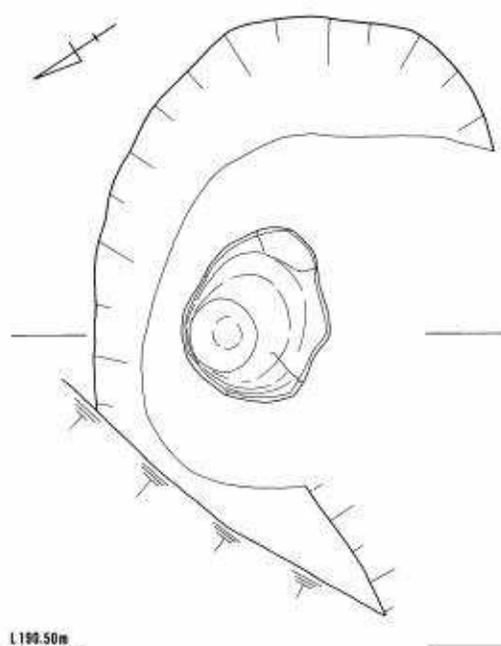
a) 近世墓

工事用道路造成中に削られた崖面で発見されたものである。長軸140cm、短軸80cm、確認面からの深さ約110cmを測る不正楕円形の平面形状を呈する土壌を掘り込み、その中に無軸陶器の甕を正位で埋納している。甕の口縁部から体部の上半にかけては、調査時点では一部は地上に露出しており、又一部は甕内に落下した形で検出されている。これは、斜面に構築された為、後世の埋土の流出により、露出したもので、構築時の掘り込み面は、さらに上層にあったものと考えられる。

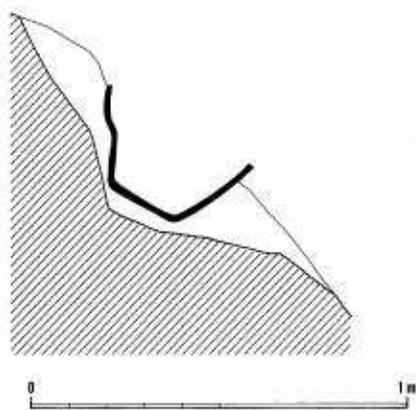
b) 中世墓

近世墓の南側、傾斜面の中央付近で、地山面上に堆積する流土中より、完形の青磁皿1点と、破片の形ではあるが、須恵器碗が6個体分検出された。地形及び立地状況から、中世墓の存在が予想されたため、遺物の出土地点を中心に、遺構の有無を精査したが、土壌等のプランは確認されなかった。しかし、後に詳述するが、青磁皿が完形である事、破片の形で出土した須恵器碗がほぼ完形に復原された事、遺物間に時期差が殆ど認められず、一括で埋納された可能性が高い事などの理由の他、立地条件を考察すると、これらの遺物は、中世墓に副葬されていた物が、埋土の流出により原位置を遊離した形で検出された可能性が高く、周辺に土壌墓もしくは木棺を主体部とする中世墓が存在していた可能性が強い。

但し、遺物がかなり広範囲にちらばっている事、須恵器碗に若干の形態差が認められる事、他に、2個体分の須恵器碗が離れた地点で同じく流土中より検出されている事等から、



L100.50m



第338図 近世墓

少なくとも中世墓は2基以上複数存在していた可能性が強い。

2. 遺物

a) 近世墓出土遺物

近世墓からは、無釉陶器の甕が1点出土している。平底で体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部上面には凹線が3条、体部外面上半には凹線が23条それぞれ施される。体部外面には1対の耳が貼付されている。調整技法は3段積の粘土紐巻き上げ成形の後、体部内面のケズリ、口縁部内外面のロクロナデ調整が施される。さらに体部外面上位には轆轤の回転を利用して23条の凹線が施され、最終的に1対の耳が貼付される。又内外面共化粧土が塗布されている。形態及び調整技法の特徴から18世紀前半の丹波系の製品と考えられる^{文献1}。

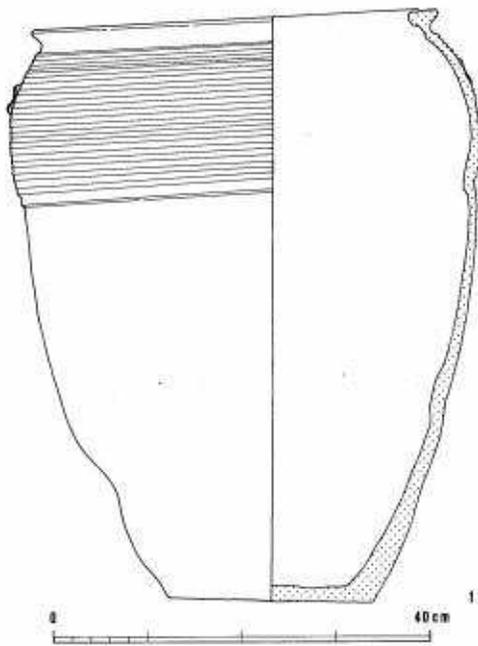
b) 中世墓出土遺物

先に述べた様に、今回の調査では中世墓のプランは確認出来なかったが、1点の青磁皿と6点の須恵器碗がまとまって、又2点の須恵器碗がやや離れて出土している。これらの遺物は遺構

の項で述べたように中世墓に埋納されていた可能性が非常に高いため、ここでは中世墓出土遺物として報告する。

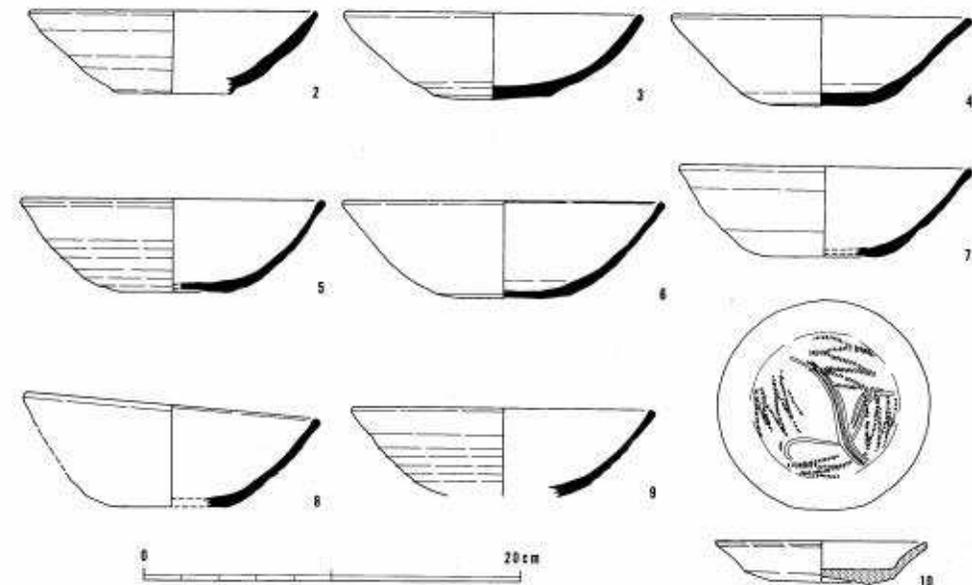
第340図2から9は須恵器碗である。この内、3、4、6～9の6点が青磁皿の周辺で、2、5の2点がやや離れた地点で出土している。須恵器碗の形態はすべて平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。調整技法はロクロナデの後、口縁部内外面にロクロナデが加えられる。3～8の底部のロクロからの切り離し技法は糸切りである。

2は体部外面に不定方向のナデ調整が加えられる。口縁部外面は灰被りで黒色に変色し



第339図 近世墓出土土器

ており、重ね焼の痕跡をとどめている。器形は全体的にやや歪む。3はややあげ底気味の平底で、口縁部外面は灰被りで黒色に変色しており、重ね焼の痕跡をとどめる。器形は全体的にやや歪む。4は内面の底部と体部の界に低い段を有する。口縁部外面は灰被りで黒色に変色し、重ね焼の痕跡を留める。5は比較的厚手に成形される。体部内面、底部内面のナデ調整が加えられる。又体部外面下半にも若干のナデ調整が加えられる。口縁部外面は灰被りで黒色に変色し重ね焼の痕跡を留める。色調は灰白色を呈する。6は体部内面、底部内面のナデ調整が加えられる。口縁部外面は灰被りで黒色に変色し重ね焼の痕跡を留める。色調は灰黒色を呈し、体部外面ではロクロ目が明瞭に観察される。7は比較的薄手に成形されている。体部内面、底部内面のナデ調整が加えられる。色調は暗灰色を呈する。9も比較的薄手に成形される。体部内面・底部内面のナデ調整が加えられる。体部外面上半は灰被りを受け、また体部外面で



第340図 中世墓出土土器

はロクロ目が明瞭に観察される。8は体部内面、底部内面のナデ調整が加えられる。全体に器形の歪みが著しく、色調は暗灰色を呈する。10は青磁皿である。平底でややあげ底気味に成形する。体部は緩やかに立ち上がり、体部下方で大きく屈曲し、やや外反気味に外上方へ延びる。口縁端部は丸味を帯びる。内面の底部と体部の界に段をもち、底部内面には、へら描きの草花文、クシ描きの雷光文がそれぞれ施される。調整技法は、ロクロナデ、外面のロクロケズリ、ロクロナデの後、底部内面のへら描、クシ描きが施され、さらに施釉、底部外面の釉のかき取りが行われる。色調は淡黄緑色を呈し、器面には貫入が認められる。底部外面は露胎で淡褐色に発色する。形態及び調整技法の特徴から横田・森田分類同安窠系青磁皿Ⅰ-Ⅱ類に相当するものと考えられる。^{文献2}

3. 小結

以上見て来たように、蛭田遺跡では、丹波焼の甕を埋置する近世墓と、恐らく、中世墓内に埋納されていたであろうと思われる須恵器碗、青磁皿が検出されている。最後に、これらについて、他地域での類例と比較して若干の検討を加えてみた。

先ず、丹波焼の甕を墓域内に埋納する例としては、県下では加東郡社町上三草近世墓^{文献3}、姫路市姫路城内武家屋敷跡^{文献4}、同市木庭墓地遺跡^{注1}、多紀郡西紀町箱塚古墳^{文献5}、明石市西中ノ町遺跡^{注2}、多紀郡丹南町庄境1号墳^{文献1}などがある。但し、姫路城内武家屋敷跡及び明石市西中ノ町遺跡の例については水琴窟の可能性が強いとの指摘がなされている。そこで、確実に墓域であることが判明し、かつ報告書が刊行されている、上三草近世墓、庄境1号墳のものと比較してみたい。

先ず、甕の埋納形態から見ると、本遺跡のように、甕を正位で埋納するものと、上三草近世墓、庄境1号墳のように、口縁部を下に、底部を上にした伏せた形で埋納するものとに分類できる。このような埋納形態の差異については、現在の所、類例が乏しいため、明確にはなしていない。

次に、埋納された丹波焼甕の所属時期について考えてみたい。庄境1号墳では出土した3点の甕を、TA類・TBⅠ類・TBⅡ類に分類して、時期設定を行っている。今回の調査で出土した資料はこの内のTA類に類似するが、TA類が口縁部上面に沈線を持たないのに対し、本遺跡出土資料は沈線をもつ点で若干の相違が見られる。TA類については17世紀後半以降の時期が考えられており、本資料については、調整技法の変化から考えて、TA類より後出する時期即ち18世紀前半以降の時期を考えたい。

次に中世墓であるが、中世墓自体のプランが検出されていない為、遺構については、ここでは論じられない。中世墓に伴っていたと考えられる青磁皿と8点の須恵器碗については、青磁皿が、横田・森田分類の同安窠系青磁皿Ⅰ-Ⅱ類に相当するものと考えられ、13世紀前半の時期が考えられる。^{文献2}

蛭田遺跡

次に須恵器椀であるが、底部の形態から考えると、底部を若干突出させて平高台状に成形するもの（2・3）と底部の突出が見られず平底のもの（4～9）に分類され、従来の編年観からは前者は後者に比べて一時期遡るものと考えられる。

しかし、ある程度編年観の確立している東播系須恵器の生産地では両者が同時に存在することも指摘されており、したがってここでは、これらの遺物には大まかに12世紀後半から13世紀前半の時期を与えておきたい。^{文献7}

以上をまとめると以下ようになる。

①蛭田遺跡地点では丘陵の東側斜面上で近世墓1基と中世墓に埋納されていたと思われる須恵器椀8点と青磁皿が1点検出されている。

②近世墓は楕円形の平面形状を呈する墓墳内に丹波焼の甕を正位で埋納したものであり、遺物の年代観から埋納時期は18世紀前半以降に求められる。

③中世墓は、プラン自体が検出されなかったため、形状等については不明であるが、遺物の出土状況から考えて、少なくとも2基以上存在していた可能性が高い。又遺物の年代観から埋納時期は13世紀前半に求められる。

【注】

1. 姫路市教育委員会 山本博利、秋枝 芳氏の御教示による。
2. 兵庫県教育委員によって 1986年～1987年に調査が行なわれた。

【引用・参考文献】

1. 岡田章一・渡辺 昇・長谷川真他 1987 『庄境1号墳』（兵庫県文化財調査報告書 第41冊）兵庫県教育委員会
2. 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館論集4』九州歴史資料館
3. 森下大輔・山田将人 1981 『社/上三草近世墓—加東郡社町所在』加東郡教育委員会
4. 岡田章一・長谷川真 1985 『特別史跡姫路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』兵庫県立歴史博物館
5. 岡崎正雄・市橋重喜 1985 『近畿自動車道舞鶴線、箱塚古墳3・4・5』箱塚古墳現地説明会資料 兵庫県教育委員会
6. 福島政文 1987 「近世遺跡検出の伏せ甕遺構について」『芸備』第18集
7. 大村敬通・水口富夫 1983 『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会

第5章 末野地域の調査

第1節 ^{かわばた}川端遺跡 (AN-91)

1. 遺跡の立地

遺跡は青野川と黒川の合流点付近、青野川に向かって開口する支谷に挟まれた台地上、西から東に向かって緩やかに傾斜する平坦面に立地している。台地東端は崖となっており、眼下に青野川の流れを望む。

2. 調査の経緯と経過

この遺跡は昭和49年3月に実施された分布調査にて発見されており、採集品には須恵器・サヌカイト片などが知られていた。立地が青野川と黒川の合流点を望む緩やかな平坦地であることなどからも、遺構の存在は確実と考えられていた。昭和52年度に実施した確認調査の結果、遺構の存在が確認された為、全面調査が実施されることになり、昭和53年度に全面調査を実施した。

なお、確認調査に伴って、台地北端傾斜面で窯跡が発見されている。これが川端^{HH1}窯跡である。

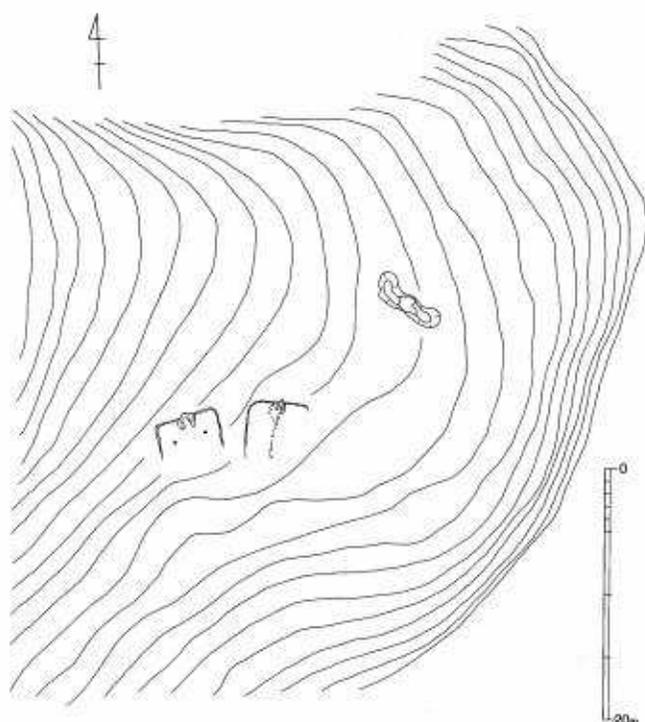
3. 土層



第341図 位置図 (1 : 2000)

川端遺跡

川端遺跡の土層は、堆積が薄いことなどからも単純で、基本的には表土・暗黄褐色土・黄褐色（礫混り）土となっており、最下層の黄褐色（礫混り）土は地山面となっており、場所によっては赤褐色を呈す。平坦面中央西寄りの緩やかな高まりは埋土によるもので、黄褐色土の二次堆積となっている。最近までの土地利用に伴う改変と考えられ、表土下にも攪乱等が見られるものがある。



4. 遺構の状況

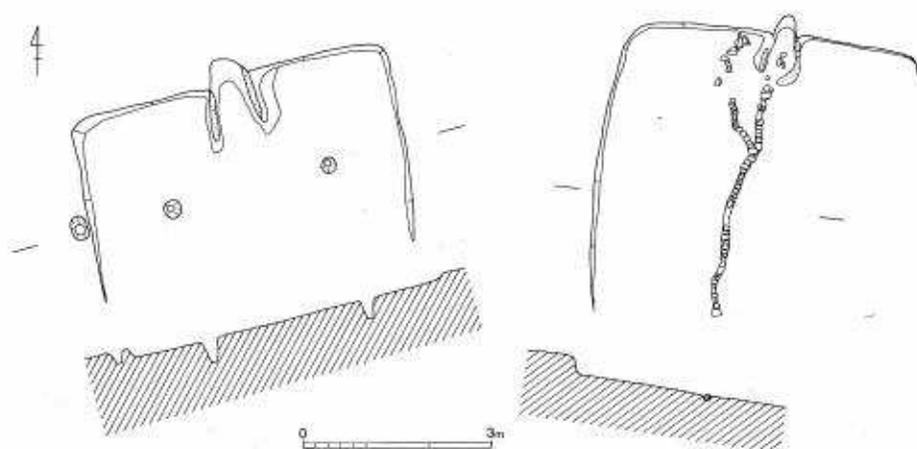
全面調査を開始する以前
第342図 遺構全体図
の予測に反し、遺構の存在は疎らで、台地中央付近にて住居跡・竪穴状遺構・土塼が検出された。

住居跡及び竪穴状遺構

共に黄褐色土を掘込んで造られた遺構であり、共に住居跡と考えられなくはないが、一応ここでは、住居跡と竪穴状遺構とする。

住居跡は一辺約5.1mの隅丸方形の平面形を呈するものと考えられる。遺構としては北半分が残存で、南半分は流失してしまっており、全容は不明瞭である。残存分北側中央には、壁に接して竈が付設されており、全体に赤く焼けた状態となっている。柱穴は北壁に平行した形で、径24cm、深さ40cmのものが2個検出されている。柱穴のあり方から考えると、4本柱の竪穴式住居跡と考えられる。最も残りの良い部分の壁面立ち上がりは28cmを測る。遺物としては、竈付近から土師器の甕を検出している。

竪穴状遺構は住居跡の東に近接して検出されており、方向は少し振るものの、ほぼ同様に北側中央、壁に接して竈を付設している。平面形は一辺4.4mの方形を呈し、地山掘込みによって造られているが、住居跡同様南半分は流失して残存しない。遺構に伴う柱穴は検出されず、竈付近から、恰も排水溝のような状態で、拳大よりやや小さめの河原石列が続く。この石列は、竈の手前1m付近で二手に別れ、竈西側の北壁付近へと続いている。石



第343図 竪穴住居・竪穴状遺構

列は幅20cm前後の溝状掘込みが付随するものであり、北から南への傾斜が窺うことができる。遺構内よりの遺物は見られない。

土壌

検出された土壌は4個であるが、全て不定形な楕円形を呈しており、底部も一定せず、2段・3段と凹凸している。規模としては長さ3～7m前後、幅1～1.5mとなっており、深さも一定しない。掘込み面も表土層を除去した所から見られ、台地上の土砂流出の著しいことなどから、明瞭な時代決定などは困難と思われる。(吉田)

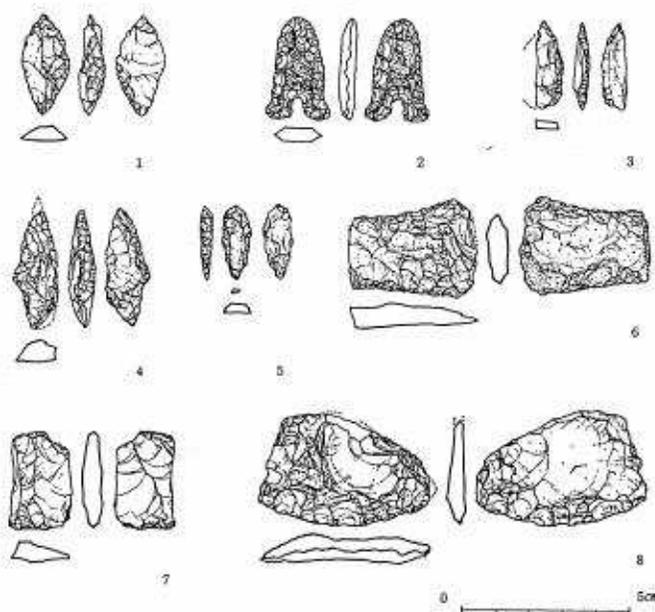
5. 遺物

石器

本遺跡からは多量の石器類が出土しており、石鏃だけでも100点近く確認し、剥片、碎片などをあわせれば数百点を数えるであろう。しかし、残念ながらすべて原位置を遊離したものである。石材は安山岩、チャートがほとんどを占める。図示したもののうち、第344図2を除くすべてが安山岩(3、5～7は讃岐石に酷似)である。

第344図1は、小型の剥片を素材とし、一側縁に刃潰し状の二次加工を施したナイフ形石器に類似する石器である。ただし、二次加工の角度が浅いことより同器種と断定するには躊躇せざるをえない。素材の主要剥離面側にも若干の調整剥離をみる。最大長29.8mm、最大幅14.0mm、最大厚6.9mm。2はチャート製の異形局部磨製石器である。完全な左右対象形を示さず、一側縁は直線的であるが、他の側縁は外彎気味である。先端は丸味を帯びる。表裏両面の中央部を丁寧に研磨しており、研磨部には剥離痕の痕跡を残さない。右面は完全に磨ききっておらず、一部に節理面を残す。全長3.7mm、最大幅19.0mm、最大厚4.6mm。3は折損資料であるが、急角度の縁辺調整を施して鋭利な先端部を^(註2)作出した石器である。急角度の縁辺調整を施した石鏃が奈良県竹之内遺跡にみられ、これも同種のものと考えら

れる。全長25.9cm、
現存幅7.4mm、現存厚
3.5mm、4はやや部厚
いが、3と同じ類か
もしれない。現存長
35.6mm、最大幅13.6
mm、最大厚6.7mm。5
は細かな調整で機能
部を作出した石錐で
ある。3と同様、急
角度の縁辺調整が施
されている。全長
22.2mm、最大幅8.5
mm、最大厚3.4mm。



第344図 出土石器

6、7は楔形石器で、

ともに一部自然面を残している。とくに、6は上面観において縁辺が著しく潰れた状態を呈する。6は最大長29.6mm、最大幅38.5mm、最大厚6.9mm、7は最大長29.2mm、最大幅18.2mm、最大厚6.3mm。8は削器で、刃縁部の状態より外彎刃削器に分類される。現存長33.4mm、現存幅50.5mm、最大厚7.4mm。

今回形態の整った石錐は図示しなかったが、小型の凹基、平基式石錐が大半を占める。なかには長脚錐もみられ、形態的にはほとんど縄文時代の所産と考えられる。(佐藤)

6. 小結

遺跡立地の上からも、長時間継続して営まれたであろう遺跡と考えられ、また、遺物の上からも先土器時代に近い縄文時代の石器を初め、縄文時代後期の埋甕、弥生時代・古墳時代の土器が検出されているが、遺跡の立地している平坦面の土砂流出が著しく、遺構の残存状態は非常に悪く、明確に把握できなかったことが惜しまれる。本来はもっと多くの遺構が存在していたであろう。

遺構として残存していた住居跡・竪穴状遺構は、須恵器を伴わず土師器のみが見られる為、古墳時代前半頃の時期を考えている。(吉田)

註 (1) 森内秀造 「川端窯」 青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1) 1987年 兵庫県教育委員会
(2) 増田一裕氏の御教示による

第2節 ^{みちひがし}道東遺跡 (AN-106)

1. 位置

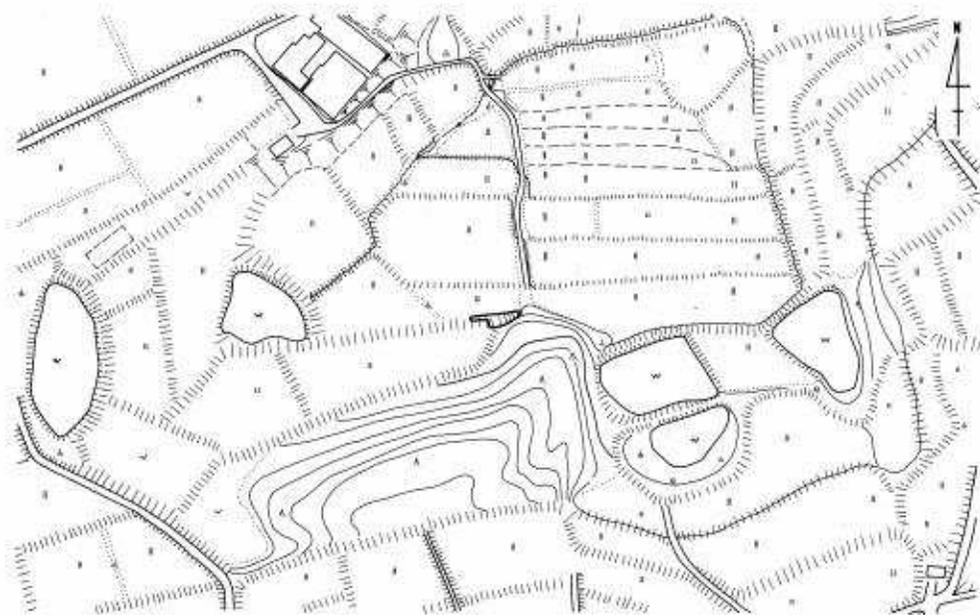
青野川に開析された段丘の先端に位置する遺跡である。遺跡南東部分に黒川と青野川との合流地点があり、その両川に挟まれた部分は比較的安定した段丘であるが、段丘内に幾つかの谷が入り込んでいる。当遺跡もその谷の1つに面した北斜面に立地する。北側には谷を隔てて郡塚窯跡が存在しており、丘陵の南側の高い部分には道東古墳が立地している。

2. 調査結果

支谷の奥部から北側一帯は字郡塚で末野開拓が行われる前は多数の古墳が存在しており、また道東にも古墳が数基存在したと言われていた。それゆえ、道東においても古墳状隆起をはじめとして確認調査を実施した。その結果古墳は1基しか確認出来なかったが、丘陵斜面のAN-106地点では窯壁が出土したことから、郡塚窯跡に対応する位置に窯跡が築かれているものと考え、確認調査を実施した。

窯跡を想定した調査を行ったため、等高線に平行にトレンチを設定して確認したところ、炭・焼土・窯壁などが検出されたので、一部拡張して遺構の検出に努めた。最終的には21㎡の全面調査となり、窯跡は確認出来なかった。炭・焼土の詰まった溝を1本検出しただけで、周囲は全て地山で他の遺構は認められなかった。

溝は幅0.3~0.4mで深さも0.3m前後である。溝は南東方向から北東へ向かって築かれており、地形に斜交している。溝内埋土は炭・焼土を多く含む黒色土であり、溝内から瓦・



第345図 位置図 (1:2000)

陶磁器・窯壁・鉄滓が出土している。出土遺物は新しい時期のものに限られていた。

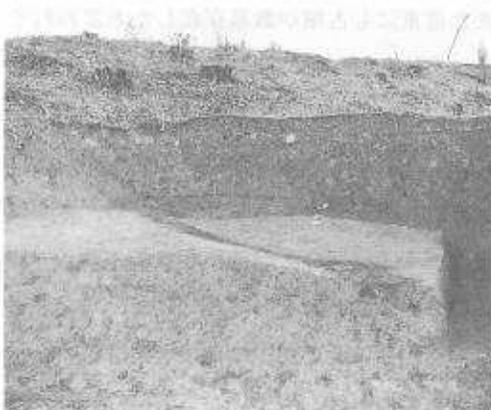
北側の標高の低い田は「屋敷田」と呼ばれ近世の建物の可能性を考えて確認調査を実施したが、全く遺構は検出されなかった。周辺のトレンチでも遺構は認められず、近世末～近代の時期の溝のみが検出された。溝の性格は不明であるが、窯壁・鉄滓が出土しており、生産に関係する遺構であることは確実である。(渡辺)

3. 出土遺物

道東遺跡では東西トレンチを中心に溝及び包含層中より、近世の無釉陶器、施釉陶器、染付青磁、染付磁器、色絵磁器が出土している。1は青磁碗である。口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリ、ロクロナデの後施釉し、色調は暗緑色を呈する。形態、調整技法、色調などから19世紀前半の三田系の製品と考



第346図 遠景

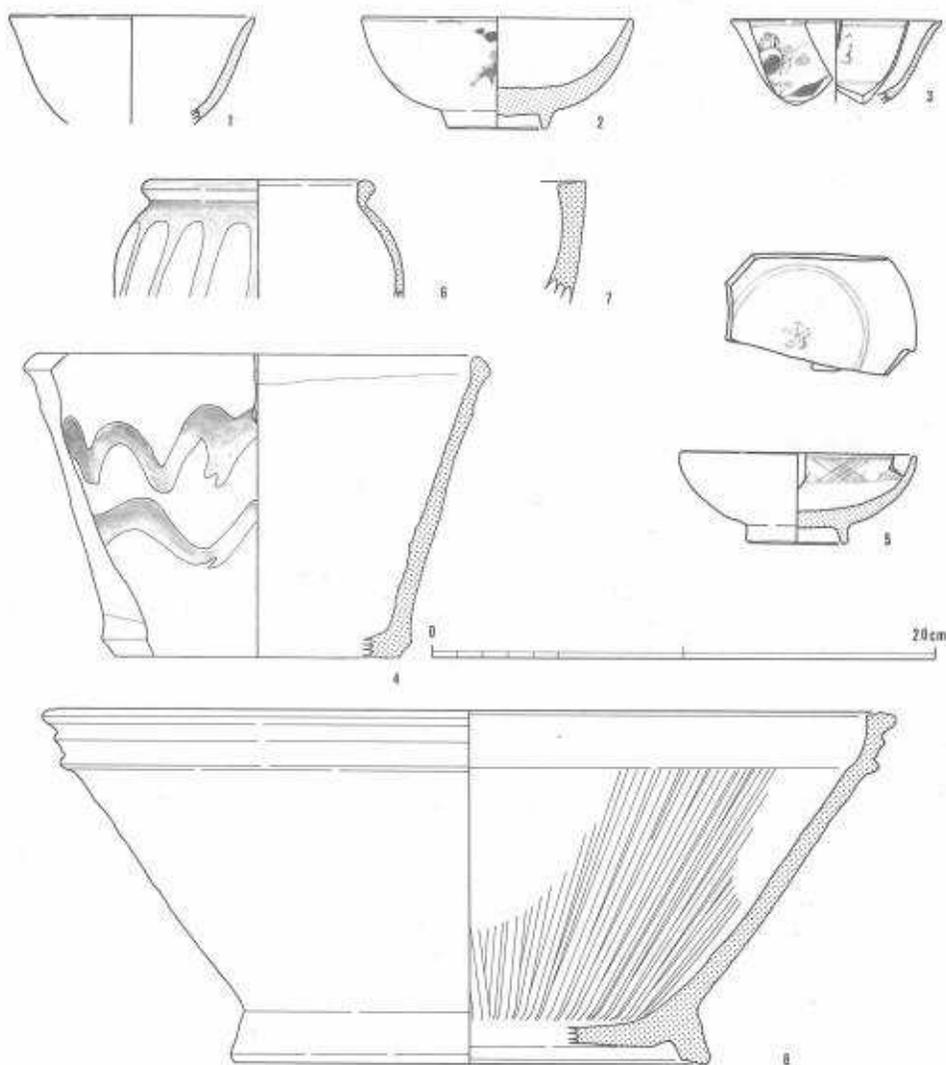


第347図 溝状遺構



第348図 全景

えられる。^{文献1,3} 2は染付磁器碗である。厚手に成形され、体部はやや内彎気味に立ち上がる。外面には発色の悪い呉須で、梅と笹文を描く。底部内面（見込み）の釉は蛇ノ目状にかき取られる。形態及び調整技法の特徴から18世紀代の肥前系染付磁器のくらわんか手に属するものと考えられる。^{文献2} 4は施釉陶器の植木鉢である。平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げる。調整技法は、ロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部外面を強くヨコナデする。体部外面には鉄釉を施し、さらに灰釉で波状文を施文する。内面及び底部外面は露胎で、内面では轆轤目が明瞭に観察される。形態及び調整技法の特徴から近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文献1} 5は染付青磁皿である。全体的に厚手に成形され、高台部は外方にひろく。口縁端部は丸味を帯びる。外面には青磁釉が又、内



第349図 出土土器

面には呉須で、界線、斜格子文、界線が描かれる。底部内面（見込み）にはコンニャク印判で五弁蓮花文が施される。形態及び調整技法の特徴から18世紀前半代の肥前系の製品であると考えられる。^{文献2}6は施釉陶器の壺である。体部は内彎し、口縁部は玉縁状に肥厚する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部を強くヨコナデする。外面には白濁釉を、内面には灰釉をそれぞれ施し、さらに外面に灰釉を飴状に施釉する。形態及び調整技法の特徴から、近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文献1,3}7は無釉陶器の盤である。体部は直立し、口縁端部は水平に成形する。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部内外面をロクロナデ調整する。内外面共若干灰被りを受ける。形態及び調整技法の特徴から丹波系の製品と考えられる。^{文献1,3}8は施釉陶器の播鉢である。幅広で削り出しの浅い高台をもち、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は若干内傾して上下に拡張する。口縁部外面には凹線が2条、内面にはクシ描きの播目が、それぞれ施される。調整技法はロクロナデ、ロクロケズリの後、口縁部及び高台部を強くヨコナデ調整する。さらに口縁部外面には凹線を2条、内面にはクシ描施文を行う。内外面共鉄釉が施釉される。胎土中には砂粒を多く含み、底部外面には砂が附着する。形態及び調整技法の特徴から近代以降の丹波系の製品と考えられる。^{文献1,3}

上記のように、道東遺跡から出土した遺物は、2・5の18世紀代に比定される肥前系染付磁器を除くと、いずれも近世後半から近代以降のものが大部分を占める。（岡田）

〔引用・参考文献〕

1. 岡田章一・長谷川真 1985 「特別史跡姫路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告」 兵庫県立歴史博物館
2. 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化会館
3. 大槻 伸 1981 「丹波とその周辺」『日本やきもの集成7 近畿II』平凡社

第6章 まとめ

第1節 青野ダム遺跡群出土の旧石器について

今回報告された青野ダム建設用地内遺跡群では、溝向、溝ノ尾、乾の各遺跡で、旧石器時代後期のナイフ形石器6点のほか、二次加工のある剥片等が出土している。青野ダム遺跡群では、これまでも川端遺跡でナイフ形石器類似品、北台遺跡で彫器様石器等が指摘されており(兵庫県教育委員会 1979)、旧石器時代遺跡の存在が予測されていた。今回報告された資料は、ごく少数であり、原位置を遊離しているため、相互の関係は全く不明であるが、地域の旧石器資料として、若干の検討をおこなっておきたい。

ナイフ形石器の技術と編年的位置づけ

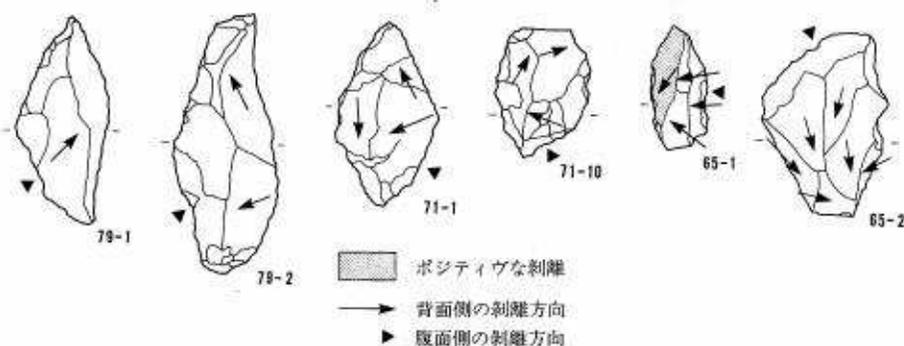
今回報告されたナイフ形石器は、小型のものが主体を占める。6点中4点がサヌカイト、他の2点は鉄石英が用いられている。また、ナイフ形石器6点中、5点が横長剥片を素材とした二側縁加工、1点が縦長剥片を素材とした二側縁加工のものである。

横長剥片を素材としたナイフ形石器には、瀬戸内技法の存在が全く認められない。その背面側の剥離痕を観察するならば、斜交する複数の剥離痕をとどめる例が卓越している。これは、瀬戸内技法のように、剥離作業面を石核の一面に設定し、打点が直線的に石核上を後退する剥離工程とは異なり、打点が横方向に移動する剥離工程の存在を示唆するものであろう。背面側に石核底面をとどめる例が1点あり(65-1)、剥片素材の石核が存在したものと考えられるが、これについても、背面側には2枚の斜交する剥離痕が観察される。

剥片の背面側に斜交する剥離痕をとどめるこうした横長剥片剥離技術は、従来いわゆる宮田山型ナイフ形石器の技術基盤と考えられた、櫃石技法の一特徴でもある。しかしながら、その剥片生産の実体、石器群に占める比率等は必ずしも明らかではない。また、ひとつの確立された技法として、時期を限定しうるものは否か、なお検討の余地を残している。従って、あえてその名称を用いるべきではないだろう。

縦長剥片を素材とする1点は、乾遺跡より出土している。背面側には、腹面と同一方向からの剥離痕5枚が認められる。打面は平坦打面であるが、これとほぼ平行する平坦面が背面末端に認められることから、石核の素材が板状剥片であった可能性があろう。

三田盆地地域では、旧石器時代後期のまとまった遺物を出土した遺跡として、溝口遺跡(山下秀樹編 1986)が知られている。溝口遺跡では、鉄石英を主体的に用いた石器群が検出されており、縦長剥片を素材とするナイフ形石器4点が出土している。剥片生産では、長幅比1.5:1~1:1.5の不定形剥片の生産が主体を占めるが、「櫃石島技法」の石核を含



第350図 ナイフ形石器背面の剥離方向

むとされている。溝口遺跡出土の石器群は、その技術的特徴、石器組成から、中国山地地域の石器群の系譜の中で理解され、始良Tn火山灰降灰直前に位置づけられている。

青野ダム遺跡群出土のナイフ形石器は、その資料的限界性から、溝口遺跡出土の石器群と直接的に比較することはできない。しかしナイフ形石器の技術基盤が横長剥片生産にあるという点で、溝口遺跡とは異なる様相をもつものと言えよう。共通する要素として見られる「櫃石島技法」も、既述のように時期を限定することは困難である。青野ダム遺跡群出土のナイフ形石器については、現在のところ、溝口遺跡の石器群を遡る位置づけをするに足る要素を求めることは困難であると言えよう。青野ダム遺跡群出土のナイフ形石器における横長剥片の盛用は、時期的な様相とともに、溝口遺跡とは異なる石器文化の伝統を有する集団によって残された可能性を示すものであろう。サヌカイト製石器に限るならば、いずれも肉眼的には二上山産と考えられることから、瀬戸内地域との密接な関係が予想される。

遺跡の立地と性格

青野ダム遺跡群内における旧石器出土遺跡は、いずれも小規模な段丘、丘陵上の平坦面に立地している。各地点における出土遺物は、いずれも数点であり、本来の包含層が破壊されていることを考慮しても、極めて少なく、各地点に長期にわたる生活拠点が存在したとは考え難い。各地点で、石器製作にかかる石核・剥片等の出土を見ない点も、これを傍証するものであろう。このような遺跡のあり方は、むしろごく短期間に営まれた、キャンプ地であったと考えられ、その機能として狩猟・採集等が想定しうる。旧石器の小規模出土地は、近畿地方にも類例が多いが、立地条件、出土遺物の内容は多様であり、必ずしも一律に理解しうるものではない。大阪府高槻市周辺の遺跡群において、こうした遺跡の分布状況から生活領域の存在が指摘されているが(大船孝弘 1976)、個々の遺跡の機能的側面に及ぶ検討がなされた例はなく、今後の課題といえよう。旧石器時代の狩猟対象動物は、ナウマンゾウ、オオツノシカといった大型獣がクローズアップされる傾向にあるが、青野

ダム遺跡群に見られるような、山麓地帯の小遺跡からは、そうした大型獣の姿は浮上してこないのではないだろうか。今後、より良好な資料の蓄積を待って、小規模出土地点がもつ機能の分析をおこなわねばならないだろう。また、ナイフ形石器の形態、石器組成等の視点集落的な遺跡との対比検討も遺跡の機能を抽出する上で、欠かせない要素である。

三田盆地、北摂地域の旧石器研究はまだ緒についたばかりである。鉄石英の多用という特徴を有するこの地域は、また、丹波地域の板井・寺ヶ谷遺跡(山口卓也 1985)、春日・七日市遺跡(藤田 淳 1985)等で検出されている。サヌカイト製石器群と瀬戸内地域をつなぐ位置にもあり、今後の発掘調査に期待される所は極めて大きいといえよう。

引用文献

- 大船孝弘 1976 「三島地方の旧石器時代について」(『津之江南遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会)
- 兵庫県教育委員会 1979 「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)」
- 藤田 淳 1985 「春日・七日市遺跡」(『シンポジウム旧石器時代の人間と自然』兵庫県教育委員会)
- 山口卓也 1985 「板井・寺ヶ谷遺跡発掘調査の概要」(『シンポジウム旧石器時代の人間と自然』兵庫県教育委員会)
- 山下秀樹編 1986 「兵庫県三田市 溝口遺跡—北摂工業地区—」財団法人古代学協会

第2節 青野ダム周辺における須恵器生産について

1. はじめに

昭和52年来通算10年にわたって発掘調査の実施された青野ダム予定地は、諸々の遺跡が判明し、調査が実施されたのであるが、ここは、全国に数百カ所程知られる「³⁵末」の地であり、古来より窯業の行われた土地の総称として、現代に地名を留めている場所でもある。

今回このような場所で調査の機会を得たことにより、三田盆地周辺部を含めた窯業跡のあり方について、一度考えて見ることにする。

まず、三田盆地と窯業の係わりを考えると、中世以降の日本六古窯の窯業地、今田町立杭に隣接する地理的位置にあり、近世～現代の焼き物である「志手原窯」・「三田青磁窯」を市域に持つなど、窯業に適した良質の粘土・立地等の条件は歴史的にも証明されている。

このような窯業の地である、三田盆地の考古学的調査及び研究について考えると、昭和52年までは分布調査のみの時代であり、「特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」作成、あるいは、大規模開発事業で丘陵部を街に変える、北摂ニュータウン建設に伴う分布調査などが実施され、窯跡の存在・指摘が見られたが、遺跡の性格上、群集する傾向は判るものの、樹木の繁茂などの障害により、実体は不明瞭な状態のままであった。

昭和52年以降、青野ダム建設予定地内の発掘調査が実施されるにあたり、前述の「末」の地名地を含むことなどから、古代窯業地に比定される地域として、多くの窯跡の存在が予測され、窯跡の発見に努める傍ら、窯跡の発掘調査が実施されたのである。

調査は断続的に8年間行われ、貝谷窯 (AK-86) をはじめ、乾窯 (AW-67) など7地点14基の調査が実施され、古墳時代以降平安時代末期までの、窯業生産の一端が知られるようになった。

また、昭和52年には古丹波の調査も実施された。三本峠北窯跡³⁶¹の調査であり、県道の改良工事に伴い、物原の調査が実施され、新しい事実が知られるようになった。

その後、大規模開発が山・丘陵部の開発に伴う調査の契機を作っていたのとは別に、圃場整備事業と言う、平野部の方面からの開発に伴う原因で、昭和53年西相野窯が発見された。

この窯は周知の遺跡ではなく、工事に伴う重機掘削中に発見され、灰原部分から大量の須恵器が検出された。そして、事後調査として土器の採集が実施された。

この地域は丘陵地域を中心に、立杭地区と目と鼻の先の位置にあり、窯跡の所在が知られていた地域でもあり、昭和60年度以降近畿自動車道舞鶴線の通過に伴い、県教委の手で古城古窯跡群³⁶²他で2年間に10基の窯跡の調査が実施された。

更に昭和62年、この窯跡群の山を隔てた西の大川瀬地区においても、民間開発事業に伴

う調査が三田市教委の手により実施されている。^{註3}

昭和63年に入り、第2次北摂ニュータウン発掘調査期を迎え、分布調査報告で窯跡の存在が想定されていたものが現実のものとなった。平方窯跡群であり、弥生時代・古墳時代の集落と複合しており、3基の窯跡が調査されている。^{註4}

2. 窯跡の分布

窯跡の分布は、主に武庫川に注ぐ小河川の流域に見られ、東部・中部・西部の3地区に集中する傾向にある。

中部は更に、武庫川の左岸に位置する末古窯跡群と、右岸の平方窯跡群に区分される。

東部は、木器を中心とした地区に小さく固まり、西部は相野川を挟んだ左右両岸に分布が見られるが、右岸の分布は広範囲に広がっており、窯数は大川瀬地域を含めると、かなりのものになると思われる。

時期的な窯跡の分布を見てみると、現在この地域で最も古いのは、末古窯跡群である。武庫川左岸の支流、青野川の流域に形成され、末東・末西・末野を中心に、現在判っているだけで7カ所14基が知られているが、総数は更に増加する傾向にある。

時期的には5世紀末から12世紀末頃までのものが断続的に見られる。

初期の窯は比較的武庫川の合流点に近く位置し、その後は周辺部へ移り、最盛期となる8世紀中頃から後半には、天満神社の周辺山麓に集中する傾向にある。

そして、衰退期（平安時代）にはまた周辺部へ移り、1基単独の操業形態をとって終焉を迎えると想定される。

古墳時代後半期の窯は、武庫川右岸丘陵上の平方窯跡が知られており、現在北摂ニュータウン建設予定地内に位置し、3基が調査されているが、本来は周辺部にも窯が存在していたと考えられる。

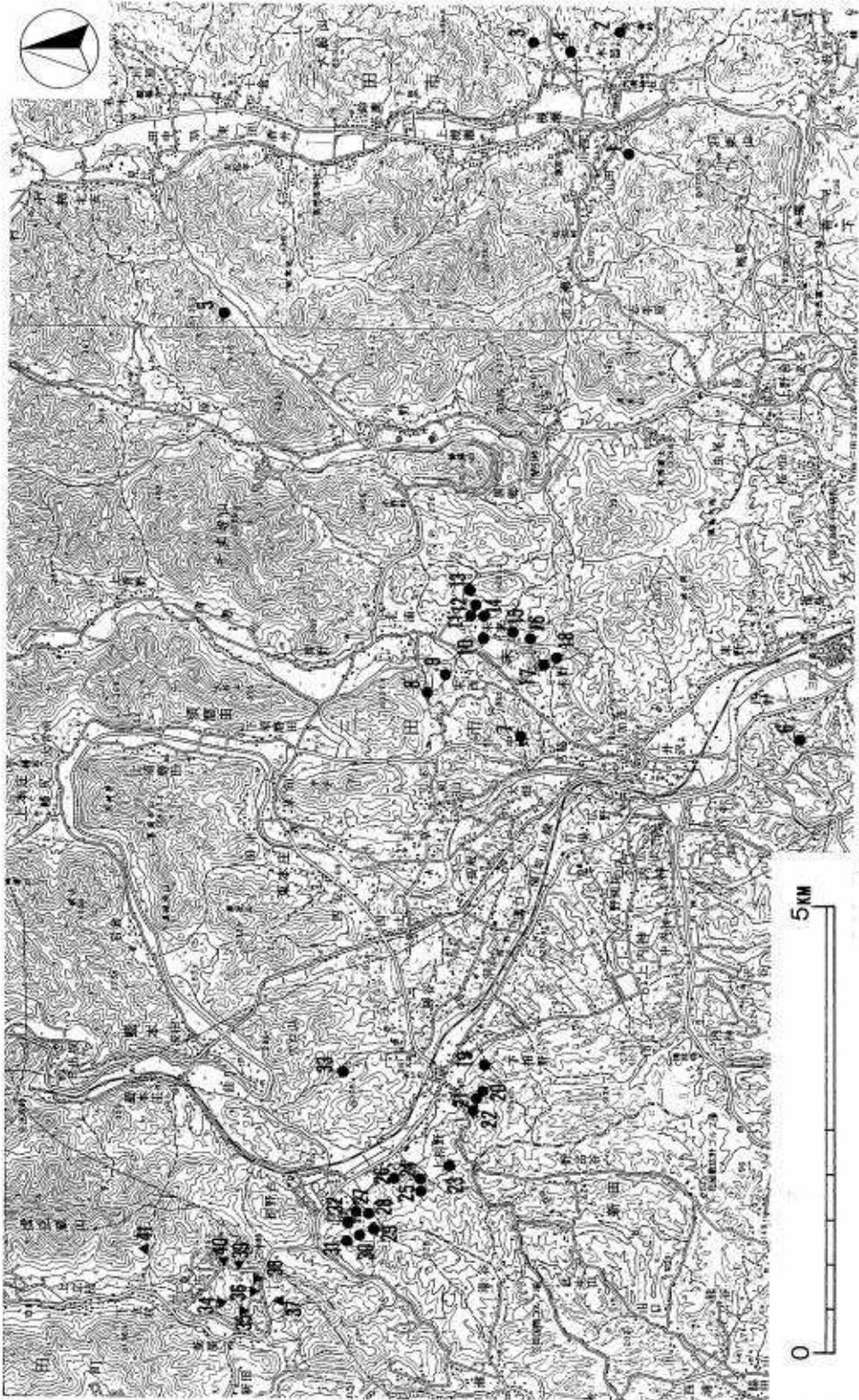
奈良時代の窯は、前述の末古窯跡群の最盛期にあたり、8世紀後半まで窯跡が知られている。

東部の木器窯跡群は9世紀前半頃に集中し、羽束川流域を中心に数基の規模で知られる。

西部の相野窯跡群は10～11世紀にかけての窯跡群で、椀・坏類を中心に中世窯業へと向かう色彩の強い窯業地であり、短期・多数の窯のあり方をしている。

中世に入ってから窯は、中部と東部の中間地、山間部の小河川栗田川の流域に見られ、耕地の見られない奥まった山中に、今までと違ったあり方で存在する。数基が集まって存在するようであり、焼成器種は椀・鉢・小皿と中世的あり方を示している。

これを以って還元焼成の土器は終わりを告げ、新しい酸化焼成の陶器が出現する。丹波立杭焼であり、いわゆる「日本六古窯」の1つとして続いているものである。



第351図 青野ダム周辺黨跡分布図

3. 窯跡および土器

郡塚1号窯

(第352図)

末古窯跡群に属し、川端窯跡同様最も南の武庫川との合流点近くに位置する。

窯跡は青野川を主水系に開析する幾筋かの小支谷のうち、黒川と青野川の合流点から上流へ約110mの右岸に開析する、小支谷の南斜面に立地しており、土取り作業等によって破壊が進み、窯体は僅かしか残っていないかった。

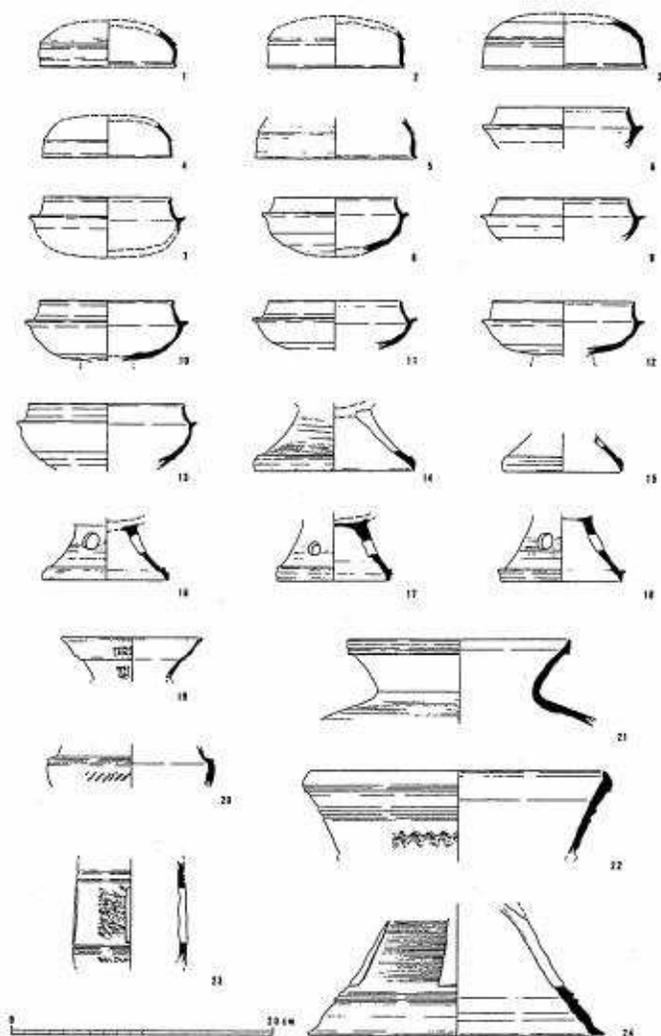
1号窯からは、坏・有蓋高坏・埴・甕・甗・器台が出土しており、報告書によると、新・古2型式が見られ、埴・甕・甗(第352図19~21)に古型式の要素が見られるらしい。

時期的にはI期の窯跡であり、5世紀代に入る。

なお、隣接する2号窯は、奈良時代前半のものであり、残存状態はよくない。

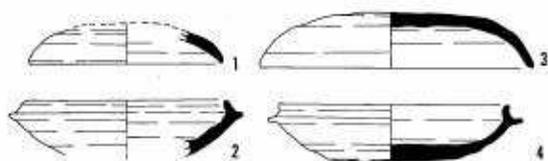
平方窯(第353図)

北摂ニュータウン建設予定地内に所在する窯跡である。



第352図 郡塚1号窯出土土器

(青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)より引用)



第353図 平方1・2号窯出土土器 (S=1:4)

まとめ

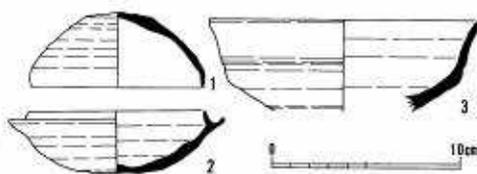
武庫川の右岸、西山古墳群と奈良山古墳群^{Ⅱ5}に挟まれた谷の最深部にあり、平野部との比高差60mの南向き斜面に位置する。

窯跡は並んで3基検出されており、弥生・古墳期の集落跡と複合している。

3基の内1基は、構造途中の焼成段階で終わっており、貴重な資料を提供している。

他の2基は、土器の焼成が見られ、器種として坏身・蓋・甕が検出されている。

時期的には、坏身・蓋から6世紀後半頃と考えられ、2号→1号窯の変遷のようである。



第354図 東山窯出土土器

東山窯 (第354図)

武庫川左岸、平野部に向かって大きく開析された谷奥の南斜面で、以前から陶棺や大型甕などの出土が伝えられる地域^{Ⅱ7}に位置する。

窯跡は池の下、農道のすぐ北側に灰原が見られ、土器は全て採集品であるが、窯体は斜面上方に完存しているものと思われる。

土器は坏・蓋を中心に高坏・甕なども僅かに見られる。坏身(2)は口径9.2cm、高坏(3)は無蓋高坏で、口径14cmの体部中央屈曲部上方に、1条の沈線を持つ。

採集品の坏には逆転したものは見られず、古墳時代以来伝統のタイプばかりであり、口径の大きさなどから、時期としては7世紀前半(準上がり窯の第3段階)^{Ⅱ8}頃と考える。

西末2号窯 (第355図)

末古窯跡群に属する窯で、最も北に位置する。

窯跡は青野川の右岸に開析された谷の南、通称「井桶山」^{Ⅱ9}の山腹から山麓にかけての北斜面に立地する。

窯体部分は中央部が凹み、側壁・床面の窯壁が地表に露呈した状態で見られ、焚口付近も明瞭に知られる。

灰原は山麓部分に拡がると思定されるが、表面観察では判らない。

採集資料は窯体付近のもので、坏・蓋・高坏・宝珠形の坏蓋・内面に返りを持つ蓋・盤などが見られる。(2)は口径8.4cm、器高2.8cm、(5)は口径23.6cm、復元高5cmを測り、



第355図 西末2号窯出土土器

体部中央付近まで削りが施される。

時期的には、7世紀中頃から後半と考える。

末古窯跡群（郡塚2号窯・川端窯・落合窯・乾窯・地福窯・みどろ池窯）

末古窯跡群の最盛期に属する各窯跡であり、青野ダム建設に伴って調査の実施されたものである。

共に坏A・坏B・蓋・皿・椀などの供膳形態の小型品を中心に、壺・甕類の貯蔵形態の土器も焼成されている。中でも碗は、乾窯・地福窯で見られるものであり、窯の性格を知る上で貴重である。

土器については、青野ダム発掘調査報告書（1・2）を参照されたいが、時期的には平城宮址編年による、「平城II～III」の頃から操業され、「平城V」の少し後頃まで継続されたものと考えている。

木器窯跡群

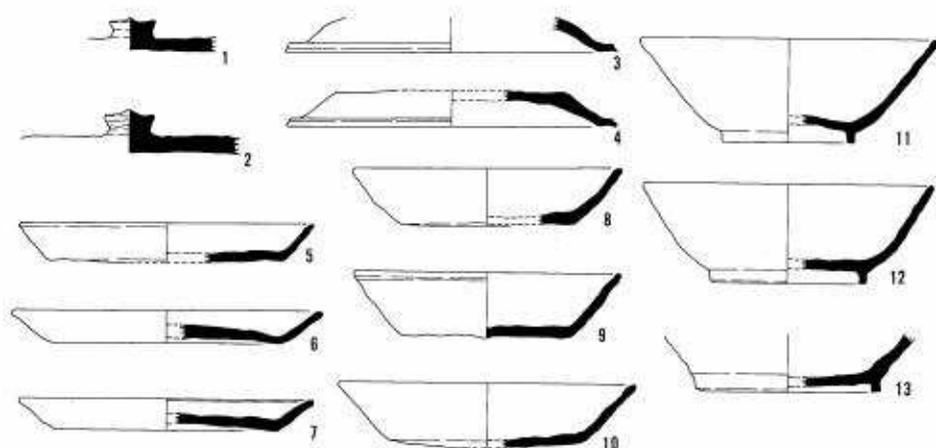
木器窯跡群は武庫川の支流である羽東川の流域、少し平野部の拓ける下榎瀬・木器山田に所在する。

窯跡は山麓の、開析された支谷の斜面に立地しており、現在4基が知られている。その所在については、地元では古くから知られていたものである。

木器1号窯（第356図）

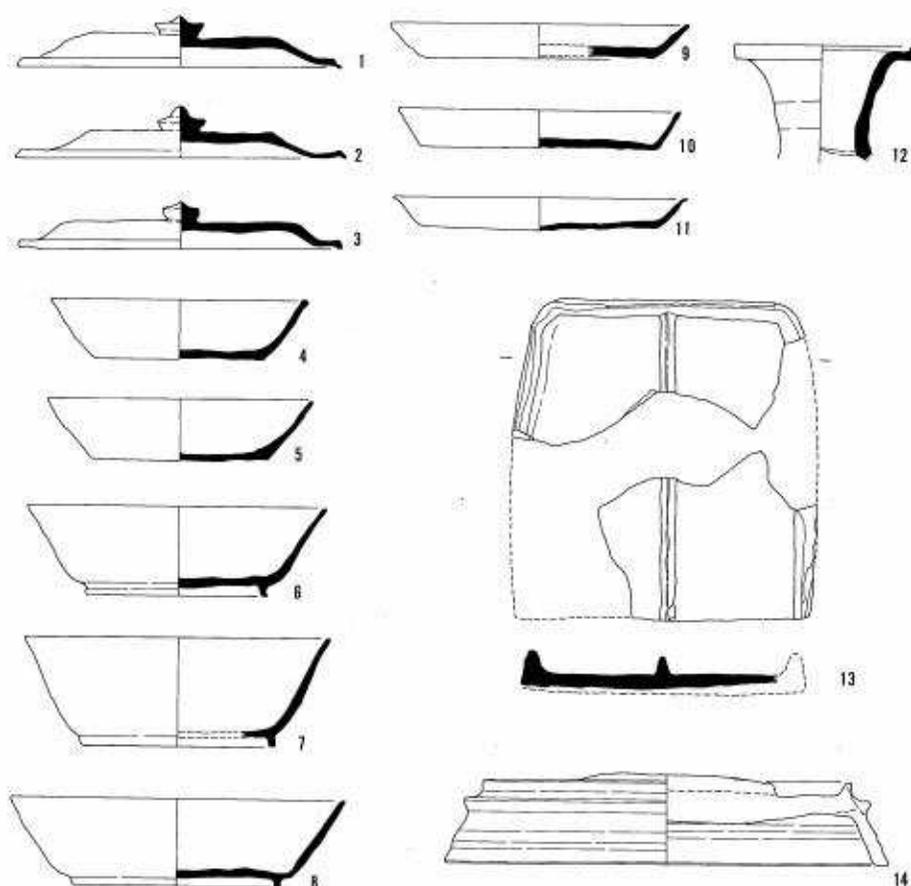
1号窯は羽東山（標高524m）北麓の一支谷に位置し、山道によって削平された崖面に灰原が露出している。資料は灰原からの採集品であり、窯体は良好な状態で埋没しているものと思われる。

土器としては、坏A・椀B・蓋・皿を中心に、僅かに甕類が見られる。



第356図 木器1号窯出土土器（S = 1 : 4）

まとめ



第357図 木器2号窯出土土器 (S=1:4)

蓋(1~4)は擬宝珠形の摘みを持ち、口縁端部はA形態を呈する。天井部はほぼ水平となっている。

坏A(8~10)は、口径14~16cmで体部が比較的直線風に延びるものであり、底部は粘土紐の痕が明瞭で、中にはうず巻き状に割れているものも見られる。図示以外に、12cm前後の口径を持つものも見られる。

皿(5~7)は、口径15~16cmのものを中心に見られ、口縁端部内面に沈線を持つものも見られる。

碗B(11~13)は、体部下端の延長上に高台を持ち、体部が直線的に斜め上方に延びるものであり、高台は長方形の整った形を呈している。高台の貼り付け部付近には丁寧なナデ調整が見られる。口径は15~16cmである。

木器2号窯(第357図)

2号窯は羽東川左岸、妙見山西麓に所在する興福寺の南、標高260mの谷奥に位置する。

窯体は南に傾斜する急斜面に立地し、山道崖面に窯体断面が露出している。

灰原は谷底部分に形成されており、多量の土器が見られる。

土器の器種としては、坏A・坏B・蓋・皿・盤・壺・鉢が見られ、特殊なものとしては硯が数点含まれている。

蓋(1～3)は、中央部の高い擬宝珠形の摘みを持ち、天井部は水平になっている。口縁端部はA形態をとる。

坏A(4・5)は、口径13～14cmのもので体部と底部の境が、明瞭な稜となるものと、丸くなるものが見られる。底部はヘラ切り。

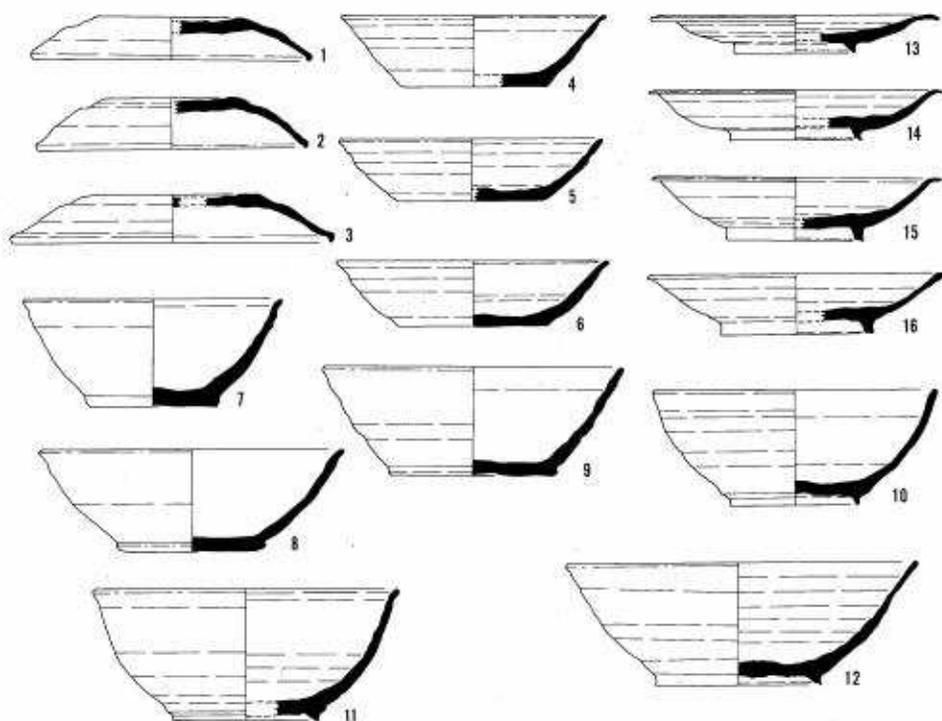
坏B(6～8)は、体部下端付近か少し底部内側に高台を付けるもので、体部は少し丸味を持って直線的に外上方に延びる。高台はやや外方に踏ん張るようである。口径は16cm前後と18cm前後が見られる。

皿(9～11)は口径15cm前後を測り、器高が浅く外方へ開き気味のものも見られる。

瓶子の口縁破片(12)も見られ、口縁端部は垂直につまみ上げられている。

硯(13～14)には円面硯と二面硯が見られる。

木器3号窯



第358図 貝谷窯出土土器 (S=1:4)

3号窯は羽東川の左岸、県道上佐曾利・木器線の北側支谷に位置する。窯体は南東に傾斜する斜面に立地し、灰原は崖面に一部露出している。器種としては、坏A・壺・甕などが見られ、特に甕の出土が目につく。全般に木器窯跡群は9世紀前半頃の時期と考えられ、2号窯が1号窯よりも古い。

貝谷窯（第358図）

貝谷窯は末古窯跡群に属し、中心部よりやや南に位置する。

窯体は青野川東岸、西に開口する支谷の、標高185m付近に立地する。

発掘調査によって土器の検出されたものであり、器種としては坏A・椀A(平高台)・椀B・皿・台付皿(盤)・蓋・壺・甕類が見られる。

貝谷窯の詳細については、本報告書第4章第5節を参照されたいが、施釉陶器の模倣と見られる土器があり、末古窯跡群内にあっても特異なタイプと見られる。

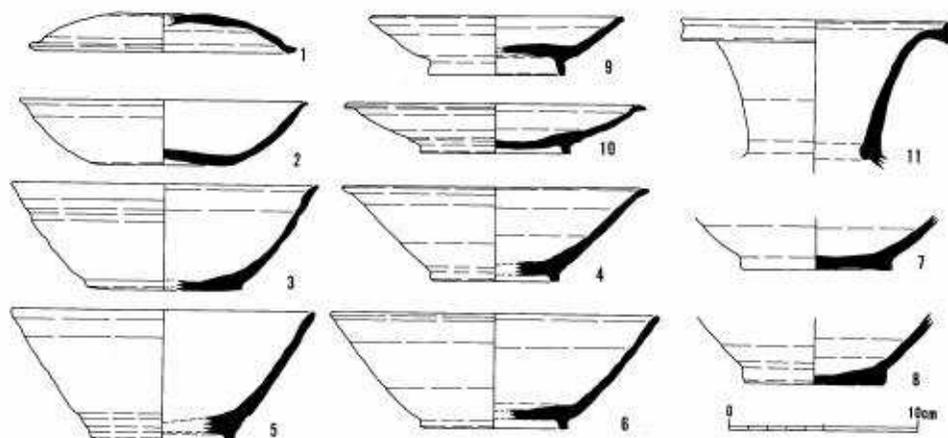
相野古窯跡群

三田市の西部、相野川流域の丘陵の開析された支谷に形成された窯跡群であり、上相野・下相野・西相野・大川瀬に相当数の窯跡が存在すると見られる。

近畿自動車道舞鶴線の建設に先立って、分布調査・発掘調査が実施され、萩ノ尾・木戸・西谷池・向上古城・古城・中池ノ内・寄合谷の各窯が調査されており、将来は各支谷群に分けて考えるべきであろう。操業期間としては、10世紀から11世紀前半頃までと考えられる。

西相野窯（第359図）

相野古窯跡群の1つで、西相野地区に所在する。前述のように圃場整備事業に伴って発見・破壊された。



第359図 西相野窯出土土器

窯跡は相野川の右岸、三本峠の南に開けた平野部の南山麓に位置し、水田と山林の境付近にあたる部分に立地していた。

資料は灰原からの採集品であり、現地には黒色灰層が広範囲に拡がり、土器の散乱が見られた。窯体は全く不明で、削平されてしまったものと思われ、事後処理として三田市教委の手で、遺物の採集作業が実施された。

土器には坏A・椀A(平高台)・椀B・台付皿・蓋・壺類などが見られる。

蓋(1)は歪んでいて不明瞭であるが、摘みの付かないものである。

坏A(2)は口径15cm、器高3.4cmを測り、底部から体部にかけて稜もなく丸味を持って緩やかに延び、口縁端部で少し外反する。

椀A(3)は口径16cm、器高5.6cmを測り、ヘラ切り平高台の底部から丸味を持って体部は立ち上がる。口縁端部は少し外反する。

椀B(4～6)は口径16cm前後で、体部下端の延長上に高台を持つ。体部は45度で一直線に立ち上がり、口縁端部で少し外反する。

台付皿(9・10)は口径13cmと15cmのもので、体部が緩やかに外反するが、高台には二種類見られる。(9)は従来から見られるタイプの高台であり、(10)は輪高台状のものであり、口縁端部は丸く仕上げられている。

壺(11)は口径14cmを測り、口縁端部を垂直方向で上へつまみ上げる。体部は不明であるが、突帯と耳が付く可能性が高い。

以上採集品の為、詳細は不明であるが、新田2時期の要素が見られる。時期としては10世紀前半頃と考えられる。

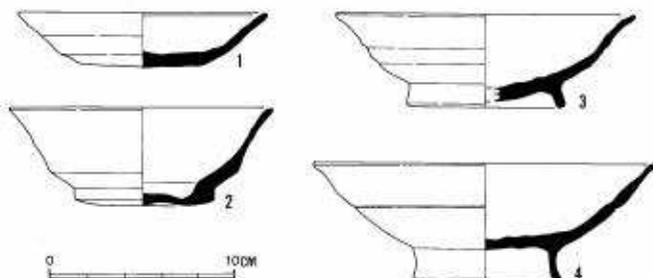
萩ノ尾1号窯(第360図)

相野古窯跡群の1つで、上相野に所在する。相野集落の南西丘陵(標高220m)に位置し、林道断面に窯体の一部が露出していたもので、近畿自動車道舞鶴線の関連工事に伴って、調査が実施された。

窯体は林道にて破壊されているが、長さ5m、幅1m強の規模を持ち、床面の貼り替えは認められない。

灰原は溜池部分になっており、土器が散乱した状態で存在する。

土器には坏・椀類を中



第360図 萩ノ尾1号窯出土土器

心に、僅かの壺・甕が見られる。

坏A(1)と椀A(2)と椀B(3-4)がセットで見られる。

坏Aは口径13.4cm、器高3cmで、底部へラ切り未調整のもので、口径に比べ非常に浅くなっており、体部は緩やかに外方へ開く。

椀Aは平高台で、体部下半部で一度屈曲してから外方に開くもので、口径は14.2cm底を測る。特徴としては、底部内面にみこみを持ち凹む。

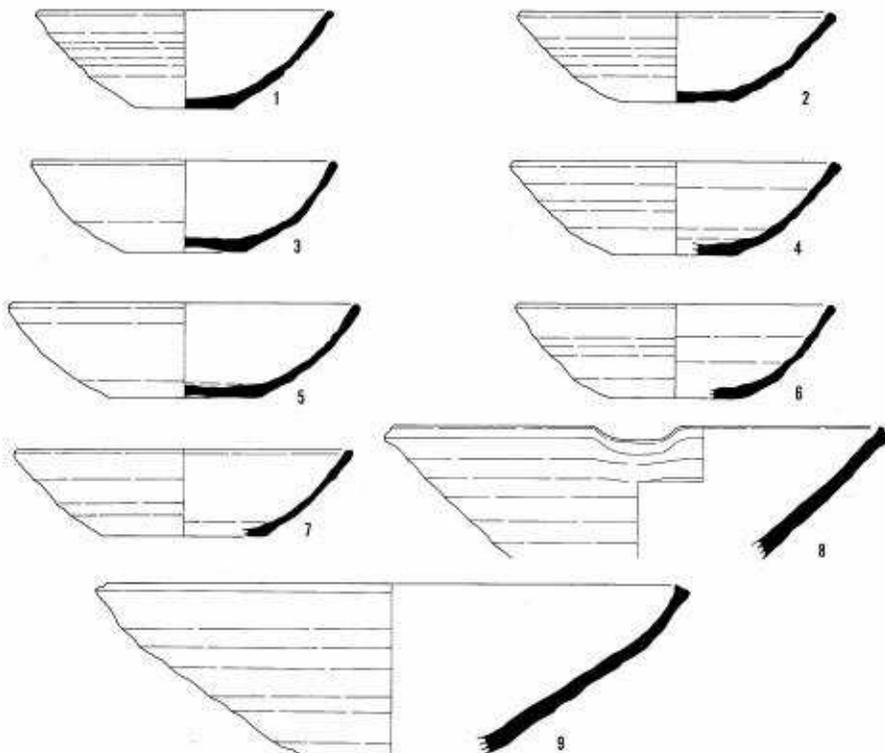
椀Bは輪高台を持つ椀であり、高台には2種類見られる。細くて高い、所以「輪高台」のものと、台付皿に見られるような高台のものである。口径は前者が18cm前後なのに、後者は16cm前後となる。体部中央に沈線状のものが見られるものもあり、突帯を貼った椀も存在するらしい。

時期としては、10世紀後半頃と考える。

井ノ方窯 (第361図)

末古窯跡群に属する窯の1つで、現在の所最も新しい時期の窯と考えられている。

窯は青野川左岸、流れが西北から西南に変化する付近の尾根突端南斜面に位置する。



第361図 井ノ方窯出土土器 (S=1:4)

窯体は生活道路にて切断されており、残存状態は悪い。

灰原についても、水田化に伴う削平により消滅しており、土器は窯体焚口に近い部分からの一括品である。

青野ダム建設に伴う調査で発見されたものであり、平安時代を中心とする時期の集落跡と重複する。

土器には碗と鉢が見られる。碗(1~7)には底径の小さなもの(1~4)と、大きなもの(5~7)の両者が見られる。

口径は16cm前後から18cm前後見られ、器高は5cm前後である。体部は底部から少し丸味を持って緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。底部は糸切りで、底部と体部の境は明瞭な稜を持つものが多い。

鉢(8~9)は口径25cm前後と30cm前後のものが見られる。口縁端は内側に少しつまみ上げられているが、外面端部の垂下は余り大きくない。片口を持つ鉢である。

時期としては12世紀後半頃と思われる。

見比窯 (第362図)

見比窯は青野ダムを形成する水系の1つ、黒川の1支流である栗田川の上流右岸に位置し、木器窯跡群から羽束川を遡った見比からは、峠を1つ小野の方へ下った所に位置する。

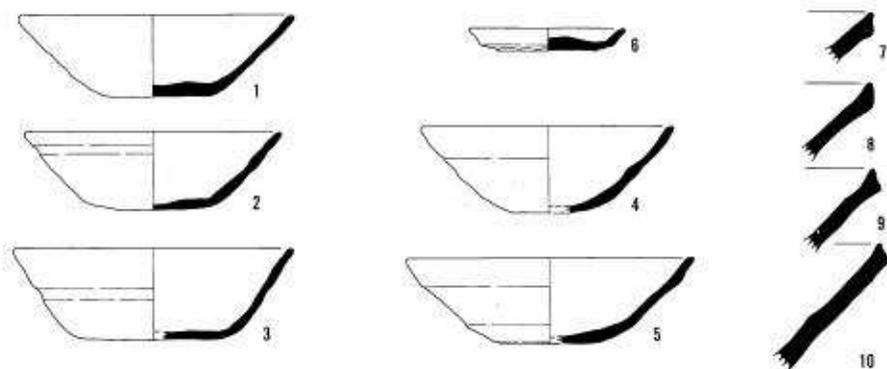
窯は県道福住・三田線の北側山麓に立地し、広範囲に灰原が露呈している。

窯体は以前露出していたとのことであるが、現状では観察されない為、埋没してしまっているものと思われる。

窯の数は不明であるが、灰原から見ると数基存在しているものと思われる。

土器には碗を中心に、僅かの小皿と鉢が見られる。

碗(1~5)は口径14cm前後と、18cm前後の2種が見られ、糸切りの底部は底径の小さなものと、大きなものの両方見られる。体部と底部の境は丸味を持つが、焼成は良く胎土に



第362図 見比窯出土土器 (S=1:4)

砂粒を多く含む。

小皿(6)は底径が大きく、底の少し突出するもので器高は低く浅い。

鉢(7~10)は口縁端部を上方につまみ出すタイプで、端部外面は余り垂下しない。

時期的には13世紀前半頃と考えられる。

4. 土器の変遷

窯跡を中心とした、土器の様相を見てきたが、ここでは土器の形態的变化を中心に、変遷を辿って見たい。

古墳時代・奈良時代の須恵器研究(特に編年)は、陶邑古窯跡群^{※13}および平城宮跡の調査・研究による成果^{※14}が大きく、ここでは地方窯に変化の著しく見られる平安時代を中心に考えることにし、資料としては窯資料と、消費地としての三田周辺の集落跡資料の両者を見てみる。

平安時代の始まり、とりわけ9世紀の前半の窯としては、木器窯跡群のものが当てはまるであろう。

土器の器形その他は、奈良時代以来踏襲されるが、法量における縮小傾向が見られる。

皿における口径の縮小、椀B、坏Aに見られる底径の縮小化に伴う、体部の傾斜変化がそれであり、木器2号に比べ1号窯の変化が大きい。また、硯はこの時期、円面・風字硯の両者が見られるが、前代に見られた円面硯台部の透し孔の減少・省略化が見られる。

木器窯に続く窯としては、今の所貝谷窯が考えられる。

貝谷窯は内容から特殊性の強い窯として考えられ、過渡期に見られる一過性のものとも考えられる。

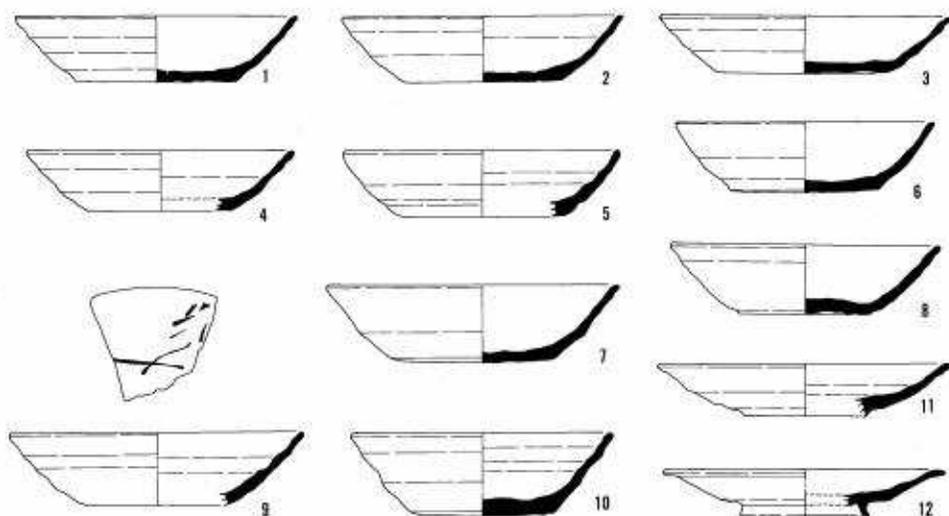
土器には施釉陶器の器種が見られ、当地方における新しい要素が色々と見られる。

すなわち、前代からの器種である坏Aに加え、新たなへら切り平高台を持つ椀Aの出現、天井部中央に見られた蓋の摘みの消滅、施釉陶器に見られる皿C(台付皿)、椀Cの出現、壺(双耳壺)に見られる高台の消滅など今までの伝統を持つ坏A以外で、新たなものへの変化が1度にやって来たような状況を呈し、今後続く器形・器種の初源的要素が含まれている。

この時期の土器は、集落遺跡では青野ダム予定地内の、井ノ方遺跡にて見られるが、坏A・皿Cのみであり、椀類は見られない。

また、この時期に見られる突帯を持つ双耳壺について見ると、初源は8世紀後半の地福5号窯・6号窯に求められ、次代の相野古窯跡群ではほとんどの窯に見られる程の器種となり、新たな器種構成として表われ、椀・小皿・鉢の中世的糸切り土器群出現期を以て消滅すると思われる。

年代決定につながる類似例を求めると、鉢なども含めて考えた場合、平安宮内裏外郭跡



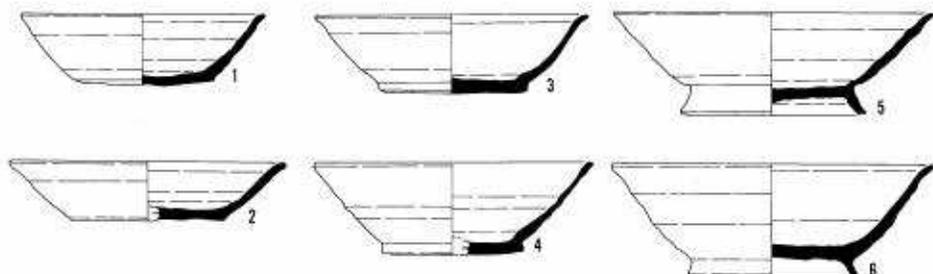
第363図 井ノ方遺跡出土土器 (S=1:4)

註15 SX 4・9よりは新しく、北野庵寺SK21・20よりは古く思われ、京都府篠窯に類似例を求めると石原畑2号窯あたりに比定されると考え、9世紀後半頃としておく。

貝谷窯に続くものとしては、相野古窯跡群である。相野古窯跡群は前述のように相当数が広範囲に広がっており、時期的にも幅があると思われる。

中でも続くのは、西相野窯の土器と見られ、器種構成からも坏A・蓋・皿C・碗A・壺などが見られるが、碗Cのみは存在せず、奈良時代から見られる木器窯で見られた碗Bの退化するタイプのものしか焼かれておらず、貝谷窯の碗Cは三田地域では見られなくなる。西相野窯の土器では、貝谷窯に比べ坏A・碗Bの体部の立ち上がり、益々斜め上方に向かって直線的となり、皿Cでは口径の縮小、高台の直立化などの変化が見られる。

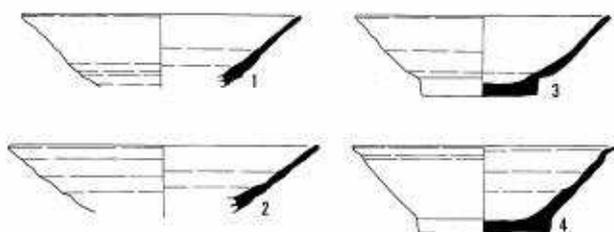
このタイプの窯としては、相野古窯跡群内では、他に向上・古城窯註18が見られ、蓋の存在が知られているものの、少し新しくなる傾向が見られ、蓋の残る最後の窯と見られ、以後蓋は消滅すると考える。



第364図 井ノ方遺跡土坑4出土土器 (S=1:4)

まとめ

更にこの段階をもって消滅するのは皿Cにおいても同様で、これ以降新たな器種構成が成立する。すなわち、椀・坏A・輪高台椀で構成される小型品と壺・甕のみである。



第365図 井ノ方遺跡土坑9出土土器 (S=1:4)

新たな器種構成で操業される窯は、相野古窯跡の窯一般に見られる。

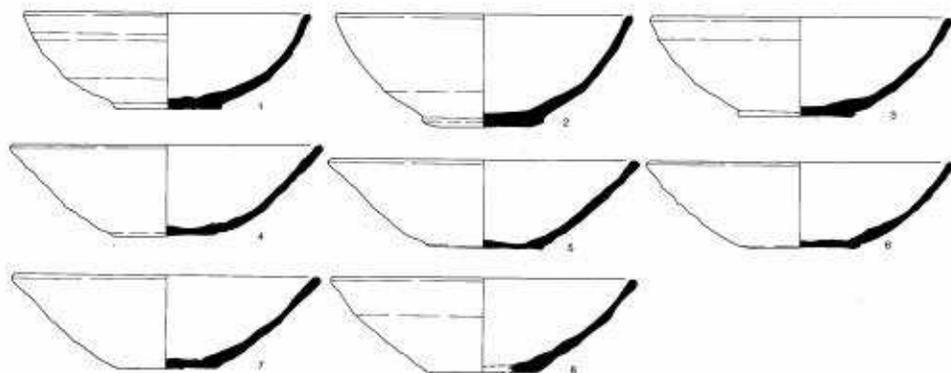
萩ノ尾1号窯にも、坏A・椀A・輪高台椀セットで見られるが、この段階以降の特徴として、椀A(平高台)の底部内面が見込み状に凹む。

集落遺跡ではこの時期のものとして、前述の井ノ方遺跡が知られ、SK-4からはセットで検出されており、前後関係を形成すると考えられるSK-9からも同様の土器が出土しているが、SK-9にはセットとしての輪高台椀が見られない。これは絶対量の差に問題がある為とも考えられる。

ただ両者における変化は、体部においても見られ、SK-9の方が大きく開き、底径の縮小化を想定させ、口縁端部も外方に屈曲するなどの傾向が見られる。

相野古窯跡群の終焉を、どの時期にもっていくかが問題となるが、近舞線関係の窯跡の整理・報告を待って検討せざるを得ないが、一応ここでは、最近盛んに研究がなされている中世土器研究の成果でもって、集落址にられる土器の検討を行い、この時期の空白部分を埋めて行きたい。

遺跡としては、この度報告の機会を持つことになった、三田市対中遺跡²⁵¹⁹を対象に、糸切りの椀形土器を以て検討する。



第366図 対中遺跡出土土器 (S=1:4)

糸切り椀の研究は、片口鉢と共に交易の問題も含めて研究が盛んであり、とりわけ神戸市の神出窯^{HE20}の研究成果が著名である。

対中遺跡は平安末期から鎌倉期を中心とした建物址の見られる遺跡で、墨書を持った椀などが井戸を中心に溝などからも検出されている。

椀の検討の結果、神出窯の変遷に見られる幾つかの形態変化が見られる。

溝4からは神出Ⅰ期第1段階の椀が見られ、この中には神出窯製品そのものと、他窯製品が混在しており、他窯製品を三田周辺の窯と考える。混在の比率では神出窯が2-3割程度を占めている。

更に神出Ⅱ期に入ると、溝10出土の椀が見られ、出土椀には神出製品は認められず、これも全て地元産と考えられる。

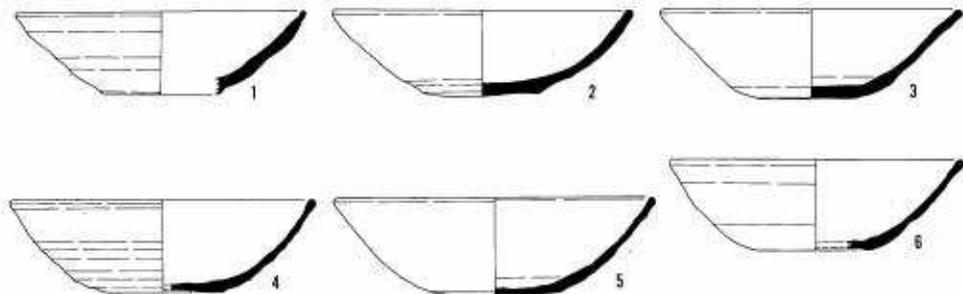
ここで地元産の糸切り椀を検討すると、前述の井ノ方窯において焼成が知られている。神出窯の変遷に比定して検討すると、神出Ⅱ期に比定されるが、底径の大きなものも含まれるなどから、Ⅱ期2段階と考えられる。

更に三田地方の遺跡資料を見てみると、青野ダム予定地内で調査された、蛭田中世墓出土の糸切り椀が見られる。全て地元産の土器と見られ、神出窯に比定するとⅡ期に比定されるが、若干底部に古い要素が見られる。

この資料には実年代を決める手掛かりとして、同安窯系の青磁皿が伴出しており、輸入磁器の研究から12世紀末から13世紀初めとされ、特に13世紀初めに多く見られるとのことである。^{HE21}

これらから、当地方での糸切り椀焼成は明らかに12世紀代には行われており、窯体の検出はないものの、神出窯製品と地元産品との混入現象が見られる対中遺跡溝4の時期からは、当地方でも焼成が実施されていたものと想定し、糸切り椀の生産開始を12世紀初頭とし、少なくとも相野古窯跡群の終焉は11世紀中に終わると想定しておく。

井ノ方窯に続く窯は前述の見比窯と考えて間違いはないであろう。底径に大小が見られ



第367図 蛭田中世墓出土土器 (S=1:4)

まとめ

るなども同様であるが、ただ明瞭に差異が見られるのは胎土であり、砂粒の多量に含まれる見比窯碗との間に、大きな変化として映る。

見比窯製品は井ノ方遺跡SK-15にてみられる他、神戸市北区の塩田盆地周辺部でも見られるようである。¹¹²² 時期的には前述の蛭田中世墓に続く13世紀前半頃と考えられる。

この後は三本峠北窯のように陶器として、立杭焼へと変化するのであろう。

5. まとめ

青野ダムの調査を契機に、窯跡とりわけ須恵器の生産について考える場が与えられ、1つの調査の区切りとして変遷をまとめたい。

便宜上、土器に見られる大きな変化毎に時期区分をすると、I期からIII期に区分できる。

第9表 窯・遺跡別土器変遷表

年代	窯跡(生産)	集落址(消費)	備 考
I 期	800 — 谷福3号窯 谷福1号窯 谷福5号窯		坏蓋のつまみ消滅
	木器2号窯 木器1号窯		
II 期	900 — 貝谷窯	井ノ方遺跡	
	西相野窯 向上・古城窯		
III 期	1000 — 西谷池2号窯	井ノ方(SK-4)	
	萩ノ尾1号窯	井ノ方(SK-9)	
IV 期	1100 —	対中(溝4)	糸切り碗の出現 神出産の碗と地元産の碗混入
		対中(井戸)	
	1200 — 井ノ方窯 見比窯	対中(溝10) 庵ノ谷中世墓 井ノ方(SK-15)	

I期 奈良時代以来の系譜で続く器種・器形を持つが、法量の縮小化、退化傾向の見られる時期

II期 新たな器種の出現期

ヘラ切り平高台碗の出現、蓋に見られる摘みの消滅など新たな器種・器形が現われる。

III期 蓋の消滅、坏、平高台碗、輪高台碗の小型供膳セット、突帯壺、甕を加えた器種構成の定着する時期

IV期 糸切り碗の出現・鉢・小皿・甕の器種構成の見られる時期

以上のIV期が見られるが、IV期の前半期に不明瞭な点が多い為、若干の指摘を加えたい。

糸切り碗と共伴する片口鉢において、碗の変遷に比べ、当地方の井ノ方窯・見比窯において1-2型式古い形態が見られる。これは対中遺跡において、碗より1段階新しい段階の神出産片口鉢が見られ、地元産片口鉢は一切見られない現象など、碗の焼成開始に比べ片口鉢の出現がやや遅れる傾向を示していると考えられる。

糸切り技法の出現については、当地方における小型供膳形態に見られる糸切り技法は、共に平高台碗の見られる地域としての相生窯・札馬窯などに比べ遅れる傾向にあるが、相野古窯跡群中の平高台に僅かに糸切り底を持つものが見られ、存在するものの、定着しヘラ切り底にとって変わるまでには至らなかったようであり、系譜的にはIV期を以って、他地域（神出窯）からの導入によって糸切り技法が定着すると考える。

最後に、青野ダム予定地の調査実施にあたり、窯跡関係の調査の機会を与え、小稿をまとめる御配慮を賜った櫃本誠氏をはじめ、常々有益な御教示を戴いている森田稔氏、種々の御助力をいただいた兵庫県埋蔵文化財調査事務所の岡田章一、渡辺昇、岸本一宏、森内秀造、深井明比古、山下史朗、大平茂、村上賢治他の各氏に深甚の謝意を表します。

註1. 大村敬通 「三本峠北窯調査報告書」 1981年 兵庫県教育委員会

2. 兵庫県教育委員会 岡崎正雄氏御教示

3. 三田市教育委員会 高島信之氏御教示

4. 兵庫県教育委員会調査、深井明比古氏御教示

5. 井守徳男 「郡塚窯」 青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1) 1987年 兵庫県教育委員会

6. 高島信之他 「西山・奈良山古墳群」 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書I 1983年 三田市教育委員会

7. 武藤 誠 「摂津国有馬郡東山出土の陶棺」 関西学院史学IV 1957年 関西学院史学会

8. 宇治市教育委員会 「集上り瓦窯跡発掘調査概報」 1983年

9. 奈良国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告」VII 奈良国立文化財研究所学報第26冊 1976年

10. 畠中 剛 「木器窯址群採取の須恵器について」 三田考古14号 1984年 三田市教育委員会

11. 別府洋二 「相野萩ノ尾1号窯」 兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和59年度 1987年 兵庫県教育委員会

まとめ

12. 畠中 剛 「見比窯址採集の須恵器について」 三田考古13号 1984年 三田市教育委員会
13. 田辺昭三 「陶邑古窯址群Ⅰ」 1966年 平安学園考古学クラブ
14. 註9に同じ
15. 京都市埋蔵文化財研究所 「平安京跡発掘調査概報」 昭和57年度 1983年
16. 京都市埋蔵文化財研究所 「北野庵寺」 京都市埋蔵文化財調査報告第七冊 1983年
17. 石井清司 「鎌古窯跡群出土の須恵器について」 京都府埋蔵文化財情報7 1983年 京都府埋蔵文化財センター
18. 兵庫県教育委員会 岡崎正雄氏御教示
19. 兵庫県教育委員会による調査資料、調査報告書作成中
20. 森田 稔 「東播系中世須恵器の生産と流通」 中近世土器の基礎研究Ⅲ 1987年 日本中世土器研究会
21. 岡田章一 「蛭田遺跡」 本報告書所収
22. 神戸市立博物館 森田 稔氏御教示

昭和63年3月30日印刷
昭和63年3月31日発行

兵庫県文化財調査報告書 第62冊

青野ダム建設に伴う 発掘調査報告書(2) —— 本文編 ——

- 編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
☎ (078) 531-7011
- 発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
☎ (078) 341-7711
- 印刷 丸山印刷株式会社
〒676 高砂市米田町神爪57-1
☎ (0794) 32-1511
-